

茨木市佐保所在

栗栖山南墳墓群

—国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う古墳群および中近世墓群の調査—

本文編

2000年11月

(財)大阪府文化財調査研究センター

茨木市佐保所在

栗栖山南墳墓群

－国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う古墳群および中近世墓群の調査－

本文編

2000年11月

(財)大阪府文化財調査研究センター



1. 原位置で検出された石仏群（南から）



2. 三島平野を望む（北から） ほぼ中央に見えるはげ山が栗栖山南墳墓群と佐保栗栖山砦跡。



3. 中近世墓群の石組（南から）



5. 古墳群（西から）



4. 中近世墓群の墓壙（西から）

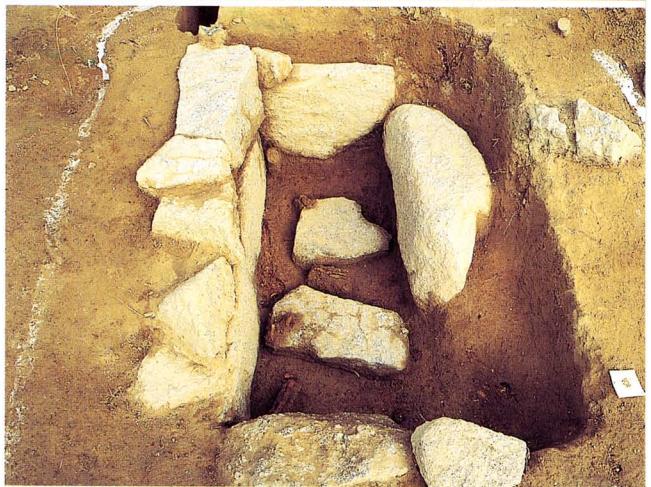
調査はまず石組の全貌を検出することに努めた。その次に石組を外し、墓壙の調査を進めた。当初石組と認識していたが、実は古墳の石室であるものもあったことが判明し、最後に古墳の調査を行った。



6. 古墳群全景（東から） 左上から3・4・5・1・2号墳。



7. 3号墳全景（南から） 円形に近い区画溝もつ。



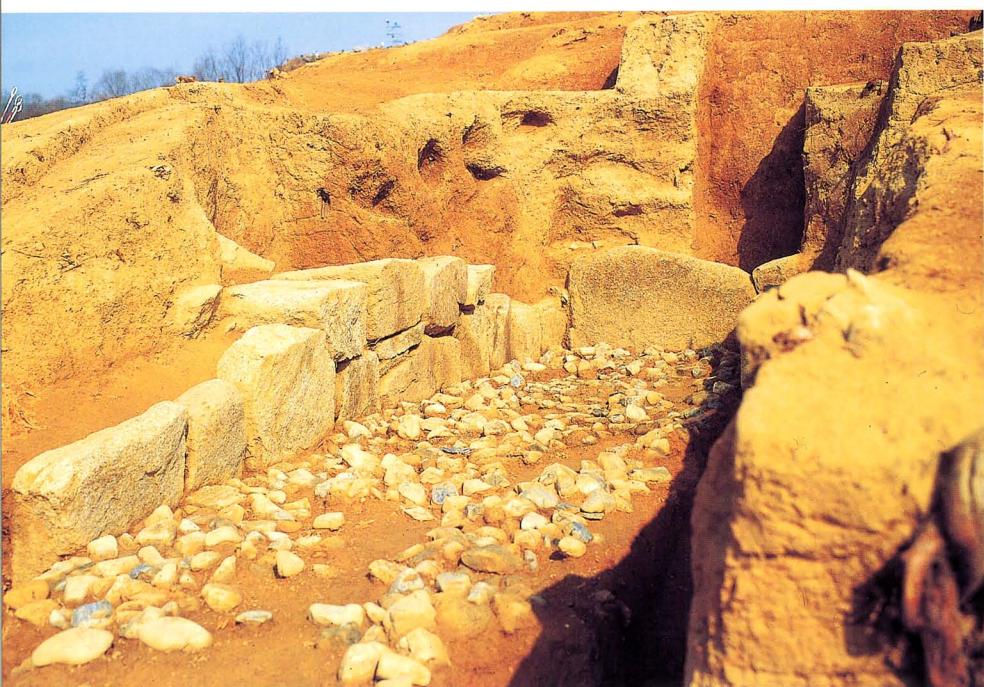
8. 2号墳石室（南から）



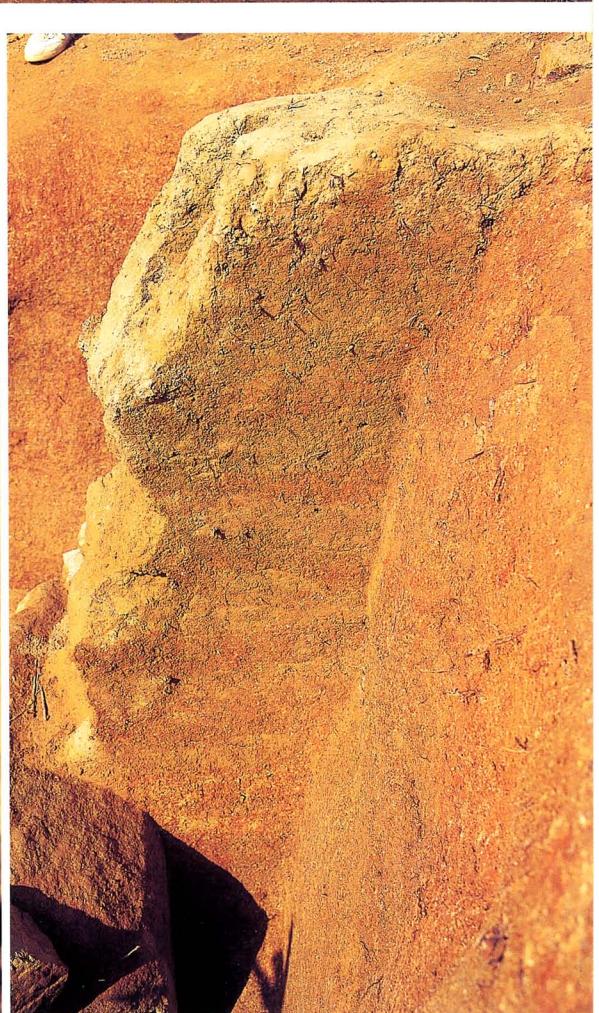
9. 5号墳石室（南から）



10. 6号墳全景（南から） 推定ではあるが墳丘を3段に構築し、その前面に1段のテラスを設け、古墳群一の威容を誇っている。後方には砦跡が見える。



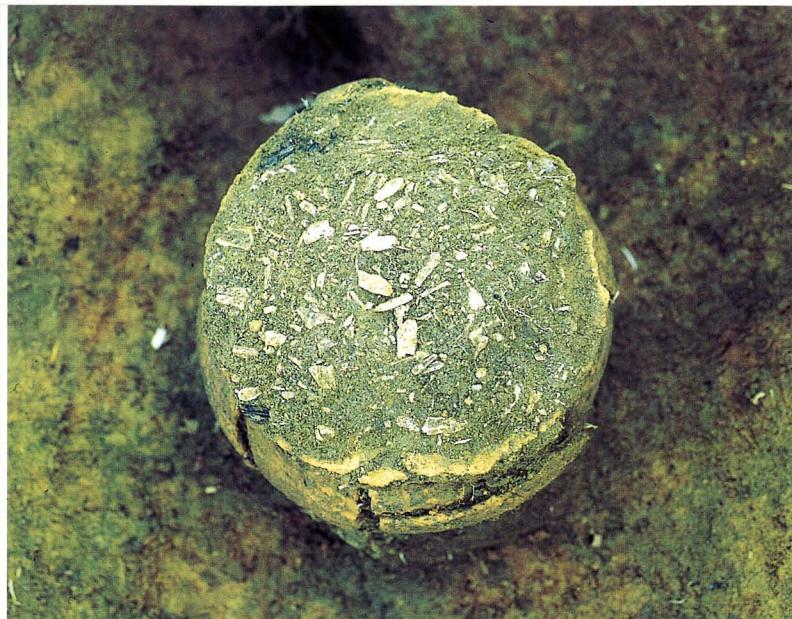
11. 6号墳石室（南から） 床面には川原石を敷いている。



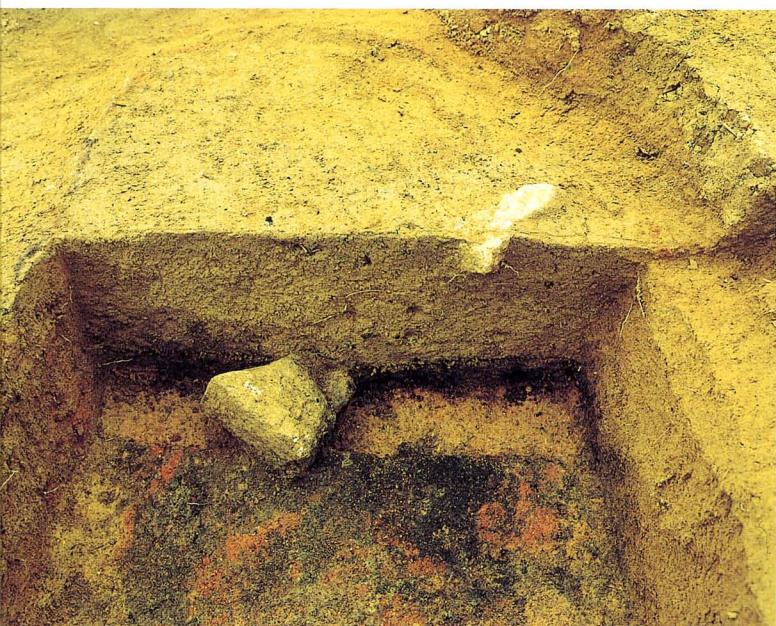
12. 裏込めの状況（東から）



13. 火葬墓 1 (西から) 土師器甕に須恵器杯蓋を被せてあった。



14. 火葬墓 1 焼骨検出状況 (南から)



15. 焼土坑 1 の埋土状況 (東から) 2層に分かれ、下層が炭層。



16. 焼土坑 2 (南から) 壁面が火を受け赤変している。



17. 古墳群出土鉄釘 上段は3・4・6号墳、下段は木棺墓1より出土。



18. 古墳群出土土器 須恵器壺の出土は、さらなる火葬墓の存在を示唆している。



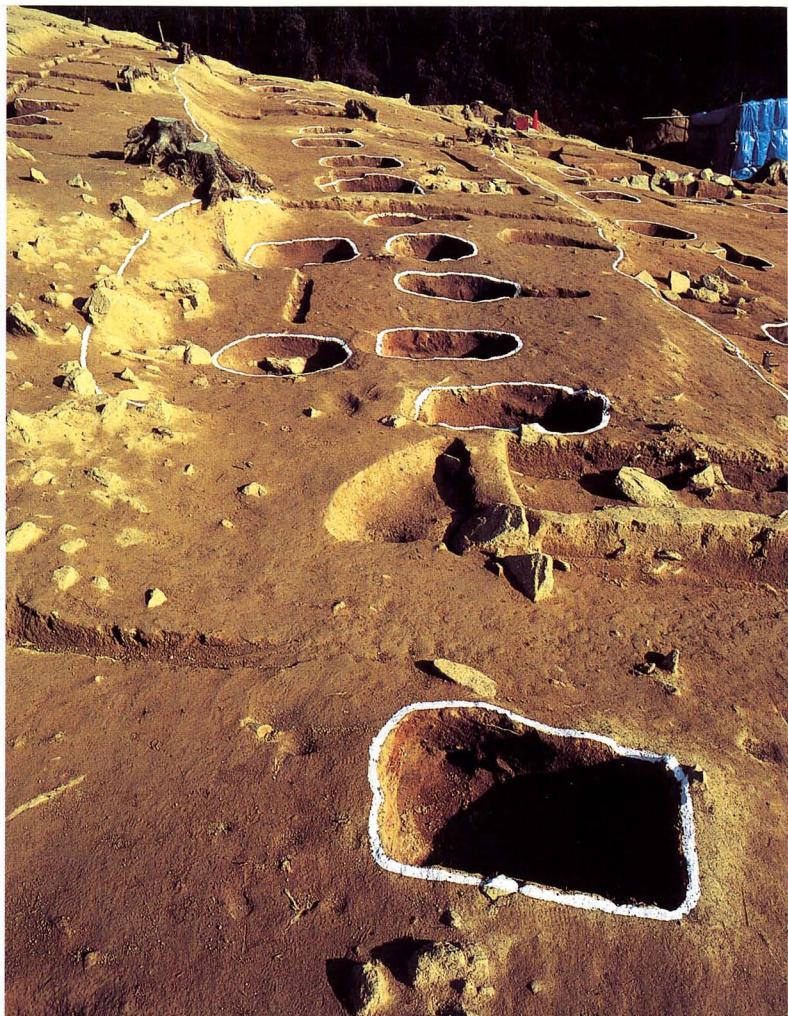
19. 石組全景 (北から)



20. 墓壙全景 (南から)



21. 整然と列状に並ぶA群の石組（西から）



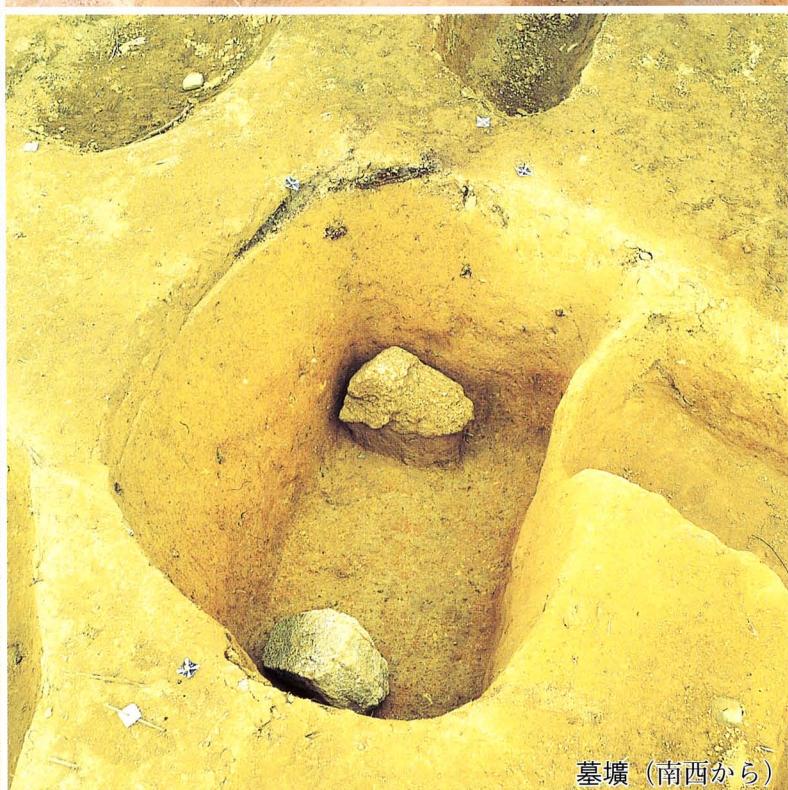
22. 整然と列状に並ぶA群の墓壙（西から）



23. A～C群付近の石組（西から）



24. A～C群付近の墓壙（西から）



25. 35号墓 茶毘を行ったを墓壙の上に五輪塔を配する石組を構築している。

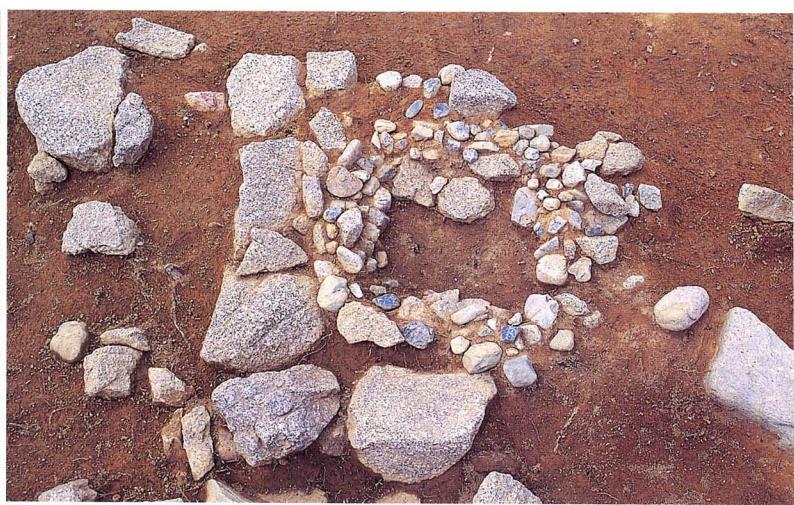
26. 339号墓 遺体を土葬により埋葬した墓壙の上に石造物を配さない石組を構築している。



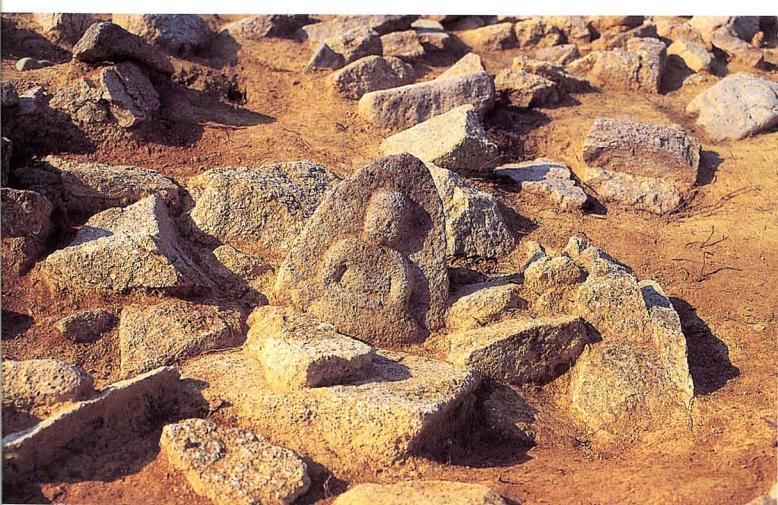
27. 206.207.208号墓（南から） 左右に石仏を据えた石組の間に五輪塔を配している。



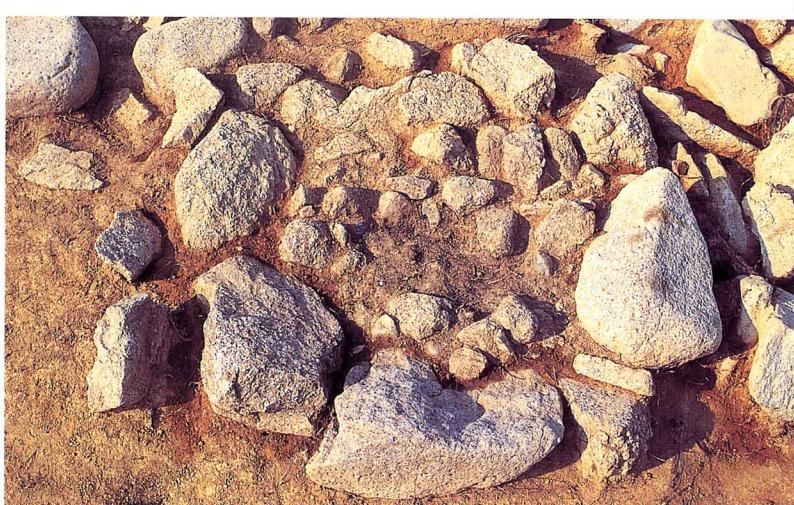
28. 34号墓（南から） 五輪塔を中央に配している石組。



29. 288号墓（南から） 五輪塔が据えられていたと思われる。



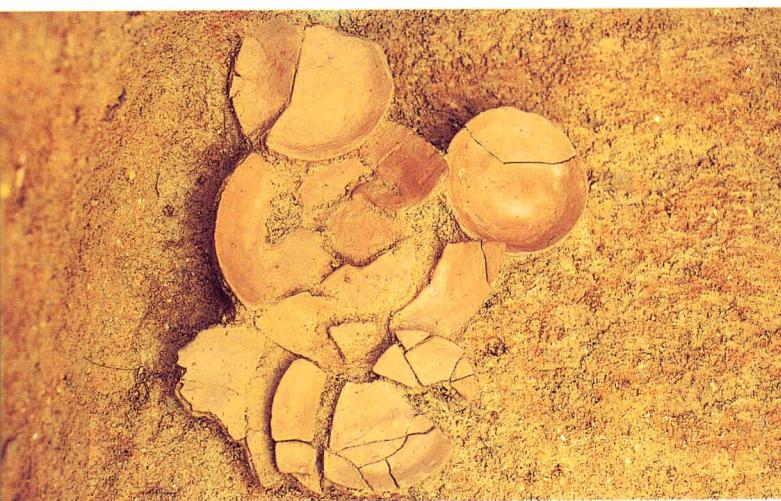
30. 161号墓（南から） 石仏が据えられている石組。



31. 219号墓（南から） 石仏が据えられていたと思われる。



32. 571号墓（南から） 床面には土師器皿が置かれていた。



33. 5枚重なって出土した土師器皿（571号墓）



34. 227.228号墓（南から） 墓壙が2つに並ぶ。



35. 572号墓（南から） 烏帽子・短刀が出土している。



37. 薫状の繊維で6枚重ねられた北宋錢

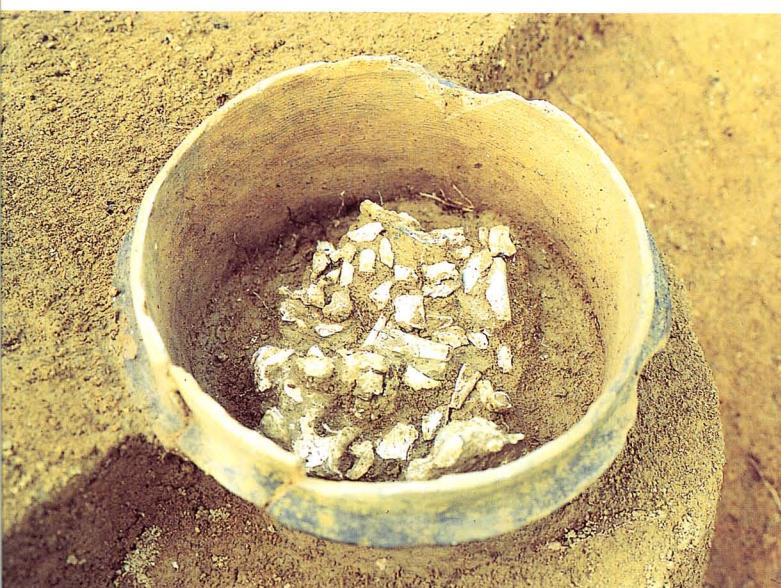
36. 600号墓（南から） 錢貨が納められていた木棺墓。



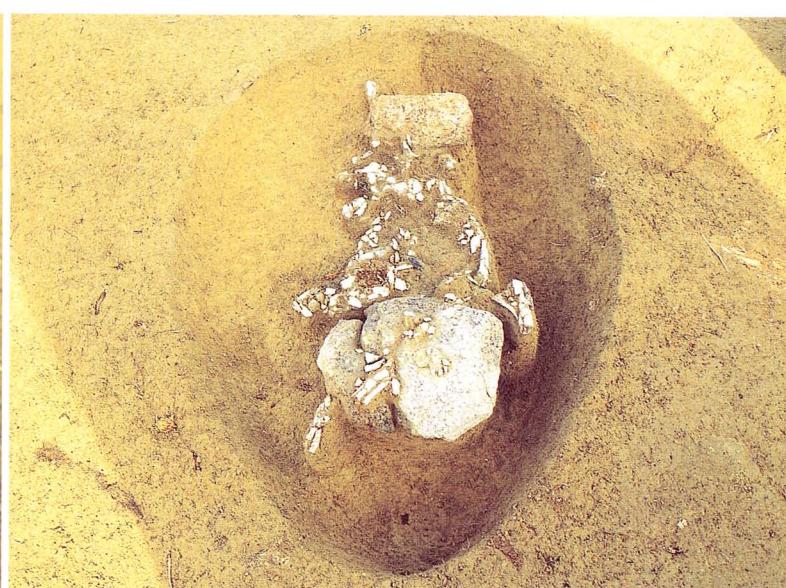
38. 69号墓（南から） 備前壺には焼骨が納められている。



39. 火葬墓A類 338号墓の埋土の状況 火葬墓A類の大多数は、このような埋土堆積である。



40. 292号墓 羽釜内焼骨検出状況



41. 323号墓（南から） 2つの石は棺台と思われる。



42. 炭盛土（南から）　火葬場から排出された焼骨・錢貨・鉄釘などが混ざった炭が盛り上がりっている。



43. 火葬場 2（南から）　火葬墓 A 類の墓壙より規模が大きい土坑で何回も荼毘が行われた。



44. 炭盛土の堆積状況（西から）
厚いところで60cmもの堆積がある。



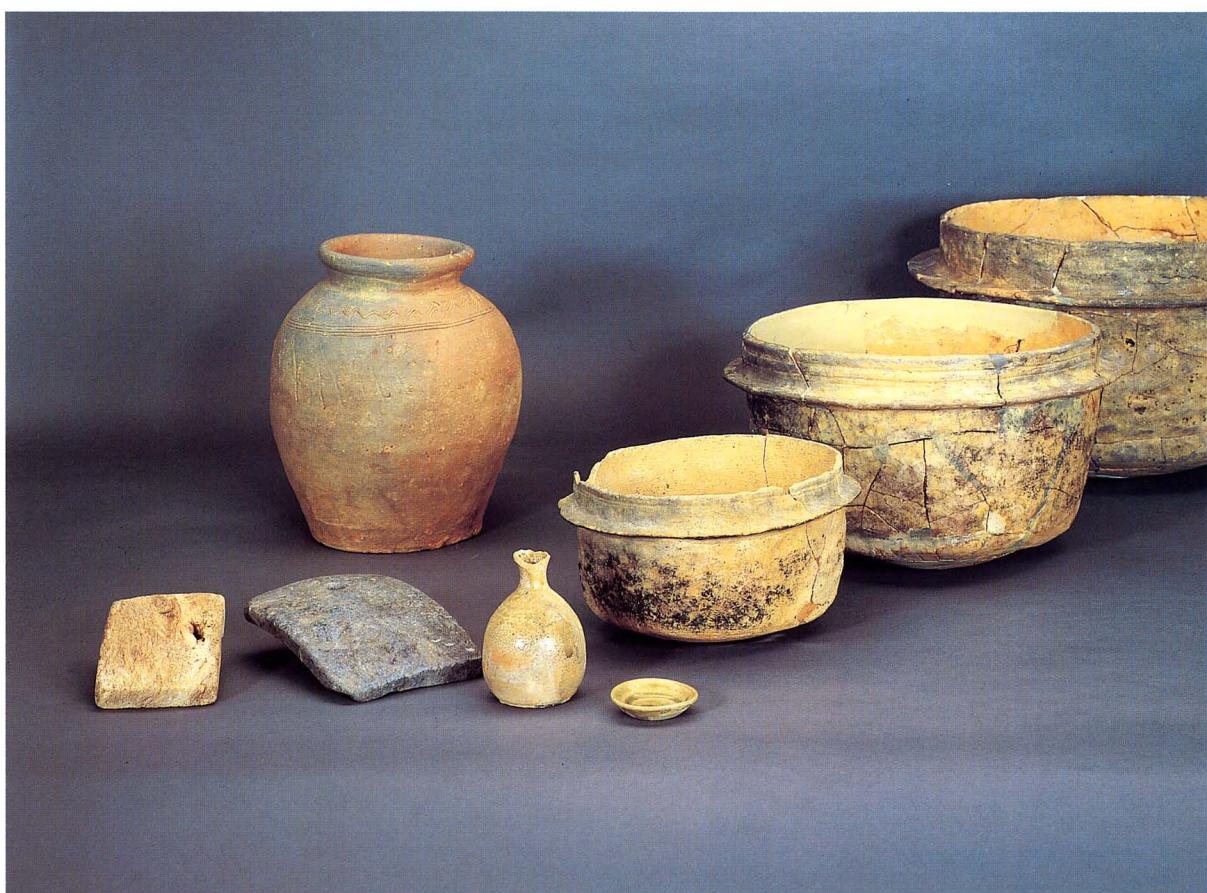
45. A・Bタイプの土師器皿

右側2つがAタイプ、それより左側はBタイプ。



46. C・Dタイプの土師器皿

上段がCタイプ、下段がDタイプ。

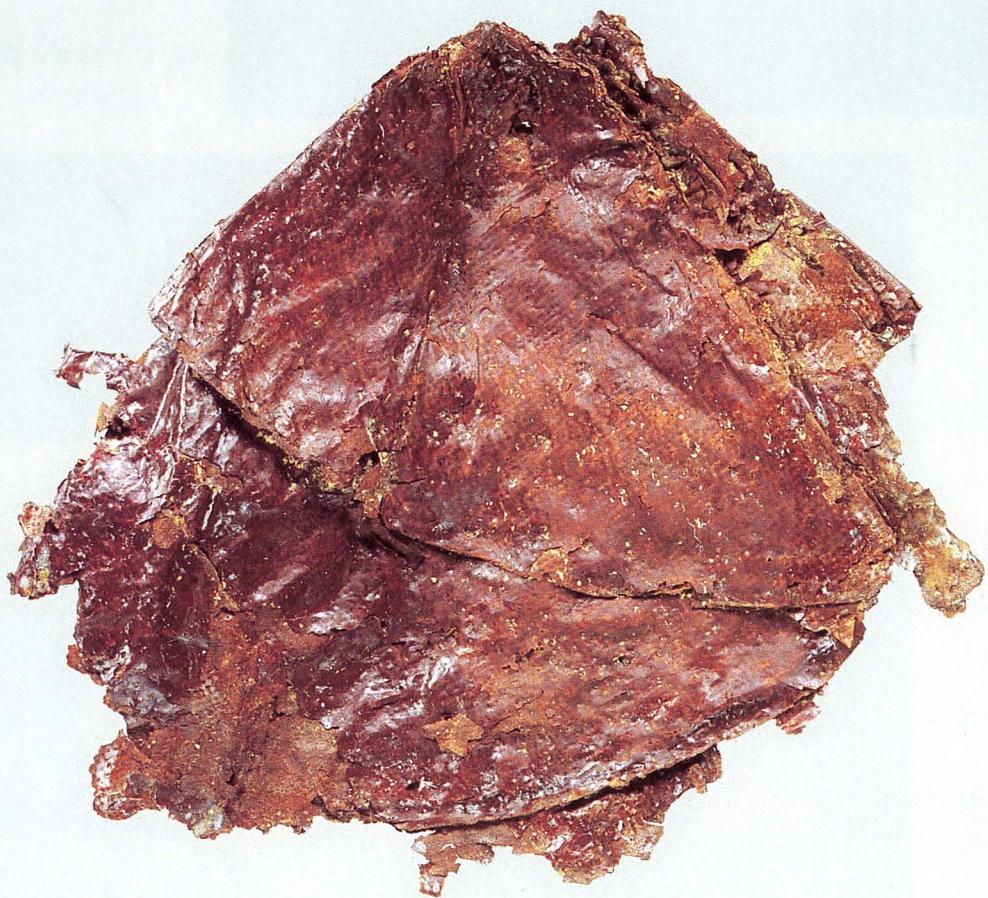


47. 蔵骨器および副葬された土器・温石

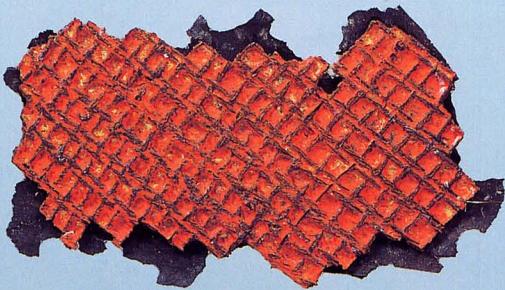
藏骨器に使用された瓦質羽釜・備前壺(左後列)。墓壙から出土した古瀬戸小皿・灰釉陶器瓶子・温石(右前列)。



48. 567号墓出土烏帽子



49. 572号墓出土烏帽子



50. 83号墓出土赤色顔料塗布布片（倍率：約2倍）



51. 83号墓出土金泥塗布布片（倍率：約2倍）



53. 鉄釘の断面 火葬場出土の鉄釘。



52. 炭盛土出土錠前 クランク状の金具と、箱状の金具を組み合わせたタイプの牝金具と思われる。



54. 炭盛土・火葬場出土鉄釘

鉄釘は被熱しており、荼毘の際に木棺が使用されていたことが分かる。



55. 馬場共同墓地 墓石群から移転された石仏が祀られている。



56. 安威共同墓地 五輪塔や石仏が1カ所に集められている。



57. 真龍寺墓地 常滑の甕が地面から覗いている。



58. 上音羽共同墓地 石仏が現在も墓標として再利用されている。



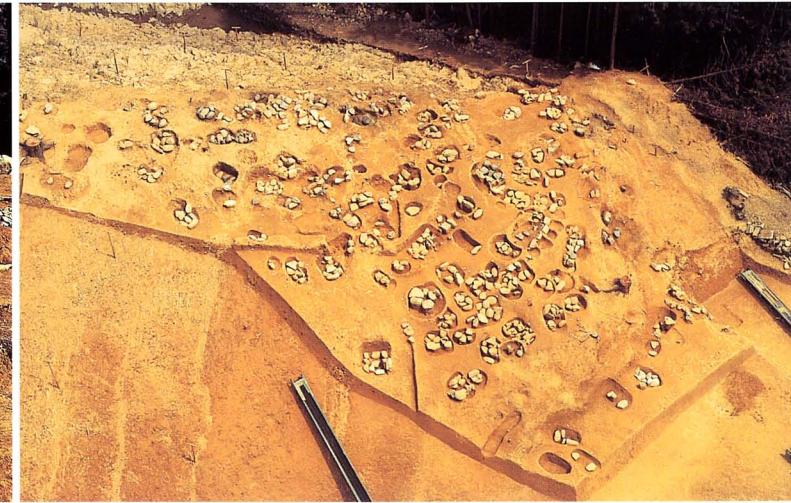
59. 高槻市岡本山古墓群出土石仏 当墳墓群と同様の石材である。



60. 同古墓群全景 石の詰まった墓壙が列状に並ぶ。



61. 箕面市小畠遺跡出土石仏 石仏が5体並んで据えられている。



62. 同遺跡墓壙全景 墓壙が地形に沿って列状に並んでいる。

序 文

栗栖山南墳墓群は、茨木市の丘陵部に位置し、古墳時代から江戸時代までの墳墓が検出された墓地跡です。

この墓地は、三島平野を見渡せる尾根の中腹、平野部と山間部の境目に位置し、各時代の人々が居住していた場所から若干離れた所にあります。

当墳墓群は、調査以前より石仏や五輪塔が散在しており、地元の人々から「元墓」と言われていました。

このたび、栗栖山南墳墓群を含めた茨木市から箕面市にかけて、国際文化公園都市（彩都）の土地区画整理事業が進められることとなり、当センターがその建設に先立って発掘調査を行ってきました。その後の整理事業も終了し、ここにその成果を報告できる運びとなりました。

調査の結果、五輪塔や石仏が立ったままの石組が、テラス状に数列にもおよび並んで検出されました。この石組を外すと、その下に土葬や火葬に付した穴があらわれ、鎌倉時代の終わりから戦国時代にかけての600余基もの墓が営まれていたことが判かりました。

また、南端の平坦面には戦国時代に何度も使用された共同火葬場も検出され、中世には様々な葬送の仕方があったことも明らかになりました。

さらに、古墳時代の終わりに造られた古墳や、奈良時代の火葬墓、江戸時代の木棺墓も検出され、長期間にわたって使用された墓地であったことが判りました。

最後に発掘調査および整理事業の実施にあたり、多大なご協力とご配慮をいただきました地元関係各位をはじめ、都市基盤整備公団関西支社、大阪府教育委員会、茨木市教育委員会に深く感謝して序の言葉とします。

2000年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は国際文化公園都市特定土地区画整理事業に伴う栗栖山南墳墓群（くるすやまみなみ ふんぼぐん）発掘調査報告書である。なお、栗栖山南墳墓群は大阪府茨木市佐保字クルスに所在する。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、財団法人大阪府文化財調査研究センターが都市基盤整備公団の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は1997年11月4日から1999年4月15日まで、整理事業は1999年4月16日から2000年6月30日まで実施した。なお、発掘調査と整理作業は当墳墓群北側に位置する佐保栗栖山砦跡と並行して行い、（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第56集『佐保栗栖山砦跡』として同時に刊行されている。
4. 発掘調査・整理作業ならびに本報告書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。発掘調査は北部調査事務所が所管し、北部調査事務所所長藤田憲司、調査第2係長金光正裕の指示の下、調査第2係主査森屋美佐子、技師市本芳三、専門調査員福島正和、同瀬戸哲也が担当した。本書作成に関わる整理作業は主査森屋、技師市本、専門調査員瀬戸が行い、主査上野貞子が写真を担当した。出土品の保存処理は中部調査事務所主査山口誠治、専門調査員立花るりこ、非常勤職員水取康人が行った。なお、報告書執筆には北部調査事務所をはじめとする当センター職員の協力を得た。
5. 自然科学的分析については、以下に記した方々に依頼し、原稿を賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。

C ¹⁴ 年代測定	㈱地球科学研究所
考古地磁気測定	前中一晃・尾上 忍（花園大学）
人骨鑑定	安倍みき子（大阪市立大学）
赤色顔料成分分析	南 武志（近畿大学豊岡短期大学） 山際英樹（近畿大学共同利用センター）
鉄釘のさび層の分析	橋本 敏（大阪市立大学） 山下正人（姫路工業大学）

6. 発掘調査および整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏に御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、順不同）。

岡村道雄・坂井秀弥（文化庁）、白石太一郎・千田嘉博・村木二郎（国立歴史民俗博物館）、村田修三・福永伸哉（大阪大学）、井本伸廣（京都教育大学）、坪之内徹（奈良女子大学）、藤澤典彦（大谷女子大学）、合田芳正（青山学院大学）、川口宏海（大手前女子学園）、太田三喜（天理大学付属天理参考館）、免山篤（茨木市文化財保護審議委員）、木下密運（千手寺）、藤沢良佑〔財瀬戸市埋蔵文化財調査研究センター〕、伊野近富・森島康雄〔財京都府埋蔵文化財調査研究センター〕、百瀬正恒〔財京都市埋蔵文化財研究所〕、乗岡 実（岡山市教育委員会）、稻垣正宏・大崎哲人・清水ひかる〔財滋賀県文化財保護協会〕、別府洋二（兵庫県教育委員会）、岡本広義・佐藤亞聖・狭川真一〔財元興寺文化財研究所〕、尾上 実、鋤柄俊夫（同志社大学資料館）、橋本久和・宮崎康雄・森田克行（高槻市教育委員会）、奥井哲秀（茨木市教育委員会）、藤原 学（吹田市立博物館）、西本安秀（吹田市教育委員会）

会)、鈴木陽一(泉佐野市教育委員会)、西山昌孝(千早赤坂村)、中世土器研究会、石造物研究会、一瀬和夫・小林義孝・森屋直樹・横田明(大阪府教育委員会)

7. 発掘調査および整理作業の過程では、以下の方々を中心に参加、協力を得た。

発掘調査――――――

間野静雄・石黒智美・小島祥美・小牧健太郎・近藤千恵・清水 哲・瀧本勇一・立岩美津子・椿 浩人・長本 幹・藤村 俊・三木麻衣子・横山雅之

整理作業――――――

伊藤栄二・今田明子・川崎朝子・近藤千恵・酒井 貢・立岩美津子・津田春子・長本 幹・波岸初美・二宮栄子・野口佳子・前田千津子・松岡聖美・八十千里

8. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は、(財)大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。また、普及資料課において発掘調査記録映画『佐保栗栖山砦跡・中世墓群の発掘調査—「戦国時代のとりで」と「村人の墓」—』(16mmフィルム・VHSビデオテープ)を作成した。広く利用されることを希望する。

9. 中世567.572号墓から各々出土した鳥帽子は、展示に耐えうるように2点とも調湿機能を備えた展示ケースに保管している。また、567号墓の鳥帽子出土状況のレプリカも作成している。広く利用されたい。

10. 表紙の揮毫は当センター総務部 白橋鐘道による。

凡　例

1. 本報告書は、本文編、図版編、中近世墓実測図編、付表編の4分冊で構成され、さらに墳墓群全体図等を付図としている。
2. 挿図の縮尺は各図のスケールに縮尺率を明示しているので参照されたい。
3. 遺構および断面図中の標高は東京湾平均海面(T.P.)からのプラス値である。他に大阪湾平均海面(O.P.)もあり、両者のレベル差は、T.P.±0 m=O.P.+1.3mである。
4. 遺構図における断面位置は「L」形、立面等の見通し位置は「—」によってその位置を明記した。
5. 本文編の第5章 第4節の墓群構成を表した挿図は、墓群ごとの相対的な関係を表すために作図したものである。よって、断面図は任意のラインにより作成したものをつなぎ合わせたもので、厳密なものではなく模式図的なものである。
6. 挿図および写真図版における遺物番号は各図版内で完結する番号を付している。
7. 遺物実測図の縮尺は、古墳群出土土器は1/4、中近世墓群出土土器は1/3、金属製品は2/3、石造物は1/10を基本としている。それぞれの縮尺率は、各スケールに明示している。
8. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
9. 本書の執筆については目次に記した。また、編集は森屋・瀬戸が行った。

目 次

卷頭カラー図版

- | | | |
|--------------------|----------------------|----------------------|
| 1. 原位置で検出された石仏群 | 22. 整然と列状に並ぶ墓壙（A群） | 43. 火葬場 2 |
| 2. 三島平野を望む | 23. 石組（A～C群付近） | 44. 炭盛土の堆積状況 |
| 3. 中近世墓群の石組 | 24. 墓壙（A～C群付近） | 45. A・Bタイプの土師器皿 |
| 4. 中近世墓群の墓壙 | 25. 35号墓 | 46. C・Dタイプの土師器皿 |
| 5. 古墳群 | 26. 339号墓 | 47. 蔵骨器および副葬された土器・温石 |
| 6. 古墳群全景 | 27. 206.207.208号墓 | 48. 567号墓出土鳥帽子 |
| 7. 3号墳全景 | 28. 34号墓 | 49. 572号墓出土鳥帽子 |
| 8. 2号墳石室 | 29. 288号墓 | 50. 83号墓出土赤色顔料塗布布片 |
| 9. 5号墳石室 | 30. 161号墓 | 51. 83号墓出土金泥付塗布布片 |
| 10. 6号墳全景 | 31. 219号墓 | 52. 炭盛土出土錠前 |
| 11. 6号墳石室 | 32. 571号墓 | 53. 鉄釘の断面 |
| 12. 裏込めの状況（6号墳） | 33. 5枚重なって出土した土師器皿 | 54. 炭盛土・火葬場出土鉄釘 |
| 13. 火葬墓 1 | 34. 227.228号墓 | 55. 馬場共同墓地 |
| 14. 火葬墓 1 烧骨検出状況 | 35. 572号墓 | 56. 安威共同墓地 |
| 15. 烧土坑 1 の埋土状況 | 36. 600号墓 | 57. 福井真龍寺墓地 |
| 16. 烧土坑 2 | 37. 薫状の纖維で6枚重ねられた北宋錢 | 58. 上音羽共同墓地 |
| 17. 古墳群出土鉄釘 | 38. 69号墓 | 59. 高槻市岡本山古墓群出土石仏 |
| 18. 古墳群出土土器 | 39. 火葬墓A類 | 60. 同古墓群全景 |
| 19. 石組全景 | 40. 292号墓 | 61. 箕面市小畠遺跡石仏 |
| 20. 墓壙全景 | 41. 323号墓 | 62. 同遺跡墓壙全景 |
| 21. 整然と列状に並ぶ石組（A群） | 42. 炭盛土 | |

序文

(財) 大阪府文化財調査研究センター 理事長 水野 正好

例言・凡例

第1章 調査の経過と概要

- | | | |
|---------------|---------|---|
| 第1節 発掘調査に至る経過 | （森屋美佐子） | 1 |
| 第2節 発掘調査の方法 | （森屋） | 4 |

第2章 位置と環境

- | | | |
|-----------|--------|---|
| 第1節 自然的環境 | （瀬戸哲也） | 6 |
| 第2節 歴史環境 | （瀬戸） | 7 |

第3章 調査の概要

- | | | |
|-------------|------|----|
| 第1節 基本層序 | （瀬戸） | 10 |
| 第2節 古墳群・古代墓 | （瀬戸） | 10 |
| 第3節 中近世墓群 | （瀬戸） | 13 |

第4章 古墳群および古代墓の調査

- | | | |
|--------|------|----|
| 第1節 立地 | （瀬戸） | 14 |
| 第2節 古墳 | | 16 |

1. 1号墳	(福島正和)	16
2. 2号墳	(福島)	20
3. 3号墳	(福島)	22
4. 4号墳	(瀬戸)	28
5. 5号墳	(瀬戸)	32
6. 6号墳	(森屋)	37
第3節 古代墓	(瀬戸)	47
1. 火葬墓		47
2. 焼土坑		48
3. 土坑		51
4. 木棺墓		51
第4節 遺物		52
1. 土器	(森屋・長本 幹)	52
2. 金属製品他	(瀬戸)	58
第5章 中近世墓群の調査		
第1節 前提と概要	(瀬戸)	67
1. 調査過程の概略		67
2. 整理過程の概略と生じた問題点		67
第2節 立地	(森屋)	69
第3節 墓の構造		70
1. 墓の単位と構造	(瀬戸)	70
2. 石組の分類	(森屋)	73
3. 墓壙の分類	(瀬戸)	77
第4節 墓群の構成		85
1. 墓群の単位	(森屋)	85
2. A群	(森屋・瀬戸)	87
3. B群	(森屋・瀬戸)	93
4. C群	(森屋・瀬戸)	103
5. D群	(森屋・瀬戸)	122
6. E群	(森屋・瀬戸)	129
7. F群	(森屋・瀬戸)	143
8. G群	(森屋・瀬戸)	156
9. H群	(森屋・瀬戸)	159
第5節 火葬場および炭盛土	(森屋)	166
1. 炭盛土		166
2. 立石		166
3. 火葬場		169
第6節 遺物		175

1. 土器・陶磁器・土製品	(瀬戸)	175
2. 石製品	(瀬戸)	184
3. 金属製品	(瀬戸)	185
4. 銭貨	(福島・瀬戸)	193
5. 漆製品	(長本・瀬戸)	196
6. 五輪塔・石仏	(森屋・市本芳三)	197
第6章 墳墓以外の遺構と遺物		
第1節 遺構	(森屋)	203
1. 焼土坑		203
第2節 遺物	(森屋)	206
第7章 基礎分析		
第1節 土器からみた古墳群	(森屋・瀬戸)	207
第2節 6号墳の墳丘復元について	(森屋)	213
第3節 古代・中世における荼毘施設の検討	(瀬戸)	221
第4節 1967年度発掘調査の再検討	(森屋)	227
第5節 土器からみた中近世墓群	(瀬戸)	235
第6節 中近世墓群の石組と墓群の検討	(森屋)	245
第7節 中近世墓群の墓壙と葬法の検討	(瀬戸)	265
第8節 鉄釘と木棺の復元について	(瀬戸)	285
第9節 中世墓出土の鳥帽子の観察	(長本)	291
第10節 五輪塔・石仏の分析	(森屋・市本芳三)	305
第11節 中近世墓群出土銭貨の検討	(福島・瀬戸)	321
第12節 栗栖山南墳墓群出土石器の検討	(伊藤栄二)	326
第8章 自然科学的分析		
第1節 自然科学的分析の概要	(森屋)	334
第2節 栗栖山南墳墓群出土炭層のC ¹⁴ 年代測定	(株)地球科学研究所	335
第3節 栗栖山南墳墓群より採取した焼土資料の考古地磁気測定	(前中一晃・尾上忍)	337
第4節 栗栖山南墳墓群中世火葬墓および火葬場出土人骨について	(安倍みき子)	343
第5節 栗栖山南墳墓群中世火葬墓出土炭化材の樹種鑑定	(山口誠治)	354
第6節 栗栖山南墳墓群中世墓出土の漆製品の保存処理	(立花るりこ)	355
第7節 栗栖山南墳墓群中世墓出土赤色顔料付着布片の赤色顔料の成分分析	(南武志・山際英樹)	365
第8節 栗栖山南墳墓群中世火葬場より出土した鉄釘のさび層とその防食性	(山下正人・橋本敏)	369
第9章 総括—栗栖山南墳墓群の変遷と歴史的空間		
第1節 古墳群	(瀬戸)	377
第2節 中近世墓群	(瀬戸)	387
付章 北摂地域における栗栖山南古墳群の位置づけ	(森本徹)	399

挿図目次

- 図1 国際文化公園都市全体図
図2 佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群調査位置図
図3 国土座標系とそれによる地区割り
図4 調査区の地区割
図5 周辺地質図
図6 周辺主要遺跡分布図
図7 調査区全体図
図8 古墳群・古代墓全体図
図9 1号墳・2号墳全体図
図10 1号墳墳丘・区画溝断面図
図11 1号墳墓壙、石室平面図
図12 1号墳石室平面・立面図
図13 2号墳墓壙、石室平面・断面図
図14 2号墳石室平面・立面図
図15 3号墳全体図
図16 3号墳墳丘・区画溝断面図
図17 3号墳石室・墓壙平面図
図18 3号墳石室平面・立面図
図19 4号墳全体図
図20 4号墳墳丘・区画溝断面図
図21 4号墳墓壙平面・立面図
図22 5号墳全体図
図23 5号墳墳丘・区画溝断面図
図24 5号墳石室・墓壙平面図、列石立面図
図25 5号墳石室平面・立面図
図26 6号墳全体図、2段目列石平面・立面図
図27 3段目西侧列石平面・断面図
図28 6号墳墳丘・区画溝断面図
図29 6号墳石室平面・立面図
図30 6号墳墓壙、石室平面・立面図
図31 6号墳墳丘盛土除去後地形図、階段状遺構
図32 火葬墓1平面・断面図
図33 烧土坑1～7、土坑1・2平面・断面図
図34 木棺墓1平面・断面図
図35 古墳群・古代墓周辺出土土器分布図
図36 古墳群・古代墓出土土器
図37 第1～2層出土土器
図38 古墳群出土鉄釘の分類
図39 2・3・4号墳出土鉄釘
図40 6号墳出土鉄釘・鎌
図41 木棺墓1出土鉄釘(1)
図42 木棺墓1出土鉄釘(2)
図43 土坑1出土鉄釘
図44 古墳群出土鉄製品・鉄滓
図45 中近世墓の構造と単位
図46 石組の分類(1)
図47 石組の分類(2)
図48 火葬墓の分類
図49 土葬墓の分類
図50 中近世墓大区分
図51 中近世墓小区分
図52 中近世墓A-a群
図53 中近世墓A-b群、A-c群、A-d群
図54 中近世墓A-e群、A-f群
図55 中近世墓A-g群
図56 中近世墓A-h群
図57 中近世墓小区分
図58 中近世墓B-a群、B-b群
図59 中近世墓B-c群
図60 中近世墓B-d群
図61 中近世墓B-e群
図62 中近世墓B-f群
図63 中近世墓B-g群、B-h群
図64 中近世墓B-i群
図65 中近世墓小区分
図66 中近世墓C-a群
図67 中近世墓C-b群
図68 中近世墓C-c群
図69 中近世墓C-d群、C-e群、C-f群
図70 中近世墓C-g群、C-h群
図71 中近世墓C-i群、C-j群
図72 中近世墓C-k群、C-l群
図73 中近世墓C-m群、C-n群
図74 中近世墓C-o群、C-p群
図75 中近世墓C-q群
図76 中近世墓小区分
図77 中近世墓D-a群
図78 中近世墓D-b群
図79 中近世墓D-c群
図80 中近世墓D-d群、D-e群
図81 中近世墓D-f群
図82 中近世墓小区分
図83 中近世墓E-a群
図84 中近世墓E-b群、E-c群
図85 中近世墓E-d群、E-e群
図86 中近世墓E-f群
図87 中近世墓E-g群
図88 中近世墓E-h群、E-i群
図89 中近世墓E-j群、E-k群
図90 中近世墓小区分

- 図91 中近世墓F-a群
- 図92 中近世墓F-b群、F-c群、F-d群
- 図93 中近世墓F-e群、F-f群
- 図94 中近世墓F-g群
- 図95 中近世墓F-h群
- 図96 中近世墓F-i群
- 図97 中近世墓F-j群
- 図98 中近世墓小区分
- 図99 中近世墓G-a群、G-b群
- 図100 中近世墓小区分
- 図101 中近世墓H-a群、H-b群
- 図102 中近世墓H-c群
- 図103 炭盛土平面図・断面図
- 図104 火葬場2~5平面図、立石1平面・断面図
- 図105 火葬場2~4平面図
- 図106 火葬場2~5断面図、火葬場7平面・断面図
- 図107 火葬場1・6平面・断面図
- 図108 土師器皿の分類
- 図109 墓出土遺物(1)
- 図110 墓出土遺物(2)
- 図111 墓出土遺物(3)
- 図112 墓出土遺物(4)
- 図113 炭盛土・火葬場出土遺物
- 図114 第1・2層出土遺物
- 図115 墓出土温石
- 図116 中近世墓群出土鉄釘の分類
- 図117 炭盛土・火葬場出土鉄釘(1)
- 図118 炭盛土・火葬場出土鉄釘(2)
- 図119 墓出土鉄釘(1)
- 図120 墓出土鉄釘(2)
- 図121 中近世墓群出土短刀・刀子
- 図122 中近世墓群出土金属製品
- 図123 出土錠前の復元案
- 図124 中近世墓群出土錢貨(1)
- 図125 中近世墓群出土錢貨(2)
- 図126 五輪塔空風輪
- 図127 五輪塔火輪
- 図128 五輪塔水輪
- 図129 五輪塔地輪
- 図130 一石五輪塔
- 図131 1Aトレンチ谷部断面図、1A・2Aトレンチ石造物出土位置図
- 図132 1・2Aトレンチ、焼土坑8~11平面・断面図
- 図133 墳墓群以外の第1・2層出土土器
- 図134 古墳群・古代墓の土器の変遷
- 図135 古代土器の出土状況および古代火葬墓域推定図
- 図136 6号墳築造規格(1)
- 図137 6号墳築造規格(2)
- 図138 1・3~5号墳築造規格
- 図139 当墳墓群における焼土坑の規模
- 図140 古代・中世の茶毬施設
- 図141 茶毬施設に付随する施設
- 図142 1967年調査の墓標分布図
- 図143 41号地点および2号墓
- 図144 50・51号地点
- 図145 火葬場2周辺復元図
- 図146 栗栖山南中近世墓群復元位置図
- 図147 土師器皿のタイプと法量の比較
- 図148 岡本山古墓群の羽釜との比較
- 図149 土器から見た中近世墓群の変遷模式図
- 図150 石組の作り替え(1)
- 図151 石組の作り替え(2)
- 図152 石組の作り替え(3)
- 図153 石組の規模比較
- 図154 石造物の種類と石組の規模
- 図155 石組の規格
- 図156 墓群の再構成
- 図157 中近世墓縦断面模試図
- 図158 火葬墓の分類と葬法
- 図159 規模から見た火葬墓A類の時期的傾向
- 図160 規模から見た土葬墓A類の時期的傾向
- 図161 吉母浜遺跡の土葬墓
- 図162 土葬墓B類と高槻城跡木棺墓の比較
- 図163 墓以外の性格をもつ遺構
- 図164 墓壙タイプ別全体図
- 図165 墓壙時期別分布図
- 図166 鉄釘の頭部形態
- 図167 鉄釘の頭部長の比較
- 図168 木棺墓1復元模式図
- 図169 木棺墓1復元想定図
- 図170 中近世墓群木管規模比較
- 図171 烏帽子の各部位名称
- 図172 栗栖山南中世墓出土烏帽子実測図
- 図173 烏帽子復元模式図
- 図174 烏帽子実測図および復元模式図
- 図175 烏帽子が出土した墓の例
- 図176 五輪塔計測位置
- 図177 五輪塔各部の分類
- 図178 火輪の形態
- 図179 五輪塔組合せ復元
- 図180 石仏の計測位置
- 図181 光背形石仏の埋置率と像容加工率
- 図182 板碑形石仏の像容加工率
- 図183 国見八幡神社五輪塔
- 図184 中近世墓群出土景德元寶の模鋳銭と本鋳銭
- 図185 栗栖山南墳墓群出土石器(1)
- 図186 栗栖山南墳墓群出土石器(2)
- 図187 近畿地方における縄文時代早期～前期に

- かけての石鏃の形態変遷
 図188 C¹⁴年代の補正曲線図
 図189 33号墓の試料の交流消磁直交消磁図
 図190 人体の骨格部位名称（1）
 図191 人体の骨格部位名称（2）
 図192 漆膜1・2より復元した断面模式図
 図193 漆膜3～8より復元した断面模式図
 図194 漆膜3～8縁の折り返しの断面模式図
 図195 栗栖山南墳墓群から出土した漆膜のFT/IR-PASスペクトル
 図196 栗栖山南墳墓群出土漆膜に伴う平絹のFT/IR-PASスペクトル
 図197 天然纖維の赤外吸収スペクトル
 図198 赤色顔料の蛍光X線分析
 図199 赤色顔料の定性分析（1）
- 図200 赤色顔料の定性分析（2）
 図201 石室の比較
 図202 古墳群・火葬墓群の単位構成
 図203 II期における小群の展開モデル
 図204 II期における墓群構造モデル
 図205 III期における墓群構造モデル
 図206 茨木市北部中世墓地関連地図
 図207 群集墳の単位レベルの認識
 図208 群集墳の終焉類型
 図209 北摂地域の後期古墳・群集墳の分布
 図210 島上・島下地域
 図211 千里丘陵・猪名川東岸地域
 図212 能勢地域
 図213 長尾山丘陵地域

表 目 次

- | | |
|------------------------|---------------------------------------|
| 表1 錢貨出土表 | 表19 栗栖山南墳墓群焼土試料の帯磁率・
残留磁化の強さ・その相対比 |
| 表2 墳墓群出土錢貨一覧表 | 表20 33号墓の試料の残留磁化測定結果 |
| 表3 中近世墓群出土土器組成 | 表21 69号墓の試料の残留磁化測定結果 |
| 表4 石組の組成一覧表 | 表22 焼土坑2の試料の残留磁化測定結果 |
| 表5 吉母浜遺跡土葬墓一覧 | 表23 西日本の永年変化曲線作成基礎資料 |
| 表6 高槻城跡木棺墓一覧 | 表24 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表（1） |
| 表7 墓壙タイプ別の総数 | 表25 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表（2） |
| 表8 火葬墓A類墓群別の規模比較 | 表26 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表（3） |
| 表9 土葬墓A類推定時期別墓壙数 | 表27 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表（4） |
| 表10 頭部形態別の中近世墓群の鉄釘法量比較 | 表28 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表（5） |
| 表11 鉄釘タイプ別法量比較 | 表29 栗栖山南墳墓群出土人骨一覧表（6） |
| 表12 鉄釘を使用した木棺墓一覧 | 表30 炭化材の樹種鑑定結果一覧表 |
| 表13 掲載鳥帽子の法量表 | 表31 PEGの物性 |
| 表14 出土鳥帽子一覧表 | 表32 Polloxの物性 |
| 表15 中近世墓群出土錢貨遺構別一覧 | 表33 鉄釘の化学組成 |
| 表16 各地の中世墓における錢種別出土数 | 表34 鉄釘のさび層構成物質 |
| 表17 栗栖山南墳墓群と全国備蓄錢の錢種構成 | 表35 鉄釘さび層の化学組成 |
| 表18 栗栖山南墳墓群出土石器属性表 | |

写 真 目 次

- | | |
|--------------------------|-------------------------------|
| 写真1 調査風景・現地説明会風景・評議員視察風景 | 写真10 1967年発掘調査時出土石仏（2） |
| 写真2 現地説明会資料 | 写真11 栗栖山南墳墓群出土人骨（1） |
| 写真3 栗栖山南中世墓出土鳥帽子片 | 写真12 栗栖山南墳墓群出土人骨（2） |
| 写真4 絵巻物に見る葬送の様子 | 写真13 栗栖山南墳墓群出土人骨（3） |
| 写真5 『春日権現記絵』より | 写真14 栗栖山南墳墓群から出土した漆膜 |
| 写真6 光背形石仏の分類 | 写真15 T388(a)、(b)とT328(c)鉄釘の外観 |
| 写真7 板碑形石仏の分類 | 写真16 T328のさび層中の主要元素分布 |
| 写真8 炭盛土下層および火葬場出土石仏（1） | 写真17 T388のさび層中の主要元素分布 |
| 写真9 1967年発掘調査時出土石仏（1） | |

中近世墓実測図版目次

- | | | |
|-----------------------|--------------------------------|------------------------|
| 第1図 1～4号墓 | 第28図 97～101号墓 | 第55図 214～216号墓 |
| 第2図 5～9号墓 | 第29図 102～107号墓 | 第56図 217～220号墓 |
| 第3図 10.11号墓 | 第30図 108～112号墓 | 第57図 221～225号墓 |
| 第4図 12～15号墓 | 第31図 109.111.113号墓 | 第58図 226～229号墓 |
| 第5図 16～20号墓 | 第32図 114～116号墓 | 第59図 230～233号墓 |
| 第6図 21～24号墓 | 第33図 117～119号墓 | 第60図 234～236号墓 |
| 第7図 25.26号墓 | 第34図 120～123号墓 | 第61図 237～239号墓 |
| 第8図 27.28号墓 | 第35図 124～127.129号墓 | 第62図 240～243号墓 |
| 第9図 29.30.43号墓 | 第36図 128.130.131号墓 | 第63図 244～247号墓 |
| 第10図 31～33号墓 | 第37図 132.133.135.136.138号墓 | 第64図 248～253号墓 |
| 第11図 34～36号墓 | 第38図 132.134.137.139～141.144号墓 | 第65図 254～259号墓 |
| 第12図 37～40号墓 | 第39図 142.143.145.146号墓 | 第66図 260～264.267号墓 |
| 第13図 41.42号墓 | 第40図 147～149号墓 | 第67図 265.266.268～273号墓 |
| 第14図 44～47.52号墓 | 第41図 150～152号墓 | 第68図 274～276号墓 |
| 第15図 48～50号墓 | 第42図 153～158号墓 | 第69図 277～279号墓 |
| 第16図 51.53.54号墓 | 第43図 159～163号墓 | 第70図 280～284号墓 |
| 第17図 55～57号墓 | 第44図 164～166.168号墓 | 第71図 285～289号墓 |
| 第18図 58～61.64号墓 | 第45図 167.169～172号墓 | 第72図 291～294号墓 |
| 第19図 62.63.65～67号墓 | 第46図 172～176.178号墓 | 第73図 290.295～298.300号墓 |
| 第20図 68.69号墓 | 第47図 177.179.180.182号墓 | 第74図 299.301～306号墓 |
| 第21図 70～72.75.77号墓 | 第48図 183.184.186号墓 | 第75図 306～310号墓 |
| 第22図 73.74.76.78.79号墓 | 第49図 181.185.187～190号墓 | 第76図 311～315号墓 |
| 第23図 80～83号墓 | 第50図 191～194号墓 | 第77図 316～320号墓 |
| 第24図 84～88号墓 | 第51図 195～198号墓 | 第78図 321～325号墓 |
| 第25図 89～92号墓 | 第52図 199～204号墓 | 第79図 326～333号墓 |
| 第26図 93.94号墓 | 第53図 203.205～208号墓 | 第80図 334～337号墓 |
| 第27図 95.96号墓 | 第54図 209～213号墓 | 第81図 338号墓 |

第82図	339.340号墓	第101図	426～428号墓	第120図	519～523号墓
第83図	341号墓	第102図	429～432号墓	第121図	524～529号墓
第84図	342～348号墓	第103図	433～440号墓	第122図	530～535号墓
第85図	349～356号墓	第104図	441～446号墓	第123図	536～541号墓
第86図	357～362号墓	第105図	447～451号墓	第124図	542～549号墓
第87図	363～367号墓	第106図	452～458号墓	第125図	550～554号墓
第88図	368～372号墓	第107図	459～465号墓	第126図	555～557号墓
第89図	373～376号墓	第108図	466～469号墓	第127図	558～561号墓
第90図	377～380号墓	第109図	470～474号墓	第128図	562～565号墓
第91図	381～383号墓	第110図	475～483号墓	第129図	566.567号墓
第92図	384～388.390号墓	第111図	481～485号墓	第130図	568.569号墓
第93図	389.391号墓	第112図	486～489号墓	第131図	570.571号墓
第94図	392～394.396.397号墓	第113図	490～495号墓	第132図	572～575号墓
第95図	398～402号墓	第114図	496～498.500号墓	第133図	576～581号墓
第96図	403～405号墓	第115図	499.501.502号墓	第134図	582～588号墓
第97図	406～411号墓	第116図	503.504.506号墓	第135図	589～594号墓
第98図	412～414号墓	第117図	505.507～510号墓	第136図	595号～599号墓
第99図	415～419号墓	第118図	511～515号墓	第137図	600.601号墓
第100図	420～425号墓	第119図	516～518号墓		

付 表 目 次

付表1	古墳一覧表	付表24	中近世墓一覧表 (18)	付表47	中近世墓一覧表 (41)
付表2	古墳群遺構一覧表	付表25	中近世墓一覧表 (19)	付表48	中近世墓一覧表 (42)
付表3	古墳群出土土器一覧表	付表26	中近世墓一覧表 (20)	付表49	中近世墓一覧表 (43)
付表4	古墳群出土金属製品他一覧表	付表27	中近世墓一覧表 (21)	付表50	中近世墓一覧表 (44)
付表5	古墳群出土鉄釘一覧表 (1)	付表28	中近世墓一覧表 (22)	付表51	中近世墓一覧表 (45)
付表6	古墳群出土鉄釘一覧表 (2)	付表29	中近世墓一覧表 (23)	付表52	中近世墓一覧表 (46)
付表7	中近世墓一覧表 (1)	付表30	中近世墓一覧表 (24)	付表53	中近世墓一覧表 (47)
付表8	中近世墓一覧表 (2)	付表31	中近世墓一覧表 (25)	付表54	中近世墓一覧表 (48)
付表9	中近世墓一覧表 (3)	付表32	中近世墓一覧表 (26)	付表55	中近世墓一覧表 (49)
付表10	中近世墓一覧表 (4)	付表33	中近世墓一覧表 (27)	付表56	中近世墓一覧表 (50)
付表11	中近世墓一覧表 (5)	付表34	中近世墓一覧表 (28)	付表57	中近世墓一覧表 (51)
付表12	中近世墓一覧表 (6)	付表35	中近世墓一覧表 (29)	付表58	中近世墓一覧表 (52)
付表13	中近世墓一覧表 (7)	付表36	中近世墓一覧表 (30)	付表59	中近世墓一覧表 (53)
付表14	中近世墓一覧表 (8)	付表37	中近世墓一覧表 (31)	付表60	中近世墓一覧表 (54)
付表15	中近世墓一覧表 (9)	付表38	中近世墓一覧表 (32)	付表61	中近世墓一覧表 (55)
付表16	中近世墓一覧表 (10)	付表39	中近世墓一覧表 (33)	付表62	中近世墓一覧表 (56)
付表17	中近世墓一覧表 (11)	付表40	中近世墓一覧表 (34)	付表63	中近世墓一覧表 (57)
付表18	中近世墓一覧表 (12)	付表41	中近世墓一覧表 (35)	付表64	中近世墓一覧表 (58)
付表19	中近世墓一覧表 (13)	付表42	中近世墓一覧表 (36)	付表65	中近世墓一覧表 (59)
付表20	中近世墓一覧表 (14)	付表43	中近世墓一覧表 (37)	付表66	中近世墓一覧表 (60)
付表21	中近世墓一覧表 (15)	付表44	中近世墓一覧表 (38)	付表67	中近世墓一覧表 (61)
付表22	中近世墓一覧表 (16)	付表45	中近世墓一覧表 (39)	付表68	中近世墓一覧表 (62)
付表23	中近世墓一覧表 (17)	付表46	中近世墓一覧表 (40)	付表69	中近世墓一覧表 (63)

付表70	中近世墓一覧表 (64)	付表103	中近世墓一覧表 (97)	付表136	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (4)
付表71	中近世墓一覧表 (65)	付表104	中近世墓一覧表 (98)	付表137	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (5)
付表72	中近世墓一覧表 (66)	付表105	中近世墓一覧表 (99)	付表138	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (6)
付表73	中近世墓一覧表 (67)	付表106	中近世墓一覧表 (100)	付表139	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (7)
付表74	中近世墓一覧表 (68)	付表107	中近世墓一覧表 (101)	付表140	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (8)
付表75	中近世墓一覧表 (69)	付表108	中近世墓一覧表 (102)	付表141	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (9)
付表76	中近世墓一覧表 (70)	付表109	中近世墓一覧表 (103)	付表142	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (10)
付表77	中近世墓一覧表 (71)	付表110	中近世墓一覧表 (104)	付表143	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (11)
付表78	中近世墓一覧表 (72)	付表111	中近世墓一覧表 (105)	付表144	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (12)
付表79	中近世墓一覧表 (73)	付表112	中近世墓一覧表 (106)	付表145	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (13)
付表80	中近世墓一覧表 (74)	付表113	中近世墓一覧表 (107)	付表146	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (14)
付表81	中近世墓一覧表 (75)	付表114	中近世墓一覧表 (108)	付表147	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (15)
付表82	中近世墓一覧表 (76)	付表115	中近世墓一覧表 (109)	付表148	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (16)
付表83	中近世墓一覧表 (77)	付表116	中近世墓一覧表 (110)	付表149	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (17)
付表84	中近世墓一覧表 (78)	付表117	中近世墓一覧表 (111)	付表150	中近世墓群出土錢貨一覧表 (1)
付表85	中近世墓一覧表 (79)	付表118	中近世墓一覧表 (112)	付表151	中近世墓群出土錢貨一覧表 (2)
付表86	中近世墓一覧表 (80)	付表119	中近世墓一覧表 (113)	付表152	中近世墓群出土空風輪一覧表
付表87	中近世墓一覧表 (81)	付表120	中近世墓一覧表 (114)	付表153	中近世墓群出土火輪一覧表
付表88	中近世墓一覧表 (82)	付表121	中近世墓一覧表 (115)	付表154	中近世墓群出土水輪一覧表
付表89	中近世墓一覧表 (83)	付表122	中近世墓一覧表 (116)	付表155	中近世墓群出土地輪一覧表
付表90	中近世墓一覧表 (84)	付表123	中近世墓一覧表 (117)	付表156	中近世墓群出土一石五輪塔 一覧表
付表91	中近世墓一覧表 (85)	付表124	中近世墓一覧表 (118)	付表157	中近世墓群出土光背型石仏 一覧表 (1)
付表92	中近世墓一覧表 (86)	付表125	中近世墓一覧表 (119)	付表158	中近世墓群出土光背型石仏 一覧表 (2)
付表93	中近世墓一覧表 (87)	付表126	中近世墓一覧表 (120)	付表159	中近世墓群出土板碑型石仏 一覧表 (1)
付表94	中近世墓一覧表 (88)	付表127	中近世墓一覧表 (121)	付表160	中近世墓群出土板碑型石仏 一覧表 (2)
付表95	中近世墓一覧表 (89)	付表128	火葬場一覧表	付表161	焼土坑一覧表
付表96	中近世墓一覧表 (90)	付表129	中近世墓群出土土器一覧表 (1)	付表162	墳墓群以外の遺物一覧表
付表97	中近世墓一覧表 (91)	付表130	中近世墓群出土土器一覧表 (2)		
付表98	中近世墓一覧表 (92)	付表131	中近世墓群出土土器一覧表 (3)		
付表99	中近世墓一覧表 (93)	付表132	中近世墓群出土金属製品一覧表		
付表100	中近世墓一覧表 (94)	付表133	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (1)		
付表101	中近世墓一覧表 (95)	付表134	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (2)		
付表102	中近世墓一覧表 (96)	付表135	中近世墓群出土鉄釘一覧表 (3)		

写真図版目次

図版 1	栗栖山南墳墓群周辺航空写真	図版10	1号墳	図版19	5号墳
図版 2	中近世墓群石組航空写真	図版11	2号墳	図版20	5号墳
図版 3	中近世墓群墓壙航空写真	図版12	3号墳	図版21	5号墳
図版 4	古墳群航空写真	図版13	3号墳	図版22	6号墳
図版 5	栗栖山南墳墓群遠景	図版14	3号墳	図版23	6号墳
図版 6	古墳群全景	図版15	3号墳	図版24	6号墳
図版 7	古墳群全景	図版16	4号墳	図版25	6号墳
図版 8	1号墳	図版17	4号墳	図版26	6号墳
図版 9	1号墳	図版18	5号墳	図版27	6号墳

- | | | |
|--------------------|--------------------|--------------------|
| 図版28 火葬墓1 | 図版77 中近世墓群B・C群(16) | 図版126 中近世墓群E群(13) |
| 図版29 焼土坑1・2 | 図版78 中近世墓群C群(1) | 図版127 中近世墓群E群(14) |
| 図版30 焼土坑4、土坑1、木棺墓1 | 図版79 中近世墓群C群(2) | 図版128 中近世墓群E群(15) |
| 図版31 焼土坑5 | 図版80 中近世墓群C群(3) | 図版129 中近世墓群E群(16) |
| 図版32 古墳群出土遺物(1) | 図版81 中近世墓群C群(4) | 図版130 中近世墓群E群(17) |
| 図版33 古墳群出土遺物(2) | 図版82 中近世墓群C群(5) | 図版131 中近世墓群E群(18) |
| 図版34 古墳群出土遺物(3) | 図版83 中近世墓群C群(6) | 図版132 中近世墓群E群(19) |
| 図版35 古墳群出土遺物(4) | 図版84 中近世墓群C群(7) | 図版133 中近世墓群F群(1) |
| 図版36 古墳群出土遺物(5) | 図版85 中近世墓群C群(8) | 図版134 中近世墓群E・F群(2) |
| 図版37 古墳群出土遺物(6) | 図版86 中近世墓群C群(9) | 図版135 中近世墓群F群(3) |
| 図版38 中近世墓群全景(1) | 図版87 中近世墓群C群(10) | 図版136 中近世墓群F群(4) |
| 図版39 中近世墓群全景(2) | 図版88 中近世墓群C群(11) | 図版137 中近世墓群F群(5) |
| 図版40 中近世墓群全景(3) | 図版89 中近世墓群C群(12) | 図版138 中近世墓群F群(6) |
| 図版41 中近世墓群全景(4) | 図版90 中近世墓群C群(13) | 図版139 中近世墓群F群(7) |
| 図版42 中近世墓群石組 | 図版91 中近世墓群C群(14) | 図版140 中近世墓群F群(8) |
| 図版43 中近世墓群墓壙 | 図版92 中近世墓群C群(15) | 図版141 中近世墓群F群(9) |
| 図版44 中近世墓群石組・墓壙(1) | 図版93 中近世墓群C群(16) | 図版142 中近世墓群F群(10) |
| 図版45 中近世墓群石組・墓壙(2) | 図版94 中近世墓群C群(17) | 図版143 中近世墓群F群(11) |
| 図版46 中近世墓群石組・墓壙(3) | 図版95 中近世墓群C群(18) | 図版144 中近世墓群F群(12) |
| 図版47 中近世墓群石組・墓壙(4) | 図版96 中近世墓群C群(19) | 図版145 中近世墓群G群(1) |
| 図版48 中近世墓群A群(1) | 図版97 中近世墓群C群(20) | 図版146 中近世墓群G群(2) |
| 図版49 中近世墓群A群(2) | 図版98 中近世墓群C群(21) | 図版147 中近世墓群G群(3) |
| 図版50 中近世墓群A群(3) | 図版99 中近世墓群C群(22) | 図版148 中近世墓群H群(1) |
| 図版51 中近世墓群A群(4) | 図版100 中近世墓群C群(23) | 図版149 中近世墓群H群(2) |
| 図版52 中近世墓群A群(5) | 図版101 中近世墓群C群(24) | 図版150 中近世墓群H群(3) |
| 図版53 中近世墓群A群(6) | 図版102 中近世墓群C群(25) | 図版151 中近世墓群H群(4) |
| 図版54 中近世墓群A群(7) | 図版103 中近世墓群C群(26) | 図版152 中近世墓群H群(5) |
| 図版55 中近世墓群A群(8) | 図版104 中近世墓群C群(27) | 図版153 中近世墓群H群(6) |
| 図版56 中近世墓群A群(9) | 図版105 中近世墓群D群(1) | 図版154 中近世墓群H群(7) |
| 図版57 中近世墓群A群(10) | 図版106 中近世墓群D群(2) | 図版155 中近世墓群H群(8) |
| 図版58 中近世墓群A群(11) | 図版107 中近世墓群D群(3) | 図版156 中近世墓群H群(9) |
| 図版59 中近世墓群A群(12) | 図版108 中近世墓群D群(4) | 図版157 中近世墓群H群(10) |
| 図版60 中近世墓群A群(13) | 図版109 中近世墓群D群(5) | 図版158 中近世墓群H群(11) |
| 図版61 中近世墓群A群(14) | 図版110 中近世墓群D群(6) | 図版159 中近世墓群H群(12) |
| 図版62 中近世墓群B群(1) | 図版111 中近世墓群D群(7) | 図版160 火葬場・炭盛土(1) |
| 図版63 中近世墓群B群(2) | 図版112 中近世墓群D群(8) | 図版161 火葬場・炭盛土(2) |
| 図版64 中近世墓群B群(3) | 図版113 中近世墓群D群(9) | 図版162 火葬場・炭盛土(3) |
| 図版65 中近世墓群B群(4) | 図版114 中近世墓群D・E群(1) | 図版163 火葬場・炭盛土(4) |
| 図版66 中近世墓群B群(5) | 図版115 中近世墓群E群(2) | 図版164 火葬場・炭盛土(5) |
| 図版67 中近世墓群B群(6) | 図版116 中近世墓群E群(3) | 図版165 火葬場・炭盛土(6) |
| 図版68 中近世墓群B群(7) | 図版117 中近世墓群E群(4) | 図版166 火葬場・炭盛土(7) |
| 図版69 中近世墓群B群(8) | 図版118 中近世墓群E群(5) | 図版167 火葬場・炭盛土(8) |
| 図版70 中近世墓群B群(9) | 図版119 中近世墓群E群(6) | 図版168 中近世墓群出土遺物(1) |
| 図版71 中近世墓群B群(10) | 図版120 中近世墓群E群(7) | 図版169 中近世墓群出土遺物(2) |
| 図版72 中近世墓群B群(11) | 図版121 中近世墓群E群(8) | 図版170 中近世墓群出土遺物(3) |
| 図版73 中近世墓群B群(12) | 図版122 中近世墓群E群(9) | 図版171 中近世墓群出土遺物(4) |
| 図版74 中近世墓群B群(13) | 図版123 中近世墓群E群(10) | 図版172 中近世墓群出土遺物(5) |
| 図版75 中近世墓群B群(14) | 図版124 中近世墓群E群(11) | 図版173 中近世墓群出土遺物(6) |
| 図版76 中近世墓群B群(15) | 図版125 中近世墓群E群(12) | 図版174 中近世墓群出土遺物(7) |

- | | | |
|-----------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 図版175 中近世墓群出土遺物 (8) | 図版188 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (6) | 図版197 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (15) |
| 図版176 中近世墓群出土遺物 (9) | 図版189 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (7) | 図版198 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (16) |
| 図版177 中近世墓群出土遺物 (10) | 図版190 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (8) | 図版199 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (17) |
| 図版178 中近世墓群出土遺物 (11) | 図版191 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (9) | 図版200 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (18) |
| 図版179 中近世墓群出土遺物 (12) | 図版192 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (10) | 図版201 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (19) |
| 図版180 中近世墓群出土遺物 (13) | 図版193 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (11) | 図版202 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (20) |
| 図版181 中近世墓群出土遺物 (14) | 図版194 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (12) | 図版203 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (21) |
| 図版182 第1・2層出土遺物 | 図版195 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (13) | 図版204 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (22) |
| 図版183 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (1) | 図版196 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (14) | 図版205 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (23) |
| 図版184 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (2) | | |
| 図版185 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (3) | | |
| 図版186 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (4) | | |
| 図版187 中近世墓群出土石仏・
五輪塔 (5) | | |

付 図 目 次

- | | |
|------------------|--------------------|
| 付図 1 中近世墓全体図 | 付図 5 中近世墓石組分類図 |
| 付図 2 中近世墓石組全体図 | 付図 6 火葬墓A類深さ区分別分布図 |
| 付図 3 中近世墓墓壙全体図 | 付図 7 土葬墓A類推定時期別分布図 |
| 付図 4 中近世墓石仏出土状況図 | |

第1章 調査の経過と方法

第1節 発掘調査に至る経過

佐保栗栖山砦跡および栗栖山南墳墓群の発掘は、住宅・都市整備公団（1999年度より都市基盤整備公団）による『国際文化公園都市特定土地区画整理事業』に伴う発掘調査事業である。

国際文化公園都市は、箕面市および茨木市にまたがる北摂丘陵に所在し、おおよそ、茨木川以東の東部・府道1号線および茨木川間の中部・府道1号線以西の西部の三地域に区分される。総面積742.2haによよぶ。

これらの事業地内は、遺跡の分布がほとんど知られていなかったために、1993年度から3年間にわたり分布調査が行われ、その後、分布図を基に試掘調査が数年度にかけて行われた。その結果、中部地区においては、遺物がわずかに出土したものの遺構は皆無で、西部地区では粟生間谷遺跡・徳大寺遺跡・宿久庄北遺跡・粟生岩阪遺跡・粟生岩阪北遺跡、東部地区では佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群・福井北古墳群・佐保遺跡・椿木北石切場跡の10箇所の遺跡が確認された。

本調査は、1995年から本年度にかけて数次に渡り粟生間谷遺跡の発掘調査が行われ、その間、粟生岩阪遺跡・粟生岩阪北遺跡・徳大寺遺跡・宿久庄遺跡の調査が行われ、終了している。

なお、粟生岩阪遺跡および徳大寺遺跡に関しては、すでに本報告書が刊行されている。

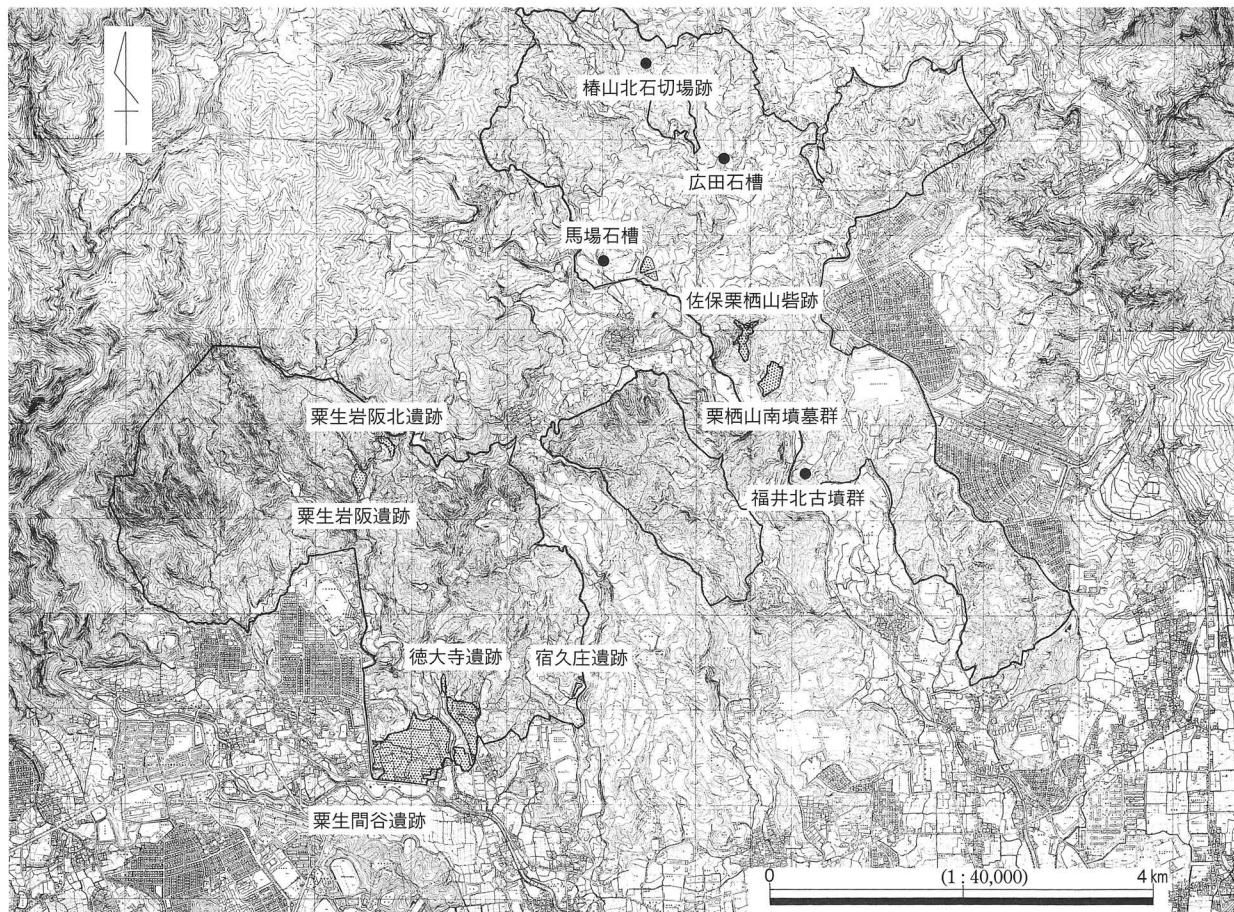


図1 国際文化公園都市全体図

佐保栗栖山砦跡および栗栖山南墳墓群は東部地区の佐保字クルスに所在し、従前より、遺跡であることが知られていた。砦跡に関しては、『日本城郭大系』(1981 新人物往来社)にも掲載されている。また、数カ所の曲輪や縦堀および土塁の存在が現況で確認されているが、その実態は不明な点が多く見受けられた。なお、栗栖山南墳墓群に関しては、現況で石仏が数体露出しており、地元の方々が参拝している痕跡が見受けられた。この墳墓群は、1967年に南側のグラウンド造成に先立って、茨木市教育委員会により一部が発掘調査され、『栗栖山中世墓』として1970年に報告書が刊行されている。さらに、地元の要望により、1996年度に住宅・都市整備公団により27体の石仏が馬場共同墓地に移転されている。

当遺跡は、大阪府教育委員会の指導の下、1996年度に試掘調査および石造物の分布調査が行われ、本調査の範囲が確定された。本調査は、1997年11月から1999年4月まで行われた。調査は、2ヵ所に分断されるために砦跡をB地区、墳墓群をA地区と称し、それぞれを8区分および6区分している。

この間、調査成果の早期公開を狙いとして、中世墓および砦跡に関しては、それぞれに現地説明会('98年8月8日・'99年1月27日)を行い、古墳群に関しては、現地公開 ('99年2月27日)を行っている。

遺物整理事業に関しては、1999年4月から開始され、2000年6月までの期間に行われた。本報告書印刷に関しては、2000年度に実施した。

なお、遺跡の性格上、砦跡と南墳墓群は別冊としている。

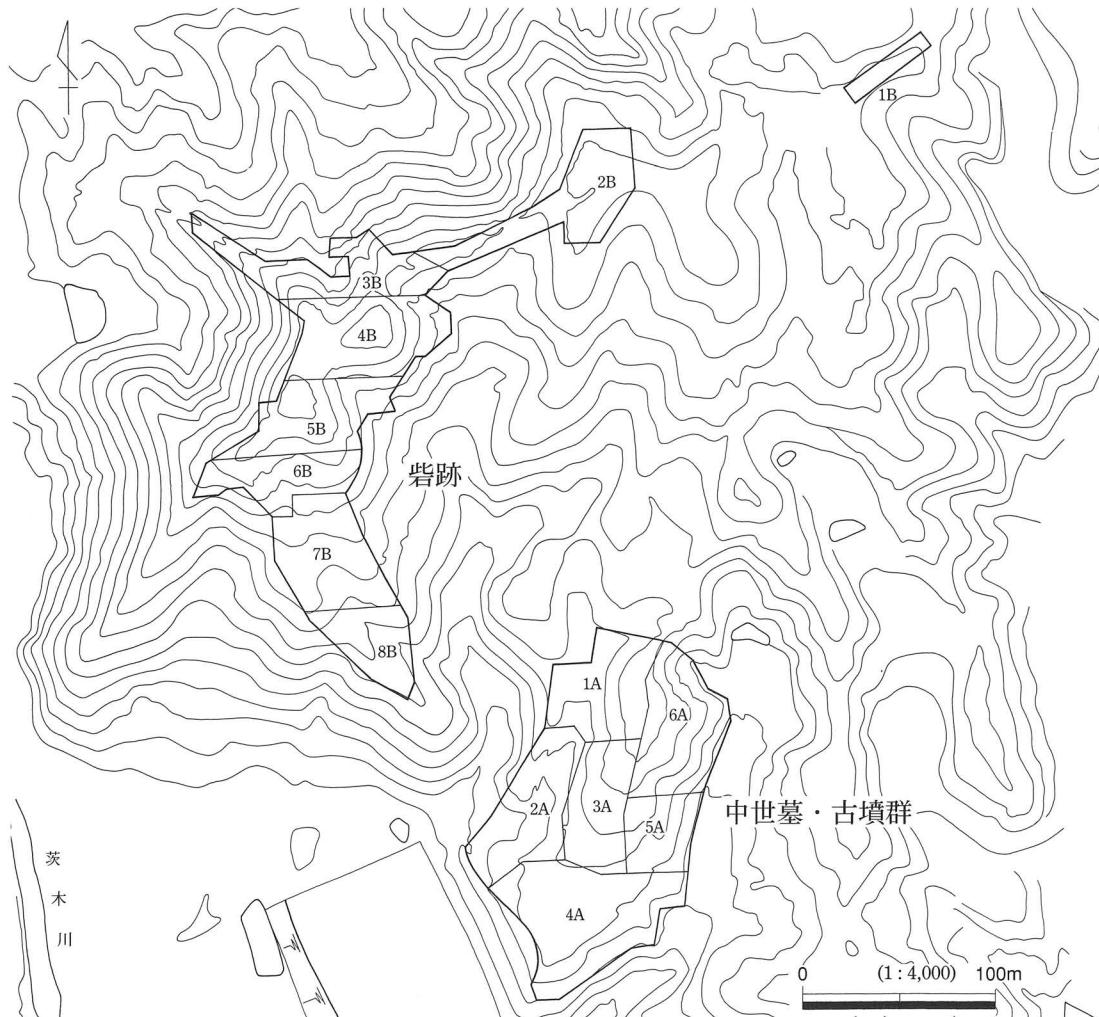


図2 佐保栗栖山砦跡・栗栖山南墳墓群調査位置図



写真1 調査風景（上）・現地説明会風景（下左）・評議員視察風景（下右）

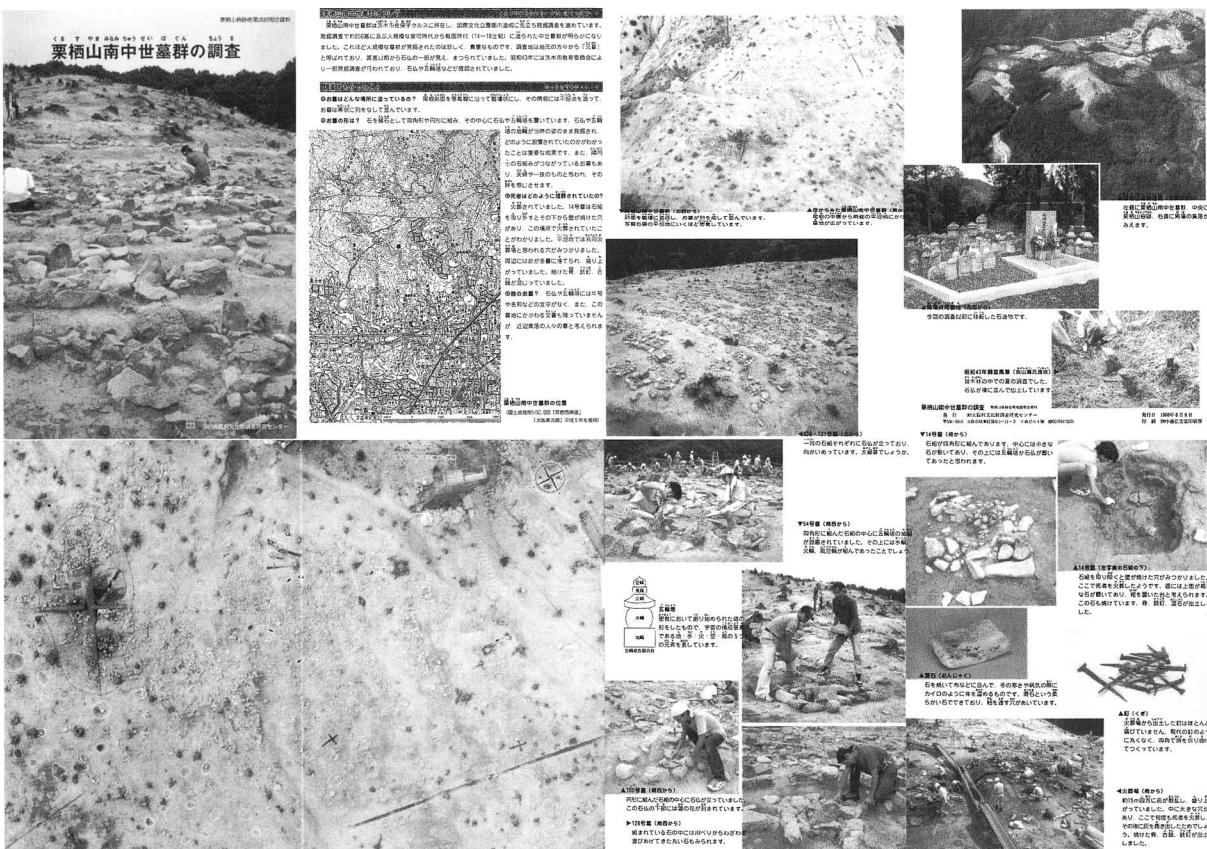


写真2 現地説明会資料

第2節 発掘調査の方法

墳墓群および砦跡の調査は、墳墓群の調査を先行し、墳墓群が1998年2月から開始され、砦跡が7月から掘削に入った。墳墓群の調査面積は、14,960m²を測り、1A～6Aトレンチに分割し調査を行った。

調査は、まず樹木を伐開し、次に腐植土・流失土を掘削し遺構面の検出を行った。

中近世墓の地上施設の石組の実測に関しては、現地測量と写真測量を行い、平面図は、1/10・1/20・1/50とそれらを縮小編纂した1/100を作成している。また、地下施設の墓壙および古墳に関しても、現地測量と写真測量を行い、平面図は、1/50とそれらを縮小編纂した1/100を作成している。なお、必要に応じて平面図・断面図を作成した。

区割りについては、国土座標を基準線とした地区割りを利用し、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準線とした。これは、国土座標軸の第IV座標系を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で絶対的な遺構の位置・遺物の出土地点を示すことができるものである。

地区割りは、図3のように第I区画から第IV区画の単位がある。第I区画は、1万分の1地形図の地区割りを使用し、東西8km×南北6kmの範囲を示す。第II区画は2500分の1地形図を使用し、東西2.0km×南北1.5kmの範囲を示す。第III区画は第II区画を東西に20分割・南北15分割し、100m四方の範囲とする。第IV区画は、第III区画を東西・南北に10分割し、10m四方の範囲としたものである。

栗栖山南墳墓群の調査範囲は、第I区画がL-5,K-5、第II区画が4,16、第III区画がB・C15,16である。

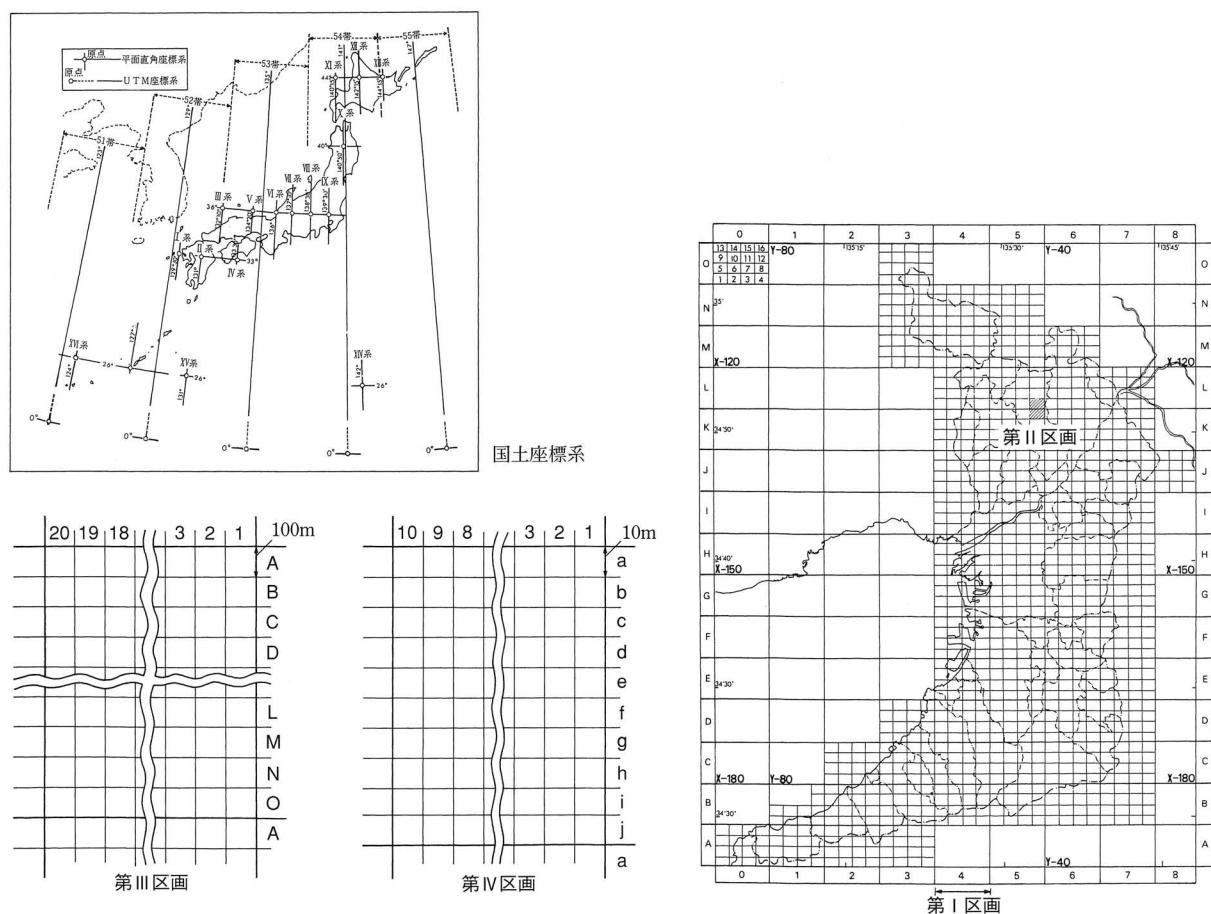


図3 國土座標系とそれによる地区割り

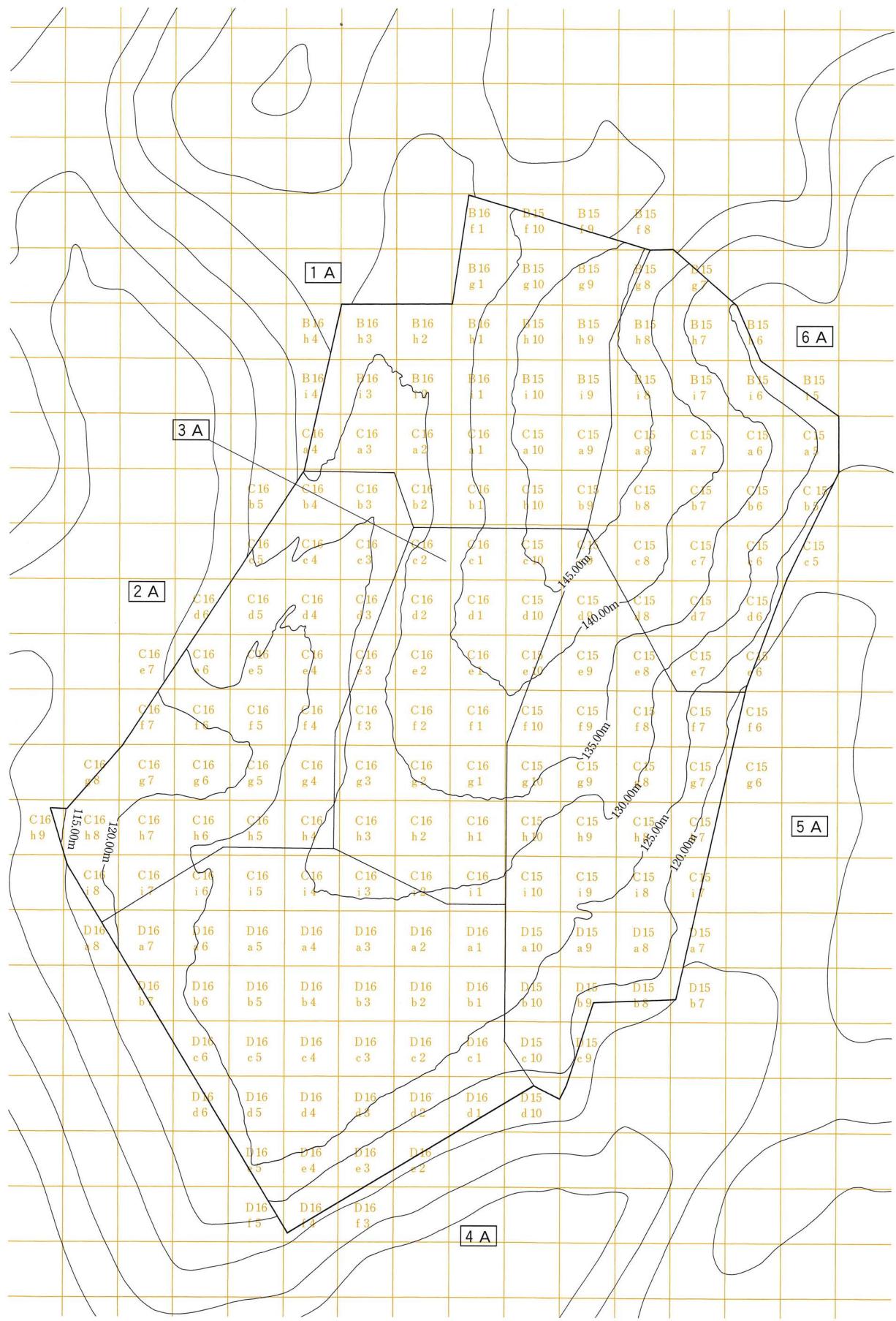


図4 調査区の地区割

第2章 位置と環境

第1節 自然的環境

栗栖山南墳墓群は、大阪府北部の茨木市佐保字クルスに所在する。当遺跡は茨木市域北部に広がる北摂山地の南端にあたり、この西側には茨木川が蛇行している。

茨木川は、その支流である勝尾寺川・佐保川を合わせて南下し、さらに三島平野に流れる安威川に合流する河川である。しかし、現在の茨木川は、1937(昭和12)年に、天井川化による氾濫を防ぐために、付け替えられたものである。茨木川の流れる北摂山地は、東を京都盆地の西端に、西に六甲山地まで、南を大阪平野に接し、北が亀岡盆地の南縁部に至る部分の山地の総称である。

北摂山地を地質学的に見ると、丹波帶と呼ばれる古生代末から中生代前半に堆積した泥岩・砂岩などから構成される部分と、中生代白亜紀頃の花崗岩類（茨木複合花崗岩体）から構成されている（図5）。

茨木複合花崗岩体は、南北2岩体に区分され、南側は能勢岩体、北側は妙見岩体と呼ばれている。当墳墓群から北側が能勢岩体で、石英閃綠岩・花崗閃綠岩・細粒斑状花崗岩等で構成されている。これらのうち主体をなす花崗閃綠岩は、粗粒花崗閃綠岩と斑状花崗閃綠岩に区分される。当調査区では、粗粒花崗閃綠岩の露頭が見られる。また、当墳墓群の中世墓の石組・石仏・古墳の石室に使用された石も、

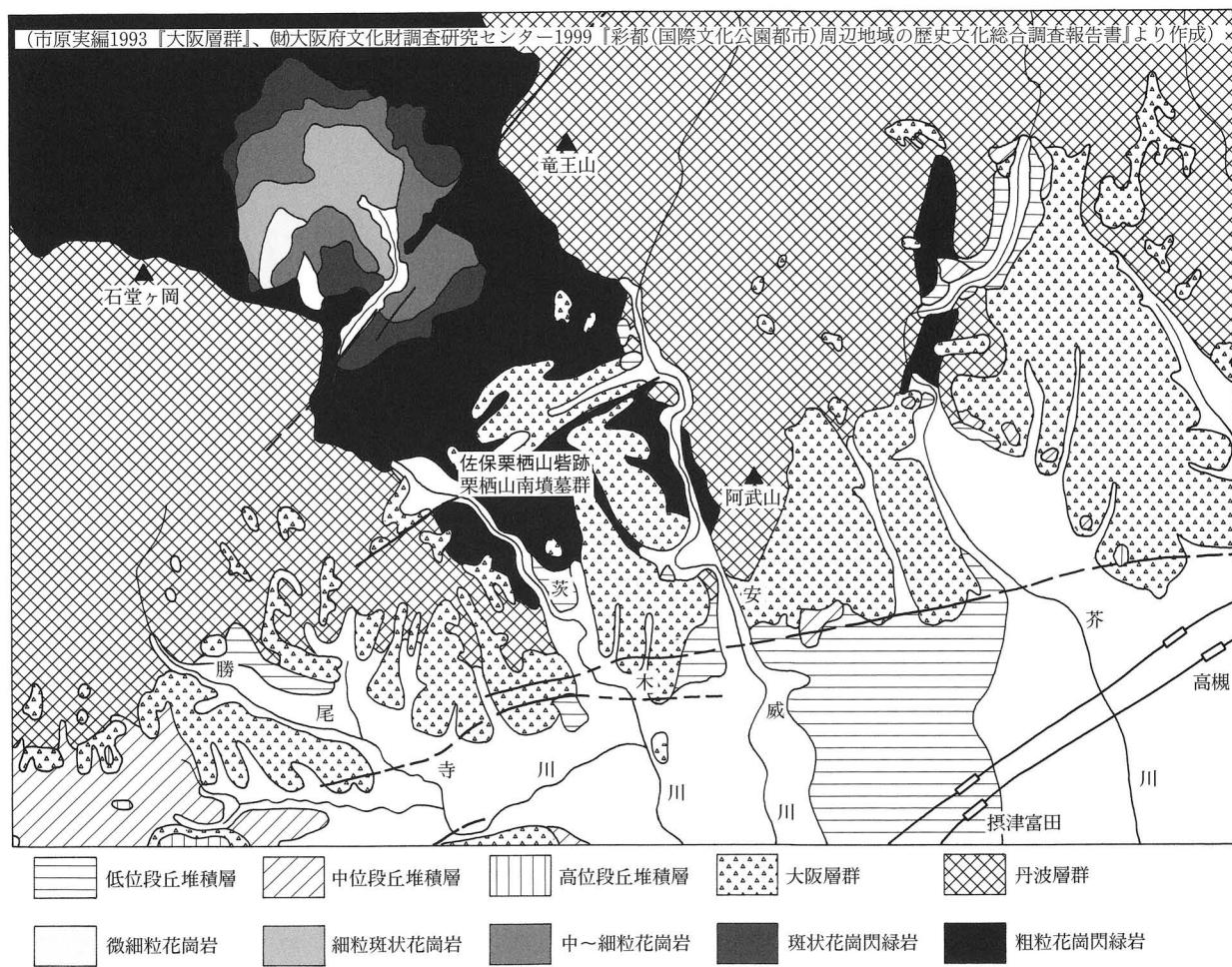


図5 周辺地質図 (縮尺1:80,000)

大部分が粗粒花崗閃綠岩および斑状花崗閃綠岩である。

古墳群・中近世墓群を中心とする墳墓を検出した調査区は、茨木川へ向かう北側から南西にやや振る尾根の頂部をやや下った中腹部に位置する。この尾根の東西両側に小規模な開析谷が走り、南端側はグランド造成のため削平を受けている。開析谷を挟んだ約300m北側の尾根には16世紀代の佐保栗栖山砦跡が存在する。また、調査地と茨木川の間は沖積層で形成されており、棚田が造成されている。尾根筋を北東に登れば国見峠に至り、丹波方面へ向かうことができる。西北西約600mには現在の馬場の集落があり、佐保、泉原へ抜け出る。なお、茨木川の下流に向かうと、福井の集落そして三島平野が広がる。

古墳群・中近世墓群が展開する尾根は、北半部では傾斜が急であり、南半部では緩やかになっており、東西方向では東に向かってやや傾斜している。7世紀の古墳群は南西から東側縁辺斜面に広がり、8～9世紀の火葬墓・焼土坑群はその西側の緩斜面を利用している。その後に営まれた中近世墓群は、尾根の中腹全域に墓域を広げるが、古墳を意識していたのであろうか、東側縁辺は疎らである。

第2節 歴史的環境

栗栖山南墳墓群は、今回の調査で7世紀に6基の古墳、8世紀の火葬墓など古代の墳墓、13世紀後半から16世紀まで続く600基に及ぶ中世墓地、17世紀から19世紀にかけての21基の墓が存在することが判明した。また、遺構は伴わないが縄文時代の石鏃や土器、弥生時代後期の土器も出土している。そこで、当墳墓群の理解を深めるために、三島地域、特に、茨木市北部を中心に周辺の歴史的環境について若干触れてみたい。

周辺における最古の人類の活動は、後期旧石器時代に遡る。津之江南・郡家今城遺跡や粟生間谷遺跡では、礫群を含む石器製作跡が検出されている。また、太田・耳原・安威・郡遺跡等では表面採集や後世の遺物包含層からナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している。

縄文海進により三島平野の大部分が海底下になり、縄文時代の遺跡は少ないが、晩期では増加する。代表的な遺跡としては、晩期の甕棺墓16基が検出された耳原遺跡、井堰・水田が検出された牟礼遺跡が挙げられる。山麓部では、西福井・太田・粟生間谷遺跡などで、後・晩期の縄文土器が出土している。

弥生時代前期になると、安満・東奈良・目垣・耳原・郡遺跡などが形成される。特に東奈良遺跡は、安満遺跡と同じく北摂地域における代表的な拠点集落であり、鋳型の出土から銅鐸をはじめとする青銅器生産を担っていたことが判明している。中期および後期になると、安威川・佐保川・勝尾寺川の両岸、丘陵部、山間部などに新たに集落が形成され、遺跡数の急増が認められ、天神山・見付山・太田・溝昨遺跡や高地性集落である石堂ヶ丘遺跡などがある。また、拠点集落である東奈良遺跡の周辺には中条小学校遺跡が、郡遺跡の周辺には中河原・倍賀・春日遺跡など小規模な集落が形成される。

当地域では、古墳時代に、約350基もの古墳が築造される。これらは、水系ごとに幾つかのグループにまとめられることから、造営主体の違いに由来すると考えられている。前期古墳は山麓部に営まれ、弁天山古墳群・安満宮山古墳・將軍山古墳・紫金山古墳・安威0、1号墳などがある。中期には、墓谷古墳群・尼ヶ谷古墳群や石山古墳・土保山古墳・番山古墳などの土室の古墳群などが築造される。

土室の南東部に三島地域最大の規模を有する太田茶臼山古墳、また後期に真の繼体天皇陵と考えられている今城塚古墳が築造される。なお、埴輪窯である新池遺跡では、両古墳に埴輪を供給していたことが判明している。後期には、横穴式石室を主体とする古墳が造られ、導入期の古墳として青松塚古墳が挙げられる。平野部には、南塚古墳・海北塚古墳・耳原古墳、横穴式木室を主体とする上寺山古墳が築



- | | | | | | |
|-------------|------------------|-------------|-----------------|---------------|----------------|
| 1. 忍頂寺 | 2. 八坂神社の石槽 | 3. 泉原城跡 | 4. 泉原遺跡 | 5. 千堤寺キリシタン遺跡 | 6. 庄ノ本遺跡 |
| 7. 佐保城跡 | 8. 佐保の石槽 | 9. 国見遺跡 | 10. 大門寺古墳群 | 11. 靈仙寺 | 13. 城山城跡 |
| 14. 下ノ口古墳群 | 15. 塚穴古墳群 | 16. 塚脇古墳群 | 17. 宮之川原遺跡 | 18. 成合窯跡群 | 20. 芝谷遺跡 |
| 21. 粟生岩阪北遺跡 | 22. 粟生岩阪北遺跡 | 23. 佐保栗栖山砦跡 | 24. 栗栖山南墳墓群 | 25. 福井北古墳群 | 27. 初田1号墳 |
| 28. 初田2号墳 | 29. 桑原古墳群 | 30. 阿武山古墳 | 31. 塚原古墳群 | 32. 殿岡神社古墳 | 34. 唐井谷古墳群 |
| 35. 尼ヶ谷古墳群 | 36. 大蔵氏遺跡 | 37. 真上遺跡 | 38. 真上古墳群 | 39. 奥天神町遺跡 | 41. 羅王山古墳 |
| 42. 紅茸山古墳群 | 43. 紅茸山遺跡 | 44. 奥坂古墳 | 45. 宿久庄北遺跡 | 46. 古曾部遺跡 | 47. 安威古墳群 |
| 48. 長ヶ淵古墳群 | 49. 安威寺跡 | 50. 新池遺跡 | 51. 前塙古墳 | 52. 闘鶴山古墳 | 54. 弁天山古墳群 |
| 55. 岡本山古墓群 | 56. 郡家車塚古墳 | 57. 上野遺跡 | 58. 郡家本町遺跡 | 59. 慈願寺山1号墳 | 61. 慈願寺山古墳群 |
| 62. 真上古墳 | 63. 慈願寺山2号墳 | 64. 天神山遺跡 | 65. 伊勢寺古墳 | 66. 中将塙古墳 | 68. 星神車塚古墳 |
| 69. 粟生間谷遺跡 | 70. 徳大寺遺跡 | 71. 庄田遺跡 | 72. 宿久庄西遺跡 | 73. 宿久庄遺跡 | 75. 紫金山古墳 |
| 76. 西福井遺跡 | 77. 青松塚古墳 | 78. 南塙古墳 | 79. 海北塙北方遺跡 | 80. 海北塙古墳 | 81. 真龍寺古墳群 |
| 83. 安威城跡 | 84. 安威遺跡 | 85. 耳原古墳 | 86. 鼻摺古墳(耳原方形墳) | 87. 上土室遺跡 | 88. 番山古墳 |
| 89. 土保山古墳 | 90. 土室遺跡 | 91. 石山古墳 | 92. 二子山古墳 | 94. 太田茶臼山古墳 | 99. (現「繼体天皇陵」) |
| 95. ツゲノ古墳群 | 96. 水室塚古墳 | 97. 今城塚古墳 | 98. 郡家川西遺跡 | 100. 郡家今城遺跡 | 101. 川西古墳群 |
| 102. 芥川遺跡 | 103. 安満遺跡 | 104. 耳原遺跡 | 105. 太田城跡 | 107. 太田廃寺跡 | 108. 津之江南遺跡 |
| 109. 高槻城跡 | 110. 西国街道 | 111. 郡山古墳 | 112. 茶臼塚(馬塚)古墳 | 113. 中河原遺跡 | 114. 郡山城跡 |
| 115. 郡神社古墳 | 116. 郡山古墳 | 117. 地藏池南遺跡 | 118. 上穂積山古墳 | 120. 上穂精神社西古墳 | 127. 倍賀遺跡 |
| 121. 穂積庵寺跡 | 122. 見付山古墳 | 123. 見付山遺跡 | 119. 弁天山遺跡 | 126. 春日遺跡 | 133. 溝昨遺跡 |
| 128. 総持寺遺跡 | 129. 普門寺城(富田寺内町) | 130. 茨木城跡 | 124. 上寺山古墳 | 125. 郡遺跡 | 132. 牟礼遺跡 |
| 134. 鮎川遺跡 | 135. 芝生遺跡 | 136. 大塚西遺跡 | 131. 茨木遺跡 | 138. 東奈良遺跡 | 139. 目垣遺跡 |

図6 周辺主要遺跡分布図 (縮尺1:60,000)

造される。さらに、山麓部には塚原古墳群・塚脇古墳群・塚穴古墳群・慈願寺古墳群・梶原古墳群・新屋古墳群・安威古墳群・將軍山古墳群・長ヶ淵古墳群・福井北古墳群・真龍寺古墳群などの群集墳が形成される。その後、終末期古墳としては初田1・2号墳、中臣鎌足の墓の可能性も指摘されている阿武山古墳が挙げられる。

古代には律令が施行され、高槻市が嶋上郡、茨木市が嶋下郡に相当する。嶋上郡の郡衙としては、郡家川西遺跡が確認されている。嶋下郡の郡衙は、郡遺跡あたりが想定されているが、確定されていない。

この地域は、穂積氏、中臣氏系である中臣太田連・中臣藍連・三宅氏などの有力氏族の本拠地だと考えられている。穂積廃寺・太田廃寺・三宅廃寺などの寺院が建立されているが、先の有力氏族との関係が言わされている。岡本山古墓群では、奈良・平安時代の火葬墓、木棺墓が検出されている。平安時代には、勝尾寺・忍頂寺・総持寺が建立されている。

中世になると、摂関家領およびその氏寺・氏神である興福寺領・春日社領の莊園が多く經營され、福井庄・安井庄・沢良宣庄・新屋庄・溝杭庄・垂水牧などがあった。摂関家領以外では、仁和寺領忍頂寺辺五ヶ庄・造酒司領太田保・長講堂領溝杭庄・総持寺領寺辺領・中宮式領宿久庄などがある。仁和寺領忍頂寺辺五ヶ庄は、忍頂寺を中心に大門寺・大岩・佐保・泉原・錢原・音羽などを含む茨木市域北部にある。当墳墓群が所在する佐保村は、「仁和寺文書」によると佐保村と佐保村有安名に分割して支配されている。また、両者の明応～永正（1492～1520）年間での年貢米を見ると、佐保村が3～9石弱、有安名が33～50石と後者のほうが多く、五ヶ庄でも他の名と比べかなり有力な名であったようである。

なお、各地で聖や鎌倉新仏教による活動が盛んで庶民層に仏教が浸透しつつある時でもあった。当地では、西大寺叡尊がその晩年弘安6、7（1283.4）年に忍頂寺を訪れ受戒を行っている。また、蓮如が越前吉崎を退去し摂津・河内国に入った文明7（1475）年以降、茨木地域では真宗寺院が増加した。

中世の集落としては、宮田・郡・総持寺・玉櫛・粟生間谷遺跡などが挙げられる。中世墓としては、岡本山古墓群があげられ、鎌倉時代の土壙墓・火葬墓約400基および火葬場、室町時代の石組を有する火葬墓等が検出されている。箕面市小畑遺跡では、13世紀後半から15世紀の石組を有する主に火葬墓が201基検出されている。当地域は石造品が多く残されているところでもあり、佐保・八坂神社などの石槽や、忍頂寺の五輪塔などが挙げられる。中世末期には、戦乱が相次ぎ、三島地域にも多くの城が築かれる。山間部には、芥川山城・泉原城・佐保城・福井城・安威城、平野部には今城山城・高槻城・太田城・普門寺城・茨木城などが挙げられる。芥川山城では細川春元、三好長慶、織田信長等といった名が記載された文献資料があり、非常に重要な城であったと考えられている。当墳墓群に隣接する佐保栗栖山砦跡も、時期的、地域的にもこれらの武将達との関係は無視できないものであろう。また、高槻城は、キリスト教大名の高山右近が城主であったこともあり、29基のキリスト教徒が埋葬されていると思われる木棺墓も検出されている。

近世では、千提寺キリスト教徒遺跡や下音羽などで、キリスト教徒墓碑などのキリスト教徒関係の遺物が発見されている。

参考・引用文献

茨木市史編纂委員会 1969 『茨木市史』

茨木市教育委員会 1998 『茨木の史跡』

高槻市史編纂委員会 1977 『高槻市史』第1巻本編 I

高槻市教育委員会 1993 『新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告第17冊

第3章 調査の概要

7世紀から19世紀に至る様々な様相の墳墓を検出した栗栖山南墳墓群の報告の前に、検出された遺構・遺物についての概要を記しておきたい。

第1節 基本層序

当墳墓群は、先述した様に調査区を6分割にして発掘調査を行っている。そのうち、古墳時代から近世に至る一大墳墓群が存在するのは、南へ伸びる尾根の中腹で、3Aトレンチ南半部・4Aトレンチに相当する。この北側は尾根の頂部で、1Aトレンチ東側・3Aトレンチ北半部に相当する。尾根の西側は南西に伸びる小規模な開析谷で、1Aトレンチ西側・2Aトレンチに相当する。尾根の東側は、東への傾斜面で、5A・6Aトレンチに相当する。当地区の基本層序は、大略的に共通しており、腐植土を主体とした表土が第1層、遺構検出面である地山に至るまでの包含層および流出土層が第2層である。

以下、墳墓群が展開する3A・4Aトレンチについて詳述する。

3A・4Aトレンチの基本層序において、第2層を調査進行の関係上便宜的に捉えており、ここではその理由を記述しておきたい。その際に、調査進行と密接な関係があるため、調査過程の概略と合わせて述べる。

3A・4Aトレンチの調査は、大きく3段階に分かれる。

第1段階では、すでに一部露出していた中世墓の石組の全貌を検出するために、第1層を除去した。その結果、石組および炭盛土、石組が検出されなかった場所では、墓壙を検出した。

第2段階では、その石組の下部の墓壙の検出を行うために、石組の除去を行った。当初、この作業は、個々に石組を除去し、その下部の墓壙を検出しようと試みた。しかし、石組の下部に墓壙を有しない墓や、石組と墓壙が整合しない墓もあること等の多様な状況が生じたため、一度全ての石組を除去した後に墓壙を検出する方法を選択した。その際に、石組を除去してから墓壙検出面まで10~20cmの土が部分的に堆積していた。この土は、墓壙と石組の間に盛土があったか、または両者に時間差が存在したことを意味する。この堆積土を便宜上、第2層として遺物の取り上げを行った。

なお、この段階で、当初中世墓の石組と認識していたものの中に、実際には古墳の石室と判明したものがあった。また、墓壙検出時に古墳の区画溝も検出した。この様に、古墳と中世墓をほぼ同一面で検出している。

第3段階では、再精査を行い、古墳の全貌を検出し、調査を行った。

以上の様に、3A・4Aトレンチでは中世墓の墓壙および古墳を検出するまでに除去した土を第2層と認識した。

第2節 古墳群・古代墓

古墳群は南へ伸びる尾根の中腹部の南端から北東端に位置する。古墳は6基で、墳丘盛土を5・6号墳の一部に残存しているのみであった。また、石室は基底石から2・3段目の一部を残存し、後世の搅乱を受けている。各古墳は、一定の間隔を開け存在するが、1号墳と5号墳の間隔が特に狭いのが注目される。なお、6号墳は135~138mと最高所で傾斜変化が非常に急なところに立地している。



図7 調査区全体図

1号墳は、「コ」字形の区画溝をもち、横穴式石室を埋葬施設とする。石室は、羨道を有さないものと見られ、床面には角礫が敷きつめられていた。石室内からは鉄滓が3点出土している。

2号墳は、小石室を埋葬施設とする。区画溝は検出されなかった。石室は当古墳群では最小のもので、床面に土を充填した後、棺台として2石配する。残存している石室内は搅乱の痕跡がなく、鉄釘が出土している。しかし、完形の鉄釘がなく、その配置からは木棺等の復元が難しい。

3号墳は、不整な円形の区画溝をもち、横穴式石室を埋葬施設とする。石室は両袖を有し、奥壁は1石で構成される。石室床面からは、鉄釘が出土しており、木棺の存在が指摘できる。また、鉄鏃も出土している。床面の南半部には浅い溝があり、土師器の破片が出土している。

4号墳は、墓壙内を搅乱されているが、石が抜かれた痕跡から埋葬施設が横穴式石室であったと思われる。区画溝は、不整な「コ」字形を呈す。石室は、袖の有無が不明である。また、墓壙の南端に列石が伸びるようで、本来開口部にとりつくものであったであろう。鉄釘の出土から、この古墳も木棺が据えられていたと思われる。

5号墳は、「コ」字形の区画溝をもち、横穴式石室を埋葬施設とする。石室は、わずかであるが両袖を有し、玄室と羨道の境に若干位置がずれるが樋石と思われるものがある。開口部には東西に展開する列石が存在する。石室内堆積土の下層には炭層があり、後世の再利用だと考えられる。

6号墳は、やや台形に開く「コ」字形の区画溝をもち、横穴式石室を埋葬施設とする。地山を成形し南辺に段を造りだし、内側に盛土を施し、前面から見ると4段の墳丘であるように見える。2・3段目は一部列石により画されている。石室は両袖を有し、床面が川原石等で敷きつめられている。小石を除去すると、ほぼ玄室中央部に1石の角礫が埋め込まれていた。石室の裏込めは、花崗岩を粉碎した土と花崗岩バイラン土である細粒砂を交互に積み重ね版築状にしていた。鉄釘の出土から木棺の存在が指摘できる。

各古墳の石室や区画溝から、須恵器・土師器が出土しており、大きく7世紀後半という年代を与えることができる。また、3・5号墳の区画溝から8～9世紀の遺物が出土しているところもあり、この頃にはまだ溝として意識されていたと思われる。3・4・6号墳の石室から中世の土器・陶磁器・石仏・錢貨が出土しており、中世墓の段階に何らかの石室の再利用があったものと思われる。また、1号墳石室の一部が石組として再利用されており、石仏が立てられていた可能性がある。

木棺墓1は、床面に角礫が敷きつめられ、鉄釘を使用した木棺が据えられている。土器が出土していないため正確な時期は不明である。しかしながら、鉄釘が6号墳のものと酷似しているので、古墳に準ずる時期と思われる。なお、当墳墓群においてその構造・位置関係からは、中世墓とは考え難い。

確実な古代墓としては、火葬墓1が挙げられる。蔵骨器として、土師器甕と須恵器壺蓋のセットがある。甕に土を充填してから焼骨を納めたようである。8世紀前半の年代と思われる。

その他、7基の焼土坑が検出されている。これらは、床および壁面が被熱しており、焼骨を含まない炭層をもつものが多い。焼土坑5には、9世紀後半の灰釉陶器瓶子が出土しているが、他には遺物の出土がない。だが、その分布、主軸方向、規模からすると、中世の火葬墓とは相違があることから、古代に近い時期を考えたい。しかしながら、これらが直接火葬墓と関連するものであるかは一考の余地がある。なお、炭が充填された土坑1・2も同様の理由で古代の時期と考えたい。さらに、尾根の中央部一帯に、8～9世紀の土師器・須恵器が多く出土している。蔵骨器と考えられる須恵器壺、土師器甕も数個出土しており、数基の火葬墓があった可能性は高い。

第3節 中近世墓群

中近世墓群は、古墳群・古代墓が存在する同一の尾根の中腹部に所在するが、それらとわずかに重複して尾根の中央から西半に広がる。検出した遺構は、墓600余基、火葬場7基である。墓の大多数からは遺物が出土しておらず、個々の墓の時期の確定が困難であるため、中近世墓群という名称を採用する。

当墳墓群では、何を以て墓とするのかが困難であるため、検出された遺構は基本的に墓関係のものと考え、便宜的に墓と火葬場の2種の用語による呼称を行っている。

墓は石組と墓壙により構成され、石組の下部に墓壙が対応する墓、石組のみの墓、墓壙のみの墓という組み合わせが想定できる。石組には、五輪塔・石仏が据えられたまま検出されたものもある。馬場共同墓地移転分も含め、五輪塔が推定50基、石仏が約400基以上、使用されたと考えられる。

葬法には、墓壙の構造・形態、出土人骨の状態から土葬と火葬が考えられる。火葬の痕跡は、焼骨、墓壙の床面・壁面の被熱痕跡、埋土中の炭が相当し、一方、土葬の痕跡は、木質を残す鉄釘や火葬の痕跡を持たないものである。この判断については、第7章 第7節で詳述する。

火葬墓には、被熱、炭、焼骨の状況から3分類でき、269基検出されている。

火葬墓A類は、墓壙内に被熱痕跡があるので、荼毘を行ったと思われる墓で、196基を数える。荼毘後、一度、墓壙内の片付けを行い、拾骨したと考えられる。基本的に一度の火葬と考えられる。約半数の墓は石組を有しており、本来、石組を有する墓であったと思われる。墓壙内の遺物は微量であるが、土師器皿・温石・備前壺・錢貨・鉄釘がある。時期的には主に14～15世紀にかけての墓と思われる。

火葬墓B類は、別の場所で荼毘を行い、焼骨のみが埋納される墓で、29基を数える。蔵骨器をもつ墓もある。蔵骨器は瓦質羽釜で14世紀後半から15世紀前半に相当する。墓壙内からは蔵骨器以外の遺物が出土していない。その他、蔵骨器を持たない墓の時期は断言できない。石組をもつ墓である。

火葬墓C類は、焼骨や多量の炭が検出されるが、A類かB類かどうかが断定できない墓で、44基を数える。墓壙内の遺物はほとんど出土しておらず、時期を断定できないが、A類、B類からすると14～15世紀代の可能性が高い。石組を有する墓もあるが、全てに存在したかは不明である。

土葬墓には、墓壙の規模・構造・主軸の方向から2分類でき、233基を数える。

土葬墓A類は、墓壙の主軸が概ね南北を指向する墓で、212基を数える。墓壙の平面形・深さ・規模等から屈葬、横臥屈葬、座葬等の伸展葬以外の葬法が考えられる。石組を有する墓と、有しない墓があると思われる。墓壙内の遺物は微量であるが、土師器皿・古瀬戸小皿・錢貨・短刀・鳥帽子・鉄釘がある。13世紀の終わりから16世紀にかけての墓と思われる。

土葬墓B類は、墓壙の主軸が概ね東西を指向する墓で21基を数える。墓壙の平面が長方形で、規模からすると伸展葬で、ほとんどは鉄釘を使用した木棺が埋葬されたようである。墓壙内の遺物は、錢貨・波佐見磁器碗・鉄釘がある。17～19世紀にかけての墓である。

火葬場は、その構造・規模から、一度ではなく複数回の荼毘が行われた遺構である。火葬場一帯は、大量の焼骨を含む炭層で盛り上がっていた。この炭盛土は、火葬場の排土が徐々に形成されていったものと思われる。ここからは、被熱した鉄釘等の鉄製品・錢貨、土師器皿・陶磁器等が出土している。土器は、16世紀代を中心としている。

以上が、中近世墓群として検出した遺構であるが、ここでは、これらの墓に関する遺構が複雑に絡み合い、様々な様相を醸し出していることを指摘するのみにしておく。

第4章 古墳群および古代墳墓の調査

第1節 立地 (図8、写真図版4.6.7)

古墳群は、先述のように北側から南西にやや振る尾根の頂部をやや下った中腹部に存在する。尾根の頂部は標高約150m付近で、尾根南裾との標高差は約50mを測る。古墳は尾根の南西から東側縁辺部の南斜面にかけて、6基が連なって存在する。火葬墓1や焼土坑といった古代の火葬関連の遺構は、古墳群が展開する西側の緩斜面に分布する。その後、営まれた中近世墓群は、古墳が展開する縁辺部よりもさらに西側に広がりを見せる。以下、検出された古墳および古代墓の立地・位置関係を主に概観する。

尾根南端には3号墳、その約10m北東側に4号墳が位置する。これら3・4号墳は古墳群内では一番標高が低く、比較的緩やかな斜面に築かれている。3号墳はやや不整な円形の区画溝を持ち、横穴式石室を主体部とする。4号墳はコーナーがやや丸みがある区画溝を持ち、石室の石こそ残存していなかつたが、抜き取り穴から横穴式石室が推定できる。

4号墳の約10m北東には5号墳が位置する。この5号墳は尾根東側縁辺崖の東へ下る斜面の傾斜変換点付近に築かれている。3・4号墳に比べると、傾斜がやや強い南斜面に築かれている。区画溝は4号墳と比較するとコーナーがしっかりとした方形を呈し、主体部は横穴式石室であるが3・4号墳に比べると規模がやや小さいものである。

5号墳の区画溝の約2m北には1号墳の区画溝が迫っており、他の古墳と比べるとかなり近接した位置関係である。1号墳の区画溝も方形を呈するが、南端がやや窄まる形態を見せる。主体部は横穴式石室であるが、一番規模が小さく床面に角礫を敷いていることが特徴と言える。

1号墳の約5m北西に位置する2号墳であるが、主体部を古墳群唯一の小石室とする。主軸の方向はほぼ南北を指し1号墳と共通している。この古墳の約5m北には、木棺墓1が位置する。この木棺墓1は、1号墳のように床面に角礫を敷いていること、また6号墳出土鉄釘と類似していることから古墳群に準ずる時期の遺構であると捉えている。

古墳群の最北端の最高所に位置する6号墳は、最南端の3号墳との標高差が約10mを測る。東西に幅が狭まった尾根筋の頂部から南へ下る急な斜面の変換点に築かれており、古墳の南北での比高差は約4mを測る。墳丘は斜面を利用し3段に築造し、さらにその前面に1段のテラスを設けている。

これらの古墳に使用された石材は、基本的に当調査区でも露頭が見られる粗粒花崗閃緑岩である。また、ほとんどの古墳は後世の搅乱を受けているが、3号墳の区画溝、4・6号墳の石室から須恵器壺Gが数点出土している。これらから考えると、おおむね7世紀後半の年代を考えることができる。

古墳に続く時期の墓関係の遺構としては、8～9世紀の火葬墓および焼土坑を検出している。火葬墓1は、蔵骨器として土師器甕と須恵器壺蓋を用いたもので、3号墳の北西約10mに位置する。焼土坑は7基を数え、遺構の性格としては、荼毘を行った火葬施設の可能性が考えられる。これら焼土坑は尾根中腹の中央部に集中している。この範囲から南側の古墳にかけては、8～9世紀の土器が多く出土している。この土器の出土状況から考えると、本来は尾根の中央部が現状よりもやや高まっており、中世時に造成を受けてしまった可能性も考えられる。出土土器には、蔵骨器とされる須恵器壺Aもあることから、火葬墓がさらに数基あったことが指摘できる。

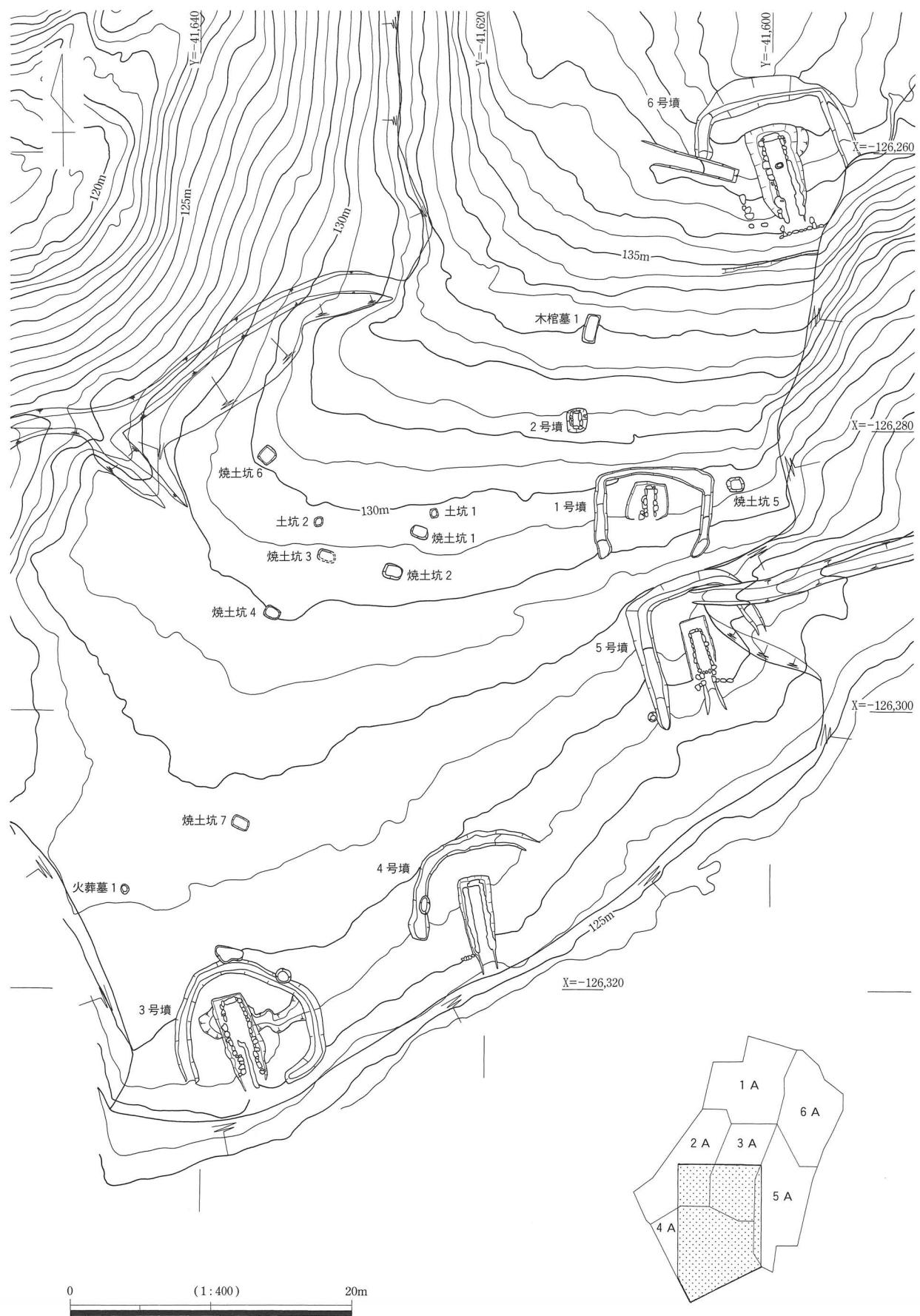


図8 古墳群・古代墓全体図

第2節 古墳

1. 1号墳（図9～12、写真図版8～10）

1号墳は、尾根東端斜面に位置し、5号墳の区画溝北端より約2m北のところまで区画溝がおよぶ。標高は石室床面で129.4mを測る。当古墳群において、最も近接した位置関係にある5号墳との石室奥壁間の距離は約10m、石室床面の標高差は約2.6mを測る。

区画溝は、南側に開く「コ」の字形である。北辺は、やや弓なりに彎曲し、東西辺の南端部がやや内彎傾向でその形状を納める。この溝は、幅0.5～1.0mを測り、特に北東コーナー部分が最も広く、北西コーナー部分と北辺中心部が最も狭い形状をなしている。深さは、20～30cmを測り、特に東西両端部および北東コーナーは、比較的浅くなっている。

区画溝の北東コーナー部分では、炭が検出面から約5cmの厚さで広がっており、ここから頭部の欠損した鉄釘3本、刀子ミニチュア（図44-8）が出土した。この炭は区画溝の埋没後に形成されており、鉄釘や刀子ミニチュアの特徴から、中世より古いと考えられる。このことから、古墳築造後から中世までの時期の所産と位置づけられ、ここから2m東にある焼土坑5と何らかの関係が考えられる。

墳丘は、後世の削平のため盛土が検出されなかつたが、区画溝の形状から南北約6m、東西約7mの方形の平面形態をなす。しかし、区画溝内側の範囲全体に盛土が施されていたかどうかは不明である。

墓壙は、南北が2.5m、東西が北側で2.0m、南側で2.9mを測る南西側がやや開く方形をなし、墳丘

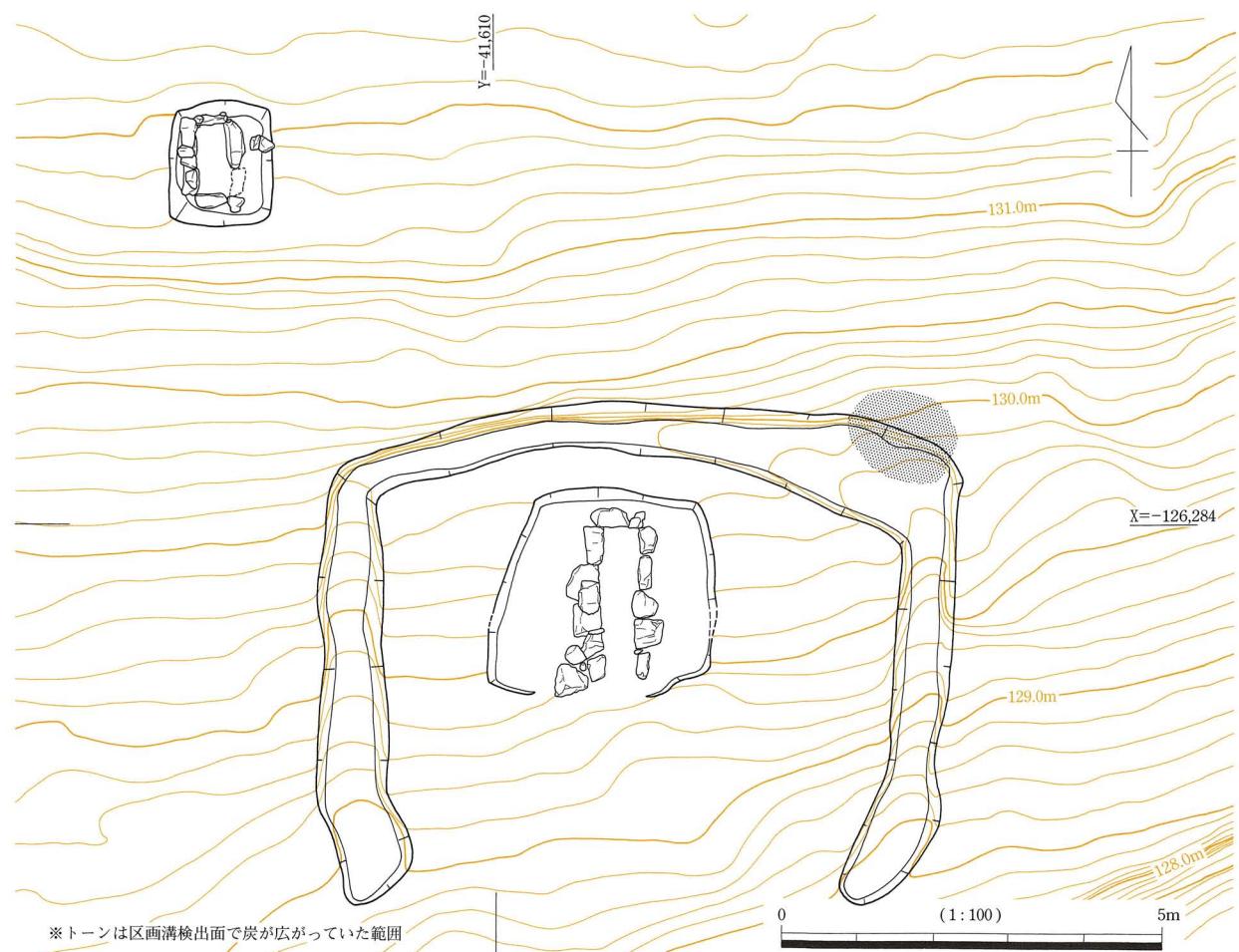


図9 1号墳・2号墳全体図

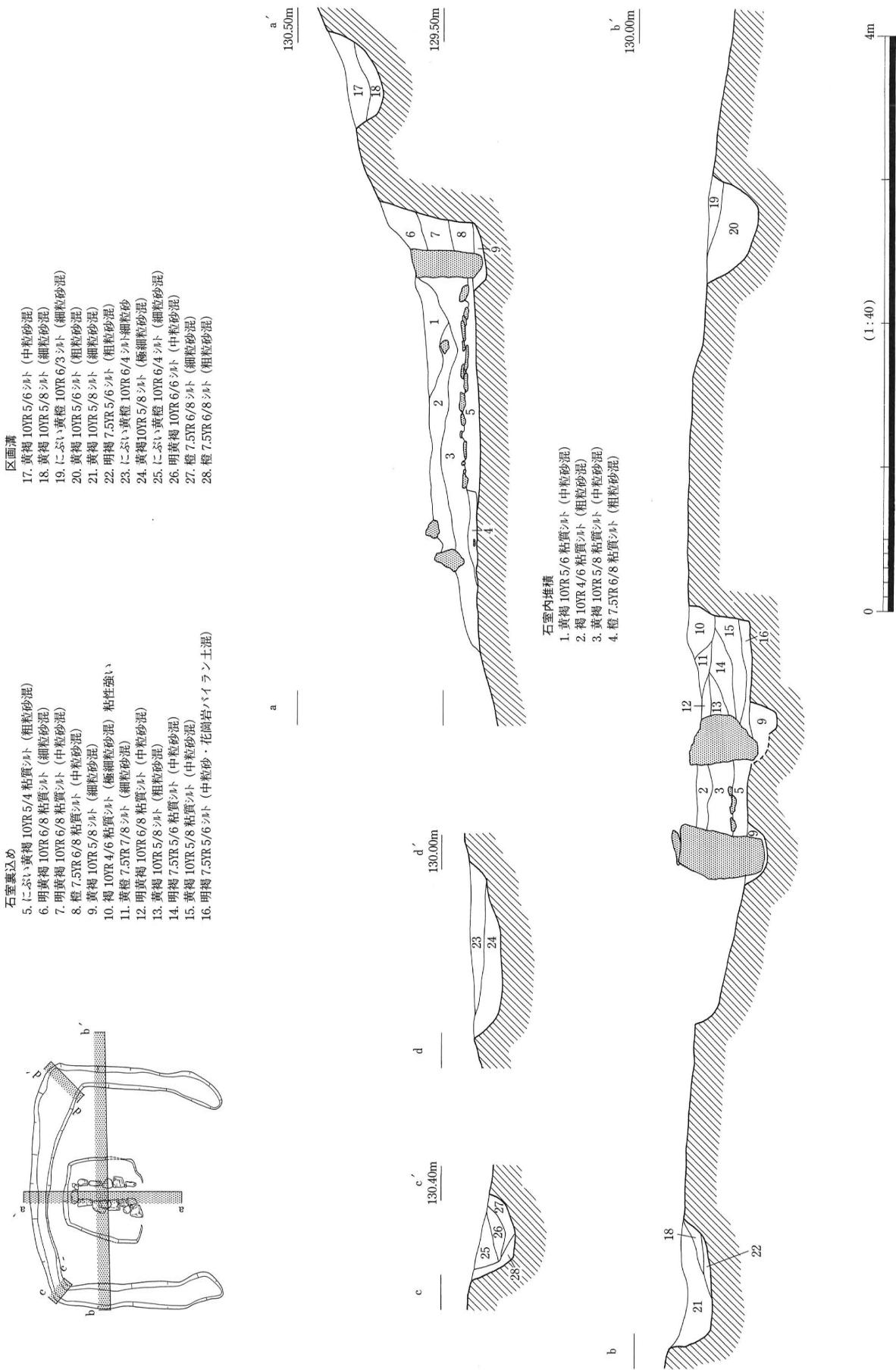


図10 1号墳墳丘・区画溝断面図

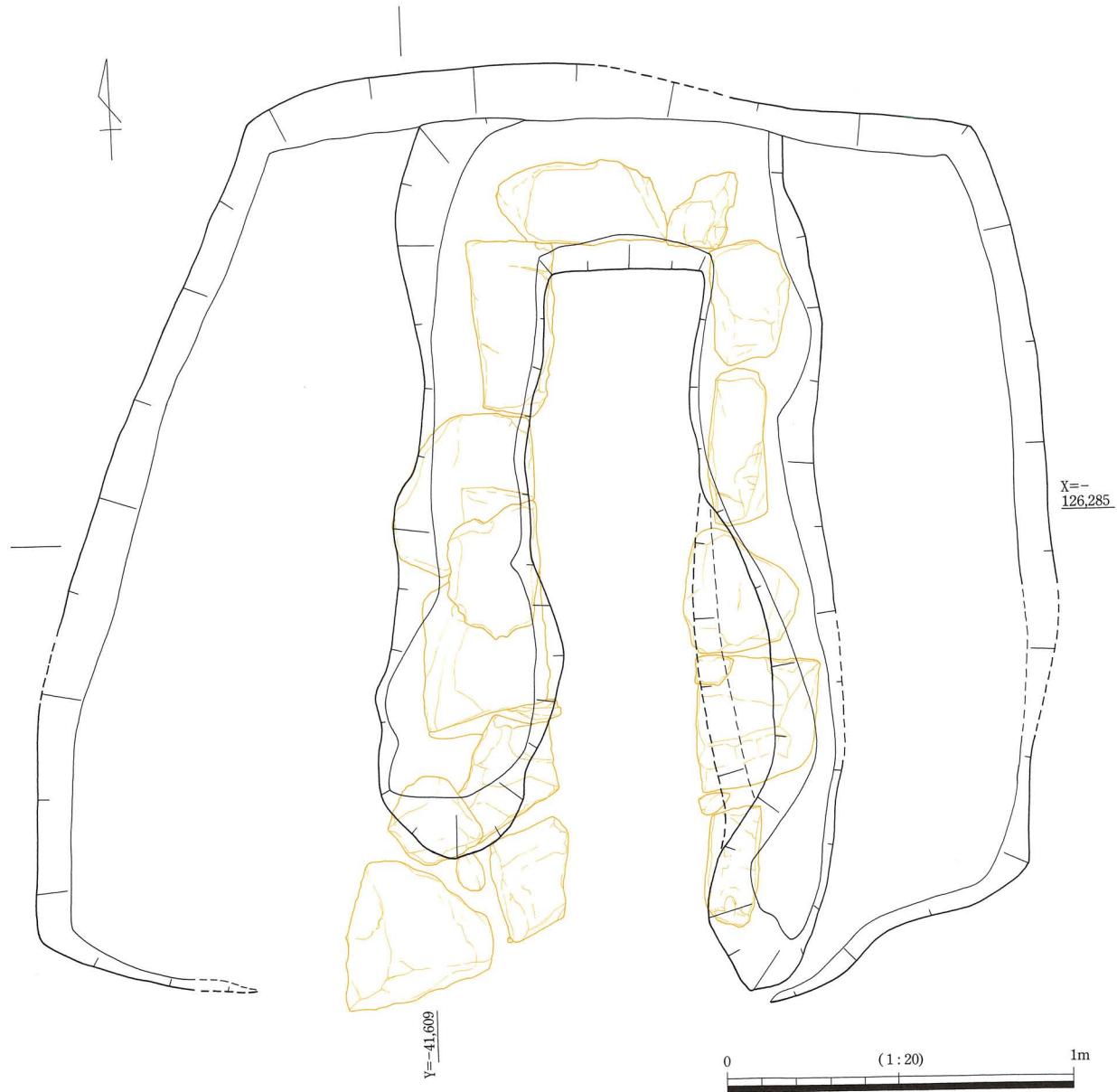


図11 1号墳墓壙、石室平面図

の北辺より約1m南側の奥まったところから掘り込まれている。また、墳丘西端から2.0～2.5m、東端から2.9mの位置にあり、墳丘の中心線よりやや西側に寄っている。残存する最深部は0.8mを測り、東半底面が平坦であるのに対して、西半底面が墓壙壁面に向け徐々に浅くなっている。

石室は、当初、中近世墓の石組と認識して調査を行っており、1～2段分を取り外した後に横穴式石室として再認識したため、本来は少なくとも石が3段以上残存していた。よって、石室の記述および図版は古墳として認識した後の現状である。

石室は、全長1.99m、幅0.50mを測る無袖の横穴式石室である。また、石室側壁と墓壙肩部とは、東西両側で比較的広い間隔を有し、その最も広い箇所で約1.0m、狭い箇所でも約0.7mを測り、石室規模に比較して、墓壙が大きいという特徴を有する。

奥壁は、東西に大小2基の基底石を検出した。西側には、大きい方の基底石が据えられ、幅50cm、高さ53cm、厚さ20cmを測り、東側には、小さい方の基底石が据えられ、幅25cm、高さ45cm、厚さ20cmを測る。これらの奥壁基底石は、東西2基ともに整形された平滑な面を石室内側に向か、石室床面に対し

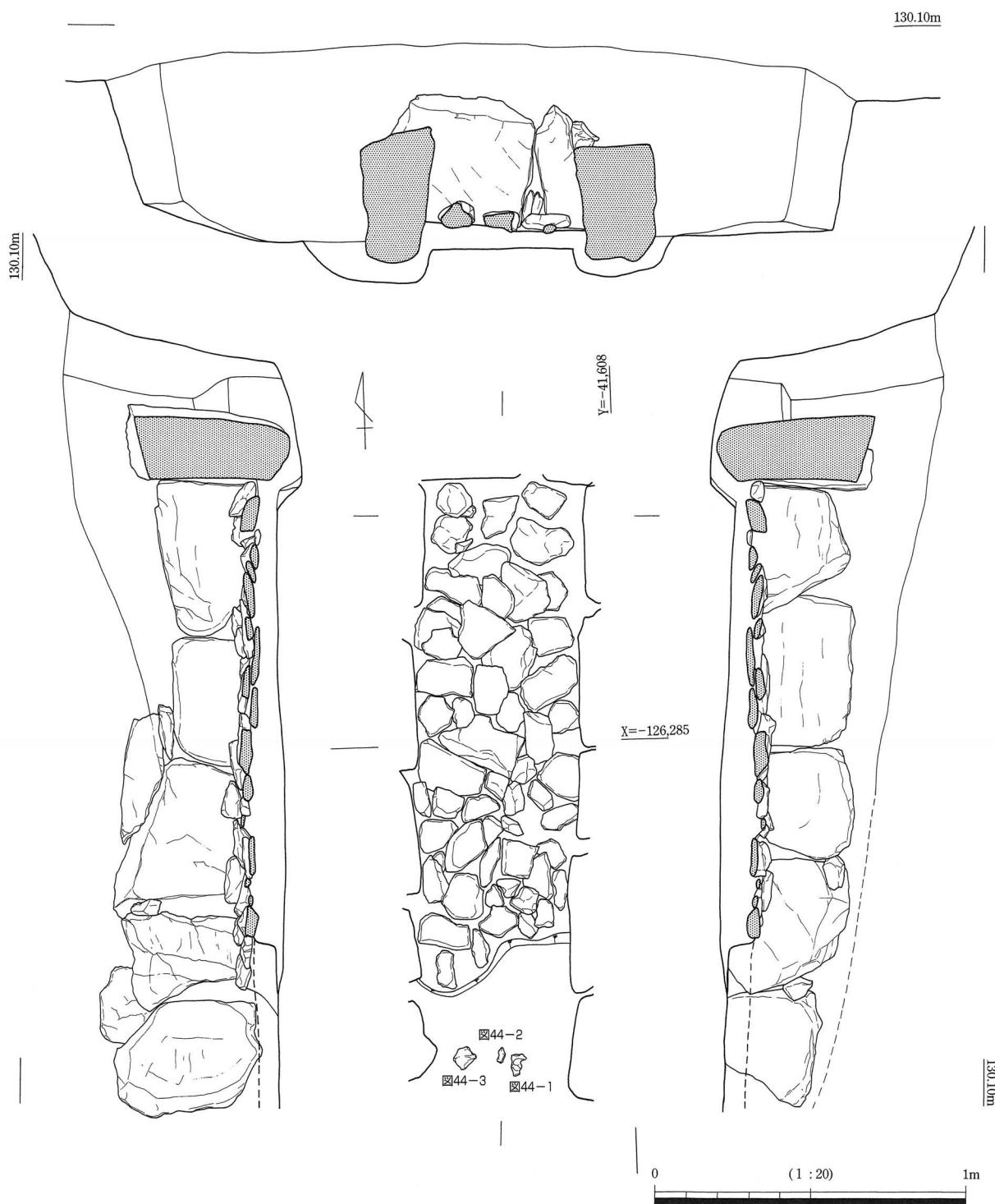


図12 1号墳石室平面・立面図

ほぼ垂直に据えられ、2石の間隔が床面でわずかに開いており、その空間に小石が2個詰められていた。側壁は、東西ともに基底石総てが検出され、一部で基底石の上に積まれた2段目の石も検出された。基底石はそれぞれ5基で構成され、石室内側に向けやや傾いている。奥壁に接する東西両側壁は、その北端部が奥壁の内面に接するように据えられている。また、西側壁開口部側2基と、東側壁開口部側1基の石が、縦位に据えられ、横位に据えられている他の側壁基底石とは構築方法が異なる。特に東側壁では、それぞれの基底石がほぼ同じ大きさに揃っている。なお、奥壁と側壁の石の大きさに余り差異が

見いだせず、側壁の厚みも一定していないことから、6号墳の様に意図的に石材を選定したとは、考えられない。

基底石の上に積まれた2段目の石は、西側壁の一部で検出した。この2段目の石は、図化できなかつたものもあるが、偏平な石が積まれている。

西側開口部では、側壁の石列から石室外に向か、突出した石が1基検出された。この石を起点にして、石室外へ列石が続く可能性も考えられるが、4・5号墳で見られる列石とは異なり、石室の裏込め埋土中、比較的高いレベルに存在する。このため、現時点では列石の起点となる石であるかどうかは不明である。しかし、この石の開口部側は、石室南端の開口部ラインと揃うことから、開口部を強く意識したものであると考えられる。このことは、開口部の石を縦位に置いていることからも窺われる。

各基底石は、石室の形状に合わせて深さ約15cmの溝状に掘り窪めてから据えられている。この技法は当古墳群の他の古墳でも見られ、一つの共通する特徴と言えよう。

石室床面は、墓壙床面より約10cmの厚さで土を敷いたのち、角礫がほぼ隙間なく並べられている。この礫敷は、開口部付近で、攪乱により失われていたが、奥壁側から開口部付近までの床面約4分の3の範囲で良好に検出された。本来は、開口部付近を含めた石室床面全体が、礫敷であったと考えられる。

礫敷上面は、両側壁付近で若干の凹凸がみられるものの、石室全体では、ほぼ平坦なものである。この床面の角礫は、形状、大きさともに不均等であるが、各角礫の形状は、比較的扁平なものが、その主体を占める。各角礫の大きさは、約5～30cm大のものである。角礫そのものには、丁寧な加工の痕跡が認められないが、石室の石材と同質の粗粒花崗閃緑岩である。

石室内埋土は、3層のシルトからなり、地形を反映してか、後世に北から南に向か流入し堆積したものであると考えられる。

墓壙の裏込め埋土は、混ざる砂粒の大きさが異なるシルトを互層状にしたものである。奥壁部分に比べ、側壁部分の方が細かな単位でなされている。

遺物は、礫敷が失われた開口部付近から鉄滓（図44-1～3）が3点まとまって出土した。これら鉄滓は、すべてがほぼ同一レベルで検出され、礫敷床面よりわずかに下位、地山である墓壙底面から3cm程度浮いた状態で出土した。3点の鉄滓は、攪乱を受け原位置を止めるものではないが、石室内の床面近くから出土していることを考えると、本来石室内にあったものである可能性が高い。また、鉄釘は検出されておらず、木棺が使用されていたかどうかは不明である。

2. 2号墳（図13～14、写真図版11）

2号墳は、尾根東寄りの斜面地、1号墳の北東、6号墳の南西に位置する。最も近接する1号墳との距離は、石室中心間で約8mを測る。標高は、石室床面で131.0mを測り、1号墳の石室床面との比高差は1.6mを測る。古墳を区画する溝や墳丘盛土は、中近世墓の造成に伴い検出されなかった。

墓壙は、長さ1.65m、幅1.20mの長方形を呈し、最深部の深さ0.55mを測る。墓壙床面は平坦ではなく、北から南に向かわざかに傾斜が認められる。北側の墓壙壁面は、南側の墓壙壁面とは異なり、垂直ではなくやや緩やかな角度で立ち上がる。

石室は、南北0.85m、東西0.40mを測る、四方いずれにも開口部を持たない小石室である。墓壙の中心よりもやや西寄りに構築されている。

側壁は、中世墓の調査中に石組と認識していたため、東側壁の南側基底石を誤って除去してしまったが、基底石のすべてが良好に検出された。さらに、西側壁では2段目の石も3基が残存していた。これ

に関しても、中世墓の調査中誤って除去したものも含めると3段以上積まれた側壁があったと考えられる。

南北の両側壁基底石は、1基のみがそれぞれ据えられている。北側壁は幅44cm、高さ28cm、厚さ14cmを測る。南側壁は幅48cm、高さ34cm、厚さ25cmを測る。西側壁基底石は幅95cm、高さ25cm、厚さ21cmを測る1基からなる。これに対して東側壁基底石は南北に配された2基の石からなる。

基底石の据え穴は、墓壙底で確認できず、南側および東側南端の基底石のみ床面より低く据えられ、他の基底石が床面ないしは若干浮いた状態で設置されてあった。

四方の基底石や棺台の据えられ方、また、棺台の石より下位のレベルでは鉄釘が出土しないことなどの諸条件より、床面は棺台の石の上面と、それらの石とほぼ同じレベルで平坦に敷かれた土によるものであると考えられ、棺台の平坦な上面部分のみが見える状態が、石室本来の床面であったと考えられる。棺台の2石は南北にやや間隔を開けて配置されていた。

以上、基底石の設置状況から、南側が最初に置かれ、次いで東側と、反時計廻りに設置されたと推定される。

石室内の埋土は、上下2層のシルトからなり、攪乱は受けていない様子であった。石室の裏込めは、北側では1層で、南側では2層であった。

遺物は、石室内の床面付近から木質が良好に遺存した鉄釘を6本検出した。これらの鉄釘は、他の古墳のものと比べるとかなり長く、また、全て頭部が欠損し、全形が不明である点や、先端部が比較的丸みをもつことから、やや鉄釘としては疑問が残るものである。なお、鉄釘の出土配置からは、木棺を復元するのは困難であった。しかしながら、鉄釘に付着している木質が、2方向の異なる木目であることや、棺台の存在などを考え合わせると、やはり木棺または木製容器が設置されていたと考えられる。

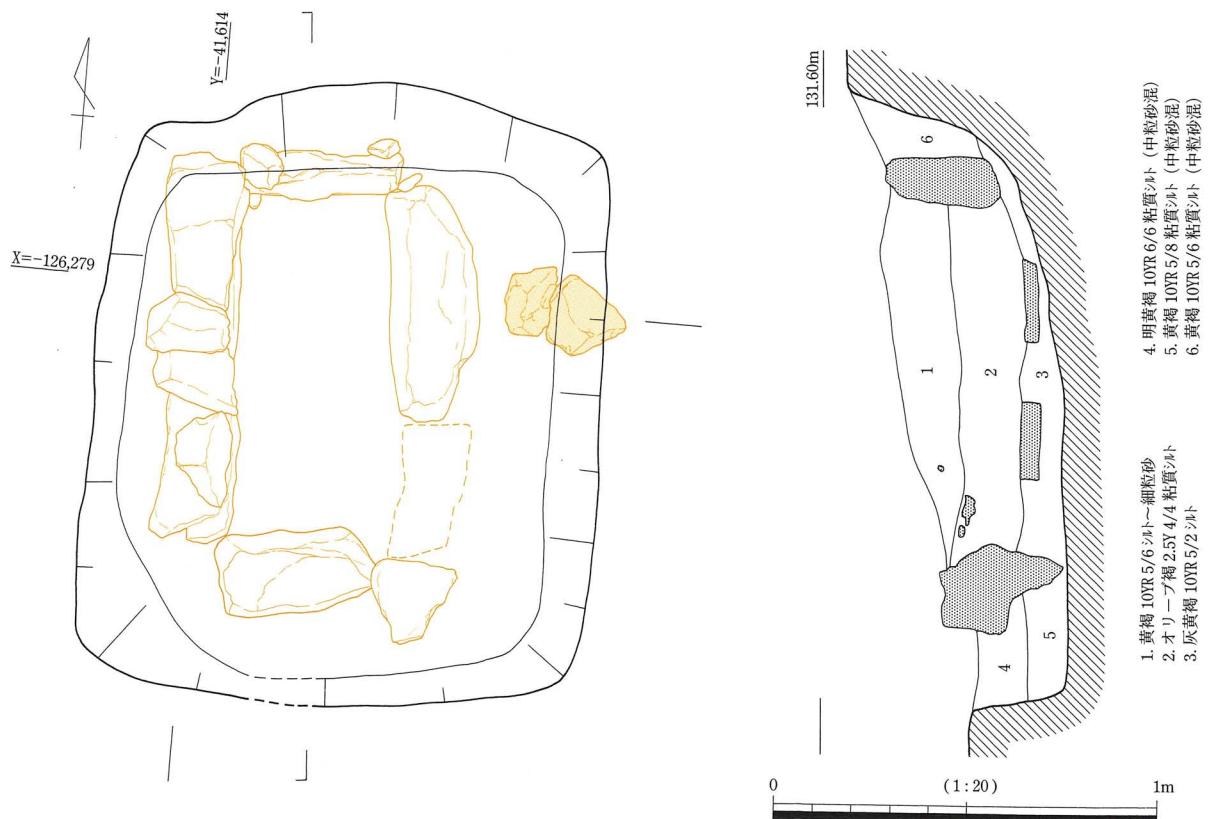


図13 2号墳墓壙、石室平面・断面図

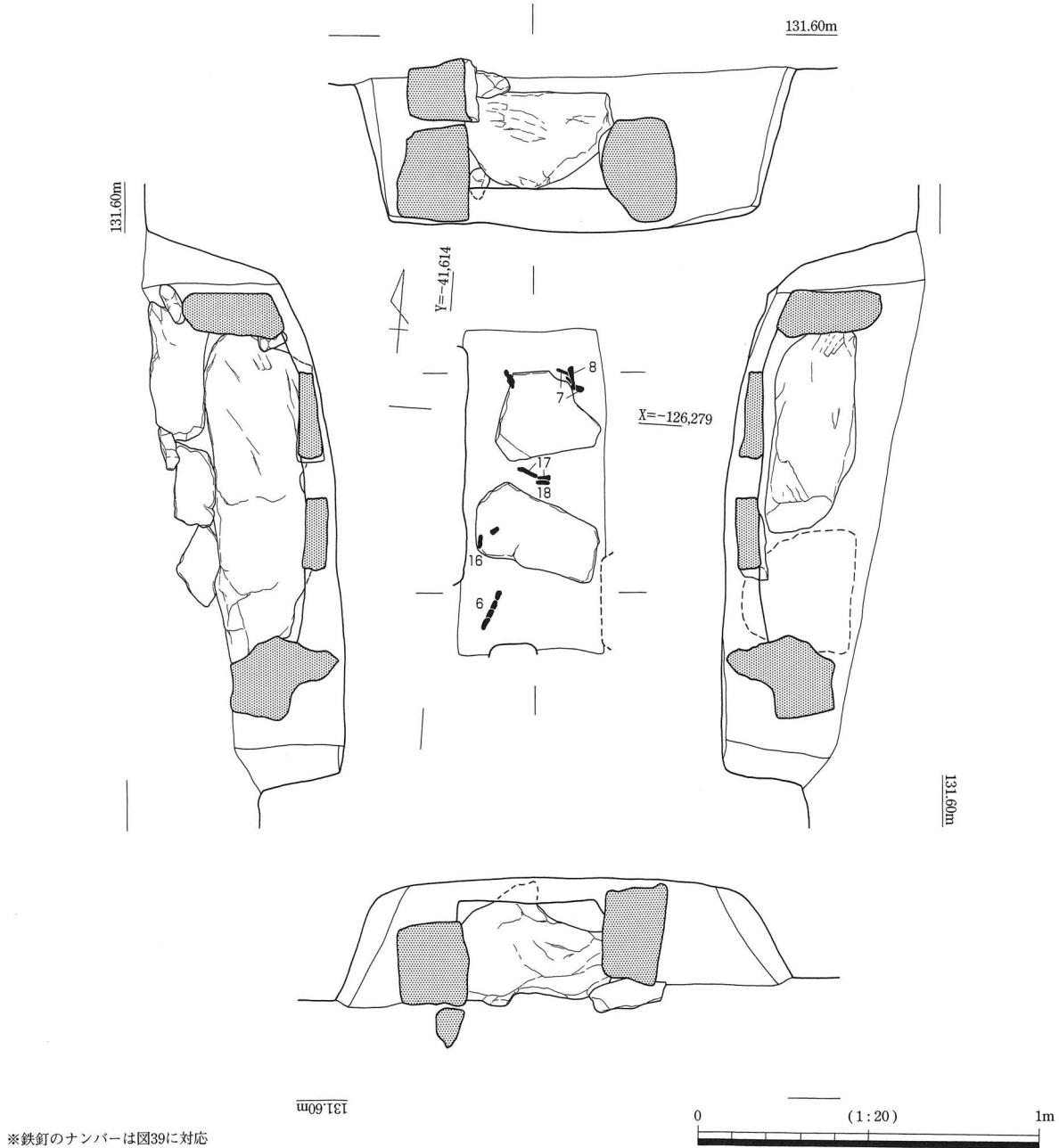


図14 2号墳石室平面・立面図

このように、この古墳出土の鉄釘の形態および出土状況が、やや異例であることから、解釈が困難であるため、類例を待ちたい。

3. 3号墳（図15～18、写真図版12～15）

3号墳は、尾根南端の緩斜面地、4号墳の南西約10mに位置する。標高は、石室床面で126.3mを測り、4号墳の石室床面との比高差は0.5mを測り、3号墳の床面の方が高く設定されている。墳丘南北の比高差は盛土が失われている現状で約1mである。

墳丘を囲む区画溝は、南側で途切れる不整形な円形を呈する。残存する溝の幅約50cm、深さ約15～20cmを測る。区画溝内には、後世に流入したと思われるシルトが堆積していた。この区画溝の東側下層において、7世紀後半の口縁部の2カ所を欠く須恵器壺B（図36-6）が、底部を上にして出土している。この須恵器の出土状況は後世の搅乱を受けているが、出土遺物が少ない当古墳群で、古墳の造営時期

を推定する重要な手掛かりである。

また、北西コーナーの上面では8世紀末～9世紀初頭の須恵器壺B（図36-8）が、破片の状態でまとまって出土しており、接合するとほぼ完形になった。このことから、この区画溝の埋没時期の上限は早くともこの頃と考えられる。さらに、この西側付近の上面では7世紀後半の須恵器壺Gが2点（図36-4.5）出土している。

墳丘は、後世の削平のため盛土が検出されなかったが、区画溝の形状から直径約9mのやや不整な円形をなすものと考えられる。

石室西側開口部では、側壁から外に向か突出した石が、1基のみ検出された。しかし、これより外部へ向かって続く石が確認されなかつたため、4・5号墳で検出したような列石へと展開するものかどうか

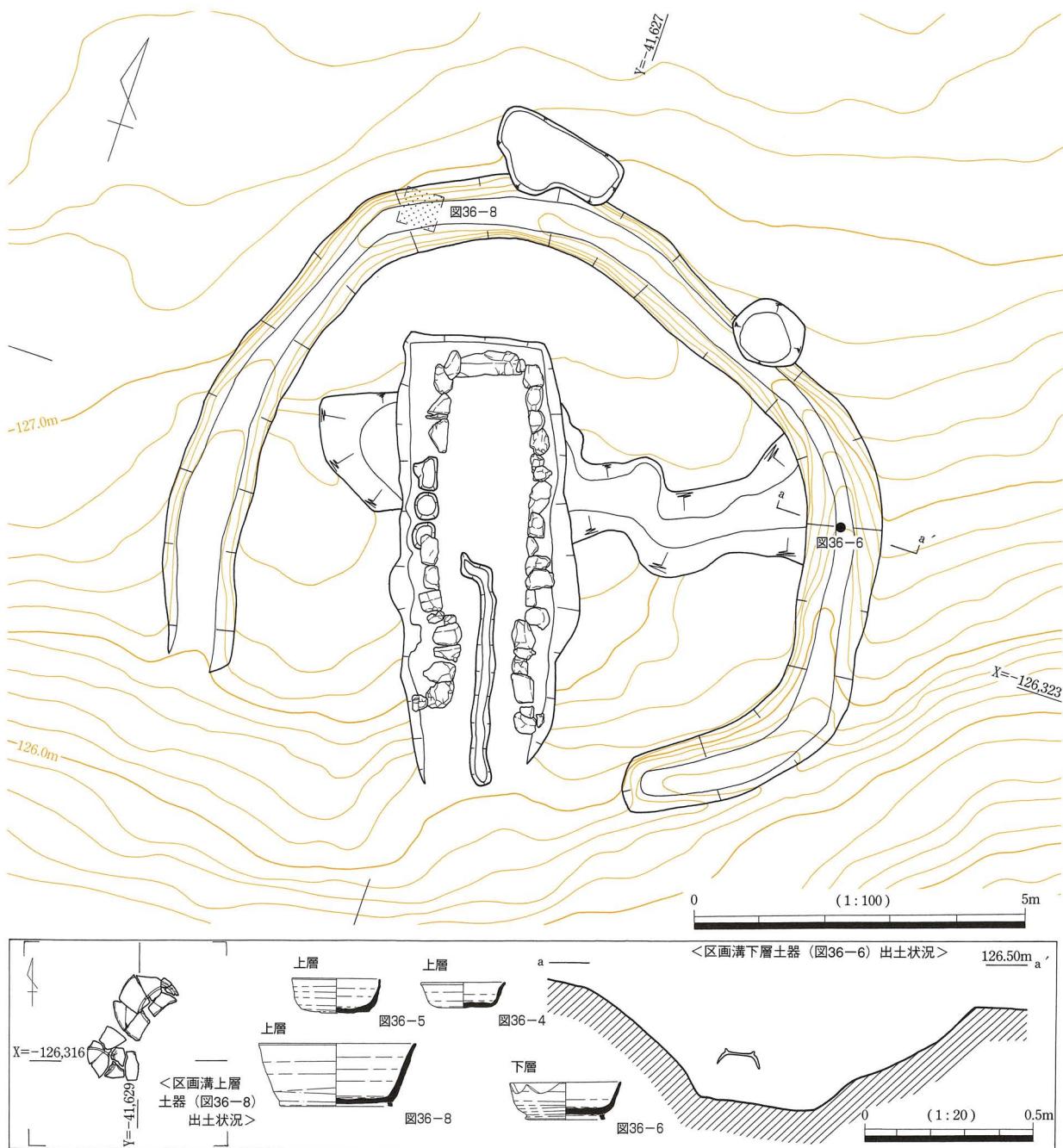


図15 3号墳全体図

は断定はできない。しかしながら、この石の位置が4号墳と同様に開口部に取り付く形であること、墓壙の肩に接していること、さらに石の大きさが約20cmと小振りであることなどからすると、4号墳と同様な列石であった可能性はあろう。

墓壙は、区画溝から1.5mの所から掘られ、全長約6.5m、最大幅約2.6mの長方形を呈し、残存する最深部は1.0mを測る。平面の形状は、石室の袖部にあたるところより南に向けてその幅が徐々に狭まり、石室開口部で終息する。深さは、旧地形を反映し、墓壙北端の奥壁部分から南端の開口部に向か徐々に浅くなる。墓壙の壁は、奥壁に面したところでは、墓壙底からほぼ垂直に立ち上がるが、側壁に面したところでは、やや緩やかな角度を持ちながら立ち上がる。

石室は、全長5.05m、玄室長3.65m、羨道長1.40mを測る両袖の横穴式石室である。石室の幅は、場所によって異なるが、奥壁幅1.20m、袖部幅1.32m、開口部幅0.98mをそれぞれ測る。

玄室と羨道との境目は、西側壁では奥壁から3.7m、東側壁では奥壁から3.9mのところでその幅を狭め、東西両側でそれぞれの袖部を造り出している。これら袖部の幅は、西側で約0.3m、東側で約0.2mを測り、左右対称ではない。

奥壁の基底石は、割れ目が見られるが1基のみからなり、整形が行われたと思われる比較的平滑な面

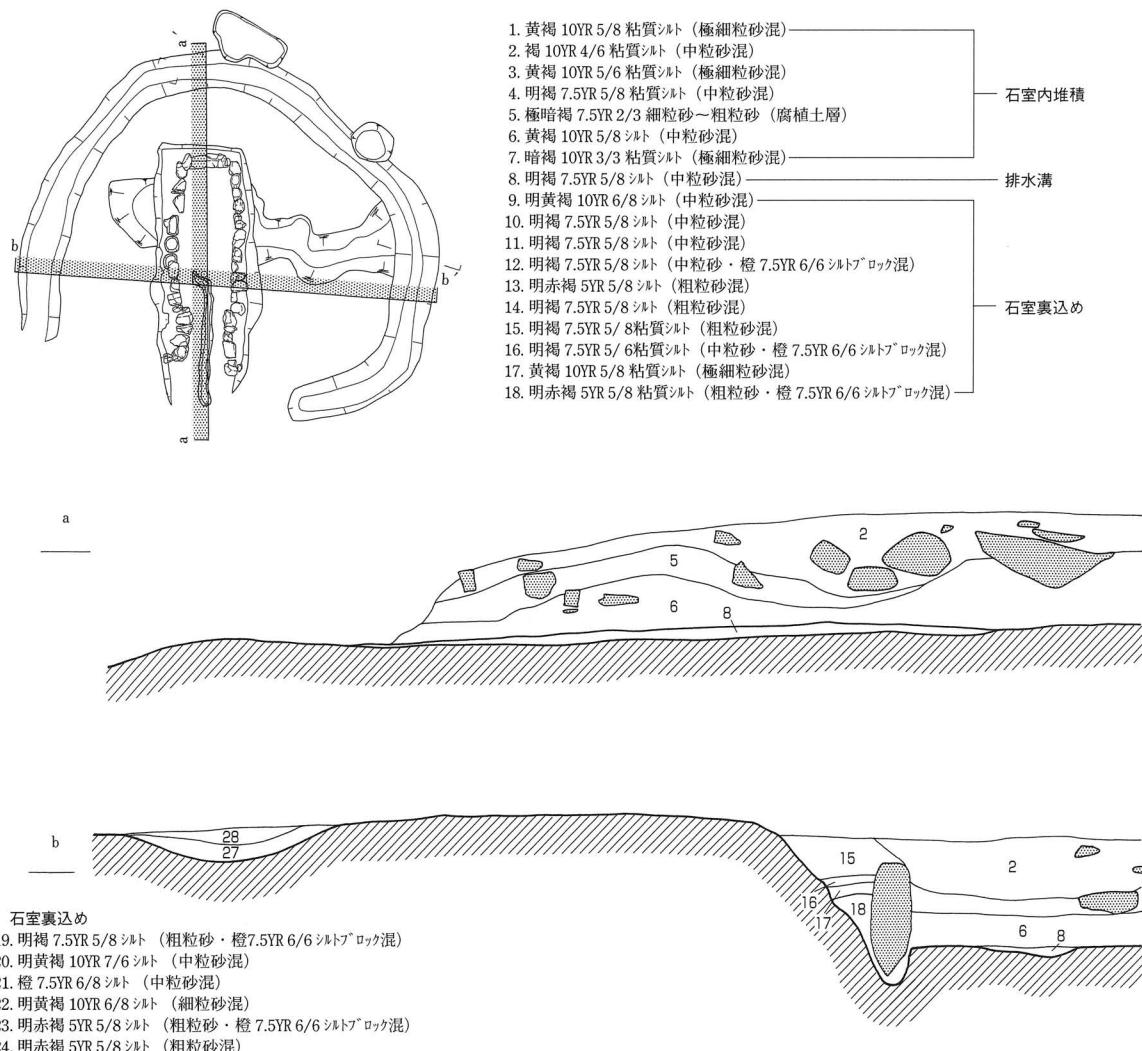


図16 3号墳墳丘・

を石室内側に向けて据えられている。奥壁基底石は、側壁の基底石よりも大きく、幅1.5m、高さ0.62mを測り、その厚みは最上部から接地部にかけて次第に増し、その最大の厚みは0.38mを測る。

側壁は、西側壁すでに失われていた3基を除き、玄室、羨道とともに基底石が良好に検出された。また、羨道部西側壁および玄室部東側壁では、部分的に基底石の上に積まれた2段目の石も検出された。

玄室の側壁基底石の内、西側側壁の欠損した基底石は、抜き取り穴の痕跡から推定すると、奥から4～6基目の3基がこれに該当すると考えられる。よって、東西両側壁はそれぞれ9基ずつで構成されていることが判明した。これら基底石は、縦位に据えられ、奥壁側にわずかに傾いている。各基底石の間は比較的大きな隙間がみられ、広いところで約10cmの間隔が認められた。また、広い隙間には、拳大の石が挟み込まれた箇所も所々でみられる。この基底石間の隙間は、東西両側壁で比較すると東側壁により顕著にみられる。また、奥壁基底石に接する両側壁基底石は、奥壁基底石の東西両端部に接して、奥壁を挟み込むように据えられている。

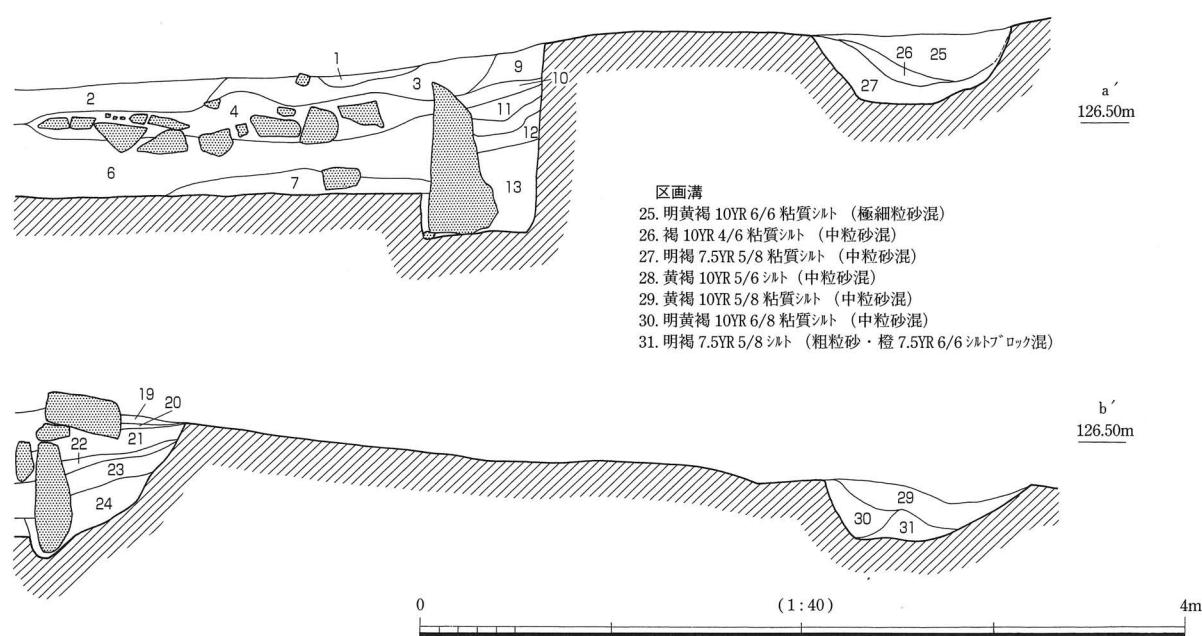
のことから、基底石の設置は奥壁設置後、西側から行われ、それに準拠して東側が設置されたと考えられる。側壁基底石の形状、大きさは一定ではない。

羨道の側壁基底石は、すべてが完全な形で検出された。東側で3基、西側で4基で構成されている。基底石における石の間隔は、玄室よりも小さく、床面の大きいところでも5cm程度で収まる。

基底石は、奥壁から開口部までのすべてが据え穴に据えられている。この穴は、基底石の大きさや形状によってその深さを変えるが、それぞれが連続した形状を呈していることから溝状に掘削されたところに基底石を据えていったと考えられる。この技法は先述したように当古墳群で共通するものである。

この据え穴の深さは、もっとも深い部分で15cmを測り、玄室と羨道で深さを比較すると羨道の方が浅いものとなっている。奥壁部分の据え穴では、基底石の内側接地部分に10cm大の石数個をかませたような状態で検出された。これらは、奥壁基底石が比較的大きく重量があるため、内側へ倒れることを防ぎ、安定して据えるためのものであったと考えられる。

石室床面は、小礫や小石を敷いた痕跡がみられなかった。また、石室内での大きな高低差はみられない



区画溝断面図

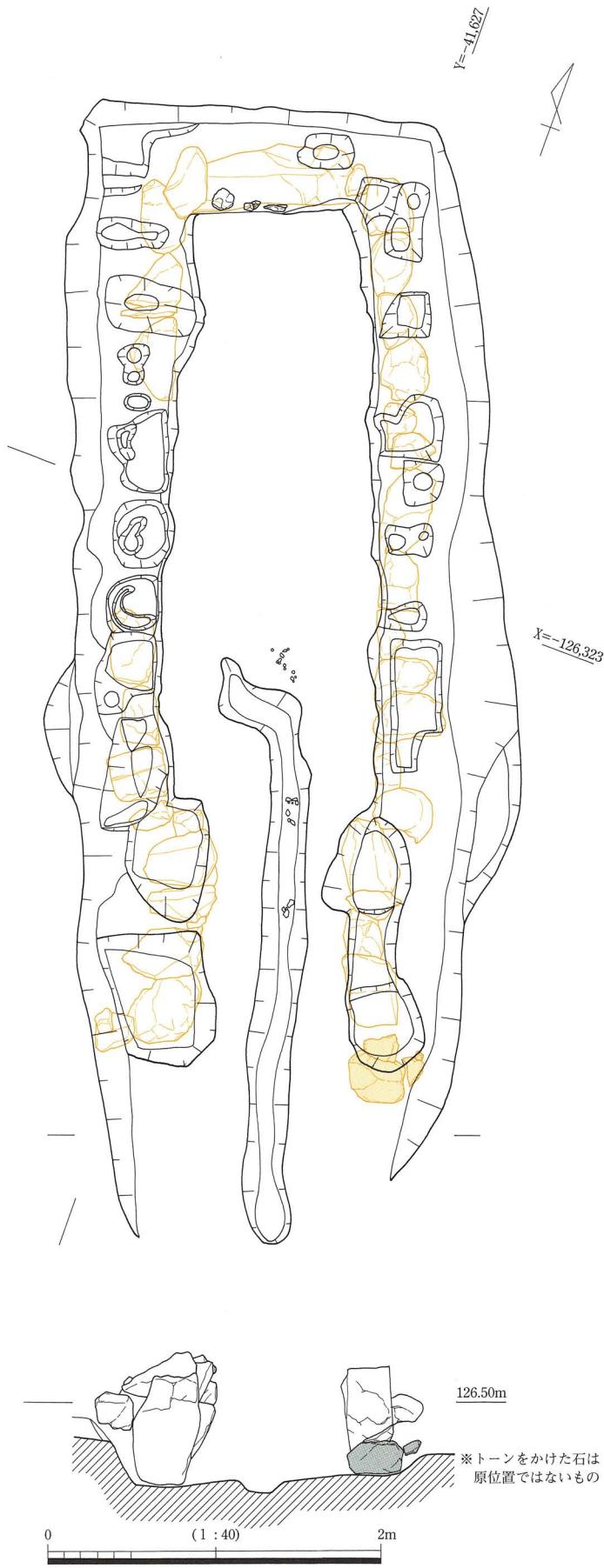


図17 3号墳石室・墓壙平面図

いことから、地山を平坦に削りだしたものであると考えられる。

玄室床面の直上では、鉄釘17本、平根系方頭式鉄鎌（図44-9）が出土した。石室内は後世の搅乱を受けており、鉄釘のすべてが原位置を保っているとは断言できないが、鉄釘を用いた木棺が設置されていたことが想定できる。

木棺は、鉄釘の配置が規則的ではないため、その形状や大きさを復元することが困難であるが、石室床面の面積から2基は設置可能であると考えられる。また、床面で出土した鉄鎌は、鉄釘の平面分布範囲のほぼ中央で検出され、本来は、この木棺内に納められた可能性が高いと考えられる。

床面には、玄室南端部から石室外へぬける1条の素掘り溝が検出された。全長3.6m、幅約0.5m、深さ約0.05mを測り、羨道部のほぼ中心線を南北に一直線に走り、玄室南端では、ほぼ直角に折れ曲がる形状をなす。石室内から石室外に向け低くなっていることから排水溝の機能は、十分に持たなかったと考えられる。また、この溝の北端周辺では、土師器の破片がまとまって出土しているが、意識的なものかどうかは判断がつかなかった。

石室を覆う埋土は、大小の石の破碎片を含むシルトで、白磁碗（図114-30）や瓦器椀さらに石仏が出土した。埋土の石には偏平で約60～80cm程度の大きさの石もあったが天井石かどうかは断定できない。

また中世の遺物からこの時期に石室の石が抜き取られた可能性もある。

墓壙の裏込め埋土は、混ざる砂粒の大きさが異なるシルトを互層状にしたもので、その単位は細かい部分では厚さ5cm程度であり、6号墳ほど堅致に締まった様子は見られなかった。

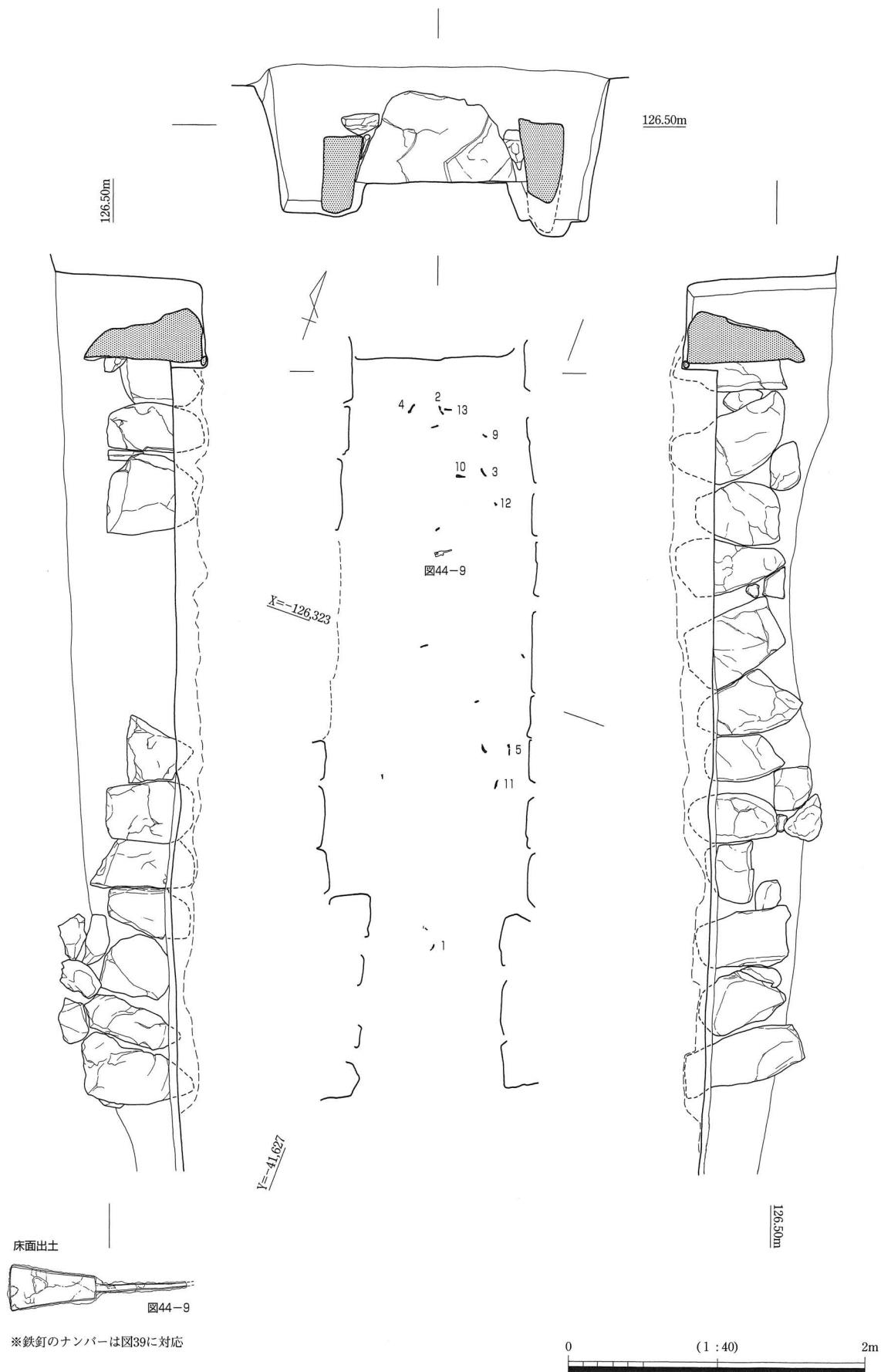


図18 3号墳石室平面・立面図

4. 4号墳 (図19~21、写真図版16,17)

4号墳は、尾根南端の比較的緩やかな斜面の一角、3号墳の北東約10mに位置する。標高は、石室の床面で125.8mを測る。古墳の区画溝の北端と石室開口部の現状での比高差は約1.5mである。墳丘盛土は後世の削平等によるため残存しておらず、墓壙中央部が搅乱されており石室の石は全く存在していないかった。

墳丘は、幅約1.0m程度、深さ約0.2mを測る断面U字型の溝によって区画されている。この区画溝の東側は後世の削平によるためか検出できなかったが、西側を見ると北西コーナーは緩やかではあるが角をなしており、溝の西端が墓壙の中央部付近までしか伸びていない。それから推測すると、区画溝は緩やかな角度を持ち、南辺以外の3方を巡る「コ」の字形であったと思われる。

墳丘の規模・形態は、盛土・溝が削平されていることから正確には不明である。だが、区画溝の形状による推定から、一辺約9.5m程度の不整形な方形をなすものと思われる。

外部施設としては、墓壙の南端部の西側に列石が確認できた。この列石は約20~30cmの大きさの石で構築され、現状では4基確認している。これらの石材は、ほぼ地山面直上に平坦な面を下にして置かれているが、一番西端のものは若干浮いていた。列石は一段しか検出できていないが、石の大きさから判断するとそう高い段数は想定できない。石室が全く原形を留めていないため、確実とは言えないがその

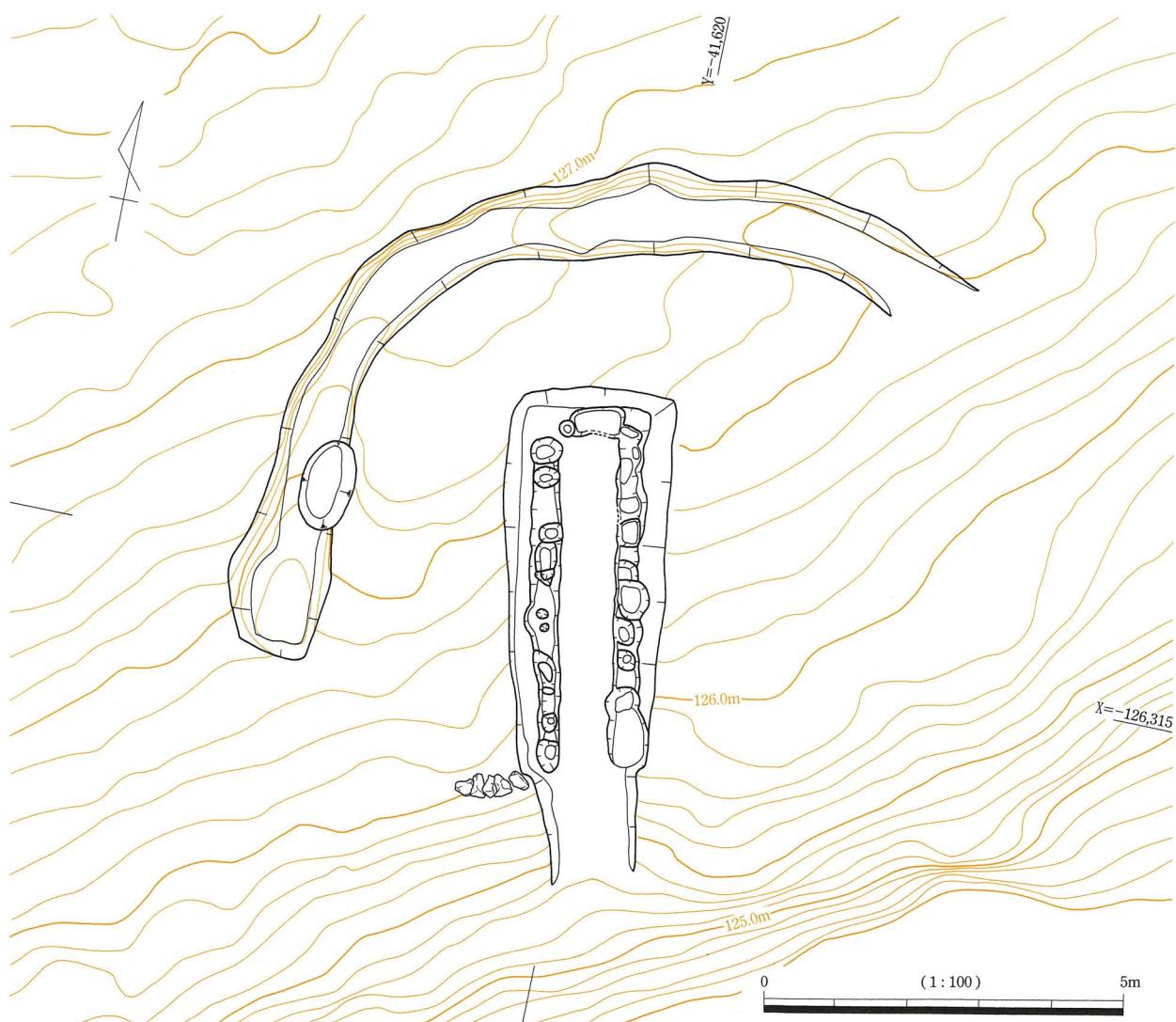
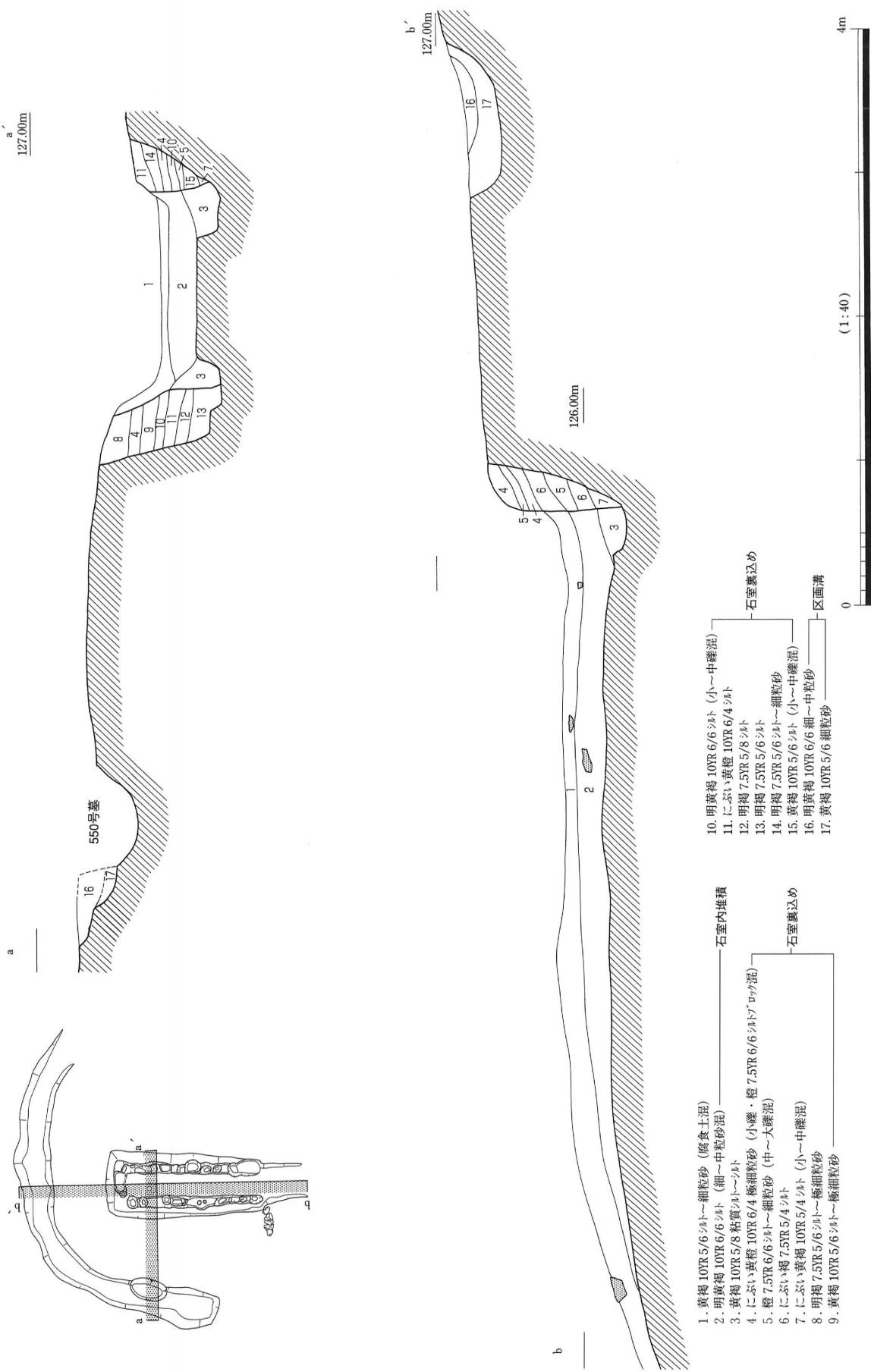
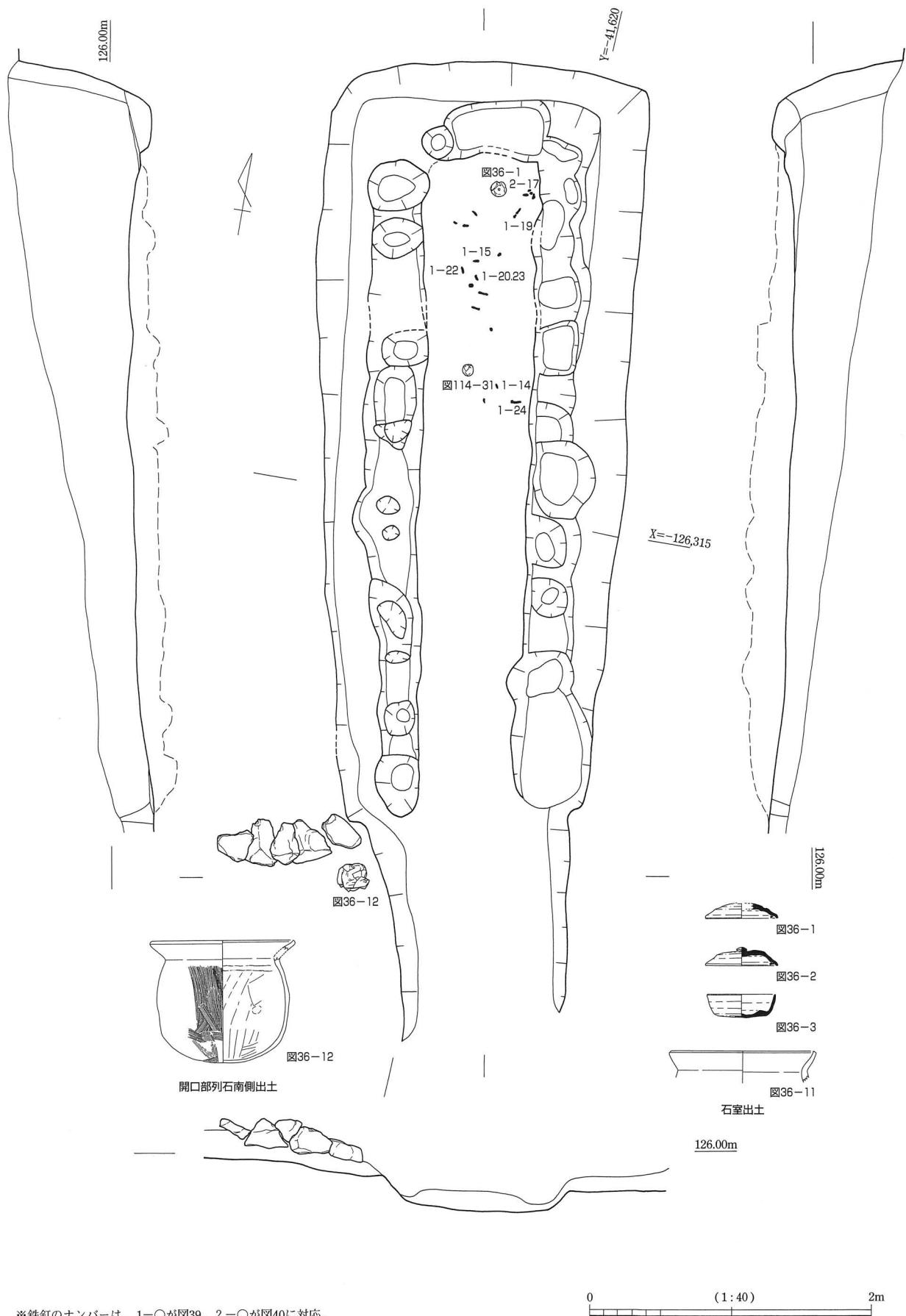


図19 4号墳全体図





*鉄釘のナンバーは、1-〇が図39、2-〇が図40に対応。

図21 4号墳墓壙平面・立面図

位置から、本来は開口部に取りつくものであったと推定できる。そうであるならば、この列石は、本来東側にも同様に展開していた可能性が高い。この列石の石材は粗粒花崗閃綠岩である。

墓壙は、墳丘の北端から約2mの位置から掘り込まれており、区画溝からするとかなり南へ張り出した位置にある。規模は全長5.40m、幅が北側で2.27m、南側で1.75mを測り、その形態が南側がやや窄まる長方形を呈している。深さは、地形に沿って掘削されているため、北端では一番深く0.9m、南端では0.2mを測る。墓壙の肩は、一番南端の石の抜き取り穴がある所で約0.1m内側に屈曲している。この屈曲した所まで、石室が存在していたと思われ、先述の列石もこの位置に存在している。また、幅約1.25m、深さ0.25mの道状の落ち込みがこの地点から南へ約1.5m伸びる。この落ち込みは、墓壙のラインと連接しており、墓壙掘削時に同時につくられたと思われる。

石室は攪乱により石が全て抜き取られており、石の抜き取り穴を検出できたのみであった。しかし、墓壙の攪乱は石室部にしかおよんでおらず、石室の裏込め埋土が比較的良好に残存していた。また、この埋土は大きく崩落した形跡がなく、石を抜かれた後、そう時間を経ずに土が堆積したものと考えられる。このことから、抜き取り穴は大きな改変を受けておらず、基底石の設置状況をある程度推定できるものと考えられ、以下その前提のもとに記述を進める。

石室の規模・形態は、石の抜き取り穴から推定すると、全長約4.6m、奥壁幅約0.8m程度の規模を有する横穴式石室を考えられる。主軸は、北より西に10°振っている。東側の抜き取り穴に約0.1m内側に屈曲する部分があることから、片袖の可能性がまず考えられる。ただ、この屈曲部は非常にわずかであるため断言することは難しく、無袖の可能性も否定できず、有袖であるならば明瞭なものではないと指摘はできる。床面は、礫が敷かれた痕跡はなく、地山面をそのまま床面にしたものと思われる。奥壁は穴としては2個確認できるので、断言はできないが、幅が約70cmと10~20cmの2基の石が設置された可能性が指摘できる。側壁は、東西ともに10~12個が設置されたと考えられる。個々の石の規模を推定するのは難しいが、各々30~50cm程の大きさであったと考えられる。

石の抜き取り穴は、約0.1~0.2mの深い溝状になっており、所々で若干深い箇所が見られる。他の古墳基底石の据え穴でも同様な状況が見られ、4号墳でも基底石を設置する前に、深い溝を掘削した可能性が考えられる。また、西側の石の抜き取り穴が全て、墓壙下端より約0.1mの隙間が存在するのに対し、東側では下端と連接している。このことは、石室の規模に何らかの規制があり、基底石を墓壙の東側の下端に合わせて積みはじめた結果、西側に隙間ができた可能性が考えられる。

石室の裏込めは、粒子が細かい土とやや粗い土が10~20cmの厚さでおおよそ互層をなしているが、その単位は明瞭ではない。

遺物は、石室内より7世紀の須恵器壺G（図36-1~3）、鉄釘18本、鎌1本、16世紀の土師器皿、永楽通寶、皇宋通寶、石仏が出土している。これらの遺物は、先述のように石室が攪乱を受けているため、原位置を保っているものではない。だが、木質が残存した鉄釘は、石室の北側に集中し、また床面から比較的近いレベルで検出されることから、この付近に木棺が設置されていたと思われる。出土状況からは木棺の規模・形態は復元することが難しいが、石室の規模から推定すると2棺置くことは不可能ではない。中世の遺物が出土しているので、この段階に石室の石が全て抜かれたと思われる。

また、列石東端の南側から7~8世紀の土師器甕（図36-12）が出土している。この甕は、列石検出時にほぼ地山面直上で正置で出土しており、列石を意識して置かれた可能性が高い。甕内からは遺物および骨・炭等を確認できなかった。

5. 5号墳（図22～25、写真図版18～21）

5号墳は、尾根南東端の東斜面への傾斜変化点に位置し、区画溝北端の約2m北には1号墳の区画溝が迫っている。標高は石室床面で126.8mを測る。南北の比高差は、現状で2.5mを測る。

墳丘の盛土は、後世の削平を受けていたが約20～30cm残存していた。石室も搅乱は受けていたが、基底部は残存していた。また調査時には石室の開口部に数個の石が散乱していたが、天井石に相当する石はなかった。

墳丘は、北側の斜面を利用し、さらに北辺および東西両辺に溝を穿つことにより区画されている。溝は、東側が一部削平を受けているが、コーナーが直角に近い角を持ち、南側に向かってやや外方に開き気味になっている。この内側に盛土を施することで、南北約9m、東西約7mの南北にやや長く、わずかに台形状の墳丘を造っている。

墳丘の盛土は、石室の中央部から開口部の列石までの範囲に、約0.2～0.3mの高さで残存していた。石室より東側の断面を見ると、墓壙が一部盛土を切って掘削されていることが分かる（図23）。このことから、地形的に低い東側を西側と同じレベルまで盛土を施すことにより平坦面を造成した後に、墓壙を掘削したことが考えられる。2段目以降は盛土と石の積み上げは運動して行われた可能性が高いようと思われる。これらはシルトまたは細粒砂を主体として、粒子が細かい層と粗い層により、おおまかで

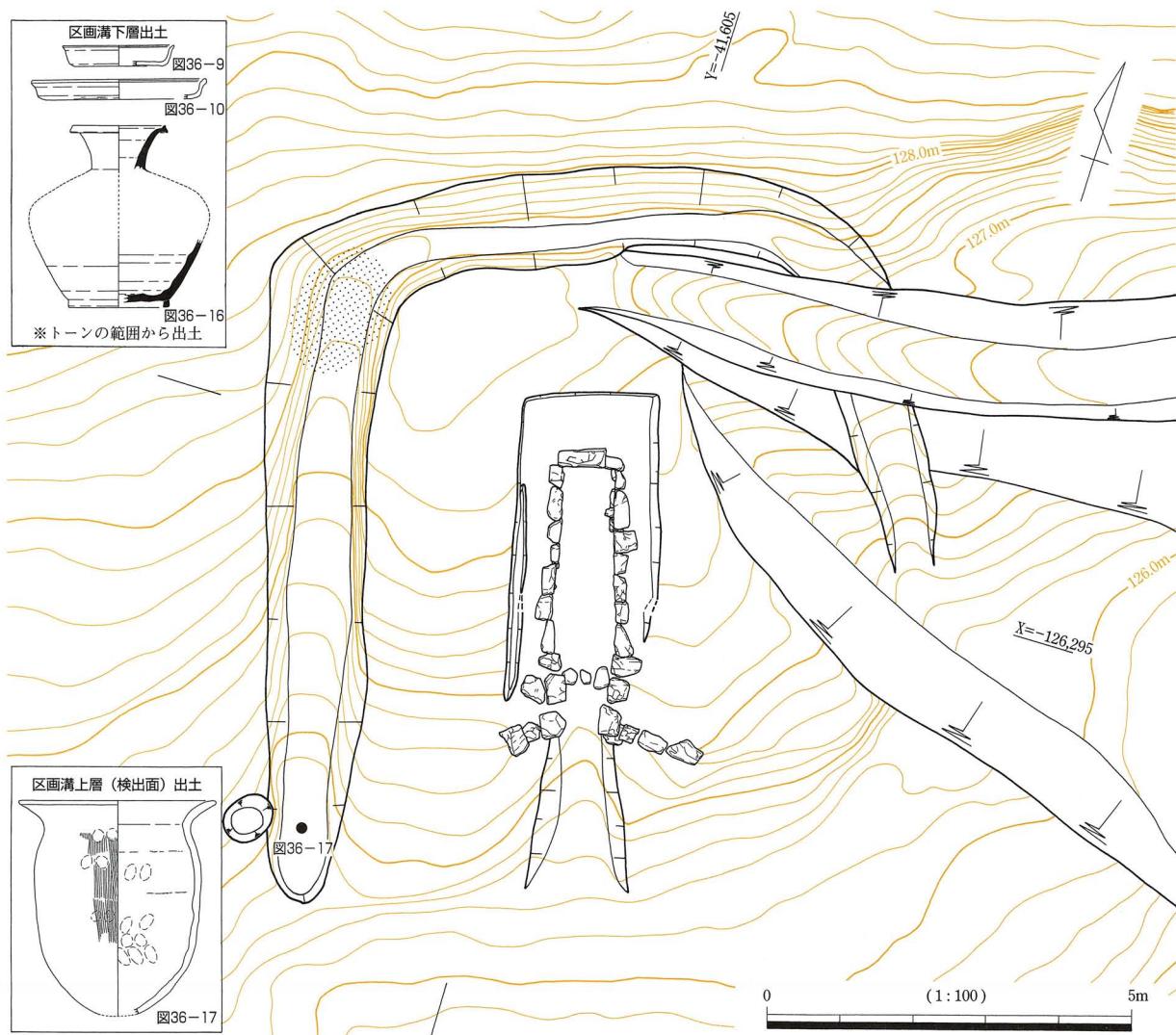


図22 5号墳全体図

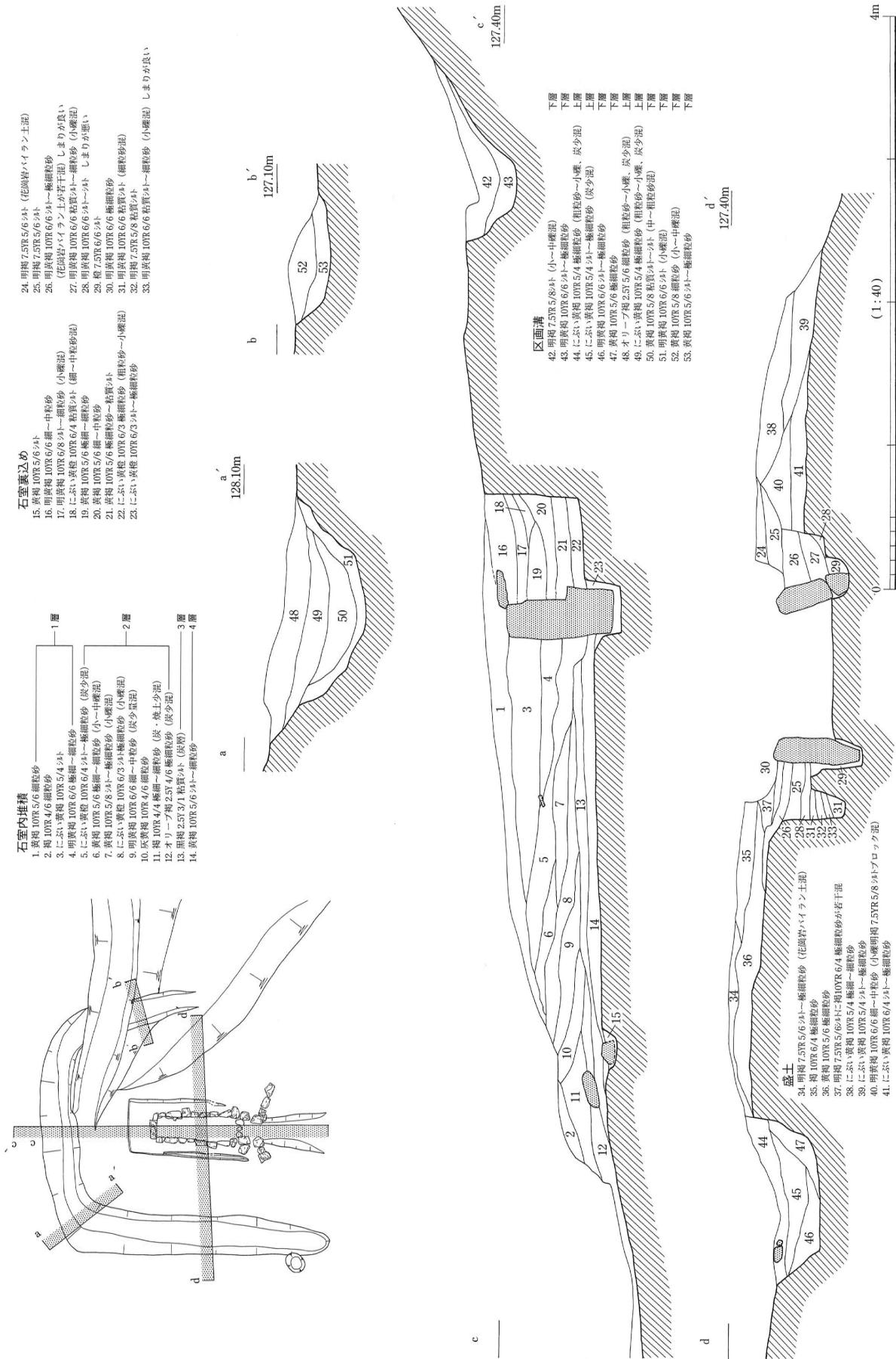


図23 5号墳墳丘・区画溝断面図

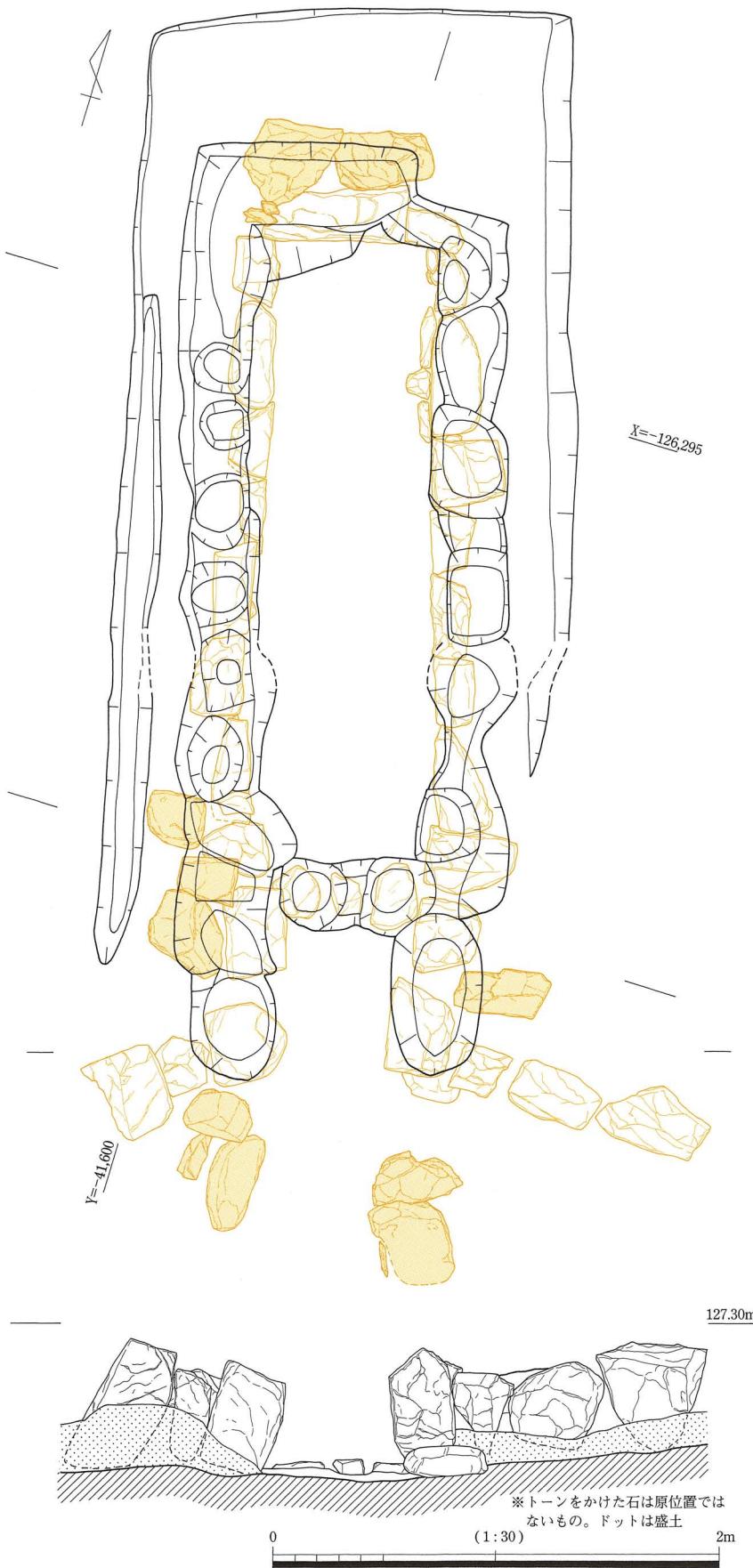


図24 5号墳石室・墓壙平面図、列石立面図

はあるが互層状になっている。

区画溝は、幅1.0~1.7mで、深さは0.3~0.5mであるが、地形に沿って掘削されているため、北側が深く南側が浅くなっている。埋土は、上層が若干炭混じりの細粒砂が主体で、下層がシルトが主体である。溝の西側上層では東から流出したような堆積が見られることから、盛土が流出したものであろう。その他の埋土も人為的な堆積であるとは認め難く、旧表土・地山土等が流出したものと思われる。出土遺物は、西側南端の検出面から土師器甕（図36-17）、北西コーナーの下層から土師器皿（図36-9.10）・須恵器壺（図36-16）が見られる。いずれも8~9世紀のもので、包含層中での破片と接合するものもある。このことから、区画溝は少なくとも9世紀の段階までは存在していたと考えられる。外部施設としては、石室の開口部に連接したやや「ハ」の字状に広がる列石を検出している。この列石は、開口部の石から西側に2基、東側に3基確認している。これらは30~60cmの大きさの石を縦にして設置している。この東西に広がる列石は据え穴を設けておらず、盛土によって支えられている。この盛土は列石より南に約1m付近におよび、また列

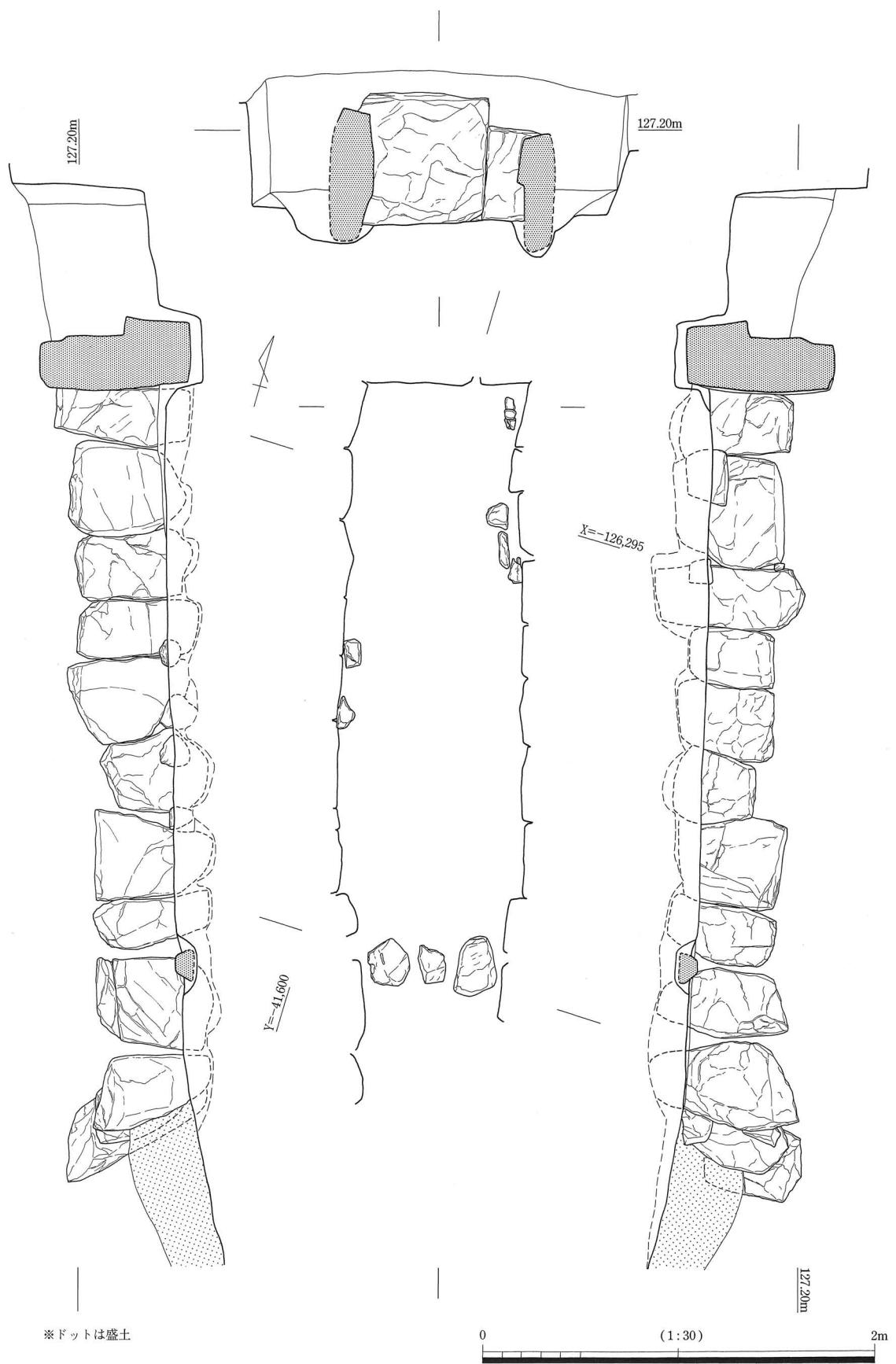


図25 5号墳石室平面・立面図

石の東西にも広がっているため、列石の長さは検出されたものが本来のものである可能性が高い。ただ、西側の列石が東側より短いことから、すでに石が流出もしくは持ち出された可能性も否定できない。

前庭部には、開口部前面から南に約2m続く、幅約1m、深さ約0.1mの道状の落ち込みを検出している。この落ち込みであるが、地山から掘削されていること、羨道部と連接していることから、古墳に伴うものと思われる。

墓壙は、墳丘北端より約1.7mの位置から掘り込まれており、墳丘のほぼ中央に位置する。東西では、西端から約2m、東端から約3mとやや西に寄っている。規模は全長4.2m、幅2.0mを測り、その形態は長方形を呈している。墓壙内に西側の壁面に沿い幅0.1m、深さ0.1mの溝があり、墓壙および石室を構築する際の何らかの技法の痕跡であろうか。

石室は、全長が3.60m、玄室長が2.57mの横穴式石室である。玄室はやや胴張り状を呈しており、羨道は開口部に向かって窄まる形態であるため、幅が場所によって異なり、奥壁幅0.82m、袖部の玄室側幅が0.93m、羨道幅は袖部で0.82m、開口部では0.65mを測る。主軸は、北より西に17°を振る。

羨道と玄室の境は、石の短辺の方を石室側に向けて、わずか5cm前後の袖部を両側につくり出している。この袖部より南約30cmの所に、3石の20~30cm大の川原石が並べて据えられており、樋石の形骸化したものであると考えられる。

床面は、礫を敷いた痕跡が窺えないので地山面を利用したものと思われる。

奥壁は、西側に長さ0.65m、高さ0.75m、厚さ0.30mの大きな石、東側に長さ0.25m、高さ0.45m、厚さ0.15mの比較的小さな石の2基で構成される。側壁は奥壁の南面に接する形で据えられている。その奥壁の接する部分は、西側側壁が奥壁より0.1m外側にはみ出している。

側壁は、長さ40~60cmで厚さ20cm前後の主に長方形の石を横にして、西側に9基、東側に10基据えられている。側壁の東西で対応する石は同じ大きさの石を用い、上面のレベルをおおよそ揃えているのは、2段目の構築時を考慮しているからであろう。また、基底石に10~20cmの石を楔のようにかませているところがある（写真図版19-3）。東側の奥壁から2石目にその顕著な例が認められる。このかませた石は、石が内側に倒れないように補強する役目を果たしたものと考えられる。

基底石は、各々床面より深さ10~20cmの穴を掘削し据えられている。この穴は、各々石に応じて深さがまちまちではあるが、全ての穴が連続しているので、浅い溝を掘削してから石を据えていったと考えられる。これは、当古墳群に共通する技法である。

墓壙の裏込めは、黄褐色シルトが主体で細粒砂または礫が混じる層と、明褐色シルトが主体で砂粒が細かい層とがおおまかに互層になっている。墓壙北側の奥壁付近の埋土は、側壁よりも均質で非常にしまりがよく、堅固である。

石室内の埋土を観察すると、大きく4層と捉えられる。1層は北から南へと地形に沿って堆積している。2層は南側の開口部から北側の奥壁に向かって堆積している。3層は3cm以下の炭が多量に含まれ数cmの厚さで一面に広がる（写真図版20-2）。4層は、しまりが良いシルトが床面から5cm存在していた。以上の堆積状況から推察すると、3・4層は天井石が残存していた段階、2層は少なくとも北側の天井石が残存していた段階、1層は2段目以降の石が消失した段階と考えることができる。3層の炭は、C¹⁴年代測定で7世紀後半から10世紀後半との結果が得られた。奥壁が若干黒変していること、開口部南側の原位置を保っていない石で被熱しているものがあることから、石室内で火を伴った何らかの行為が行われたと思われる。石室からは、遺物が出土していない。

6. 6号墳（図26～31、写真図版22～27）

6号墳は、南北に走る尾根の頂部からやや下った東側斜面端で検出した。石室の床面で136.4mを測る。南に位置する1号墳とは、水平距離で約26m間隔を置いている。また、その床面の比高差は約7mを測る。古墳群中で最も高位に位置し、東南隅は後世の崖崩れにより消失し、西南隅は盛土の精査中に埋土から瓦器碗の小片が出土したことから中世墓を造成する時点で削平を受けたと思われる。墳頂部には調査時点では撹乱坑が存在した。

墳丘は、北辺および東西両辺に溝を穿つことにより区画され、南辺は、段を造りだすことにより区画されている。また、その内側に盛土することにより、方形の墳丘を造成している。

造成された平坦面は（この平坦面は、水平面ではなく傾斜面である）、後世の削平を受け厳密には築造当時の状況を残していないが、北側の東西方向で上辺約7m・下辺約9m、南北方向で上辺約9.6m・下辺約11mを測る。比高差は、北側墳丘端から前面列石までが2.4m、同前面段までが3.0mを測る。

墳丘の盛土は、現状では下半部でわずかに確認されたに止まる。表土を取った段階で、北半部に花崗岩の母岩が露頭し、墓壙の輪郭を検出できた。南半部では、花崗岩のバイラン土を地山として盛土が行われていた。西側南半部のL字状の列石周辺では、ほとんど盛土がなされず墓壙を掘削した時点で掘り上げられた土が厚さ約10cm堆積していた。東側南半部では、古墳造成当時の地形が東に傾斜していた所から、炭が少量混じる土に墓壙掘削土をブロック状に含む層が約0.5m堆積していた。

墳丘の南西側でL字状に並ぶ列石を検出した（図27）。東西方向約1.2m、南北方向約2.5mを測るが、東西方向の列石は石の抜き取り穴のみが残存しており、南北方向の列石も南半部のみ石が残存し、北半部では抜き取り痕のみであった。相対する東側では、墳丘が流失し列石の痕跡すら確認できなかった。東西方向の列石と南北方向の列石では、比高差が0.8mあることから東西方向の列石は2段ないしは3段の石が積まれていた可能性が考えられる。

また、墳丘の前面に東西方向に並ぶ列石が検出された。その検出長約3.2mを測る。この列石は、1段のみの残存であり、高さが約0.25mを測る。

前述の列石のさらに1.5m南側に段があり、東西方向の検出長約7.0m、幅0.1～0.3m、高さ0.2mを測る。この段では、石や石の抜き取り穴を検出しなかった。

以上のことから、下段から数えて1段目は土のみの段の可能性があり、2段目および3段目が列石で構成される墳丘をもつ古墳であることが判明した。また、2段目の列石に関しては、東西方向の列石のみを検出しており、それに続く南北方向の列石は確認できなかった。

なお、2段目の列石に直交するような形で南北方向の列石が2列平行して検出された。その検出長は、各々約0.8mを測る。この2列の列石は、2段目の列石の上に石を積み重ね、正面を揃え、北側に向かい階段状に石を積んでいる。これらの列石は、石室の中心線に対して相対する位置にあり、その間隔は約2.0mを測る（図26）。このことから、東西方向2.0m、南北方向0.8mの前庭部を形成していると考えられる。

区画溝は、北側で長さ約9.0m、最大幅2.5m、最大深さ1.4mを測る。溝の断面形態は北側ではV字形であるが、東側および西側では緩やかなU字形である。北側溝の断面観察からすると、南端の堆積層が途中で切られていることから墳丘の盛土が現在よりさらに盛られていたことが判る。西側の区画溝は、古墳を認知する以前に防災上の都合から重機で排水溝を掘削したためと中世墓の造成時点で削平を受けたために堆積状況が不明瞭であった。しかしながら、南側の東西断面に底部がわずかに残存してお

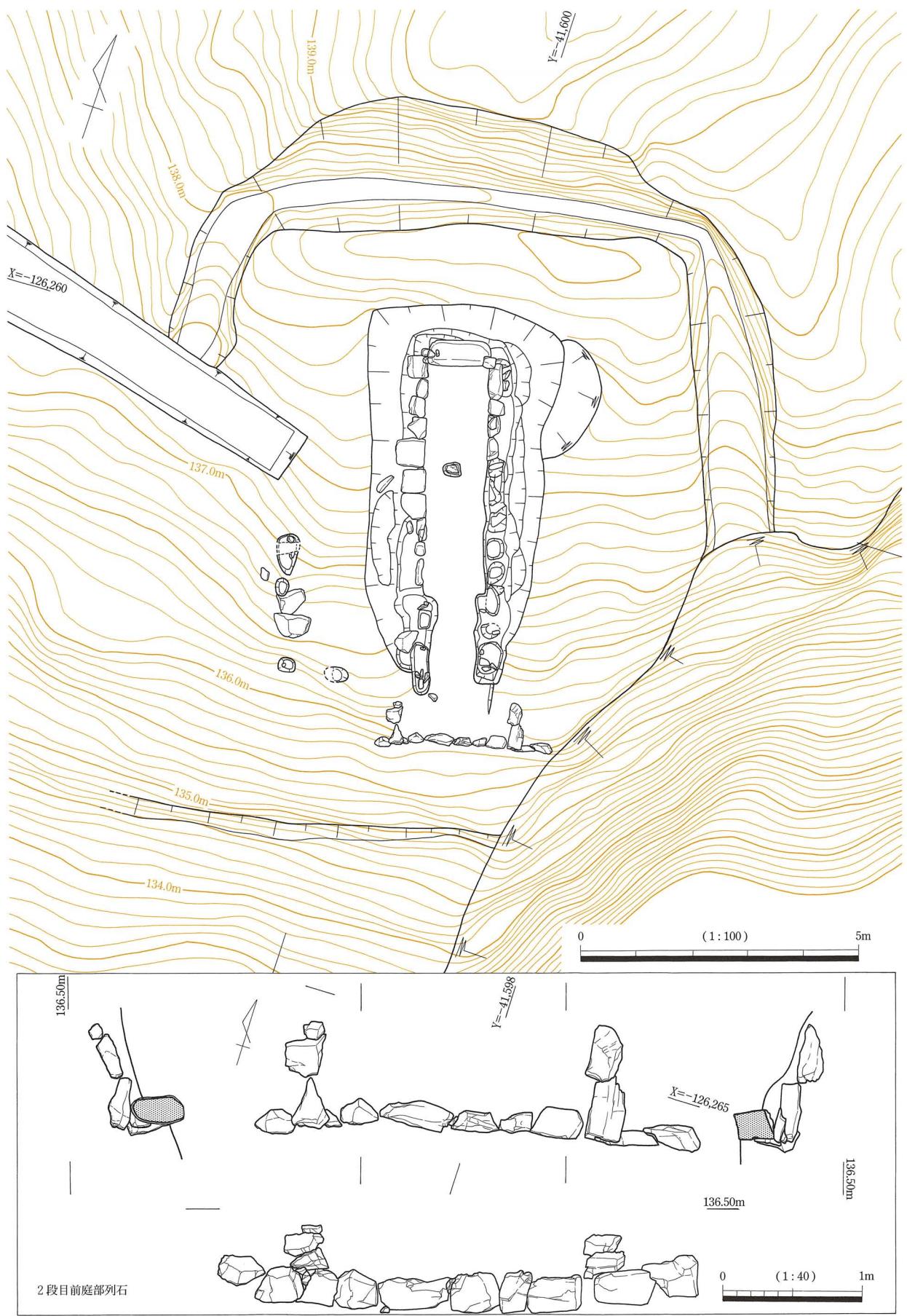


図26 6号墳全体図、2段目列石平面・立面図

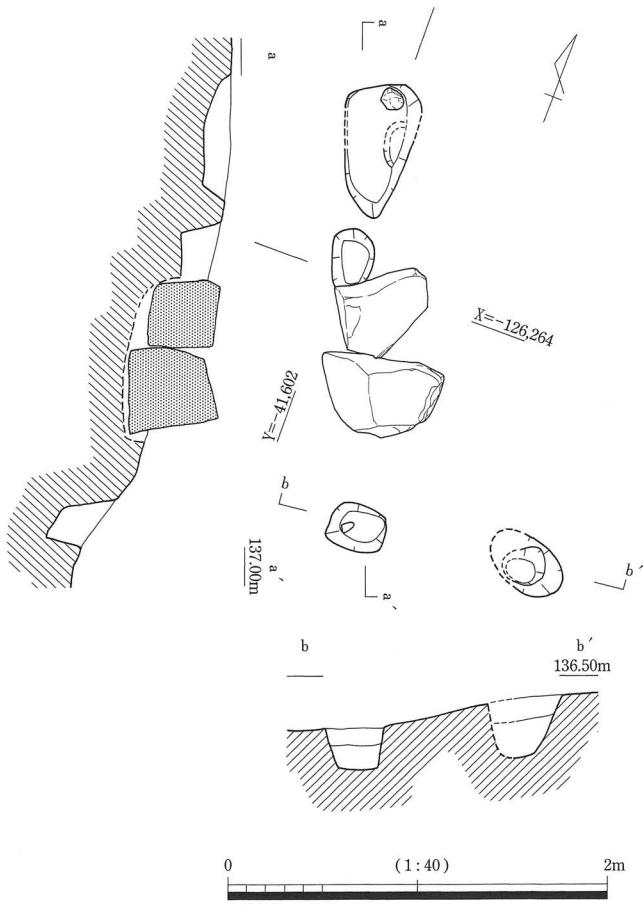


図27 3段目西側列石平面・断面図

石室の基底部石は縦位に据えてあり、その長さの約1/2は床面より深く埋められていた。2段目の石は、わずかしか残存していなかったが中央部では、基底部石と同様な石を横位に使用していた。

石室の側壁で、石の残存していなかった基底部では、石の抜き取り穴の痕跡が明瞭に残存しており、それらから類推すると、玄室10基、羨道3基の計13基の石が東西に配置されていたことが判明した。また、羨道東南端側の抜き取り穴は、深さが0.7mと最も深く、底部に数個の礫を置いていた。

残存していた側壁の基底部石は、奥壁に向かってわずかではあるが傾いており、奥壁の基底部石を設置した後に、奥壁側から設置していく様子が窺われる。さらに、奥壁の基底部石の高さに合わせるように側壁の石を積んでおり、その時点で高さの調整が行われたことが窺われる。

石室の裏込めには、花崗岩を粉碎した土と花崗岩のバイラン土を使用しており、それらを交互に積み重ね明瞭な互層についていた。特に、基底部の裏込め部分では、花崗岩を粉碎した土が埋められており、地山の岩同様に硬く締まっていた。

なお、南東側では、墓壙が墳丘の盛土後掘削されたと考えられるが、南西側の断面観察からすると、後世の搅乱があるものの、緩やかに掘られた墓壙にレンズ状に盛土をしていった様子が観察された（図28、36・37層の互層）。おそらく、基底部石を設置しながら盛土をしたことが窺われる。

以上のことから、石室の構築が基底部では、奥壁設置後、東側側壁の奥壁側から設置した後に西側の側壁を同様に設置したと考えられる。

なお、側壁の裏込めの埋土に石が抜き取られた痕跡が数カ所残存しており（図29）、それらから類推すると5段は石が積まれていたと思われ、その高さが約1.5mを測ると考えられる。

り、その検出長約7.6m、幅1.0m、深さ0.25mを測る。底部の一部では、地山の花崗岩のオニオンスラッグが露頭しており、凸凹で溝が不明瞭であった。東側の区画溝は、先端部が崖崩れにより消失していた。その検出長は5.9m、幅は1.5m、深さは0.4mを測る。

遺物は、北側溝の埋土から同時代以降の土師器甕の小片が出土したのみである。

石室は、南に開口する横穴式石室で両袖式の形態をもつ。主軸は、N-13°-Wである。

玄室は、幅1.20m、長さ4.20mを測り、基底部奥壁に幅1.14m、高さ1.10m、厚さ0.50mの巨石を据えている。側壁は、東側では北側4基の基底部石のみが残存し、西側では10基の基底部石が完存していた。なお、西側の内4基に2段目の石が残存していた。

側壁の基底部石は、幅30cm~70cm、高さ50cm~90cmと規格性がないように見えるが、厚さで見ると約25cmと揃っており、しかも、奥壁の厚さの略1/2の厚さである。さらに、石

室の基底部石は縦位に据えてあり、その長さの約1/2は床面より深く埋められていた。2段目の石は、わずかしか残存していなかったが中央部では、基底部石と同様な石を横位に使用していた。

石室の側壁で、石の残存していなかった基底部では、石の抜き取り穴の痕跡が明瞭に残存しており、それらから類推すると、玄室10基、羨道3基の計13基の石が東西に配置されていたことが判明した。また、羨道東南端側の抜き取り穴は、深さが0.7mと最も深く、底部に数個の礫を置いていた。

残存していた側壁の基底部石は、奥壁に向かってわずかではあるが傾いており、奥壁の基底部石を設置した後に、奥壁側から設置していく様子が窺われる。さらに、奥壁の基底部石の高さに合わせるように側壁の石を積んでおり、その時点で高さの調整が行われたことが窺われる。

石室の裏込めには、花崗岩を粉碎した土と花崗岩のバイラン土を使用しており、それらを交互に積み重ね明瞭な互層についていた。特に、基底部の裏込め部分では、花崗岩を粉碎した土が埋められており、地山の岩同様に硬く締まっていた。

なお、南東側では、墓壙が墳丘の盛土後掘削されたと考えられるが、南西側の断面観察からすると、後世の搅乱があるものの、緩やかに掘られた墓壙にレンズ状に盛土をしていった様子が観察された（図28、36・37層の互層）。おそらく、基底部石を設置しながら盛土をしたことが窺われる。

以上のことから、石室の構築が基底部では、奥壁設置後、東側側壁の奥壁側から設置した後に西側の側壁を同様に設置したと考えられる。

なお、側壁の裏込めの埋土に石が抜き取られた痕跡が数カ所残存しており（図29）、それらから類推すると5段は石が積まれていたと思われ、その高さが約1.5mを測ると考えられる。

石室に使用された石材は、当古墳を含む一帯を形成している粗粒花崗閃綠岩である。

玄室の床面には、拳大の川原石や同様の大きさに細かく碎いた花崗閃綠岩を敷きつめていた。また、部分的に礫が消失しているところがあり、攪乱を受けたことが判る。床面からは、須恵器壊G破片（図36-7）が玄室奥と開口部付近から出土し、それらが接合し1個体になったことから、原位置を保っていないと考えられる。また、鉄釘が散乱した状態で23本、鎌が3本出土した。

玄室の床面には、開口部から奥壁にかけて鉄釘が出土しているが、それらの出土状況と本数、玄室の幅および長さからすると、木棺が1基のみ埋葬されていた可能性が考えられる。

羨道は、幅0.6m、長さ西側で1.8m、東側で1.7mを測る。側壁は、両側伴に石の抜き取り穴のみが確認できた。

羨道の床面には、玄室寄りに礫がわずかに残存していることと、2段目の列石周辺に同様の礫が多量に散乱していたことから、玄室と同様に全面に礫が敷かれていたものと考えられる。床面は現状では、前庭部に向かって緩やかに傾斜している。

墓壙は、L字形に地山である花崗岩をくり抜いている。上端幅3.5m～2.1m・下端幅2.1m～1.5m、上端長6.7m・下端長6.0m、最大深さ2.1mを測る。墓壙側壁には工具痕を残している（図30）。

墓壙底面は平坦に掘られ、周縁に基底石を安定して据えるためのコの字形の溝が掘られる。その溝の規模は、玄室部分では、幅約0.4m、深さ0.35mを測り、奥壁に向けてわずかに深くなる。さらに、奥壁部では、深さが0.45mを測る。これは3～5号墳にも見られる工法である。

また、羨道部では幅0.5m、深さ0.4mを測り、特に、南東端の抜き取り孔は、深さ0.7mを測るものであった。

床面の礫敷を取り除くと、地山の花崗岩が露頭し、墓壙下端から玄室の距離の約1/2の所に、浅い土坑を掘り、上面を水平にして粗粒花崗閃綠岩の切り石が据えられていた。この石は20cm前後の大きさで厚さが5cm前後の平たいもので、土坑はそれに合わせて掘られている。

この石は、玄室の幅の約1/2および奥壁の外側から開口部までの約1/2の所に設置されていることからすると、この古墳の造成に係わる基準石となるものと思われる。

墳丘の盛土を除去した時点で、墳丘の東側地山面で階段状に造りだした痕跡を検出した（図31）。東西約2.0m、南北約1.2mの範囲に2段ないしは3段の段を円弧状に造りだす。比高差約1.0m、1段の比高差約0.4mを測る。古墳を造成する際の足掛かりとして利用されたと考えられる。

さらに、羨道部南半部から前庭部および1段目の段にかけては盛土がなされるが、その盛土の除去後の2段目列石下中央部で東西1.7m×南北1.2m、深さ0.45mを測る楕円形の土坑を1基検出した。土坑の南側では、地山を水平に均した上に花崗岩の粉碎した土を厚さ約10cm程度に敷き、さらに、土坑の南側の肩を形成するために、同様の土を土手状に30cm程度半円状に盛土していることが観察できた。この土坑は、古墳築造の前段階として何らかの祭祀を行った可能性が考えられる。このことは、石室の前面に位置し、墳丘造成時に盛土され埋められてしまっていることからも窺われるものである。なお、土坑を埋めた盛土には、炭がわずかに混入していた。

石室の床面および攪乱からは、14世紀の瓦器椀2点、古瀬戸入子皿1点が出土しており、その時期に石が抜き取られた可能性が考えられる（図114-29.32.33）。遺物に関しては、詳細を別稿で述べる。

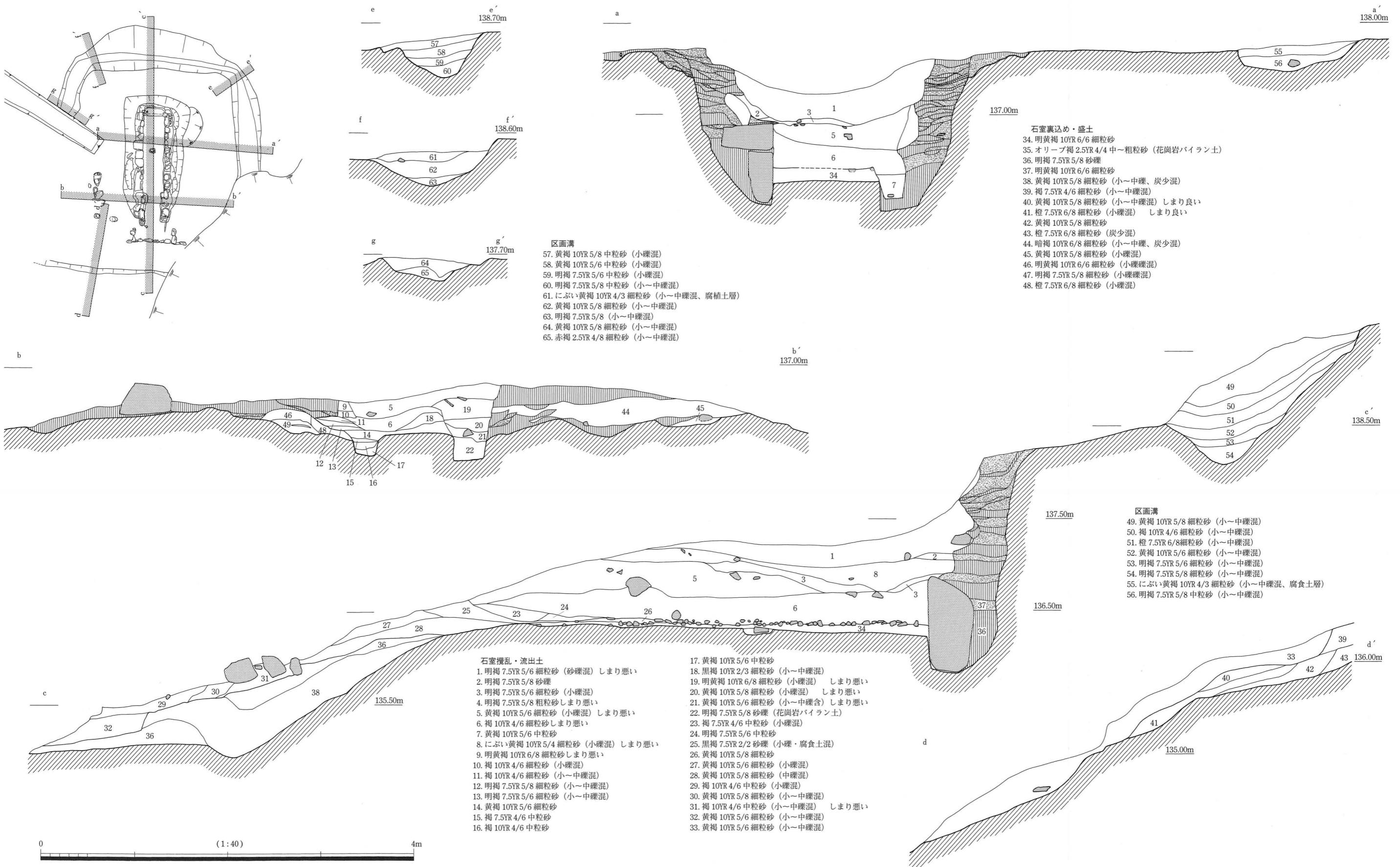
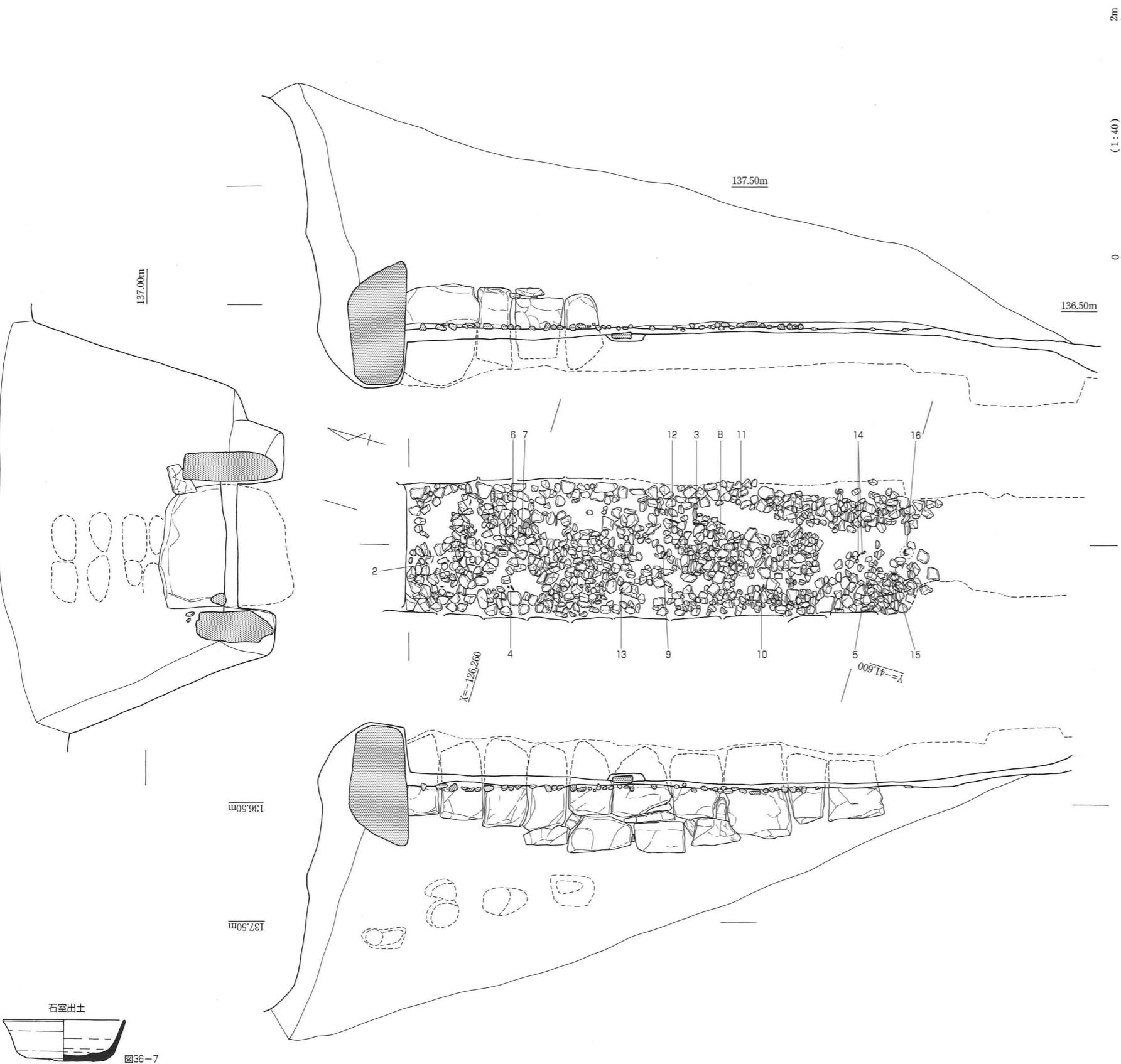


図28 6号墳墳丘・区画溝断面図



※トーンが破片にある。鉄釘のナンバーは図40と対応。

図29 6号墳石室平面・立面図

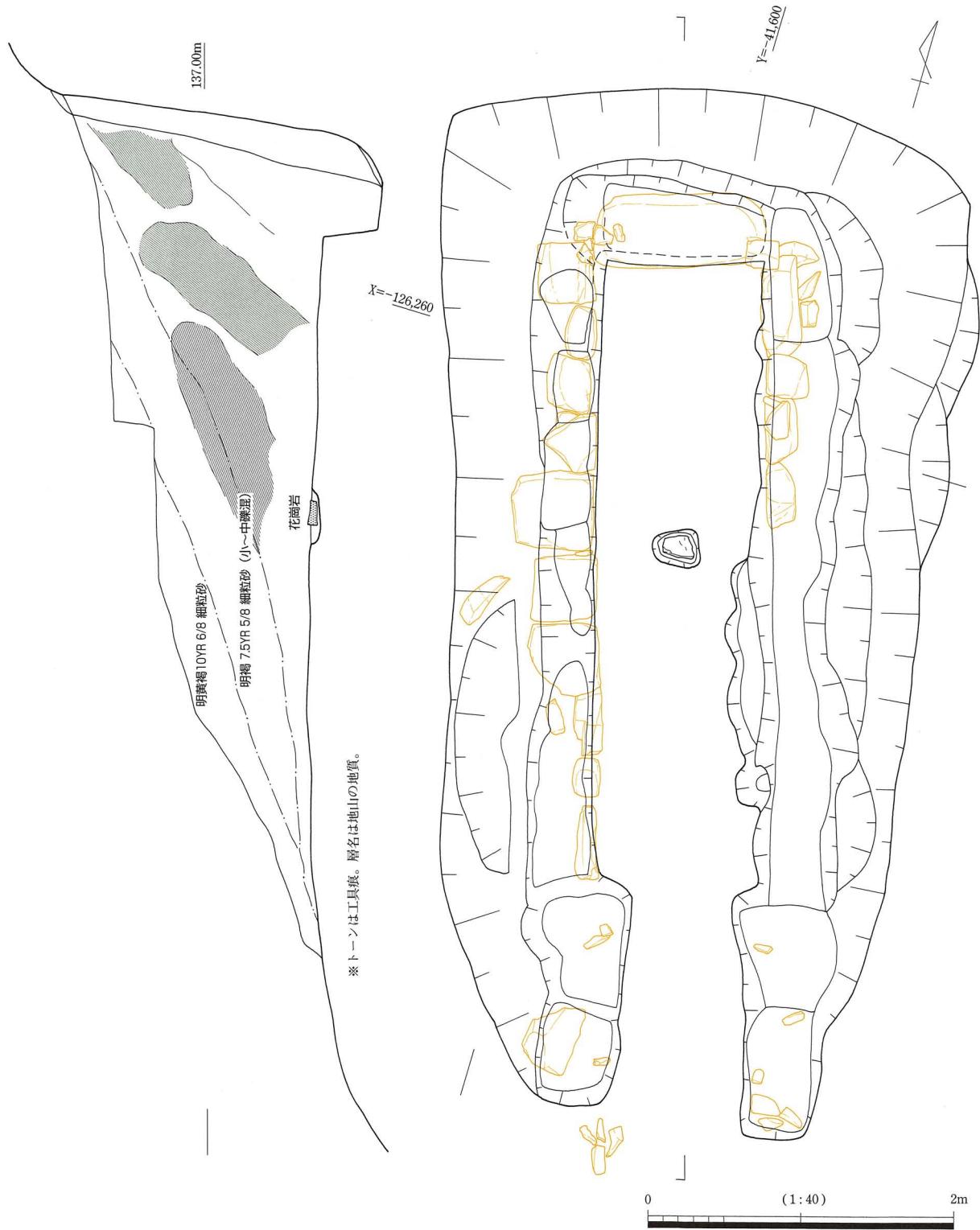


図30 6号墳墓壙、石室平面・立面図

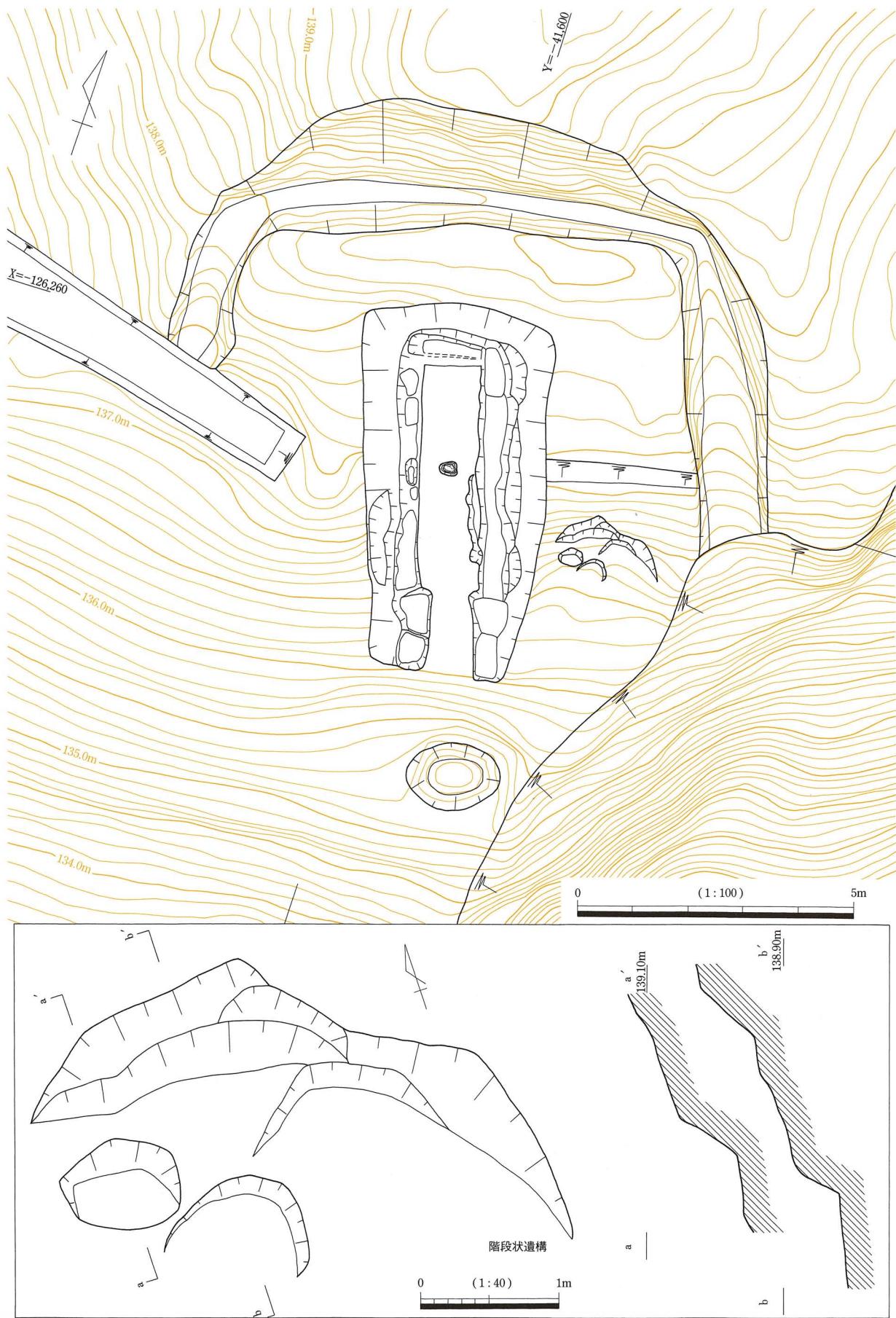


図31 6号墳墳丘盛土除去後地形図・階段状遺構

第3節 古代墓

火葬墓1基、木棺墓1基、焼土坑7基、土坑2基を当期の墓、もしくは墓関連遺構として報告している。だが、火葬墓1と焼土坑5を除き、時期の特定できる遺物が出土していない。なお、その他の遺構も、以下記述する理由により、当期の墓もしくは墓関連遺構と考えられ、当節で報告したい。

1. 火葬墓（図32、写真図版28）

火葬墓1 尾根の南東部の平坦地、3号墳から北西約15m、標高127.5mの地点に位置する。墓壙内に、焼骨が納められた蔵骨器を有する火葬墓である。蔵骨器は土師器甕（図36-14）で、須恵器壺蓋（図36-13）を蓋として利用していた。

墓壙は、径0.55～0.62m、深さ0.20mのやや不整形な円形をなす。床面に15cm程の2つに割れた長方形の石を設置している。この石は粗粒閃緑花崗岩で、被熱を受けると脆くなり割れることが多い。よって、石には明瞭な被熱痕跡が見られないが、2つに割れていることからすると、火葬時に棺台として利用された可能性が考えられる。下層の埋土は細粒砂を主体として細粒状の炭が多く混じり、若干である

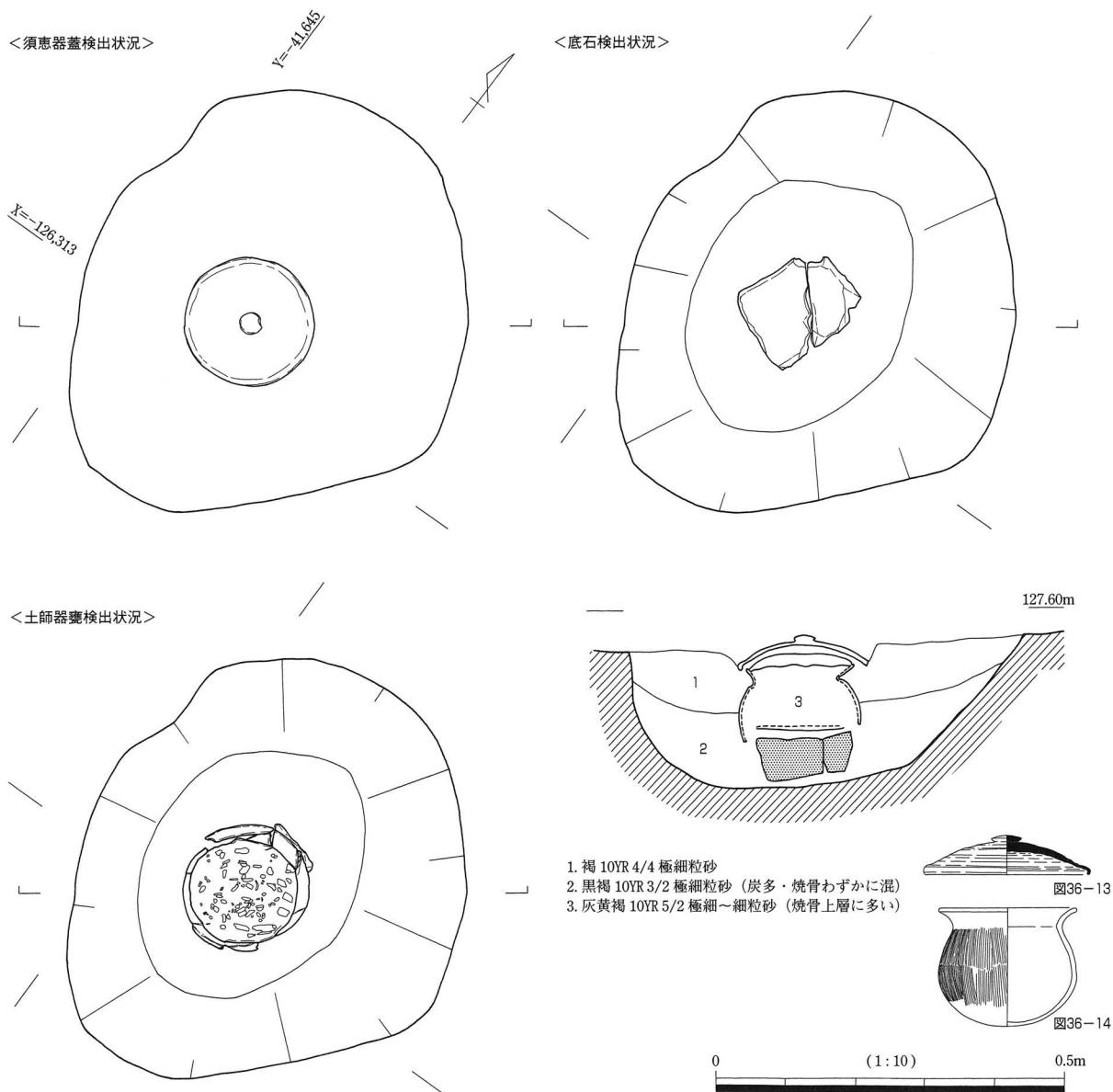


図32 火葬墓1平面・断面図

が焼骨が見られ、茶毘の際に生じた炭が利用された可能性が考えられる。

蔵骨器である土師器甕は床面の石に据えられていた。甕の縁から上に焼骨と少量の炭が混入する土が盛り上がっていたが、これは甕の底部が土圧の重みで陥没していたためと思われ、本来は甕内に全て納まっていたと考えられる。甕の内部の状況であるが、出土の状態で樹脂で固めて保存したため、現状での観察であるが、2cm以下の焼骨が甕内の上部に集中するようである。なお、混入している炭は少量であり、細粒状の炭はほとんどない。よって、甕内の土は火葬した場所のものではなく、別の場所のものと思われる。

以上のことから、土師器甕にある程度土を充填した上に、焼骨を納めたことが推定できる。X線写真による甕内の観察を行ったが、金属製品等の遺物は確認できなかった。

2. 焼土坑 (図33、写真図版29~31)

焼土坑は、壁面または底面に被熱痕跡が確認でき、そのほとんどが埋土下層に炭層を有する遺構である。焼土坑1~4・6は、尾根中腹の北西部の標高約128~129m付近に集中して位置している。一方、焼土坑5は尾根の東斜面寄り、焼土坑7は尾根中腹の南端寄りと、それぞれ単独で位置している。

焼土坑1 長軸が1.12m、短軸が0.81m、深さが0.30mを測る長方形の土坑である。長軸は、北より東に69°振る。壁面には厚さ2cm前後の赤色、床面には黒色の被熱痕跡が見られる。埋土の上層は、炭と焼土塊がわずかに混ざる。下層は、細粒状の炭で構成される炭層だが、焼骨を含まない。底面に、明瞭な被熱痕跡がない約20cmの大きさの角礫が1個検出された。

焼土坑2 長軸が1.23m、短軸が0.96m、深さが0.28mを測る長方形の土坑である。長軸は、北より西に68°振る。壁面全体に厚さ2cm前後の赤色の被熱痕跡が見られる。埋土の上層は、炭と焼土塊がわずかに混じる。下層は、焼骨を含まない炭層である。また、上層と下層の境には約20cmの明瞭な被熱痕跡がない角礫が2個検出された。

焼土坑3 長軸推定1.00m、短軸0.75m、深さ0.38mを測る長方形の土坑である。長軸は北より西に70°振る。残存している壁面には、厚さ3cm前後の赤色の被熱痕跡が見られる。埋土の上層には、焼土塊がわずかに混ざり、中央部が落ち込んだような堆積を見せる。下層は炭が多く混じるシルトで、焼骨を含まない。

焼土坑4 長軸1.16m、短軸0.74m、深さ0.50mを測るやや不整形であるが長方形の土坑である。この土坑の床面中央部に、径0.40m、深さ0.05mの円形の非常に浅い落ち込みを確認している。長軸は北より西に50°振る。南辺が、中世356号墓に削平されており、壁面には部分的に赤色の被熱痕跡を残すのみである。埋土の上層は炭がわずかに混ざり、下層が炭を多く混じる細粒砂で焼骨を含まない。

焼土坑5 1号墳の区画溝の北東コーナーから約1m東に位置する。長軸1.04m、短軸0.96m、深さ0.51mを測るほぼ方形の土坑である。長軸は北より東に80°振る。土坑の断面形態はやや逆台形状になっている。壁面全体に、厚さ2cm前後の赤色の被熱痕跡が見られる。埋土は、上層・下層に炭がわずかに混じる程度であり、焼骨を含まない。上層には20数個10~20cmの礫が落ち込むような状況で検出されていた。これが、地上から落ち込んだものであるならば、土坑上に盛土および石組との施設が構築されていた可能性も考えられる。しかし、それを裏付ける焼骨および鉄釘等が出土していないので、断定できない。遺物は、9世紀後半の灰釉陶器(図36-18)が上層の礫と共に出土している。

焼土坑6 焼土坑1~4が集中する所からやや離れ、約10m北西に位置する。長軸が1.05m、短軸が1.10m、深さが0.32mを測る方形の土坑である。長軸は北より東に48°振る。壁面には厚さ2cm前後の

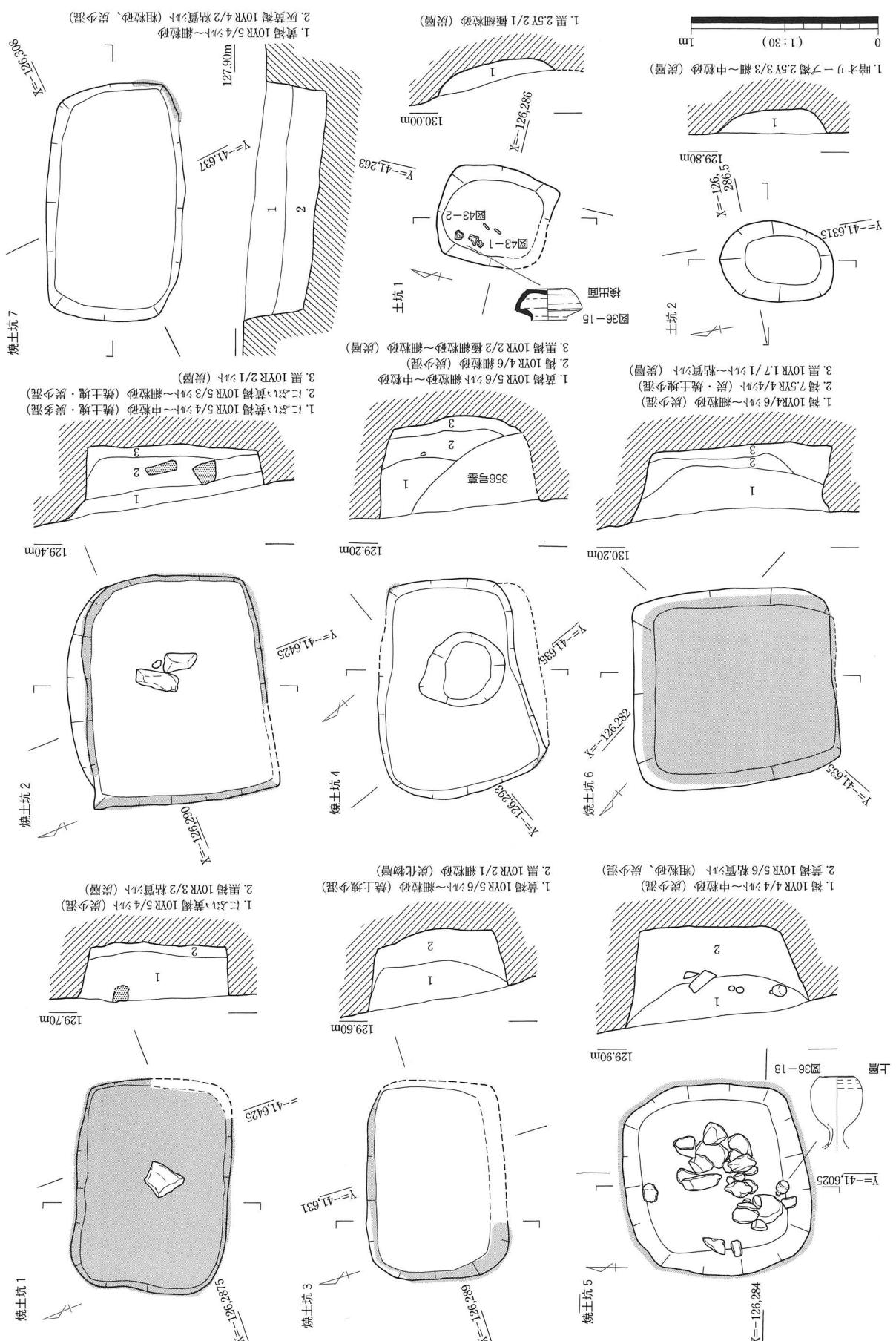
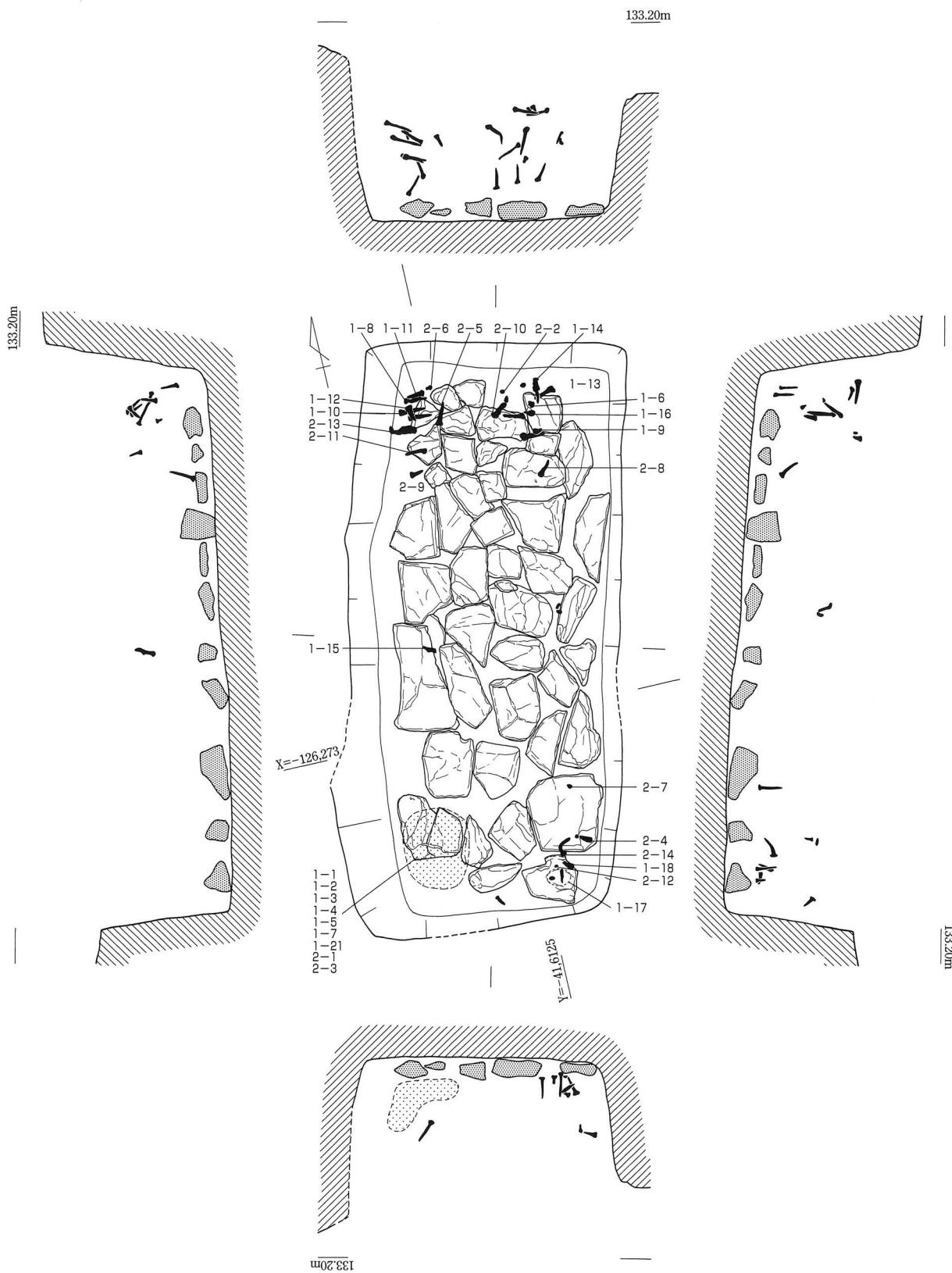


图33 烧土坑 1~7、土坑 1・2 平面・断面图



※鉄釘の左側のナンバーは、1が図41、2が図42に対応。
ドットの範囲は詳細な位置不明。

※鉄釘のみ立面図

図34 木棺墓 1 平面・断面図

0 (1:20) 1m

赤色、床面には黒色の被熱痕跡が各々見られる。埋土は、上層にはほとんど炭が含まず、下層が焼骨を含まない炭層である。

焼土坑7 火葬墓1の約10m北東に位置する。長軸1.28m、短軸0.75m、深さ0.29mを測る長方形の土坑である。長軸は北より西に62°振る。壁面には部分的に赤色の被熱痕跡が見られる。埋土は下層に炭が少量含まれる。

焼土坑の時期であるが9世紀後半の灰釉陶器が出土している焼土坑5のみ以外は確定できない。しかし、これらは長軸がおおよそ東西を指向する点で大半の中世墓とは異なっている。また、分布的にも中近世墓の群構成からはやや外れている。一方、古代との繋がりを考えると、尾根中腹の北西部の一定範囲に集中する焼土坑1～4・6の南側から3～5号墳にかけて8～9世紀の土器が多く出土している。さらに、焼土坑7は単独であるが火葬墓1と近接した位置関係にある。

以上のことから、これら焼土坑をは古代のものと考えたい。

焼土坑の性格であるが、火葬墓1の存在、出土土器に藏骨器とされる須恵器壺A等が数個あること、土坑が被熱していることから荼毘を行った火葬施設の可能性を考えたい。しかし、焼骨を含まない点から、火葬施設ではないとする向きが強く、この問題に関しては、第7章 第3節で詳述する。

3. 土坑（図33、写真図版30）

土坑1・2は、焼土坑1～4が所在する場所から北側の標高約130m付近に位置する。

土坑1 焼土坑1より北約1mの地点に位置する。長軸0.60m、短軸0.54m、深さ0.10mを測るほぼ方形の土坑である。埋土は焼骨を含まない細粒状の炭で構成される。遺物は、土坑の上層から、鉄釘2本および8世紀の須恵器壺（図36-15）片が出土した。須恵器片は第1～2層から出土した破片と接合している。

土坑2 焼土坑2よりも北約2mの地点に位置する。長軸0.60m、短軸0.41m、深さ0.15mを測る橢円形の土坑である。埋土は焼骨を含まない炭層である。遺物は出土していない。

土坑1・2も時期的には微妙であるが、焼土坑との位置関係から古代の遺構と考えたい。性格的には火葬に関する何らかの遺構と考えられるが、先の焼土坑と合わせて後に検討したい。

4. 木棺墓1（図34、写真図版30）

木棺墓1 尾根の傾斜が緩やかな標高133m付近、2号墳より北約6mに位置する。

墓壙は長軸1.98m、短軸0.93m、深さ0.53mの規模を測る。地形に沿って掘削されているため、床面の標高が北側より南側が0.1m低くなっている。長軸は北より東に13°振る。

墓壙内には、10～35cmの大きさの角礫が、ほぼ床面直上に若干隙間はあるが敷きつめられている。この敷きつめられた礫の上面は水平ではないが、その差は数cmの間に収まる。

埋土内から鉄釘が出土しているが、頭部で数えると35本で、計43本ある。一部記録前に取り上げたものがあるが、その配置からすると、幅50cm、長さ165cm程度の鉄釘を使用した組み合わせ式の木棺が想定出来る。鉄釘以外の遺物は、出土していない。

なお、埋土および鉄釘の出土状況からは、2次的な搅乱は想定できない。

以上のことから、本来、この墓には、副葬品等が存在していなかったと思われる。時期の明確な遺物は出土していないが、鉄釘が6号墳出土のものと酷似することや、1号墳の石室と同様に床面に角礫が敷かれていること等の類似性から古墳群に次ぐ時期であると考えている。

第4節 遺物

本調査で出土した古墳時代および古代の遺物には、主に、古墳や古代墓から土師器・須恵器の土器類や鉄簇・鉄釘等の鉄製品がある。また、古墳の石室からは、中世の瓦器椀や陶磁器類、石仏等もわずかに出土している。

出土遺物に関しては、実測可能な物について、総て図化し掲載している。

なお、中世の遺物に関しては、別項を設けているので参考されたい。

1. 土器

(1) 遺構出土の土器 (図36、写真図版32~34)

1). 3号墳出土土器 (図36-4-6.8)

3号墳の土器には、須恵器壺身が4点有り、いずれも、区画溝から出土したものである。

(6.8)は高台をもつ壺B身で、(6)は、下層から出土しており、口縁部が外方へわずかに開き、口縁部内外面に回転ナデ調整を施すが、見込み部分に不定方向のナデ調整で仕上げている。高台側部に強いナデを施すため、高台端部が外方へ張り出している。口縁部の2箇所に焼成後の打ち欠きがある。胎土は、1~4mmの砂粒を含むものである。(8)は、上層出土のもので、わずかに口縁部端部が外方へ伸び、口縁部端部が丸みをもつ。全体的に丁寧な回転ナデを施すが、見込み部に不定方向のナデが施される。底側部外面に高台を付した後回転ヘラケズリを施している。胎土に1~5mmの砂粒を含み、暗青灰色で断面が暗紫褐色である。

(4.5)は壺G身で、いずれも、上層から出土している。いずれも、口径に差異がないが、(4)がやや器高が低く、口縁部端部がわずかに外反し、(5)が口縁部が立ち上がる。いずれも、回転ナデを施し、底部

外表面がヘラ切り後未調整である。両者共に淡青灰色で、胎土に1~4mmの砂粒を含んでいる。

2). 4号墳出土土器 (図36-1-4.11.12)

4号墳出土の土器には、須恵器壺蓋が2点・壺身が1点、土師器甕が2点有り、須恵器が石室から出土しており、土師器の甕の内口縁部破片が墓壙から、完形のものが開口部列石南側から出土している。(1.2)は、壺G蓋で、(2)がほぼ完形で、(1)が約1/2残存している。いずれも、外面に回転ヘラケズリ、内面に回転ナデを施している。なお、かえりに強い回転ナデが巡る。宝珠つまみは偏平である。

両者ともに、淡青灰色で、胎土に1~4mmの砂粒を含んでいる。

(3)は、壺G身で、口縁部の約1/4が欠損している。口縁部がやや外方へ伸びる。見込み部は一定方向のナデを施し、底部外表面がヘラ切り後未調整である。暗青灰色で、胎土に1~2mmの砂

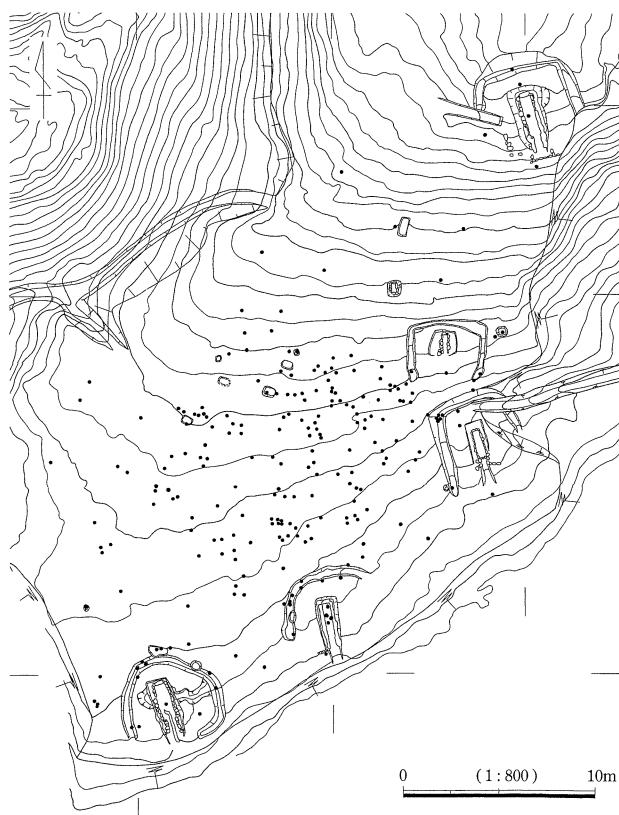


図35 古墳群・古代墓周辺出土土器分布図

粒を含んでおり、黒色粒子を多量に含む。

以上の3点は、口径からするといずれかが組み合わされ、蓋壺のセットになると考えられたが、焼成や胎土からすると差異があるため、別々に組み合わされたものと思われる。

(11.12)は、土師器甕Aで、内弯ぎみに外方へ伸びる口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ、外端面をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲しわずかに膨らむ体部に丸底である。体部および底部外面に縦方向の刷毛目を施し、体部内面に板状工具でナデを施し、底部内面に指押さえを残している。外面に煤が付着している。橙褐色で、胎土に1~4mmの砂粒を含んでいる。

3). 5号墳出土土器 (図36-9.10.16.17)

5号墳から出土した土器には、須恵器1点、土師器3点があり、いずれも、区画溝から出土したものである。

(16)は須恵器壺Lで、下層から出土しており、体部上半を欠損する。口縁部は外反し、端部がわずかに立ち上がり凹面をもち、筒状の短い頸部に肩の張る体部をもつと思われる。底部は、平底で高台をもつ。全体に回転ナデを施し、底部外面に回転ヘラケズリが残る。底側部および高台側部に布目圧痕が残り、その布が平織であることが判る。暗青灰色で、断面が暗紫褐色である。胎土に1~4mmの砂粒を含んでおり、黒色粒子を多量に含む。

(9)は土師器皿Aで、口縁部の約1/6を残存している。口縁部がわずかに外反し、口縁部端部が丸みをもち、端部内面に沈線が1条巡る。底部外面にヘラケズリ、口縁部内外面にヨコナデが施される。見込みの暗紋は表面磨滅のため不明である。橙褐色で、胎土は緻密である。

(10)は土師器皿Cで、約1/4残存している。口縁部がわずかに外反し、口縁部端部が丸みをもち、端部内面に沈線が1条巡る。底部は平坦で内面ナデ、外面にヘラケズリを施している。暗紋は、施されない。橙褐色で、胎土は緻密である。

いずれの土師器皿も、下層からの出土である。

(17)は土師器甕Cで、約1/2を残存しており、上層からの出土である。口縁部が外反し、口縁部端部が丸みをもち、頸部が「く」の字状に屈曲し、わずかに膨らむ体部に丸底である。口径が、最大径をもつ。体部外面に縦方向の刷毛目を施し、指押さえを残している。体部内面は、上半部がナデ、下半部が指押さえを残し、体部上半に粘土紐の継ぎ目を残している。橙褐色で、胎土に1~4mmの砂粒を多量に含んでおり、特に、くさり礫を多量に含む。やや、長胴形の甕である。胎土から、在地産のものと思われる。

4). 6号墳出土土器 (図36-7)

6号墳から出土した土器は須恵器1点のみ、石室の奥と開口部付近に割れた状態で出土している。

(7)は壺G身で、ほぼ完形である。口縁部はやや外方へ伸びる。焼け歪みが有るために、一見すると口縁部がかなり開いているように感じられるが、本来は、断面の傾きであったと考えられる。見込みに一定方向のナデを施し、底部外面がヘラ切り後未調整である。中央部の粘土の盛り上がり上に籠記号を施している。暗青灰色で、胎土に1~4mmの砂粒を含んでおり、黒色粒子をわずかに含んでいる。口縁部外面に自然釉が付着している。

5). 火葬墓1出土土器 (図36-13.14)

火葬墓1から出土した土器は、藏骨器に使用された土師器甕およびその蓋の須恵器壺蓋である。

(13)は須恵器壺B蓋で完形である。つまみは宝珠が偏平になり、天井部がやや膨らみをもち、口縁部端部はわずかに垂下し外端面をもち、かえりが無い。天井部外面に回転ヘラケズリを施す以外は回転ナ

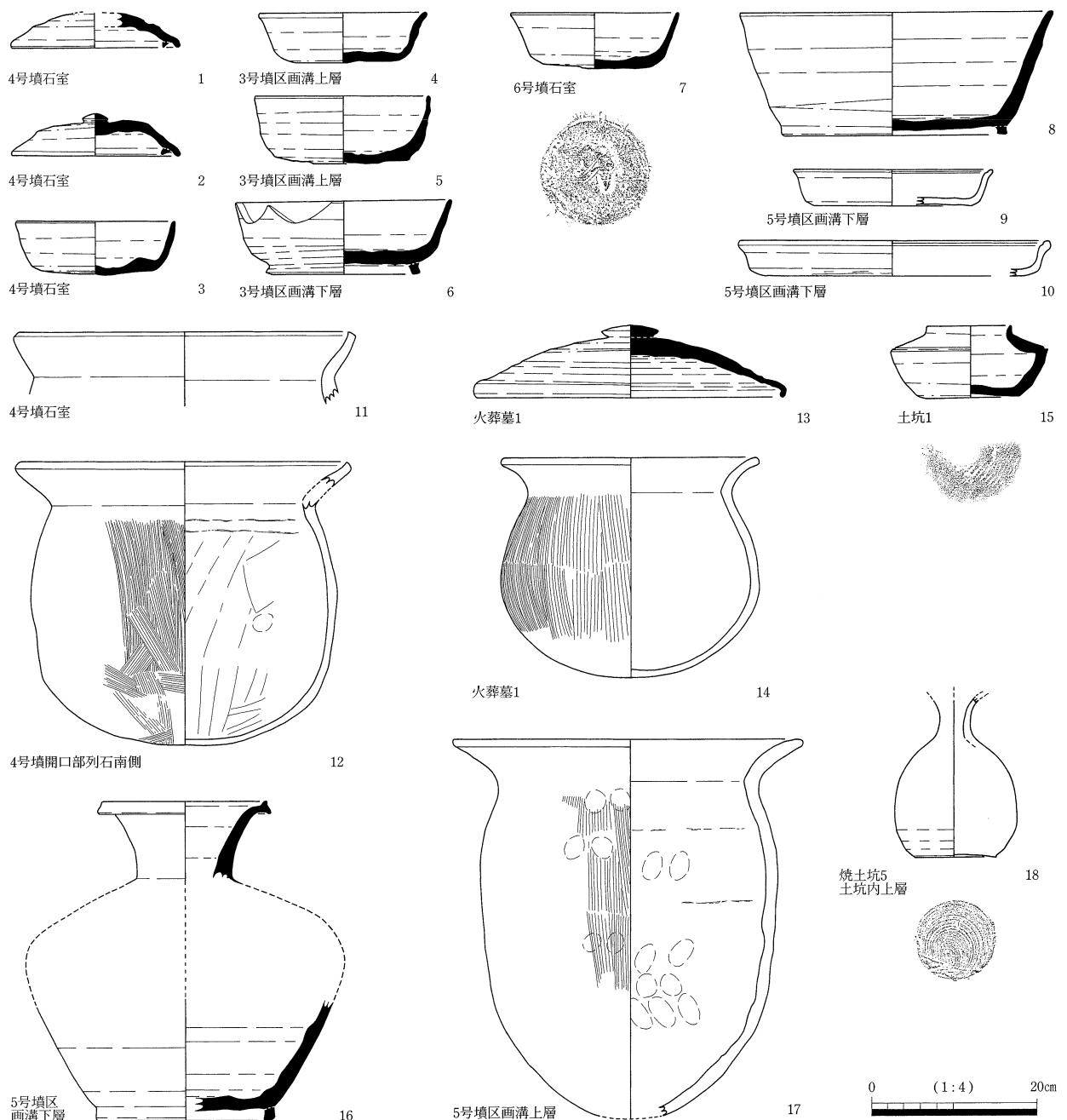


図36 古墳群・古代墓出土土器

デである。外面に自然釉が残る。淡灰色で、胎土に1~4mmの砂粒を含んでいる。

(14)は土師器甕Aで完形である。口縁部は外反し、口縁部端部が面をもち、やや偏平な体部に丸底である。体部外面に粗い刷毛目を施している。内面の調整は、内部の人骨を保存するために土器ごと処理をしたために不明である。淡橙褐色で、胎土に1~4mmの砂粒を多量に含んでいる。

6). 土坑1出土土器(図36-15)

土坑1から出土した土器には、小型の須恵器短頸壺が1点ある。約3/4残存しており、第2層から出土したものと接合している。短く立ち上がる口縁部の端部が尖りぎみに終わり、肩の張る体部で、底部がわずかに上げ底になる。肩部に凹線が1条巡る。底側部にヘラケズリが施され、底部外面にヘラ切り後刷毛目が施されている。肩部外面に自然釉が付着しているものの内面に認められないため、本来、蓋があったものと考えられる。灰色で、胎土に1~3mmの砂粒を含む。

7). 焼土坑 5 出土土器 (図36-18)

焼土坑 5 から出土した土器は、灰釉陶器の小型瓶子が 1 点で口縁部端部を欠損している。短い筒上の頸部にやや下ぶくれの体部に平底のものである。頸部外面搔き上げるようにヘラケズリ状ナデを施し、体部外面回転ナデ、底側部に回転ヘラケズリを施している。底部外面は、糸切りである。淡黄褐色で、胎土に 1~3mm の砂粒をわずかに含んでいる。やや焼きの甘いものである。

(2) 第 1 ~ 2 層出土土器 (図37、写真図版33.34)

古墳および古代墓を覆う第 1 ~ 2 層から出土した土器には、古墳時代や古代の遺物、中近世の遺物を含んでおり、ここでは、古墳時代から古代の土器を取り上げることとする。その出土地点を図33に示している。それらの遺物は、墳墓群全域に拡散しているものの、北半部では僅少で、7 世紀台の土器が古墳群周辺で出土し、8 世紀以降の土器が古墳群周辺および焼土坑群より南側の南半部に集中する傾向が読み取れる。

以下、須恵器と土師器に区分して記述する。

1). 須恵器 (図37-8~20.24~29)

須恵器には、壺 G 蓋・壺 G、壺 B 蓋・壺 B、壺 A、甕、壺 A 蓋・壺 A、壺 Q、壺底部がある。

壺 G 蓋(1.2)は、いずれも破片でつまみ部を欠損している。両者ともにかえりをもつもので、(1)は天井部の器壁が厚いものである。青灰色で、1~3mm の砂粒を多く含んでいる。(2)は、かえりの外側に強い回転ナデを施している。灰色で、1~3mm の砂粒を含んでいる。

壺 G 身(3~6)は、いずれも口径が 11cm 前後で、口縁部がわずかに外方へ伸びているが、(6)がその開きがやや大きい。(5)の口縁部内面に漆膜がわずかに付着している。淡青灰色で、1~3mm の砂粒を含んでいるものである。

壺 B 蓋(22~24)は、いずれも、つまみ部を欠損している。かえりのないもので、(22.23)が口径がほぼ同じで、口縁部端部が垂下し外端面をもつもので、(24)が、口縁部端部が外方へわずかに伸び凹面をもち、天井部が平坦である。青灰色で、1~3mm の砂粒を含んでいるものである。

壺 B 身(10)は、口縁部がわずかに開き、口縁部端部が丸みを持つ。底部外面にわずかに回転ヘラケズリの痕跡が残り、高台を付するために回転ナデを施している。内面見込み部に不定方向のナデを施している。暗青灰色で、1~3mm の砂粒を含んでいるものである。

壺 A 身(11.12)は、前者が底部が丸底ぎみになると思われる。後者が口縁部が外方へ伸び、底部が平坦である。底部外面が未調整で、内面見込み部に一定方向のナデを施している。淡青灰色で、1~3mm の砂粒を多量に含んでいるものである。

甕(20.21)は、いずれも、口縁部のみを残存しており、他に体部破片が出土しているがほとんどのものが接合しなかった。(20)は、口縁部が大きく外反し、口縁部端部が面をもち、下端に粘土紐を板状に張り付ける。暗青灰色で断面暗紫褐色をしており、一見、6 世紀代のものと思われたが、その時期のものが 1 点も出土していないために、7 世紀代のものと考えられる。1~3mm の砂粒を含んでいるものである。(21)は、内弯ぎみに伸びる口縁部の上端が凹面をなし、口縁部外面に、列点紋および波状紋間凹線紋を 1 条巡らしている。淡青灰色で、1~3mm の砂粒を多量に含んでいる。内外面に自然釉が付着している。

壺 A 蓋(25)は、つまみ部を欠損し、約 1/3 残存している。やや内弯ぎみに垂下する口縁部の端部は段をもち、尖り気味に終わる。天井部内面に不定方向のナデを施す。暗灰色で、1~3mm の砂粒を多量に含

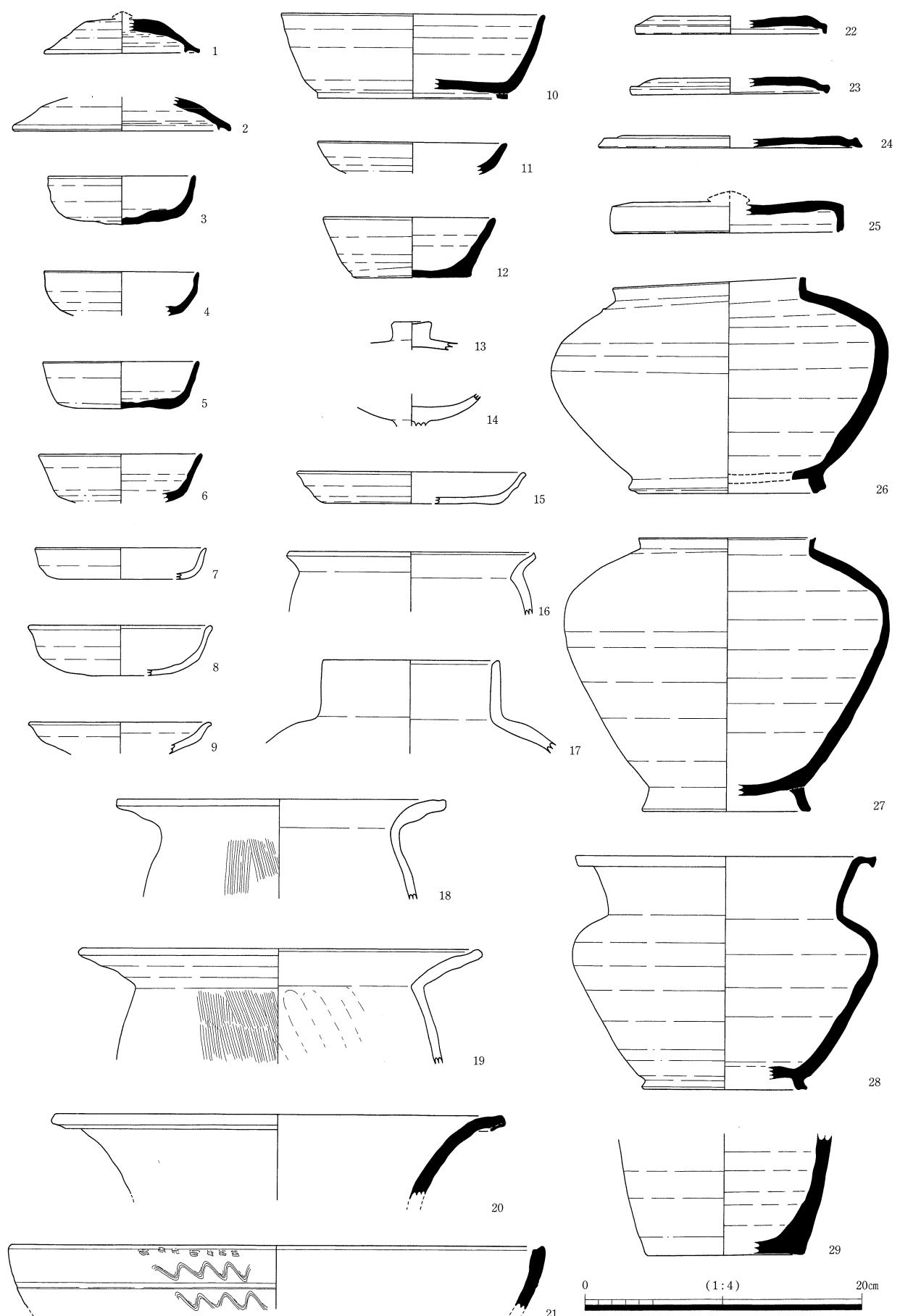


図37 第1～2層出土土器

み、黒色粒子も多量に含んでいる。外面全体に、自然釉が付着する。

壺A(26.27)は、復元完形である。(26)は、短く立ち上がる口縁部がわずかに開き、口縁部の上端が面をなす。体部は肩が張り最大径が器高より大の横長な器形である。高台は厚みのあるもので、端部がわずかに凹面をなす。暗灰色で、1~3mmの砂粒を多量に含み、黒色粒子も多量に含んでいる。外面全体に、自然釉が付着する。底部に打ち欠きが施されている。焼け歪みがわずかにある。

壺の体部に蓋の痕跡が残っていることと、胎土が同一なこと、自然釉の掛かり具合から、(25.26)が一対のものと考えられる。

(27)は、短く立ち上がる口縁部の端部が内傾する凹面をなす。肩が張り裾すぼまりの体部に、わずかに外方に開き、下端に面をもつ高台を付す。最大径と器高がほぼ同一であるが、(26)と比較して丈高なものである。体部外面に蓋の痕跡が窺われる。灰色で、断面紫褐色である。胎土は緻密である。肩部外面に自然釉が付着している。

壺Q(28)は、復元完形で、外方へ伸びる口縁部が屈曲しさらに外方へ開き、口縁部端部が上下にわずかに拡張し、外端面をもつ。短い頸部に、肩が張り裾すぼまりの体部で、高台をもつ。底部が打ち欠かれたとも考えられる。底側部に回転ヘラケズリ、底部見込みに不定方向のナデを施す以外は、回転ナデである。淡青灰色で、1~3mmの砂粒を多量に含み、黒色粒子も多量に含んでいる。外面全体および口縁部と体部下半内面に自然釉が付着している。

壺底部(29)は、平坦な底部をもつもので、器壁の厚いものである。底側部外面に回転ヘラケズリを施し、底部外面が未調整である。青灰色で、1~3mmの砂粒を含んでいる。

2). 土師器 (図37-7~9.13~19)

土師器には、蓋、高坏、坏、椀、皿、壺、甕などがある。

坏B蓋(13)は、つまみ部のみ残存しており、上端がわずかに窪む。内面は、ナデ調整を施す。橙褐色で、1~3mmの砂粒を含む。

高坏(14)は坏部のみ残存している。表面磨滅のため、調整が不明である。淡橙褐色で、1~3mmの砂粒を多量に含んでいる。

(7)は皿Cで、口縁部の小破片である。口縁部端部は外面のヨコナデ調整により、わずかに外方へつまみ出され、尖りぎみに終わる。底部内外面に、ナデ調整を施している。橙褐色で、胎土は緻密である。

(8)は椀Cで約1/5残存している。わずかに外方へつまみだされた口縁部端部が内傾する面をもつ。内面に暗紋は認められない。底部内外面に、ナデ調整を施している。橙褐色で、胎土は緻密である。

(9)は坏Aで、口縁部の小破片である。口縁部端部がわずかに外反し、端部が尖りぎみに終わる。表面磨滅のため、調整が不明である。橙褐色で、1~3mmの砂粒を含む。

(15)は皿で、約1/3残存している。口縁部が外方へ開き、口縁部端部は丸みをもつ。口縁部外面の調整は、ヨコナデを2段に施している。底部外面は、ヘラケズリ状ナデである。内面は、表面磨滅のため調整不明である。橙褐色で、胎土に1~4mmの砂粒を含む。

(16)は甕Aで、口縁部破片である。口縁部が短く外反し、口縁部端部がわずかにつまみ上げられ、外端面をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、やや膨らむ体部をもつと思われる。外面は、表面磨滅のため調整不明である。口縁部内面ヨコナデ、体部内面ナデである。淡橙褐色で、胎土に1~3mmの砂粒を含む。

(17)は、直口壺で、口縁部から体部上端にかけての破片である。口縁部端部は内傾する面をもち、肩

の張る体部をもつと思われる。内外面に表面磨滅のため、調整不明である。橙褐色で、胎土は緻密である。

(18.19) は甕Cで、いずれも口縁部破片である。(18)は、外反する口縁部の端部が面をもち、頸部の屈曲がやや丸みをもつ。口縁部内面に刷毛目状ナデを施し、体部外面に縦方向の刷毛目を施す。淡橙褐色で、胎土に1~4mmの砂粒を含み、クサリ礫も多量に含んでいる。(19)は、外反する口縁部の端部が丸みをもち、内側がわずかに肥厚する。頸部は「く」の字形に屈曲する。口縁部外面に強いヨコナデが2条施され、体部外面に縦方向の刷毛目が施されている。口縁部内面が、横方向の刷毛目状ナデ、体部内面がヘラケズリ後指ナデを施している。橙褐色で、胎土に1~3mmの砂粒を含む。体部外面に煤が付着している。

以上、古墳から古代にかけての土器に関して概観してきた。小片で図化が不可能であったものに、須恵器壺B蓋、壺G蓋・壺、壺Qなどがわずかに出土している。須恵器の図36-15・図37-28、土師器の図36-7.8.13、図36-14.17および図37-9.14.15.16.18.19に、それぞれ胎土の類似性を感じられ、土師器の後者は、在地産のものと考えられる。

土器の詳細に関しては、第7章 第1節を参照されたい。

2. 金属製品他

金属製品として、鉄釘・鎌・鉄鎌・刀子・鉄斧等、他に鉄滓が出土している。金属製品は、基本的にX線写真を撮影しており、それにより観察・実測を行っている。

(1) 鉄釘・鎌 (図38~44、写真図版34~37)

古墳群から出土した鉄釘は総計で120本、鎌は総計4本である。これらは、1~4・6号墳、木棺墓1、土坑1から出土している。鉄釘は全て鍛造によるものであるが、頭部形態に幾つかのパターンがある。また、鉄釘の大半には木質が付着しているため、木棺墓1以外にも木棺の緊結具に使用されたものと思われる。

1). 頭部の形態 (図38)

当墳墓群では、古墳群のみならず中近世墓群からも鉄釘が出土している。これらは、全て鍛造で、まず、鉄片から基部を作りだしている。この基部は基本的に頭部側から先端部に向かって細くなるという形態を持つ。次に、頭部の成形を行うのであるが、その技法の違いが頭部形態に表れる。

以下、頭部形態を側面から見た時の形状により分類する。

A類…頭部が基部より横に突き出ないもの。

B類…頭部が基部より横一方向もしくは上方向に突き出るもの。

C類…頭部が基部より横二方向に突き出て、円形の鉢状を呈するもの。

この内、B類が頭部を作り出した後の処理により、さらに細分できる。

古墳群で出土しているものは、B・C類に当たる。ここでは、古墳群で出土したタイプのみの分類を記述し、中近世墓群から出土した鉄釘は、第5章第6節第3項、各々の比較検討を第7章第8節で行う。

B類は、基部から叩き延ばして頭部を作りだすものである。頭部は正面から見ると、全て基部の幅より左右に長く逆台形もしくは長方形を呈している。だが、頭部の折り曲げ方の違いにより、側面の形態に差異が確認できる。基部の根元で折り曲げずに頭部を上方に向かって作りだすものをB I類、基部の根元で折り曲げて、側面から見ると横に向かって作りだすものをB II類とした。B I類は基部の厚さよりも頭部が短く、B II類は逆にそれよりも長く、この差異が鉄釘の機能差を表している可能性がある。

B I 類は基部の根元で折り曲げずに、その後の頭部の作りだしの違いにより、さらに4細分している。古墳群では、直線的に2つに折り曲げるB I ②類のみが出土している。

B II 類は基部の根元で折り曲げた後の頭部の作りだしの違いによりさらに6細分している。古墳群では、基部の根元からわずかに頭部を横に作りだすB II ①類、基部の根元で一度のみ折り曲げ直角を呈するB II ②類と、その後わずかに下方に折り曲げるB II ③類が出土している。

C類は頭部を平面形に円く作りだすものである。

2). 木目の付着状況 (図38)

古墳群出土の鉄釘は大半木質が付着しており、その木目の付き方に大きく3つのパターンが認められる。これは板材の組み合わせ方の違いに由来するものであろう。以下、木目の分類を行う。

a類は、鉄釘の頭部側に縦方向、先端側に横方向の木目が走るタイプ。

b類は、鉄釘の正面もしくは側面どちらかに、頭部から先端まで横方向の木目が明瞭に走るタイプ。

c類は、鉄釘の正面の頭部側に明瞭な横方向の木目が走り、側面の先端側にはあまり木目が明瞭でないか斜め方向に走るタイプ。または、その逆で正面の頭部側にあまり木目が明瞭ではないか斜めに走り、側面の先端側に明瞭な横方向の木目が走るタイプである。

このように木目を観察していくと、木目の方向もしくは付着具合の違いがある部分がある。この部分は、板材が変わっていることが判り、板の厚さが判る。

この木目の付着状況で、木棺のどの部位を接合していたのかが推察できる。古墳群では、木棺墓1が搅乱を受けておらず、木棺の復元が可能である。この問題についても後述する。

以下、各遺構ごとにその特徴をまとめると。

3). 2号墳出土鉄釘 (図39-6~8.16~18)

石室内から6本出土している。全て頭部がなく、形態は不明である。(6)は頭部・先端部共に欠損しており、残存長で12.1cmを測る。(16~18)は先端部が残存しており、他の遺構出土の鉄釘と比べると太く先が丸い印象を受ける。木質が両面共に残存しており、付着している木目から複数の板材のものと確認でき、板材を繋結した可能性が考えられる。鉄釘とするには全長が長すぎることや、先端部が丸みを帯びていることおよび頭部が検出されていないことなど、若干の疑問が残る。また、石室は後世の搅乱を受けていない様子だが、出土状況からは木棺等に復元できない。しかし、関部が見られないことから鉄鏃とは考え難いこと、板材に打ちつけたと考えられることから、便宜的に鉄釘と称している。

4). 3号墳出土鉄釘 (図39-1~5.9~13)

石室内から21本、区画溝内から1本、計22本出土しており、図化したのは10本である。石室内出土のものは後世の搅乱を受けているため、原位置を保っていない。

(1.2.5.9.10.12)は頭部形態がB II ①類である。完形のものは、(2)のみで全長6.7cmを測る。このタイプは頭部の側面の幅が基部の厚さよりも短いが、

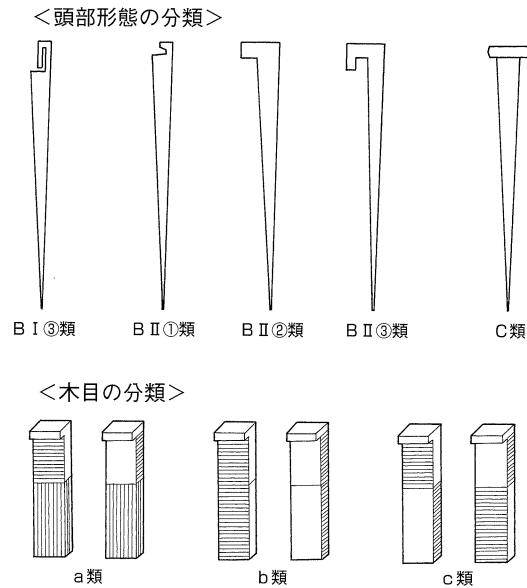


図38 古墳群出土鉄釘の分類

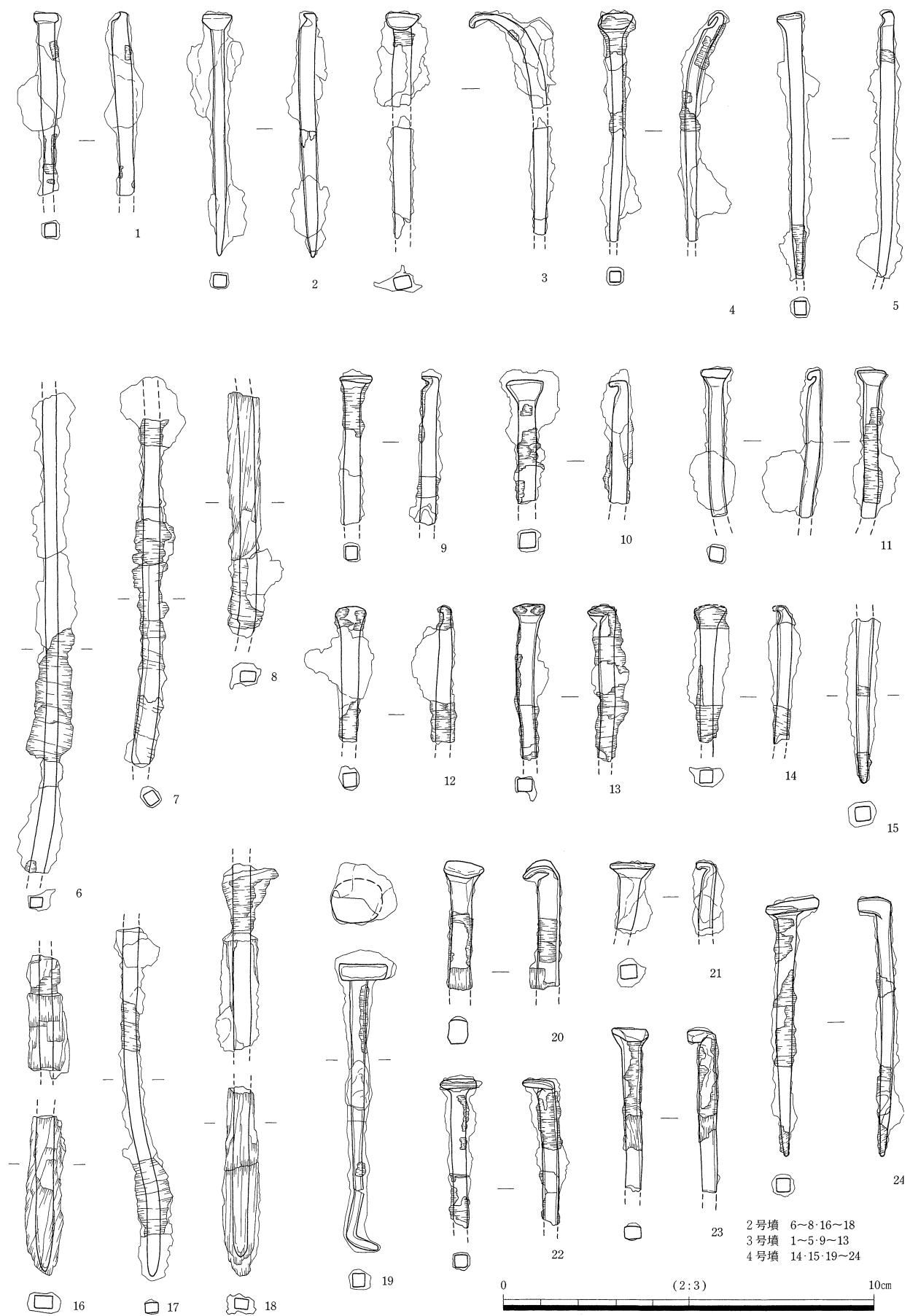


図39 2・3・4号墳出土鉄釘

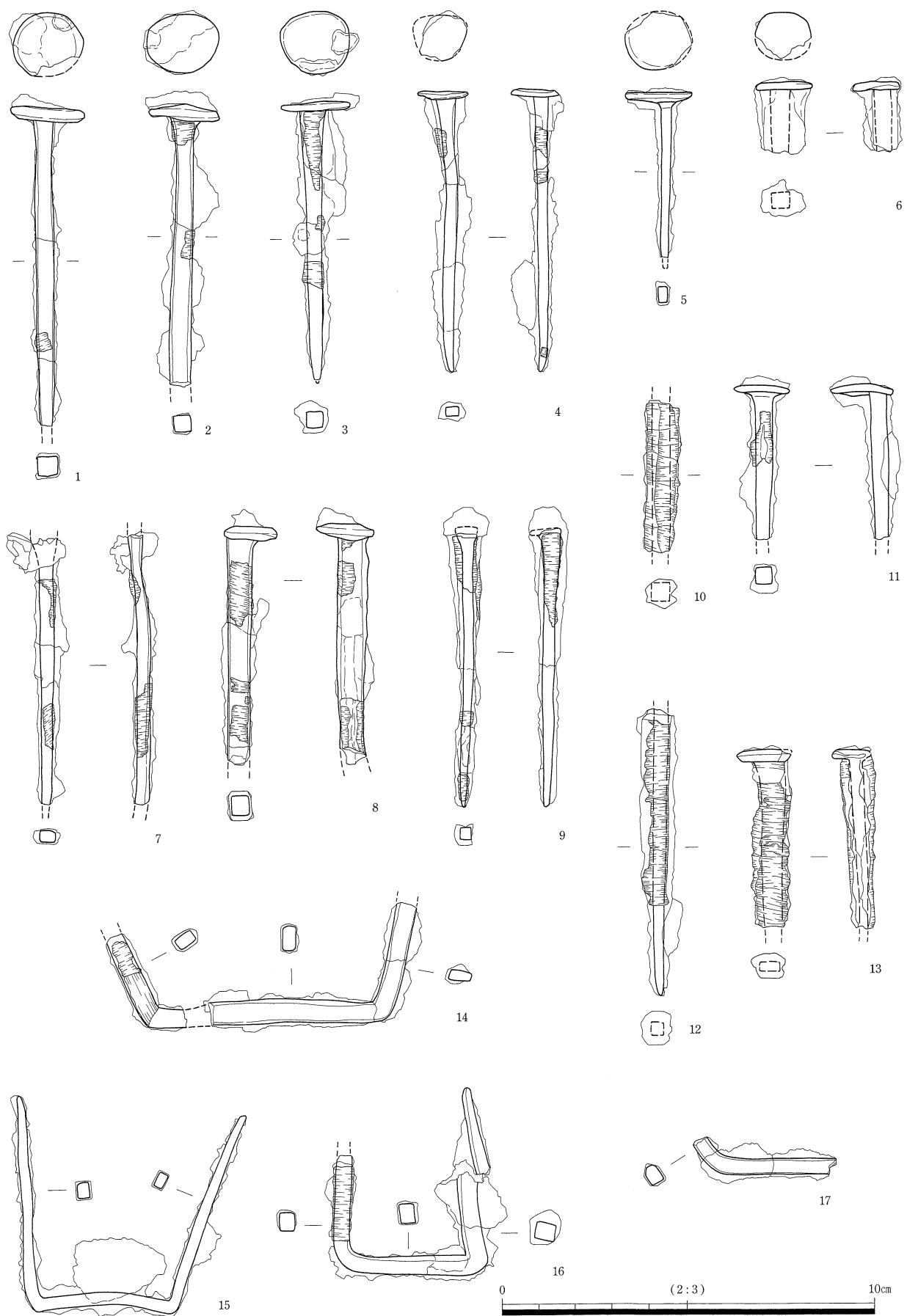


図40 6号墳出土鉄釘・鎌 (17のみ4号墳出土)

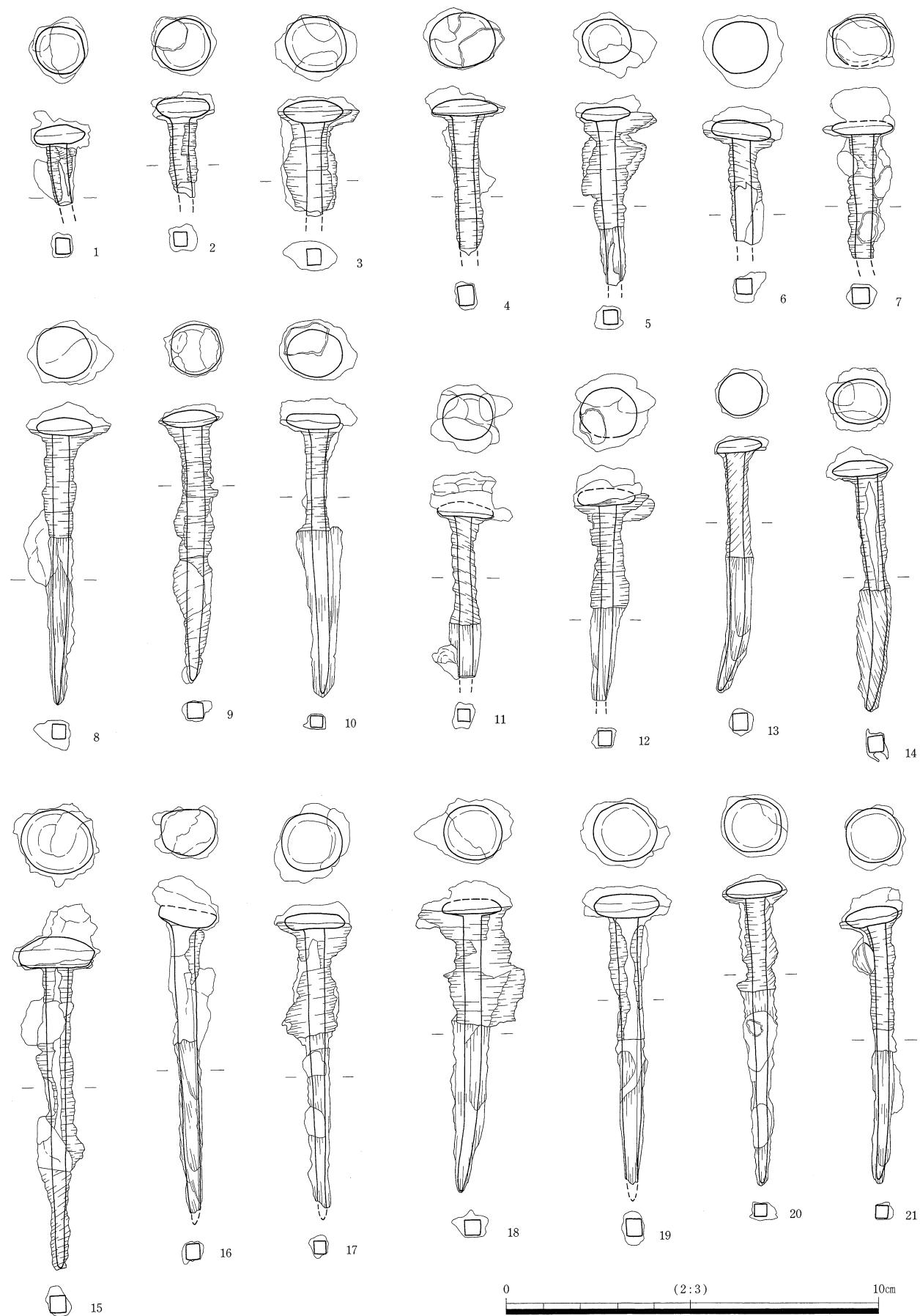


図41 木棺墓 1 出土鉄釘 (1)

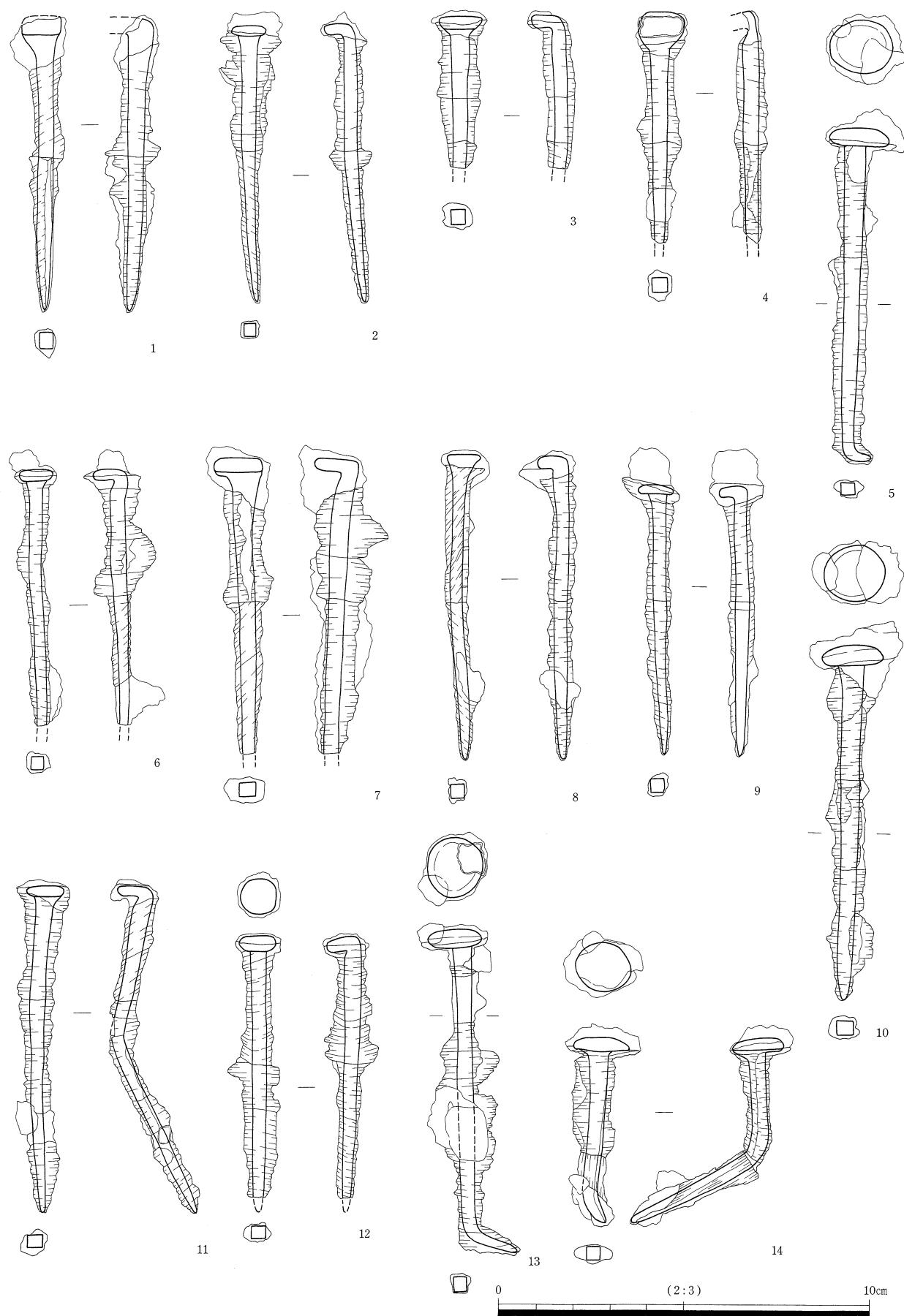


図42 木棺墓1出土鉄釘 (2)

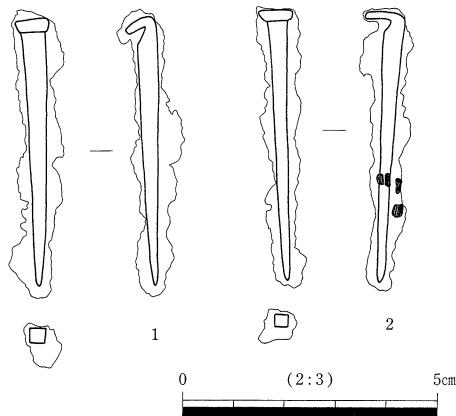


図43 土坑1出土鉄釘

(9)だけが基部の厚さと同じ幅である。

(4)はB I ②類である。頭部は直線的に折り曲げており、側面の幅が基部の厚さと同じくらいである。(10.13)はB II②類である。(10)は(13)よりも引き延ばした頭部の厚さが薄く、B II①類との中間的な要素が感じられる。

(11)はB II③類である。頭部を一度直角に折り曲げたあと、基部の厚さと同じくらいでわずかに下方に折り曲げている。

木目は、(1.9~13)がb類で、(4)がc類である。板の厚さは、2.5~2.9cmの幅に分布する。

5). 4号墳出土鉄釘・鎌 (図39-14.15.19~24、図40-17)

石室内から鉄釘が18本、鎌が1本出土している。図化したのは鉄釘8本、鎌1本である。石室内は後世の搅乱を受けており、原位置を保っていない。

(14)はB II①類である。(19)は頭部形態がC類であるが、頭部の貼り付けは中央ではなく、やや一方に偏っている。先端が直角に折れているが、全長は復元すると8.8cmを測る。(20)は古墳群のものでは一番薄く頭部を引き延ばしており、基部の根元で直角に折り曲げた後、その先端を下方に緩く曲げている。使用による変形も考えられるがB II③類とした。(21~24)はB II②類である。頭部の引き延ばす厚さに違いがあり、1mm前後と薄く引き延ばす(21.22)と、それに比べると3mm前後と厚い(23.24)に分けられる。(24)のみ完形で全長7.0cmを測り、頭部の幅が1.4cm×0.9cmと他のものに比して大きい。

木目は、(14.19.20)がb類、(22)がc類、(23)がa類である。板の厚さは2.5~2.7cmの幅に分布する。(図40-17)は、残存部分は幅0.5cm、厚さ0.4cm程のもので、それが屈曲していることから鎌と思われる。

6). 6号墳出土鉄釘・鎌 (図40-1~16)

石室内から鉄釘が23本、鎌が3本出土している。図化したのは鉄釘13本、鎌3本である。石室内は後世の搅乱を受けており、原位置を保っていない。

(1~6.8.11.13)はC類である。これらは円形の頭部を基部に貼り付けたものである。(1~4.6)は、ほぼ頭部の中央に基部が貼り付けられているが、(5.8.11.13)は頭部の一方の端に偏って付けられている。全長は、およそ3区分できる(5)は先端が欠損しているが5.0cm前後、(3.4)が7.6~7.7cm、また(1.2)は欠損の状況からそれよりは長くなるようである。頭部で見ると、(1~3.5)は径1.8~2.0cm前後であるが、(4.6.8.11)は1.2cm~1.5cm前後である。(9.12)は、頭部が欠損しているが、錆の付着状況およびX線写真の観察によれば、欠損した上面が平坦であり、C類の頭部が貼り付けられていたとも考えられる。そう仮定すれば、全長が7.7~8.0cm前後のものが推定できる。

木目は(3.8.9)がb類、(7)がc類である。板の厚さは(2)のみ観察が可能で2.8cmである。

(15.16)は、直角に屈曲しており、両先端が尖っており鎌である。しかし、これらに比べると(14)は先端部が欠損していること、やや丸みを帯びた屈曲であること、基部の厚さが幅よりも広いことなど、普通鎌とされているものとはやや違った印象を受ける。しかし、先端部に木質が残存することからここでは鎌の可能性が高いとして報告する。

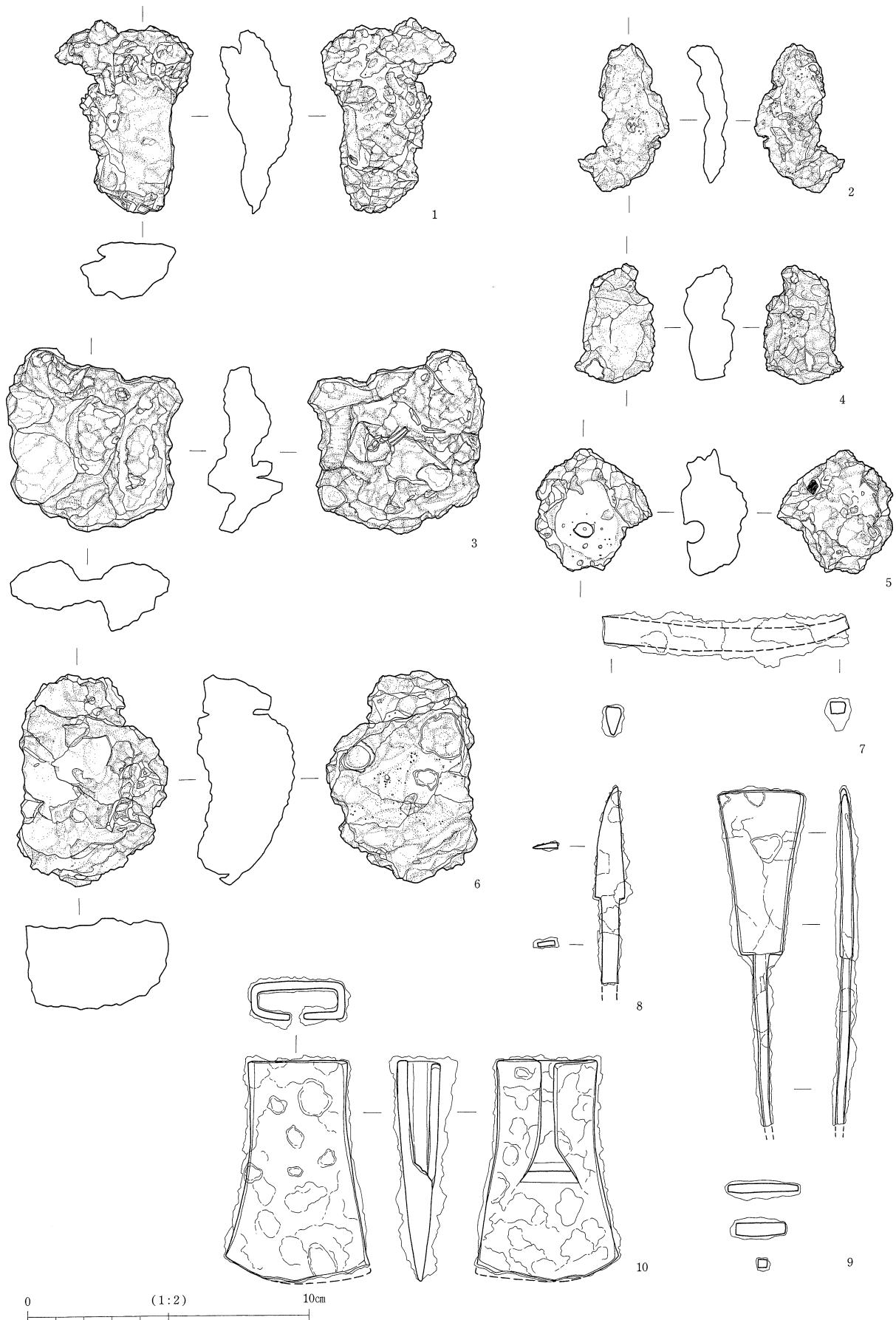


図44 古墳群出土鉄製品・鉄滓

7). 木棺墓 1 (図41、42)

墓壙内から43本出土している。図化したのは35本である。墓壙内は攪乱を受けておらず、木棺の規模・構造が良好に復元でき、その詳細は第7章 第7節で行う。

(図41-1~21、図42-5.10.12.13)は頭部形態C類である。これらは全長で見ると、(図41-9.10.11.13.14.21、図42-14)が6.8~7.6cm、(図41-8.17.18.19.20、図42-8)が7.9~8.5cm、(図41-15、図42-5.11.13)が9.0~9.7cmに分けることができる。頭部は、径1.4~1.8cmのものが一番多いが、やや小さい(5.13)と、大きい(15)がある。

木目は、a類のものが多いが、b類が(図41-9.13.15、図42-13)、c類が(図42-5.10)である。

(図42-1~4.6~9.11.12)は頭部形態B I ②類である。全長は、7.1~7.9cmのものが多く、(11)のみ9.7cmを測る。(12)は、頭部の平面形が丸く見えるが、C類のように基部に貼り付けるものではない。木目は、b類とc類である。

8). 土坑 1 (図43)

(1.2)共に、頭部形態B II ②類である。全長が共に5.4cmで、古墳出土のものに比べると短い。また木目が確認できること、(2)に炭が付着していることから、中世火葬場出土鉄釘との比較で被熱を受けた可能性がある。

(2) 刀子・鉄鎌・鉄斧 (図44-7~10)

(7)は6号墳の南斜面付近、(8)は1号墳の区画溝北側で出土した刀子である。(7)は錆があまりにも厚いため、関部があるかは不明であるが、刃部は確認できた。(8)は両関部を有するものであるが、刃部は4.0cm、厚さは2mmと非常に薄く、実用品であったかは不明である。(9)は3号墳石室から出土した平根系方頭式鉄鎌である。頸部が欠損している。(10)は第2層より出土した袋状鉄斧である。鍛造によるものである。袋部の断面形態は長方形を呈し、後面側に隙間を有するものである。斧身は肩部がなく、側面は無段で等厚の形態で、刃部は偏りのない両刃のものである。

(3) 鉄滓 (図44-1~6)

鉄滓が6点出土している。(1~3)は1号墳の石室開口部付近から出土しており、後世の攪乱を受けており原位置を保ってはいないが、石室内から出土している。(4~6)は中世墓の墓壙内から出土しているが、その状況から古墳群から混入の可能性が強いと判断した。

これら鉄滓は、金属学的分析を行っておらず、考古学的分析による観察のみに留めた。また、鉄滓に含まれる金属鉄の量つまり「メタル度」は、鉄塊系遺物対応に調整された埋蔵文化財用特殊金属探知機MR-50Bを用いて判定している。

(1)は不定形鍛冶滓で本来は椀形鍛冶滓であったと思われる。メタル度はなく、炭の痕跡が上面に数カ所見られる。(2)は不定形鍛冶滓である。メタル度はなく、気孔が下面に見られる。(3)はほぼ完形の椀形鍛冶滓である。メタル度はなく、炭の痕跡が下面に数カ所見られる。(4)は不定形鍛冶滓である。メタル度が高く(L-10~20mmの大きさの金属鉄に反応)、体積のわりには重量が32gと重い。(5)は不定形鍛冶滓で本来は椀形鍛冶滓であったと思われる。メタル度はなく、上面は滑らかである。(6)はメタル度が高い(L)含鉄椀形鍛冶滓で約3/2残存している。上面の中央部は滑らかで、上面・底面共に酸化した土砂が付着している部分がある。重量は209gを測り、非常に重量感がある。

第5章 中近世墓群の調査

第1節 前提と概要

当墳墓群は、再三先述したように、古墳時代から近世までに至る墳墓関係の遺構を検出している。本章では、その内の13世紀後半～19世紀にかけての600余基の墓と7基の火葬場についての報告を行う。

なお、この報告に至るまでに幾度もの試行錯誤を経ており、発掘調査時の認識と大きく異なることになった。そこで、報告の前に、調査および整理過程の概略を記述することで前提としておきたい。

1. 調査過程の概略

調査は、一部が露出していた中世墓の石組の全貌を検出することを第一の目的で行った。石組は、検出順に「石組1」というように遺構番号を付した。この時点で、石組が検出されなかった南側を中心に、土坑を検出した。この土坑は、被熱痕跡・焼骨・炭が見られ火葬墓と考えた。また、南半部では、焼骨を大量に含んだ炭層が盛り上がり堆積している範囲があった。この範囲を「炭盛土」と付して、除去すると、径2～5m前後の被熱痕跡のある土坑が検出された。

石組全てを検出した後は、石組の下部には必ず埋葬施設が伴うという推定のもとに、個々の石組を東西に2分割しその下部を精査するという方法で北側から調査を行った。その結果、1号墓のように石組下部に埋葬施設が検出されない例もあったが、A群では基本的に墓壙を伴うことが判明したので、同様の方法で調査を続けた。しかし、それより南側の調査を進めていくと、石組と墓壙が対応しない状況や、石組を除去して10～20cm掘り下げた後に墓壙が検出されるという多様な状況を呈し始めた。

この状況に対処するために、一度全ての石組を除去してから、全体に精査を行い墓壙を検出する方法に切り換えた。この段階により検出した墓壙を「墓壙1001」と石組とは別個の遺構番号を仮に付した。その結果、石組よりも遙かに多数の墓壙が検出されることになった。これらの墓壙には、被熱痕跡・焼骨・炭が見られないものが多数存在し、その規模・遺物から土葬墓が確実に存在することも判明した。

以上のように、石組と墓壙に別個の遺構番号を付して調査を進行させたことが、整理段階に幾つかの複雑な問題を派生することになった。

2. 整理過程の概略と生じた問題点

調査段階で生じた問題点を解決することが、整理段階の課題となった。

以下、その問題点とその対処方法について整理する。

一つ目は、石組と墓壙の対応関係が調査時において十分な検討が行えなかつたことである。まず、石組と墓壙の対応関係を実測図・写真等の記録により再検討した。これにより、墓の単位を整理したのちに、墓と火葬場に分け新番号を付すことにした。この再検討により、当初認識していた石組下部には必ず墓壙が存在するといった単純な状況ではないことが判明した。石組下部に墓壙が存在しても別個の墓であると思われるものや、古い石組を造り替えたと考えられる墓などの複雑な状況が窺われた。

しかしながら、整理段階で「墓」の認識が変化し、当初、石組と墓壙に整合性があると思われたものの中に、詳細に検討して行くと別の墓であることが判明したりと、最終段階でやっと一つの見解が出せたものである。そこで、一つの墓に一つの番号を付与するのが本来の整理方法であるが、整理過程で別の墓と思われるものには、「○'号墓」としたものがある。なお、石組に関して、整理縮小されたもの

や石を追加したものを別番号で呼称することが良いのか迷うところであった。従って、当遺跡に関しては、一体何基の墓があったかの断定は検討に余地があるため、留保しておきたい。

二つ目は、前述の調査の方法から石組と墓壙間に堆積した土の取り扱いについて十分に追求できなかったことである。特に、B・C群では、地形的に南下する緩斜面で、墓壙が斜面に沿って掘削されているのに対し、その上の石組がほぼ水平を意識して造られていることが判った。よって、石組を造る時に盛土を施した可能性があると考えられた。それに反して、段造成されたA群下段の様に石組が墓壙直上に造られる場合がある。なお、石組と墓壙が対応する墓は、その規模・位置に大きなズレが無いことから両者には、大きな時間差がない墓であると思われる。

三つ目は、石組と墓壙間に堆積土から出土した遺物の取り扱いである。第3章でも記述したように、この層は便宜的に第2層として捉えた。この第2層の存在は、石組と墓壙間に盛土がある場合と、両者に時期差がある場合が指摘できるが、どちらかに断定することは難しい。

これらの再検討を経る段階で、遺構の性格およびその遺構名をどう捉えなおすべきかを検討する必要が生じた。以下、遺構に関する用語の問題として整理する。

3. 遺構に関する用語の整理

当初から中世墓群として認識していたのであるが、近世墓も存在することが明らかになった。しかし、墓の時期を特定できる遺物が極めて微量であったため、大多数の墓について所属時期を限定するのは非常に困難であった。よって、当該期の墓群全体の呼称としては「中近世墓群」を採用することにした。

当墳墓群の遺構は、整理段階での再検討を経て「墓」・「火葬場」・「炭盛土」という3つの遺構名を使用することにした。なお、これらを含む当墳墓群で使用している用語は、報告に際しての便宜的なものである。

「墓」は、地上に石で何らかの形状に構築する「石組」と、地下の土坑である「墓壙」によって構成される遺構を指す。その組み合わせにより、石組の下部に墓壙が存在する墓、墓壙のみの墓、石組のみの墓の3者が存在する。当墳墓群で墓と称した遺構は、非常に多様なものである。また、これらの遺構に人骨、五輪塔・石仏、副葬品等が存在する場合は墓と認識できるが、存在しない場合には断定しにくい。さらに、石組の下部に埋葬施設が確認されない遺構の性格付けも一様に決めがたいものである。

なお、これらの墓で、墓壙が存在する墓に関しては、大きく2種の性格が考えられる。

被熱痕跡・焼骨・炭が存在する墓を、「火葬墓」と称している。大きく3つのタイプに分けている。

上記以外の被熱痕跡・焼骨・炭が存在しない墓壙を、「土葬墓」と称している。大きく2つのタイプに分けてている。

「炭盛土」は、墓域の南半部に広がる大量の焼骨を含む炭層のことを指す。この中には、被熱した鉄釘・銭貨等が含まれ、火葬した時に生じる炭が廃棄され盛り上がったものである。

「火葬場」は、炭盛土を除去した所に検出される2~5mの大きめの被熱のある土坑で、複数回荼毘が行われた遺構を指す。ここで、生じた炭が炭盛土として形成されていったと思われ、両者は強い関連性があるものと思われる。

これらの墓に関する用語は、一般化されているが、その概念は突き詰めると非常に曖昧なものである。よって、当墳墓群でこれらの名称を使用する際には、安易に既往の言葉を使わずに慎重に検討しなければならない。その検討は、第7章 第7節、第9章 第2節等で詳細に行っており、ここでは便宜的に使っていることを強調しておきたい。

第2節 立地

栗栖山南墳墓群は、茨木市佐保字クルスに所在し、地理的には北摂の丘陵上に位置している。

中近世墓群は、北側から南西にわずかに振る尾根の高まりからやや下った南面する傾斜地に位置し、標高126.6mから134.3mを測り、比高差が約7.7mある。西側および東側に小さな谷筋が走り、西側の尾根下には北西から南東側にかけて屈曲して流れる茨木川がある。また、痩せ尾根を1本挟んで約300m北側には、16世紀代の山城である佐保栗栖山砦跡が所在する。なお、尾根筋を北東に辿れば国見峠に至り、西北西約600mには、馬場の集落が所在している。さらに、東側の痩せ尾根を1本挟んで南東側が福井の領域に入る。

墓域は、東西約55m・南北約53mで、約3000m²を測る。南西端は、グランド造成時にわずかに切り取られている。

地形は、北半部が傾斜が急で、南半部では緩やかになっており、東西方向では、東に向かってやや傾斜している。

東側斜面縁辺に7世紀代後半の古墳群が存在し、それらの西側の緩斜面を利用して古代の火葬墓・焼土坑等を検出し、中世墓は、墓域を広げながら、それらと重複し営まれている。

しかしながら、古墳の石室から瓦器椀や石仏などが散見されることから、中世の段階でも古墳の石室の石が抜き取られていたことが推測されることと、初期の墓が古墳を避けるように造られていることから、当時の人々が古墳を認識していたことが窺われる。

墓域は、中世墓の始まりの段階では全体を把握されていた様子が窺われず、当初は、中心部の北東から南西に走るわずかな尾根の高まりが存在していた可能性があり、その尾根筋を利用して墓が南北方向に造られ、その後、必要に迫られて北端を段状に1段のみ造成されたと考えられ、それより上の段は、6号墳造成時に存在していたとも考えられる。さらに、南側に拡張していった様子が窺われる。

墓は、基本的には、地上施設としての石組をもち、地下施設に火葬墓ないしは土葬墓が伴うもので、数基が列をなし墓群を形成している。墓群は、北側では段を有し整然と並んでいる様子が窺われるが、北西側では石組のみが密集した状態であり、南端に至っては、散漫になっている。

また、斜面地を利用しているためか、段造成が行われていない部分では、石組の段階で段状を呈しているものの、墓壙の検出面では傾斜地をそのまま利用しており、石組の段階で盛土されていることが確認できた。さらに、墓壙を伴わない石組のみ接して造られる場合に東西に辺を一直線に揃え、南北に余地なく段状に連接して造られるものもある。それらの墓に石仏が座っていた確率が高い。

なお、数時に渡り茶毘に付されたと考えられる火葬場の7ヵ所は、南西部にほぼ集中して位置しており、それらのほとんどが炭盛土を形成する過程で埋没している。

これらの火葬場は、一部では墓壙を切っており、周辺に搔きだされた大量の炭や人骨などは、石組をも覆い尽くしている部分すらあった。

さらに、炭盛土の北西部では、石組がほとんど検出されなかった部分が有り、'67年当時にも、この場所の東側に石仏等が集積されていた状況が窺い知れ、何らかの理由で、墓が整理されたものと考えられる。このことは、この場所で墓壙のみ検出していることからも領けるものである。

近世墓の段階では、中世墓と重複するもののその墓域をすばめ、北端部では造られず、南半部でその拡がりを見せている。

第3節 墓の構造

1. 墓の構造と単位

墓は、地上施設である「石組」と地下施設である「墓壙」の組み合わせから構成される遺構である。しかし、当墳墓群は約500年間墓地として利用されているため、検出された墓が後世に改変を受けたと考えられるものが幾つもある。それがゆえに、墓の現状が本来の墓の単位および構造を表しているかどうかを判断して報告を行う必要があると思われた。そこで、検出された墓が、本来、どのような単位・構造をもっているかを検討していくことにする。

(1) 検出される墓の現状

先に記したように、中近世墓群の墓は石組と墓壙の組み合わせにより構成される。そこで現象としては、「石組の下部に墓壙が検出される墓」、「石組のみ検出される墓」、「墓壙のみ検出される墓」の3つの形態で検出されることになる。このように検出された墓の現状が本来の姿であるのか、もしくは後世の改変を受けているのかどうかを、以下に検討していく。

1). 石組の下部に墓壙が検出される墓

当中近世墓群で一番多く検出されている形態であるが、石組は後世の改変を受けやすく、確実に本来の姿を保っていると判断できるものはそう多くない。

以下、石組と墓壙がどのように対応しているかを実例をあげていく。

まず、例として35.339号墓を挙げる。これらは、石組と墓壙が、主軸の方向・規模に大きなズレがなく、またレベル差も顕著ではないものである。このような状況から考えると、石組は墓壙を意識して造られており、両者は同時性をもったものと言えよう。しかし厳密な意味では、35号墓は地輪以外の五輪塔の部位は既になく、また、339号墓は東側の側縁の石が欠損しており、後世の改変を受けていないとは言えない。

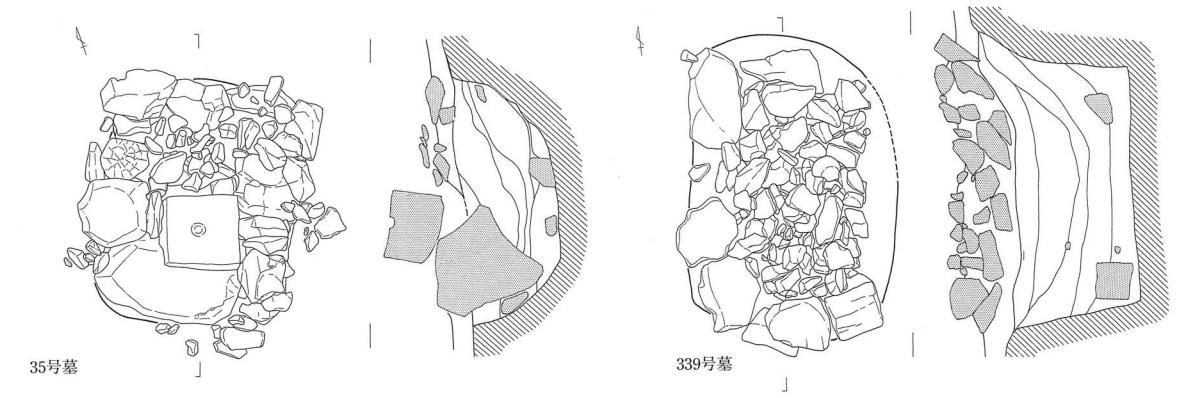
このような例からすると、例えば237号墓は石組の北辺と東辺しかないが、その整然さから明らかに方形の石組が墓壙と対応して存在していたと考えることができる。

次に、206～208号墓を見てみると。まず石組を見ると、大きく捉えると横長な方形の石組であると捉えることができる。だが、さらに細かく見ると、この石組は一度に造られたものではなく、石の並び・切り合いから3基の石組が組み合わされたものと判断できる。これらは、西側に石仏を中心とした整然とした方形の石組（206号墓）および、東側に石仏は据えられているがやや不整な方形の石組（207号墓）、さらに、両者の間には地輪が据えられた石組（208号墓）である。石組の切り合いを見ると、207→206→208号墓の変遷を捉えることができる。

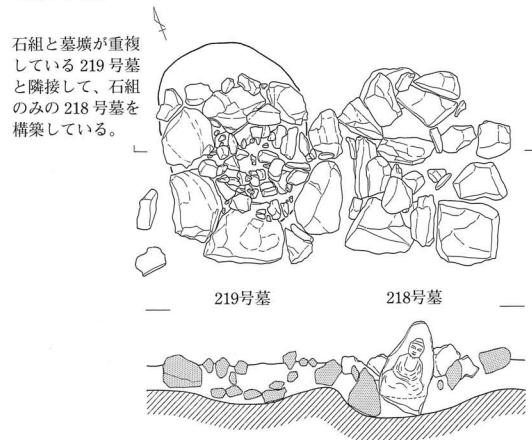
これらの石組の下部には、2基の墓壙が切り合って存在している。石組と墓壙の対応関係から、東側の墓壙は207号墓、西側の墓壙は206号墓と捉えるのが妥当と思われる。しかし、そう考えると墓壙と石組の切り合いに矛盾がでてしまう。その原因としては、地輪を置いたときに以前にあった206.207号墓の石組を再整理して繋ぎ合わせたような形にし、造り替えを行った可能性が考えられる。このように考えると、墓の単位としては、206.207号墓は石組と墓壙が対応する墓の残骸として、208号墓は後に2基の墓を整理して、その中央に地輪を据えた石組のみの墓と考えることができる。

当中近世墓群ではこのように元あった石組を造り替えて再整理するようなことが幾つか確認されている。この時、造り替えられた石組は墓壙とは厳密な意味で同時性がないと言えるが、造り替えられる前

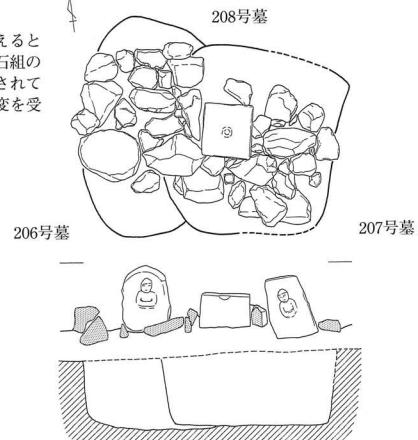
石組と墓壙が対応している墓 石組と墓壙のズレがほとんどなく、同時性をもって構築されたと考えられる。



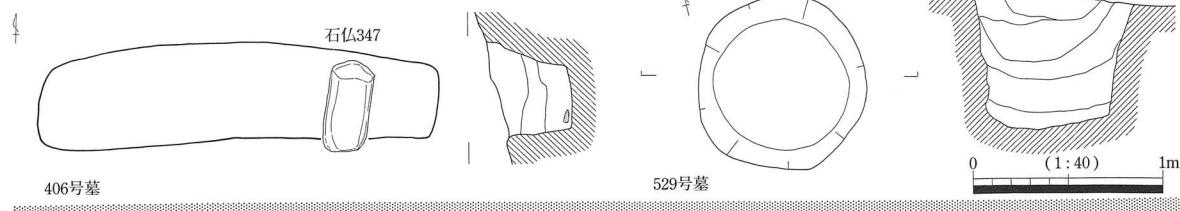
石組のみの墓



石組が後に作り替えられた墓



墓壙のみの墓 墓壙に合わせた石組は構築していないと思われる。



列状に並ぶ石組のみの墓 159号墓のように墓壙と対応している可能性もある墓もあるが、基本的に石組は墓壙を意識せずに構築していると思われる。

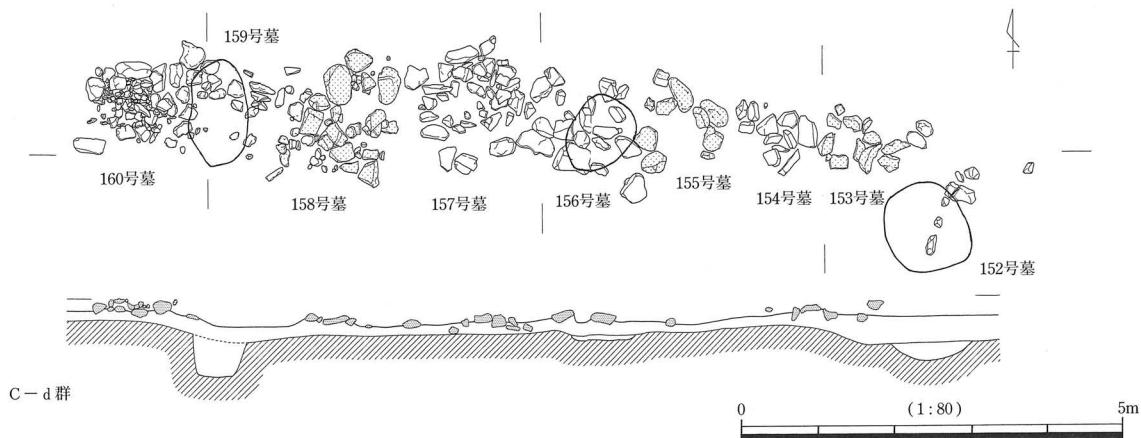


図45 中近世墓の構造と単位

には墓壙と対応していたと言える。

2). 石組のみ検出される墓

石組は地上施設であるため、後世の改変を受けやすいのは先程から述べているとおりである。そこで逆に、石組しか検出されない墓は、本来もそうであったと考えられる。

石組のみの墓には幾つかパターンがある。まず、1号墓のように周囲に他に墓がなく単独で造るものがある。次に、火葬墓A類の墓壙と重複する219号墓の石組の隣に、石組のみ造る218号墓のような例もある。また、C-d群のように、そのほとんどが墓壙を有さない石組のみの墓が列状に造られる例もある。

さて、この石組のみの墓には墓壙が検出されないわけであるが、幾つか明らかに埋葬行為が確認できるものもある。それは86号墓のように、石組の下部に顕著な墓壙が検出されないが、焼骨が埋置されたような状況で検出される場合である。これは、火葬墓B II類の一種であり顕著な墓壙が認められないだけで埋葬行為自体はあると言える。しかし、石組から全く焼骨が検出されないものもあるので、全ての墓に埋葬行為があったとは断言できない。

3). 墓壙のみ検出される墓

墓壙のみ検出される墓であるが、石組が後世の改変を受けて消失してしまった可能性は十分考えられる。そこで、まず石組が本来的になかったと言えるものがあるかどうかについて検討してみる。

まず、土葬墓B類とした墓壙の大多数には、墓壙に合わせて石組を構築することはなかった可能性が高い。その理由としては、このタイプの墓壙は切り合いおよび出土遺物から、時期的に一番新しいものと考えられるからである。だが、376号墓のように石仏・五輪塔の部位が落ち込んでいるものや、406.412号墓のように墓壙上面に石仏が検出されることがあり、これらを墓壙上面に置いた可能性も考えられるものもある。

また、土葬墓A群の内で、77.529.536.577号墓等の円形の墓壙を持ち、桶を使用した座棺の可能性が指摘できる一群がある。これらも、墓壙内に石の落ち込み等が全く見られず、石組が存在しなかったと考えられる。

一方、本来は石組が対応していた可能性であるが、これを実証するのは難しいが、先に挙げた以外の墓壙のタイプは、石組の残骸と思われるものや墓壙内に石の落ち込みが見られるため、基本的には、石組が据えられていた可能性が高いと思われる。特に、火葬墓A類は画一性が高い墓壙であるので、基本的に墓壙の上に石組を構築したものと考えられる。

(2) 構造と単位についての認識

以上、検出される墓の現状について実例を挙げ検討してきたわけであるが、それらから得られた墓の単位と構造についての認識を整理したい（図45）。

墓の構造としては、現象として現れる「石組と墓壙が対応する墓」・「石組のみの墓」・「墓壙のみの墓」の3つの形態が各々本来的に存在することが判明した。しかし、先に見たように後世の自然および人的改変により、本来の姿を留めていない場合もあるので注意を要する。このことを考慮して、墓全体を見ると、やはり墓壙の上に石組を構築するものが当墳墓群の基本的な墓の構造といえる。

墓の単位については、石組が墓壙を意識して造られているかどうかを判断して、その同時性が考えられるものを一単位として認識している。石組と墓壙の同時性の判断は主観が左右されるものであるが、墓群の構成を考えるために必要なことである。

2. 石組の分類

墓は、当遺跡では、基本的に地下施設の墓壙を埋め戻した後に、地上に石組を組むものであり、その石の置き方で様々な様相を見せてている。それらの残存状況については、完全に残っているものはわずかであり、ほとんどのものが部分的に欠落しており、中には石組が一切残存していないものもあった。

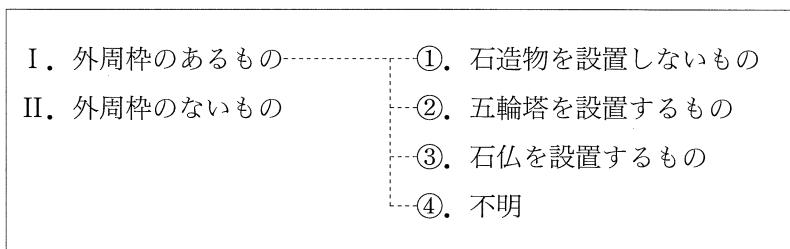
石組が略残存しており、復元可能なものについて見てみると、以下の様に区分出来る。

(1) 石組の分類

石の組み方としては、大きくは2分される。すなわち、石組の外周に枠としての石を配置するものと外周枠がないものである。しかしながら、後者の例には、たまたま、中心部にのみそれらの石が残存し外周枠が消失していたものか、本来、それのみであったものかは、現状では不明なものが多々ある。

外周枠のあるものの中には、石組の中心部に石仏を設置するものと五輪塔を設置するものがあり、さらに、中心部の石の置き方から石造物が設置されないと思われるものの三者があり、また、石組の残存率が悪く、判断出来ないものを不明として取り扱うこととする。

分類は、以下の様になる。



以上の分類を、残存状況の良い墓で見ていくと次のような状況がある。

1). I類

まず、I類とII類であるがほとんどのものがI類に属しており、II類のものは1割にも満たない。

I類のものには、①類から④類まであり、以下、それぞれを概観していく。

①類の石組

①類には、外周枠に20cm～50cmの石を1段ないし2段使用し、縦長の方形で中心部に20cm以下の石を2段ないしは3・4段敷き並べている。それらの中心部に、地輪を据えられるように平らにした痕跡や石仏を据えたような窪みも検出していないことから、これらの石組には、石造物が設置されていなかつたと考えられる。

また、27.28号墓も石組が完存していないが、前者と同様な石組の造り方で石造物が設置されなかつたものと考えられる。

①類の石組の規模は、現存するもので、長軸で1.3m～1.8mと大型のものである。

②類の石組

②類のものには、基本的に五輪塔の地輪を据えるために地輪下部に方形の石を組んだり（3.11.119.号墓等）、小礫を敷きつめたり（228号墓）しているものがあり、地輪下部が土のみのものもある（81.208.240号墓）。大抵のものが外周枠に20～30cm前後の割石や川原石を使用し、1段のみのものと2・3段積むものがある。中心部の石は15cm以下の石を使用している。

35号墓の前面の外周枠には、長さ80cmと特に大きな石が上面を平らにして置かれており、厚さが0.55cmもあり、墓壙を切って据えられていた。

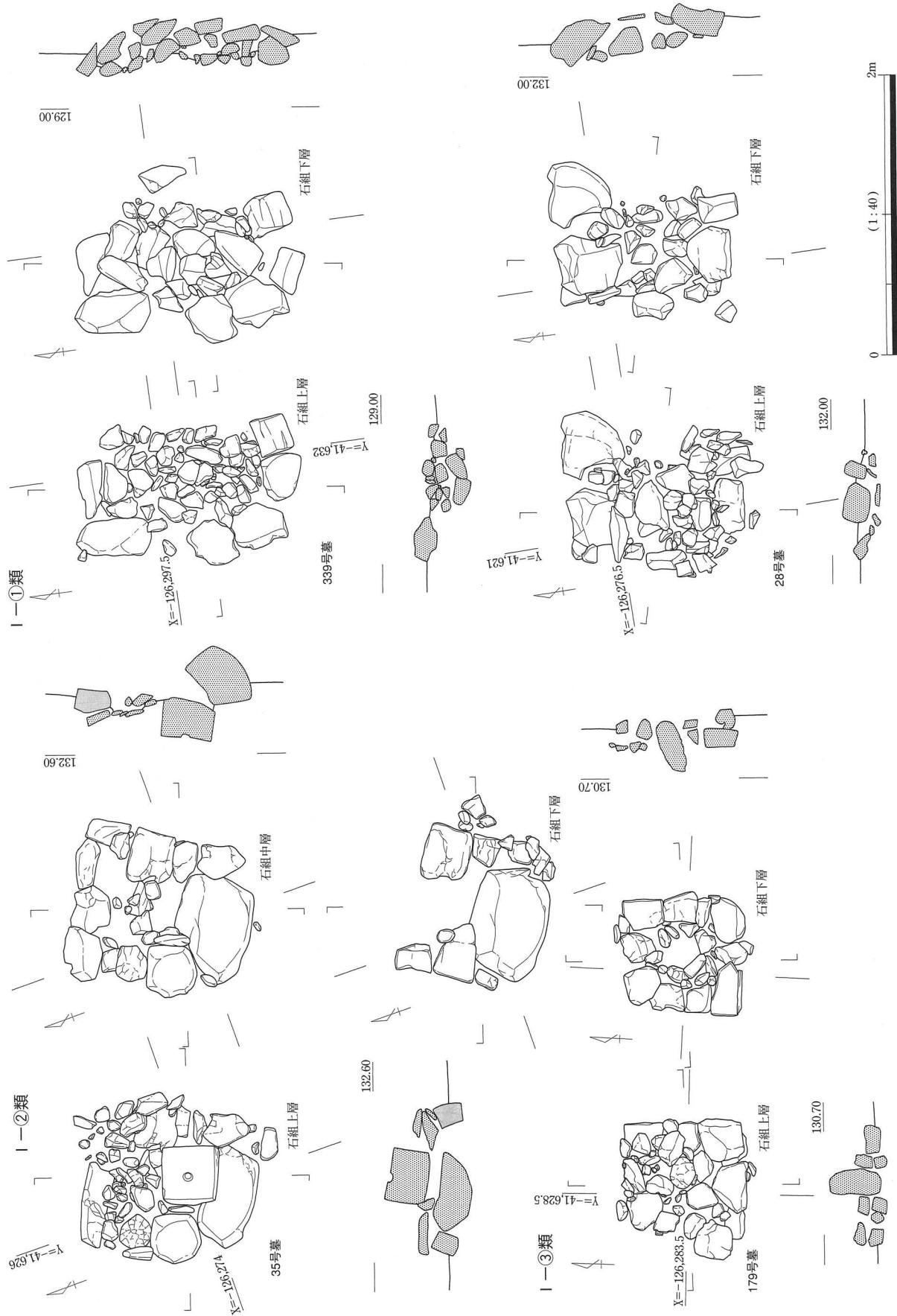


図46 石組の分類 (1)

また、148号墓の様に、外周枠の石を立てて使用し、地輪下部が土のままで、地輪と外周枠の間に石を埋め込み、外周枠と地輪上部がほぼ同じ高さのものがある。

なお、石組の中心部が残存している場合に、五輪塔の地輪が座っていた痕跡を残すものもままある（192.219.288号墓等）。

外周枠の石組は、基本的には、正方形のものがほとんどで、現存するもので、その比に値しないものは、石組の造り替えが施されたものがほとんどである。

中には、横長なもの（1号墓）や縦長なもの（492号墓）もある。これら2者は、いずれも、墓壇を伴わない石組のみのものである。

②類の石組の規模は、最大のもので一辺が1.5m、最小のもので一辺が0.5mのものがある。

③類の石組

③類のものには、基本的に中心部に石仏を据えるもので、外周枠に20cm～30cm前後の割石や川原石を置き、1段ないしは2段石を積み、石仏の周囲にそれより小さな石を置いている。石仏を据えやすくするために、石仏の周囲に小石を数段組む場合（25.570号墓等）と、179号墓の様に土に直接置き周囲に石を置いて支える場合、石仏のみを設置するもの（194号墓）などがある。さらに、石仏を据える据え方は、石組と同じ深さで据えられる場合と、186号墓の様に石組より深く据えられる場合がある。

また、中心部が窪み、石仏が座っていた痕跡を残すものは多々ある（64.65.92.112.117.135.136.160号墓等）。

外周枠は、基本的に縦長なもので、その規模が1mを越えるものがない。

なお、特殊な例として、30cm前後の石を敷き並べているもの（163号墓）や、405号墓のように、墓壇上面に、70×60cmの平たい石を置き、その上に外周枠の石を組み、さらに中心部にも20～40cmの石を置くものがある。

これらの石組には、石造物が設置されていないと考えられる。

2). II類

II類に関しては、前述したとおり、確定できるものは無い。しかしながら、小規模な墓壇の上面に石仏が背を上に置かれているものがあり（例えば270.377号墓）、これらを墓かどうかの問題を別にして見るならば、墓壇の規模などから周囲に石を組むものでは無いと考えられる。また、水輪が1点ないしは2点出土している（98.99号墓）に関しては、外周枠があった可能性も否定できるものではない。さらに、近世墓の（362.402.412号墓）のように石仏や五輪塔の部材が検出される例があり、これらは、（398号墓）の石組のように外周枠を組むと言うよりは、墓壇の枠に合わせて石を積んだ様に見受けられ、本来、中心部が盛り上がるものと考えられる。その典型的なものが（404号墓）である。

さらに、185号墓のように、10cm前後の石が敷き並べられるものがあり、石組間を繋ぐような配置で出土している。この石組は、本来、墓壇を伴う石組が、周辺の石組の再整理により、組み替えられたものと思われる。

（2）石組の規模

いずれにしても、当遺跡の墓の石組には、何らかの規格性が見いだせるものと考えられ、その石組の専有面積を比較してみた。その結果、以下のようになる。

a. 1/4坪以下のもの

b. 1/4坪以上1/2坪以下のもの

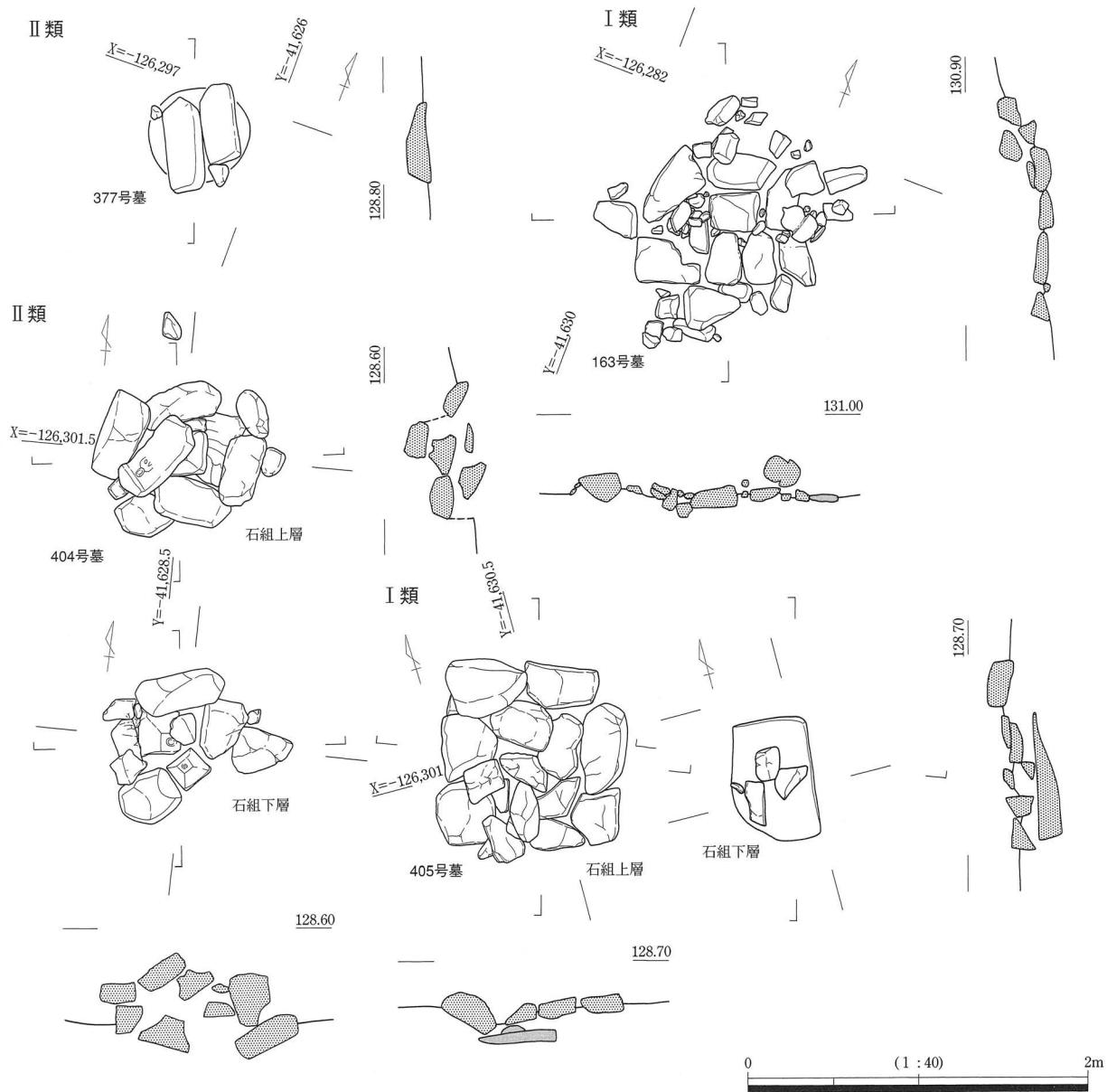


図47 石組の分類 (2)

c. 1/2坪以上3/4以下のもの

d. 3/4坪以上のもの

a類には、最小のもので $0.6m \times 0.6m$ (208号墓)、最大のもので $0.9m \times 0.9m$ (361.507号墓等) がある。およそ3割弱がこの規模のものである。

b類には、最小のもので $0.8m \times 1.1m$ (91.176号墓)、最大のもので $1.3m \times 1.0m$ (1.378.429号墓等) がある。次いで、この規模のものが過半数を越える。

c類には、最小のもので $1.3m \times 1.3m$ (35.403号墓)、最大のもので $1.5m \times 1.5m$ (11.33.506号墓等) があり、この規模のものが1割強ある。

d類には、最小のもので $1.8m \times 1.4m$ (339号墓)、最大のもので $1.3m \times 2.0m$ (338号墓) があり、この規模のものがc類同様に1割にも満たない。

しかしながら、この規模の分類は、I類には当てはまるものの、II類に関しては不明である。

3. 墓壙の分類

当墳墓群では、500基以上の土坑を検出しており、遺構単体で見たときに、人骨や副葬品等がなく、埋葬施設とは断定しにくい土坑もある。だが当墳墓群においては、基本的に埋葬施設と考えたい。よって火葬場以外の土坑は、便宜的に「墓壙」という遺構名を付した。その数は515基を数える。

これらの墓壙は、その形態・構造から基本的に「火葬墓」と「土葬墓」の2つに分類できる。

(1) 火葬墓の分類

火葬は、人を火化により骨化させる行為である「荼毘」と、その骨を拾い上げる「拾骨」、そして骨を埋葬する「納骨」という段階を経る葬法と大まかに捉えることができる。

火葬がこのような過程で行われるならば、「被熱した人骨（焼骨）」、「被熱痕跡」、「炭」が残ると考えられる。これらの痕跡を有するものを火葬墓として、さらに3つに細分できる。

1). 火葬墓A類

この墓壙の特徴としては、壁面や床面に「被熱痕跡」があること、埋土が基本的に2層でその下層に多量の「炭」を含むことがまず挙げられる。「焼骨」は含むものが多いが含まないものもある。

このタイプの墓壙は、196基を数える。

墓壙の規模 長軸は約0.6~1.6mの範囲に分布するが、1.0m~1.2m前後に集中している。深さは、約0.05~0.60mの間にまんべんなく分布している。平面形は、長方形と楕円形である。

被熱痕跡 壁面や床面が被熱しており、墓壙内で燃焼行為が行われたと考えられる。この被熱している部分は、壁面では赤変していることが多い、床面では黒変していることが多い。また、この厚さは1~2cm程度で、硬く締まっている場合と脆くぼろぼろになっている場合がある。この状況は、燃焼温度の違いを表していると考えられる。

煙道 墓壙の床面の中央部に、長軸方向に沿って深さ約10cmの浅い溝が掘りこまれるものである。これには、掘りこまれた溝が墓壙内で収まるもの（27.68.69.505号墓）と、墓壙の北壁を突き抜けるもの（197号墓）がある。この煙道はこれら5基にしかない。また、27.68.69号墓には煙道を跨ぐように棺台が設置されている。

棺台 墓壙の床面付近に2~数個の石が置かれたものである。これらの石は大概被熱しており、燃焼行為時に置かれたものと考えられる。ただ、22.213.403号墓のように、床面よりかなり浮いてるものもまたあり、燃焼後移動されたものもある。また、被熱した鉄釘が出土している墓がいくつかあり（23.237号墓等）、さらに、11.68号墓のようにその配置から木棺が復元できるものもあることから、この床面近くに置かれる石を棺台と称することにした。

これら煙道と棺台は、両者とも空気の通りを良くして、燃焼効果を上げるためにものと考えられる。

埋土の状況 埋土は大きく2層に分かれ、炭が多量に含まれる下層とほとんど含まれない上層で構成されるものがほとんどである（カラー図版39）。また、89.323号墓のように1層で構成されるものは、その層に炭が含まれる。その炭は181.235号墓のように細粒状の炭で土をほとんど含むことがない場合もあるが、土全体にまんべんなく炭が混ざり合う場合が多い。なお、269.302号墓のようにある程度の塊の炭化材が含まれるものもあるが、木棺の形状が復元できるような状況はない。

埋土の上層は、炭をほとんど含むことがなく、シルトまたは細粒砂を主体するものである。この土は、地山の地質と同様であることとわずかに焼土塊・炭が含まれているものもあることから、墓壙掘削時に生じた土の可能性が高い。

焼骨の検出状況 焼骨は、検出される場合と検出されない場合がある。焼骨が検出される場合では、基本的に埋土の下層で検出され、量的に一体分全部の骨が検出されることはない。その際、取り上げることも困難である 1 cmにも満たない細片が僅かに検出される場合と、5 cm程度以上の明らかに骨と認識できる破片が10 g以上の比較的多く検出される場合がある。332号墓が一番多く、308 gである。

後者の場合は、意識的に置いたと考えられる状況で出土しており、さらに28.49.70.197号墓などのように墓壙の床面や棺台の上などに比較的 1箇所に集中して見られる場合と、143.288.323号墓などのように床面にやや散乱した状況で見られる場合がある。また、当墳墓群では唯一の例であるが、69号墓のように墓壙内に最多の669 gの焼骨が納められた備前の壺が置かれてある例もある。420号墓のように、土師器皿の上に焼骨を載せたような状況で検出されているものもある。

火葬墓 A類の形成過程 以上のような状況から考えると、火葬墓A類では、被熱痕跡が見られることや燃焼効果を高める煙道や棺台が設置されていることを踏まえると、第1に「荼毘」を行った遺構であることが考えられる。そして、焼骨が一体分の量には到底足りないこと、また棺台が移動しているものもあることから、荼毘後墓壙内を一度片づけて「拾骨」を行っていることが推測される。焼骨の検出状況から考えると、拾骨後は墓壙内に「納骨」した墓としない墓があるようである。ただ、どちらの場合でも荼毘の際に生じた炭が墓壙内に残されたか、または納められたと捉えられる。さらに、墓壙掘削時に生じたと思われる土で再度、墓壙を埋めている。その後に石組が構築されるのである。

上記のような過程が推測できることから、この火葬墓A類は「荼毘」、「拾骨」、「納骨」という火葬の一連の行為を行った墓と考えることができる。この墓では、基本的に一度限りの荼毘を行った可能性が高い。しかし、次に挙げるようやや例外的なものもある。

例外的なものとして、埋土の状況が、下層では炭や焼骨を含まずに上層にそれらを含む墓壙があり、80.143.171.172号墓が挙げられる。これらは荼毘が行われた可能性は高いと思われるが、埋土の状況が通常と異なる。なお、一度限りの荼毘の可能性が否定できないが、整地をして何回か行ったと考え事ができる。しかし、検出された人骨は1個体の可能性が高く、これも断定できない。

出土遺物 遺物は少ないが土師器皿、備前壺、銭貨、温石がある。土師器皿は、420号墓や502号墓では墓壙の床面から出土しており、荼毘後に置いた可能性が考えられる。また、258号墓は墓壙の検出面で出土しており、火葬行為が終了し、墓壙を埋めた後に置かれたと思われる。備前壺は先述のように、69号墓で藏骨器としての利用である。銭貨は、263号墓で荼毘後 6枚重ねて置いた状況で出土している。温石は、11.383号墓で出土している。11号墓のものは、確実に被熱しており、383号墓のものは被熱していない。これらの時期は、概ね14世紀後半から15世紀前半のものと考えられるものが多い。

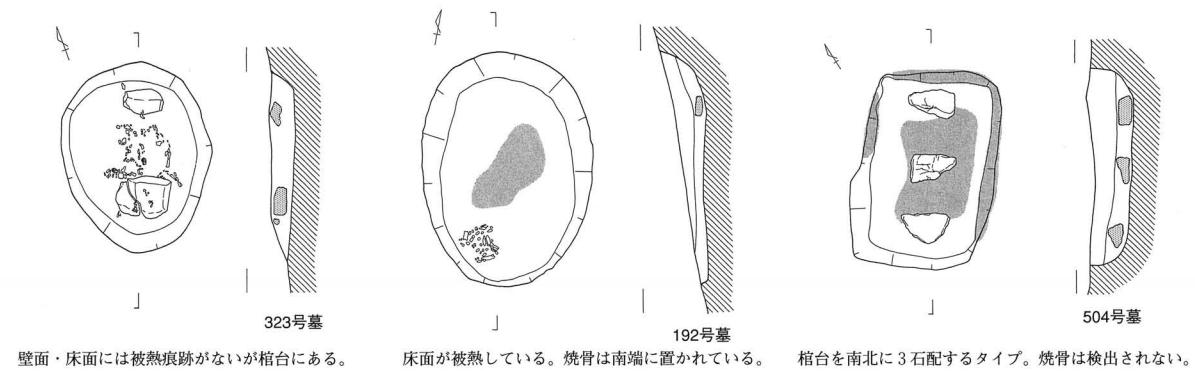
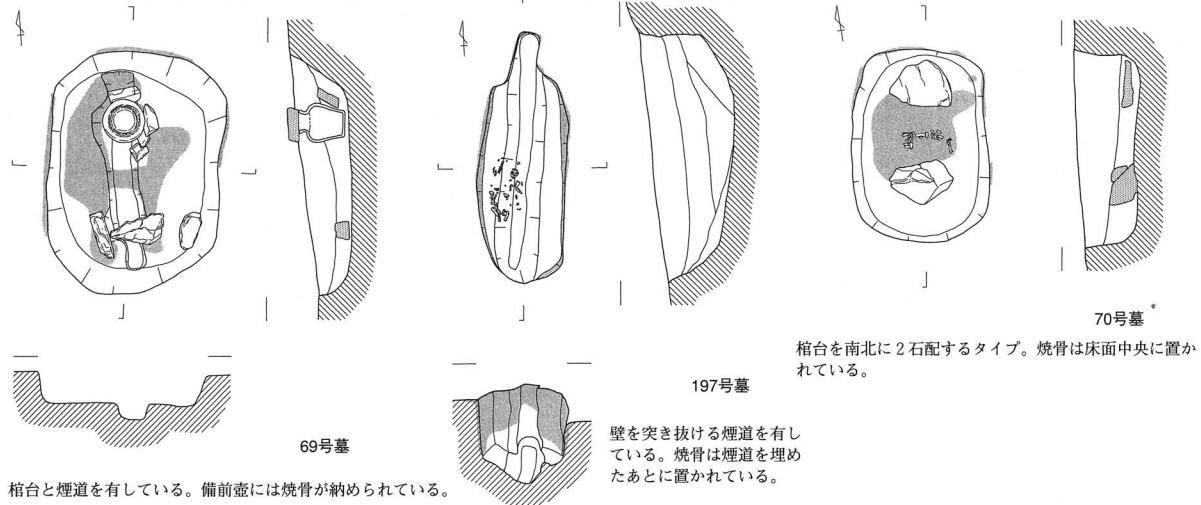
2). 火葬墓B類

「被熱痕跡」がなく、埋土には「炭」がほとんどなく「焼骨」のみが検出される遺構を指し、29基を数える。その状況から別の場所で「荼毘」された骨を、この場所に運んできて「納骨」した墓と判断でき、一般的に「火葬墓」と呼称されるものである。この墓壙は、藏骨器を使用しているB I類、使用していないB II類に細分できる。

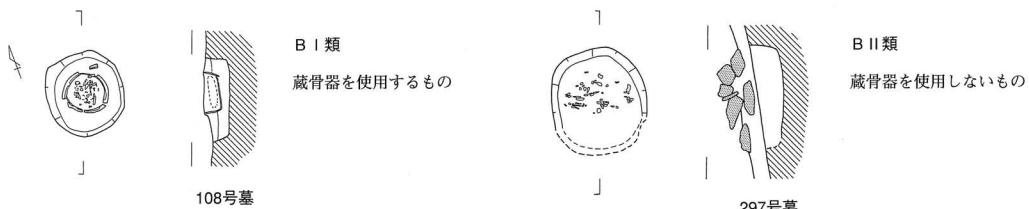
B I類 墓壙内に藏骨器を埋納したもので、10基を数える。墓壙は、径約0.2~0.8mの平面形が円形のもので、深さは約0.1~0.4mを測るものである。藏骨器としては全て瓦質羽釜を利用している。この羽釜は、14世紀後半~15世紀前半の時期幅で大きな差異が見つけがたいものである。

これらは全て、藏骨器にはまず数cm土を充填してから焼骨を納めており、その後再度土を充填してい

火葬墓A類 壁面・床面・棺台に「被熱痕跡」が認められ、埋土の下層に多量の「炭」を含む墓壙である。「焼骨」は含むものが多いが含まないものもある。



火葬墓B類 「被熱痕跡」がなく、「焼骨」のみ検出される墓壙である。



火葬墓C類 「被熱痕跡」がなく、「炭」だけもしくは、あわせて「焼骨」も検出される墓壙である。

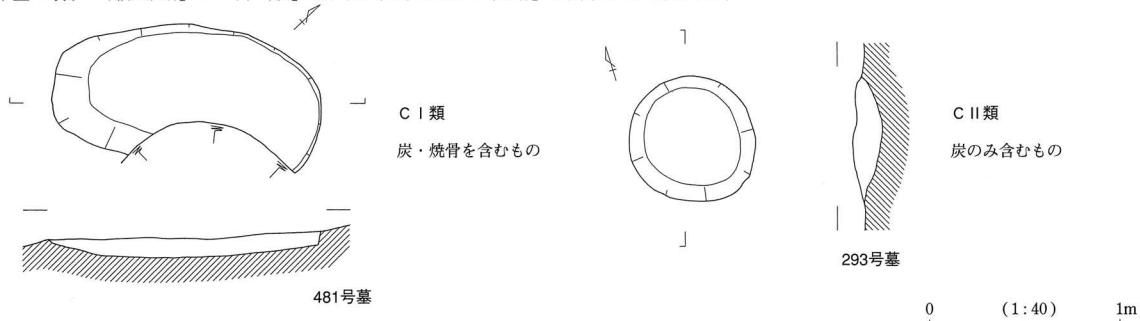


図48 火葬墓の分類

る。この土にはほとんど炭が混じらないものである。そして、焼骨を納めた蔵骨器を、掘削した墓壙に埋納している。墓壙を埋めた際の土にも炭や焼骨は混じらない。

この埋葬方法は、基本的に総てに共通しているが、個々の特徴を挙げる。419.482号墓の瓦質羽釜は底部を打ち欠いた状況で使用している。焼骨は、量が100g以上と多い292.296.319.322号墓の一群と、これに比べると30g以下と少ない82.128.145.419.482号墓の一群がある。

注意すべきものとして、307号墓が挙げられる。これは、他のものと違って三足羽釜を使用しており、しかも、焼骨が全く検出されなかった。この羽釜は他のものと比べ、時期が古く13世紀代のものと思われる。焼骨が腐朽した可能性は否定できないが、人骨以外の有機質のものが納められていた可能性もあり得る。

B II類 蔵骨器は検出されずに焼骨がまとまった状況で確認できるもので、19基を数える。その多くは頗著な墓壙を掘削せずに、径0.3m程度の範囲に焼骨をそのまま地面に置くものである。86.108号墓など石組が残存している例があるので、焼骨を納めた上に盛土を施し石組を設置する形態を取っていたことが推察できる。

また一方、少数であるが、108.286.559号墓のように径0.6m以下の墓壙に焼骨を納めるものもある。この中で、286号墓は深さ0.38mの墓壙を掘削し、床面に石を並べその上に焼骨を置いている。

焼骨の量には差異があり、85.86.225.351.476号墓のような5g以下の極微量の場合もあるが、多くは10~100g程度である。一番多いのは、108号墓で299gである。

当墳墓群では焼骨を直接地面にまとめて置いたような状況が多いことからすると、有機質の蔵骨器を積極的に肯定することには躊躇を覚える。

3). 火葬墓C類

「被熱痕跡」がなく、「炭」だけ、もしくは合わせて「焼骨」も検出される遺構を指し、44基を数える。この墓壙は、その状況からA類ともB類とも断定しにくい。炭と焼骨を検出されるものをC I類、炭のみ検出されるものをC II類と細分している。

C I類 炭と焼骨が検出される遺構で、22基を数える。墓壙の規模は、長軸は約0.6m~1.7mの間で、深さは約0.05~0.25mの間に収まるもので、平面形は橢円形である。埋土は、炭や焼骨が混じる土の1層で構成されることが多い。以下、特徴的なものを例として挙げる。

249号墓は、1.36×0.83mの橢円形の範囲に、焼骨・炭が混じった土が高さ10cm程度の盛土状を呈しており鉄釘も3本出土している。この状況から判断すると火葬に生じた灰や炭を廃棄したものか、または焼骨が集中している所があり、このような埋葬形態を取るという墓という2通りの捉え方ができる。

なお、盛土の状態をとらないが、290.358.481.575号墓のように長軸約1.5m~1.7m、短軸約0.8m~1.3mの範囲に、深さ約0.1mで炭や焼骨が混在しているものがある。これも、先の249号墓と同様なものと思われる。

一方、186.189号墓は、長軸1m程度の墓壙の上に石組を構築し、火葬墓A類ではないとするならば、焼骨と炭をこのように納める墓の可能性がある。

C II類 炭のみが検出される遺構で、22基を数える。墓壙の規模は、長軸約0.3~1.3mの間、深さ約0.1m~0.35mの間に収まるもので、平面形が円形・橢円形である。埋土は炭が含まれる1層で構成されることが多い。以下、特徴的なものを例として挙げる。

119.293号墓は、径0.6~0.7m程度の墓壙に炭が多量に含まれており、墓壙上には石組が据えられて

いる。これは、墓壙の規模が小さい火葬墓A類ではなく、このような形態の墓と言える。

これら、火葬墓C類の性格であるが、被熱痕跡がないことからA類とはしていない。しかし、火葬墓A類と考えている323号墓（カラー図版41）のように被熱した棺台があっても墓壙の壁や床には被熱が見られない墓もあり、この中にも本来はA類であったものもあり得ると思われる。ただ、先に記したように墓壙の規模・深さはA類の規模から外れるものが多い。

そこで先に挙げたように、荼毘時生じた焼骨や炭を廃棄した場合と、このような埋葬形態をとる墓であるという2つの考え方があることを提示した。しかし、この差異は、石組が上部に存在する場合は判別がつく可能性があるが、そうでない場合はその判断はやはり難しい。

（2）土葬墓の分類

当墳墓群では、「焼骨」「炭」「被熱痕跡」といった火葬墓の痕跡を残さない墓壙が、233基もの数を検出している。この火葬の痕跡内の「焼骨」「炭」は基本的には残りうると考えられ、当墳墓群ではこの痕跡がない墓壙を基本的に「土葬墓」として考えた。この内、墓壙の形態及び主軸の方位から特に類似性が捉えられる群と、その他大多数のものとさらに2分している。

1). 土葬墓A類

大多数の土葬墓、212基がこれに相当する。墓壙の主軸が、おおむね北から東西に30°以内に収まるものである。墓壙の規模は、長軸約0.5~1.6mの範囲の中で、0.9~1.2mのものが一番多い。深さで見ると、0.1~0.95mの範囲にまんべんなく収まる。墓壙の平面形は、円形・方形・長方形・橢円形と分けることができる。

この土葬墓A類は、さらに墓壙の形態・構造から細分できる可能性はあるが、非常に多様な様相を示しているため、確定した細分をすることが困難であった。そこで、この墓壙の内部構造について具体例を挙げ、またいくつか特徴的かつ類型的なものを列挙することにした。

①墓壙内の石の検出状況

墓壙内には、数個の石が検出されることがある。この石は、その配置、検出状況から幾つかの状況を考えることができる。原位置を保っているものには、棺台か石囲いと考えられるものがある。また、石が上方から落ち込んだと思われる原位置を留めていないものもある。

棺台 墓壙の床面付近に見られる石があり、棺台と称している。しかし、後に記すように落ち込んだ石との判断が難しく、確実に棺台と考えられるものは少ない。その中で120.215.254.339.340.369号墓等が、石の上面が比較的水平であること、石組等の石の落ち込み等考えにくいことが挙げられ、棺台と考えられる。この棺台を配する墓壙には、明確な木棺の痕跡や木棺と推定される鉄釘の配置などがないが、後述するように埋土の状況から木棺が使用された可能性が指摘できるものもあるので、便宜的に棺台と称することにした。

石囲い 墓壙内に数個の石で石囲い状の施設を構築しているものがある。これには、墓壙の長軸が1m以下の比較的小さい墓壙に造るものと、それより大きい墓壙に造る場合がある。

前者の例としては、83.105.201.388.450.451.539号墓が挙げられる。105.231号墓は墓壙内の4方に石囲いを造る。388.450.539号墓は、2方に石囲いを造り、その上に蓋をするように石を被せるものである。83.451号墓は3方に造る。83号墓の石囲い内の際から、赤色顔料塗布布片が出土しており、何らかの容器のようなものが推察できる。しかしこれらは石の大きさやが細部の状況が異なっているので、厳密には類似しているとは言えないものである。

後者の例としては、142.233.567号墓がある。142号墓は、北側が削平を受けており全容が不明だが、床面に30cm程度の大きさの石を敷きつめ、その壁側には長さ50cm程度の石で囲っている。233号墓は、床面より浮いており原位置であるかはやや心もとないが、3方に石囲いを造っている。567号墓は、床面に石が散乱して見えるがそのほとんどは壁側より倒れこんだものと考えられる。復元すると4方の壁際に長さ20～40cm程度の石で石囲いを造っている。

石の落ち込み 墓壙の床面より浮いた状況で検出される石があり、原位置ではなく上方から落ち込んだと考えられる。これは、石組の石が落ち込んだものと、墓壙内の上層にあった石が落ち込んだものと大きく2つの意味で捉えることができる。

まず、確実に石組の石が落ち込んだものとして、339.340.567号墓等が挙げられる。これらは、石組全体が中央に落ち込むような状況を呈しており、石組と墓壙の所作時期が近いことが考えられる。さらに、石組が落ち込むということは、有機質のものが腐朽した可能性が考えられ、木棺等の存在が指摘できるとも思われる。

しかし、このように石の落ち込みが何に起因するものが判るものは少ない。また、墓壙内の上層に例えば、遺体や木棺の上に置かれた石が落ち込んだと断定できる状況はない。ただ、この石の落ち込みには幾つかパターンがあるので、例としてまとめておく。

まず、93.94号墓のように、30cm以下の比較的小さな石が数個がまとまって浮いた状況で検出されるものがある。一方、159.216.381.489.496.497.524号墓のように、30～50cm程度の石が数個、墓壙内全体に検出されるものもある。これらは、どの段階で石が落ち込んだかは不明だが、やはり木棺等の存在が指摘できる。

以上、土葬墓A類の墓壙の石の検出状況を記述してきたが、以上のように説明が困難なものも多い。例としては、187.198号墓のように、1～数個が1ヵ所にまとまって検出される場合がある。また、床面より浮いているものが全て上方から落ち込んだと言えるかどうかも断言はできない。

②木棺の有無と埋土の状況

土葬墓A類には、先にも若干触れたが木棺の存在が指摘できるものもある。

まず、確実なものとしては、鉄釘の配置から木棺が復元できるものである。91.364.372号墓等は、鉄釘が4隅にあり、木棺の規模、鉄釘の使用状況等が推定できる。一方、241.553.600号墓のように、4隅にはあっても数が少ない等の不安材料があるものもある。

他に、336.541号墓のように1本ないし2本程度しか検出されないものもある。これらはサンプリングエラーの可能性は否定できないが、単純に鉄釘を使用した木棺を推測してよいのかは注意を要する。

また、先に示唆していたように、石の落ち込みおよび床石等の存在により、木棺の存在が指摘できるものもある。ただ、土壤の関係もあるのか、当墳墓群では木質が腐朽したような層が確認できたものはないが、埋土が複雑な堆積を見せるものや、中央が凹むような堆積を見せるものがある。また、これと類似する現象で、36.98.601号墓は土器が落ち込んだような状況で出土している。これらは、間接的ではあるが木棺の存在を示唆するものと思われる。

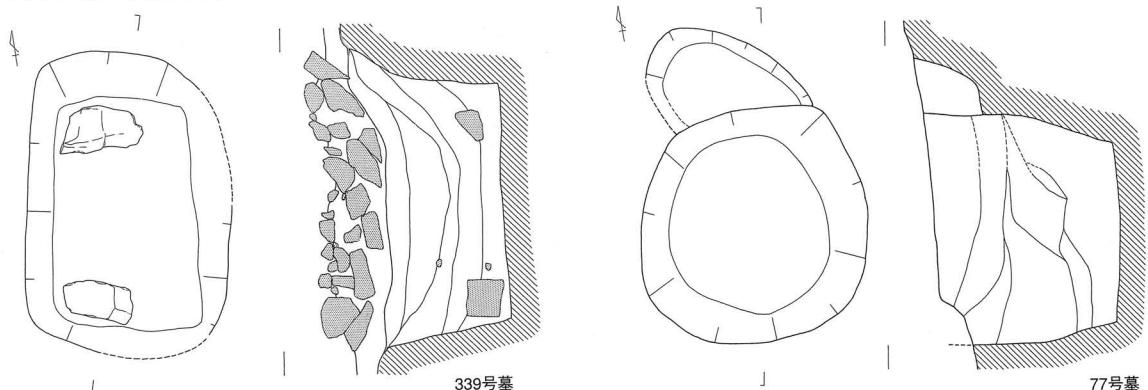
その他、埋土の状況として一度掘り返したような状況を見せる堆積を示す確実なものはない。

③特徴的な例と出土遺物

以上、土葬墓A類の内部施設や木棺について記述してきたが、ここでは特徴的な例を挙げる。

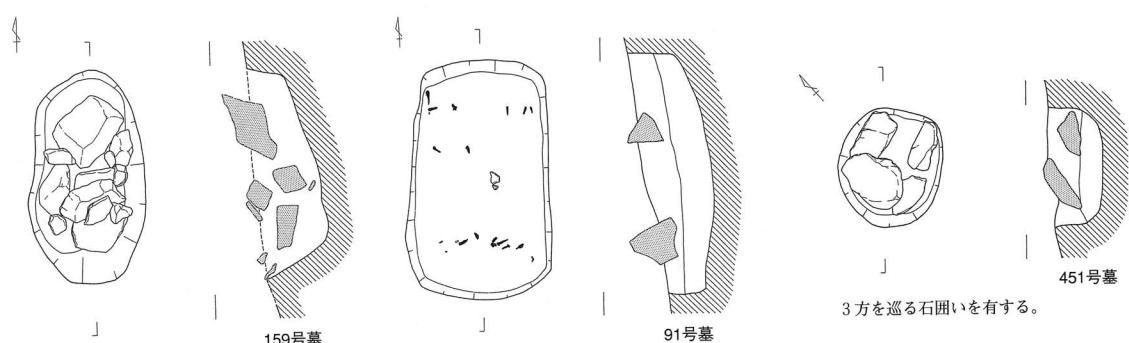
まず、E-a群の336.337.339～341、H-c群の567～569.571.572号墓は、墓壙の長軸が約1.3～1.5

土葬墓A類 火葬を示す痕跡がなく、主軸を概ね南北を指向する墓壙である。



埋土が中央部に落ち込んだような堆積を呈している。棺台を南北2石に配する。

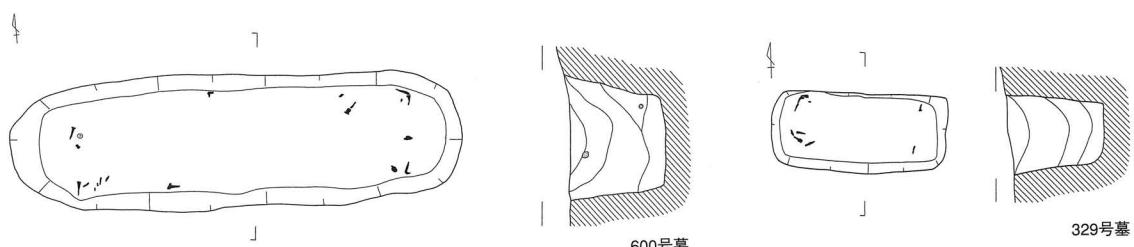
平面形が円形で、埋土がやや複雑な堆積である。



墓壙全体に石が落ち込んだような状況を呈している。 鉄釘を使用した木棺が据えられている。

3方を巡る石圍いを有する。

土葬墓B類 火葬を示す痕跡がなく、A類に比較すると主軸を概ね東西を指向する墓壙である。墓壙の長軸により、大小2つの規模に分けられる。



墓壙の規模が大きいものである。鉄釘を使用した木棺が据えられており、6枚重ねられた錢貨が検出されている。

墓壙の規模が小のものである。鉄釘を使用した木棺が据えられている。

墓以外の性格を有する可能性がある遺構

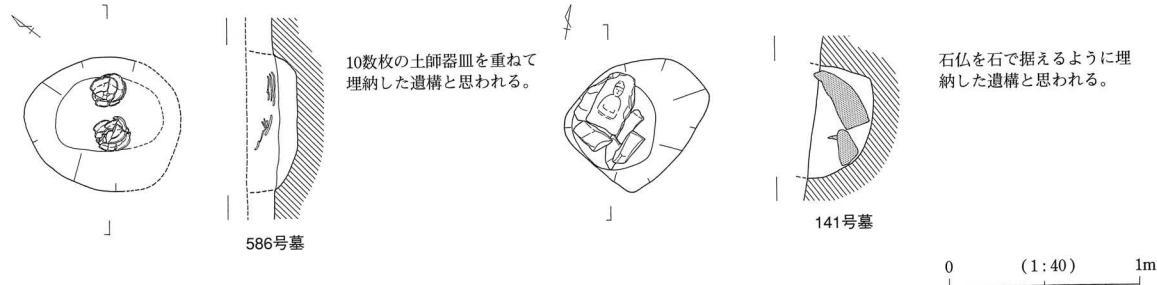


図49 土葬墓の分類

m台で、深さが約0.4～0.6m台である。長軸と短軸の比率が1.4以上と、比して短軸が短く長方形の平面形を呈するという共通性がある。石組から見ると、E-a群の墓は全てI-①-a類の石組を有し、H-a群の墓も残存状況からは同タイプの石組が推定できる。また、567.572号墓から鳥帽子と短刀が、569号墓からは短刀、341号墓は石組内からであるが小柄が出土している。これらは出土遺物が少ない当墳墓群ではやや異例と言える。墓壙の類似性が同時性を主張できるかは慎重に検討する必要があるが、336号墓からは14世紀代の瓦器碗、571号墓からは13世紀後半の土師器皿5枚が出土している。

529.536.577.595号墓は、平面形は径約0.9～1.0mの円形で、深さ約0.5～0.7mの墓壙で、径約1.3mの77号墓も共通している。墓壙の規模・構造から、座臥屈葬による埋葬であったと推定できる。桶等の使用は明瞭な痕跡は確認できなかったが、埋土にしまりがなく落ち込んだような状況を呈していることから使用の可能性はある。

その他、土師器皿が出土している墓があり、36号墓は15世紀前半、98号墓は15世紀後半、602号墓は16世紀中葉のものと、時期的に幅がある一群であると思われる。

2). 土葬墓B類

土葬墓の内で、墓壙の形態・規模が特徴的な一群がありB類としており、21基を数える。墓壙の主軸が北から東西に60～90°に収まるもので、A類に比較すると東西を指向している。規模は長軸が約0.85m～2.4m、短軸が約0.4m～0.75mの範囲に収まる。平面形は、長軸と短軸の比率が2.5以上と、A類に比較すると非常に縦長の長方形である。深さは約0.35m～0.8mと当墳墓群では深い部類である。墓壙の規模において、その長軸で0.8～1.3mを小、1.7～2.4mを大に分けることができる。

この墓壙には、大多数に木質が残存した鉄釘が出土しており、その配置から木棺が想定できる。しかし、406.412.448号墓からは、全く鉄釘が出土していないものがある。なお、448号墓では肥前系磁器碗が落ち込んだような状況で出土していることから、鉄釘を使用しない木棺が存在した可能性がある。

出土遺物として、他に、555.600号墓から銭貨が六枚重なった状況で墓壙の西側から、床面より5cm程度浮いた状況で出土している。600号墓から出土したものは、藁状のもので束ねてあり、いわゆる「さし銭」の状況が窺え、さらに一番下の銭貨の底面には板が付着していた。この板は木棺の底板の可能性を否定できないが、床面より浮いているので別の木製品に入れられていた可能性も否定できない。

(3) 墓以外の性格を有する可能性がある遺構

墓壙は、基本的に土葬墓と火葬墓と考えたが、その状況から墓ではなく別の性格を有する遺構と思われるものがある。性格としては、何らかの葬送儀礼等に関する遺構と見ることができる。

586号墓は、径約0.7m程度の墓壙に、数枚の土師器皿を集積した遺構である。土師器皿は重ねられた状況で出土しており、土師器皿自体を埋納した可能性が高い。18号墓では1枚の土師器皿を正置で置いたものがある。この墓壙には骨は検出されておらず、その性格を断定できない。

141.200.270.271.377.407号墓は、墓壙内から石仏・五輪塔が出土している。具体的に言えば、141号墓は、石仏を石で囲って据えたような状況である。270号墓は、墓壙内に空風輪、地上には水輪を据える。377号墓は墓壙には地輪、その上面には石仏を2体裏返した状況で置かれてある。一方、404号墓は石仏や五輪塔を積み重ねており、埋納というよりも整理したような状況と言える。

111号墓は墓壙内に被熱した石が大量に集積している。この墓には被熱も見られず焼骨や炭も見られない為、火葬墓A類に使用した床石等を廃棄もしくは整理した遺構の可能性がある。

第4節 墓群の構成

本調査で検出した中近世墓は、600余基におよび、それらが、隣り合わせて並ぶ場合や、複雑な切り合い関係で構成されているものなど、様々な様相を見せている。

ここでは、まず、それらを平面的に捉えて墓相互の関係を見て行きたい。そのためには、これらの墓の構成をより良く理解し易くする上で、以下の様に墓群として区分し、記述していくことにする。

なお、炭盛土および火葬場については、別項を設けた。

1. 墓群の単位

中近世墓を見て行く場合に、一つ一つの墓について詳細に述べていくのが、本来の方法ではあるが、個別に述べていくと、位置関係や前後関係が捕まえ難く、全体の流れを把握することが困難であると思われた。このことから、ある程度の集まりを一単位の墓群として、以下の様な区分を行い、記述して行くこととした。

中近世墓群の単位としては、まず、墓域を大きくA～Hの8群の地域に区分し、それぞれをさらに、重複して一塊になった群や、列をなして並ぶ群として捉え、それらのまとまり毎により、さらに、小区分している。

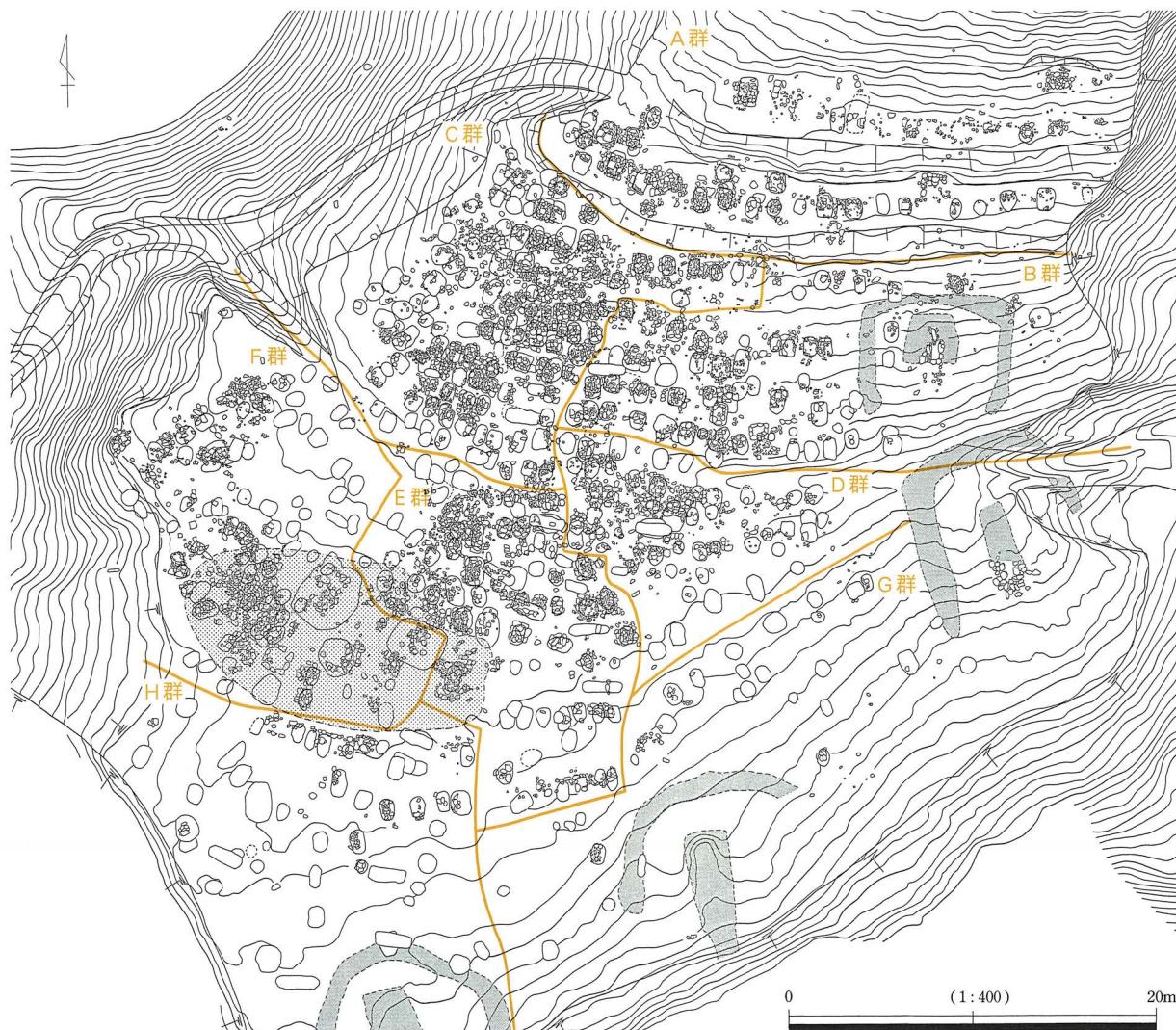


図50 中近世墓大区分（A～H群）

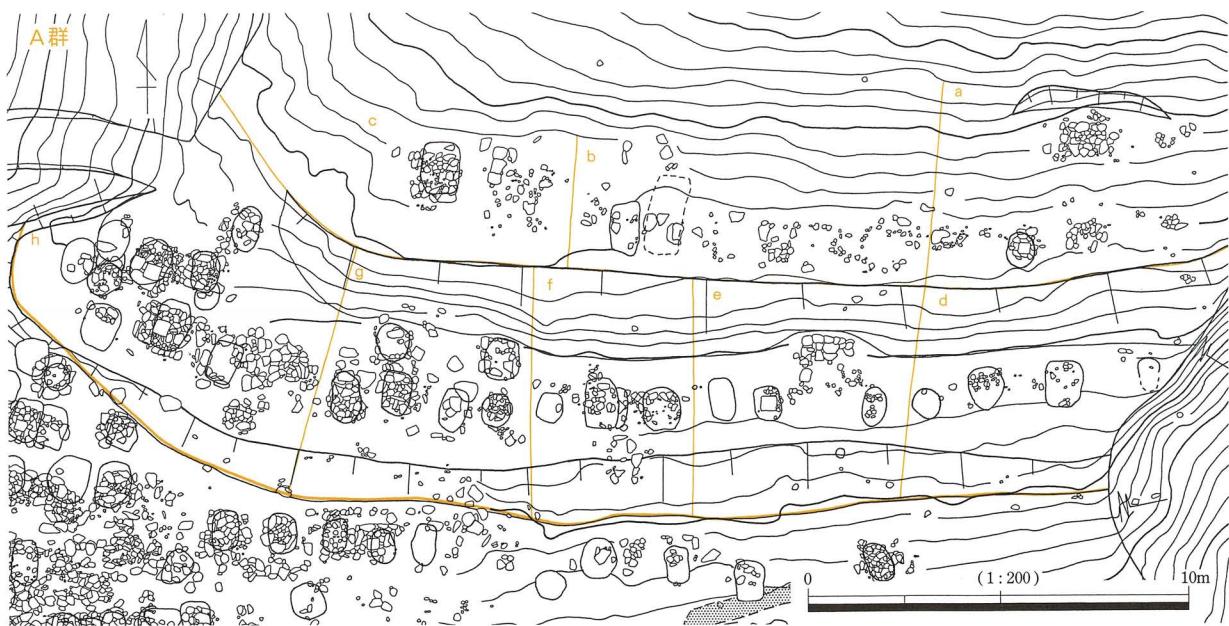


図51 中近世墓小区分 (A - a ~ h 群)

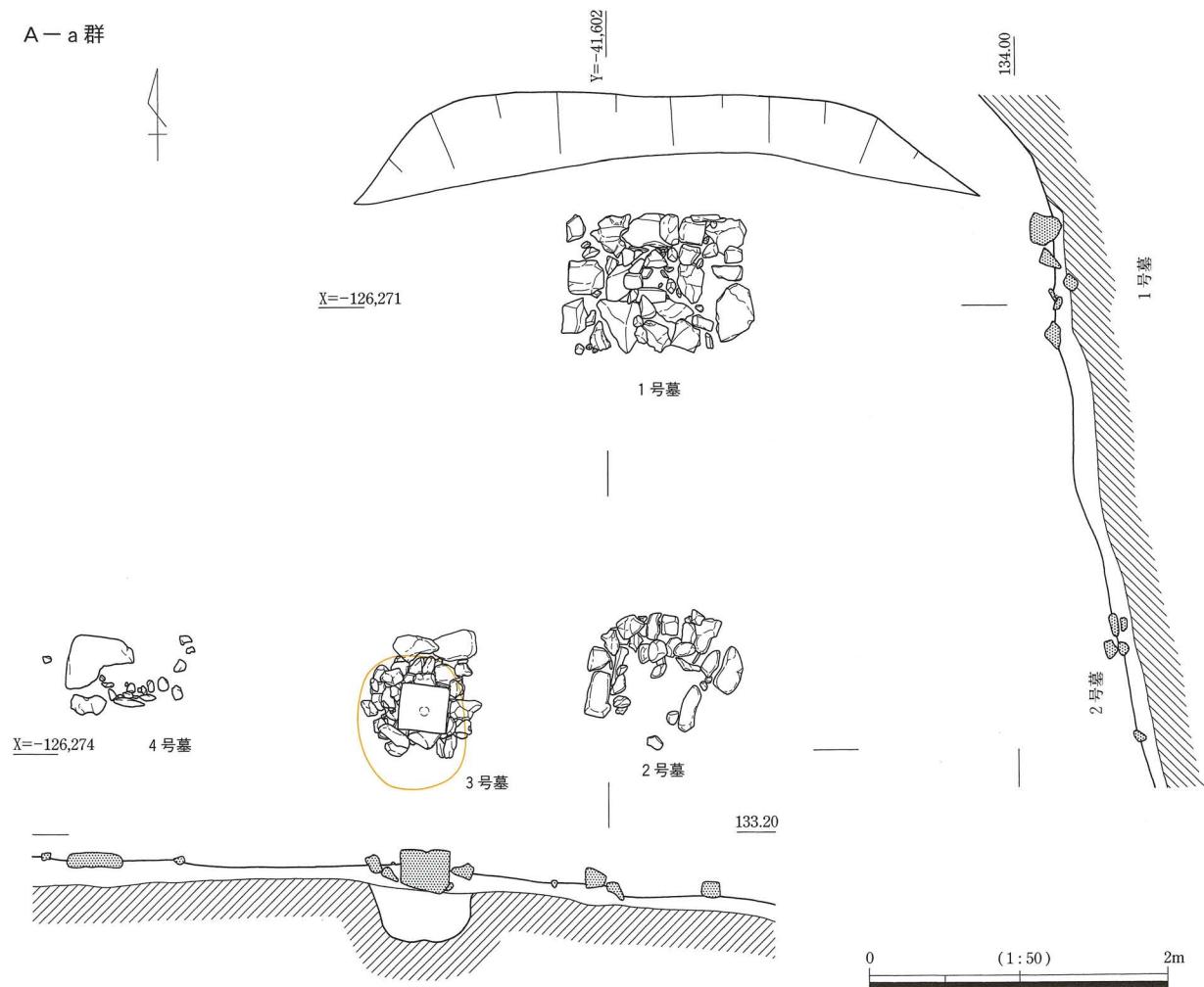


図52 中近世墓 A - a 群 (1~4号墓)

ここでの単位は、あくまで墓域を任意に区分したものであり、それらの見せかけ上の単位である。

2. A群（図51～56）

A群は、墓域の北辺に位置し、傾斜が急で段状に造成された部分である。大きくは、3段造成されている。最上段は、北東端に1基のみ造られており、本来の墓域に追加されたものと考えられ、背面を円弧上に切り取っているものの、平坦面を丁寧に造り出している。2段目は、平坦面をもつものの、東側に向かってわずかに傾斜している。石組の残存が不良で墓壙が検出できたものもわずかである。3段目は、ほぼ水平な面を造り出しており、西端部では、北側に向かって面を広げている。

A群は、さらにa～h群の小ブロックに8区分される。このうち、a～c群は1・2段目に位置し、d～h群は3段目に位置している。

（1）A-a群（1-4号墓）

A-a群は、北東端に位置し、東端の最上段に1基のみを検出しその南側に3基の墓を検出している。

1号墓は、石組のみを検出しており、墓壙は検出していない。石組はほぼ完存し、その中に四方に石が組まれていることから、地輪を設置していた様子が見受けられた。横長な石組である。方向が90度違うが同規模の墓として492号墓があり、同様な五輪塔をもつものと考えられる。

2～4号墓は、1段低い面に造られている。2号墓の石組は、中心部および南半部のほとんどが欠失し、北辺の石組は2段残存していた。墓壙を検出していない。1号墓とほぼ同方向を示している。3号墓は、中心に五輪塔の地輪が座っていたが石組の外枠が北辺のみ残存していた。石組の石の積み方を見ると、地輪の下端が平坦でないために方形に石を組んで設置し易くしている。その後、周辺に石を2、3段積んでおり、外周の石は北辺で見ると1段のみで、斜面地形を利用して置かれていることが観察でき、地輪上面より高くなっている。4号墓は、北西角石が残存していると思われ、2号墓の北辺とわずかに異なっているようである。規模等不明であり、墓壙も検出していない。なお、3・4号墓の石組の北辺が揃っていると思われる。

3号墓は、この群で唯一、墓壙を検出しており、それは火葬墓A類である。

（2）A-b群（5-9号墓）

この墓群は、石組の残存状況が悪く、石組の規模が把握できるものもほとんどない。また、墓壙をほとんど検出しなかったことから、墓としての存在が危ぶまれる一群である。

石組は、ほぼ列をなして並んでいる。7号墓は中心部が方形に空いており、おそらく地輪が座っていた可能性が考えられる。また、9号墓のみ石組の下部に土葬墓A類である墓壙が確認されているが、確実に対応したものかは不明である。

（3）A-c群（10.11号墓）

この墓群は、A-b群から連なり、北西端に位置する。

10号墓は、東側および北側の外枠の石が残存しているものの、全体の大きさが不明である。墓壙は検出していない。石組の西側で土師器皿（図109-16）が出土している。

11号墓は、石組をほぼ残存し、中心がわずかに窪んでいることから、五輪塔の地輪が座っていた痕跡が窺われる。

墓壙は火葬墓A類である。墓壙内から鉄釘が47本出土しており、その配置から木棺が推定できる。また、鉄釘は被熱しており下層にのみ出土している。なお、焼骨は微量しか検出していない。以上のことから、遺体を納めた木棺の鉄釘を火葬後、拾骨時の片付けの際に取り残したものと思われる。さらに、



図53 中近世墓A-b群(5~9号墓)、A-c群(10,11号墓)、A-d群(12~15号墓)

出土した温石（図115-2）も被熱 A-e群しておらず、この木棺に副葬されたいたと思われる。墓壙床面には、北側に小さめの石を置き、南側には地山の石を利用して棺台が配されている。

この2基は辺を揃えておらず、方向も違えている。

大きく見れば、2号墓から11号墓が同一面を共有し、ほぼ列をして並んでいる。

（4）A-d群(12-15号墓)

この墓群は、東側が崖になり崩落しているため、さらに東側に数基あった可能性があろう。A-a群の南側に当たる。石組は、ほとんど残存していないが整然と列をなした墓壙を検出している。

この墓群の墓壙は全て火葬墓A類である。12号墓は削平を受けているので推定であるが、長軸0.6m前後を測り小規模な墓壙といえる。13号墓は、床面全体が被熱しており、棺台を有さない墓である。14号墓は墓壙の床面に10個の石を敷きつめたように検出しており、棺台に使用されたと思われる。

なお、13.14号墓は長軸1m前後で平面形が長方形という点で共通している。15号墓は12号墓と同様に当群では小規模な墓壙である。

（5）A-e群(16-20号墓)

この墓群は、A-b群の南側に位置し、A-d群に連なる。16.19.20号墓が列をなしており、17号墓はこれらより約1m奥まった位置にある。石組は、17号墓を除きほとんど残存しておらず詳細は不明である。17号墓は、北辺は地山直上から4段積まれた石組をもち、その南半部を欠失している。墓壙は検出していない。この17号墓は、一列に並ぶ他の墓より奥まった位置にあること、背面の斜面を円弧状に削り取って造られていることから、この墓群では一番新しい墓であると思われる。

19号墓には地輪が座っており、その大きさから推定すると35号墓と同様な規模の石組になると思われるが、墓壙の規模に差異があることと、地輪下にそれを支える石組がないことから、本来の位置を動いている可能性がある。

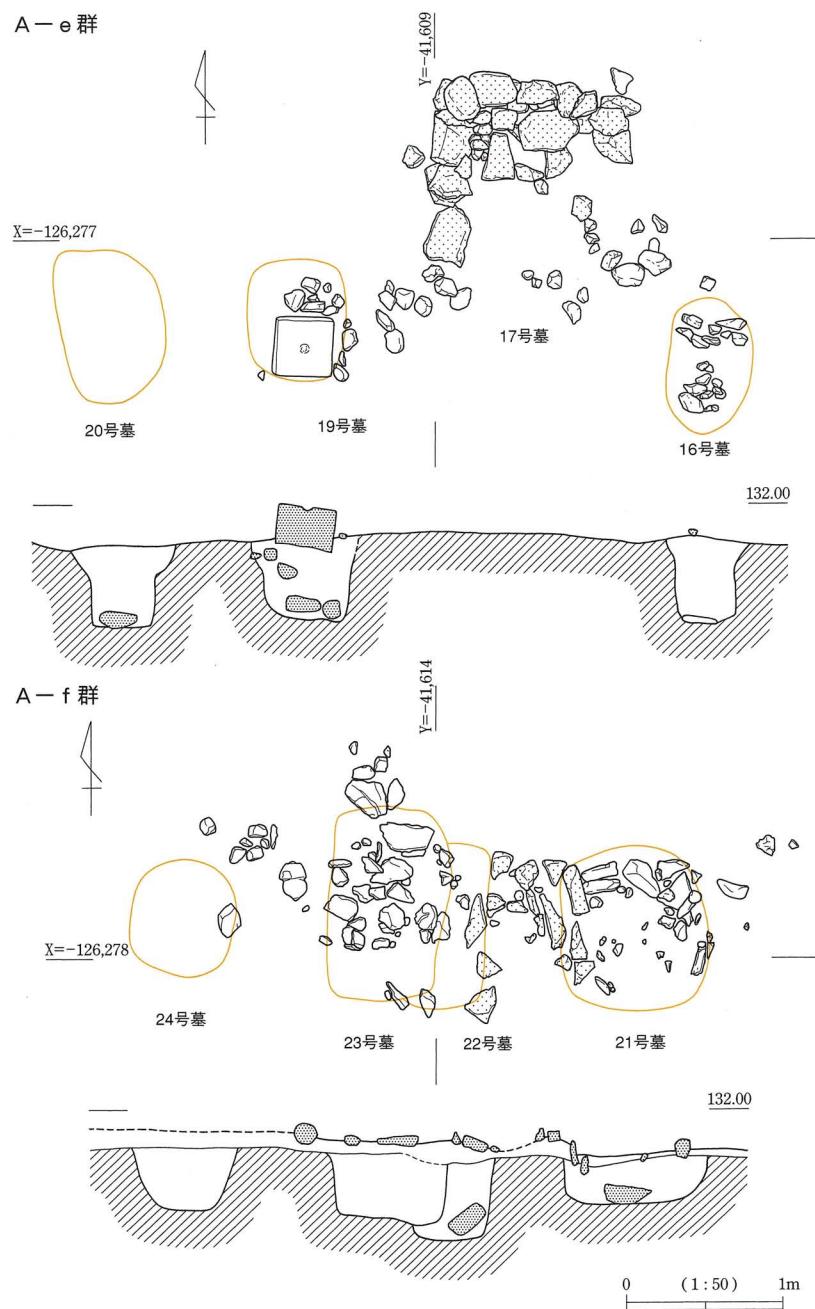


図54 中近世墓A-e群 (16~20号墓)、A-f群 (21~24号墓)

16.19.20号墓の墓壙は、火葬墓A類である。いずれも棺台を有するが、19号墓は6石であるのに対し、16.20号墓は3石である。墓壙の規模および棺台の形態からすると、20号墓は16号墓との共通性が窺われる対になると考えられる。

18号墓は南側の斜面地で検出しており、径約0.3mの墓壙で土師器皿（図109-44）が完形で出土している。この土坑からは、骨や炭なども検出されておらず、墓ではない他の性格を有する可能性もある。

（6）A-f群(21-24号墓)

この墓群は、A-d群に連なり列をなしている。

石組から見た場合に、21.22号墓の北辺が一直線になることから一対になると考えられるが、墓壙の構造に差異が認められる。また、22号墓の石組は、23号墓が造られた時点で壊されていることからすると21号墓と22号墓の墓壙間上面に築かれている石組は、別の墓と考えの方が妥当と思われ、21号墓が造られた後、その北辺に合わせて石組の造り替えが行われたと考えられる。その造り替えられた22号墓の石組の中心に石仏を据えた痕跡が窺われる。なお、22号墓の墓壙東南端上で出土した石は、本来の石組の名残と考えられる。23号墓の石組の北辺は、平行ではあるがこれらとは異なっている。

次に墓壙から見ると、21~23号墓は火葬墓A類である。これらは棺台を有しており、21.23号墓は原位置を保っている。22号墓は、中央の底石が落ち込んでおり拾骨時に動かしたことが良く分かる。23号墓からは、被熱した鉄釘が7本出土しており、火葬時に使用した木棺のものと思われる。

以上のように、この21~23号墓は墓壙では3基であるが、石組では4基の墓があったと考えられる。

一方、24号墓は石組がほとんど残存していない。23号墓との間に空風輪が点在している。24号墓は、土葬墓A類で、長軸が0.8m前後で25号墓と規模の面で類似している。

（7）A-g群(25-30号墓)

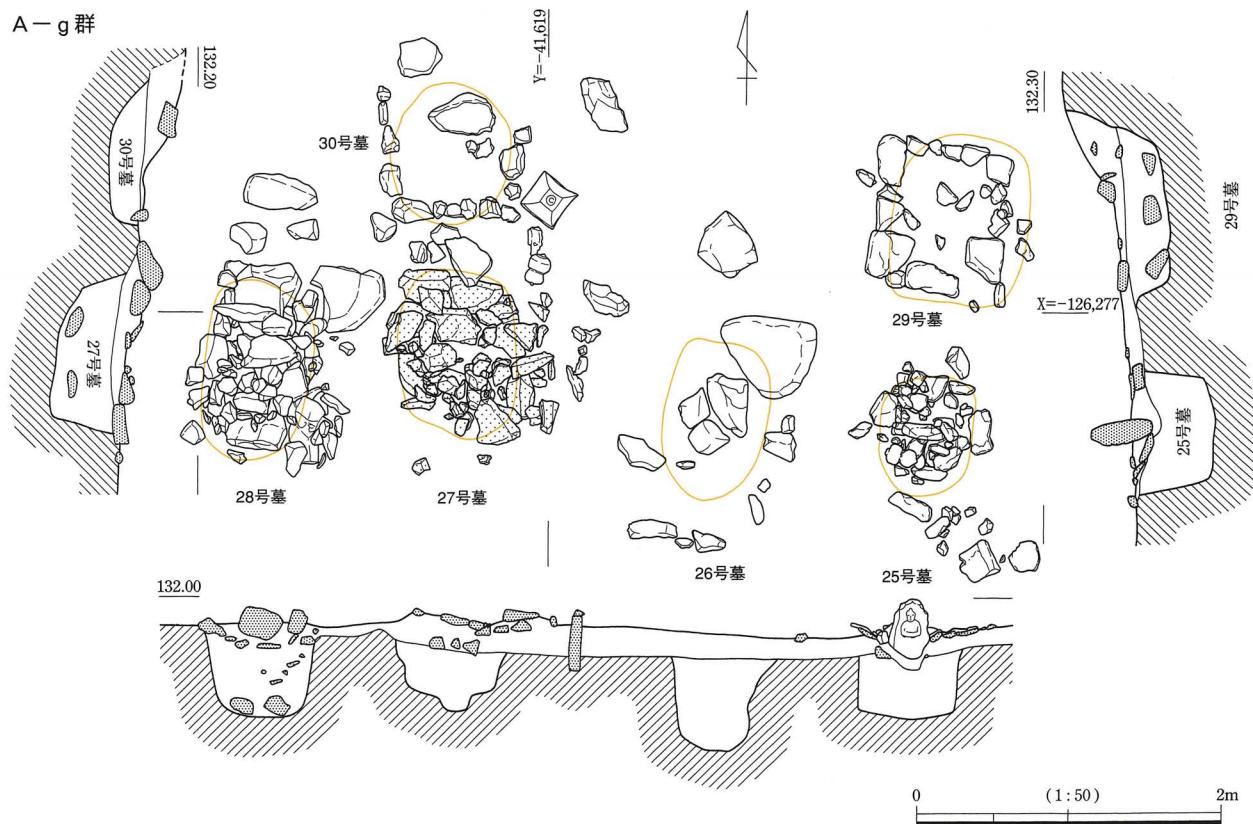


図55 中近世墓A-g群 (25~30号墓)

この墓群は、前列の4基がA-f群に連なり、後列に2基検出されている。

27.28号墓の石組の北辺が一直線に並び、ほぼ間隔を開けずに接して造られている。25.26号墓は前者と相対的な位置関係では並ぶものの北辺はそれぞれ異なっている。25号墓の周縁の石は、ほとんどを消失している。

29.30号墓は前述の墓群の北側に造られ、それぞれの背面を円弧状に削り取っている。また、この2基の墓は、石組の中心部を欠損するものの規模がほぼ同じである。しかしながら、墓壙の規模で比較すると差異があり、29号墓は、石組の造り替えが行われた可能性が指摘できる。

また、27.30号墓の東側に五輪塔の火輪および空風輪が点在しており、あたかも27号墓の東辺と揃えているように見える。なお、25.29号墓の東辺が揃っていることが判る。27.30号墓および25.29号墓はそれぞれ南北に並び、26号墓および28号墓の奥には墓が造られないが、それぞれの北側に40~50cmの石が1個ずつ出土しているのは、置かれたと考えれば、何らかの関係を示しているとも思われる。さらに詳細に見ると、26~28号墓では、北辺の石が50cm前後の大きな石を用いており、中心部に、やや大きめの石を充填しているという共通点がある。25号墓には、石仏が座っており石仏の前面に空風輪が置かれてあった。

墓壙では、25号墓のみが土葬墓A類で、他は火葬墓A類である。25号墓は、先述したように24号墓と共通した墓壙である。火葬墓A類の内、26~29号墓は、棺台を有するタイプである。また、27号墓は床面を10cm程度掘り窪めた煙道も有し、その上に2石の棺台を渡している。28号墓の棺台の配置は、南北に30cm前後の大きさの石を配し、その間に15cm前後の石を2石東西に置く。この配置は、33号墓などと墓壙の規模に差異はあるが類似している。29号墓からは、明瞭な被熱が見られないが鉄釘4本が出土しており、火葬時に使用した木棺のもの可能性がある。30号墓は墓壙内の東側に地山の石が露出しており、被熱している。しかし1石しかないと、意識して棺台に使用されたかどうかは断定できない。

(8) A-h群(31-42号墓)

この墓群は、北西端に位置する。南側の一群がA-g群に連なる。北半部では、わずかに傾斜していることから、立地条件がやや不利になっている。

石組で見た場合に、31.32号墓は、墓間にも石を並べることで関連付けており、南辺を揃えている。31号墓は、墓壙を検出していない。また、石組と墓壙を照らし合させた場合に、32.33号墓の墓壙が平行して並んでおり、32号墓の石組と墓壙の方向に一致を見ないことが判った。さらに、石組をより詳細に観察すると、本来32.33号墓の石組の向きが同一方向であったのに対して、石が追加され、31.32号墓の南辺が並ぶ様に、造り直しが行われたことが判明した。なお、33号墓の石組は、東西約1.5m・南北約1.3mを測り、南北辺がやや短くなっている。これは、36号墓を造る段階で、本来、正方形の石組の33号墓の北辺を再整理し直したことを見窺わせるものである。

また、石組の並びで見るならば、35号墓および41号墓が33号墓にほぼ向きを揃え、36号墓がやや傾きを変えている。39号墓に至っては、さらに方向を違えていることからこの墓群のなかで最も新しい石組と考えられる。

33.35号墓には、地輪が座っており、31.32'.36号墓にも五輪塔が設置されていた可能性が考えられる。39'.43号墓には、石仏が座っていたと思われる。

31.39'.43号墓は、墓壙を検出していない。

墓壙は、火葬墓A類である32.33.35.37~41号墓と、土葬墓A類である34.36.42号墓で構成される。



図56 中近世墓A-h群 (31~43号墓)

火葬墓A類では、37.38号墓以外が棺台を有している。33号墓の棺台は、先述のように28号墓と類似している。35号墓は、石組の南側の石が80cm前後のかなり大きな石であり、墓壙を掘りこんで据えられている。よって、墓壙と石組の構築時期には大きな差はないようと思われる。36号墓の石組から土師器が3点、墓壙内の床面より浮いた状況で2点の15世紀代の土師器皿（図109-3,7,11）が出土している。

34号墓は、墓壙内から15世紀代の土師器皿が1点出土している（図109-10）が、深さ0.13mと非常に浅く、土葬墓であるかどうかは判断がつかず、不明とした。

36.42号墓は、南北に配されており、33.35号墓と同じような位置関係であると看取される。

なお、33号墓と35号墓の石組を比較した場合に、石組の規模は、 $1.55m \times 1.33m$ 、 $1.33m \times 1.20m$ を測り、33号墓の方がやや大きく、また、地輪の大きさで見た場合に、40.4cm、37.5cmと、やはり前者が一回り大きい。さらに、墓壙の規模で比較すると、長軸、短軸の長さおよび深さがほとんど変わらないが、底部の長さで見ると、およそ20cm前者の方が長く、棺台の置き方で見ると、前者が十字形に6個の石を置いているのに対して、後者が長軸方向に2個並べているという差異が判明した。

墓壙の主軸方向を見ると、32～34.37.41号墓は、同方向を示しており、35号墓がわずかにそれより東に振り、38号墓がさらに東に振っている。また、36.39.42号墓がわずかに西に振っている。また石組にも同じことがいえ、39号墓の石組が墓壙の方向と石組の方向に差異が生じていることから、石組と墓壙が別個に造られたものであると考えられる。

なお、33号墓は、地輪が動いており'67年の発掘調査で一部が掘削されていたことが判明した。

A群の12号墓から16号墓、19号墓から28号墓、31号墓から33号墓が、ほぼ列をなして並んでいる。

3. B群（図57～64）

B群は、北半部のA群の南側に位置し、C群と東西を分かつ東側の区域である。その西半部では比較的整然と列をなす石組が残存していた。また、東半部では1号墳が存在し、それを避けるような墓の配置になっており、中世墓が出来た段階では、まだ古墳の存在が認知されていたようである。

この墓群は、A群と違い傾斜地をそのまま利用する形で造られており、石組で見るならば、雛壇状に造成されているように見えるが、実は、墓壙を掘削する段階では傾斜地形のままであり、石組を造る段階で水平にしていることが判明した。



図57 中近世墓小区分（B-a～i群）

B-a群

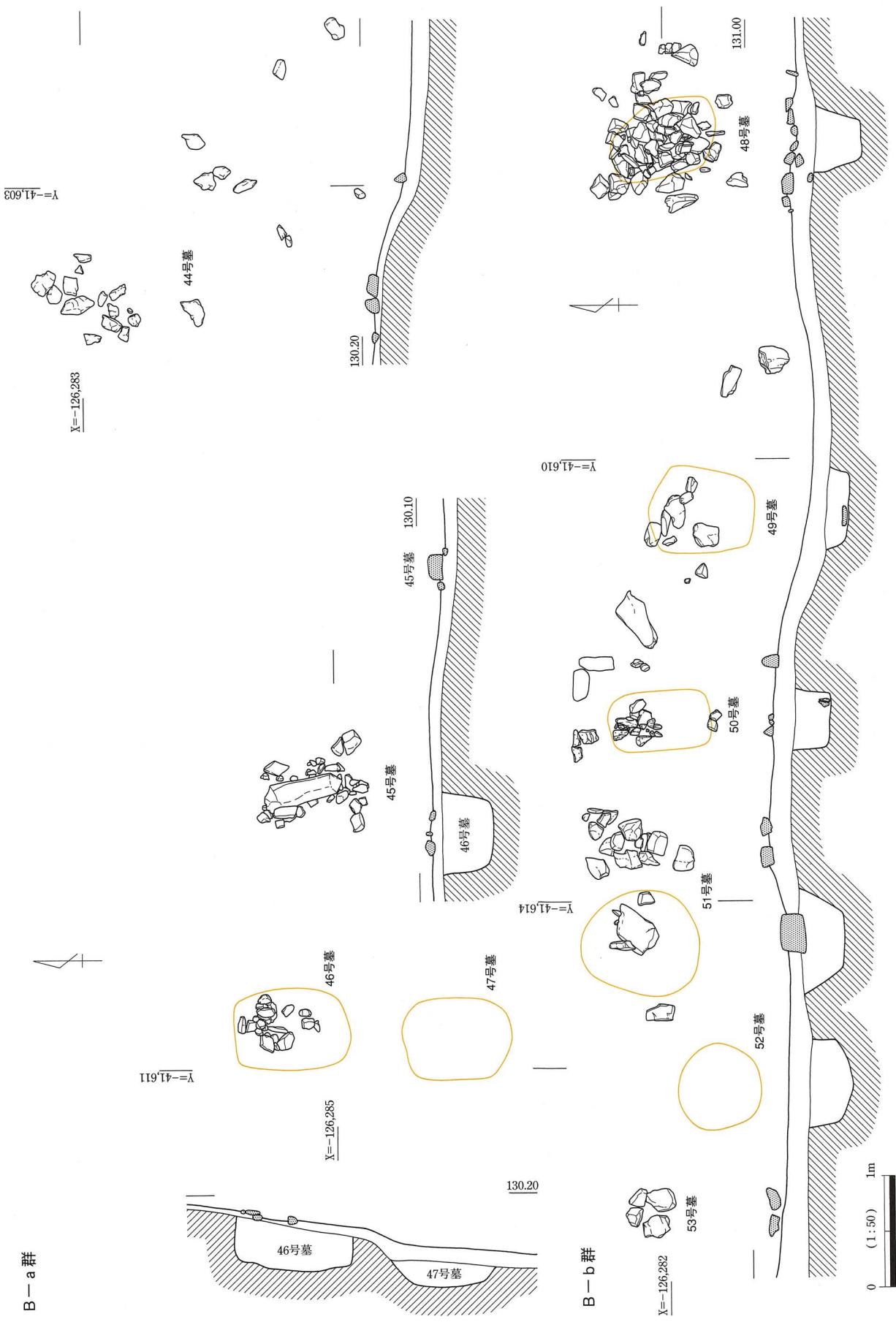


図58 中近世墓B-a群(44~47号墓)、B-b群(48~53号墓)

おおよそ、6列の墓群からなり、わずかに方向を違えていたり、その切り合い関係などから、a～i群に小区分している。

(1) B-a群(44-47号墓)

この墓群は、古墳の1号墳周辺で検出した墓で列をなさず散在していた。44号墓は墓壙を検出しておらず、残存状況が不良なことからも、上方から流出したものとも考えられる。45号墓は、1号墳の石室直上に位置するが石仏や石組の出土状況から、古墳の墳丘が削平され石室の石が抜き取られた後に造られたと思われ、墓壙を伴わない墓と認識している。46.47号墓は伴に石組がほとんど残存しておらず、南北に配置されている。前者が土葬墓A類で、後者が火葬墓A類であり、2石の棺台を有している。両者は、1号墳の墳丘上に造られているが、墳丘が削平された後であったことが判る。

(2) B-b群(48-53号墓)

この墓群はA-d、e群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って一列に並んで検出している。48号墓を除いては石組の残存状況が不良で墓壙の並びで見ても整然と並ぶものではない。48号墓の石組からは、常滑甕の体部破片が出土している。50号墓は石組の北東角が残存していた。しかしながら他の石組と比較した場合に、墓壙との距離を置くために別の石組であった可能性がある。そうした時に50.51号墓間の石組は、前述したものと同様に石組のみの墓であった可能性が大である。

53号墓は、被熱した石が4個ほど平坦に出土したことから火葬墓A類の棺台とも考えられる。

48.51.52号墓は、土葬墓A類である。51.52号墓は、隣り合うことと墓壙の平面形が円形であることから、何らかの関係が想定できる。49.50号墓は、火葬墓A類で棺台を有する。これらも、隣り合っており、関連性があると思われる。

なお、49号墓は、1号墳の区画溝が埋まった後に墓壙を掘削している。

(3) B-c群(54-57号墓)

この墓群は、B-b群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って一列に並び、石組が接して造られる2基1対のもので、2組の墓が造られている。地形は、わずかに東に傾斜している。石組はほぼ並んでいるように見えるが、詳細に見ると、54.55号墓と56.57号墓ではわずかに列を異にしている。54号墓が55号墓を切っていることから、先後関係が判る。56.57号墓に関しては、その墓壙に切り合いが認められないものの、墓壙の掘方と石組の並びで見ると、墓壙が東に傾斜しているにも関わらず、石組がほぼ水平に造られていることから56号墓が後出することが判る。さらに、57号墓の墓壙上に墓壙の輪郭に合わせて石が置かれているが、外枠の石がほとんど残存しておらず、56号墓の外枠が残存していることからも、56号墓が後出すると考えられる。なお、57号墓の石組には、空風輪が転用されてい

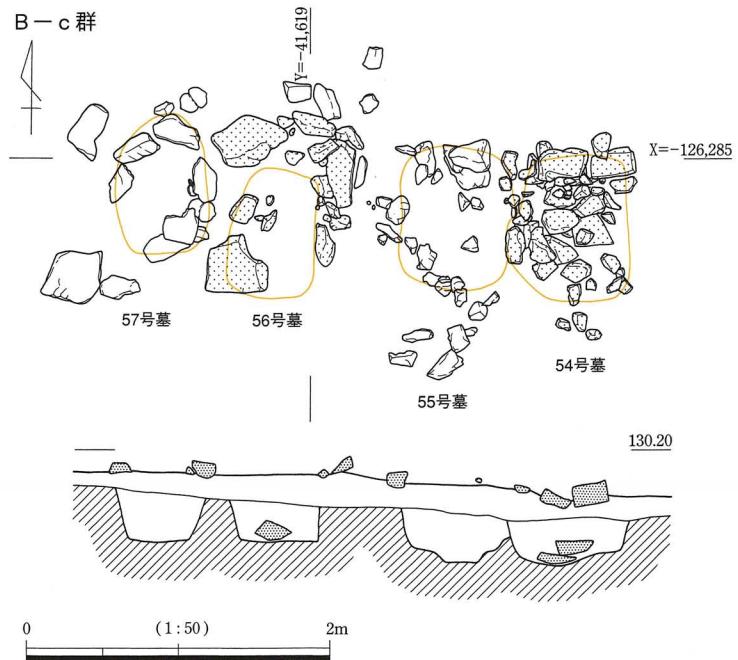


図59 中近世墓B-c群(54～57号墓)

た。

54～57号墓は、火葬墓A類である。棺台を有するのは、54.57号墓である。55号墓には、中央にほぼ円形で深さ約10cmの落ち込みがあるが、煙道であったかは不明である。

この墓群は、石組および墓壙の規模がほぼ類似していることから、あまり時間差が無いと思われる。

(4) B-d群(58-67号墓)

この墓群はC-c群の南側に位置し、列をなし並んでいるが等高線に逆らって造られている。他の墓群と違い、石組の方向がほぼ南を向いているが南辺および北辺を揃えてはいない。59号墓は、南西角の石組を残存しているが、墓壙が検出されず、その規模等は不明である。60号墓は、石組の外枠に水輪および火輪が再利用されていると思われ、北辺を欠く。61号墓は64号墓により石組を壊され、北東角のみを残存していた。62号墓は65号墓に石組を壊され北半部のみを残存しており、石仏が立っていた。63号墓は、65号墓に石組を壊され、北半部を残存していた。58号墓は墓壙のみを検出している。

58.60～63号墓の墓壙は、いずれも土葬墓A類である。60.61.63号墓は、墓壙の規模・平面形において類似したものと言える。

58～60号墓は、B-e群の68～70号墓の北側に取り付く様な形で検出されており、それらとの関連性が考えられる。

64号墓から67号墓に関しては、一見、前者の墓の石組とも考えられたが、詳細に観察した結果、以前の墓を意識しながら造り足された墓であり、これらの一群は、墓壙を持たないものである。

また、63.64号墓には地輪が、66号墓には石仏が座っていた痕跡が窺われる。

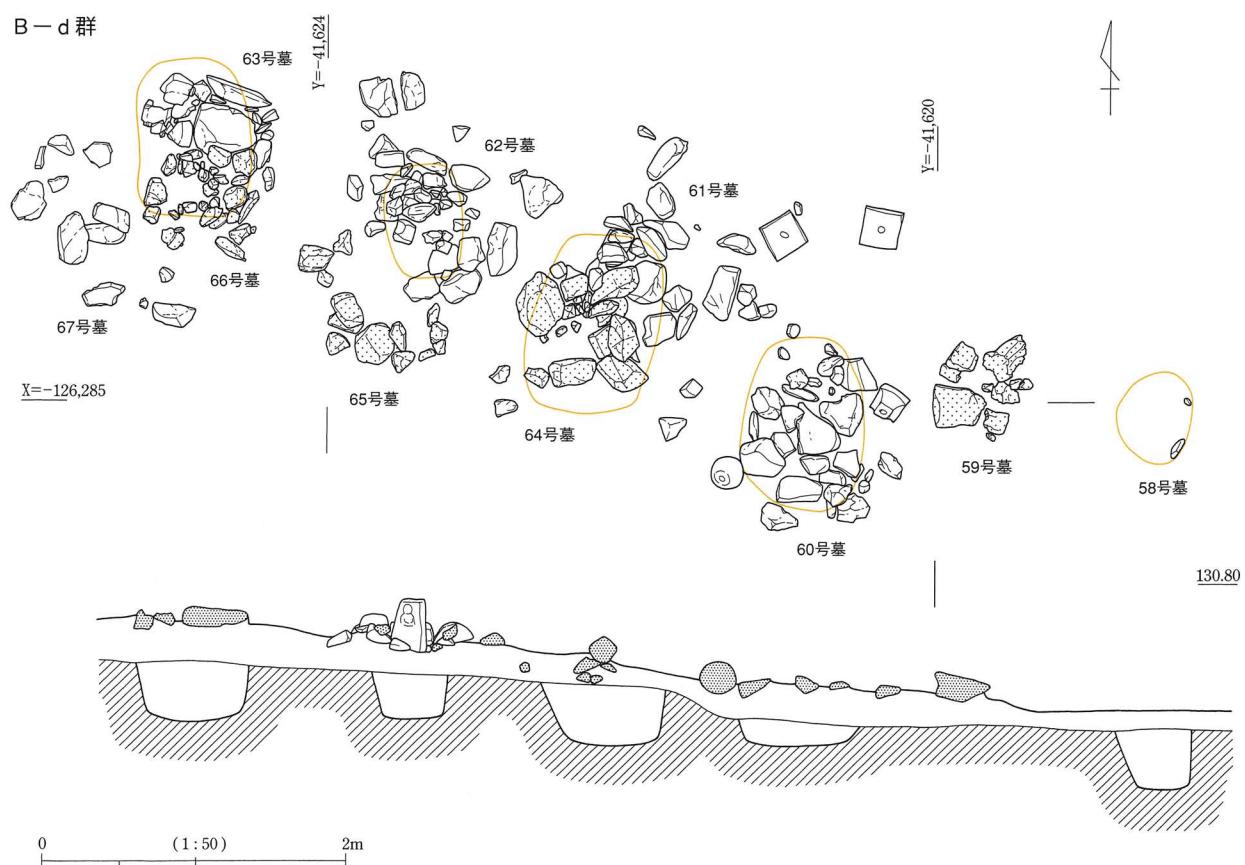


図60 中近世墓B-d群(58～67号墓)

(5) B-e群(68-77号墓)

この墓群は、B-d群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って並ぶ一群であるが、さらに3区分できる。

その1は、68~70号墓の一群で、石組は残存状況が不良であるが、いずれの墓の石組も隣接して造られているが、北辺が微妙に異なる。70号墓の石組は、60号墓と南北に接している。

この群の墓壙は、全て火葬墓A類である。68号墓は、長軸1.41mと火葬墓A類の中でも細長く、煙道および3石の棺台を有している。南側の棺台は浮いてるため、火葬後一度除去したのであろう。被熱した鉄釘が16本出土しているので、火葬時の木棺に使用したものと思われる。焼骨は、検出していない。

69号墓は、68号墓のようにその平面形が大して細長くはないが、煙道と棺台を有しており、構造としては68号墓と共通する。だが、この墓の場合、火葬後拾骨した焼骨を備前壺（図112-3）に納め、再度墓壙の煙道に据えている。その際、棺台であった石を据えるときの裏込めおよび、蔵骨器の蓋として利用している。蔵骨器には、2個体分の焼骨が収められていた（第8章 第4節参照）。当墳墓群では、火葬墓A類に蔵骨器が据えられている例が他にはない。この備前壺は、14世紀代後半頃のものである。

また、後述する考古地磁気測定によると、15世紀前半の年代が得られている（第8章 第3節参照）。

70号墓は、前2者よりも墓壙の規模が小さく、煙道を有しない。棺台を2つ南北に配し、拾骨された焼骨が床面中央部に置かれている。

この3つの墓は、位置関係、墓壙の規

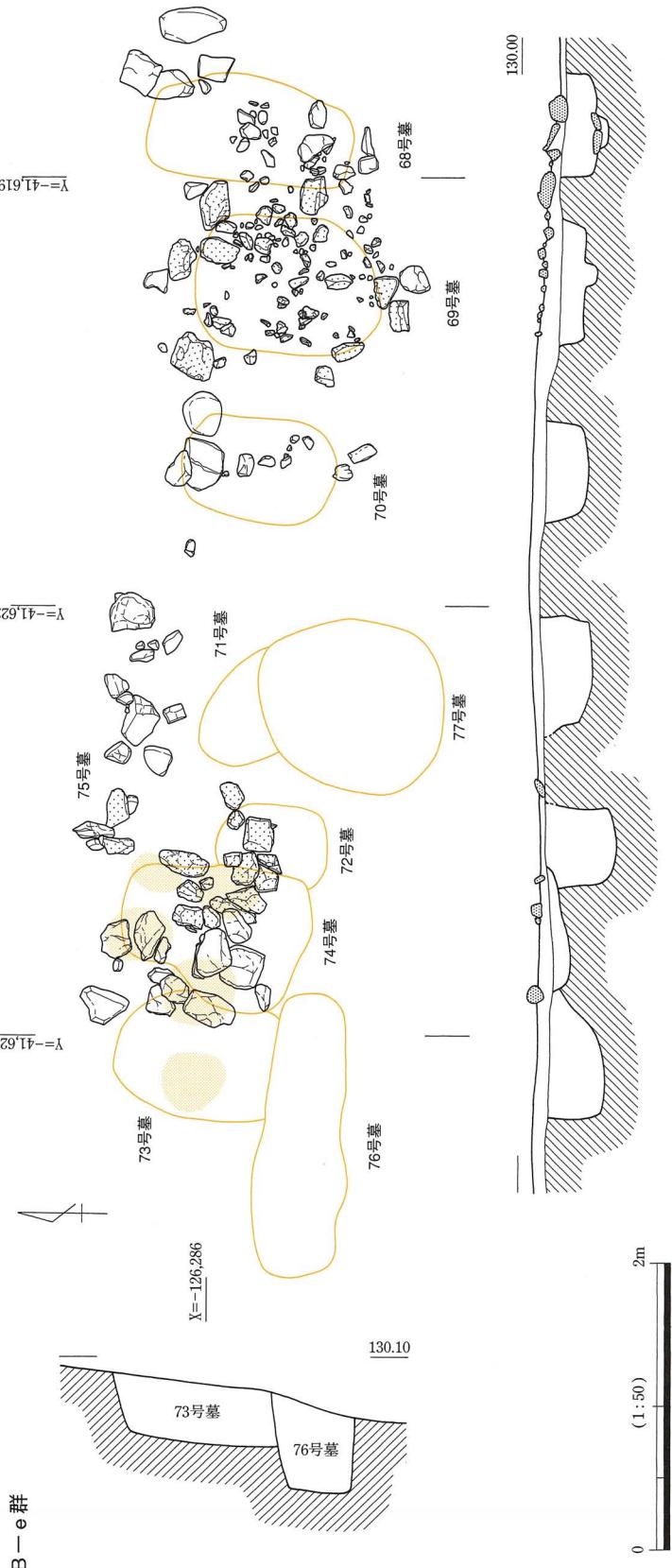


図61 中近世墓B-e群(68~77号墓)

模・形態、拾骨の取り扱い等から踏まえると、何らかの関係をもったものと考えられる。

その2は、71～75号墓の一群で、石組の残存していたのは74.75号墓のみで、74号墓には中心に石仏が座っていた。71号墓の墓壙上面からは土師器皿（図109-15）が1点出土している。

墓壙の切り合い関係から、74号墓が72.73号墓を切っている。また、74号墓は、石組と墓壙を対比した場合に、石組の南辺より墓壙が南側に延びていることからすると、墓壙と石組の整合性が不成立であると思われる。なお、74号墓の石組を75号墓の石組が切っていることからも、推測できるものである。74'.75号墓は墓壙を伴わない石組のみの墓である。

墓壙は、71～73号墓が土葬墓A類で、74号墓が火葬墓C II類である。

その3は、先の群から外れた墓壙のみ検出している76.77号墓である。76号墓は、東西方向に主軸をもつ土葬墓B類で、鉄釘の出土状況から木棺の伸展葬と思われる。77号墓は、土葬墓A類で円形の深いタイプの墓壙である。

なお、71～74.77号墓付近の上面には、炭や焼骨が散在している（遺構図のトーンの範囲）。調査時には、一連の遺構であると捉えていたが、幾つかの焼骨や炭を散布する別の墓であった可能性は高い。

従って、土葬墓であっても、周辺に火葬墓があった場合に、埋土に少量の炭や焼骨が入ることがあることに留意されたい。

(6) B-f群(78-86号墓)

この墓群は、B-c群の南側に位置し、列をなすというよりは散在している。78.79号墓は墓壙のみを検出しておらず、火葬墓C類である。78号墓はC I類で、79号墓はC II類である。

80号墓は、石組のほとんどが消失しており、石仏が倒壊して出土している。81号墓の石組は、南東角

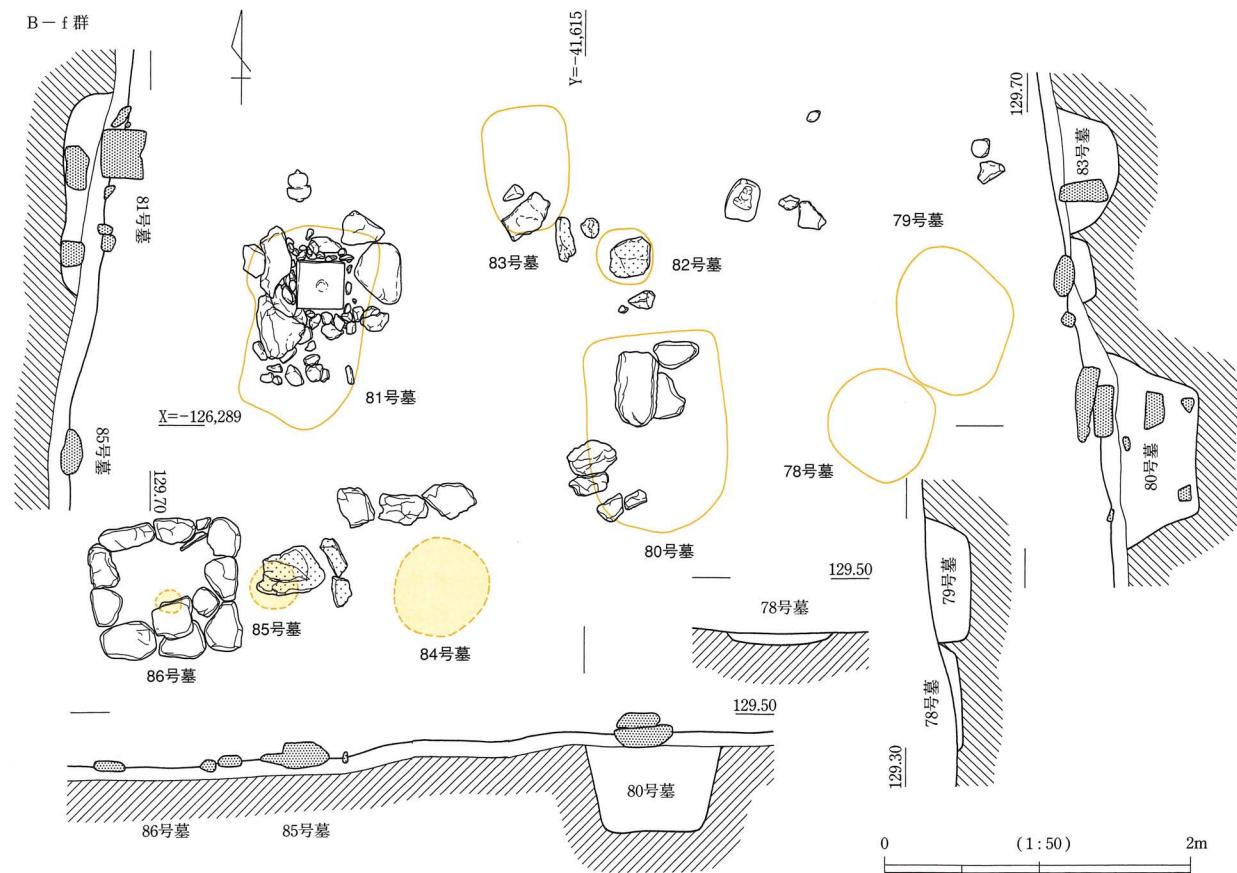


図62 中近世墓B-f群 (78～86号墓)

を欠失しており、中心に五輪塔の地輪が座っていた。

80.81号墓の墓壙は火葬墓A類である。81号墓は棺台を有するタイプで原位置を保つものであるが、81号墓はやや例外的な状況を示すので、詳述する。

80号墓の墓壙の埋土は、2・3層に多量の炭・焼骨が含まれ、また3層の下部に焼土も多量に含まれるという堆積を見せる。3層の下面には棺台として使用されたと思われる石があった。4・5層には炭や焼骨などは見られなかった。その床面には、原位置と思われる棺台があり被熱していた。

以上のことから考えると、3通りの解釈ができる。まず、床面および3層の下面で2回の火葬がこの墓壙で行われた可能性である。これには、2基の火葬墓が切り合っているのか、それとも火葬施設として2回使用されたのかという問題がある。さらに、火葬は床面で行い、拾骨および片付けを行った後に、2・3層に焼骨や炭を納めたとも考えられる。ただし、焼骨が微量であり、しかも2層に混在している点などから考えると、後者よりも前2者のどちらかの可能性の方が高いと思われる。

なお、81号墓の石組と墓壙を対比させた場合に、地輪を中心に据えた石組の規模と墓壙の長軸方向の規模が違い、石組と墓壙の方向が微妙に違っていること、さらに、外周枠の南側に小石が散乱している状況から、墓壙に伴う石組が壊されたものと考えられ、石組の造り替えが行われたと思われる。

82号墓は、80号墓の北側に位置し、石組がほとんど残存していない墓で、墓壙が火葬墓B I類である。蔵骨器に瓦質羽釜（図111-6）が使用されていた。蔵骨器の真上には、それよりも少し小さめの石があるが、羽釜より若干浮いているため、蓋であるかは不明である。焼骨は、羽釜の底面からわずかに浮いて出土しているため、土をある程度充填した後に、納められた可能性が高い。

83号墓は82号墓の北西で検出され、同様に石組がほとんど残存していなかった。墓壙は、土葬墓A類で、墓壙内にコの字形に石囲いが組まれていた。この石囲いからは赤色顔料を塗布した漆膜が破片で出土している（カラー図版50.51）。この漆膜片は内面のみに赤色顔料を塗布しているものである。また1片のみであるが表面の黒漆面に一筋の金泥が見られるものもある。この漆膜片は石囲いの内際のみに出土していることから、何らかの箱もしくは袋状の製品であったと思われる。

84～86号墓の一群は、81号墓の南側に位置し、84号墓と86号墓の石組の北辺がわずかに異なり並んでいる。85号墓はその間を繋ぐような形で造られている。これらの墓には顯著な墓壙は検出されていないが、石組の下部に焼骨が検出され、火葬墓B II類である。

（7）B-g群（87-96号墓）

この一群は、B-e群の南側に位置し、同方向にほぼ等高線に沿って一列に並ぶ墓群である。さらに3群に別れる。

その1は、87号墓～92号墓の一群で、墓壙が切り合い重複している。87号墓は89号墓に切られ、石組がほとんど残存していない。88号墓は、89.91.92号墓に切られる。89号墓は石組の南東部のみを残存し、中心に石仏が立っていた痕跡を残している。92号墓は当初、89号墓の石組と同一のものと見られたが、詳細に見ると、92号墓の東辺が89号墓を切っていることが判明した。この墓は墓壙を伴わないもので、石組の中心に石仏が設置された痕跡を残す。90号墓は91号墓に切られ、石組の南半部を欠失する。中心部に腐植土が落ち込んでおり、「67年当時の掘削痕と考えられ、石仏が座っていた痕跡が窺われる。91号墓は石組の中心部を欠失しており、石組に火輪を1基転用し、墓壙からも火輪1基が出土した。

墓壙から見ると、87.91号墓が土葬墓A類である。87号墓は墓壙内から瓦器椀（図109-31）が1点出土している。91号墓は土師器皿（図109-9）と鉄釘が19本出土している。その鉄釘の出土状況から木棺

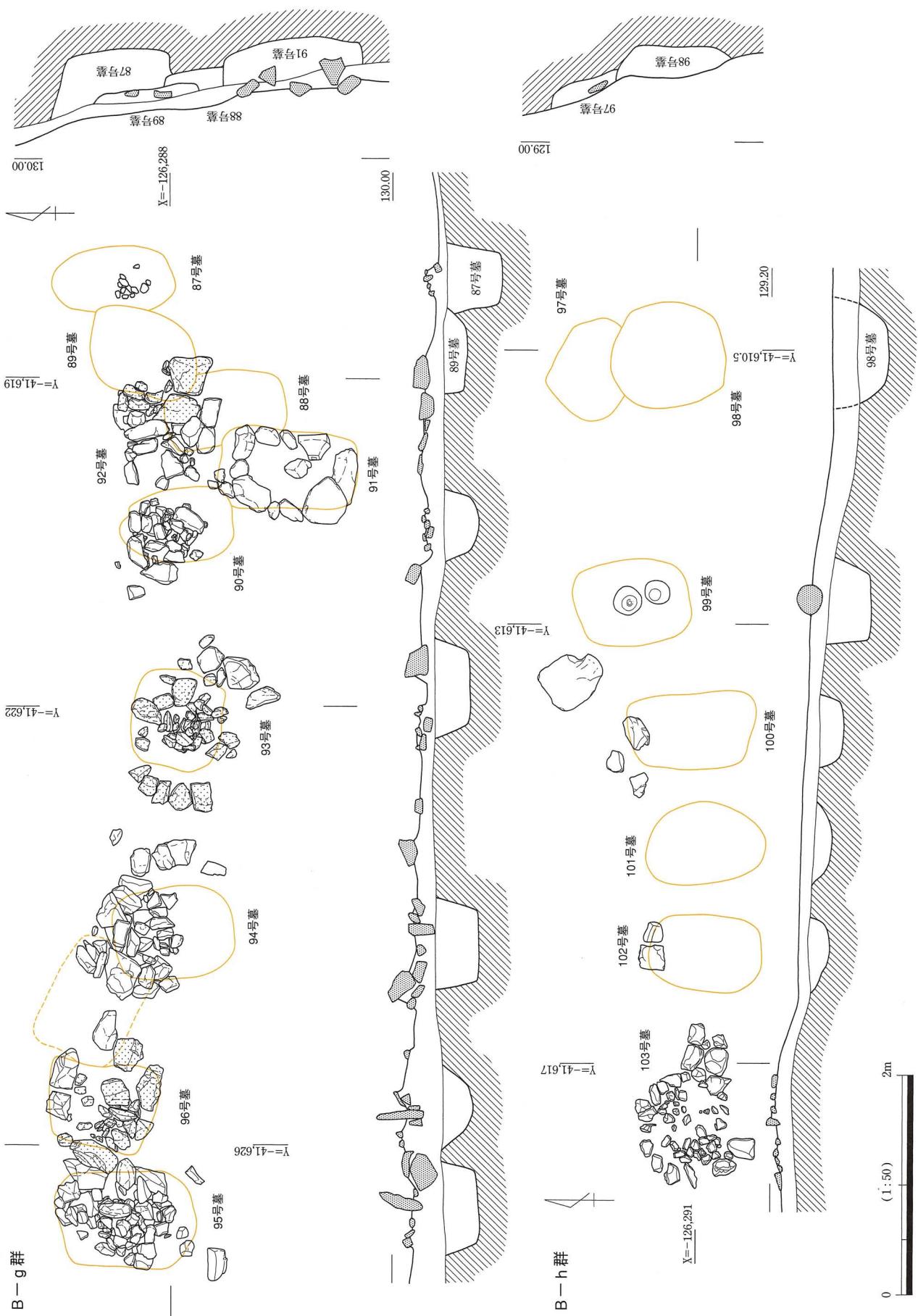


図63 中近世墓B-g群(87~96号墓)、B-h群(97~103号墓)

墓と考えられる。なお、土師器は墓壙の床面から浮いており、木棺もしくは盛土上に置かれていたと思われる。また、88～90号墓は火葬墓A類である。88号墓は棺台を有さない墓であるが、89号墓は2石、90号墓は3石それぞれ棺台を有する墓である。

その2は、93.94号墓で、当初、石組の南半部が消失した、規模の大きな石組を持つものと考えられたが、墓壙の規模からするとそうはならず、93号墓は墓壙を伴う本来の石組が東南部にわずかに残存し、92.90号墓の北辺と並ぶように造り替えが行われ、2基の墓が重複していることが判明した。

なお、94号墓の石組は、南半部を欠失しているものか造り替えられたものは不明である。

以上の2基は、いずれも土葬墓A類である。

その3は、2基1対のものである。95.96号墓は石組が隣接して造られ、中心に石仏が向かい合って座っており、石組の組み方から96号墓の方が後出する。95号墓の石組は、墓壙の規模からすると、外枠では東辺のみが残存し、南辺が消失していることが判る。そこで、96号墓の石組と比較して見た場合に、96号墓の石仏は95号墓の石仏に相対するように設置されるために南側に寄っていることが判り、その際に、95号墓の石組の南辺が96号墓の南辺に合わせるように造り替えが行われたと考えられる。

これら2基は、いずれも、土葬墓A類である。また、これらの石組と墓壙の検出面は、20～30cmの隙間があり、その間の土は盛土が行われたと思われる。

(8) B-h群(97-103号墓)

この墓群はB-f群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って一列に並ぶ墓である。南側に後世の里道が通っているために削平を受け石組がほとんど残存していない。97号墓は、石組が全く残っておらず、98号墓に切られている。98号墓は、五輪塔の水輪が1基残存していた。99号墓には墓壙上面に五輪塔の水輪が2基置かれていた。さらに、北西にある大石が石組の北西角に当たる可能性がある。100.102号墓は、石組の北辺のみが残存しており、101号墓は全く石組が残っていないかった。103号墓は石組のみの、墓壙を伴わない墓である。中心に五輪塔を設置していた痕跡が窺われる。この墓は、北側に86号墓があり、86号墓の南辺を利用して石組が造られたとも考えられる。

97.99～102号墓の墓壙は、火葬墓A類である。99～102号墓は、ほぼ東西に列をなして並んでいる。101.102号墓は、各々2つの棺台を有しており、また墓壙の規模からも、かなり強い類似性が看取できる。97号墓は、98号墓に切られているため正確な規模は不明であるが、前者よりも若干規模が小さいようと思われる。

一方、98号墓は、炭や焼土を少量含むが、先の97号墓を切っていることと、土師器皿（図109-4,8,12,13,43）が落ち込んだ状況で出土していることから、土葬墓A類と考えた。土師器皿は6枚あり、15世紀後半～16世紀前半のものである。

(9) B-i群(104-116号墓)

この墓群はB-g群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って列をなすもので、東側のB-h群へと連なる。大きくは、2群に分けることができる。

その1は、104～112号墓で墓の切り合いが顕著に見られる。104号墓は、石組のみで見た場合に、108.112号墓の石組と北辺を揃えているが、墓壙と照らし合わせた時に、北東角および南辺が欠失していることが判り、107号墓の石組に接している。105.106号墓は、墓壙で見ると107号墓に切られており、石組がほとんど残っていない。108号墓は石組で見ると107号墓に切られ112号墓の石組を切っている。

なお、112号墓の石組を詳細に観察すると、108号墓の西辺を構成すると思われた石組が、112号墓の

B-i群

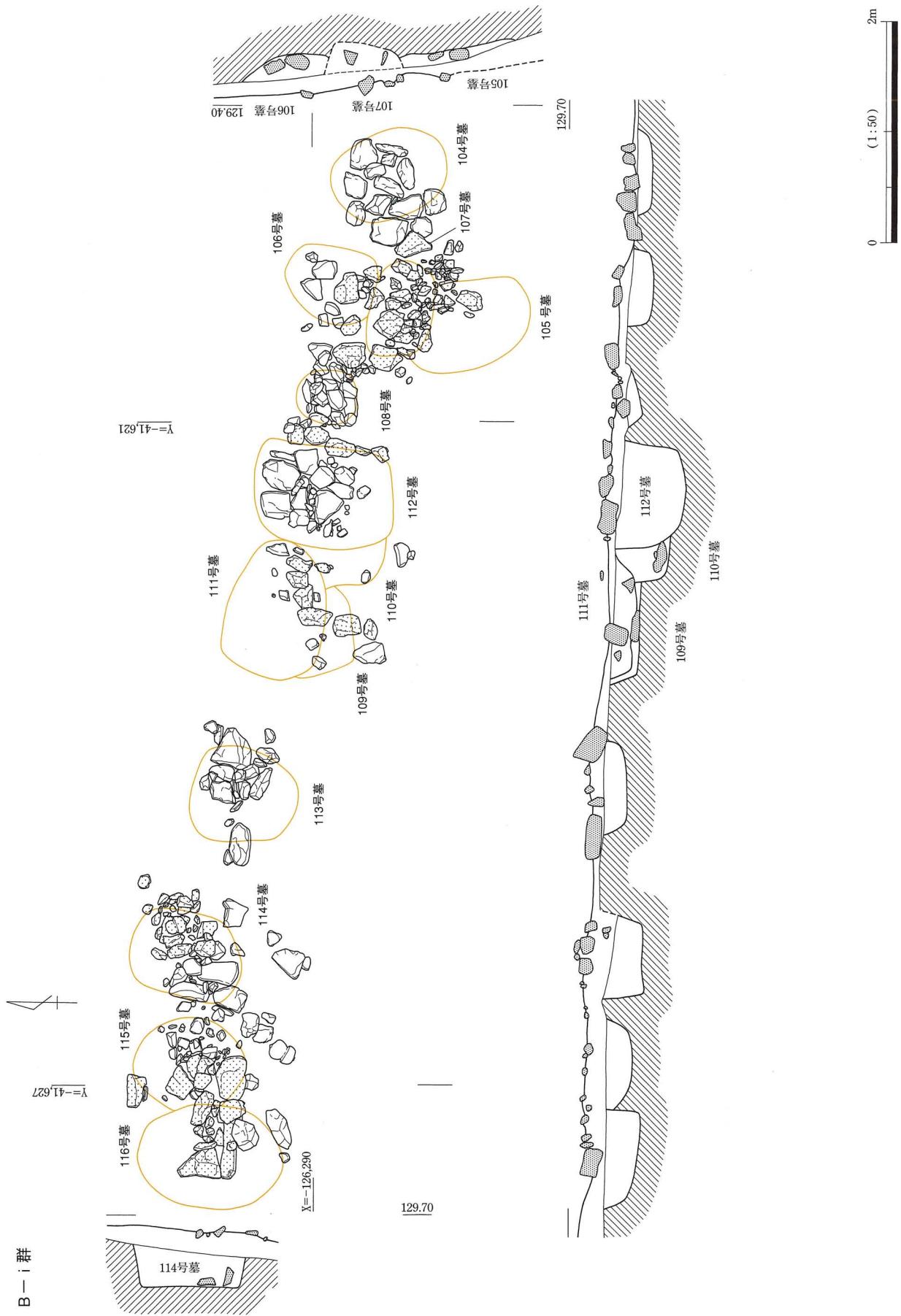


図64 中近世墓B-i群(104~116号墓)

墓壙の輪郭上にくるように残存していたため、112号墓の東辺になることが判明した。さらに、中心部に残存する石組は墓壙の大きさと異なり、それのみで完結するため、後に整理縮小された墓壙を持たない墓であることが判明した。その112号墓の中心には、石仏が座っていた跡が窺われる。

109号墓～111号墓は、石組をほとんど残しておらず、墓壙で見ると、109号墓は110.111号墓に切られ、112号墓は110号墓を切り、111号墓と接している。

この墓群の墓壙は、104～106.109.110号墓が火葬墓A類である。104.105号墓は墓壙の主軸を北より西に15°前後振っており、向きが揃っていることから、一対になり別方向の墓群と考えられる。105.106号墓は棺台を2石有している。

108号墓は火葬墓B II類で、浅い墓壙を掘削し比較的多量の焼骨を納めたている。107.111.112号墓は、土葬墓A類であるが、各墓によって構造・形態に差異がある。107号墓は、墓壙内に10～20cm程の石で約30cm四方の石囲いを有する。石囲いの中は、20×15cmの空間があるが、骨の出土はない。111号墓は、10～30cm程の被熱した石が墓壙内に充填されている。墓壙は深さ0.23mと浅く、墓ではなく、石組等の石を整理した廃棄土坑の可能性もある。

その2は、113～116号墓でほぼ一列に並ぶ。石組で見るならば、113号墓の石組は部分的に残存しており、その規模は不明である。114号墓の石組は、当初、一つの石組と考えていたが、良く観察すると、北東側に新たに石組が組まれていることが判明した。また、115.116号墓の石組は、南辺を揃える2組の石組と思われたが、石組と墓壙の規模が合致せず、114'.115'号墓は墓壙を伴わない墓と考えられる。さらに、113号墓の石組を見た場合に、残存状況が不良であるが114'.115'号墓とも南辺を揃えているように思われ、113号墓の石組も造り替えが行われた可能性が強いことが判る。

113.114号墓は、火葬墓A類である。これらの墓は、主軸を北より東に15°前後振っており、墓壙の規模等も共通しており、同時性が考えられる。棺台は、113号墓ではなく、114号墓には4石あるが火葬後一度除去したと思われる。

115.116号墓は、土葬墓A類である。墓壙の切り合いでは、116号墓が115号墓を切っている。両者は隣り合っており、その長軸において116号墓が約0.3m長い。両者とも墓壙内には2石あるが、棺台とは考え難い。

4. C群(図65～図75)

C群は、A群の南側の北西端に位置し、ほぼ等高線に沿って列をなしている。東半部では石組が隣接して造られており、その列の間隔も狭く、中には接しているものもある。西半部では西側に傾斜しているため、その数を減じ、石組の残存状況も不良であった。

この墓群からは、石仏が据えられた石組を、最も多く検出した。

その列によりaからq群の17群に小区分できる。a群は北西端に位置し、A群同様に平坦面を造りだしている。b群以降は、B群と同様に斜面地を利用しながら墓を造っている。

(1) C-a群(117-129号墓)

この墓群はA-h群の1段下がった所に位置し、その面は、わずかに南側および西側に向かって傾斜している。西半部の石組が残存状況が不良である。

117号墓の石組は、南東角を欠失している。122号墓の石組は、方形に組まれているがその北辺が歪であり、120号墓と接して造られており、120号墓も同様に北辺を揃えているため、歪になっている。120号墓は中心部および南東角の石組を消失している。122号墓には地輪が座っていた。126号墓の石組は、

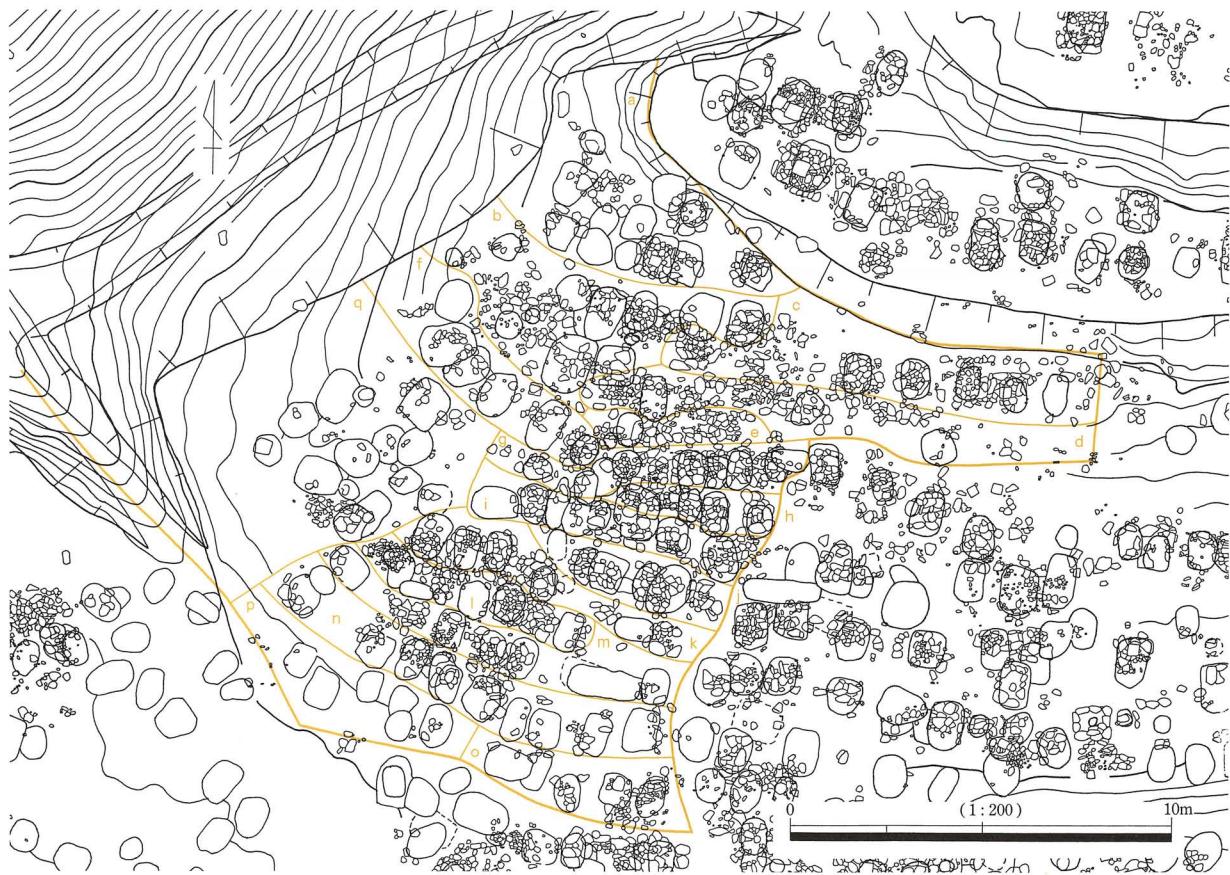


図65 中近世墓小区分 (C-a～q群)

中心部および南辺を消失している。128号墓は石組の残存状況が不良である。129号墓は、墓壙を伴なわない墓であるが、中心部が窪むことから掘削痕と考えられる。119号墓の石組の中心部では、石を方形に平らに組んでいることから地輪が座っていた可能性があり、117号墓には石仏が座っていた痕跡があった。なお、この墓群の北西端に、石仏が背を上に向けてあった。

墓壙で見ると、120号墓は122号墓に、124号墓は125号墓に切られている以外は、他に切り合い関係がない。

また、石組と墓壙の切り合いで、118号墓が119号墓に、124号墓が126.129号墓に、125号墓が126号墓に切られている。121墓が122号墓に切られている。

なお、120.122号墓は、石組と墓壙の規模が齟齬を来すために、それらの石組を詳細に見ると、次のようなことが考えられる。122号墓が造られる段階で、120号墓の西半部が壊され、さらに、119号墓を造る時点で120.122号墓の北辺が整理縮小されたと思われる。そのことは、122号墓の西辺および南辺が墓壙の向きに合っていること、また、復元した120.122号墓の北辺が117号墓の北辺にほぼ合うことからも、本来の墓壙に伴う石組でないことが判る。

さらに、119号墓と122'号墓および120'号墓間の面が、119号墓に揃っており、120'.122'号墓の石組の北辺により段差がつくこと、さらに、石組の規模の比較から、119号墓と120'.122'号墓は、ほぼ同時に造られたと考えられる（詳細は第7章 第6節参照）。

さて、墓壙であるが火葬墓・土葬墓共にあるが、土葬墓が多い一群である。117.118.120～126号墓は土葬墓A類である。これらは、深さが0.2m前後の墓壙と0.4～0.5mの2者に分けることができる。前者は118.121.123～125号墓で、後者は117.120.122号墓と捉えられる。特に、120.122号墓は墓壙の規模

C—a群

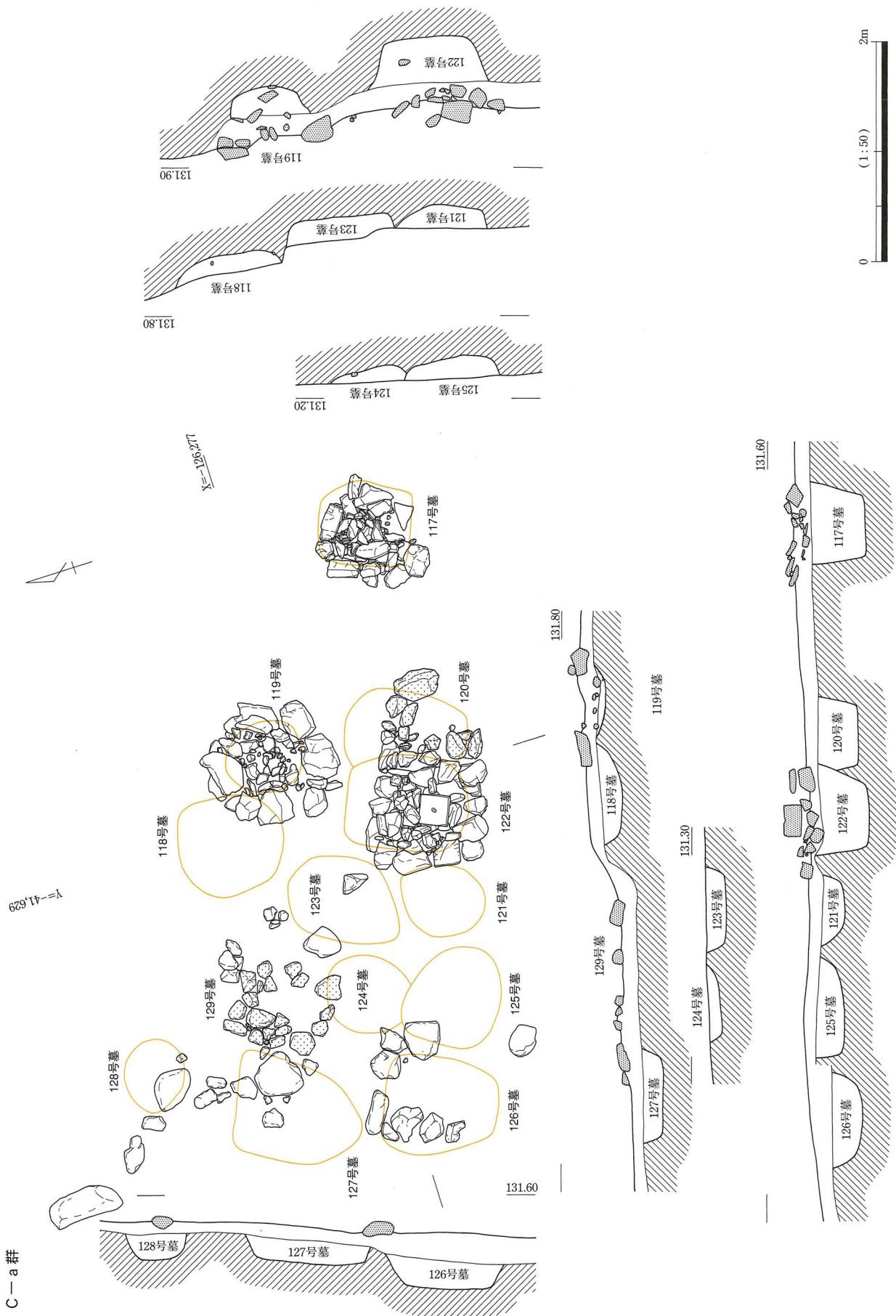


図66 中近世墓C—a群 (117~129号墓)

などから、かなり類似性が高いものである。また、120号墓は、棺台を南北に3石配している。

119号墓は火葬墓C II類である。0.70m×0.65mの比較的小規模な墓壙に炭のみが充填されていた。墓壙には被熱が見られない。127号墓は、火葬墓A類で2石の棺台を有し、その中央には比較的多量の焼骨が見られる。128号墓は、瓦質羽釜（図111-4）を蔵骨器とした火葬墓B類である。蔵骨器の上には、約30cmの石があったが、蓋かどうかは不明である。

（2）C-b群（130-146号墓）

この墓群はC-a群の南側に位置し、斜面地に造られ、石組で見るとほぼ等高線に沿った造られ方をしている。しかしながら、石組と墓壙の上下関係で見ると必ずしも整合性を持たないものが出現した。

一見すると墓壙と石組が重複して出土しており、上下関係が成り立つと考えられたが詳細に見てゆくと墓群としての石組の並びと墓壙の並びが異なっていることが判明した。

130号墓は、墓壙と石組を見ると、規模や配置が異なり、別の墓の可能性が考えられる。さらに、下層の石組では、東側に方形に組んだ石があり、五輪塔が座っていた痕跡が窺われ、西側の石組内から瓦器碗（図109-29）が出土していることから、2基の石組があったと思われる。

また、132号墓は、当初、石組の規模と墓壙の規模が類似しているために同一の墓と考えたが、墓壙の深さや規模などが130号墓と類似する点と、130~132号墓の墓壙がほぼ同方向に向いていることから、上下関係は不整合と考えられ、墓壙を伴わない石組のみの墓と思われる。

136.132'.139.140号墓は、北辺を揃え石組が隣接して造られ、隣り合う辺は共有している。

138.139号墓に関しても、石組と墓壙の上下関係が石の残存状況が悪く確実にはいえないが、推定規模からすると、上下関係が成立しないと思われる。なお、中心部が欠失していた。また、136.132'号墓には中心に石仏が立っていた痕跡が窺われ、墓壙を伴わない墓である。

134.135号墓は石組のみ検出しており、墓壙を伴わない墓である。134号墓は中心部分を消失している。135号墓は136号墓に隣接するがその列を違えており、134号墓と並びを同じくしている。石組の北辺が136号墓に切られていることから、前者の墓群より先に造られたと思われる。中心に石仏を据えた痕跡がある。137号墓は石組の北辺のみを残存し、石組下部に焼骨が出土した。132号墓の石組が上に乗ることから、先後関係が擱める。なお、142号墓上の石組がこの墓と同一の可能性がある。

140号墓には、わずかな石組が残存している。141.144号墓は、西側斜面に位置し石組がほとんど流失していた。142号墓は、前述したように石組が欠失したものとも考えられる。143号墓の石組についても、残存状況が不良で確とはしがたいが墓壙を伴わない石組だけの墓とも考えられる。

145号墓は石組の北辺を残存しており、石組下部に焼骨が検出された。145号墓の北側に、北辺に接し向きを同じくする石の並びがあり、これも墓壙を伴わない墓の可能性が考えられる。146号墓は、石組の残存が非常に悪い。145.146号墓は同一の墓とも考えられる。

さらに、131号墓の墓壙上面を覆う土がC-a群の雑壙を形成しており、131号墓の墓壙がその段下へもぐり込んでいる。そのことにより、131号墓がC-a群より先行して造られたことが判る。

当群の墓壙は、火葬墓も土葬墓もあるが、火葬墓B類が集中している群といえる。

130~132.142号墓は、土葬墓A類である。130.131号墓は、隣り合っており、また墓壙の形状・深さ等から類似性が見られる。130号墓は、墓壙の北側に約50cmの大きさの石が床面から浮いた状況で出土しており、それが落ち込んだものであるのか原位置であるのかは不明である。132号墓は、前述のものと若干離れているが、墓壙の形状・深さ等から類似性が見られる。142号墓は、墓壙内の床面に石を敷

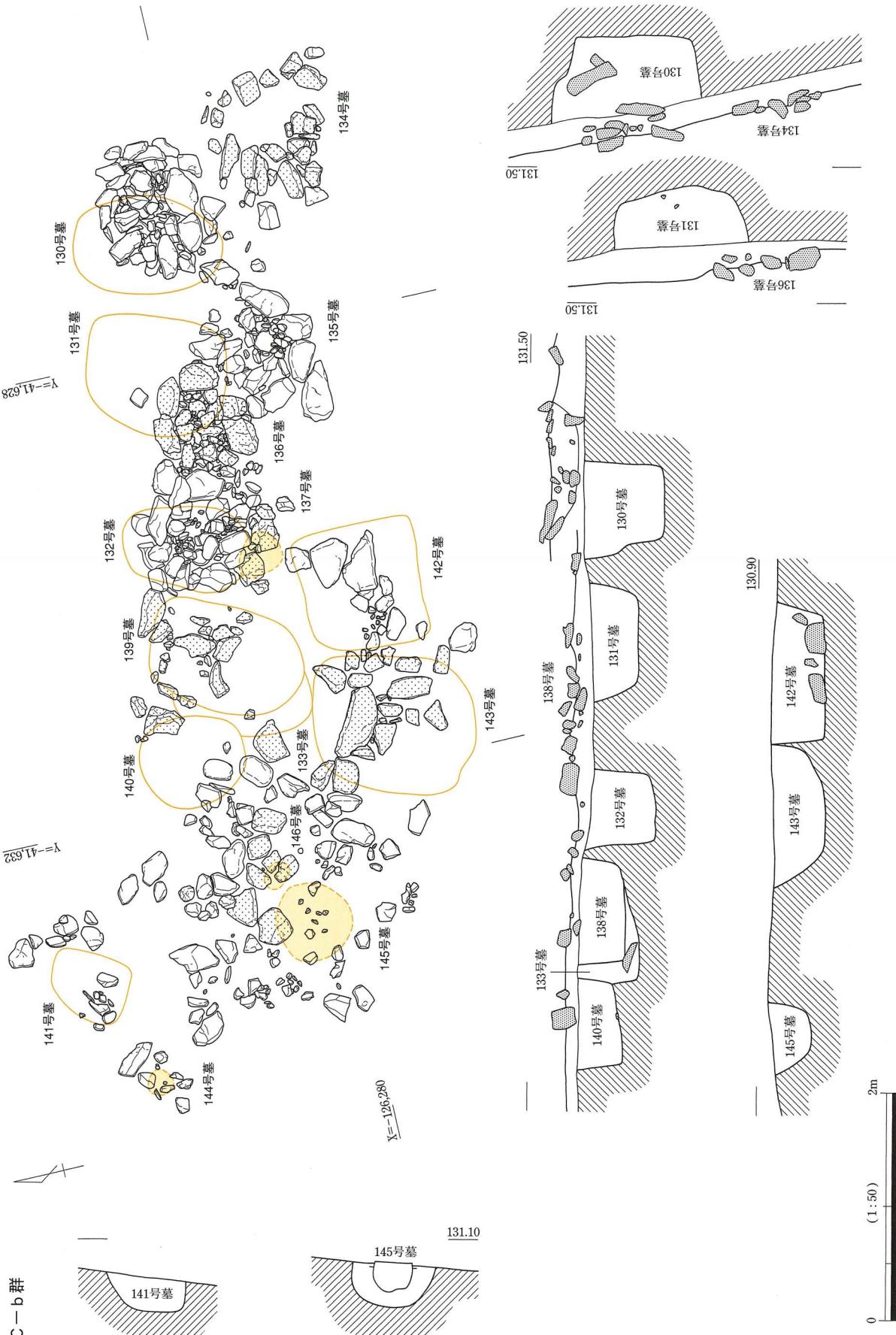


図67 中近世墓C - b群 (130~145号墓)

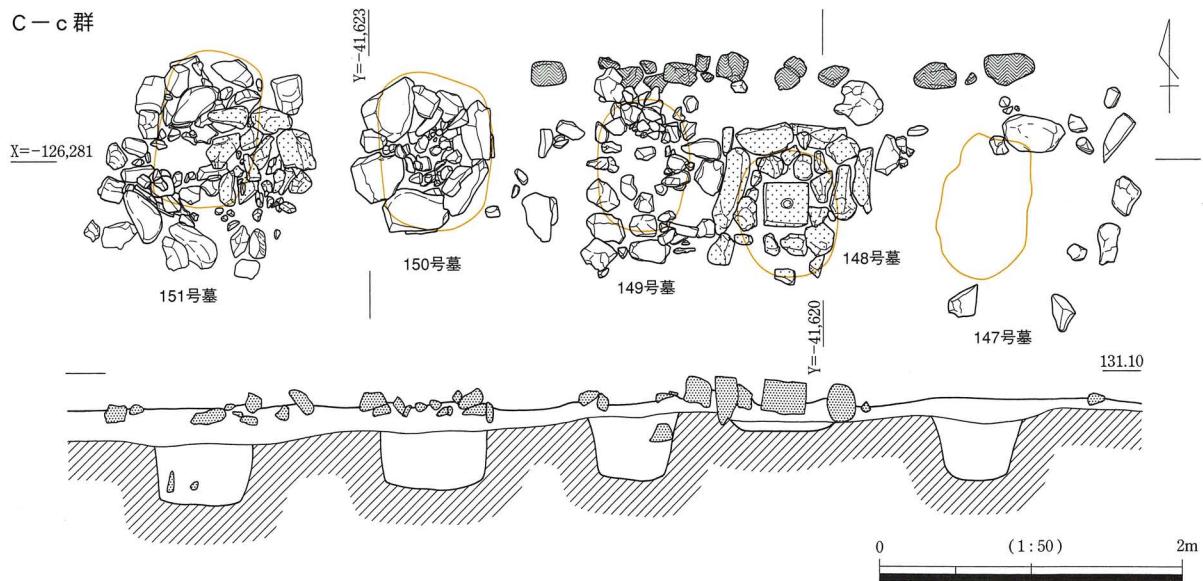


図68 中近世墓C-c群（147～151号墓）

きつめて、それを石で囲う石室状の遺構が確認された。調査時、西側の石を取り外してしまっているが、3方には石囲いが存在した。このような形態は、567号墓と類似する可能性がある。

133.138.143号墓は、火葬墓A類である。133.138号墓は、墓壙の規模が類似し、ほぼ同じ地点で切り合っている。143号墓は、2層の下面にまとまった量の焼骨と棺台が見られるが、3層にも焼骨・炭が混在する。このことは、先の83号墓と同じように、火葬墓の切り合いおよび2回以上の火葬が行われたという2つの解釈が考えられる。

137.144.145.146号墓は、火葬墓B類である。145号墓は、瓦器羽釜（図111-9）を藏骨器としたB I類である。藏骨器内には、焼骨と少量の炭が混在した土で充填されており、火葬した場所から土ごと運ばれたと思われる。他の墓はB II類で、顕著な墓壙を掘削せずに地山面直上に20cm程度の範囲にまとまった量の焼骨を置き、若干の盛土を施してから石組を構築したと思われる。

140号墓は、火葬墓C II類である。1層は炭化物層であるが、焼骨は含まない。被熱痕跡もなく、A類かどうかは不明である。

141号墓では、墓壙内に石仏や石を据えたような状況で検出した。これは墓ではなく、石仏を何らかの意味で埋納した遺構の可能性もある。

(3) C-c群(147-151号墓)

この墓群はA群の段下に当たり、等高線に沿ってほぼ一列にならび、東側がB-b群に連なり同一平面を共有する。

147号墓は、石組の残存状況が不良であるが、北辺と南辺の一部が残存しており、それからすると、149号墓の南北両辺とも揃っていることが判明した。よって、147.149号墓が一対になると考えられる。148号墓は石組の中心に地輪が座っており、石組の周縁がコの字形に石を立てて置き、地輪の高さより高く据えられていた。この墓は北辺を違えているものの、南辺を147.149号墓に揃えている。さらに、147～149号墓の北側には、149号墓の北辺に揃えるような形で石が並べられており、これらの墓を関連付けるための石列と考えられる。

150.151号墓は、いずれも、前者とわずかに北辺を違えており、切り合い関係をもたない。150号墓には地輪が座っていた痕跡があった。なお、151号墓の石組は、当初、一つの石組と見られたが、詳細に

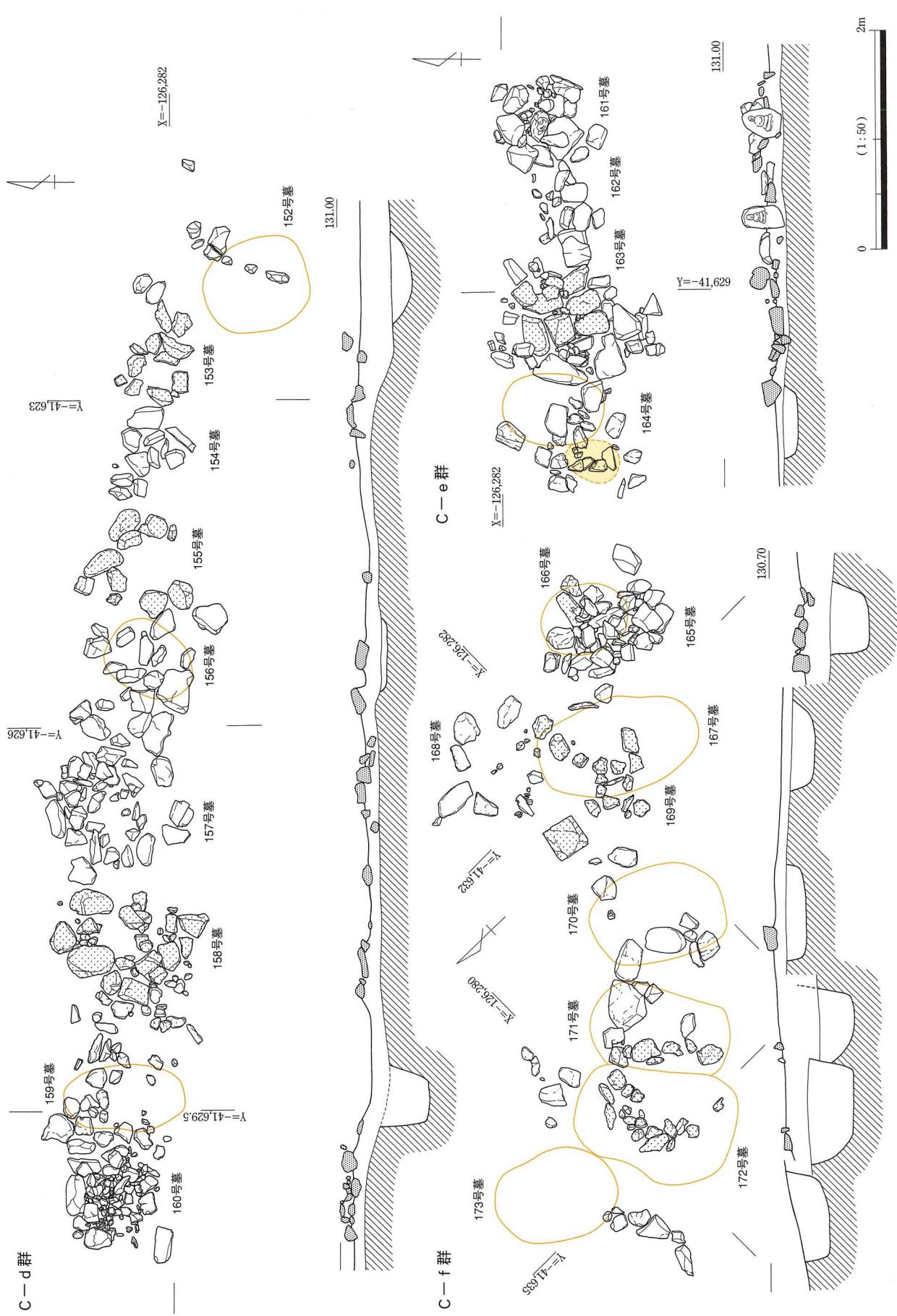


図69 中近世墓C-d群（152～160号墓）、C-e群（161～164号墓）、C-f群（165～173号墓）

見ると、東側に新たに石組が加えられていることが判明した。その151号墓の北辺が148号墓と揃えられていた。

また、墓壙から見た場合に、147.149.150.151号墓の北辺が並び、長軸方向がほぼ同方向を向いていることからも、この墓群は、一連のものと考えられる。

147.149.150号墓は、火葬墓A類である。棺台を有するのが147.149号墓であるが、3基とも形状・規模的には類似している。148号墓は、浅い墓壙に焼骨が混在する炭で充填されており、火葬墓C II類である。151号墓は、土葬墓A類である。墓壙の規模・形状は、147.149.150号墓と類似している。

(4) C-d群(152-160号墓)

この墓群は、C-a、b群の南側の斜面地に位置している。ほぼ等高線に沿って一列に並ぶ。石が散乱しており、さらに、中心部分が消失しているため、詳細は不明である。'67年当時の掘削痕とも考えられる。

152.156号墓は、墓壙で見ると石組列と方向を異にするが、石組の北辺が揃っていることから一对のものと思われるが、石組と墓壙の上下関係は不明である。

153~155.157.158.160号墓は、墓壙を検出していない。159号墓は、石組の南半部を欠失している。160号墓には、中心に石仏が座っていた痕跡を残している。

この墓群は、153~155号墓、157~160号墓がそれぞれ石組の北辺を揃えており、152.156号墓が墓壙の規模・性格等が類似しており、3群で構成されると考えられる。

墓壙は石組の数に比べ、3基しか検出されていない。152号墓は、埋土が炭化物層をなす火葬墓C II類である。156号墓は、火葬墓A類である。159号墓は、土葬墓A類である。墓壙内には、20~40cmの大きさの石が10数個見られるが、落ち込んだものであるかは不明である。

(5) C-e群(161-164号墓)

この墓群は、C-d群東半部の南側に位置し、南北の石組に接している。ほぼ列をなし、石組が連接して造られている。161~163号墓は墓壙を検出していない。161.162号墓は中心に石仏が座っていた。石組の向きは辺を揃っていないが、161.162号墓の石仏の向きが同一である。163号墓は、ほぼ同じ大きさの川原石を平らに並べており、本遺跡において特異なものである。164号墓は、石組の残存が不良で、本来の規模が不明である。この下部には火葬墓C II類の墓壙が検出されている。またこの墓壙のすぐ西側に焼骨が直上にわずかに散布された所もあり、別の墓の可能性もある。

(6) C-f群(165-173号墓)

この墓群はC-b群の南側に当たり、等高線に沿って列をなしている。石組の残存状況が不良で石組の規模等、詳細は不明である。

165.166号墓は、掘削前から窪地になり、石が放り込まれた様な状態で検出している。石組下層から南北両辺の石列と思われる石組が出土し、本来この石組の規模を現していると考えられる。しかしながら、墓壙と位置がずれているために別遺構と考えた。168.169号墓は、墓壙を伴わない墓で、169号墓は石が方形に組まれており地輪が座っていた痕跡があった。また、北西部で地輪が天地逆に出土している。

170号墓~173号墓の石組は、残存状況が不良で、墓壙の規模と比較した場合に、170~172号墓の石組が下部の墓壙と異なっており、別遺構になる可能性も考えられる。172号墓の石組には中心に石仏が座っていた。172号墓が171号墓を切っている。

墓壙で見ると、172号墓は、171号墓を切り、173号墓と接している。

165号墓は、土葬墓A類である。原位置を保つ3石の棺台を有するが、長軸が0.79mと規模的には小さい部類である。170.173号墓は、棺台を有する火葬墓A類である。167.171.172号墓は、火葬墓ではあるが被熱痕跡がないため断定がつけにくいものである。ただ、墓壙の規模からすると火葬墓A類の可能性が高いと思われる。また171.172号墓は、埋土の上層が炭層で80.143号墓に類似するタイプである。

(7) C-g群(174-182号墓)

この墓群は、ほぼ等高線に沿って列をなし、石組が接して並んでいる。C-e群の南側に、ほぼ平行して並び、C-g群が先行すると考えられる。

石組としては、176~179号墓が連接して造られ、わずかに離れ180.182号墓が連接して造られる。178.179号墓の北辺を揃えており、南辺では178.177.180号墓が揃えている。182号墓は、180号墓に接して造られているが、大きく方向を違えている。176号墓には地輪が置かれており、178.179号墓には石仏が座っており、180号墓には中心に石仏が座っていた痕跡が窺える。

墓壙の切り合いで見れば、174号墓が175号墓に切られ、さらに176号墓に切られている。177号墓が178.179号墓に切られ、181号墓が182号墓に切られている。176.180号墓は墓壙を伴わない。

179号墓の石組は、墓壙の規模からすると本来の姿と異なり、墓壙の南端が186号墓に切られているこ

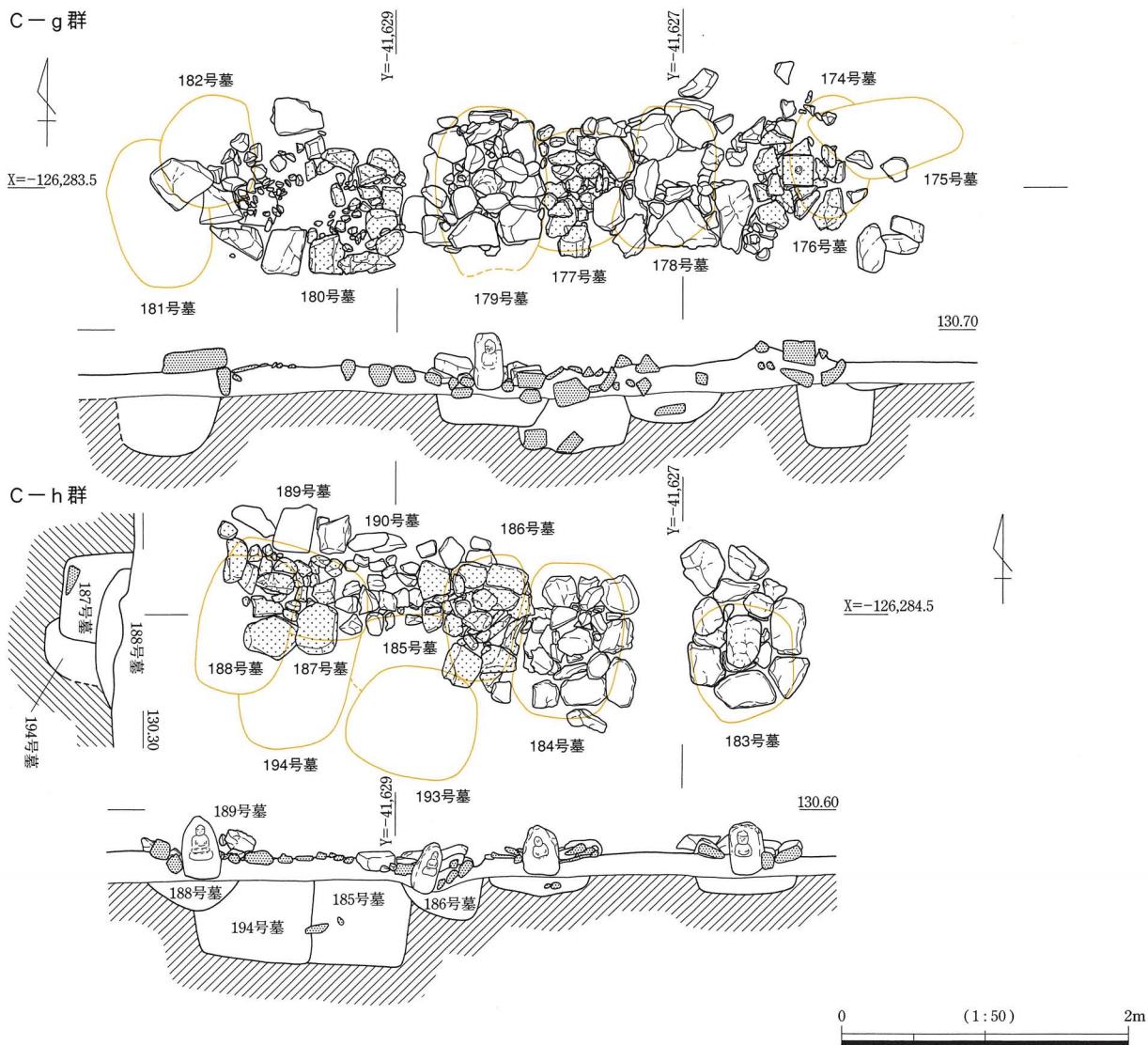


図70 中近世墓C-g群(174~182号墓)、C-h群(183~190号墓)

とからも、石組の造り替えが行われたと考えられる。そうした場合に、178号墓が造られた時点で、177号墓上の石組と合わせて、一連のものとして造り直されたと考えらる。

なお、182号墓の石組は、南辺が残存していたとするならば、墓壙とずれを生じ、墓壙を伴わないものと考えられる。中心部に地輪を置いていた痕跡が窺われ、169号墓と同方向を示している。

墓壙は、火葬墓5基、土葬墓2基が検出されている。

174.182号墓は、土葬墓A類である。182号墓は、20~40mの大きさの石が6石見られるが、落ち込んだものかは不明である。

175.177~179.181号墓は、火葬墓A類である。棺台は、177号墓が3石、178号墓が2石、181号墓が4石有している。177号墓が、長軸0.83mと規模的には若干小さい部類に入ると思われる。181号墓の炭は、多分に主観的であるが、細粒状で土がほとんど混じっていない印象を受けた。

(8) C-h群(183-190号墓)

この墓群は、等高線に沿って列をなす。C-g群の南側に位置し、やや列の方向を違えている。墓壙の切り合いから、この墓群がC-g群に後出し、C-i群に先行する。

石組で見ると183号墓が東端に40cm離れて位置し、184.186.190.189号墓が連接して造られている。183.184.186.189号墓には、石仏が座っている。

189.190号墓は墓壙を伴わないもので、190号墓は、180号墓の南辺を共有し北辺とし、南辺を消失している。なお、186号墓と187号墓を繋ぐために敷かれた小礫のみの石組とも考えられる。

189.190号墓は、その石組の北辺を北側に位置する180号墓の南辺を利用していることが判明した。

墓の切り合いを見ると、185号墓は、186.187.190.193.194号墓に、184号墓は186号墓に、188号墓は189号墓にそれぞれ切られている。

墓壙は、火葬墓・土葬墓共にあるが、火葬墓が土葬墓を切っていることが挙げられる。

183.184号墓は、火葬墓A類であり、石組が同様の規模を持つことから対になると思われる。183号墓は、墓壙の長軸が0.76cmと小規模な部類に入る。また、186.188号墓は火葬墓C I類であるが、これも石組の規模から対になると思われる。185.187号墓は、土葬墓A類である。187号墓は墓壙の主軸を周囲とは違え、西に74°振っている。また、墓壙内の西側で30cmの大きさの石を1石のみ地山直上で検出したが、性格は不明である。

(9) C-i群(191-201号墓)

この墓群はC-h群の南側に位置し、ほぼ列をなして並んでいる。

191.192号墓は、隣接する石組であるが、191号墓が石組の残存状況が不良であり、墓壙も検出されていない。石組の組み方から192号墓が後出すると思われる。また、191~194号墓は、石組で見ると正面が同一方向を向いているが辺を違えている。194~198号墓は、石組で見れば北辺を揃えて列をなしているようであるが、詳細に見てゆくと石組が二次的に造られていることが判明した。例えば、194号墓の南側に置かれた石は196号墓を造った時点で追加され南辺を揃え直していることが判る。

また、194号墓の石組は、墓壙上に乗っており、整合性があるように見えるが、墓壙の切り合いからすると、上下関係が成り立たないことが判る。194号墓の石組の北辺は、190号墓の南辺を利用するこことで省略している。なお、追加前の南辺が198号墓の石組の南辺と一直線に繋がる。

さらに、連接する北辺を詳細に見れば、189.200号墓の南辺および196.198号墓の北辺を一直線に揃えていることが判る。192.195.197号墓は、墓壙の規模からすると本来、長軸方向に合わせた石組が造ら

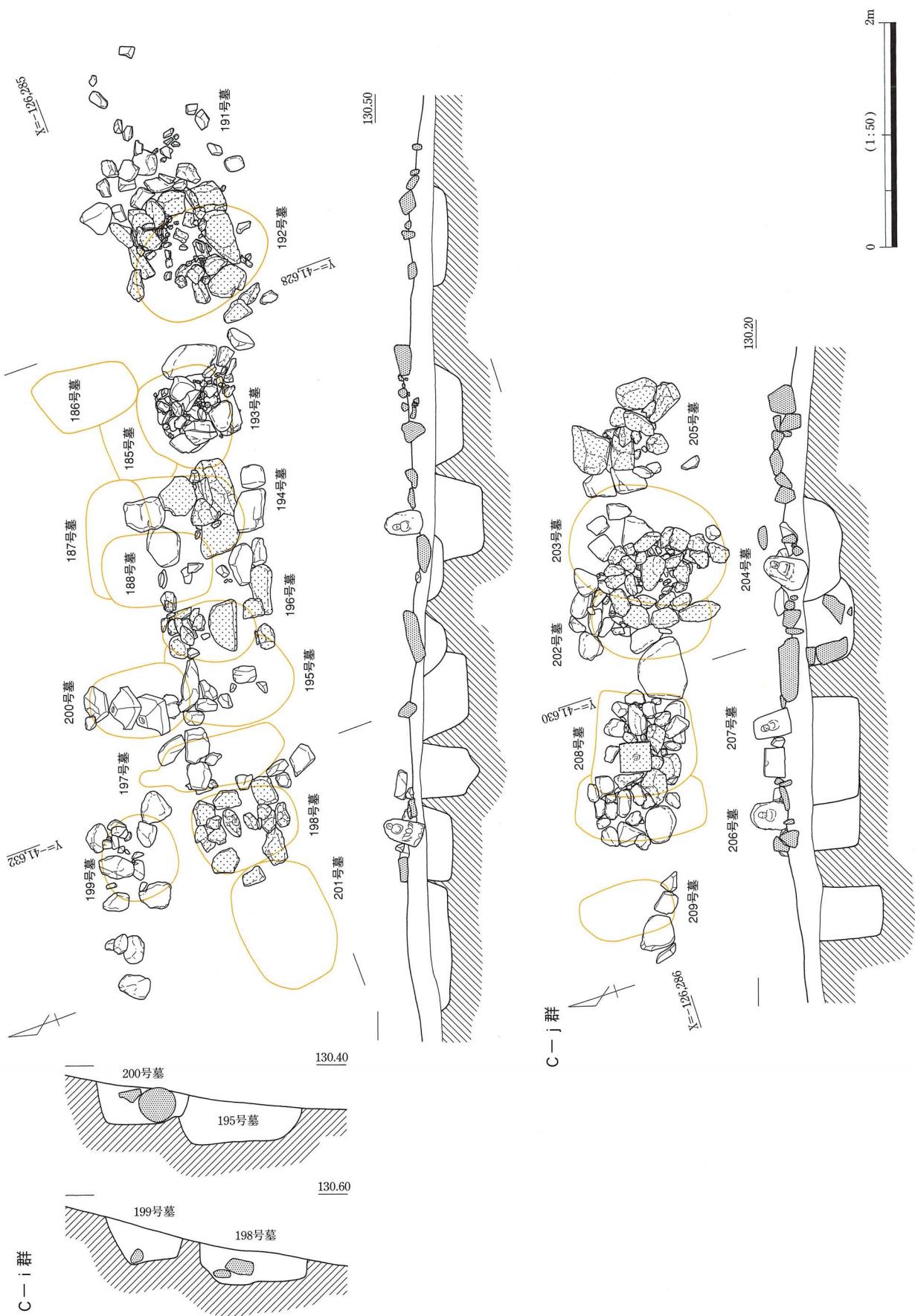


図71 中近世墓C-i群(191~200号墓)、C-j群(202~209号墓)

れていたと考えられ、造り替えられたと考えられる。

194.197.198号墓には、石仏が座っていた。また、192号墓には地輪が座っていた痕跡がある。

200号墓の石組には、空風輪1、火輪2個が再利用されていた。

墓壙で見ると、193号墓は185号墓を切り、194号墓は187～190号墓に切られている。また、195号墓は196.200号墓に切られている。195.197.198号墓は、墓壙の切り合は無く、接する形で検出している。

192.195.197号墓は、火葬墓A類である。192号墓は、南側に拾骨された焼骨が集中して置かれている。また、注目すべきものとして197号墓が挙げられる。墓壙の上面が 1.33×0.47 mを測り、北側に約20cm突き出る煙道を有している。この煙道は、床面から深さ約10cm窪ませている。火葬後の拾骨は、煙道を炭が混在した土で充填した後に墓壙の中央部に焼骨をまとめて置いた後に、再度墓壙を炭が混じらない土で埋めたと考えられる。

193.194.198.199～201号墓は、土葬墓A類である。194号墓は、20～40cmの大きさの石が4石程度見られるが、原位置かどうかは不明である。198号墓は、北東隅に20～40cmの大きさの石が4石集中しており、その下部に浅い落ち込みがある。性格は不明であるが、この落ち込みと石は何らかの関係があると思われる。201号墓は、周囲と異なり、主軸を東に87°振っている。

196号墓は、火葬墓A類の可能性はあるが規模が小さく火葬墓C I類と考えた。

200号墓は、墓壙内から火輪2、水輪2、石仏1基が検出された。この墓からは骨などの出土は見られない、これらを埋納した何らかの遺構の可能性も考えられる。

(10) C-j群(202-209号墓)

この墓群は、等高線に沿ってほぼ列をなして検出した。C-i群とは、方位を若干異にする。

石組から見ると202～204号墓は、中心部分に石仏を設置している石組とその下部に検出した石組の2基が重複していると考えられたが、墓壙の重複と合わせて見た場合に、石仏を伴う石組が、いずれの墓壙とも違えるため、204号墓が墓壙を伴わない石組のみの墓と考えられる。また、石組の重複から、203号墓を205号墓が切っており、203.205号墓の石組の北辺が揃っている。205号墓は、墓壙を伴わないものである。

206～208号墓は、石組で見ると両側に石仏が座っている真中に地輪が据えられていた。南辺を揃えてはいるが北辺が揃っていないことが判る。また、石の積み方から地輪が最後に置かれたことが判る。

墓壙の切り合いで見るならば、206号墓が207号墓を切っている。

なお、202.207号墓の間に、幅55cm、長さ40cmの上面が平らな石があり何らかの関連性があったと考えられる。

さらに、206.207号墓の石組は、墓壙と比較すると小規模になっており、本来の石組が208号墓を造る時点で再整理されたものと思われる。

209号墓は、石組の南辺のみ残存していたと考えられ詳細は不明である。この南辺は東隣りの石組と辺を揃えている。墓壙についても、南半分が不明であるが、石組の並びからすると208号墓と並行する時期と考えられる。213号墓を切っている。

以上のことから、202～209号墓は、一連の墓群と考えられる。

当群の全ての墓壙は、土葬墓A類である。202号墓は、墓壙内の四方に30～50cmの大きさの石で石囲いを構築している。203号墓は、北東隅の深い落ち込みに10～20cmの大きさの石が3石確認され、198号墓と類似するものかもしれない。206.207号墓は、20～30cmの大きさの石が約10石落ち込んだような状

C - k 群

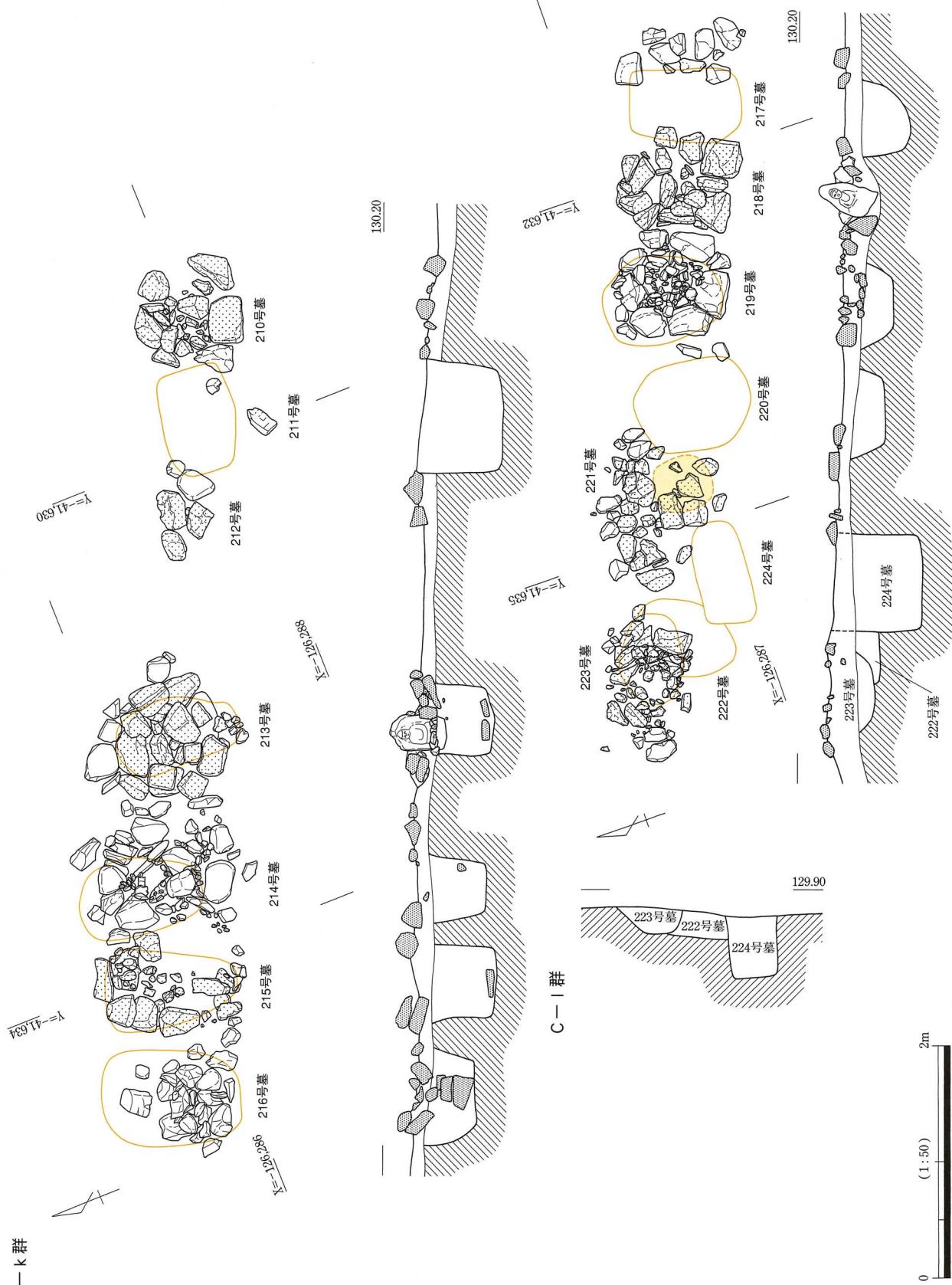


図72 中近世墓C - k群 (210~216号墓)、C - l群 (217~224号墓)

況が確認できた。209号墓は、南側が確認のためのトレンチに切られており正確な規模は不明であるが、木質が残存する鉄釘が出土しており、木棺を有していたと思われる。

(11) C-k群(210-216号墓)

この墓群はC-j・i郡の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って列をなしている。C-j群と方向を若干違えている。さらに、2群に別れる。

その1は、210.212号墓で、212号墓は石組の残りが不良であるが210号墓の石組の北辺と揃えている。さらに、210号墓の石組を詳細に観察すると、西半部が211号墓に切られ、中心部の小礫を残存していることから、東半部の石は別の石組になる可能性が考えられる。いずれの墓も、墓壙を伴わないものである。211号墓はそれらの石組を切って、主軸を東西方向に向ける土葬墓で、北西および南東角の石組を残存している。

その2は、213~216号墓で、先述の墓群の石組と北辺を違えている。石組を観察すると、213.214.215号墓の北辺が揃っていることが判る。さらに、詳細に観察すると、213号墓の石組は、中心部分が石を重ねることにより造り替えが行われ、石仏を伴う石組は、後出すると思われる。また、214号墓においても、同様に造り直しが行われ、その石組を利用して213.214号墓間に新たな石組が存在することが判明した。なお、215号墓においても石組の南半部の残りが悪く、確とはしがたいが造り替えの可能性を否定できない。216号墓は215号墓の南辺に揃えるように造られている。

213号墓には石仏が座っており、214.215号墓には石仏が座っていた痕跡があった。

墓壙から見ると、213.214号墓および215.216号墓の方向がそれぞれ揃っており、それぞれが対になると考えられる。しかしながら、そうした場合に墓壙の並びと石組の並びに違いが生じることになり、上下関係の整合性が得られない。しかも、213.214号墓の石組と墓壙の規模が微妙にずれていることからも、石組が造り替えられたことが判明した（第7章 第6節参照）。

211号墓は、土葬墓B類の小規模のものである。墓壙の主軸は、周囲と違え西に80°振っている。木質が残存する鉄釘が出土しているが、西側のみでしか見られないため、木棺であるかは不明である。

213号墓は、火葬墓A類である。墓壙には、棺台を南北2石の間に東西に2石を配するタイプで、28.33号墓と類似している。この棺台の下には、焼骨の混じる炭層が確実に存在するため、火葬後の拾骨の際に、一度石を除去したと思われる。

214~216号墓は、土葬墓A類である。214.215号墓は、主軸がほぼ同方向を示し、隣り合っている。規模的にも、前者が長軸1.05m、後者が同1.15mとほぼ類似している。ただし、215号墓には3石の棺台が見られる。216号墓は、墓壙内に20~50cmの大きさの石が落ち込んだ状況で確認できた。

(12) C-1群(217-224号墓)

この墓群は、ほぼ等高線に沿って並び、C-k群の南側に位置し接している。石組のほぼ北辺を揃えている。

217号墓は、石組の東辺のみ残存しているが、墓壙を218号墓に切られていることから先行することが判る。また、218号墓の北辺とは、わずかに違えている。218.219号墓は、南北両辺を揃え、同規模であることから同時期に造られたと考えられる。218号墓には石仏が座っており、219号墓には五輪塔が座っていた痕跡が残っていた。221.223号墓はほぼ北辺を揃えている。220.222号墓は、それぞれ他の墓に切られており石組が消失している。223号墓の中心に石仏が座っていた痕跡が窺われる。

次に、墓壙で見ると219.220号墓が同一方向を向いており、C-k群の213.214号墓とも同方向であ



図73 中近世墓C-m群(225~232号墓)、C-n群(233~243号墓)

る。これらの墓群は、石組の方向と違っているため、上下関係の整合性に違和感が生じた。219号墓の石組と墓壙で見てもわずかにずれていることが判る。よって、218.219'号墓は墓壙を伴わない墓と考えられる（第7章第6節参照）。224号墓は、221.225号墓を切っている。

217号墓は、土葬墓A類である。墓壙内からは、木質が残存した鉄釘が出土しており、木棺の存在が想定される。ただし、その配置から具体的な木棺の構造・規模を知ることは困難である。

219.220.222号墓は、火葬墓A類である。219.220号墓は隣り合っており、また墓壙の長軸が1.00mとほぼ同規模であり、その形状からも何らかの関係が指摘できる。219号墓は、3石の棺台を有する。222号墓は、長軸が0.88mと前2者よりも若干規模が小さい。

223号墓は火葬墓C I類で、墓壙内の床面より浮いた状況で15世紀代の土師器皿（図109-18）が出土している。埋土からは微量の焼骨しか検出されておらず、火葬墓であるのかは若干疑問が残る。

224号墓は、小規模な土葬墓B類である。墓壙内から木質が残存した鉄釘が出土している。その配置から、約0.6m×0.25mの長方形の木棺が推定できる。

（13） C-m群（225-232号墓）

この墓群はC-1群の南側に位置し、等高線に沿ってほぼ列をなしている。東側がB-i群へ繋がっている。

石組で見ると、225号墓は石組が南半部のみ残存しており、西側の228号墓とは約3m距離をおいている。227.228号墓の石組は南北両辺を合わせており、228号墓には石仏が西向きに設置され、本来、227号墓には東向きに設置された石仏があったと思われ、一対のものと考えられる。229号墓は辺をわずかに違え、中心に掘削痕が認められた。230.231号墓は、当初、1基の墓と考えられたが詳細に見ると北辺を違えており231号墓が230号墓に接し、北東角のみを残存した石組と判った。230号墓の中心部に平らな石が置かれており、廻りを方形に組んでいるところから地輪が座っていたと思われる。その地輪の大きさは幅25cmと推測される。232号墓の石組は水輪2基および火輪2基が検出されたが、本来の石組の形状は不明である。

230.231号墓は墓壙を持たないものである。236号墓は石組が全く残存しておらず、226号墓が225号墓を切っている。225号墓は墓の方向および性格からするとB-i群の114号墓と対になるとも思われる。

石組と墓壙の整合性を詳細に見てゆくと、227.228号墓は上下関係が成立しないことが判る。何故ならば、本来、227号墓の石組が墓壙の長軸方向に従って造られたと考えられ、そうした場合に、北西角の石が石組の北辺を示していると考えられ、228号墓とは辺を違えていることが判る。また、228号墓を見た場合に、石組が墓壙と南北に約20cmずれており、整合していない。さらに、墓壙の規模から見ると、同時性が考えられず、前述したように石組が対で造られたとするならば、これらの石組は、当初あった石組が再整理されたものと考えられる。

当群の墓壙は火葬墓・土葬墓が共にある。225号墓は、火葬墓A類である。棺台を5石有している。

226号墓は、土葬墓B類である。墓壙内から木質が残存した鉄釘が出土しており、配置から約1.6m×0.35mの長方形の木棺が想定できる。

227~229号墓は、土葬墓A類である。これらの墓は、地形に並行して隣り合っており、何らかの関係があると思われる。規模的には227号墓より一回り小さい墓壙で、長軸0.9m前後の228.229号墓が、より類似性が見受けられる。

232号墓の墓壙内には焼骨がまばらに見られるが、被熱痕跡もなく、炭も微量しか検出していない。

よって、火葬墓A類もしくはB類のいずれにも決めがたく、火葬墓C I類とした。

(14) C-n群(233-243号墓)

この墓群は、C-m群の南側に位置し、ほぼ列をなし東側がD-a群に繋がる。この墓群は、石組の残存状況が悪く、完存する石組が無く詳細が不明である。233号墓は東辺のみを残存し、234号墓は南西角および北辺・東辺に1個ずつの石が残存している。236.237号墓は辺を接している。238号墓は239号墓に切られてしまい、本来の石組が不明である。240号墓は北辺を残し238号墓を切っており、中心に地輪が座っていた。その北辺から石組の造り替えが判る。241号墓は北西部を残存し、242号墓は南部を残存し、石仏と空風輪が石組に転用されていた。

墓壙で見ると、242号墓が243号墓に切られ、238号墓が239号墓に切られる以外は、切り合いがない。墓壙は火葬墓と土葬墓が同程度ある。

233.236.238~241号墓は、土葬墓A類である。233号墓は、墓壙内に20~30cmの大きさの石を西側を除く3方に石囲い状で検出した。しかし、これらの石は、全て床面より10cm程浮いており、原位置を示すのではなく、落ち込んだ可能性も否定はできない。238号墓は、239号墓に切られており、正確な規

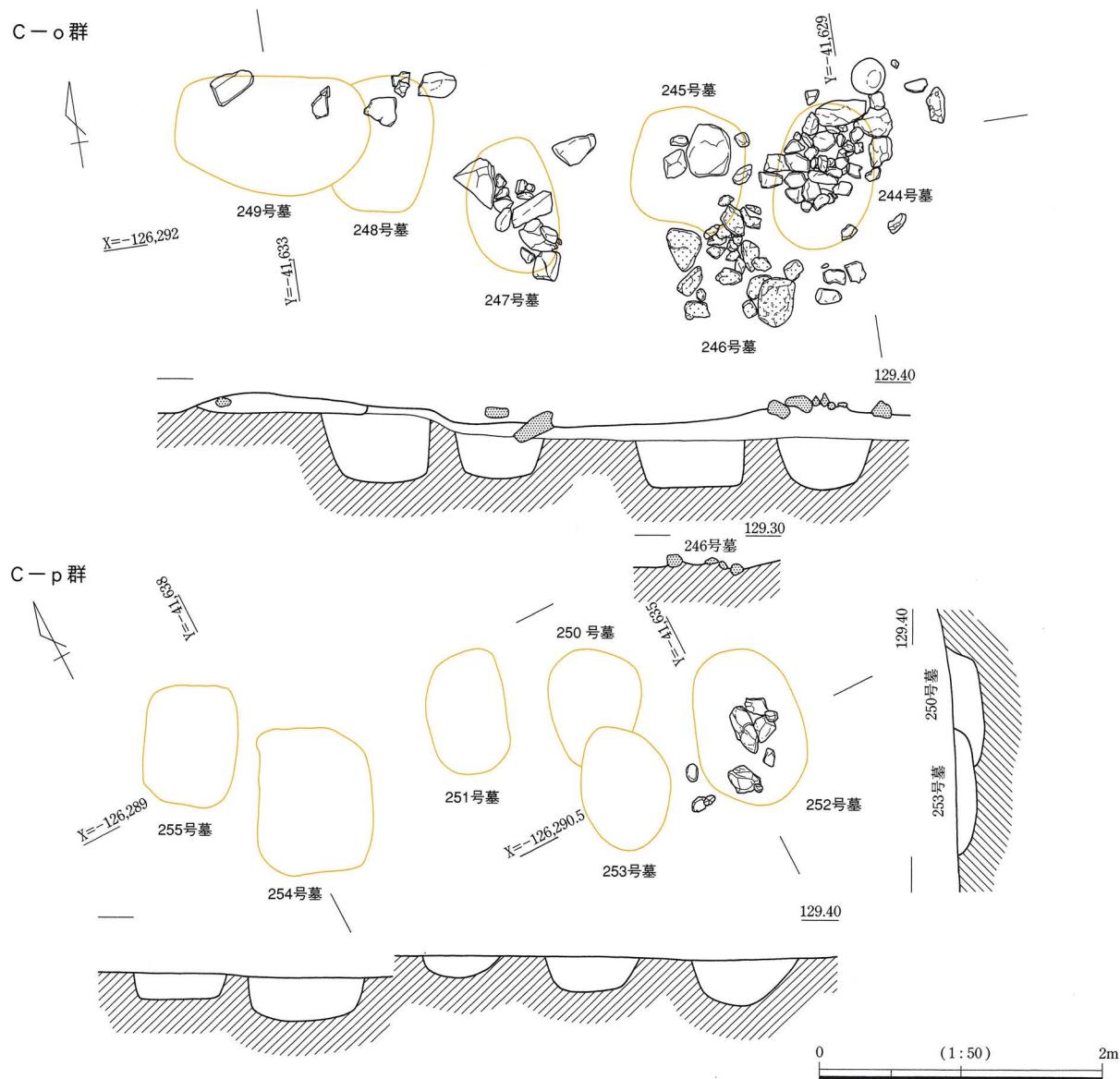


図74 中近世墓C-o群(244~249号墓)、C-p群(250~255号墓)

模・形態が不明であるが、墓壙内に10~20cmの大きさの石で石囲いを構築している。推定であるが、107号墓のものと類似する可能性がある。241号墓は、木質が残存した鉄釘が出土している。その配置から、具体的な規模・形態は不明であるが、木棺を有していたと思われる。

234.235.237.242.243号墓は、火葬墓A類である。235号墓の下層の炭は、細粒状で土の混じりが少なく、181号墓のものと類似した印象を受けた。またこの2基の墓は、床面・壁面に明瞭な被熱痕跡がないこと、長軸1.0m前後と規模等の類似性が見られるが、その実は不明である。237号墓は、1本の鉄釘が出土しているが、明瞭な被熱は見られない。また、棺台が6石有するが原位置を留めておらず、火葬後一度除去されたと思われる。242号墓の棺台にも同じことが言える。243号墓は、墓壙の規模が0.72m×0.59mと小規模な部類である。2石の棺台も15cm前後と小さいものである。

(15) C-o群(244-249号墓)

この墓群はC-n群の南側東半部に位置し、ほぼ列をなして並んでいる。この墓群についても、石組の残存状況が悪く、石組のみではその規模は把握できない。244号墓は、ほぼ残存しており、中心に石仏が座っていた痕跡がある。246号墓は墓壙を伴わない、石組のみのものである。

なお、244号墓は墓壙の主軸方向と石組の方向が異なり、石組と墓壙は別のものと考えられる。

244.245.247.248号墓は、土葬墓A類である。245号墓のみ墓壙が方形であるが、他の墓は橢円形である。

249号墓は、地山に焼骨と炭が混じった土が約0.1m盛り上がっており、4本の被熱した鉄釘も出土している。性格としては、火葬時の炭や灰を廃棄した遺構と思えるが、ここでは、火葬墓C I類としておく。

(16) C-p群(250-255号墓)

この墓群はC-n群の南側西半部に当たり、ほぼ列をなして並んでいる。この墓群は、後世の里道の下部に当たり、ほとんど石組が残存しておらず、石組の規模等不明である。

250~252.254.255号墓は、土葬墓A類である。250~252号墓は、地形に沿って並んでおり、墓壙の規模からは250.251号墓は共通性があり、252号墓がそれより一回り大きい。253号墓が250号墓を切っている。254.255号墓は、棺台を2石有するタイプであるが、前者が20cmの大きさの石で、後者が長さ50cmの長細い石と、石の大きさが異なる。

253号墓のみが、火葬墓A類である。この墓には棺台が存在していたが、記録前に掘削してしまったために、その個数、具体的な状況は不明である。

(17) C-q群(256-271号墓)

この墓群は、C-f群の南側に位置し、C群の南西端に当たる。石組がほとんど残存しておらず、全容は不明である。256.270.271号墓の石組には、それぞれ石仏や五輪塔の部材が転用されており、270.271号墓の墓壙からも五輪塔の部材が出土している。

260.261号墓の石組は、墓壙を伴わないもので、261号墓の石組の中心に石仏が座っていた。

267号墓も石組のみの墓壙を伴わないものである。

256.259.262号墓は、土葬墓A類である。256号墓は、墓壙内から火輪が出土しているが、出土状況からすると落ち込んだ可能性もある。259.262号墓には、焼骨と炭が若干見られるが、これは火葬墓A類である258号墓を切っているためと思われる。

257.258.263.264.268.269号墓は、火葬墓A類である。257号墓は、墓壙の規模が0.81m×0.70mで、

C-q群

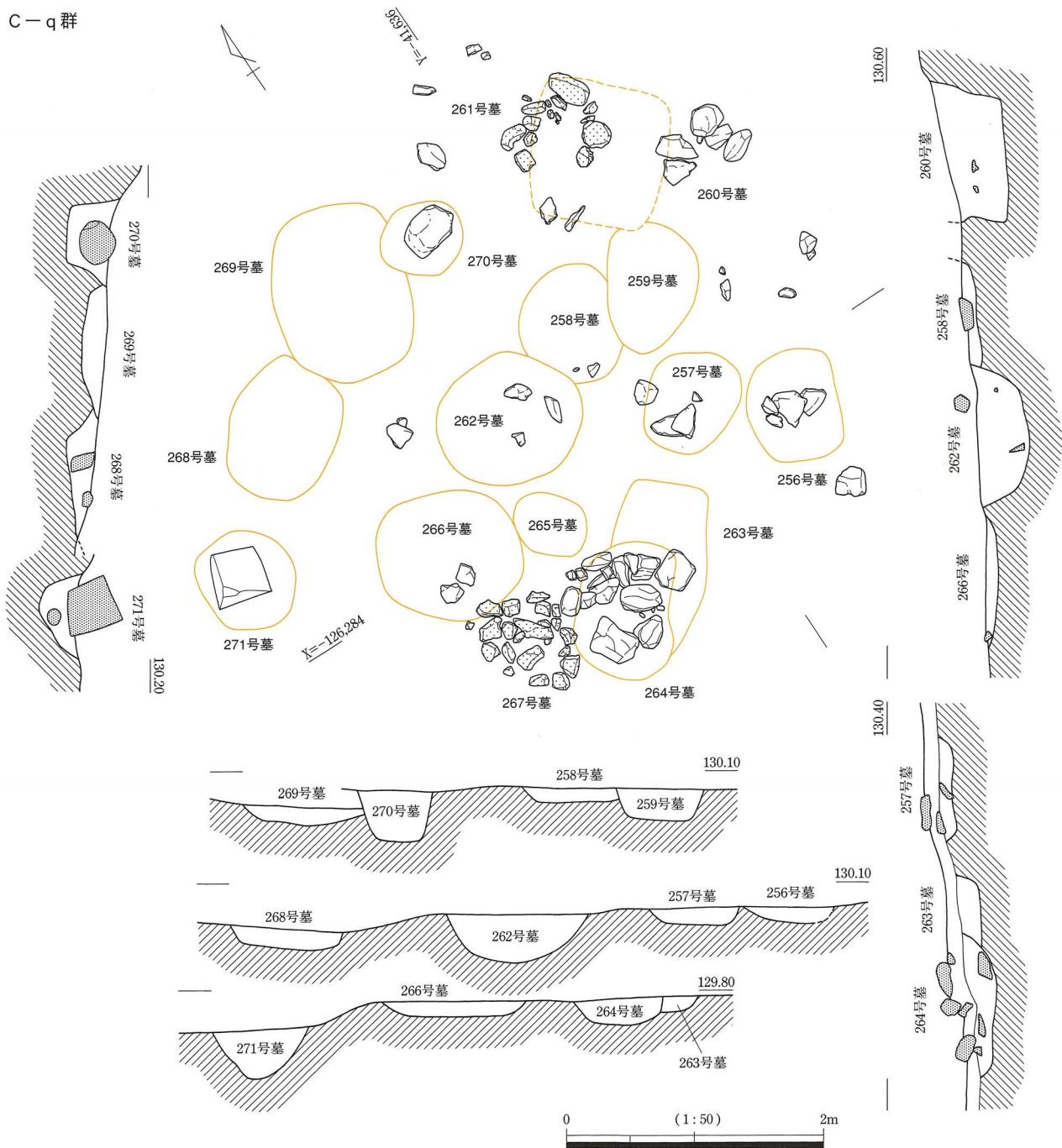


図75 中近世墓C-q群 (256~271号墓)

小規模のタイプである。258号墓は、墓壙の検出面から15世紀代の土師器皿（図109-45～49）、鐵釘18本が出土している。263号墓は、264号墓に切られているため正確な規模は不明であるが、長軸約1.5mを測る長細い墓壙を呈すると思われる。また、北東側の床面直上に6枚重なった銭貨が出土している。この銭貨には明瞭な被熱痕跡は見られないことと、床面からの出土であるので、拾骨後に置かれたものと考えられる。264号墓は、棺台として20cm前後の大きさの石を配している。269号墓からは、かなり多量の炭化材を検出した。

265号墓は、焼骨を含む炭層が見られたが、被熱痕跡がないことと、墓壙の規模が $0.61m \times 0.51m$ とかなり小さく、火葬墓C I類と判断した。266号墓も、全体にまばらに少量の炭と焼骨が見られるが、被熱痕跡がないため、火葬墓C類と判断するに止まった。

270号墓は、 0.67×0.58 mの墓壙に1基の水輪が検出された。また271号墓からも、墓壙内から一石五輪塔の空風火輪が出土している。これらは、先の141.200号墓と同じく、墓というよりも何らかの意味で五輪塔の部品を埋納した遺構の可能性もある。

5. D群(図76~図81)

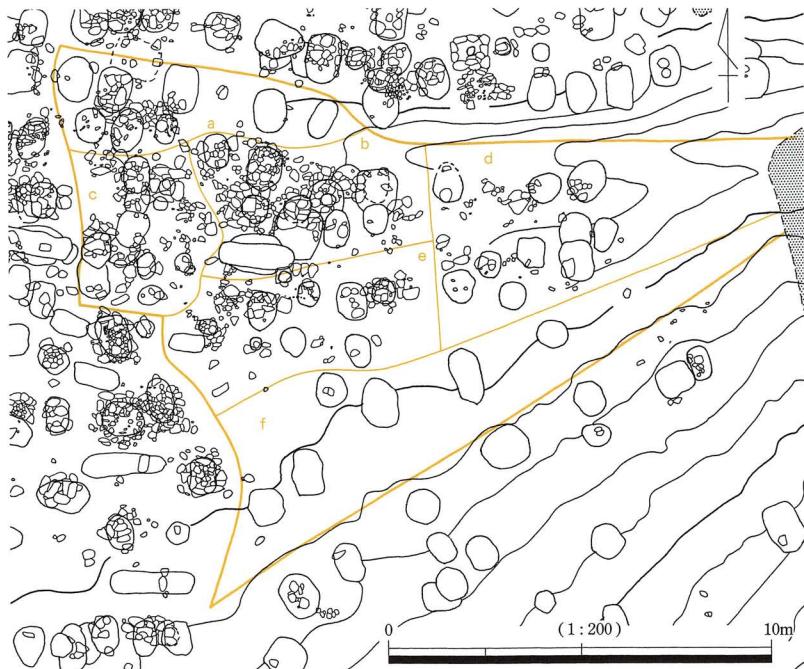


図76 中近世墓小区分 (D - a ~ f 群)

D群は墓域南半部の東側でB群の南側に位置し、5号墳の西側に当たる。その墓群のまとまりによりa群～f群の6群に区分した。

(1) D - a群(272~279号墓)

この墓群はB-i群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って列をなしている。その列によりさらに2群に区分できる。

その1は、後世の里道下部から検出した272~276号墓で、石組がほとんど消失していた。

275号墓の石組は、他の石組より低い位置で検出しておらず、全体に落ち込んだような状態であった

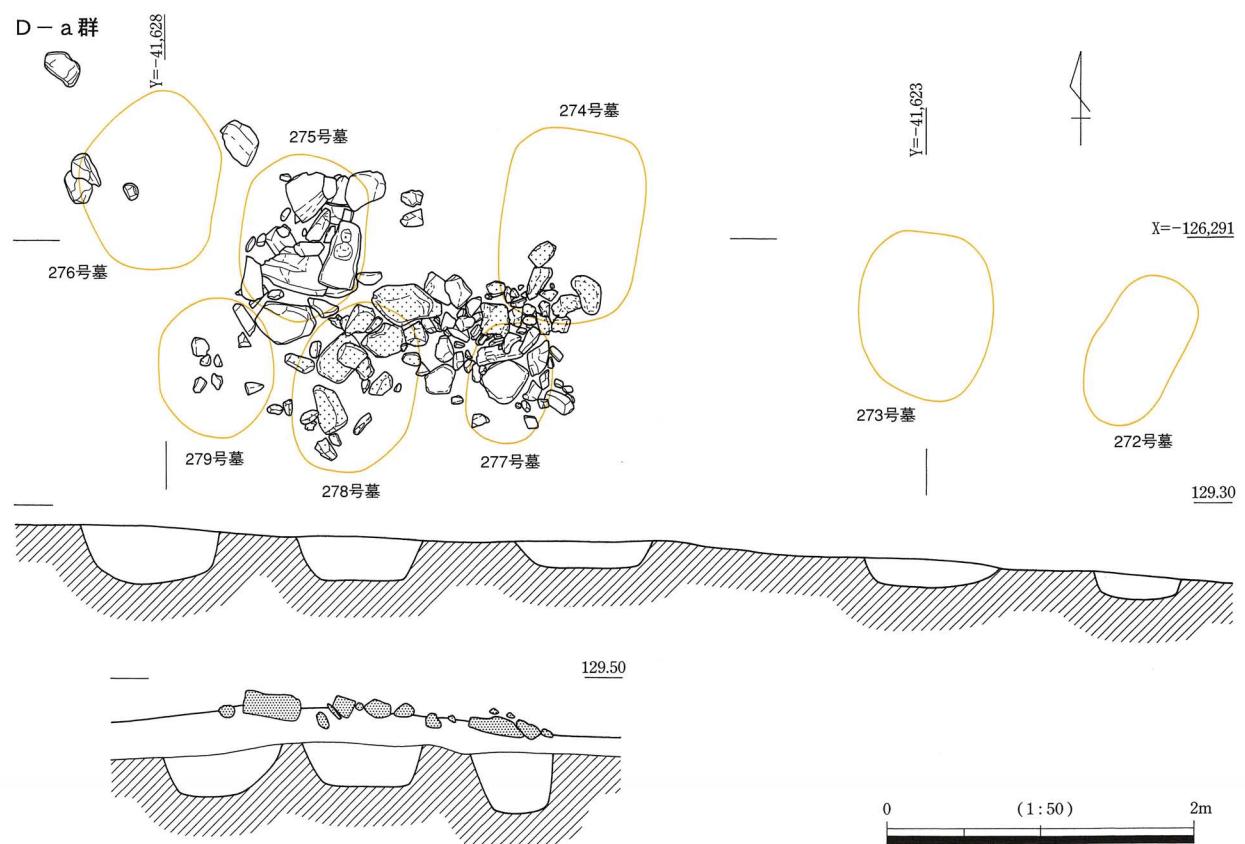


図77 中近世墓D-a群 (272~279号墓)

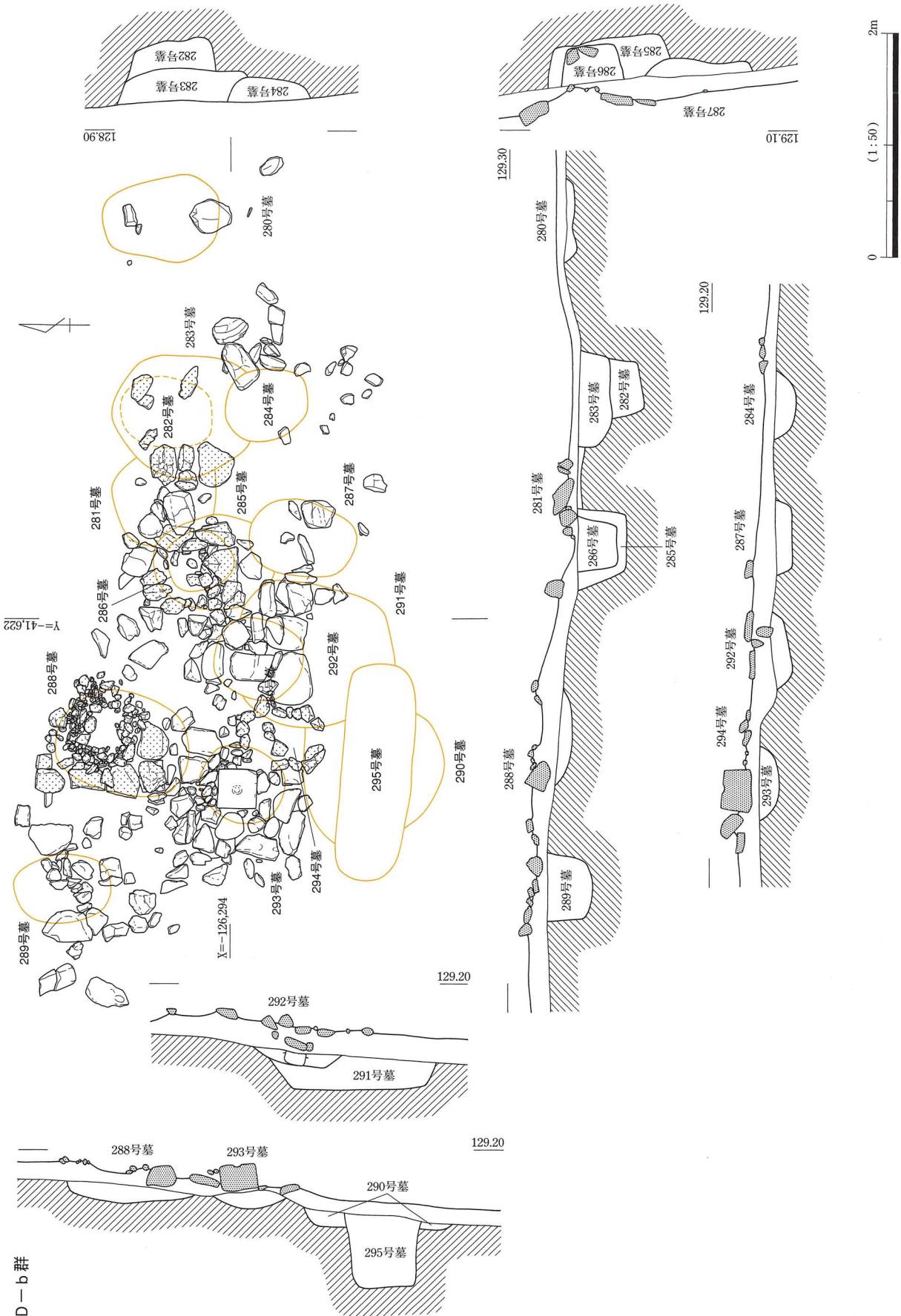


図78 中近世墓D—b群 (280~295号墓)

ため、後世の里道に削平を受けなかったようである。石組に石仏を2基再利用していた。

272号墓は、火葬墓A類である。

273～276号墓は、土葬墓A類である。274号墓は、長方形の墓壙であるが、他は楕円形の平面形をなす。275号墓は、墓壙内に20～40cmの大きさの石が7石程度、南側に集中して検出された。ただし、床面から浮いている石もあるので、全ての石が置かれていたかどうか不明である。また、墓壙の南端から石仏が出土している。

その2は、前述の墓群の南側に接して検出したもので、277.278号墓の石組の南端が消失していると考えられたが、石組の北辺が揃っているところから、墓壙の277.278号墓上にある石組は、石組のみのものとも思われる。また、279号墓の石組がほとんど残存していない。

277～279号墓は、土葬墓A類である。277号墓は長方形の墓壙であるが、他は楕円形の墓壙である。

また、277.279号墓は、長軸が1m以下で、他よりも一回り規模が小さい。

(2) D-b群(280-295号墓)

この墓群はD-a群の南側に位置し、複雑に切り合っている。石組で見ると、辺を揃えて造っている

D-c群

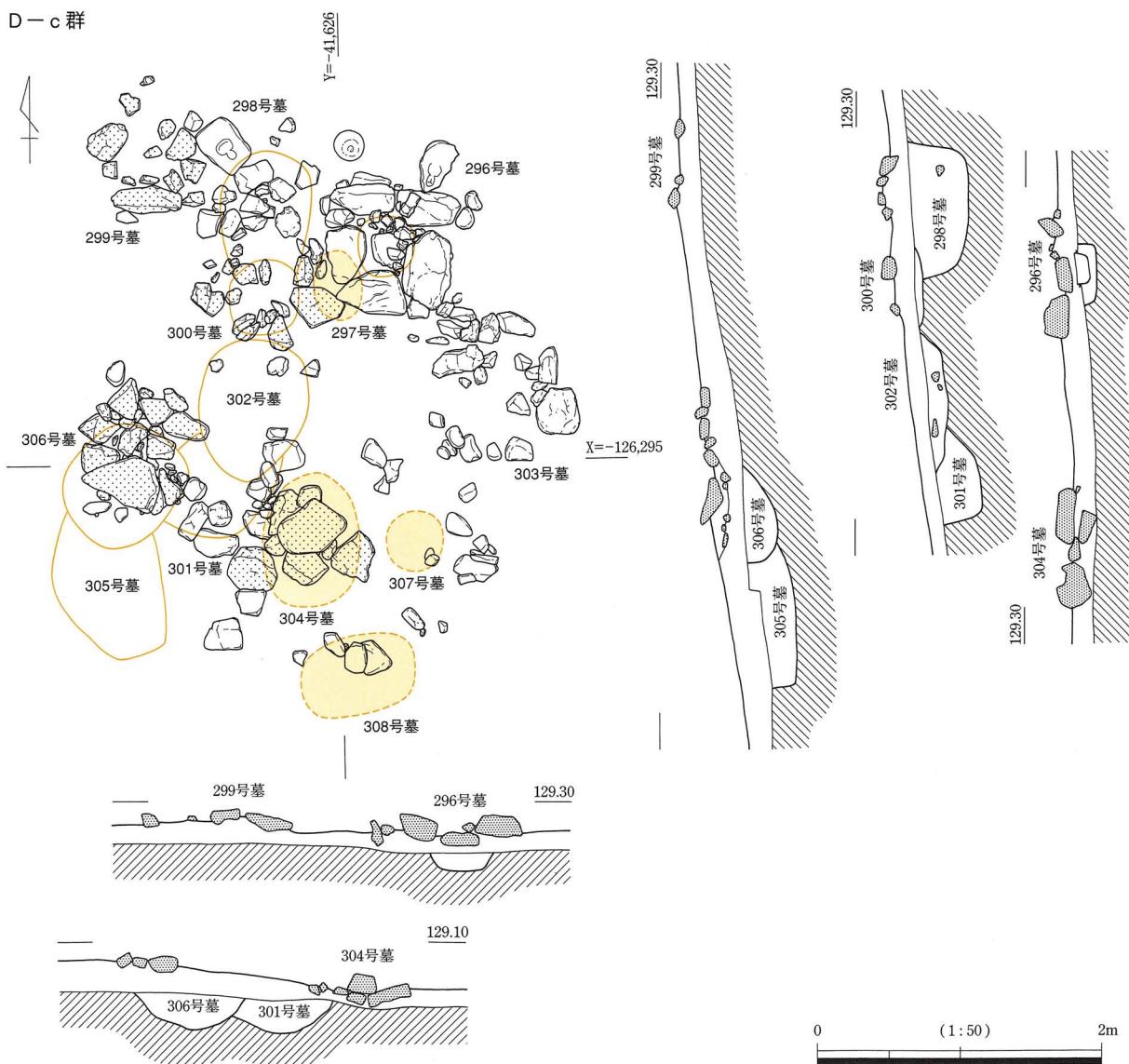


図79 中近世墓D-c群 (296～308号墓)

石組が無いのがこの墓群の特徴であろうか。280号墓は南辺の石が1個のみ残存し、切り合いがない。

280号墓は、西辺のみを残存している。292号墓の石組は北東角を286号墓の石組に切られており、285号墓の北側にわずかに出た石がこの石組の北辺の名残と考えられる。288号墓の北辺および東辺は消失しているが、中心部に地輪を据えた痕跡が窺われる。288号墓は、石組と墓壙がわずかなずれを生じていることから、南辺が293号墓を造る時点で再整理されたものと考えられる。石組の中心に地輪が座っていた。293号墓は東辺を欠き、292号墓との間に294号墓を造っていることが判る。287号墓の石組は西辺を291号墓に、北辺を286号墓にそれぞれ接し、中心部に石仏を据えた痕跡を残している。289号墓は北半部を欠き、他との切り合いは無い。

なお、288号墓は、墓壙の長軸方向と石組の方向が異なることや、位置がずれていることから、石組が再整理された可能性がある。

280.283.284.287～289.291号墓は、火葬墓A類である。283.291号墓は、当群内では墓壙の長軸が1.2m以上と規模が大きく、平面形もやや不整な方形であることから類似性が感じられる。283号墓の墓壙検出面からは、15世紀代の土師器皿が2枚、口縁部を合わせて押しつぶされた状況で出土している（図109-19.20）。284号墓は、0.77m×0.62mの墓壙で、やや規模が小さい。288号墓は、墓壙の床面中央に焼骨および炭化材が集中して出土している。さらに、焼骨の全ての部位を残していないことから、他の火葬墓A類と同じく、拾骨のための片付けが行われた可能性がある。289号墓は、墓壙内に2つの棺台があるが、床面から浮いており確実に原位置を保っていない。

281.290.293号墓は、火葬墓C類である。281.293号墓はC II類で、墓壙に炭のみが多量に混じった土で充填されていた。290号墓はC I類で、その大部分が295号墓に切られているが約1.7m×1.3mの範囲に焼骨と多量の炭が広がっていた。これらの性格であるが、火葬の際に生じた炭や焼骨等を廃棄もしくは埋納した遺構であるとも考えられるが、その判断は非常に困難である。

282.285号墓は、土葬墓A類である。両墓とも墓壙内の埋土から炭が検出されているが、これは、281号墓を切っているための混入だと思われる。

286号墓は、墓壙内に2石の棺台を設けて、その上に焼骨を置いた火葬墓B II類である。292号墓は、瓦質羽釜を蔵骨器（図111-8）とした火葬墓B I類である。蔵骨器内は、土を2～5cm充填したあと、焼骨を納めている。これらは、位置的には並びあっているが、その関係は不明である。

295号墓は、土葬墓B類である。木質が残存した鉄釘が15本出土しており、その配置から、1.75m×0.3mの木棺が推定できる。

（3）D-c群（296-308号墓）

この墓群は、D-b群の西側およびD-a群の南側に位置する。南北方向に重複を見せる墓群で、石組の残りの悪いものが多い。

石組で見るならば、296.306号墓がほぼ残存している以外は規模等明確なものがない。299.303号墓は、墓壙を持たないものである。

また、297号墓は296号墓に含まれる可能性がある。306号墓は、石組と墓壙の上下関係に差異が認められ、石組と墓壙は別のものと考えられる。

296.297.308号墓は、火葬墓B類である。296号墓は、瓦質羽釜を蔵骨器（図111-1）としたB I類である。やはり、焼骨は若干羽釜の底面より浮いており、先に土を充填してから焼骨を納めたと思われる。297.308号墓は、共に顕著な墓壙を掘らないで焼骨を置くB II類である。前者が径30cm程度の範囲に焼

D-d群

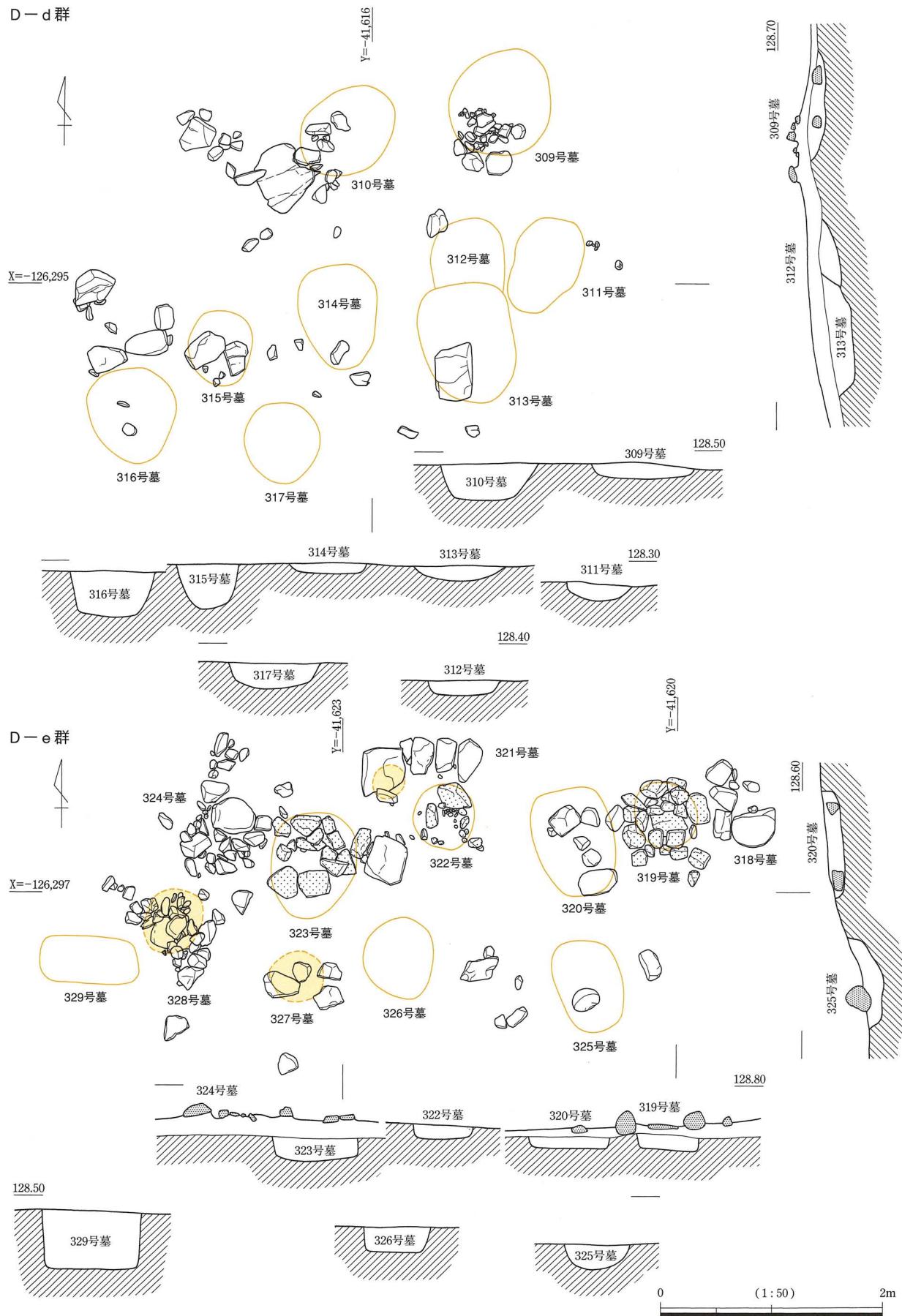


図80 中近世墓D-d群(309~317号墓)、D-e群(318~329号墓)

骨の量が結構まとまっているのに対し、後者は径60cm程度の範囲に焼骨の量がわずかである。

307号墓にも、墓壙内に瓦質三足羽釜（図111-5）が据えられていたが、中には焼骨・炭等は全く検出されなかった。しかしながら、羽釜の底から5cm程の土が上層よりも粘質であったことが注意を要する。また、後述するがこの羽釜は他のものよりも時期的に古く、焼骨が出土していないことから、他の火葬墓B I類とは違う性格を有する可能性も考えられる。

298.301.305号墓は、土葬墓A類である。301号墓は、墓壙の南側に10~20cmの2石の棺台がある。

302.306号墓は、火葬墓A類である。302号墓は、棺台が10cm程度の5石あるが、大きさは南北相対して存在する。埋土内には、炭・焼骨が混在しているが、10cm程度の炭化材も見られる。306号墓は棺台が1石のみで、床面より浮いているので、火葬後一度除去したと思われる。また、埋土内には302号墓のように炭・焼骨と共に10cm程度の炭化材が見られる。

300.304号墓は、火葬墓C I類である。両者とも、焼骨と炭が0.5m~1.0mの範囲に散在している。

(4) D-d群(309-317号墓)

この墓群はB-i群の南側に位置し、5号墳の西側およびD-b群の東側に当たる。2列の墓群がほぼ平行して並んでいる。

その1は、309.310号墓で、309号墓の北半部は後世の里道により削平されていた。石組は南半部を残している。310号墓の石組は、南西角に当たる石が65cmの大きさであったが、全体の規模は不明である。

墓壙は、309号墓が火葬墓A類で、棺台2石を有している。310号墓が土葬墓A類で、墓壙内の北側の石のすぐ下から、古瀬戸小皿（図109-52）が完形で出土している。この小皿は、正置ではなく、若干浮いてるので、本来、この位置に置かれたものかは不明である。

その2は、311~316号墓で、ほぼ等高線に沿って並んでいる。石組がほとんど残存しておらず、唯一、316号墓の北辺が残存していた。

312.313.314号墓は、火葬墓A類である。312号墓は、313号墓に切られている。両者とも棺台を有していないが、前者が深さ0.14mに対して、後者は0.25mと差異がある。

311.315.316号墓は、土葬墓A類である。310号墓は、墓壙内に2石の石が床面より若干浮いた状況で出土している。311号墓は、墓壙内の上部に土師器皿（図109-21.28）が2点出土しており、2点とも底部を上に向いている。315.316号墓は、円形の墓壙で規模も似通っており、また、隣り合っている。

317号墓は、火葬墓C II類である。

(5) D-e群(318-329号墓)

この墓群は、D-b群の南側に位置し、東側にはD-d群のその2の墓群が連なる。ほぼ等高線に沿って並び、2列になる。

その1は、318~324号墓で、ほぼ石組が列をなして並んでいる。318~320号墓は、石組の向きを揃えているが、南北両辺を揃えていない。318号墓が南辺および西辺を残存し、320号墓が残りが悪いが南北辺の一部を残存している。319号墓には五輪塔が座っていた痕跡が窺われる。318号墓は、墓壙を伴わないものである。321.322号墓は同一遺構とも考えられるが、322号墓が中心にくると、321号墓が大きくなりすぎるために、ここでは別遺構として取り扱う。321号墓は北辺および西辺を残存しており、北西角石下部から焼骨が出土している。322号墓は石組の残存が不良で北辺の一部がわずかに残存していた。323.324号墓は321号墓に隣接して造られるがその北辺を揃えていない。324号墓は墓壙を伴わないものである。

319.322号墓は、瓦質羽釜（図111-3,7）を藏骨器とした火葬墓B I類である。両者とも、やはり先

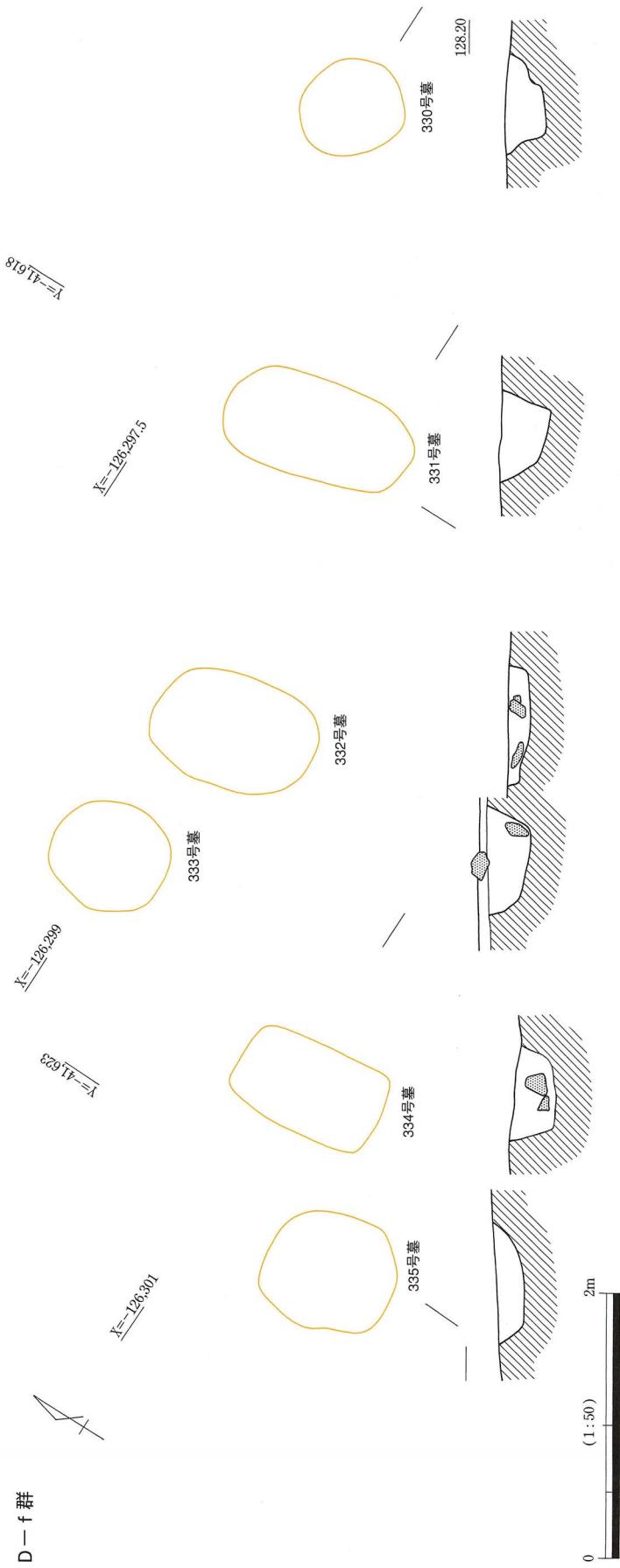


図81 中近世墓D-f群 (330~335号墓)

に土を少々充填してから焼骨を納めている様子が窺われる。

320.323号墓は、火葬墓A類である。両者とも、棺台を南北に2石配し、墓壙の規模も長軸が約1mで橢円形の平面形を持ち類似している。また、それぞれ、東側に火葬墓A類である319.322号墓が隣り合っている。このように並ぶ4基の墓は、有機的な関連性があると思われる。319号墓の特徴として、墓壙内の棺台の間に多量の焼骨が見られるが、埋土にはさほど炭を含まない。以上のことから、この墓でも火葬後は拾骨のために、一度墓壙内を片付けたと思われる。なお、320.323号墓の石組と墓壙を比較した場合に、ずれを生じていることから、石組が造り変えられたものと考えられる。

これら4基の墓の位置関係や規模・性格等から見ると、319.322号墓、320.323号墓という2組のセット関係で捉えることができる。

321号墓は、墓壙を設けずに地山直上に焼骨を置いた火葬墓BII類である。

その2は、325号墓~329号墓で、石組がほとんど残存していなかった。325号墓には水輪が1個残存していた。328号墓は石組が中心部のみ残存していた。

325号墓は、土葬墓A類で、326号墓は、火葬墓CII類である。

327.328号墓は、火葬墓BII類である。これらは、墓壙を掘らずに、地山面に焼骨を置いてる。

329号墓は、土葬墓B類である。鉄釘の配置から、0.65m×0.25m程度の木棺が据えられていたと思われる。

当群は切り合いが無く、前後関係は不明であるが、南側の墓群が後出すると思われる。

(6) D-f群(330-335号墓)

この墓群は、D-d、e群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って並んでいる。また、石組が全く検出されておらず、墓壙のみの検出であった。

330～334号墓は、火葬墓A類である。331号墓は、墓壙の規模が $1.46m \times 0.75m$ の長楕円形の平面形をもち、338号墓との類似性が強い。332号墓は、20cm前後と比較的小さい棺台を南北に2石有する。330号墓は、墓壙の規模が $0.79m \times 0.71m$ の円形で小規模な部類である。

335号墓は、土葬墓A類である。

墓壙の規模等からすると、火葬墓が先行して造られたと考えられ、331号墓はE-a群の338号墓に類似しており、同様な石組を持つと思われる。

6. E群(図82～図89)

この墓群は、墓域南半部の中央部分の緩斜面にあたり、C群の南側で、東側にD群、西側にF群が位置し、南西部には火葬場群および炭盛土が拡がる。

それらをさらに、a～k群の11群に区分している。

(1) E-a群(336-341号墓)

この墓群は、東西方向に列をなすこれまでの墓群と異なり、南北方向に配置される墓群で、しかも旧地形の尾根上に位置すると考えられる。

石組で見ると、南北方向に長軸をもち、周縁に40～60cmの石を置き、中心部に5～20cmの石を積み重ねている。336号墓は、石組が残存せず、341号墓は炭盛土下層で検出された。

当群は、338号墓のみ火葬墓A類で、他は全て土葬墓A類である。

336号墓は、現状では墓壙のみの検出である。墓壙は、規模が $1.33m \times 0.90m$ の長方形のプランである。30cm前後の石が床面より10cm前後浮いて出土しており、置かれたものかは不明である。北側のテラス状の部分から、瓦器碗(図109-30)が出土している。また、3本の鉄釘が出土しているが、その配置からは木棺を復元するのが難しい。さらに、石が床面より浮いた状況で出土しているものもあることから、鉄釘を使用しない木棺が据えられていた可能性は否定できない。

337号墓の石組は、周縁がほとんど残存しておらず、墓壙平面形に合わせるように中心部の石組が残存していた。墓壙の規模が $1.28m \times 0.57m$ と、他のものよりもやや幅が狭い長方形の墓壙である。

338号墓の石組は、東辺を消失している。



図82 中近世墓小区分(E-a～k群)

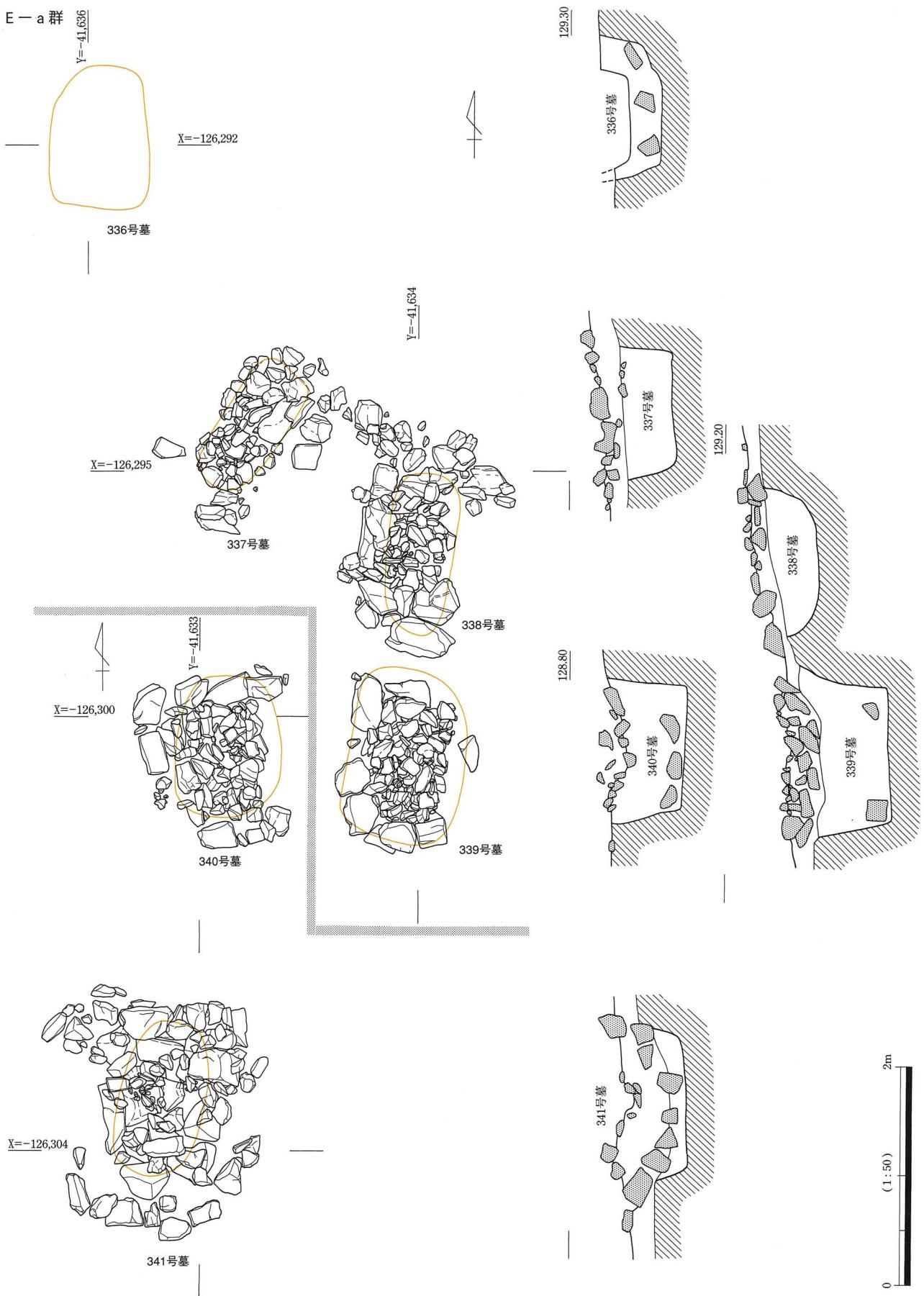


图83 中近世墓E-a群 (336~341号墓)

当墓群では、唯一の火葬墓A類である。墓壙の規模が $1.48m \times 0.59m$ と、337号墓と類似した規模を有する。火葬墓A類の中では、先に触れた331号墓の墓壙との類似性が窺える。この墓は、埋土の3層が炭層であるが焼骨は含まれない。

339号墓の石組は東辺が消失していた。墓壙の規模が $1.57m \times 1.07m$ で、平面は長方形を呈している。床面には、若干浮いてるとはいえ、南北に40cm前後の石が2石見られ、棺台と思われる。石組の石と埋土の上層（1～3層）は、中央が落ち込むような堆積をとる。これらの点から、鉄釘は出土していないが、それを使用しない木棺が据えられていた可能性が考えられる。

340号墓の石組は、東辺および西辺南半部が消失していた。墓壙の規模が $1.32m \times 0.97m$ で、平面はやや長方形を呈している。床面には、若干浮いているが、南北に30～40cm前後の石が3石見られる。これらの石の上面は水平ではないが、この配置から考えると置かれたと思われる。また、石組の落ち込みと埋土の堆積は、先の339号墓に類似しており、同様に木棺が存在した可能性が示唆される。なお、墓壙からは鉄釘状の鉄製品が2本出土しているが、その配置・本数等からは鉄釘を使用した木棺とは言いたい。

341号墓の石組は東辺の一部が消失し、さらに、2列に並ぶ南側の石列がこの石組に伴うものならば、長軸方向で約2.0mを測り、中近世墓群最大の石組になる。墓壙の規模が $1.44m \times 0.76m$ で、平面は長方形である。床面近くに、40cm前後の4石が見られ、また、石組の石も落ち込んでいる。以上のことから、この墓も木棺の存在が指摘できるが、340号墓と同様な状況で鉄釘が1本出土しており、その性格は断定できない。

なお、339.341号墓の石組内から焼骨が出土している。341号墓は土師器皿や小柄も出土しており、後世に焼骨が追葬されたか、炭盛土に覆われていたことから混入の可能性とも考えられる。

（2）E-b群（342-356号墓）

この墓群は、C-n群の南側に位置し、ほぼ列をなし等高線に沿って並んでいた。

石組で見るならば、343～351号墓が隣接して造られているが、343～345号墓の北辺でみると微妙に違えており、348～351号墓の辺は揃うようである。352～356号墓の石組は、ほとんど残存していなかった。

墓壙で見ると、342号墓が343号墓に、346号墓が347.348号墓に、351号墓が352号墓に切られており、354.355号墓が336号墓を切っている。

342～345.348号墓の石組を詳細に観察した時に、墓壙と石組の整合性が342号墓でずれていることが判明し、上層の石組は343号墓を造るときに壊され、344.345号墓を造る時点で合わせて造り直されたと考えられる。また、345号墓の西辺の石は348号墓の東辺と共有している。344.345.350号墓は墓壙を伴わないものである。

342.343.348.349.353.355号墓は、火葬墓A類である。342号墓は、墓壙の南北に棺台3石を有するが、南側に被熱した地山の石があり、これも利用されたと思われる。343号墓は、墓壙の南北に2石の棺台を有し、鉄釘が2本出土している。この鉄釘は、細片であるので火葬時に使用された木棺のものと思われる。348号墓は、墓壙内に棺台が2石見られるが、北側に寄っていることからすると、火葬後一度除去した可能性が窺える。349号墓は、墓壙内の南北両端に棺台が見られる。この石は4石で、全て10～20cm前後と墓壙の規模の割りには小さいものである。353号墓は、墓壙の規模が $0.83m \times 0.56m$ と小規模な部類に入る。355号墓は、先の336号墓の真上に造られており、土葬墓と火葬墓の切り合いの一例である。

346.347.352.354.356号墓は、土葬墓A類である。347号墓は、木質が残存した鉄釘が5本出土してい



図84 中近世墓E-b群(342~356号墓)、E-c群(357~364号墓)

るが、配置からは木棺の復元は難しい。352号墓は、その長軸を西に66°振っており、東西を指向するものである。356号墓は、古代と思われる焼土坑4を切っている。この墓壙は、北側の壁の立ち上がりはかなり緩やかとなっている。

351号墓は火葬墓B II類である。顕著な墓壙は掘削せずに、地山面に直接微量の焼骨を置いている。

(3) E-c群(357-365号墓)

この墓群は、E-b群の南側に位置している。大きさは、東西方向に2列に並んでいる。

石組で見るならば、東半部の石組の残りが悪く、規模等不明な点が多い。

359.360.361号墓の石組に関しては、当初、2基の石組が南辺を揃えて接して造られていると考えられた。しかし、地下施設の墓壙と照らし合わせた場合に、359号墓の石組が先に造られており、360号墓を造る時点で、359号墓の南辺が残存し、新たに360号墓の石組が組まれたことが判明した。

さらに、361号墓に関しても、石組と墓壙の整合性を見た場合に現存の石組とは差異が生じ、本来はその南側にある石が南辺であった可能性が高く、東隣の石組に揃えて、石組の造り替えが行われたと推測される。365号墓は、北辺および中心部の石組が消失しており、墓壙を持たないものである。

357.358号墓は石組を全く消失しており、363.364号墓は周縁の石組をわずかに残していた。362号墓には、墓壙上面に石仏2体および一石五輪塔の地輪が1基、残存していた。

360.361号墓には、石仏が座っていた痕跡があり、対になると考えられる。

墓壙で見ると、357.358号墓および360号墓が362号墓に切られ、359号墓が360号墓に切られている以外は、切り合いがない。

357.360号墓は、火葬墓C II類である。357号墓は、362号墓に切られているため正確な墓壙の規模は不明であるが、長軸が0.6m程度の小規模なものに復元できる。360号墓は、炭層が存在し、また、10cm前後の大きさの被熱した石が1石のみ見られる。したがって、火葬を行った可能性も否定できないが、墓壙の規模が0.75m×0.64mと小さいためと、床面が丸底であることなどを考慮すると、火葬墓A類とするには躊躇したことから火葬墓C II類とした。358号墓は、約1.4m×1.1mの範囲に焼骨と炭が薄く散在しており、火葬墓C I類である。

359.363.364号墓は、土葬墓A類である。359号墓は、墓壙の立ち上がりが南側に比べ北側が非常に急角度であることが特徴と言える。364号墓は木質が残存した鉄釘が出土しており、その配置から約0.6m×0.35mの規模の木棺の存在が指摘できる。363.364号墓は、墓壙の規模、プラン等は類似しているが、深さが前者0.39m、後者0.20mと差異が認められる。ただ、南北に若干前後して、東西に隣り合うことと、主軸の方向からすると、両者は何らかの関係をもつ可能性がある。

361号墓は、火葬墓A類である。墓壙内には、10cm前後の炭化材が見られ、焼骨は中央部に集中して見られる。埋土から判断すると、火葬後の片付けが行われており、この焼骨の状況は拾骨した後の状況であろう。

362号墓は、土葬墓B類である。墓壙内からは、木質が残存した鉄釘が出土しており、その配置から1.7m×0.35mの規模の木棺が据えられていたことが窺われる。

(4) E-d群(366-370号墓)

この墓群はE-b群の南側に位置し、南北に接して造られる2基と、等高線に沿って列をなす3基の墓で構成される。

366.367号墓は、E-a群の337.338号墓の隙間に造られており、石組では366号墓の南辺と367号墓の

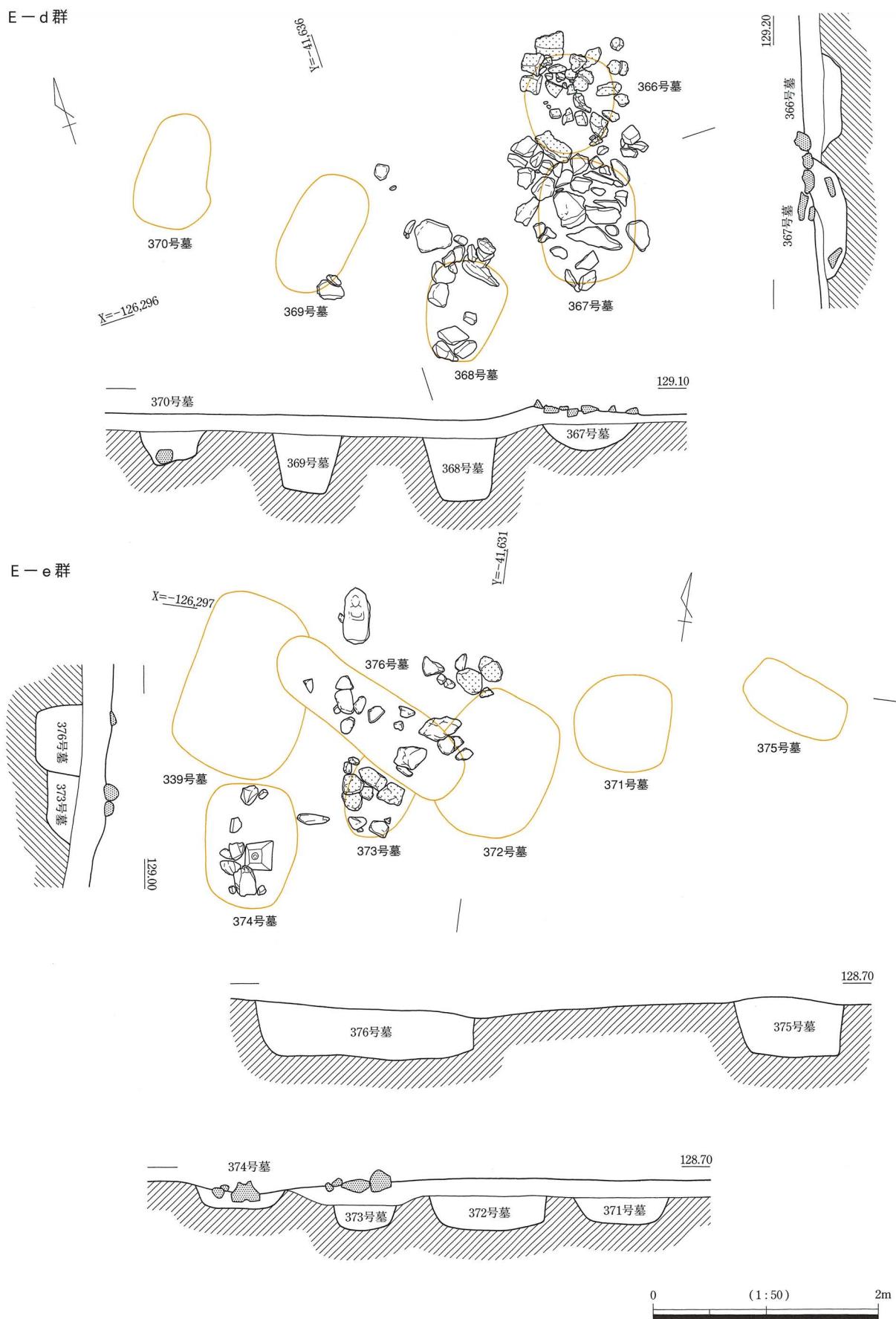


図85 中近世墓E-d群(366~370号墓)、E-e群(371~376号墓)

北辺の区別がつきにくい。

368～370号墓は、石組の規模の判るものが368号墓のみで、他は不明である。

366.368.369号墓は、土葬墓A類である。368号墓の埋土は、非常に土のしまりの悪い層が南側の上方から北側の下方に向かって落ち込むような堆積を見せてている。このような堆積は、E-a群の土葬墓A類と同じく、木棺が腐朽した痕跡の可能性が考えられる。369号墓は、4石の30～40cm前後の大きさの石がほぼ床面に近いところで見られ、棺台として使われた可能性がある。

367.370号墓は、火葬墓A類である。367号墓は、墓壙内に棺台を2石配するが、やや床面より浮いている。370号墓は、床面に40cm前後の大きさの石を3石棺台として配する。この墓壙の床面は、地形と反して南西端から北東端に向かって低くなっている、注意を促すものと言える。

368.369.370号墓は、墓壙の長軸が各々0.89m、1.14m、1.04mと差異が見られるが、約1mの間隔を開けて南東から北西に、墓壙の南端をほぼ揃えて並んでいる。以上のような並びから、この3者の墓は、各々何らかの関係があると思われる。

(5) E-e群(371-376号墓)

この墓群は、E-c群の南側に位置し、ほぼ列をなして並んでいる。ほとんどの墓が石組を消失しており、その規模等は不明である。

376号墓上には石が散乱しているが石組になるものか定かではない。

372.373号墓は375号墓に切られており、373号墓の石組はさらに387号墓の石組に切られている。374号墓の石組には、火輪が転用されていた。

373号墓の石組からは、土師器皿が6点(図109-51)出土している。

371～373号墓は、土葬墓A類である。372号墓は、木質が残存した鉄釘が20本出土しており、その配置から、0.75m×0.55mの大きさの木棺が推定できる。埋土の観察から中央部が落ち込んで、各々南北端から土が流れ込んだような堆積をとり、2層から微量の焼骨が検出された。当初は、焼骨を納めた火葬墓である可能性を考えていたが、埋土の堆積、墓壙および木棺の大きさから焼骨は混入したもので、土葬墓と考えたほうが妥当ではないかと判断した。この判断は、墓群の全体の流れから導いたもので、後述する。墓壙内からは、土師器皿が2点出土している(図109-35)。

373号墓は、376号墓に切られており、墓壙の規模・形態等が不明である。しかし、残存部分からすると、長軸が1m前後の長方形のプランを有していたものと考えられる。

374号墓は、明瞭な被熱痕跡がなく、埋土に焼骨を含まないが炭が混在している。だが、墓壙の規模が1.11m×0.79mで、深さ0.19mを測ること、炭が粉状で土と一体化した状態であるということから、火葬墓A類と判断した。

375.376号墓は、土葬墓B類である。375号墓は、墓壙の規模が0.94m×0.50mと小規模な部類である。木質が残存した鉄釘は5本しか出土していないが、半掘による調査を行ったことと鉄釘の判別が困難であることから、見逃した可能性も遺憾ながらあるので、おそらく鉄釘を使用した木棺が据えられていたと思われる。

(6) E-f群(377-388号墓)

この墓群は、E-c、e群の南側に位置し、方向の違う3列の墓群からなる。

その1は、377号墓～379号墓で、377号墓は墓壙上面に石仏の背を上に向け2体並べていた。378号墓はほぼ石組が残存しており、中心部に小礫を置いていることから中心に地輪を据えていた可能性がある。



图86 中近世墓E-f群 (377~389号墓)

379号墓は、石組の北辺と東辺の一部および中心部を残存しており、その中心部に地輪を据えていた痕跡が窺われる。

378.379号墓は石組の向きを揃えており、377号墓も石組の方向が同じことから一連の墓群と考えられる。

377号墓は、 $0.47m \times 0.44m$ の小規模な土坑に水輪が1基出土した。墓壙が、水輪より一回り大きい程度であることから、墓というよりも何らかの埋納遺構である可能性がある。

378号墓は、火葬墓A類である。

379号墓は、土葬墓A類である。 $0.84m \times 0.66m$ の小規模な墓壙に、長さ40cm前後の石が床面より若干浮いた状態で検出されている。

その2は、381～387号墓で、ほぼ一列に並ぶがその辺を微妙に違えている。381.382号墓は隣接する石組で、石組の切り合いで見ると、381号墓が切っているようである。

383号墓は、石組の北辺を382号墓に揃えているようである。

384号墓は石組の南半部が389号墓に切られている。墓壙を伴わないものである。両隣の石組と微妙に辺を違えている。385.386号墓は、石組の北辺を揃えており連続して造られている。385号墓の南半部が389号墓に切られている。386号墓は墓壙を伴わないものである。387号墓は石組の北辺のみを残存しており、辺をわずかに違えている。これも、墓壙を伴わないものである。

墓壙で見ると、381号墓が土葬墓A類である。なお、381号墓は石組を除去した後も續々と石が多量に検出されたため、石組の除去後墓壙の平面的な検出をせず掘削してしまった。後にそれが墓壙内の石であったことに気づいたので、墓壙の堆積状況は不明である。この墓壙のように石が多量に検出される墓として、F-h群の496.497号墓が挙げられる。

382.383.385号墓は、火葬墓A類である。382号墓の墓壙は、丸底で、棺台を2石配する。その墓壙の中央部には、床面より若干浮いた状況で温石（図115-1）が出土した。この温石には、明瞭な被熱が認められなかつたので、火葬後の片付けが行われた段階で置かれた可能性も考えられる。383号墓は、墓壙内に20cm前後の石が、炭層である2層から12石検出した。これらの石は、明瞭な被熱が認められるものが幾つかあるものの、総てがそうであるとは断言できない。また、墓壙の壁や床には明瞭な被熱痕跡が認められない。また、埋土の1層に炭が微量にしか認められることと、2層が炭層であることは、火葬墓A類の条件である。これと類似する墓として、225号墓が挙げられる。385号墓は、389号墓に切られており全容は不明であるが、墓壙の規模が長軸1.0m前後で10cm～20cm程度の棺台を2～3石程度有する墓であったであろう。

388号墓は、土葬墓A類である。388号墓は、火葬場1に南端が切られているが、 $0.93m \times 約0.64m$ の墓壙に長さ20cm前後の大きさの石が3石ほど床面直上にあり、その上に30cm前後の大きさの石が載った状態で検出された。これらの石は、地上から落ち込んだ状況が確認できず、意識的に配置された可能性が高い。

その3は、380.389号墓で、東西方向に主軸を持つ土葬墓B類で、380号墓は、石組が存在していなかった。小規模な部類の墓壙をもち、木質が残存した鉄釘が13本出土しており、その配置から $0.85m \times 0.3m$ の木棺が復元できる。389号墓は、土葬墓B類で、唯一、石組の残りの良いものである。石組が長方形に組まれているが、周縁を意識した石の置き方ではない。石仏を5体石組に再利用していた。墓壙から、木質が残存した鉄釘が7本出土しているので、 $1.55m \times 0.45m$ の木棺が据えられていたと思われ

る。この墓壙内には石仏・火輪および30cm前後の石が落ち込んだような状況で出土し、これらは、本来、地上の石組の一部であったものと考えられる。

(7) E-g群(390-402号墓)

この墓群は、E-d群の南側および火葬場群の北側に位置し、3列並んでいた。南側の墓群は炭盛土に覆われていた。

北川の列の401.402号墓は、石組の残存が不良で、402号墓には全く石組が残存していない。規模等不明である。

中央の列は、390号墓～395号墓で、石組の残存が悪く、規模等不明である。390～392.394号墓の石組には、石仏や五輪塔の部材が転用されている。395号墓が石組のみのものである。

南側の列は、396号墓～399号墓で、396.398号墓の石組が墓壙を持たないもので、398号墓の中心には石仏が座っていた。398.399号墓の石組は、接して造られており、398号墓が399号墓に切られている。397号墓はほとんど石組が残存しておらず、その規模等不明である。400号墓は、炭盛土下部の火葬場2・3の間にあり、393.400号墓は、ピット状の墓壙をもつ。

390.391.392.397.399号墓は、土葬墓A類である。390号墓は、微量の炭や焼骨が混在しているが、炭

E-g群

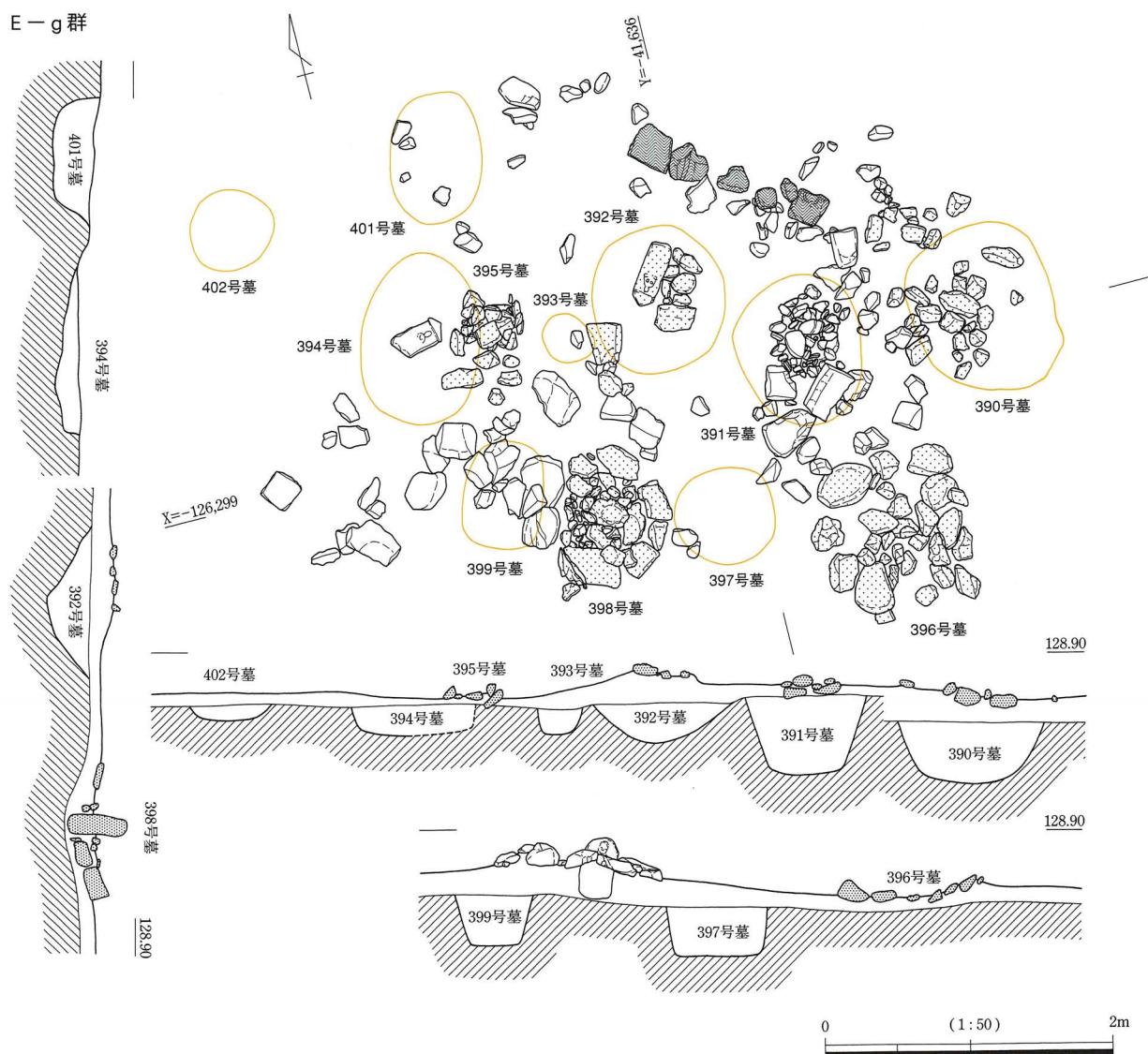


図87 中近世墓E-g群 (390～402号墓)

盛土による影響のためと思われる。391号墓は、埋土にしまりがなく、中央部が落ち込んだような堆積をとっており、E-a群で指摘したように木棺が据えられていた可能性が高い。390.391号墓は、東西に並び合っており、墓壙の規模・形態から類似性が認められることから、何らかの関連があろう。392号墓は、円形の墓壙をもつが、その断面形態は擂鉢状で、当墳墓群ではあまり見られない形状である。397号墓は、木の根による削平を受けており正確な規模・形態は不明であるが、残存部分から径0.7m程度の円形の墓壙をもつものと推定できる。399号墓は、墓壙の上部に20~40cm前後の大きさの石が見られる。これらの石の底はほぼレベルを揃えているのが注意を惹くが、その構造は具体的には不明である。

393.402号墓は、火葬墓C II類である。両者とも、埋土は炭のみである。

394.401号墓は、火葬墓A類である。394号墓は、深さ0.12mと非常に浅い墓壙で、南側に焼骨が集中して見られる。墓壙自体には、明瞭な被熱は見られないが、埋土に炭も混在しているため、火葬墓A類と考える。401号墓は、埋土の下層に炭化材を含むあまり土の混じらない炭層があり、焼骨も含まれている。

(8) E-h群(403-406号墓)

この墓群は、E-f群の南側に位置し、ほぼ列をなし並んでいる。

403号墓は、方形の石組がほぼ残存している。中心部に地輪の座っていた痕跡がある。404号墓は、周縁をもたないタイプの石組で、石仏を5体および火輪を2基再利用し、石と共に山状に積み重ねていた。また、墓壙も浅いため、これらの石造物を集積した遺構の可能性がある。405号墓は、墓壙上面に50×75cmの平らな石を置き、その上に比較的大きな石を並べ、周縁に石を組んでいることが判る。405号墓と石組の方向を合わせているようである。406号墓は、東西方向に主軸を持つ墓壙で、墓壙上面に石仏が背を上に向けて置かれていた。他に、石は存在していなかった。

これらの墓は点在しており切り合いはない。

403号墓は、火葬墓A類である。墓壙内には、被熱した20cm前後の大きさの石が2石見られる。どちらとも北端にあり、1石は床面直上で、その上にもう1石重なってある。この事は、火葬後の片付けが行われ、本来南端にあった底石を移動した可能性が想定できる。

405号墓は、土葬墓A類である。405号墓は、墓壙内の堆積が中央部が落ち込むような状況を見せており、木棺が腐朽した可能性が考えられる。また、東側のほぼ床面直上に30cm前後の長さの石が横位で1石検出されており、置かれた可能性が高い。この特徴は、541号墓と類似している。

406号墓は、土葬墓B類である。ただし、この墓からは、鉄釘が出土していない。また、断面観察が不十分であったため墓壙内の堆積が落ち込んだような状況であったかは不明である。しかし、調査の不手際を考慮しても全く鉄釘が出土しないのは、土葬墓B類で、本例を含め4例ある。

(9) E-i群(407-412号墓)

この墓群は、E-h群の南側に位置し、ほぼ列をなしていた。この墓群は石組がほとんど残存しておらず、その構成は不明である。

407号墓は、石組を検出していない。408号墓は、石組の周縁に残存していた石から、辺が復元できる。中心に石仏が座っていた。409.410号墓は、石組が全く残存せず、墓壙のみを検出している。411号墓は石組のみの墓壙をもたないものである。412号墓は、列から外れるもので、墓壙上面に仰向けの石仏と1個の石が残存していた。これらの墓には、切り合いが全く無かった。

407号墓は、0.58m×0.54mの土坑から地輪が1基出土した。類似の遺構としては、水輪が出土した

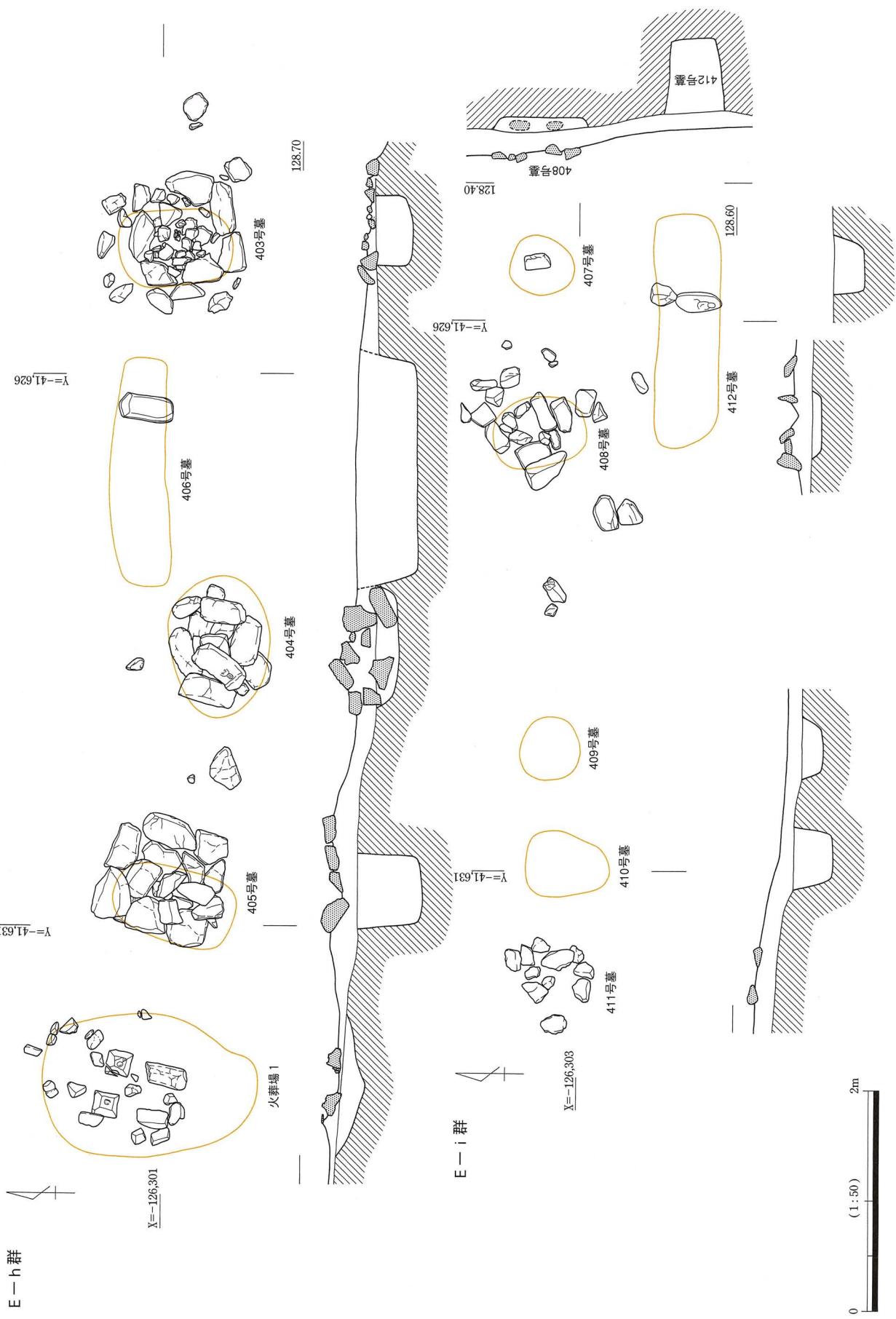


図88 中近世墓E-h群(403~406号墓)、E-i群(407~412号墓)

377号墓が挙げられ、墓というよりも何らかの埋納遺構の可能性がある。

409号墓は、 $0.58m \times 0.54m$ 、深さ $0.19m$ の土坑の中央部に $10cm$ 前後の大きさの石が1石あり、その下からは約 $2/3$ 残存する土師器皿（図110-2）が出土した。墓というよりも土器埋納遺構である可能性も否定はできない。

408号墓は、火葬墓A類である。焼骨と炭が混在する埋土で構成され、棺台が南北に2石存在した。

410号墓は、土葬墓A類である。墓壙の規模が $0.75m \times 0.59m$ 、深さ $0.35m$ の楕円形を呈し、やや小規模な部類である。

412号墓は、土葬墓B類である。この墓も、先の406号墓のように鉄釘が出土していない。ただ、埋土の堆積で中央部が落ち込んでおり、木棺が据えられていた可能性が高いと考えられる。また、墓壙の床面の両端は、長さ $20cm$ 程のテラス状になっている。なお、微細であるが、床面が西端の方が低くなっている。

（10）E-j群（413-424号墓）

この墓群はE-i群の南側に位置し、ほぼ列をなし並んでいた。東部分の石組が残存していた以外は全く検出していない。

414号墓は413号墓に切られ、石組が全く残存していなかった。413号墓は、石組の東辺が消失していると思われ、中心に石仏を据えた痕跡が窺われる。415号墓は、北半部の石組を残存しているか、造り替えの石組とも考えられる。417号墓は、石組の北辺を415号墓に揃えている。石組に石仏が仰向けに出土しているが、本来、この墓に建てられていたものと思われる。

416号墓～424号墓には、石組の石が全く残っておらず、石組の規模等不明である。墓壙の並びで、416号墓～422号墓がほぼ列をなして並ぶようである。416号墓が417.418号墓に、418号墓が419号墓に切られ、423号墓が421.422号墓を切っている。

なお、423.424号墓は、表土の段階で大きな窪みが生じており、'67年当時の掘削痕と思われるが、墓壙底部にまでは至っていない。

413.416.422号墓は、土葬墓A類である。413号墓は、墓壙の規模が $0.68m \times 0.41m$ と小規模な部類である。また、墓壙内には2石の石が見られるが、墓壙の中央部のものは床面に近いが、北側のものはそれより上である。416号墓は、埋土内にわずかな炭が検出されたが、火葬墓であるという根拠に乏しいため、墓壙の規模を考慮して土葬墓A類としている。

414.415.417.418.420.421.423.424号墓は、火葬墓A類である。

この墓群で注目すべき墓として420号墓がある。墓壙の床面に15世紀代の土師器皿（図110-1）が出土している。この土師器皿の上面には、焼骨が1片載せられてあった。この焼骨は、墓壙から出土している焼骨とは別個体で、年齢的にはやや若いものと考えられるものである。これは先の69号墓と同様で、一つの火葬墓で2個体分の焼骨が検出された2例目である。また、その土師器皿の北側の石は、床面より $10cm$ 前後浮いていて、被熱を受けているため、火葬後一度除去したものと思われる。

414号墓は、南側の石が確実に棺台だと考えられるが、他のものは不明である。415号墓は、長方形の墓壙である。一方、417号墓は楕円形の墓壙である。並びからすると、この両墓は何らかの関係が考えられ、また墓壙の規模も当群の中では似通っている。418号墓は、墓壙の規模が $1.26m \times 0.83m$ で、深さ $0.12m$ と浅く、規模が大きいものである。被熱を受けた石が床面より浮いた状況であるが、1石見られる。このことは、火葬後の片付けが行われた可能性を示唆している。421号墓は、墓壙内に、10～20

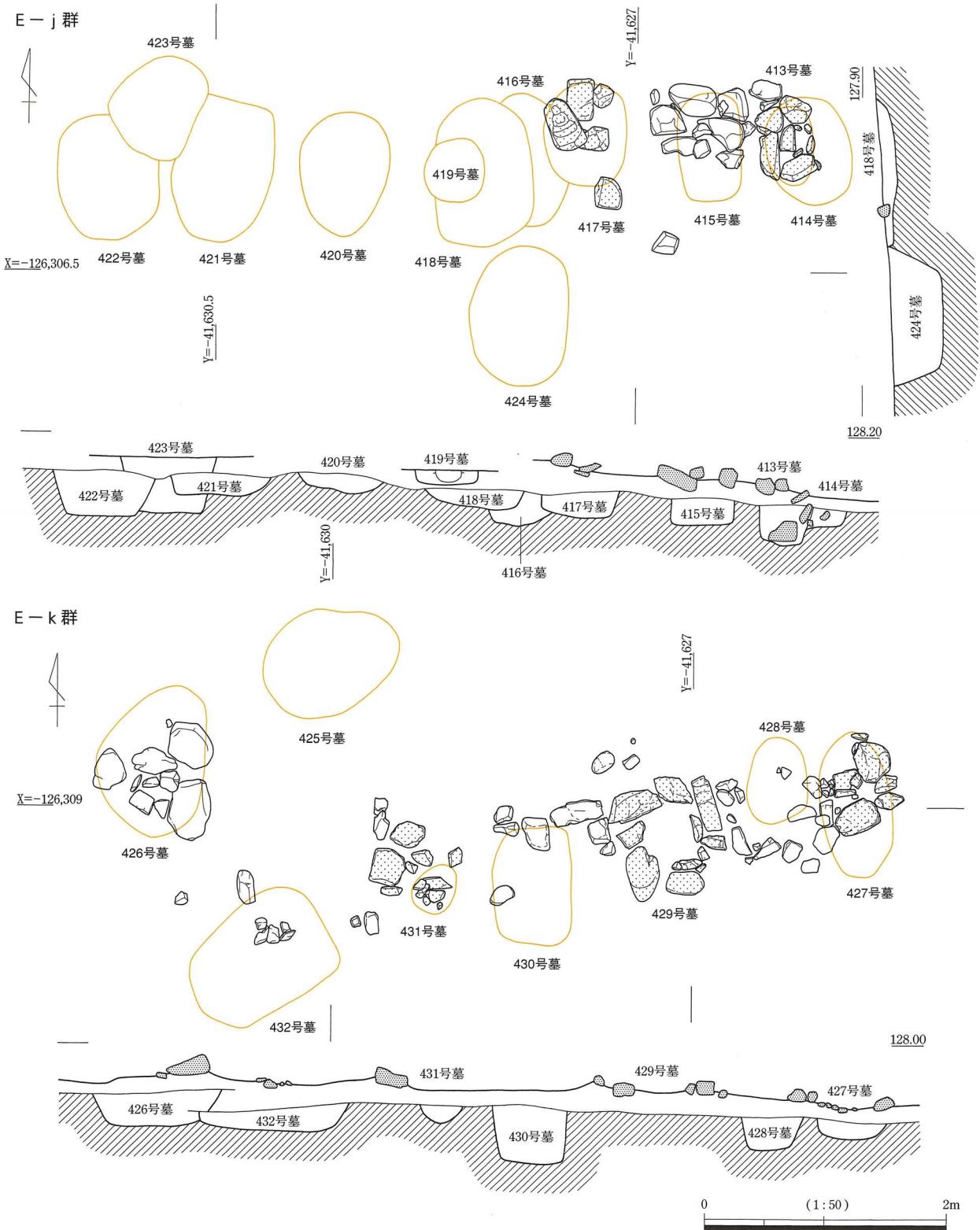


図89 中近世墓E-j群(413~424号墓)、E-k群(425~432号墓)

cm前後のやや小さな棺台を南北に2石配している。423号墓は、調査時よりすでに窪んでおり、その窪みには50cm前後の石が落ち込んでいた。墓壙自体は、若干不整形であり、当群の並びから北に少々外れる。また、切り合いから、当群の中では比較的新しい墓になると考えられる。424号墓も同様に、調査以前に窪みが見られ、墓壙内には5cm程度の埋土しか見られなかった。墓壙の深さが0.44mと、当群の中では、唯一、深いものである。

(11) E - k 群(425-432号墓)

この墓群はE - j 群の南側に位置し、前群とほぼ平行に並んでいるものと、その間に散在するものがいる。

427号墓～431号墓は、ほぼ列をなして並んでおり、石組が接している。427号墓は石組の北辺を消失するもので、中心部に石仏が座っていた痕跡が窺われる。下部の墓壙は、石組との対比から上下関係が成り立たず、石組が再整理されたものと考えられる。428号墓は、石組の北東部を消失している。石組と墓壙の位置関係から、石組の南辺は、並びを重視した段階で付け加えられてとも考えられる。その際の石組の南辺が揃っている。429号墓は、石組のみの墓壙を伴わないもので、中心部が残存していない。430号墓は、石組をほとんど消失しており、かろうじて北辺をわずかに残している。墓壙と石組の配置から、石組の北東角は、429号墓が造られた時点で北辺を揃えるために付け加えられたと思われる。431号墓は、北西角の石組を残存するが、辺が他とは異なっている。425号墓は、墓壙のみを検出している。また、426号墓は、石組の南北辺を消失しているが、中心部に石仏が座っていた痕跡を残している。432号墓は、石組がわずかに残っているが、その規模等は不明である。石組と墓壙の配置からすると、石組が西南角を残しているとするならば、上下関係が不成立で、石組のみのものが後から造られたとも考えられる。そうであれば、426号墓の南辺に揃えていると思われる。

425.427.430号墓は、火葬墓A類である。425号墓は、木の根による搅乱で、墓壙の正確な規模・形態は不明であるが、深さ0.05mと非常に浅いものである。

427号墓は、墓壙の規模が1.24m×0.58mで、長楕円形のプランを有する。棺台として確実に使われた石は南側の2石で、これらは床面より浮いているので火葬後一度除去したものであると考えられる。なお、墓壙内の北端の床面の若干窪んだ部分に、長さ20cm前後の石が据えられたような状態で見られるが、この石には明瞭な被熱がない。配置からすると、この石を含めて3石の棺台が据えられていた可能性がある。

430号墓は、墓壙の規模が0.99m×0.62mの長方形プランをもつが、深さが0.51mと非常に深いものである。棺台は、やや中央寄りに30cm前後の大きさの石が2石見られ、ほぼ床面直上である。その棺台の間を中心に焼骨が集中している。また、埋土の最下層は、厚さ10cm前後の炭層で、それより上層にあまり炭が混じらない土である。以上のように、この墓では、火葬後の片付けおよび拾骨、埋骨の状況を窺うことができる一例である。

426.428号墓は、土葬墓A類である。426号墓は、墓壙の規模が1.24m×0.88mで、やや不整な楕円形のプランをなす。また、墓壙内には、10～20cm前後の石が床面より浮いた状況で数石確認できた。

431号墓は、0.42m×0.34mの土坑に、10cm前後の川原石が5石検出された。あまりにも小規模な墓壙であることから墓であるとは断定できない。

432号墓は火葬墓C類である。焼土と炭が見られるが、余りにも微量であり、その性格は決めがたい。

7. F群

この墓群は、墓域南半部西端の緩斜面にあたり、C群の南側に位置する。なお、南東側には火葬場群が広がり、南半部が炭盛土に覆われていた。さらに、a～j群の10区分に細分される。

(1) F - a 群(433-438号墓)

この墓群は、C - q群の南側にあたり、ほぼ列をなして並んでいた。石組は、438号墓を除き、ほとんど残存していなかった。

433号墓は、石組北辺の1個の石のみが残存していた。434号墓は石組が全く残存しておらず、墓壙のみを検出している。435号墓は436号墓に切られており、石組が全く残存していない。436号墓は、墓壙上面に数個の石が残存していたがその規模等が不明である。437号墓も石組が残存しておらず、墓壙のみの検出であった。438号墓は最西端に離れて検出され、墓壙上面に4個の石が方形に置かれていた。

墓壙は438号墓を除き検出されており、土葬墓・火葬墓が共にある。

433.435.438号墓は、土葬墓A類である。

433号墓は、墓壙の規模が $0.79m \times 0.54m$ で、平面形が長方形である。墓壙内から、木質が残存した鉄釘が出土しており、その配置から約 $0.5m \times 0.3m$ の木棺が復元できる。また、長さ40cm程の石がほぼ床面直上にあるが、木棺の存在が考えられることから、この石は木棺腐朽後、落ち込んだものと思われ、地上に露出していた可能性もある。

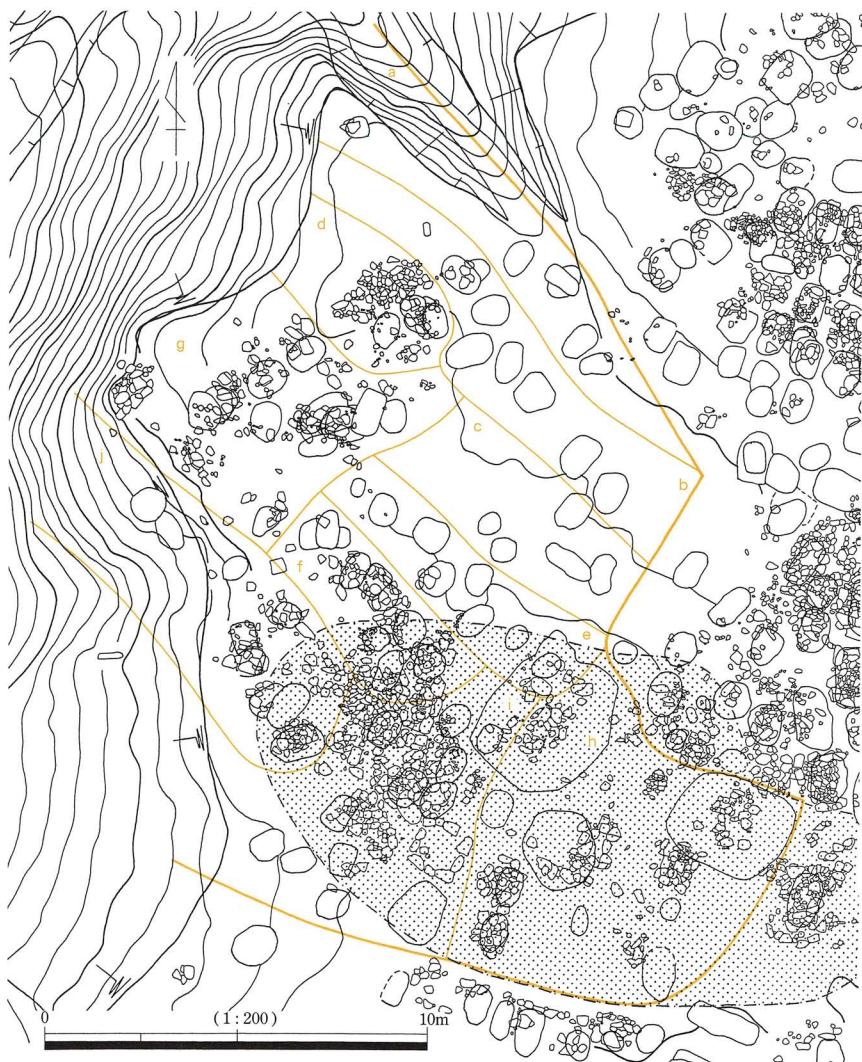


図90 中近世墓小区分 (F - a ~ j 群)

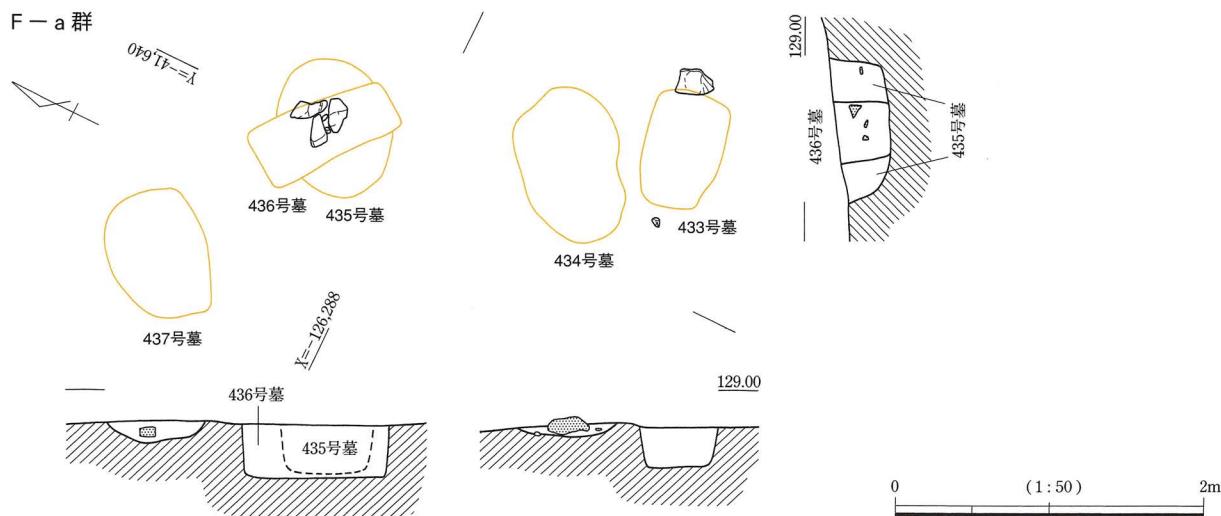


図91 中近世墓 F - a 群 (433~438号墓)

438号墓は、 $0.59m \times 0.52m$ の墓壙で、その平面形がほぼ円形と言える。墓壙内には、床面より15cm程のところで、大きさ30cm前後で厚さ10cmの石があり、そのやや上に大きさがほぼ同じだが厚さが20cmの石がある。これらは、床面より浮いてるので上方から落ち込んだものと思われるが、2石とも地上に露出していたかは不明である。

434.437号墓は、火葬墓A類である。

434号墓は、棺台が南北に各々2石ずつ、その中央に1石という配置であるが、検出時にはすでに露出しており、後世の里道造成時の削平を受けた可能性もある。

437号墓は、墓壙の規模が $0.86m \times 0.65m$ と小規模な部類である。北側には、被熱を受けた石が2石あり、棺台として利用されたものが、片付け後置かれたものと思われる。また、この石の周辺に焼骨が集中しており、石と共に置かれた可能性がある。

436号墓は、土葬墓B類である。墓壙は規模が $0.96m \times 0.40m$ で平面形が長方形で、木質が残存した鉄釘が出土しており、その配置から $0.65m \times 0.25m$ の木棺が復元できる。

(2) F-b群(439-446号墓)

この墓群は、東西にほぼ列をなして並んでいるが、石組がほとんど残存しておらず、その規模等は不明である。

439～444号墓は、石組を全く検出しておらず、墓壙のみの検出である。445号墓は446号墓に切られており、石組を残存していない。446号墓は北東角の石組を残しており、石組には石仏1体および水輪1基を再利用しており、墓壙からも水輪が1基出土している。

439.441号墓は、土葬墓A類である。441号墓は、墓壙内の南側に20cm前後の大きさの石が4石塊って検出されたが、石囲い状のものであったかは不明である。

440号墓は、被熱痕跡がなく火葬墓C I類である。

442～445号墓は、火葬墓A類である。

442号墓は、墓壙内の北側に1石、南側に3石を東西に並べて、棺台が配置されている。棺台の間には、浅い落ち込みが見られるが、煙道的な性格を持つかどうかは不明である。

443号墓は、20cm前後の石をやや中央に寄せて東西に2石配し、棺台としている。これらの石は、床面より浮いており、火葬後の片付けの際に一度除去したと思われる。444号墓は、被熱した石が西側に1石見られ、本来は棺台として使用されたものと思われる。東側には、焼骨と炭化材が集中しており、片付け後に置かれたと思われる。443.444号墓は、旧地形に沿って造られたと考えられ、主軸を周囲の墓とは違えて東に70～80°前後振っている。両墓は、南北に前後して隣り合っていること、同一方向を示すことから何らかの関連性が考えられる。

445号墓は、棺台が1石のみであるが、南側を446号墓に切られており、本来は南北に2石置かれていた可能性が高い。

446号墓は、土葬墓B類である。墓壙の規模は小サイズで、木質が残存した鉄釘が全体に北側に寄つて17本出土しており、その配置から約 $0.55m \times 0.25m$ の規模の木棺が推定できる。

(3) F-c群(447-451号墓)

この墓群は、F-b群の南側および火葬場群の北側に位置している。いずれも、墓壙のみの検出であり、石組の規模等は不明である。

447.449～451号墓は、土葬墓A類である。450.451号墓は、両者伴 $0.6m \sim 0.7m$ 前後の平面が円形の



図92 中近世墓 F - b 群 (439~446号墓)、F - c 群 (447~451号墓)、F - d 群 (453~457号墓)

墓壙内に、北側を除く3方に石囲い状のものが造られている。その石囲いからは、焼骨や炭などの出土は見られない。また、451号墓には、その石囲いの直上南側に、30cm前後の石が覆うようにあった。これに良く類似した墓として、539号墓が挙げられる。

448号墓は、土葬墓B類である。墓壙の規模は1.32m×0.55mと、長軸が約2mと約1mとに分かれ土葬墓B類の中では中間的な規模である。また、18世紀代後半の波佐見磁器碗（図110-36）が出土していることも、唯一のものである。なお、鉄釘が出土していないが、磁器碗が傾いて床面より10cm前後浮いていることから上方から落ち込んだものと見られるので、鉄釘を使用しない木棺であった可能性が高い。

（4）F-d群（452-458号墓）

この墓群は、F-b群の西側に位置し、F群の西端にあたる。石組は、他の墓群と違い、北東から南西に向けて並んでおり、等高線に直交する。

452～454号墓は墓壙が切り合っており、452号墓の墓壙上面には、石組が残存しているが、墓壙とはわずかにずれている。しかも、452号墓の石組の南辺を北辺に利用しているところから、下部の墓壙とは一体ではなく、石組が再整理されたものと考えられる。454号墓の石組はわずかに南辺が残存しているが454号墓に切られている。455号墓は石組をほとんど残しておらず、その規模等は不明である。

456号墓～458号墓は、墓壙を伴わないもので、石組が隣接しており、東辺を揃えている。いずれの石組も、石仏を再利用している。これらの石組は、残存状況から集石遺構の可能性も考えられる。

452～454号墓は、火葬墓A類である。これらは、全て1ヵ所で切り合っており、453号墓→452号墓→454号墓の順で造墓されている。3者は、墓の構造として棺台を持たない点で共通しているが、微細な相違点が存在する。墓壙の規模では、454号墓が0.61m×0.57mと最小で、他の2者はほぼ同規模といえる。また、深さでは452号墓が0.24mと最深で、他が約0.10m前後である。なお、いずれの墓の埋土にも焼骨が含まれているが、集中して置かれているのは454号墓のみである。

455号墓は土葬墓A類である。墓壙の南側でやや2段掘りになっており、埋土の堆積状況から見ると、2基の墓が切り合っている可能性も考えられるが、埋土に顕著な違いがなく、その判別は出来なかった。

（5）F-e群（459-473号墓）

この墓群は、F-c群の南側に位置し、西半部が炭盛土に覆われる。ほとんどのものが石組を消失しており、墓壙が検出されている。

459.460.462.464.465号墓は、石組が全く残存しておらず、461号墓は、石組の南半部の一部を残存するがその規模等は不明である。463号墓は、墓壙上に石組を残存するがその規模等は不明である。この墓群では、墓壙の切り合いはない。

459～462.464.465号墓は、土葬墓A類である。459号墓は、火葬場2に切られており、その正確な深さは不明であるが、約0.25m程度であったと思われる。また、459.460号墓は、規模的には類似しており、東西に並び合っていることから、何らかの関連性が考えられる。462号墓は、墓壙の北壁に10～20cm前後の石が7石見られるが、全てが床面より10cm前後浮いており、原位置であるかは不明である。464号墓は、20cm前後の石が東西に分かれているが、全て5cm前後浮いており、原位置であるか不明である。しかし、それぞれの石の下には、10cm前後の小さな石が咬ませるようにあったところからすると、石囲い状のものであった可能性もある。

463号墓は、火葬墓A類である。墓壙内の西側に、焼骨が集中しており、片付け後置かれたものと思

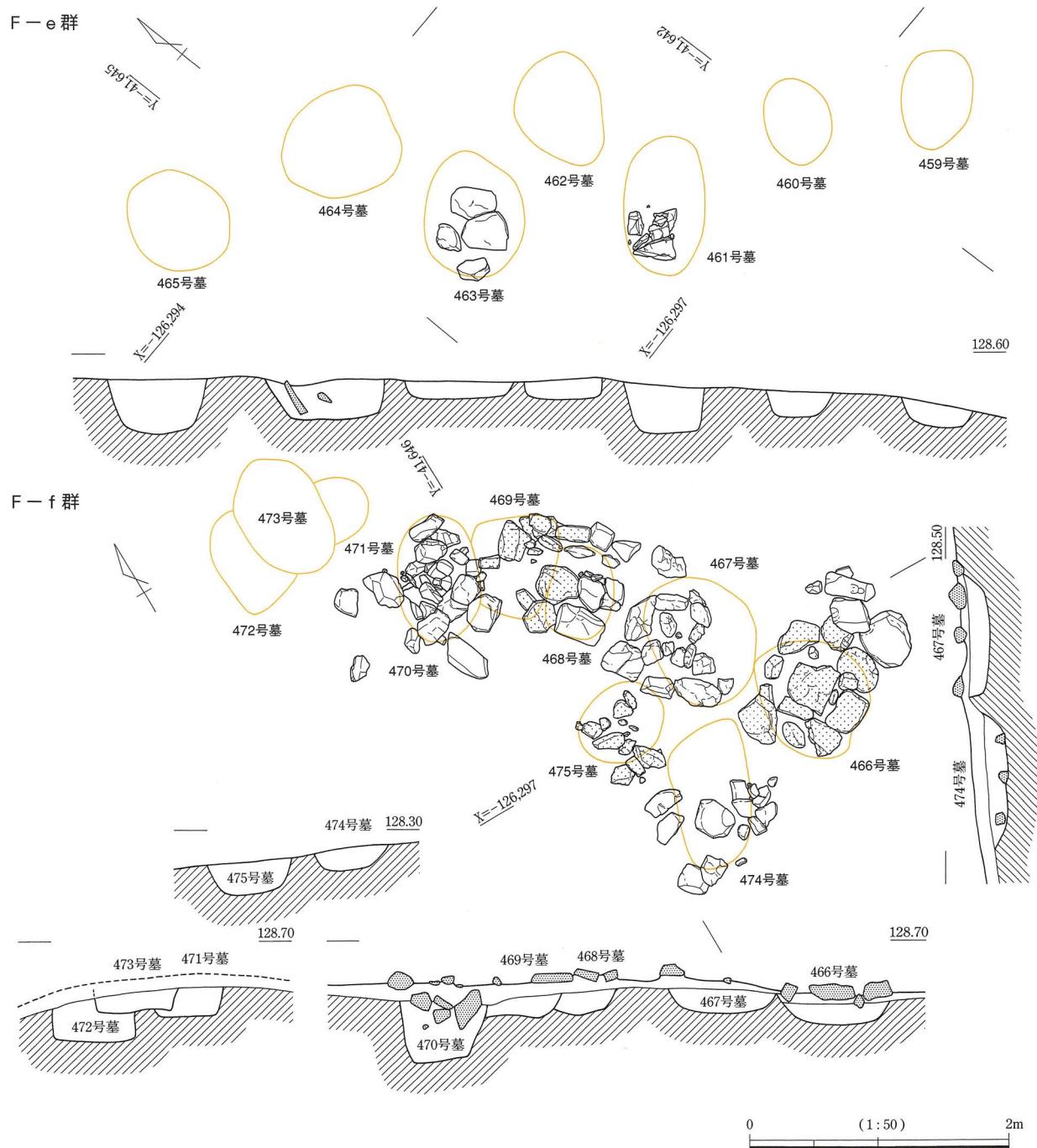


図93 中近世墓 F-e 群 (459~465号墓)、F-f 群 (466~475号墓)

われる。

(6) F-f 群(466-473号墓)

この墓群は、F-e 群の南側に位置し、西端が炭盛土に覆われていた。ほぼ列をなして並んでいる。466~470号墓は、石組をほぼ接しており、466.467号墓および468.469号墓は、それぞれの石組の北辺を揃えており、470号墓が辺を違えている。466号墓は、ほぼ石組を残存しており、中心に平らな石を置いていることからすると、地輪が座っていた可能性がある。467号墓は石組の北東部を欠失するが中心部に石仏の座っていた痕跡が窺われる。467号墓は、石組と墓壇の配置からすると、本来、北西角の石が北辺をなす石と考えられ、466号墓が造られた時点で造り直されたと考えられる。468.469号墓は、墓壇と石組の切り合いが逆転しており、468号墓の石組は469号墓の石組が組まれた後に追加修正されたも

のと考えられる。470号墓は469号墓を切っており、石組の辺を違えている。

471～473号墓は石組が全く残存していなかった。473号墓が471.472号墓を切っている。474号墓は、石組の北半部を欠失しており、炭盛土に覆われていた。475号墓も、炭盛土下層から検出し、石組がわずかに残存していたが、その規模等は不明である。石組の残存状況から、474号墓は466号墓に、475号墓は476号墓に切られている。

次に墓壙について記述する。

466.467.473.474号墓は、火葬墓A類である。466.467号墓は南北で並び合っており、棺台を有しないこと、墓壙の規模等で類似性が見られることから、何らかの関連性が考えられる。473号墓には、長さ30cm前後の被熱した石が1石のみあり、棺台として使用された可能性もある。474号墓は、1.11m×0.58mの長方形の墓壙に、20cm前後の石を南北に配し棺台としている。

468.469号墓は、共に火葬墓C類で、東西に並び合っており若干切り合っている。468号墓は、埋土に多量の炭と若干の焼土が混在しているが、被熱痕跡が見られないことと、墓壙の規模が0.73m×0.49mと小さいことから、火葬墓A類とはせずに火葬墓C II類とした。一方、469号墓は多量の炭および焼骨が混在しているが、これもほぼ同様の規模であることから火葬墓C I類とした。

470.471.475号墓は、土葬墓A類である。470号墓は、墓壙の上層に20cm前後の大きさの石があり、石組の石が落ち込んだ可能性もある。埋土の堆積では不明であるが、木棺が据えられていた可能性も否定できない。471号墓は、径0.51mの円形の墓壙で、床面に10cm前後の川原石が検出された。

472号墓は、0.78m×0.63mのやや円形の墓壙で、埋土の下層で焼骨が少量検出された。焼骨片は細片ではあったが、下層に見られることから火葬墓B II類と判別した。

(7) F-g群(476-491号墓)

この墓群はF-d群の西側にあたり、西端に位置する。墓壙が切り合い塊状になっているものと、等高線に直交し列をなすもの、等高線に沿って列をなす3グループに分けることができる。

まず、477号墓～483号墓は、石組の残りが悪く規模等が判るものは478.481号墓のみである。墓壙の切り合いで見ると、477号墓が478.480.482.483号墓に、479号墓が480号墓に、482号墓が481号墓に、それぞれ、切られている。石組と墓壙の対比から、482号墓の石組の南北両辺および478号墓の東辺が確認され、478号墓状の石組は、石を追加して造られた墓壙を伴わないものと考えられる。この造り直された石組の中心部が平らにされていたことから、そこに地輪が座っていた様子が窺われる。

次に、484号墓～488号墓は、北東から南西にかけて主軸方向に並ぶもので、484号墓は、石組の約1/3が残存しており、石仏が2体再利用されていた。486号墓は石組の北半部が残存していた。中心部に石仏が立っていた。485号墓は、石組がほとんど残存していなかった。487.488号墓は、488号墓が切っており、487号墓の石組の北半部が残存していた。石仏が1体、石組に再利用されていた。

さらに、489号墓～491号墓は、辺を揃えていないが向きが揃っている。489号墓は石組の北東角および西辺の一部を残している。490.491号墓は、墓壙をもたないので、490号墓は、石組の北半部を消失し、491号墓は、南西部を崩落していた。

476.482号墓は、火葬墓B類である。476号墓は、顕著な墓壙を掘削せずに、径約0.5m程度の範囲に焼骨の細片が散布されており、B II類である。482号墓は、瓦質茶釜（図112-2）を藏骨器としたB I類である。墓壙検出時には、底部のみしかなかったが、493号墓の石組を検出した時点で出土していた口縁部の破片が接合することが判った。よって、493号墓の石組造成時に削平を受けていた可能性が考

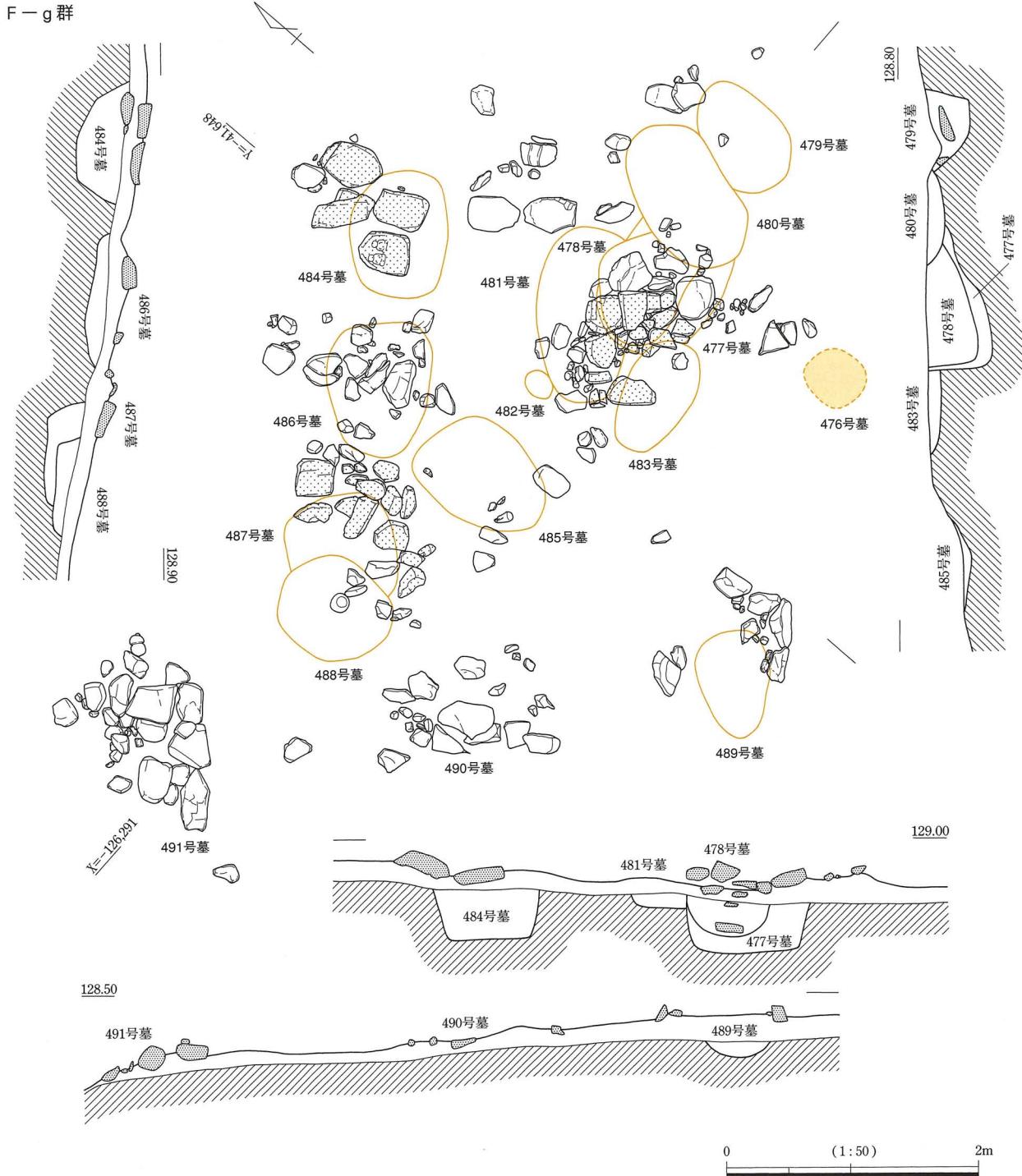


図94 中近世墓F-g群 (476~491号墓)

えられる。焼骨は、蔵骨器の底面より数cm浮いた状況であったので、土を充填してから焼骨を置いたと思われる。

477.479号墓は、土葬墓A類である。477号墓では、埋土内から少量の焼土・炭・焼骨が出土しているのは、火葬墓C類である481号墓を切っているためと思われる。なお、480号墓に切られているため正確な規模は不明であるが、約1.2m×0.9mのやや方形の墓壙が推定できる。墓壙内からは、鉄釘が1本出土しているが、その用途は不明である。479号墓は、20cm前後の石が5石床面より10~20cm前後浮いた状況で検出した。これらを落ち込んだものと考えると、木棺等が据えられていた可能性も考えられる。

478.480.484～488号墓は、火葬墓A類である。478号墓は、棺台として東西に20cm前後の石を3石配し、その間には10cm前後の石を東西に配している。そして、まとまった量の焼骨が、棺台の間にそれよりやや上のレベルに集中している。この墓も、火葬後の墓壙内の片付けや拾骨の状況を良く表す、一例と言える。

480号墓は、墓壙のほぼ中央に、被熱した長さ25cm前後の石と、焼骨が集中して見られる。石は棺台に使用されたものと考えられ、火葬後の片付けの一端を示すものである。

484号墓は、墓壙の深さが0.36mあり、墓壙には明瞭な被熱痕跡が見られない。ただし、上層だけであるが焼骨・炭が混じっており、墓壙上面の北側には被熱した30cm前後の大きさの石が1石のみある。よって、この墓の性格は、焼骨と棺台に使われたと思われる石の存在により、火葬墓A類と考えた。しかし、焼骨が上層にしか見られないことからすると、片付けの状況が異例のものであったか、2度以上の火葬が行われた可能性があるかもしれない。また、今となっては判別不能であるが、火葬墓と別の土葬墓が切り合っていた可能性等も完全には捨てきれない。

485.486号墓は、両者ともに棺台に使用されたと考えられる被熱した石が1石ずつしか存在していない。486号墓の方は、墓壙内の北西端にその石が見られ、石の下でまとまった量の焼骨が出土した。

487.488号墓は切り合っており、1辺、約0.9m～1.0m前後のやや方形の墓壙で類似している。

481.489号墓は、火葬墓C類である。481号墓は、埋土内に焼土・焼骨・炭が混在しているが、明瞭な被熱痕跡は認められない。焼土が見られることから火葬墓A類の可能性も考えられるが、墓壙の規模が約1.4m×0.8m、深さ0.1mと異例だが、火葬墓C I類とするのに留めた。489号墓も同様で、焼土・炭が混在するが明瞭な被熱痕跡は認められない事と、墓壙の規模が0.87m×0.54mと小さいため、火葬墓C II類と判別した。

(8) F-h群(492-497号墓)

この墓群は、火葬場群の南側に位置し、炭盛土に覆われていた。列をなさず点在していた。

492号墓は、火葬場3が埋没後造られており、墓壙を伴わない石組のみのものである。長軸方向が正面とすると東向きの墓になる。中心に地輪が座っていた。493.495号墓は、墓壙のみの検出で、石組は残存していない。494号墓は、石組の北西角を残存し、496.497号墓が、南北方向に並ぶもので、いずれも、石仏を石組に再利用している。

493.495号墓は、火葬墓C II類である。両墓とも、埋土は炭が混在している。

494号墓は、火葬墓A類である。墓壙は、約1.3m×0.87mの円形で、20～30cm前後の大きさの石を南北に3石配し、棺台としている。焼骨は、1層のみに見られる。

496.497号墓は、南北に並んでおり、土葬墓A類である。墓壙の規模は、496号墓が0.93m×0.67mで、497号墓が1.03m×0.52mと、やや後者の方が大きく、平面形が共に橢円形である。墓壙内には、両者共に10～50cm前後の大きさの石が10数石見られ、落ち込んだものと思われる。埋土の堆積を正確に観察できなかったが、多数の石が落ち込んでいる状況から考えると、木棺等の存在の可能性も無視できない。

以上の様にこれらの墓は、墓壙の規模・形態・構造の点からかなりの類似が指摘でき、何らかの有機的な関連性が認められる。

(9) F-i群(498-513号墓)

この墓群は、F-f群の南側に位置し、火葬場群の西側にあたる。ほとんどの墓が炭盛土に覆われて

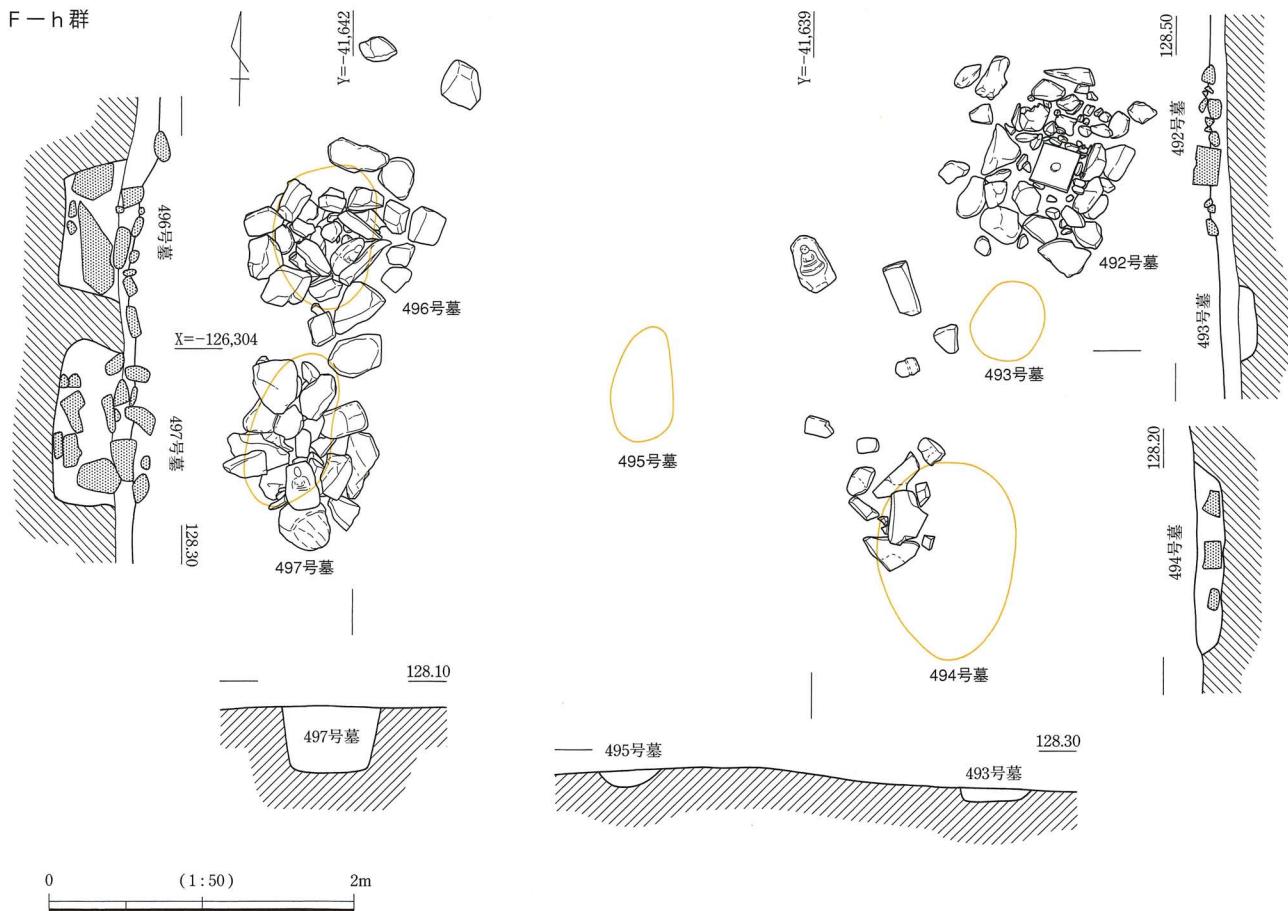


図95 中近世墓F-h群(492~497号墓)

おり、時期的な観点からも注目すべき墓群である。

498号墓は、火葬場2に切られており、墓壙のみの検出である。499号墓は、石組の南半部を残存しており、五輪塔の部材を転用していた。500号墓は石組のみのもので、中心に石仏が2体立っており、石組にも石仏が転用されていた。501号墓は、'67年当時に掘削され、東辺の石組が検出されており、五輪塔の部材が転用されている。墓壙は、途中までの掘削がされており、今回、石組の西辺を検出し、火葬墓であることを再確認した。502号墓は、石組の南辺を503号墓に切られていた。503号墓の石組は、502.506号墓の石組を切っており、中心部に石仏が立っている。前面には、ほぼ石組の幅の石を1個置いている。この石は、一見すると、この石組に伴うものと考えられたが、詳細に観察すると、後世の立石1に伴うものであることが判明した。504号墓の石組は、中心部に石仏が立っていた。墓壙との整合性で北辺が縮小して造り直されたと考えられる。

なお、503.504号墓の石組の上には、立石1(図104参照)の石が積まれていた。

505号墓は、石組がほぼ完存しており、中心部に石仏が2体立っていた。墓壙と対比すると、石組の規模が横長なため、上下完形が不成立と思われ、石組の造り替えが行われたと考えられる。

506~508号墓は、墓壙を伴わないもので、506.507号墓の石組は、周縁部のみが残存し中心部が消失していた。508号墓は石組が完存し、中心には石仏が立っていた。

506号墓~513号墓は石組がほとんど残っていなかった。

なお、505号墓の南側および504号墓の西側の配石は、2基の墓壙を伴わない石組のみの墓になる可能性があろう。



図96 中近世墓 F-i 群 (498~513号墓)

498.499号墓は、土葬墓A類である。両墓とも上層に炭が若干混在しているが、炭盛土・火葬場2の影響であると考えられる。また、498号墓は、火葬場2に切られているため、実際の深さは40cm前後であったと思われる。そうすると、両墓は東西に並び合っていることと、墓壙の規模などから何らかの関連性が窺われる。

501～505.509～513号墓は、火葬墓A類である。501号墓は、調査時からすでに窪んでおり、'67年に調査されたものと考えられる。その時の記録によると、銭貨6枚と鉄釘が8本出土している。502号墓は、墓壙の北側に寄せて南北に、長さ30cm前後の石が2石配して、棺台としている。その間には15世紀代の土師器皿（図110-5）が床面に置かれてあった。503号墓は、南北に3石の棺台が配されているが、中央のものは被熱のため2つに割れている。南北の2石がある床面には被熱痕跡がないため、これらは原位置の可能性が高い。504号墓は、墓壙の規模が1.03m×0.70mで、平面が長方形である。墓壙内には、20cm前後の大きさの石が南北に3石配し棺台としている。これらの中で、502.503号墓は南北に並んでおり、特に、墓壙の深さが0.1m前後と共通しており、何らかの関連性があると思われる。

また、503.504号墓は、東西に並び合っており、墓壙の深さ・形態は違うが、棺台が3石置かれていることなど共通点がある。よって、502～504号墓は、それぞれ何らかの関連性をもっているものと思われる。

505号墓は、墓壙内を10cm前後掘り窪め溝にしており、煙道の役目をもっていたと思われる。510号墓は、墓壙の規模が0.85m×0.69m、深さが0.41mで長方形の墓壙であり、深い部類に入る。511号墓は、被熱痕跡が見られないが、埋土に焼土が混在していることと、墓壙の規模が0.99m×0.70mであることから、火葬墓A類と判別した。512号墓は、墓壙の北側が若干2段掘りになっている部分がある。513号墓は、墓壙検出時にはすでに床面が露出しており、1石のみ棺台として使用された石が確認できた。505～513号墓は、墓壙の規模・形態では特に顕著な類似性が見られないが、一帯全てが火葬墓であることが注目を惹く。

(10) F-j群(514-523号墓)

この墓群は、F-i群の西側にあたり、ほぼ等高線に沿ってならんでいた。東端部が炭盛土に覆われていた。

514号墓は、墓壙を伴わない石組のみのものである。515号墓は石組の周縁のほとんどを欠き、516号墓は、石組がほぼ完存しており、中心部に石仏が座っていた痕跡がある。墓壙との対比から、石組の西辺が造りなおされ縮小されたと考えられる。

517号墓は518号墓に切られており、石組の残存具合と墓壙の規模等で見ると、517号墓上の石組は518号墓が造られた後に、墓壙を伴わないものとして石組のみのものが造られたと考えられる。

519号墓の石組は東辺のみを残存し、520号墓の東辺と揃えており、520号墓が519号墓を切っている。521号墓～523号墓は、墓壙のみの検出である。

515号墓は、火葬墓C I類である。515号墓は、墓壙の埋土には焼骨や多量の炭が見られるが、被熱痕跡が認められることと、墓壙の規模が0.67m×0.64mと小型であることから、火葬墓A類とはしなかった。

516.518～523号墓は、火葬墓A類である。516号墓は、規模が1.41m×0.90m、深さが0.29mを測る長方形の墓壙で、大型のものである。墓壙の床面・壁面とともにかなり被熱している。518号墓は、墓壙には明瞭な被熱は見られないが、焼土塊が多量に見られることから火葬墓A類と判別した。墓壙は、規



図97 中近世墓F-j群 (514~523号墓)

模が $1.33\text{m} \times 0.75\text{m}$ 、深さが 0.10m を測るやや不整な楕円形のプランをなし、516号墓より一回り小さい。両墓は、若干主軸を違えてはいるが南北に並び合っていることと、周囲に火葬墓が存在しないことから見ても何らかの関連性があると思われる。

519.520号墓は南北に並び合っているが、わずかに切り合っており520号墓が新しい。また、墓壙の平面形で比較すると、前者は長方形、後者は円形と差異が見られる。ただし、墓壙の規模は近似しており、その配置から何らかの関連性が認められる。また、520号墓の墓壙南側には鉄釘が1本出土しており、焼骨の集中が見られる。

521号墓は、被熱した石が墓壙内から検出されていることから、やや墓壙の規模が小さいが火葬墓A類と判別することにした。

523号墓は、522号墓をわずかに切っているが、南北に並び合っていることから関連性が想定できるが、後述するように若干差異が認められる。522号墓は、北側で棺台に利用された石が3石あるが、東側のものが地山の石であり、他の2石は床面より浮いてるため片付けの際に動かしたものと思われる。一方、523号墓には棺台がない。また、墓壙の主軸は522号墓が西に 30° 、523号墓が東に 48° それぞれ振っており、方向を違えている。

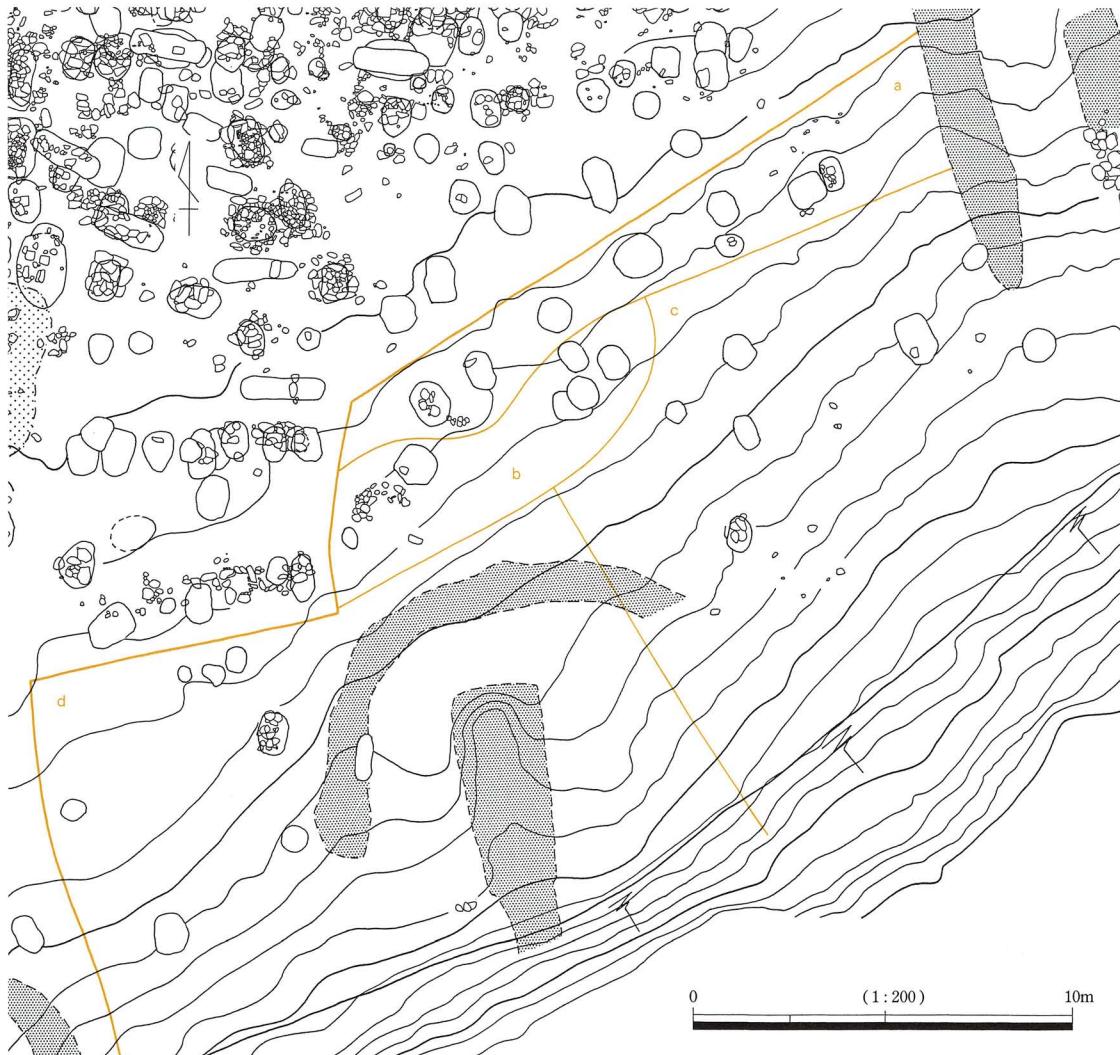


図98 中近世墓小区分 (G - a～d 群)

8. G群 (図98.99)

この墓群は南半部の東側に位置し、5号墳の東側および4号墳の北側にあたる。石組がほとんど残っておらず、墓壙も南に行くほど希薄になる。列の並び等からa～d群の4区分できる。

(1) G-a群(524-531号墓)

この墓群は、D-f群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って並んでいた。石組が残存していたのは、531号墓のみで、527号墓の墓壙上面には空風輪が1基残存していた。

当群の墓壙は、全て土葬墓A類である。これらは、大きく言って地形に沿って北東から南西に造られており、それぞれ何らかの関連性をもつと思われる。

524号墓は、規模が $0.89m \times 0.54m$ で、長方形の墓壙である。墓壙内には20cm前後の石が6石見られるが、全て床面より浮いており、これらが落ち込んだものとすれば、木棺の存在が指摘できる。また、石には被熱した石が1石のみあり、炭や焼骨などが見られないため火葬墓ではないと思われ、火葬墓A類の棺台等の転用が考えられる。525号墓は、規模が $0.91m \times 0.87m$ 、平面形が長方形の墓壙である。床面より20cm程度浮いた状況で、10cm前後の石が数石見られる。524.525号墓は、東西に並んでおり、その位置から何らかの関連性が考えられる。また、検出面での切り合いは確認できなかったが、524号墓の西側の上端が若干歪があるので、525号墓の方が新しいと思われる。

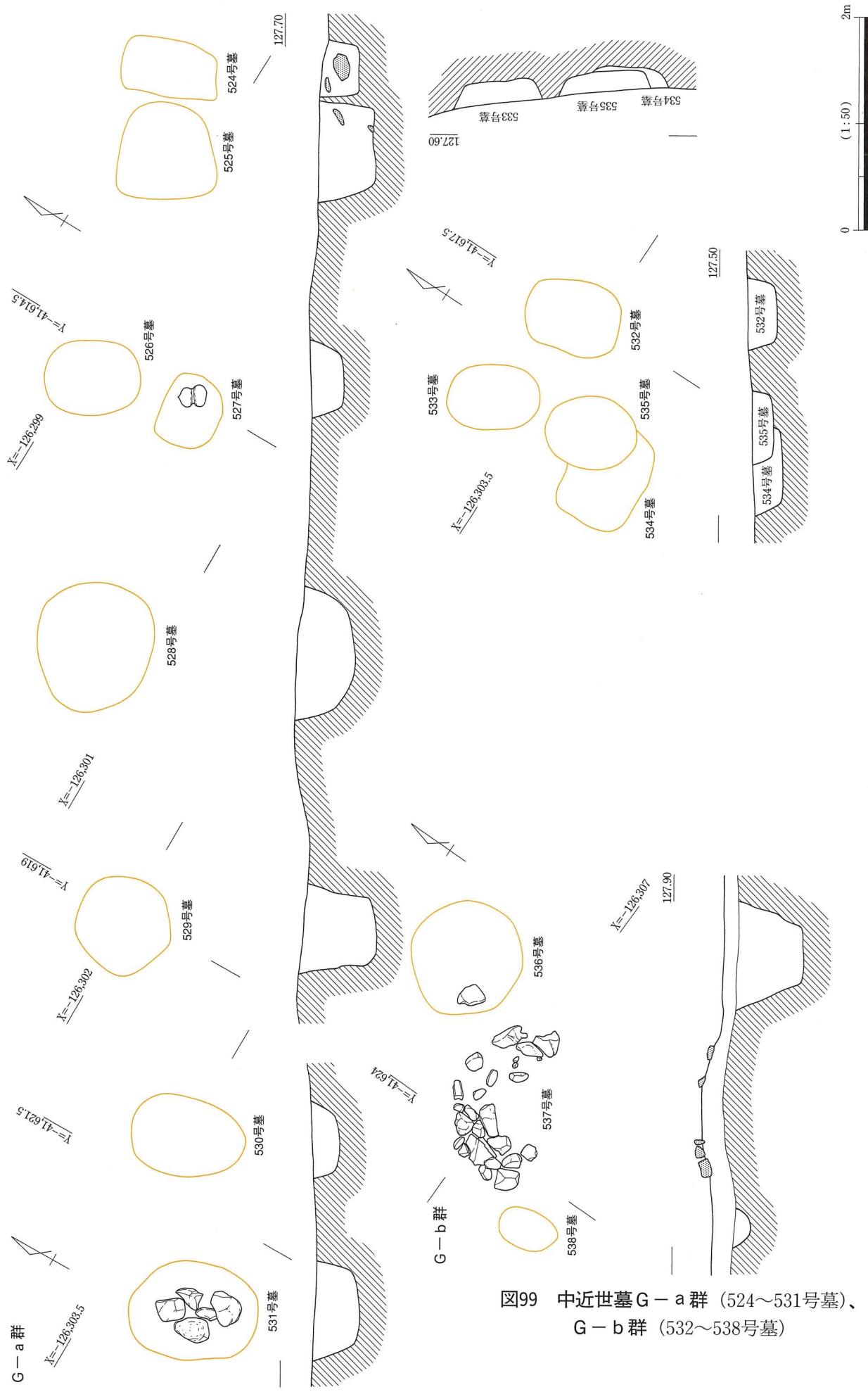


図99 中近世墓G-a群(524~531号墓)、
G-b群(532~538号墓)

526.527号墓は、墓壙の規模等がそれぞれ異なっているが、周囲に関連づけられる墓もないため、何らかの関連性がある可能性も考えられる。527号墓からは、墓壙内から3本の鉄釘が出土しているが、木棺等の復元は不可能である。

528号墓は、規模が $1.22m \times 1.10m$ 、深さが $0.55m$ の平面形がほぼ円形の墓壙である。529号墓は、規模が $0.90m \times 0.88m$ 、深さが $0.71m$ の平面が円形の墓壙である。両墓には、墓壙の規模・深さに差異があるが、位置関係から何らかの関連性が考えられる。

530.531号墓も、墓壙の平面が楕円形であるが、規模・深さで異なっており、先の528.529号墓と同様な関係があるかもしれない。531号墓は、墓壙内の埋土が北からなだれ込んだ堆積をしており、木棺等が存在していた可能性が考えられる。

(2) G-b群(532-538号墓)

この墓群はG-a群の南側に位置し、ほぼ等高線に沿って造られていた。ほとんどのものが、石組を残存していない。

532~534.536.538号墓は、墓壙のみ検出しており、537号墓は石組のみの検出である。

当群の墓壙も、火葬墓はなく、不明瞭な538号墓を除き、他は土葬墓A類である。

532号墓は、墓壙の検出面で鉄釘が1本、銭貨が6枚重なった状況で出土した。墓壙プランが確認された段階での出土で、確実にこの墓に伴うかどうかの判断は難しいが、無視できないものと思われる。

532.533.535号墓は、墓壙の長軸が約 $0.9m$ 前後であること、主軸が西に $20\sim30^\circ$ 前後と共通性がみられ、何らかの関連性をもつ可能性がある。また、534号墓は、これらと主軸を違え東に 76° 振っている。

536号墓は、径 $1.04m$ の円形の墓壙であるが、上端に比べ下端が狭く、擂鉢状の断面形状をなす。

538号墓は、墓壙の規模が $0.56m \times 0.38m$ と小さく、また深さが $0.17m$ と非常に浅いため、墓であるかは不明である。

(3) G-c群(539-545号墓)

この墓群は、4号墳と5号墳の間にあり、墓壙が散在している。539号墓は、墓壙上面に水輪が1基残存していた。5号墳の区画溝を切っている。545号墓は、石仏と水輪が石組に転用されていた。

当群の墓壙も、全て土葬墓A類である。それぞれ、特徴を示す。

539号墓は、径約 $0.7m$ の円形の墓壙内に、30cm前後の大さの石を北側と南側に配してL字状の石囲いを構築している。この石囲いの上には、十分な記録が出来ていないが、確実に40cm前後の石が載っていた。この中からは、焼骨や炭等を検出していない。類例として、450.451号墓が挙げられる。

541号墓は、規模が $1.38m \times 0.94m$ 、深さが $0.42m$ の長方形の墓壙である。墓壙内には、西側に30cm前後の大さの石が横位にして床面に据えられており、その南側に鉄釘が2本出土している。西側に立てられるようにあった石は、先の405号墓と類似している。また、埋土の中央部が落ち込むような堆積を見せており、木棺が存在していた可能性は否定できない。

545号墓は、墓壙内の上層に20cm前後の石が数個見られ、地上の石組の石が落ち込んだ可能性も考えられる。

(4) G-d群(546-553号墓)

この墓群は、3・4号墳の間に位置し、E-k群の南側にあたる。

石組の残存しているものは、549号墓のみで、他は墓壙のみ検出している。550号墓は4号墳の区画溝を切っている。

546.549～553号墓は土葬墓A類である。

546号墓からは、墓壙内から銭貨が2枚床面より浮いた状況で出土している。549号墓は、墓壙内の上層に10～20cm前後の石が、南北に分かれて検出している。これらの石が落ち込んだものであるのか、原位置であるのかは判断がつかなかった。また、549号墓と550号墓は主軸をほぼ北に向いていること、墓壙のプランが楕円形で共通していること等から、何らかの関連性があると思われる。

552号墓は、規模が $0.65m \times 0.54m$ の楕円形の墓壙に、15世紀代の土師器皿（図110-6.8）が2点床面より浮いた状況で出土している。これらは、形を保って上下に傾いた状況で出土しているため、上から落ち込んだ可能性もある。

553号墓は、墓壙の規模が $1.08m \times 0.85m$ で、楕円形の平面形をなすものである。墓壙内から、木質が残存した鉄釘が13本出土している。その配置から復元される木棺は、1辺 $0.40m \times 0.45m$ の方形で、墓壙に比してかなり小さめであり、一考を要する。ただし、その配置からすると、木棺はほぼ中央に置かれたようである。

547.548号墓は、火葬墓C II類である。両墓とも、埋土は炭層のみである。

9. H群（図100～102）

この墓群は、南端に位置し、火葬場群の南側に当たる。等高線に沿って列をなす墓群が、北半部にあり、南半部では散在している。その列の並び等からa～g群の7区分している。

(1) H-a群(554-557号墓)

この墓群は、炭盛土の南東部に位置し、ほぼ等高線に沿って並んでいた。

554号墓の石組は、北辺が残存しており、東西辺がわずかに残る。555号墓～558号墓は、墓壙のみ検出している。



554は火葬墓A類であり、556号墓は火葬墓C II類である。

555号墓は、土葬墓B類である。墓壙内には、木質が残存した鉄釘が38本出土しており、その配置から $1.5m \times 0.35m$ の木棺が復元できる。この木棺が推定される範囲内の西南端隅から、床面より5cm前後浮いた状況で、6枚重なった銭貨が出土している。この状況から判断すると、銭貨は木棺内に置かれていたものと推測できる。

図100 中近世墓小区分 (H-a～g群)

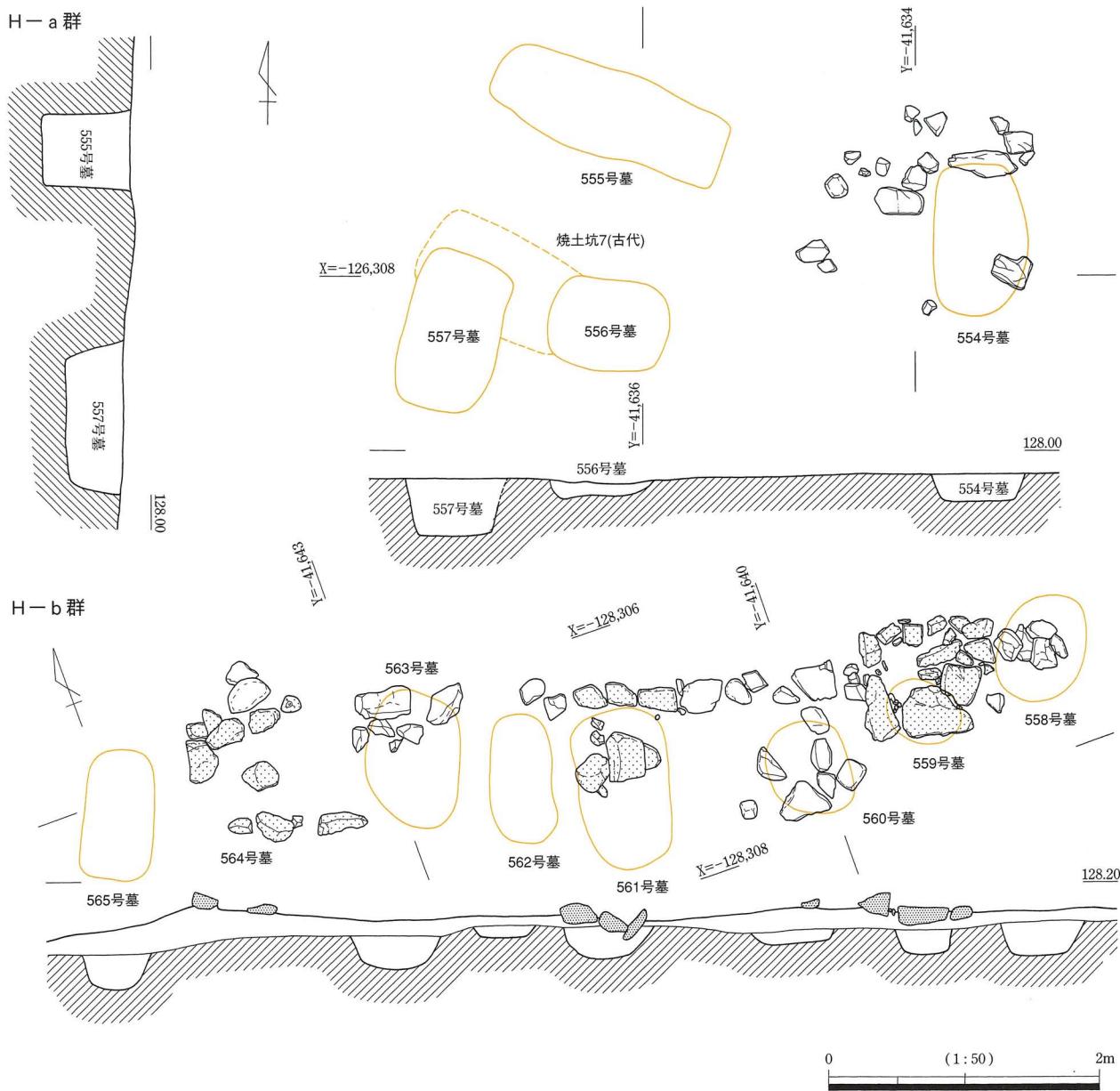


図101 中近世墓H-a群(554~557号墓)、H-b群(558~565号墓)

(2) H-b群(558~565号墓)

この墓群は、炭盛土の南側にあたり、等高線に沿って並んでいた。558号墓の石組は、中心部分のみ残存していた。559号墓の石組は558号墓に接して造られており、中心部を欠失していた。墓壙と石組との比較によると墓壙が小規模である。560号墓～563号墓の石組は、ほぼ北辺を揃えて造られているが、560号墓の南辺が確認できる以外は、石組がほとんど残存せず、規模等詳細不明である。564号墓は、石組のみ検出している。561号墓には掘削の痕跡が残っていた。565号墓は、墓壙のみの検出である。

558.561.562号墓は、火葬墓A類である。558号墓は、約0.7m前後の墓壙と小型の部類であるが、被熱痕跡が認められるため、火葬墓A類と判別した。561号墓は、20～30cm前後の石を南北に3石配置し、棺台としている。これらの棺台に使用された石は、ほぼ床面直上であることと、その部分に被熱痕跡がないことからかなり原位置に近いと思われる。だが、下層のみに炭・焼骨が見られることから、火葬後の片付けが行われたと思われる。562号墓は、規模が0.91m×0.46m、深さ0.08mの楕円形の墓壙であるが、明瞭な被熱痕跡が認められないが、埋土に焼土塊が混在していることから、断定はできない

が火葬墓A類の可能性が高いと思われる。

559号墓は、火葬墓B II類である。規模が $0.46m \times 0.33m$ 、深さが $0.19m$ の墓壙に焼骨が検出された。焼骨は、かなり細片のもので、土に混在する状況であった。

560号墓は、規模 $0.73m \times 0.61m$ 、深さ $0.10m$ の楕円形の墓壙に焼骨と多量の炭が充填していた。墓壙に明瞭な被熱痕跡が見られないことと墓壙の規模がやや小さいこと等から、火葬墓C I類と判別した。

563.565号墓は、土葬墓A類である。563号墓には、墓壙の上層に微量の炭と焼土塊が混じっているが、あまりにも微量であることと炭盛土の影響を考え、火葬墓とは判断しなかった。

(3) H-c群(566-572号墓)

この墓群は南北に並ぶものと、ほぼ等高線に沿って並ぶものがある。

566号墓～569号墓は、ほぼ列をなし並んでおり、石組の北辺を揃えていると思われる。

石組は完存しているものが多く、墓壙の規模や性格などから、E-a群と同様な石組が組まれていたと考えられる。571号墓の石組の中心には石仏が座っており、568号墓の石組には、石仏が背を上に向けて検出されたがこれも元々この墓に立っていたものと考えられる。しかしながら、石組と墓壙の整合性を見た場合に、同時性として捉えられるものかどうか判断しがたい。

571.572号墓も、前述の墓群と同様な石組をもつと考えられる。570号墓は、墓壙上面で石が検出されているが、回りの土が腐植土を含んでいたため、掘削が加えられていたと考えられる。

当群の墓壙は、570号墓のみが火葬墓A類で、他は全て土葬墓A類である。

566号墓は、規模が $1.13m \times 0.66m$ 、深さが $0.42m$ の長方形の墓壙である。墓壙内には、30～40cm前後の石が4石見られる。これらの石は、若干床面より浮いているので、これらが原位置なのかの判断は難しい。また、石は墓壙の幅より一回り小さく、上面の凹凸もそうなく、棺台であった可能性も捨てきれない。

567号墓は、規模が $1.29m \times 0.91m$ 、深さが $0.54m$ の長方形の墓壙である。墓壙内には、20～30cm前後の石が10数石見られる。これらの石は、若干床面から浮いてるものが多いが、その配置からすると、壁の四方を巡る位置にあたる石は、内側を意識して面を造っており、本来は壁に沿って石囲い状のものであったと思われる。この石囲い状の内側にある若干大きめの石は、床面に近いものもあり、原位置を保っている可能性もあるが断言はできない。北側の石の下には、床面直上に、鳥帽子（図156-1）が先を北に向けて、短刀（図121-1）が刃先を南東に向けてそれぞれ出土した。これらは、以上の出土状況から床面に置かれていたものと考えたい。

568号墓は、規模が $1.07m \times 0.79m$ 、深さが $0.43m$ の長方形の墓壙である。墓壙内には10～20cm前後の大きさの石が20数石、床面より10～20cm前後浮いた状況で見られる。これは、339～341号墓と同様に石組の石が落ち込んだものと思われる。また、落ち込んでいる石の大きさの共通性から、これらの墓と同様の石組が本来あった可能性も指摘できる。なお、石の落ち込みと考えると木棺が据えられていた可能性も挙げられる。

569号墓は、規模が $1.12m \times 0.74m$ 、深さが墓壙検出面から $0.28m$ の長方形の墓壙である。ただし、石組の石が落ち込んでいるため、本来の深さは約 $0.4m$ 程度はあったと思われる。墓壙内には、30cm前後の大きさの3石が、南北に床面から5cm前後浮いた状態で存在する。これらのうち、特に、両端の2石は川原石の滑らかな面を上にしており、棺台としての利用を考えても良いと思われる。北端の石の下



図102 中近世墓H-c群（566～572号墓）

には、床面直上に短刀（図121-2）が刃先を南に向けて出土した。これは、先の石が棺台であるならば、その前に置かれたものと思われる。

571号墓は、規模が $1.49m \times 0.84m$ 、深さが $0.60m$ の長方形の墓壙である。墓壙内には、50cm前後の大きさの石が南北に3石、ほぼ床面直上にある。だが、これらの石は上面のレベルが揃っていないことから、棺台であるかは判断を保留したい。これらの北西側の石下から、5枚の土師器皿（図100-9～23）が床面直上で出土した。また、墓壙内の北端と南端に、主に10cm前後の川原石が床面直上に置かれている。

572号墓は、規模が $1.28m \times 0.82m$ 、深さが $0.48m$ の長方形の墓壙である。墓壙内には、20～30cm前後の大きさの石が12石、床面よりやや浮いた状況で検出されている。これらは、前者と同様に浮いているのか原位置であるかの判断が難しい。これらの石を取り除くと、北東側にほぼ床面直上から鳥帽子（図156-2）は先を北にして、短刀（図121-3）が刃先を南にして出土した。鳥帽子は、一方が石に貼りつき、もう一方が床面に残されていた。石に貼りついた方の漆膜は、残存状況が非常に良かった。鳥帽子・短刀は、出土状況から判断すると石よりも先に置かれたものであるのは確かであるが、床面に置かれたかどうかは可能性に留めておきたい。

570号墓は、調査時にすでに窪みが見られ、そこに石が落ち込んでいるような状況であった。このことから考えると、'67年の発掘調査によって、掘削された墓の可能性が強い。従って、この墓は現状を留めていない可能性もあり、上の石組はそうであると思われる。埋土には、多量の炭、焼骨が見られるため、明瞭な被熱痕跡はないが火葬墓A類と判断した。

（4）H-d群(573-576.583)

この墓群は、H-b群の南側およびH-c群の西側にあたる。ほぼ列をなし並んでいる。石組は、全く検出しておらず、墓壙のみが出土している。

573号墓は、埋土の上層に、微量の炭が混在しているが、他に火葬墓を裏付けるもののがなく、土葬墓A類とした。特徴としては、墓壙の中央に深さ10cmの楕円形の小さな落ち込みがある。

574.576号墓は、火葬墓A類である。墓壙には、明瞭な被熱痕跡が見られないが、埋土の中層に焼骨・多量の炭が混在しており、規模からも火葬墓A類と判断した。上層には、被熱した30cm前後の大きさの石が1石のみあり、棺台として利用された可能性もあり、先の判断を補強するものである。576号墓は、墓壙内に2石の棺台が見られるが、床面より浮いていることから火葬後の片付けにより動かされたものと思われる。

574号墓は、規模が $1.68m \times 0.80m$ 、深さ $0.20m$ のやや不整な楕円形の墓壙である。埋土には多量の焼骨・炭が混在しているが、墓壙には明瞭な被熱痕跡が認められない。墓壙の規模が異例なものであることも合わせて、582号墓同様に火葬墓C I類と判断するのに留まった。

（5）H-e群(577-581.583-585)

この墓群は、H-c群の南側に位置し、ほとんどの墓は、墓壙のみを検出している。

581号墓は、唯一、この墓群で石組を検出している。

580号墓は、主軸を東西方向に向ける墓壙で、鉄釘の出土状況から木棺墓と考えられる。

577.581.585号墓は、土葬墓A類である。576号墓は、規模が $0.94m \times 0.91m$ 、深さ $0.46m$ の円形の墓壙である。581号墓は、墓壙内から銭貨が2ヵ所で床面より5cm前後浮いた状況で4枚出土している。銭貨の裏側には木質が付着してあるものがあり、何らかの木製品があったものと思われる。

585号墓は、墓壙内には微量の炭が見られたが、規模が小型であることも考慮に入れ、火葬墓とはしなかった。

578.582.584号墓は、火葬墓A類である。578.582.584号墓は、墓壙に明瞭な被熱が見られない。しかし、それぞれ炭・焼土・焼骨が混在していることと、墓壙の規模から火葬墓A類と判別した。583号墓は、墓壙に被熱が見られ、規模が1.25m×0.60mとやや長楕円形である。墓壙内には、南北に30cm前後の大きさの石を2石で棺台としている。

579号墓は、規模が0.74m×0.70m、深さが0.21mのやや不整な円形の墓壙をもつ。墓壙内には、多量の炭、焼骨が混在している。墓壙内からは、被熱したと思われる鉄釘が5本出土している。この被熱した鉄釘が問題であるが、墓壙の規模から考えると火葬墓C I類と判断した。

580号墓は、土葬墓B類である。墓壙内からは、木質が残存した鉄釘5本が出土しており、その配置から1.55m×0.35mの木棺が復元できる。

(6) H-f群(586-595号墓)

この墓群は、H-d群の南側に位置し、墓域の南西端にあたる。南西側は、後世のグラウンド造成時に削平されており、墓域がもう少し拡がっていたと思われる。ほとんどが、墓壙のみの検出であった。

594号墓には、墓壙上面に数個の石が残存していたが、石組の構造等は不明である。

590号墓は、石仏と火輪が石組に再利用されており、墓壙をもたないものである。

585号墓は、径約0.7mの円形の墓壙から13世紀後半から14世紀前半の土師器皿(図110-26~35)が個体数で11点出土している。調査の段階では、断面観察用の畦に隠れていたため、平面での検出が出来ず、土師器皿を何枚か取り上げた段階で認知した。残存した状況から見ると、土坑内に土師器皿が正置で幾枚か重なって置かれていた様な状況が推測できる。よって、墓というよりも、何らかの意図で埋納した遺構の可能性がある。

587.589.591.594.595号墓は、土葬墓A類である。

589号墓は、埋土内に炭・焼骨が混在するが、周辺に焼骨や炭が散在していたことと、40cm前後の大きさの石が落ち込んだような状況であったこと等から判断すると、混入した可能性があると思われたので、断定ができないが土葬墓A類と考えた。591号墓も同様である。また、両墓ともその堆積状況から見ると木棺等が据えられていた可能性もある。

594号墓は、規模が1.50m×1.20m、深さが0.40mのやや楕円形の墓壙をもつ。壁の立ち上がり、墓壙の規模・性格などから、262.528号墓との類似性がある。埋土内に、炭・焼骨が混在しているが、これは火葬墓A類である593号墓を切っているためと思われる。

595号墓は、規模が0.97m×0.86m、深さが0.55mの円形の墓壙をもつ。墓壙の断面形態がやや擂鉢状になっており、536号墓と類似している。

588.593号墓は、火葬墓A類である。588号墓は、592号墓に切られているため、全容が不明であるが、1石のみであるが被熱した石があるため、棺台を有していたと思われる。593号墓も、594号墓に切られており全容は不明であるが、焼骨が南側に集中しており、拾骨が行われたと考えられる。

592号墓は、土葬墓B類である。墓壙内からは、木質が残存した鉄釘が8本出土しているが、かなりまばらな分布があるので木棺の規模は断定できない。

(7) H-g群(596-601号墓)

この墓群は、最南端に位置し、3号墳の北側にあたる。西側はH-f群同様にわずかに拡がると思わ

れる。

いずれも、墓壙のみの検出である。

596号墓は、埋土内に炭が混在しているがあまりにも微量なため、火葬墓C II類とした。

597.598.601号墓は、土葬墓A類である。

597号墓は、規模が $1.11m \times 1.00m$ 、深さが $0.42m$ の円形の墓壙である。墓壙内には、木質が残存した鉄釘が13本出土しており、その配置から約 $0.6m \times 0.35m$ の木棺が復元できる。

598号墓は、599号墓に切られているため、正確な規模は判らないが約 $1.2m \times 0.9m$ のやや不整な長方形の墓壙をもつと思われる。墓壙内からは、鉄釘が5本しか出土していないが、埋土があまりしまりがないことからすると、木棺があった可能性が高い。

601号墓は、規模が $1.52m \times 1.37m$ 、深さが $0.68m$ の方形の墓壙をもつ。墓壙内から木質が残存した鉄釘が9本出土しており、確定は出来ないがその配置から約 $0.8m \times 0.55m$ の木棺が復元できる。また、埋土は中央部に落ち込んだような堆積をとっており、木棺があったことがほぼ確実である。墓壙の南西隅には、2点の土師器皿（図110-21.22）が破片で、床面より40~50cm前後浮いた状況で出土しており、上方から流れ込んだように推察される。この2点の土師器皿の1点はほぼ完形に接合できたが、他は約1/8の破片のみであった。

599.600号墓は、土葬墓B類である。

599号墓は、墓壙内から木質が残存した鉄釘が23本出土しており、その配置から約 $1.65m \times 0.35m$ の木棺が復元できる。600号墓も、墓壙内から木質が残存した鉄釘が16本出土しており、その配置から約 $1.75m \times 0.4m$ の木棺が復元できる。木棺が復元できる範囲の西端から、6枚重なった銭貨が床面より5cm前後浮いた状況で出土している。鉄釘よりも若干上にあるのは注意を要するものと思われる。

なお、銭貨は、紐状のもので6枚束ねてあり、下面に銭貨の大きさに棺材が残存していた。

以上、當中近世墓を墓群単位で概観してきた、それにより、様々な様相を捉えることができたと思われる。それらを包括的に見た場合に、大きくは4つの視点が挙げられる。

まず、第一に、墓群の構成を見てゆく上で、地上施設の石組と地下施設の墓壙がどのような対応関係をもつのかということである。

第二に、平面的に見た場合の墓群の構成と時間の推移を追って見た場合の構成では大きな差異が見いだせるのではないかということである。

そして第三には、ここでは断定的に行った墓壙の分類と葬法の問題を如何に整理するかである。

さらに第四には、石造物が原位置を保っていると考える場合のその年代を比定することができるかということであった。

これらの問題に関しては、第7章および第9章で詳細を述べることとする。

第5節 炭盛土および火葬場

ここでいう火葬場は、通常、墓壙を掘り、そこで一回限り火葬され、その後墓として上部に石組を伴うものである以外のものである。同一場所で何回も火葬が繰り返される場合で、しかも、墓としての機能を持たないものを、火葬場と定義することとする。しかしながら、火葬が繰り返し行われたかの実証は困難なものであるが、ここでは、これらの火葬場を覆う大量の炭や骨の盛土（以下、炭盛土と呼称する）が検出されており、それらの状況証拠により前述の定義が成り立つものと考えられる。

火葬場群は、7基の火葬場からなり、墓域の南西部にほぼ集中して造られている。それらを覆うような形で炭盛土が形成されている。

1. 炭盛土

炭盛土は、墓域の南西部に位置し、東西約17m、南北約9mの不整橿円形をしており、現況ではその中央部が南北に窪んでおり、その周辺が小山状に盛り上がり、周辺に行くに従ってその厚みを減じている。その堆積状況は図103に示す通りである。

まず、南北断面で見るならば、南半部で497.563号墓が造られた後に、火葬場4（8.9.18.19層）が掘られ、火葬場4から搔きだされた炭層がその南側に17層として堆積している。火葬場4上に堆積している炭層は火葬場2から搔きだされたもので、火葬場4が完全に埋まった段階の8層上面で一度整地されていることが判る。

炭盛土は、火葬場4上が最も堆積が高く、70cm程を測る。

次に、東西断面で見ると、東端で341号墓がまず造られ、その後火葬場3が造られ、そこから東側に搔きだされた炭層が11.12層として堆積している。火葬場3が埋まった後の15層上面に墓壙を伴わない石組のみの492号墓が造られている。なお、それらを覆う形で火葬場2から搔きだされた炭層が堆積している。火葬場2の西側の堆積状況を見ると、火葬場2を造った段階で立石1が西側に造られ、そのさらに西側に集石群があり、500号墓周辺がその集石群に当たる。また、火葬場2から搔きだされた炭層がそれらを覆い尽くしている状況が窺われる。

なお、500号墓は、立石1が造られた後であることが判る。

さらに、火葬場2の上層は、窪み状になっており、東西両側が盛り上がりを見せている。

断面に、'67年当時の掘削痕を確認している（1層）。

平面的に見た場合に、火葬場2～6が炭盛土に覆われており、火葬場1の南端の一部が炭盛土に覆われている。なお、火葬場7は、炭盛土の南側に位置し、これのみ、炭盛土の影響下にはない。

また、墓群をも覆い尽くしており、それらの石組は火葬場以外、取り扱われてはいない。

炭層は、最も厚みがあるところで67.5cmを測り、その堆積状況から火葬場2から搔きだされたものが最も多量であったことが判る。

炭盛土からは、人骨がコンテナに7杯、鉄釘395本、銭貨54枚が出土し、その他に土師器・青磁碗等がある。

なお、火葬場2およびその周辺の一部が'67年に調査が行われており、同様に鉄釘や銭貨などが出土している。詳細に関しては、別項を参照されたい。

2. 立石

先述の炭盛土の項でも触れたが、火葬場2の約1m西側に、ほぼ南北方向に並ぶ石列がある。この石

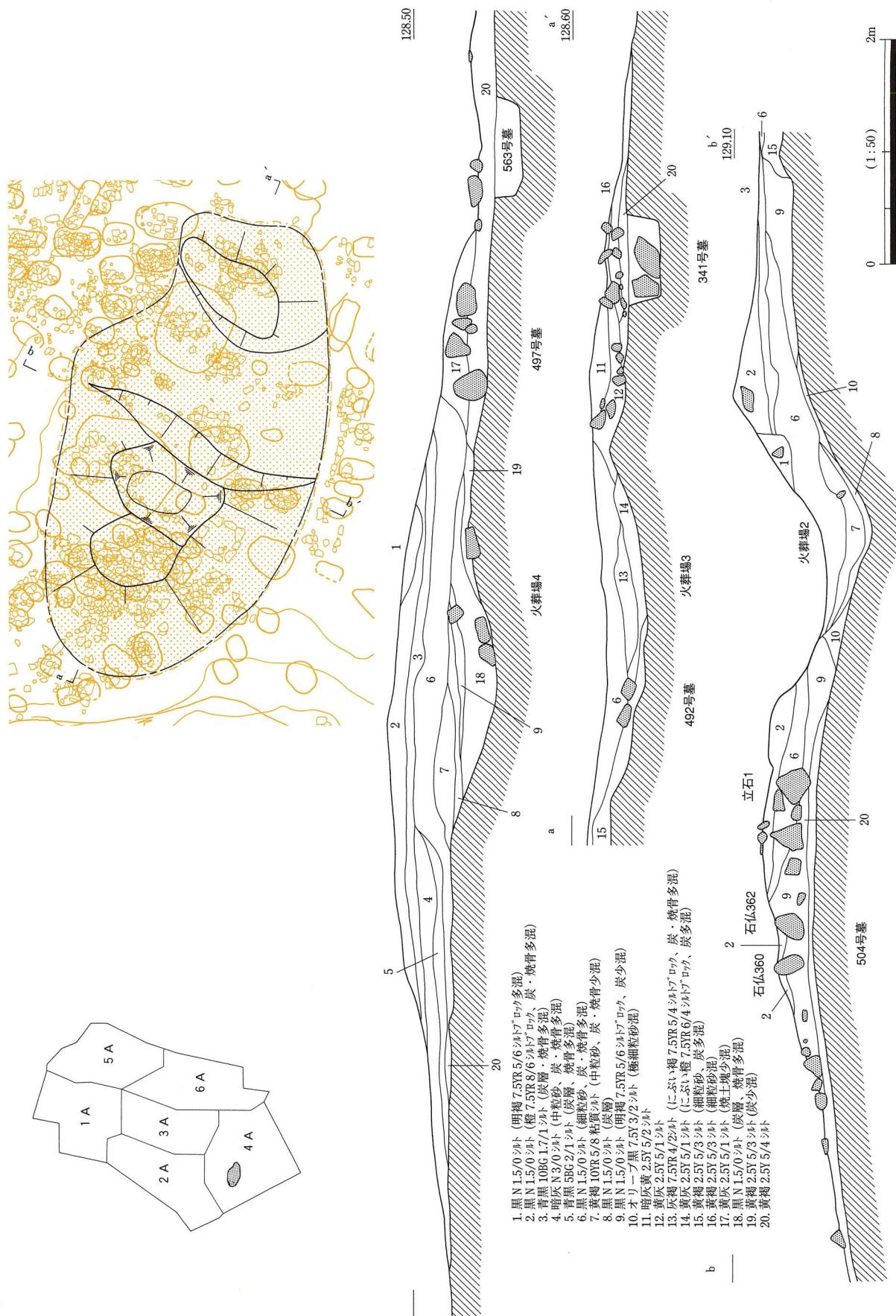


図103 炭盛土平面・断面図

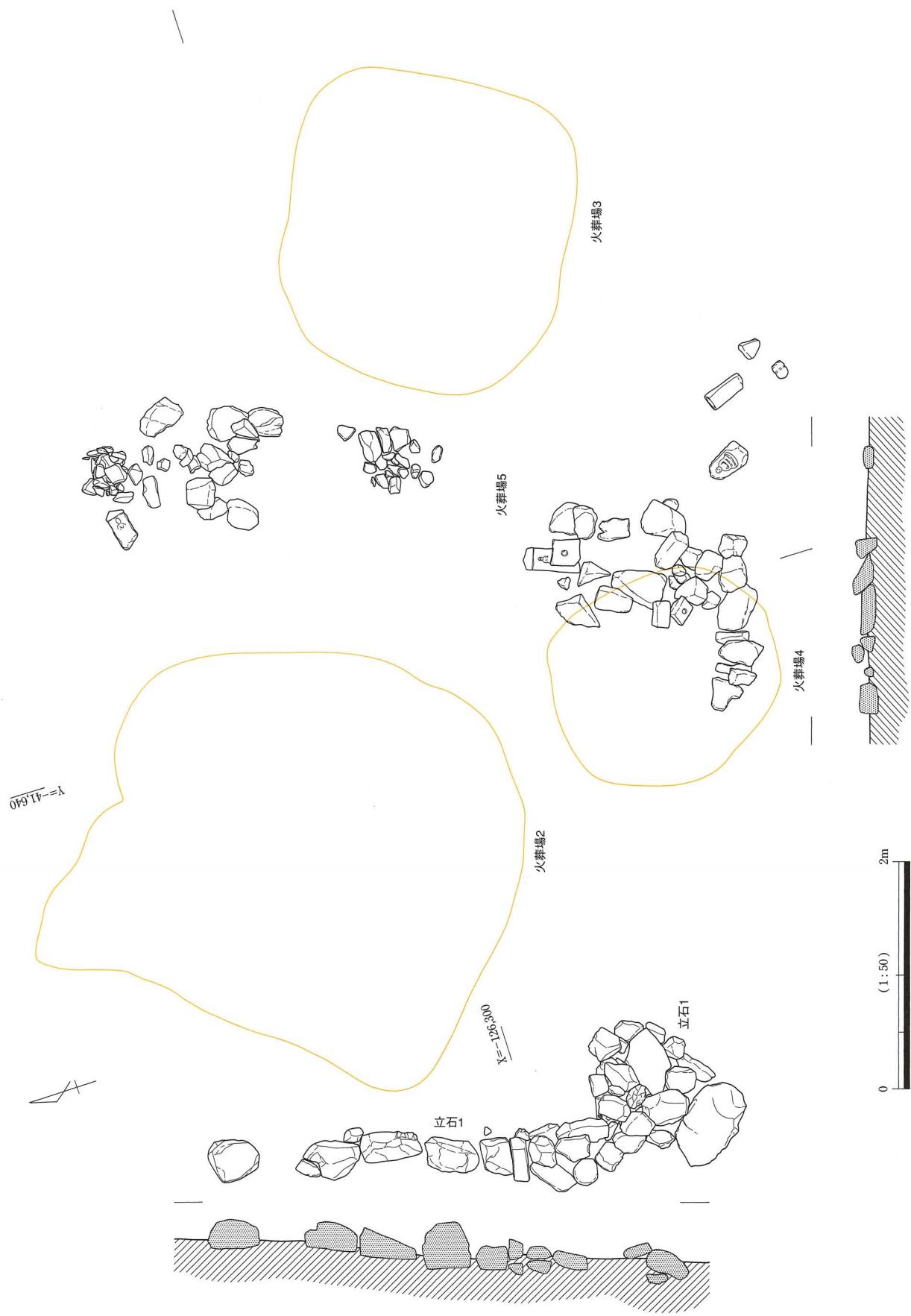


図104 火葬場 2～5 平面図、立石 1 平面・断面図

列は南側で屈曲し、東側約1m延びている。この石列は、東側を揃えるように並べられており、それより西側では集石群が出土している。石列に使用された石は、石組に使用されるものに比較して約50cmと大きめのものがあり、30cm前後のやや小さい石は2段に積まれていた。また、南側の屈曲部では、503号墓の石組の上に石が積まれ、中心に据えていた石仏が隠れてしまっていた。

なお、火葬場2の1.5m東側には、この立石1と同様に南北方向に並ぶと思われる石が数個残存しており、その面が東側に揃えられていることからすると、火葬場3にも同様な施設があったものと考えられる。

さらに、炭盛土の南側では、ほぼ沿うように558～564号墓の石組の北辺が造られており、これらの石組が造り替えが行われていることが判明していることから、何らかの関連性が考えられる。

3. 火葬場

火葬場は、総数7基検出している。

(1) 火葬場1

火葬場1は、炭盛土の北東隅で検出し、南端がわずかに炭盛土に覆われており、388号墓を切っている。長軸1.95m、短軸1.3mを測り、平面が不整形な橿円形である。検出段階で、棺台に使用された石が露出していた。火葬場1の周辺には、焼土塊が散乱していた。

棺台は、4個の石を、約0.6m×0.7mの四隅に配置しており、それらの石には、五輪塔の火輪2個・石仏1基・一石五輪塔の地輪を1個転用していた。

棺台の下層には、約20cm程に焼骨片や炭化物を多量に含む土が堆積していた。その層を取り除くと、長軸1.25m、短軸0.5m、深さ1.0mの橿円形に土坑が二段掘りになっていた。床面には焼けた痕跡が窺われなかった。土坑の上面には、石が十数個点在しており、その中に一石五輪塔の空風輪が1点出土している。また、棺台に使用された一石五輪塔の地輪は、火葬場3出土の空風火輪と接合し完形になった(図30-2)。

他に、鉄釘が3本出土している。

(2) 火葬場2

火葬場2は、炭盛土中央部のやや西寄りの北側に位置し、一部分は'67年に掘削されていた。西側では、459.498号墓を切っていた。長軸3.7m×短軸3.4mの不整橿円形をしており、さらに、中央部の南側が二段掘りになっており、長軸1.9m×短軸1.4m、深さ0.25mの橿円形の土坑が穿たれ、その長軸方向に1.3m×0.3m、深さ0.1mの煙道が設けられている。床面は、特に段掘り以下が被熱を強く受け赤変していた。

なお、段掘り部において西側に3ヵ所、東側に1ヵ所、20cm～30cm、深さ15cm～20cmの窪みを検出しており、石の抜き取り痕跡とも考えられるが、何らかの施設があったとも考えられる。

土坑底部からは、15cm～50cmの石が多数出土し、それらが被熱痕跡を残すものがほとんどであった。これらの石は、特に組まれた様子を窺うことがなく、本来、石組があったものと考えられるが、幾度かの使用の段階で壊れ、炭の堆積で埋もれてしまったものと思われる。

さらに、土坑の北東部に1.1m×1.4mの石組が上端をほぼ水平に組まれていることから、棺台として利用されたものと考えられ、火葬場2が拡張されながら数度に渡って使用されていた一端を窺い知るものである。

先述した様に立石1が、火葬場2に伴う施設と考えられる。

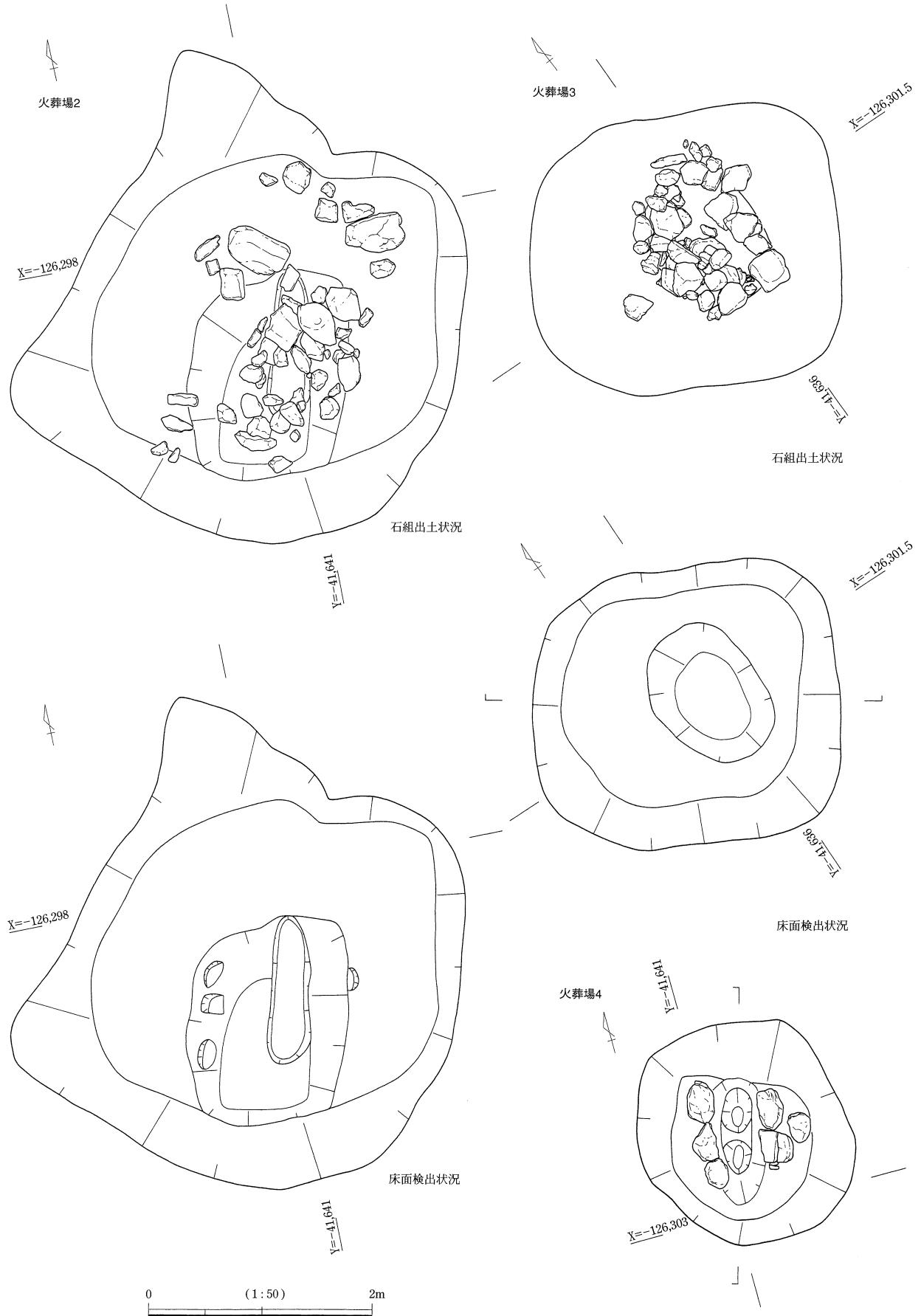


図105 火葬場 2～4 平面図

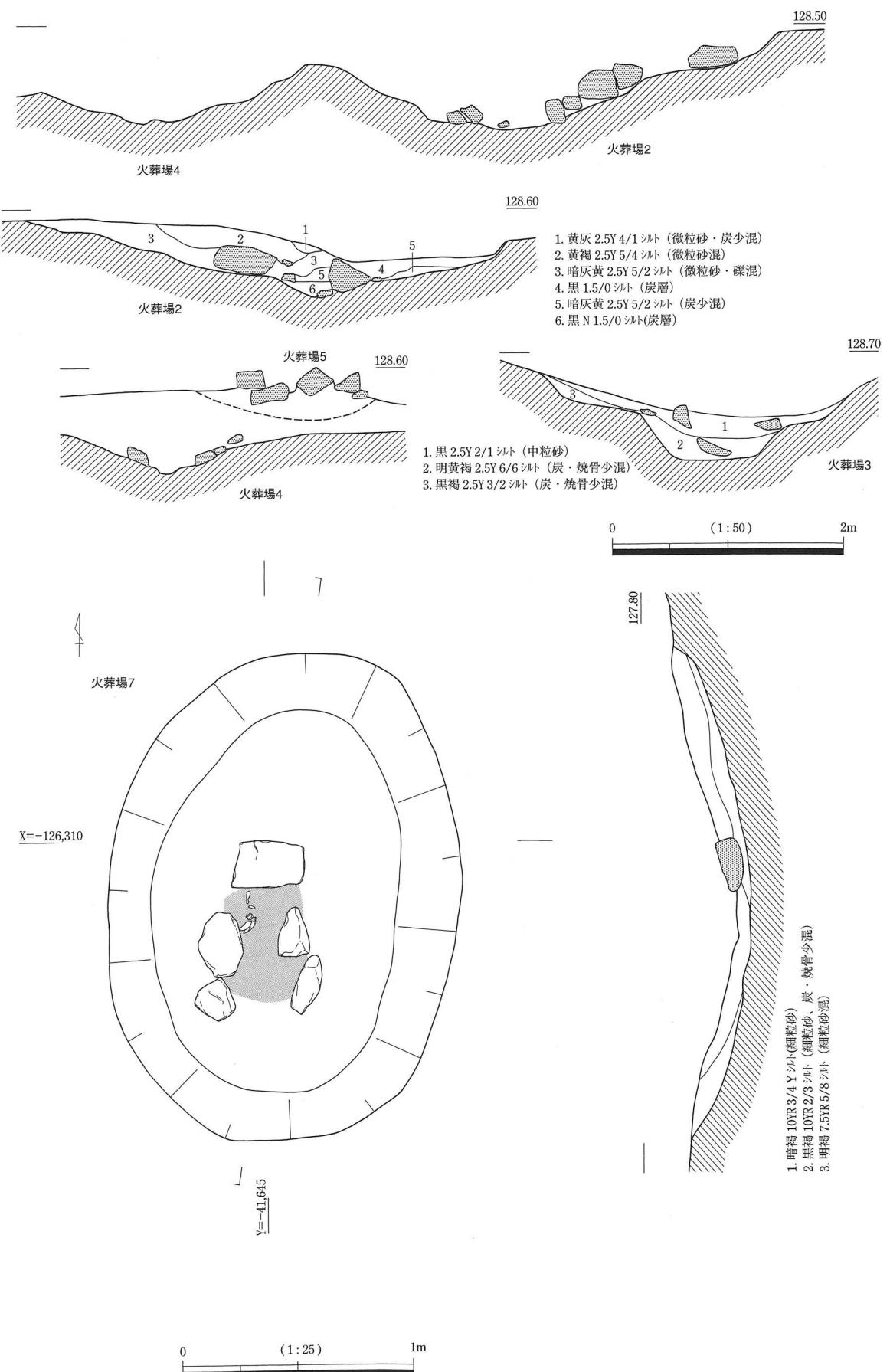


図106 火葬場 2～5 断面図、火葬場 7 平面・断面図

火葬場 2 の埋土からは、土師器皿、鉄釘・銭貨、焼骨などが出土している。

(3) 火葬場 3

火葬場 3 は、火葬場 2 の東側に位置し、炭盛土の北東側の下層で検出した遺構で、墓壙を伴わない石組のみの396.492号墓に切られていた。一辺 $2.45m \times 2.80m$ の隅丸方形で、中央部が $1.6m \times 0.9m$ の楕円形の二段掘りになっていた。床面は、特に段掘り以下に被熱痕跡が顕著であった。

土坑には、二段掘り部分を覆うような形で方形に石が組まれており、棺台に使用されたものと考えられる。石組は、4段積まれていた。この石組には、石仏や五輪塔の部材が再利用され、他の石と併に被熱痕跡を残すものがほとんどであった。

埋土は、3層あり、それらからは、焼骨意外に、鉄釘、銭貨、土師器などが出でし、泥人形の武者の頭部（図113-47）などがある。

(4) 火葬場 4

火葬場 4 は、火葬場 2 の南東部に位置し、長軸 $2.0m \times$ 短軸 $1.85m$ の楕円形をしており、中央部に、 $1.15m \times 0.5m$ の長楕円形の煙道が設けられていた。煙道の両側には、石が3個ずつ置かれており、棺台に使用されたと考えられ、被熱痕跡を残していた。

土坑の床面は、被熱痕跡が顕著であった。

埋土は4層あり、焼骨の他、鉄釘、銭貨、土師器が出土している。埋土上面に火葬場 2 から搔きだされた炭などが堆積していた。

(5) 火葬場 5

火葬場 5 は、火葬場 4 の上層で検出し、炭層を1層除去後に石組のみを検出している。当初、石組墓と考えられたが、石の組み方から、火葬場の石組と思われる。土坑は、確認できなかった。

石組は、 $1.4m \times 1.1m$ の方形に2段組まれていた。

石組には、石仏や五輪塔の部材が転用されたいた。他に、遺物は出土していない。

なお、火葬場 5 の南側に、約3m東西に石が並べられており、何らかの関連性があると思われる。

(6) 火葬場 6

火葬場 6 は、炭盛土の西南部に位置し、下層から検出した。長軸 $1.65m \times$ 短軸 $1.3m$ を測る楕円形の土坑をもち、中央部が $1.0m \times 0.7m$ の楕円形に二段掘りされている。床面は、被熱痕跡が確認できなかった。

埋土は3層で、焼骨片や炭を多量に含んでいた。

遺物は、鉄釘、土師器がわずかに出土している。

(7) 火葬場 7

火葬場 7 は、炭盛土の南側約4mの所に位置し、唯一、炭盛土の影響を受けていない。長軸 $2.1m \times$ 短軸 $1.5m$ を測る楕円形の土坑で、床面に被熱痕跡が残っていた。

検出時には、中央部が窪んでおり、すでに、石の一部が露出していた。

埋土は、2層で、上層から炭や焼骨が出土している。下層上面に石がコの字形に配置されており、棺台に使用されたものと考えられる。

他に、銭貨、土師器がわずかに出土している。

なお、火葬場 7 周辺では、焼骨が散在していた。

以上、火葬場を外観してきたが、その規模には、2m前後的小規模のものから、4m程の大型のもの

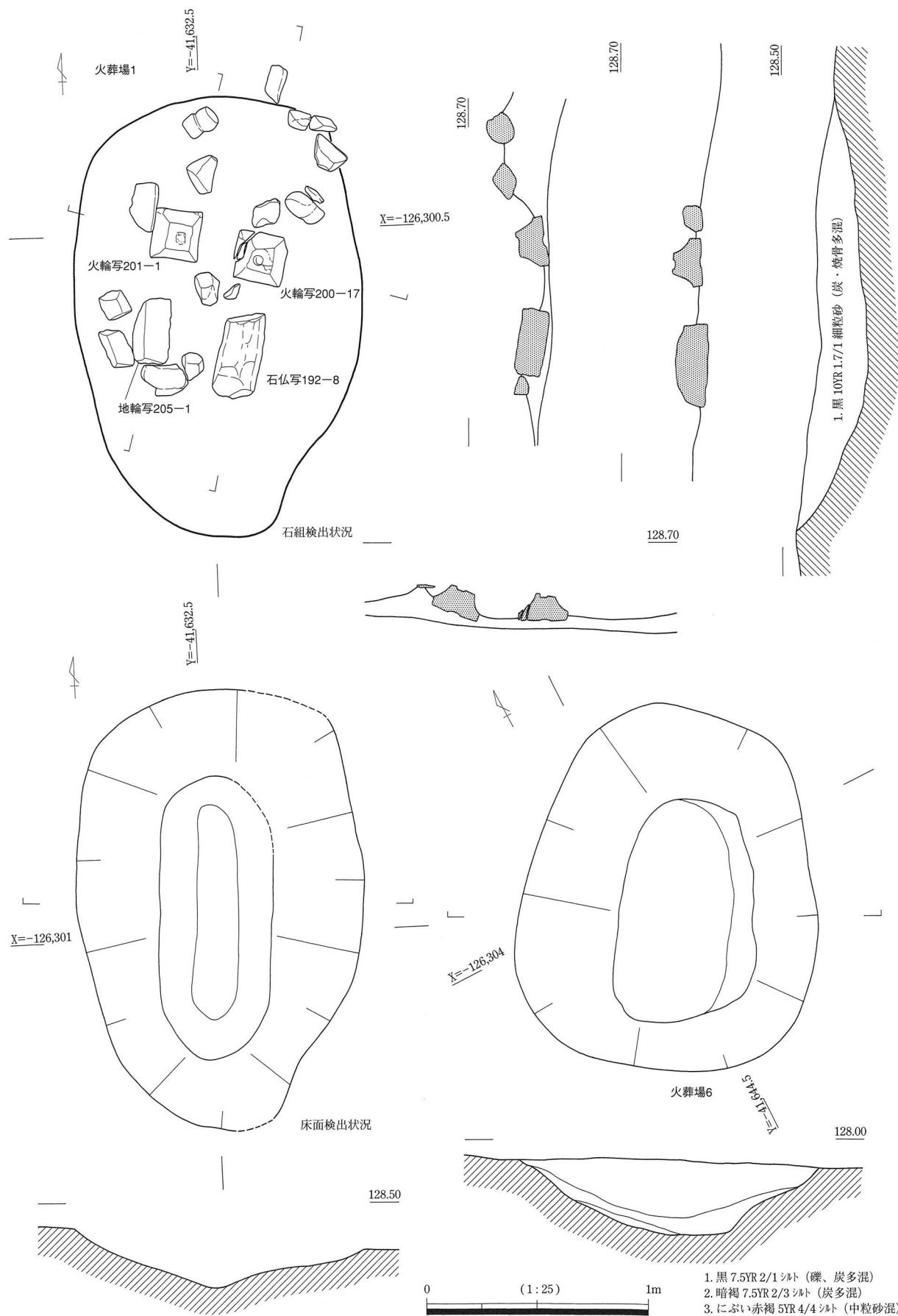


図107 火葬場1、6 平面・断面図

があるが、基本的には、段掘りないしは煙道をもつもので、中央部に石を置き、棺台を設置するものである。棺台は、火葬墓同様に数個の石を土坑底部に置くのみのものと、石を方形に組むものがあり、後者の火葬場2および3は、数段組まれていたことから、何度も使用されていたと考えられる。

炭盛土の断面観察から、火葬場3および火葬場4が火葬場2に先行することが判り、火葬場5は、火葬場2の使用状況の終末期に造られたと考えられ、最終的には、火葬場2から搔きだされた炭層で覆われてしまっている。しかしながら、火葬場3と火葬場4の先後関係は不明である。

また、火葬場1は、火葬場3から搔きだされた炭層に一部覆われることから、火葬場3に先行するものと考えられる。

4. おわりに

以上、炭盛土および火葬場群を見てきたが、炭盛土は、火葬場2から火葬場6の形成過程でそれらから搔きだされた炭層が堆積したものであることが判り、最もその排出量が多量のものが火葬場2であることが判明した。これらのこととは、火葬場2が最も使用頻度が高かった結果と考えられ、その使用期間が最も長かったと思われる。

また、火葬場および炭盛土から出土した焼骨は、別項で詳細を述べるが、様々な部位の骨が出土しており、また、子供や成人および老人のものもあることから、その構成に偏りがあるものではないことが判明している。

なお、銭貨や鉄釘が多量に出土していることからも、棺桶の使用やそれらの中に銭貨が入れられていた可能性を窺うことができるものである。

さらに、炭盛土下層から検出した石組墓群および集石群に関して、ここで少し触れておきたい。

これらの墓群は、最終的には炭盛土によって完全に埋めつくされていたもので、ほとんどのものが石組を残存していた。

これらの中には、石組の中心に石仏が立っていたものや墓壙を伴わない石組のみのものがあることから、炭盛土形成以前にそれらが造られていたことが判る。

また、炭盛土の堆積状況から、500.506号墓が下部に炭層を含むことから炭盛土の形成過程で造られたものと思われ、また、先述した様に396.492号墓が火葬場3を切っていることから、墓壙を伴わない石組の時期の推定の根拠の一つになるとも考えられる。いずれにしても、これらも、炭層に覆われてしまうことから、火葬場2の終焉よりは先行して造られたことが判る。

なお、立石1が火葬場2に伴うものと考えられることから、立石1の西側にある集石群が火葬場2に壊された石組や北側の墓壙のみを検出した墓群の石組を整理したものと考えられ、北側の空白地域と火葬場2との関連性がより明確なものになると思われる。

以上見てきた様に、炭盛土の多量の炭層は、火葬場群を起因とするものであることが判り、個々の火葬墓から廃棄されたものではないことが判明した。

第6節 遺物

ここでは、中近世墓群が展開する主に3A・4Aトレンチの中近世の遺物を掲載している。中近世墓群の遺物では、「遺構内出土遺物」と「堆積層出土遺物」に分けることができる。

「遺構内出土遺物」は、墓と火葬場・炭盛土に分けている。

墓出土遺物は、その出土状況からさらに細分している。石組の上面を「石組上面（石上）」、石組の内部を「石組内（石内）」、墓壙検出面直上を「墓壙上面（壙上）」、墓壙の埋土内を「墓壙内（壙内）」、また、蔵骨器として使用されたものを「蔵骨器」と表している。

炭盛土は火葬場から生じた炭が堆積したものと考えており、それらの関連性は強い。ただし、火葬場の土坑内から出土した遺物は、その時期の上限がより限定できると考えたため、これを「火葬場（坑内）」と分けた。

堆積層は、腐植土を主体とした表土を「第1層」、墓壙検出面である地山面までの堆積土を「第2層」として捉えている。なお、古墳の石室内からもこの時期の遺物が出土しているが、層位的には「第2層」と捉えることができる。

1. 土器・陶磁器・土製品（図108～114、写真図版168～176、付表129～131）

遺物には、土師器皿・瓦器椀・瓦質羽釜・瓦質香炉・備前壺・常滑甕・丹波甕・肥前磁器碗、他に土製品が出土している。実測可能なものは全て図化して掲載している。

（1）土師器皿の分類（図108）

土師器皿には、幾つかのタイプが出土しており、時期幅があるものと考えられる。ここでは、主に形態・法量を中心に、色調・胎土をも考慮して分類を行った。

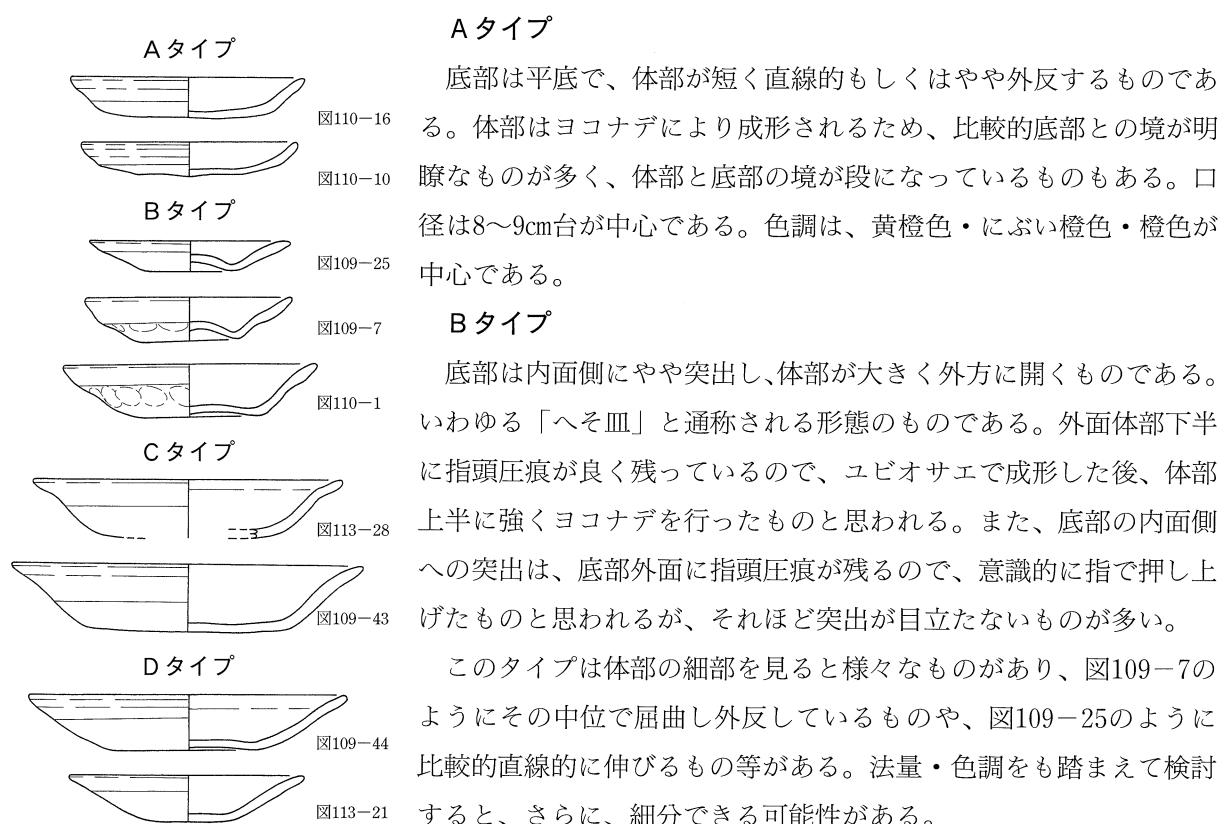


図108 土師器皿の分類

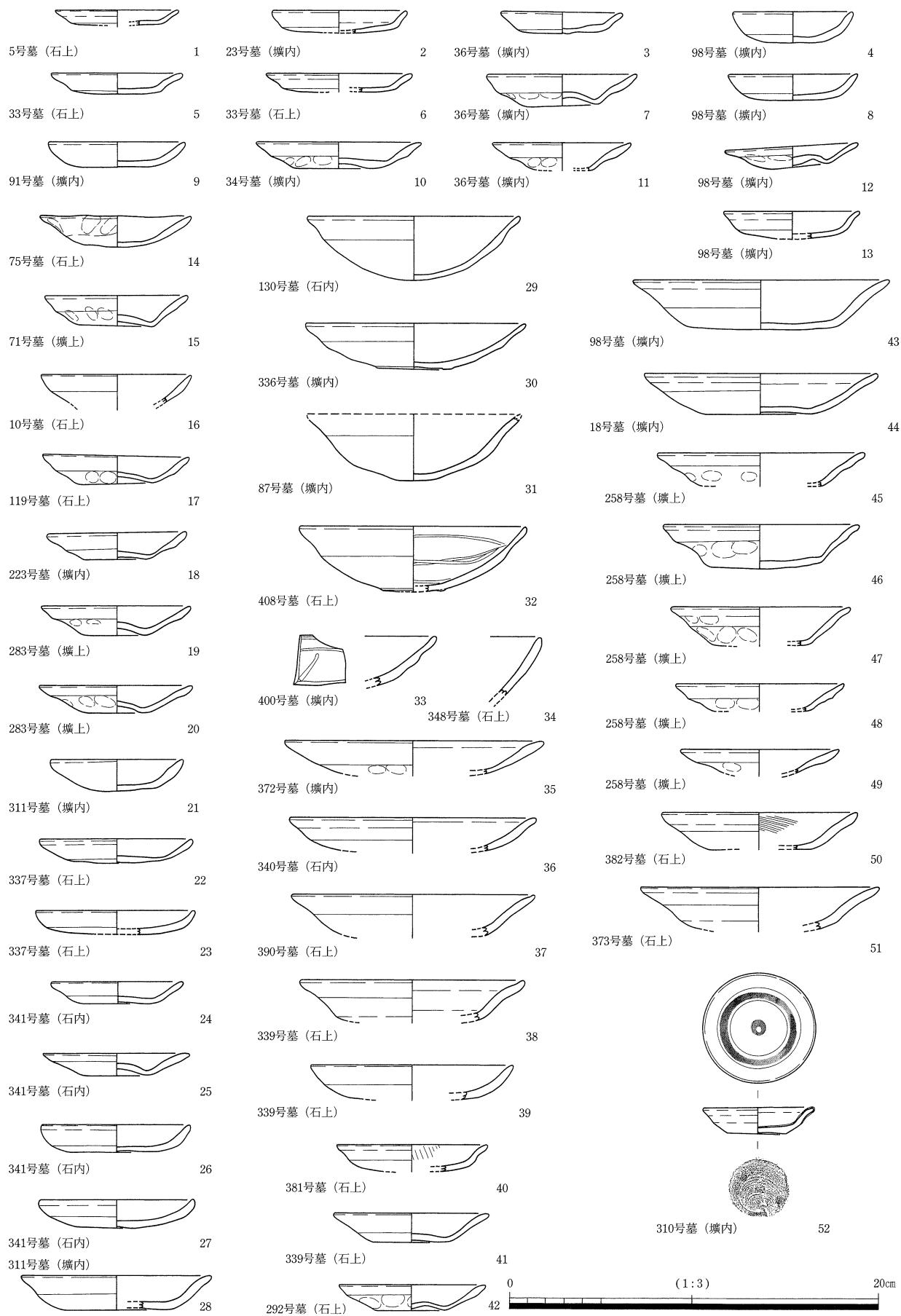


図109 墓出土遺物（1）

には、小サイズが多い。色調は、にぶい黄橙色・黄橙色・橙色が中心である。

Cタイプ

底部は平底で、体部が中位でやや屈曲して外反するものである。体部の屈曲が顕著なものと、緩やかなものがある。また、他のタイプと比べて器壁が5mm前後とおしなべて厚い。口径は12~14cm台が中心である。しかし、8~9cm台のものでこのタイプだと思われるものもあるが、全形が分からぬいため断言できない。色調は、にぶい黄橙色・橙色が中心である。

Dタイプ

底部は平底が多く、体部が直線的に伸びるものである。破片では体部が丸みのあるものもあり、丸みをもった底部のものもあり得る。顕著な指頭圧痕はあまり見られず、器面が滑らかであるのが特徴である。口径は2分でき、小が9~10cm台、大が12~14cm台である。量的には、大サイズが多い。色調は、灰白色・黄橙色が中心である。

その他、タイプ分けしにくいものや、全体の器形が分からぬいたものは、タイプを分けずにその特徴を記述することとした。

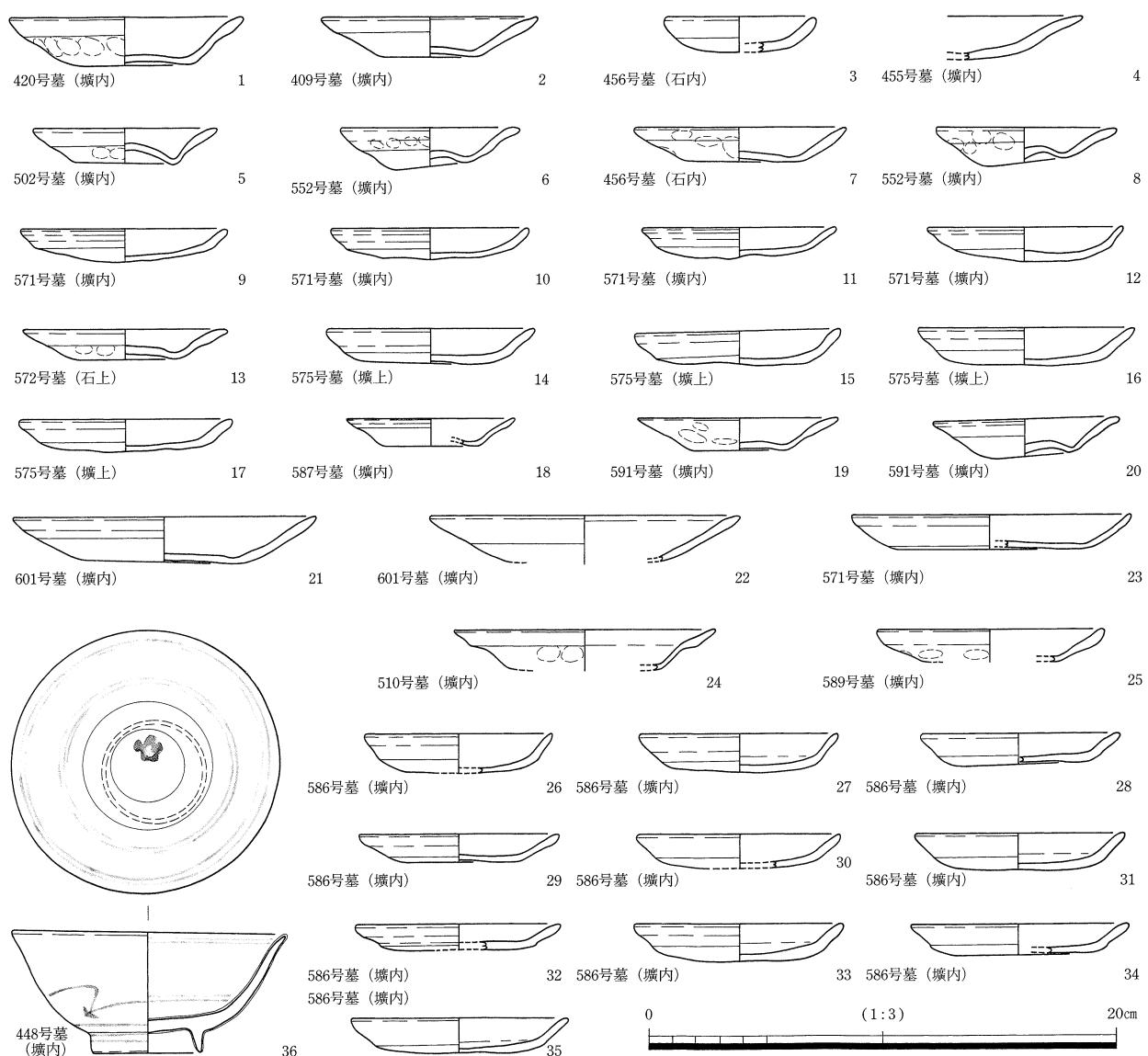


図110 墓出土遺物（2）

(2) 墓出土遺物 (図109~112)

土師器皿 (図109-1~28.35~51、図110-1~35)

Aタイプには、図109-1~3.5.6.13.23.26.27.40、図110-9~12.14~17.26~35がある。

図109-1.3.13は、口径が6cm台と一回り小さいものである。また、この(3)は内面底部にハケメがある。図109-40は口縁部が外反しており、内面体部には左上がりのハケメが見られる。

571号墓壙内から出土した図110-9~12は、底部がやや丸みをもつもので、胎土の粒子が細かく色調も似通っており、酷似している。また図109-23.26.27も、口縁端部がやや直立していること、胎土の粒子が細かく精良であること、色調等が酷似している。

Bタイプには、口径が小の図109-7.10~12.15.17~20.25.41.42、図110-5~8.13.18~20と、大の図109-45~47、図110-1.24がある。

図109-7.10.11.15.17.18、図110-5は、体部の中位で屈曲し外反する形態で共通している。色調は、7.10.11が黄橙色で、他が橙色である。

図109-12.25、図110-25は体部が直線的に伸び、器高が比較的低い。色調は、黄橙色である。

283号墓から出土した図109-19.20、552号墓から出土した図110-6.8は、体部が比較的直線的に伸びるが口縁端部がやや外方へつまみ出される特徴をもつ。これらは、色調が黄橙色で、法量も酷似している。

口径が大のものを見ると、図110-24は他のものよりも体部上半が大きく外反し肥厚も大きい。258号墓から出土した図109-45~47は色調が黄橙色であること、胎土の粒子が細かい等が類似している。

Cタイプには、図109-37.38.43.51、図110-4がある。口径は12~13cm台である。図109-37.51は口縁端部がつまみ出されやや直立している。色調は、橙色のものが多い。

Dタイプには、口径が小の図110-2と、大の図109-14.35.36.44.21.22がある。図110-21は内面底部端に不明瞭な凹線状圈線がめぐる。Cタイプよりも器壁が薄く、2~3mm前後である。

上記以外のものの特徴的なものを述べる。

図109-4.21、図110-3は、口径の法量が6cm台、底部と体部の境が明瞭ではなく器壁も5mm前後と厚いもので類似している。図109-14は、形態的にはDタイプと類似しているが、器形がいびつでやや異なる。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿としての使用痕が見られる。図109-22.24はAタイプに似るが、底部と体部の境が薄く、やや異なる。図109-50は底部が平底で体部の器壁が厚く、内面にハケ目を残すものである。図110-23は底部が平底で、体部がやや膨らみながら直線的に伸びるものである。

瓦器椀 (図109-29~34)

図109-29~33は和泉型の瓦器椀である。(34)は破片であるが、形態的に丹波型と思われる。

瓦質羽釜 (図111、図112-1.2)

瓦質羽釜は、破片で出土している図112-1を除き、基本的に藏骨器として出土している。図111-2、図112-2は底部中央を打ち欠いた状況で出土している。また、図111-5は焼骨の出土が見られず、藏骨器としての使用が断定できない。これらは煤が付着しており、転用したものと思われる。

この瓦質羽釜には足の付かないもの、三足が付くもの、さらに茶釜がある。これらは体部が粘土紐を積み上げて成形され、外面にその継ぎ目を顕著に残し、外面にユビオサエ、内面にハケメによる調整を行い、その後鐸および足を貼り付けるという作り方で共通する。また、燃成は甘いものが多く、浅黄または黄橙色を呈する部分が多い。

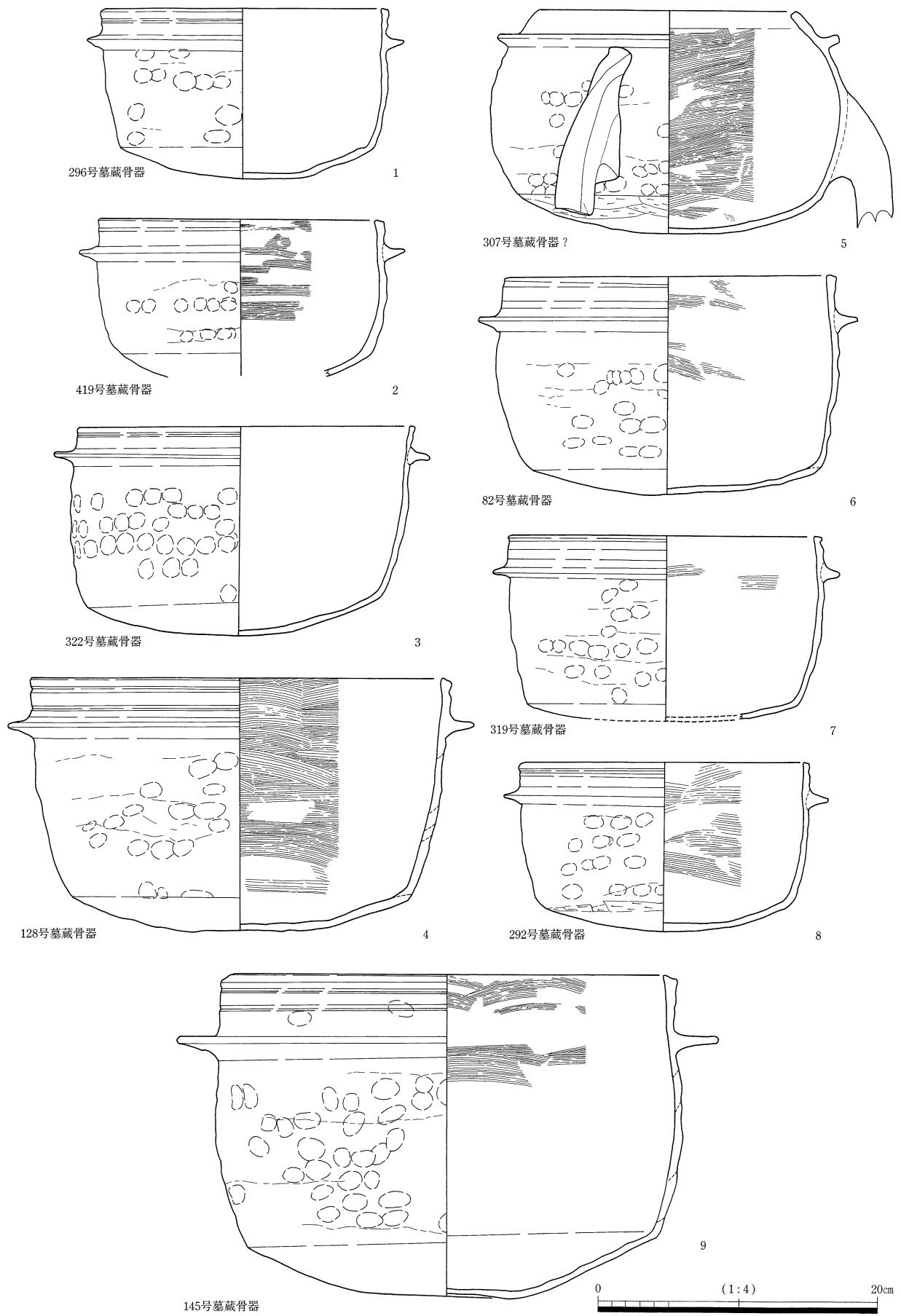


図111 墓出土遺物（3）

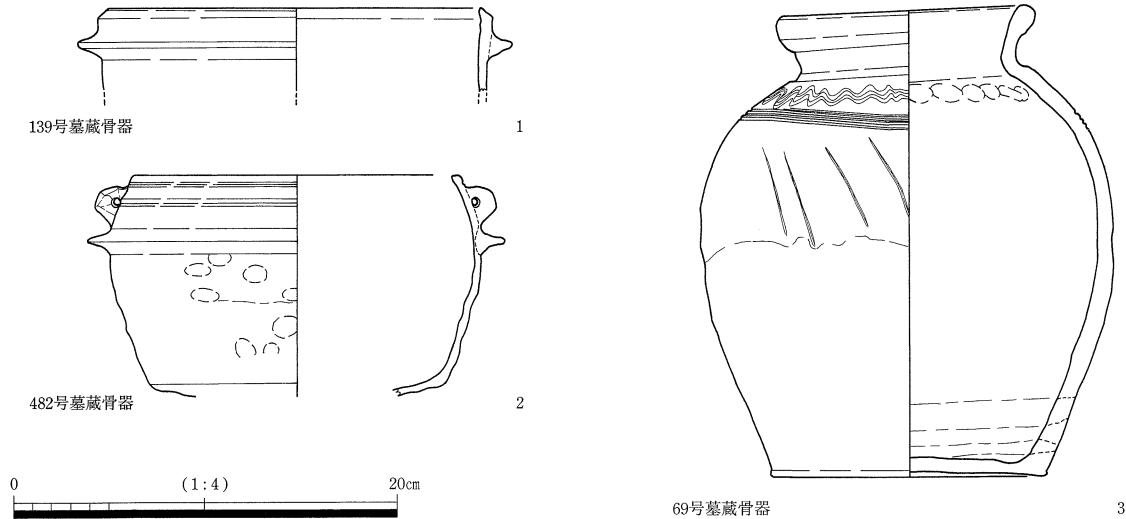


図112 墓出土遺物（4）

足の付かないものについては、口縁部の形態から大きく2つに分けることができる。

その1は、凹線または段がなくて、口縁端部は外傾する平坦面をもつもので、図112-1のみである。体部は欠損しており、その形態は不明である。

その他は、図111-4.9を除きあまり明瞭なものではないが、凹線または段があるものである。口縁端部は、図111-4.9のみがやや外傾しているが、他のものはそれ程外傾してはいない。このタイプはさらに細分でき、鍔の位置が、口縁端部より2cm以下である図111-1～3.7.8と、それより下の3～5cmの位置である図111-4.6.9の2区分できる。この両者の違いは、凹線または段の数にも反映しており、前者は1段、後者は2段である。また、(9)のみが他のものと比べると鍔の幅が広い。

鍔の位置、口縁部の凹線または段の数により2区分することができるが、全体的なプロポーションでは差異を付けがたい。しかし、(9)は底部の屈曲が目立ち中央部が平坦で、体部がやや膨らむ形態で他のものとはやや異なる。また(2)も底部が欠損しており断定できないが、全体的にやや丸みを持っており、若干異なるものと思われる。

調整は先に記した通りであるが、(8)だけが体部と底部の境にヘラケズリが見られる。また、内面にハケメが見られないものがあるが、残存状況から考えると基本的にハケメ調整であった可能性が高い。

図111-5は三足羽釜である。体部が膨らんでおり、口縁端部は内傾する平坦面をもつ。底部はヘラケズリであるが、中央部には見られない。また、内面のハケメも非常に細かいものである。これのみ全体的に色調が暗灰色である。

図112-2は、口縁部に2つの環付突起が付く茶釜で、図面上で復元している。口縁部は内傾しており、体部が下方に窄まる形態である。口縁部には、不明瞭であるが2条の凹線が巡る。

陶磁器（図109-52、図110-36、図112-3）

図109-52は緑釉が施された古瀬戸小皿であり、底部糸切り、口縁端部が外反する。内面底部端は浅い凹線が巡り釉が溜まっている。

図110-36は肥前系磁器碗であり、外面下方に松葉文、内面底部見込みに五弁花の印判がある。青白色の釉が全体に施されているが、内面底部の見込みに蛇の目の釉剥ぎが見られる。釉剥ぎ部分にはアルミナが塗布されており、重ね焼きの痕跡が残っている。

図112-3は蔵骨器として使用された備前壺である。玉縁状の口縁を持ち、体部の肩はあまり張らない

形態で、4条の櫛描きによる波状文と直線文が施されている。色調は口縁から体部上方にかけての一部褐灰色を呈するところがあるが、全体的にはにぶい橙色である。焼成はやや甘い感じを受け、5mm程度の砂礫がまま含まれている。体部上方に左上から右下に伸びる櫛状の工具痕が見られ、粘土のつなぎ目を調整したものと思われる。

他に図化していないが、常滑、丹波、瓦質系の甕体部片が各々同一個体で出土している。出土地点は、常滑が48号墓の石組上面、丹波が281～283号墓付近の石組上面、瓦質系がC16i4付近で各々出土している。

(2) 火葬場・炭盛土出土遺物 (図113)

土師器皿 (図113-5～47)

Aタイプには、(46)がある。図化できない破片を含めても量がかなり少ない。

Bタイプには、小サイズのみで(6.7.11.13.14.18.20.34.35)がある。底部内面への突出は(14.34.35)のように顕著なものと、(11.13.18.20)のように底部端は凹むが中央は外面にやや膨らむものがある。体部は、あまり中位で外反することなく、比較的直線的に伸びるものが多い。(20)は灯明皿としての使用が窺われる。色調は、にぶい黄橙が多く、橙色のものはない。

Cタイプには、(28.29.36～40.43.44)がある。(28.40)は体部の上半で屈曲し外反しているもので、胎土がやや粗く色調が橙色で類似している。(36～39)は体部上半に指頭圧痕が残り、胎土がきめ細かく砂粒をあまり含まない、色調が黄橙色である等の類似点が見られる。(38)は、底部内面に弧状の線刻が数本見られる。(43.44)は口径8～9cm台で、器形的にはCタイプに似るが、破片であるため断定できない。Dタイプには、大サイズの(27.30.31.32.41.42)と、小サイズの(16.21.22.23)がある。器面は凹凸が少なく総じて器壁が3～4mmと薄い。(32)は、内面底部見込みに不明瞭な凹線状圈線が巡る。(22)は底部がやや丸みのあるもので、「の」字状のナデが良好に残存しているものである。(23)は強いヨコナデにより体部上半がやや外反しており、若干他のものと異なる。

以下、上記以外のものを記しておく。(6.8.12.17)は体部の形態には差異があるが、口径7cm台でユビオサエによる整形で底部中央部のみがわずかに突出するものである。(9)は丸みのある底部で体部上半が大きく肥厚する。(10)は体部上半が屈曲しており口縁端部が短く直立している。内面には体部・底部ともにハケ目が見られる。(26)は、器形的にはDタイプに似ているが、体部がやや深いこと、胎土・色調等が微妙に異なるものである。(24)は硬質に焼成されており、器壁が6mmと厚く、形態から他のものと比べやや新しい傾向をもつ。

陶磁器 (図113-1～4)

(1)は龍泉窯系青磁碗である。片彫りによる蓮弁紋が施されている。(2)は白色の釉が施されている磁器であるが、産地・種類は不明である。(3)は肥前系磁器碗である。青灰色の釉が施され、体部には一重編目紋が描かれる。(4)は磁器香炉である。釉は緑白色でガラス状を呈し、国産のものと思われる。

土人形 (図113-47)

火葬場3から土人形が出土している。頭部のみで、武人を描いているものと思われる。首から後頭部に至る直径6mmの孔があるが、後頭部には2mm程しか開いていない。

(3) 第1・2層、古墳石室出土遺物 (図114)

土師器皿 (図114-1～25.31)

Aタイプには、(1～5)がある。

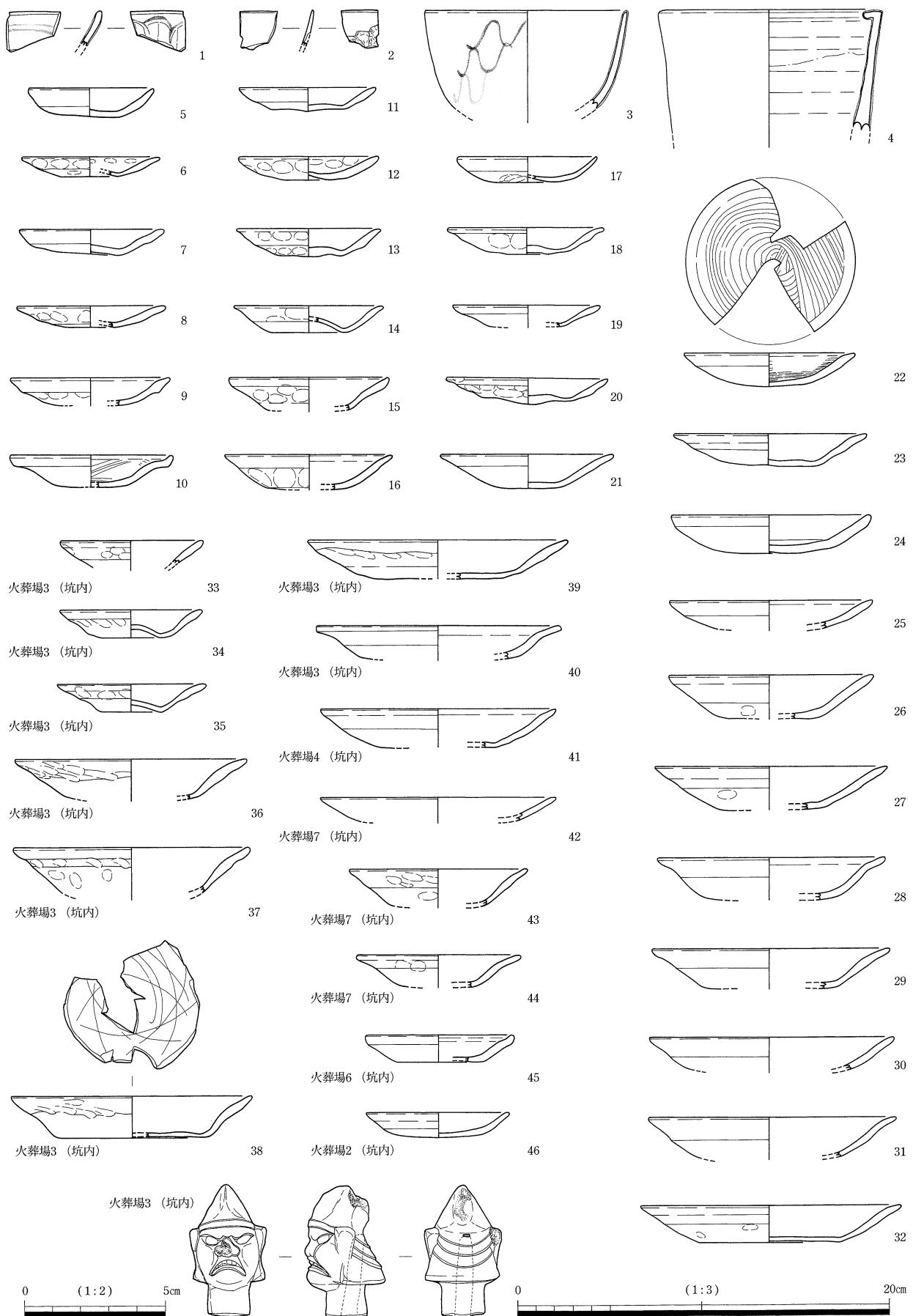


図113 炭盛土・火葬場出土遺物

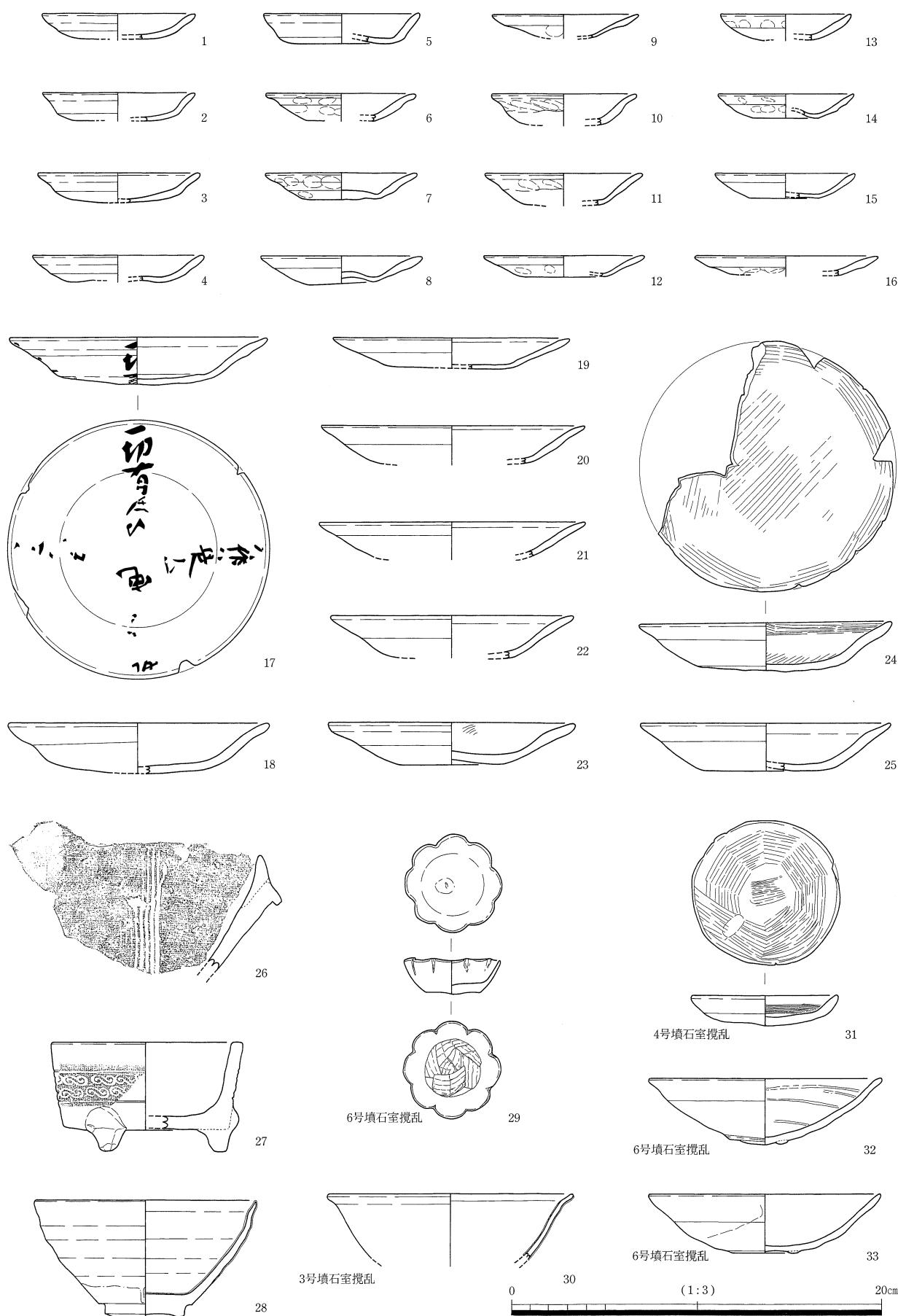


図114 第1・2層出土遺物

Bタイプには、(7.8.14)がある。(7)は底部内面への突出が顕著ではない。

Cタイプには、(18.22～25)がある。(24)は内面の体部上半にヨコ方向、底部に一定方向のハケ目が残る。(23)も内面体部にハケ目が見られる。

Dタイプには、(17.19～21)がある。

(17)は内面底部端に凸線状圈線が巡る。外面には、四方に体部から底部に向かって墨書が見られる。はっきり読み取れる文字は、二方向に「一切有□□」、「□作□是□」が書かれているものと、別方向の「如」だけである。残存している文字から金剛般若波羅蜜經を出典とする偈頌の「一切有為法 如夢幻泡影 如露亦如電 応作如是觀」が左回りに書かれていたものと思われる。

上記以外は、破片のものも多いため、特徴的なものだけを挙げる。(13)は灯明皿として使用されたものと思われる。(31)は胎土に砂粒が多く含まれるもので、内面に「の」字状のナデであるが手の動きを幾度か止めながら行ったことが窺える。

瓦器椀・瓦質香炉（図114－27.31.32）

(27)は瓦質香炉である。体部にスタンプによる渦紋を2段に配している。(31.32)は和泉型の瓦器椀である。(30)は左下から右上に走る粘土のつなぎ目が見られる。

陶磁器（図114－26.28～30）

(26)は備前擂鉢である。口縁部は赤褐色を呈するところもあるが、大部分褐灰色である。外面に重ね焼きの痕跡がある。擂目が磨滅しているので、使用されていたものと思われる。(28)は鉄釉天目茶碗で、釉が2重かけであること、断面が灰黄色で胎土が緻密なことから、中国産と思われる。(29)は吉瀬戸灰釉入子皿である。口縁部に刻み目を入れ8つの花弁を作りだし、輪花状にしている。底部はヘラ切りである。(30)は白磁碗でいわゆる「口禿げ」のものである。

2. 温石（図115、写真図版176）

11.382号墓の墓壙内から完形で2点出土している。(2)は11号墓出土で被熱しているので、火葬時の段階に入れられたものと思われる。共に弯曲しているので、滑石製石鍋の体部を再加工したものと思われる。内外面には顕著な加工痕は見られない。

(1)は一端に穿孔が1ヵ所見られるが、(2)の凹面側にコンパスで弧を描いたような痕跡が3ヵ所ある。穿孔途中でなんらかの理由で止めてしまったものと思われるが、配置が規則的な所が注意を要する。

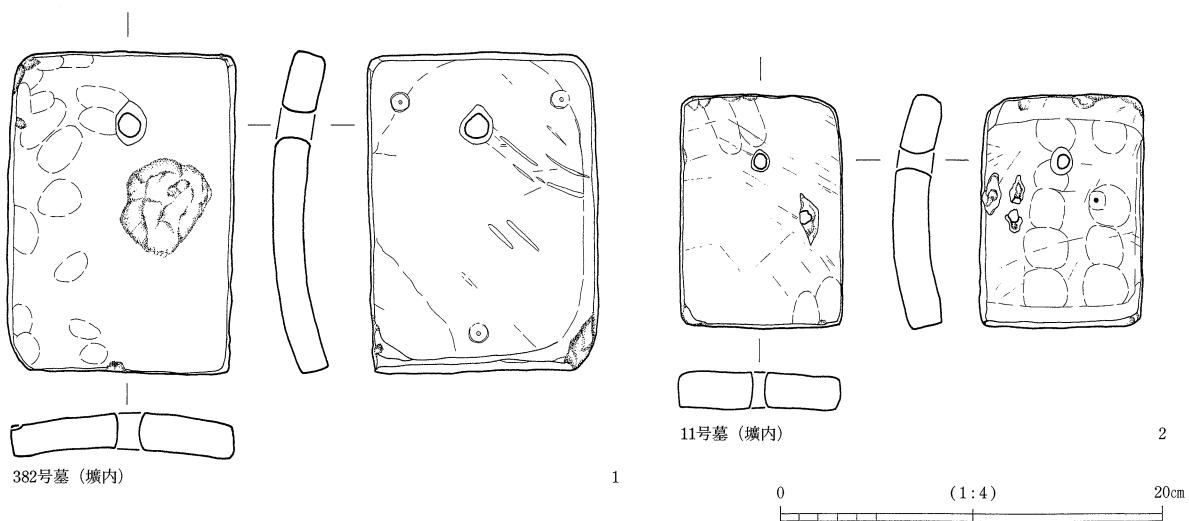


図115 墓出土温石

3. 金属製品（図116～122、写真図版177～181）

金属製品として、鉄釘、短刀、小柄刀子、煽止、鏡前、飾り金具等が出土している。これらは、墓、火葬場・炭盛土から出土している。火葬場から出土しているのものは、大多数被熱しており、残存状況が良好である。中近世墓群の金属製品も、X線写真による観察・実測を行っている。鉄釘以外の金属製品は実測可能なもの全て図化を行い掲載している。

（1）鉄釘（図116～120、写真図版177.188）

中近世墓群から出土した鉄釘は、墓、火葬場・炭盛土から総計1191本出土している。古墳群出土の鉄釘と基本的に造り方には差異がないため、頭部形態の分類は同様の基準で行っている。また、使用に関しても基本的に木棺の緊結具であると思われ、木質の付着状況も同様の基準を用いた。鉄釘の出土数が膨大なため、詳細は付表にまとめ、図化は残存状況が良好で代表的なタイプ・法量のものを行った。

頭部の形態（図116）

古墳群出土鉄釘と同様に側面から見た時の形状により分類しているが、再度、まず大分類を示しておく。

A類…頭部が基部より横に突き出ないもの。

B類…頭部が基部より横一方向もしくは上方向に突き出るもの。

C類…頭部が基部より横二方向に突き出て、円形の鉢状を呈するもの。

この内、中近世墓群ではA・B類の鉄釘が出土しており、C類のものは全く出土していない。

A類は、当墳墓群ではほとんど出土していないが、図化できたものとして図117-23がある。このA類は出土量が少なく、B類の頭部が欠損している可能性も考えられないことはない。しかし、B類とするには、上面の傾斜がきつく感じられる。

B類には、B II①類が確実に判断できるものがなく、その他のタイプが全て出土している。

B I類は基部の根元で折り曲げずに頭部を上方に向かって造り出すもので、さらに4つに細分できる。B I①類は引き延ばした頭部を折り曲げないものである。B I②類は引き延ばした頭部を直線的に折り曲げるが隙間が開くものである。B I③類は引き延ばした頭部を直線的に2つ合わさるように折り曲げるものである。B I④類は丸く巻き込むものである。

B II類は基部の根元で折り曲げて側面から見ると横方向に向かって造りだすもので、さらに7つに細分できる。B II①類は基部の根元からわずかに頭部を横に造りだすものである。B II②類は基部の根元で一度のみ折り曲げ直角を呈するものである。B II③類はその後わずかに下方に折り曲げるものである。B II④類は下方へ直線的に折り曲げるが基部との隙間が開くものである。B II⑤類は下方へ直線的に折

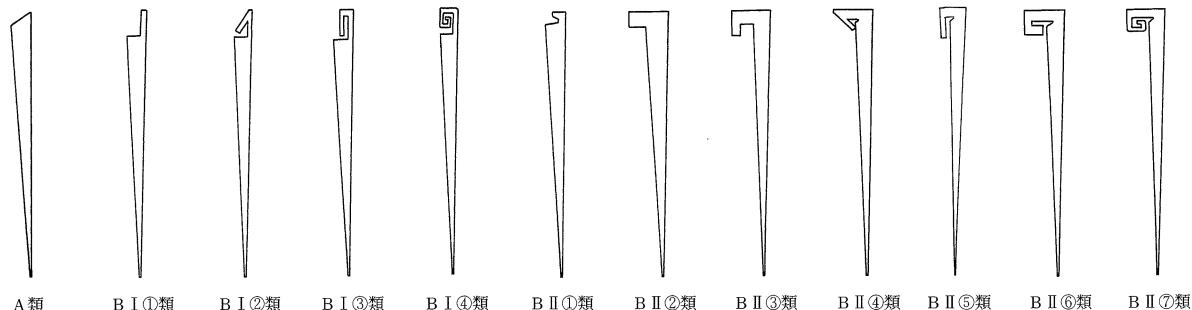


図116 中近世墓群出土鉄釘の分類

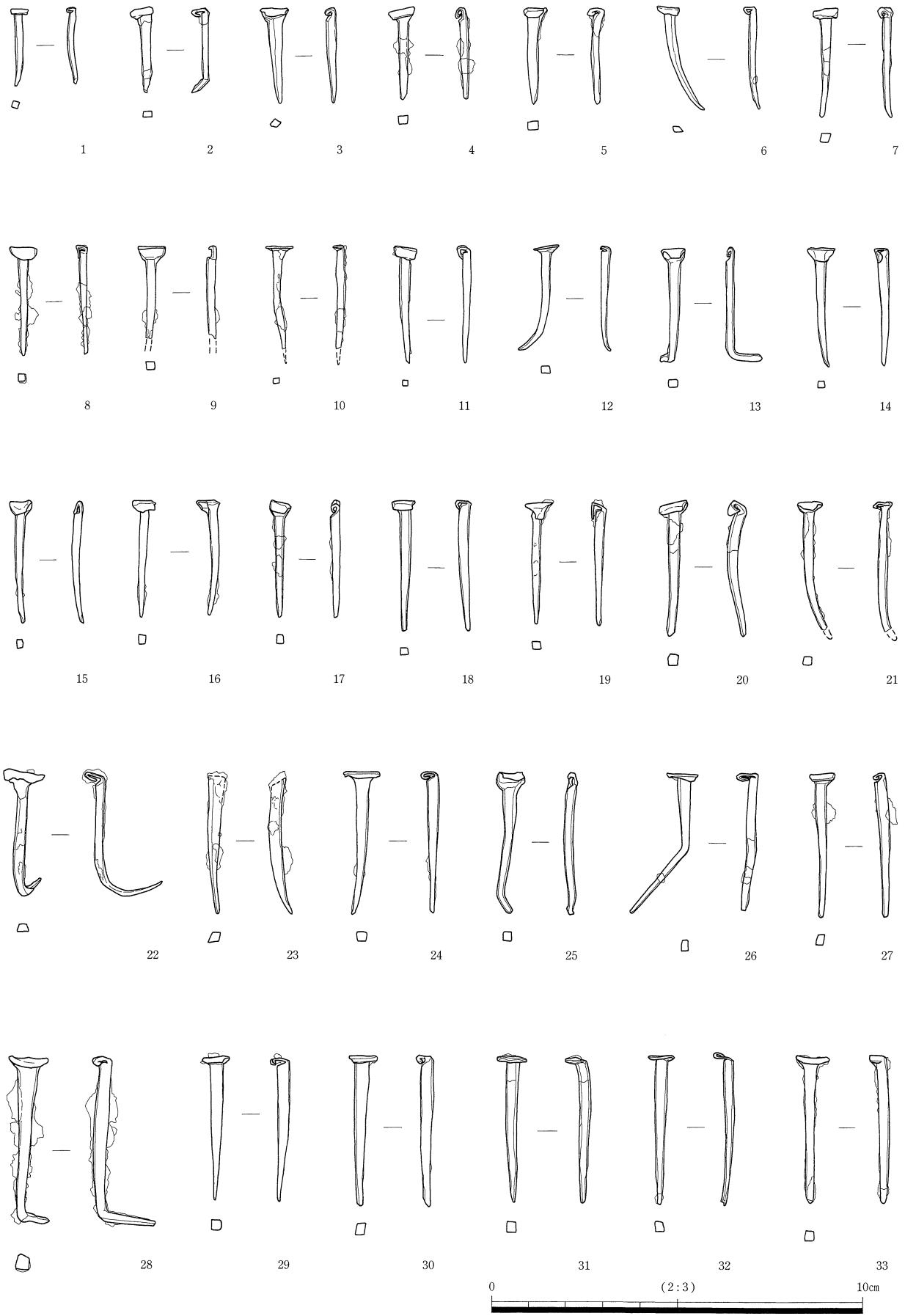


図117 炭盛土・火葬場出土鉄釘（1）

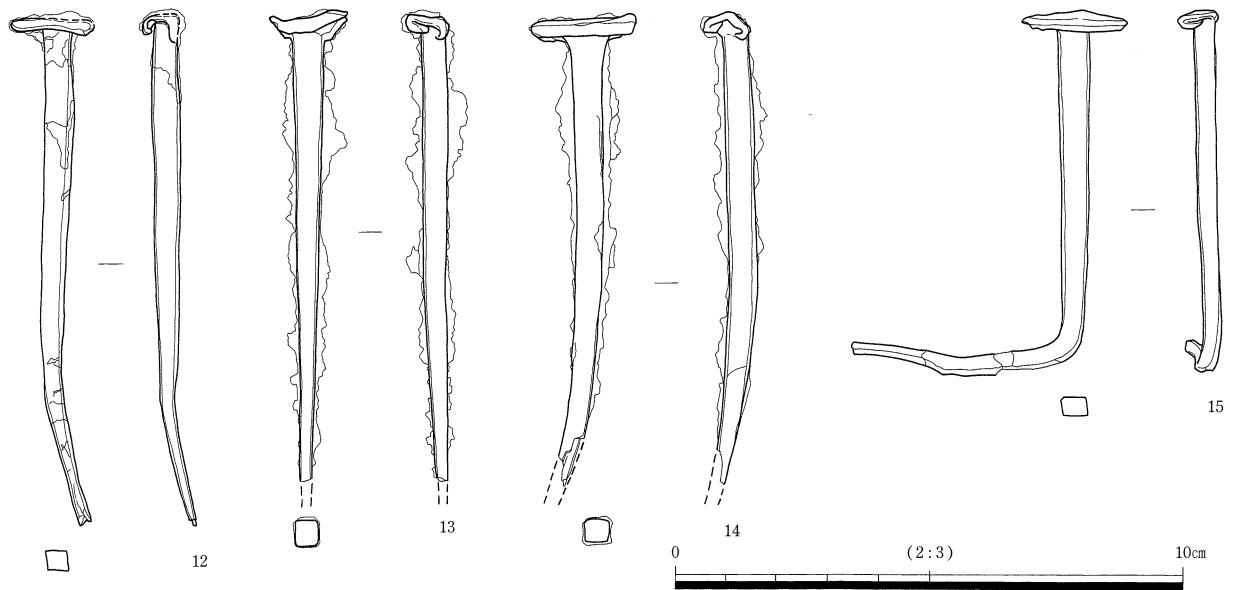
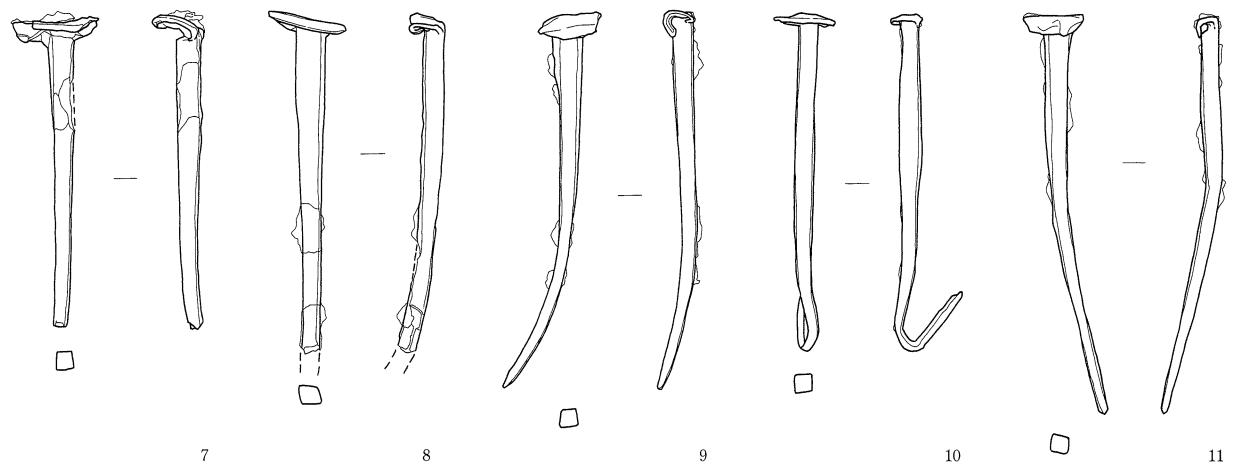
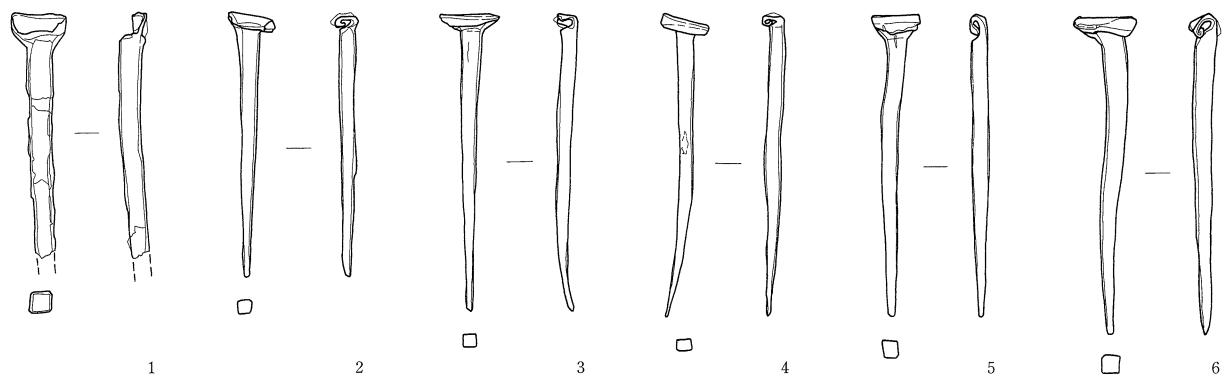


図118 炭盛土・火葬場出土鉄釘 (2)

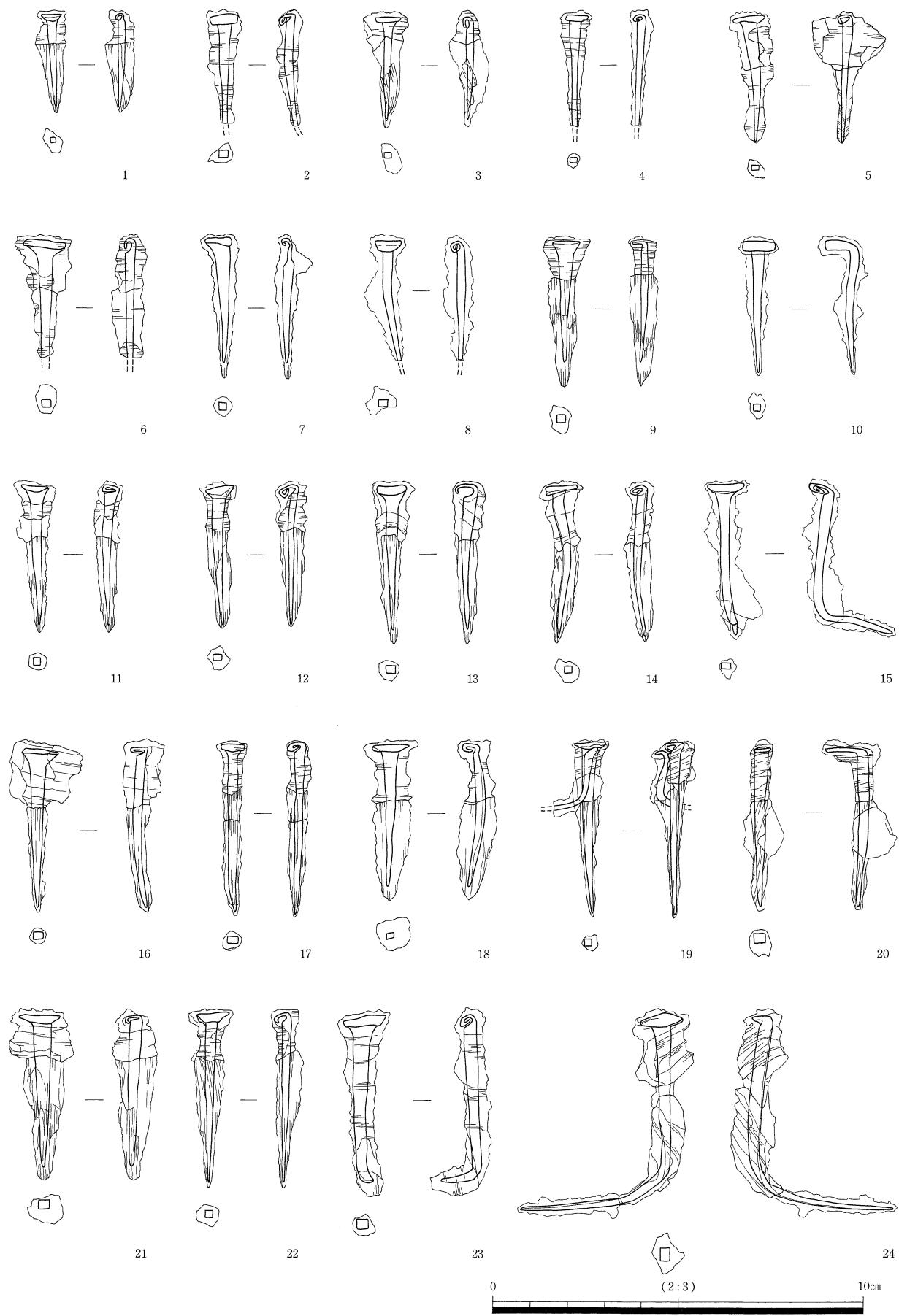


図119 墓出土鉄釘（1）

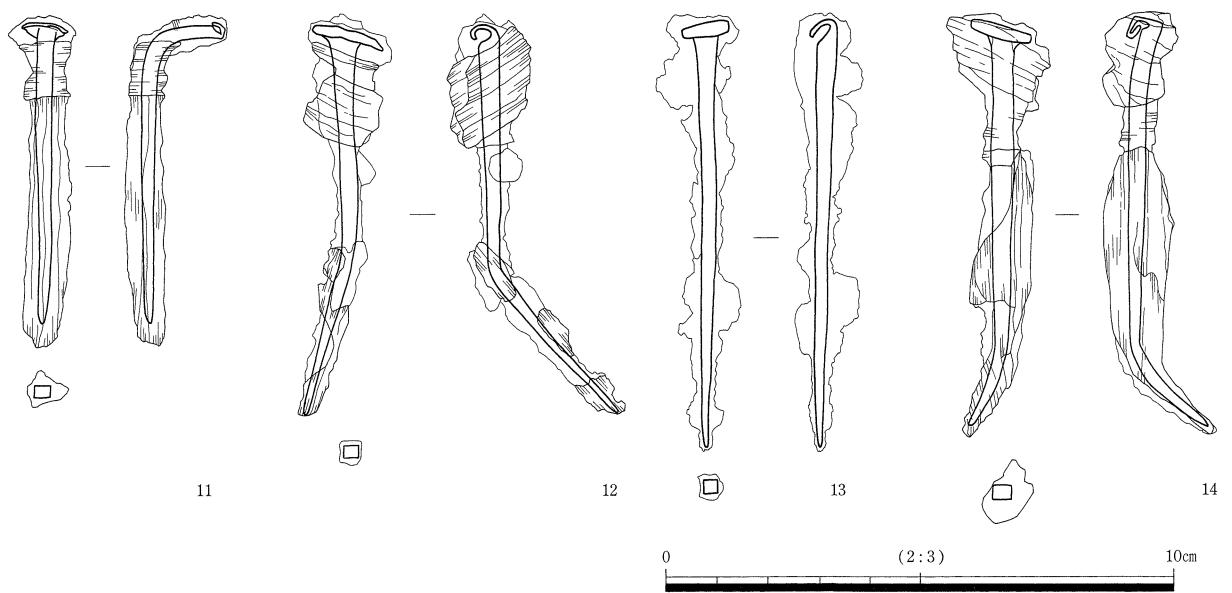
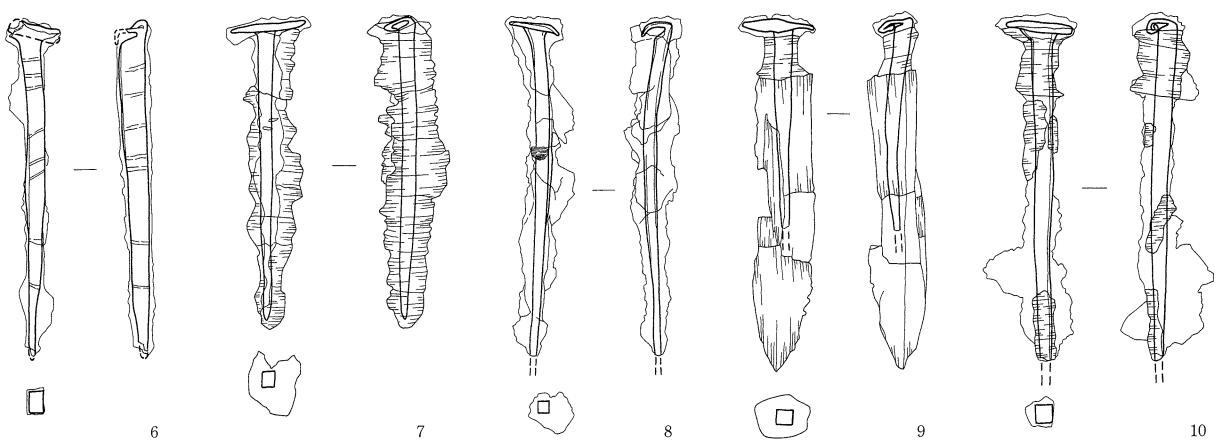
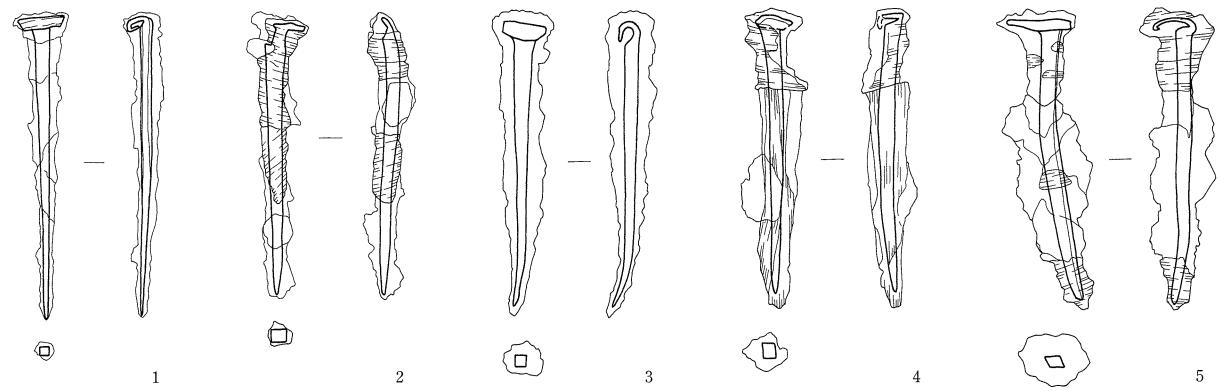


図120 墓出土鉄釘 (2)

り曲げ基部との隙間がないものである。B II⑥類は横方向へ折り曲げた後さらに直線的に重ね合わせるものである。B II⑦類は横に折り曲げた後その下方へ丸く巻き込むものである。

火葬場・炭盛土出土鉄釘（図117.118）

火葬場と炭盛土を合わせて614本が出土している。また、'67年度の調査でもこの火葬場・炭盛土から約270本が出土している。今回の調査分では、このうち火葬場出土のものは総数120本で、その内訳は火葬場1が3本、火葬場2が34本、火葬場3が73本、火葬場4が8本、火葬場6が2本となっている。

これらは、全て被熱しているため、荼毘の際に木棺を使用したものと思われる。

墓出土鉄釘（図119.120）

墓からは550本が出土している。この内の4本は石組からの出土であるが、他は全て墓壙からの出土である。墓壙から出土した鉄釘の本数の内訳は、火葬墓A類が15基から113本、火葬墓C I類が2基から9本、土葬墓A類は23基から140本、土葬墓B類は18基から284本である。

火葬墓から出土した鉄釘は火葬場・炭盛土出土のものに比べると明確に被熱したものが少ない。しかし、木質が残存していないが、やはり荼毘時に使用した木棺の鉄釘と思われる。それを裏付けるものとして、11.68号墓ではその配置から木棺が想定できるものもある。

土葬墓から出土した鉄釘は、基本的に木質が付着しており、またその配置から木棺の構造・規模が復

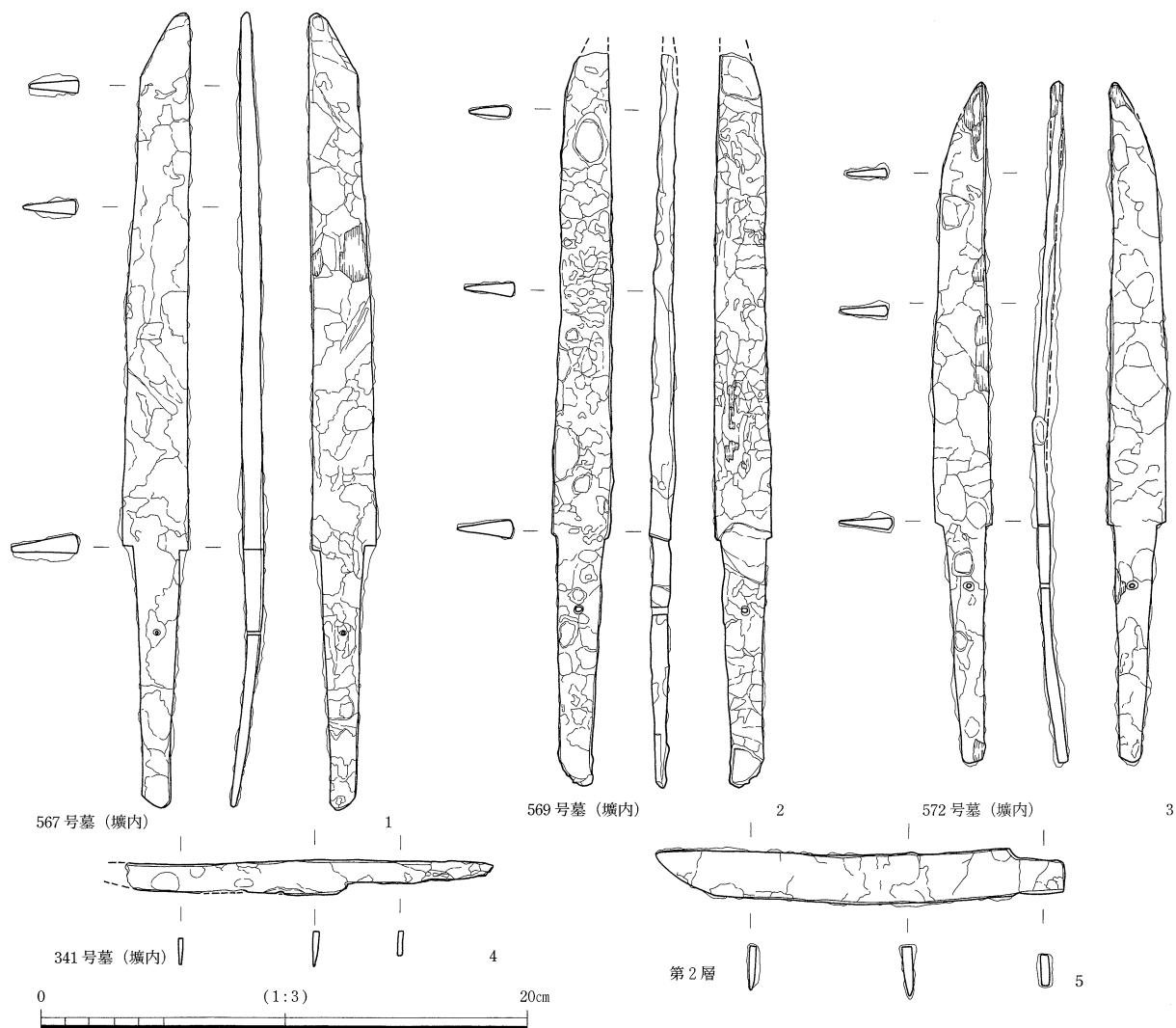


図121 中近世墓群出土短刀・刀子

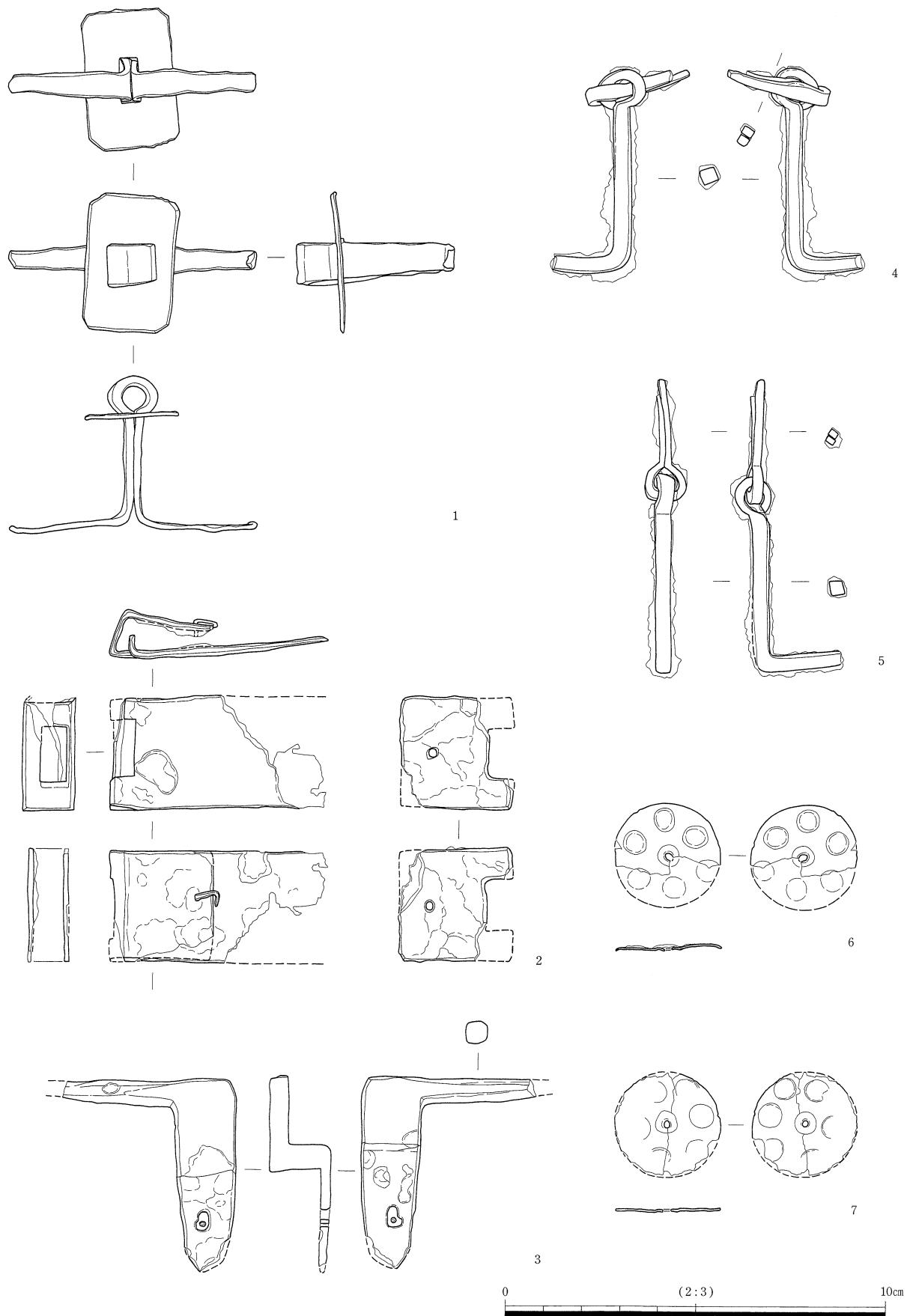


図122 中近世墓群出土金属製品

元できるものが多い。しかし、340.341.343.541号墓などのように鉄釘が1～3本程度しか出土しない墓もある。これに関してはサンプリングエラーや腐食の可能性も全く否定できないが、木棺以外の用途もあったのではないかと思われる。木棺の復元に関しては、第7章 第8節で後述している。

第1・2層出土鉄釘

第1・2層からは27本出土している。

(2) 短刀・小柄(図121、写真図版177)

これらは、銹化が激しいため、X線写真による復元を行ったが、欠損しているかの判断が微妙に難しく、法量等はあくまでも現状での数値である。

(1)は短刀で、567号墓の壙内のほぼ床面近く鳥帽子と共に出土している。法量は、刃部長22.1cm、元(区の部分)幅2.6cm、元重ね(厚さ)0.6cm、茎長10.7cm、茎幅1.9cmを測る。刀身は顕著な反りがないもので、造り込みは平造のものと思われる。木質の有無は判別しにくい。

(2)は短刀で、569号墓の壙内のほぼ床面で出土している。刃部は、切先が欠損しているので残存長が20.1cm、元幅2.4cm、元重ね0.6cm、茎長10.2cm、茎幅1.9cmを測る。刀身は顕著な反りがないもので、造り込みは平造と思われる。木質の有無は判別しにくい。なお、刃部の元来の長さは(1)のものと同様ぐらいであったと思われる。

(3)は短刀で、572号墓の壙内から(1)と同様に鳥帽子と共に出土している。法量は、刃部長18.2cm、元幅2.3cm、元重ね0.5cm、茎長9.9cm、茎幅1.8cmを測る。刀身は顕著な反りがないもので、他のものに比べると切っ先が細身で、造り込みは平造である。木質は、切っ先と茎尻にわずかではあるが残っており、断言はできないが鞘と柄が装着されていたものと思われる。

(4)は341号墓の石組上面から出土したもので、破損が著しいが、小柄と思われる。残存長は15.6cmを測る。また、銹が薄く、被熱している可能性がある。

(5)は短刀で、第2層から出土している。法量は、刃部長14.3cm、元幅2.0cm、元重ね0.4cm、茎は欠損している。刀身は0.2cm程腰反りしているもので、造り込みは平造である。木質は残存していない。以下の金属製品は全て炭盛土から出土しているもので、被熱しており良好に残存している。

(3) 錠前他

錠前(図122-2.3)

(2)は厚さ1mm前後の薄い鉄板を折り曲げて、方形の囲い状のものにしている。(2')はこれと同一個体の鉄板で片方に長方形の抉りがある。この2つを組み合わせると、鉄板を方形に折り曲げ、合わせた部分を針金または錐状の金具でつなぎ合わしたもののが復元できる。長方形の小口側両面に、一方に偏った窓口があるものとなる。(3)はクランク状の金具である。クランク部から横方向に伸びる棒状のものは本来もっと長いものと思われる。これらは炭盛土の同地点で出土しており、被熱している。

この2つの金具は組み合わせ式の錠前の牝金具であったと考えている。(2)が筒部、(3)が弦部で、両者ともにある孔に錐状のものを通すことでつなぎ合わせたものである。そして窓口は各々、鍵穴とバネ受け板となる。し

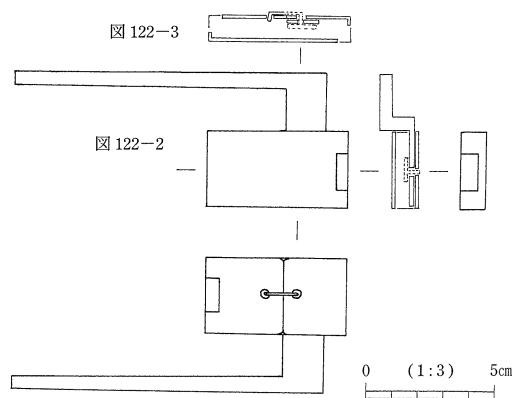


図123 出土錠前の復元案

かし、合田芳正氏のご教示によると、当復元案の現状での妥当性を認定していただいたが、このような錠前は例にないということである。錠前とするならば、空洞になっている下半部を包む別の箱状金具が必要であることと、対になる牡金具は縦位置に複数のバネ金具をとりつけるものとなるというご教示を頂いた。この金具は現状では留保付きであるが、錠前の可能性を考えたい。

燐止（図122-4.5）

この金具は、頭部が環状になっている2つの金具が繋がって構成されており、その部分で可動するものである。この金具の一方は「L」字状に屈曲しているもので、もう一方はそれよりも短く割りピン状のものである。前者は、鉄釘と同じ造りで基部から環状の頭部を叩き延ばして造っている。後者は、基部に割れ目があるので、薄い鉄片を折り曲げて貼り重ねて造っているようである。

(4)は2つの金具が鎌のためくつてしまっているが、(5)は可動するので本来の姿を保つてと言える。類例は兵庫県中尾城、福井県一乗谷遺跡（朝倉氏館跡）等で出土している。

飾り金具（図122-6.7）

(6)は約2/3しか残存していないが、(7)はほぼ完形であるので、両者とも径約2.7cm、厚さ約0.2mmの円盤状銅製品であったと思われる。この銅板には中央には1.5mm程の孔があり、周囲に径5mm程度の円形の模様を浮き上がらせるように施している。何に使用されたかは断言できないが、中央に穴が開いていることから、鍵状のものの何かに打ちつける飾り金具のようなものと思われる。

環座状金具（図122-1）

この金具は鉄製で、2つの部品から構成されている。1つ目の部品は、先の燐止と大きさは異なるが、同様の環状の頭部をもつ割りピン状の金具である。この部品をもう1つの部品である長方形の鉄板に開けられた中央の穴を通して組み合わせたものである。そして、突き出た割りピン状の金具の左右を折り曲げている。環は付いていないが環座金具に似ているが、何に使用されたかは断言はできない。ただ、可能性としては、(2.3)が錠前の牡金具とした時に、この金具の環部は(3)の弦部が丁度通るものであるで、錠前を取り付ける壺金具であったと考えることができる。

4. 銭貨（図124～126,写真図版181、付表150.151、表1）

今回の調査では、第1～2層、火葬場・墓から中国および朝鮮の渡来銭、寛永通寶等が、総計150枚出土している。また他に、昭和42年の5円硬貨と昭和56年の10円硬貨が第1層から出土している。さらに'67年度の調査では確認できたもので91枚の銭貨が出土しているが、それについては第7章第4節に集計表を掲載しているので、ここでは基本的に今回出土した銭貨について記載する。

個々の銭貨の詳細や出土遺構との対応等については、全て付表にまとめてある。

墓から出土した枚数は43枚数える。この内、石組の上面からは13枚出土しているが、この場合は確実にその墓に伴うものは断定しにくい。9号墓から古寛永通寶が出土しており、398号墓から皇宋通寶2枚と不明1枚の3枚が付着した状況で出土している。

墓壙内からは24枚出土しており、その出土状況から遺体を納めるときに副葬したものと考えられる。分類で見ると、火葬墓A類、土葬墓A類、土葬墓B類から出土している。

火葬墓A類では、まず263号墓から天禧通寶・嘉祐通寶・元豐通寶2枚・元祐通寶2枚の6枚が重なった状況で床面より出土している。銭貨には著しい変形等の明瞭な被熱痕跡がないことから、茶毬後の片付けを終えた後に置いた可能性が高い。一方、'67年に既に調査された501号墓からは、祥符通寶・祥符元寶2枚・皇宋通寶・元豐通寶・元祐通寶の6枚が出土していると報告されているが、詳細な出土

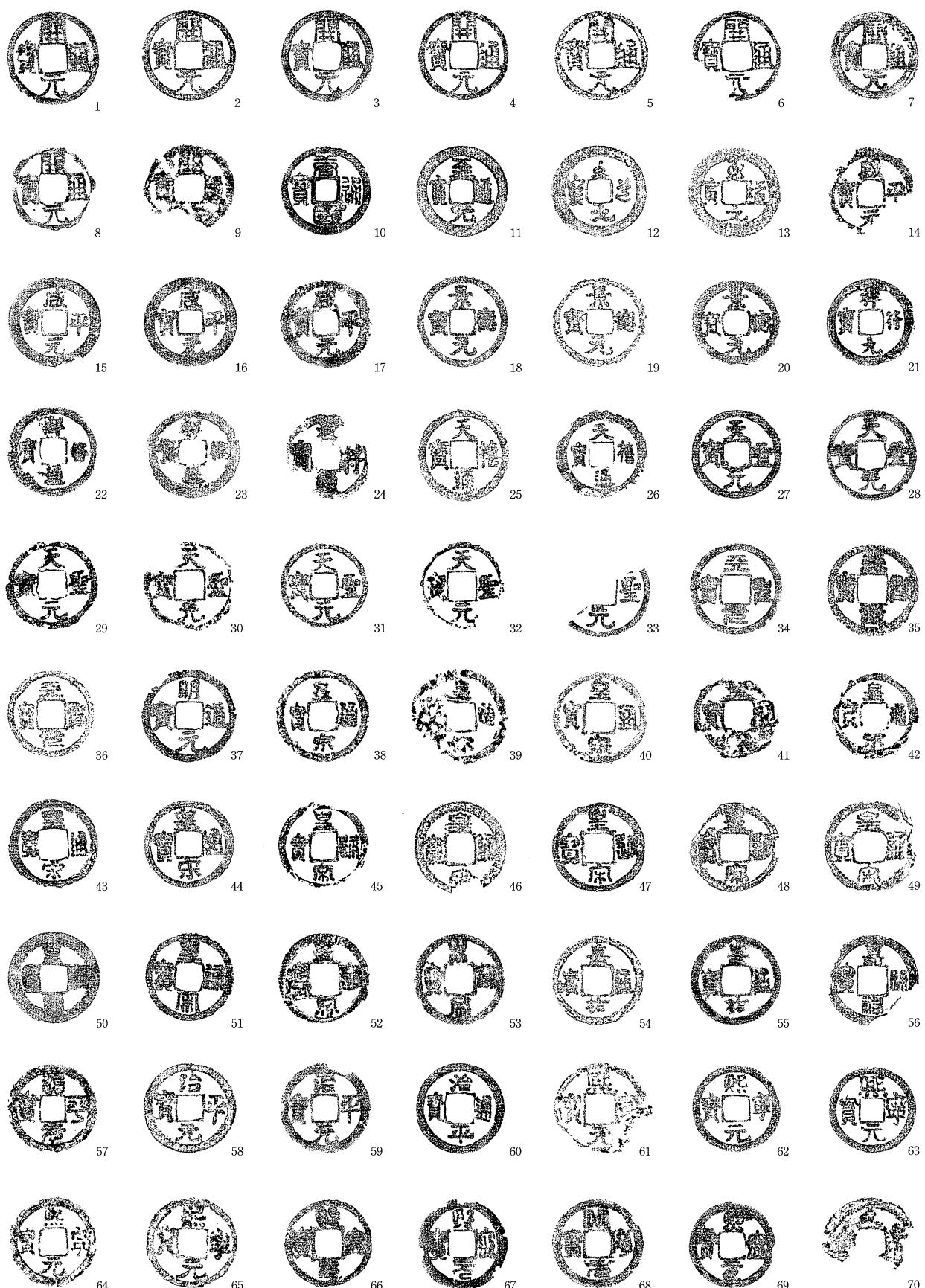


図124 中近世墓群出土銭貨（1）

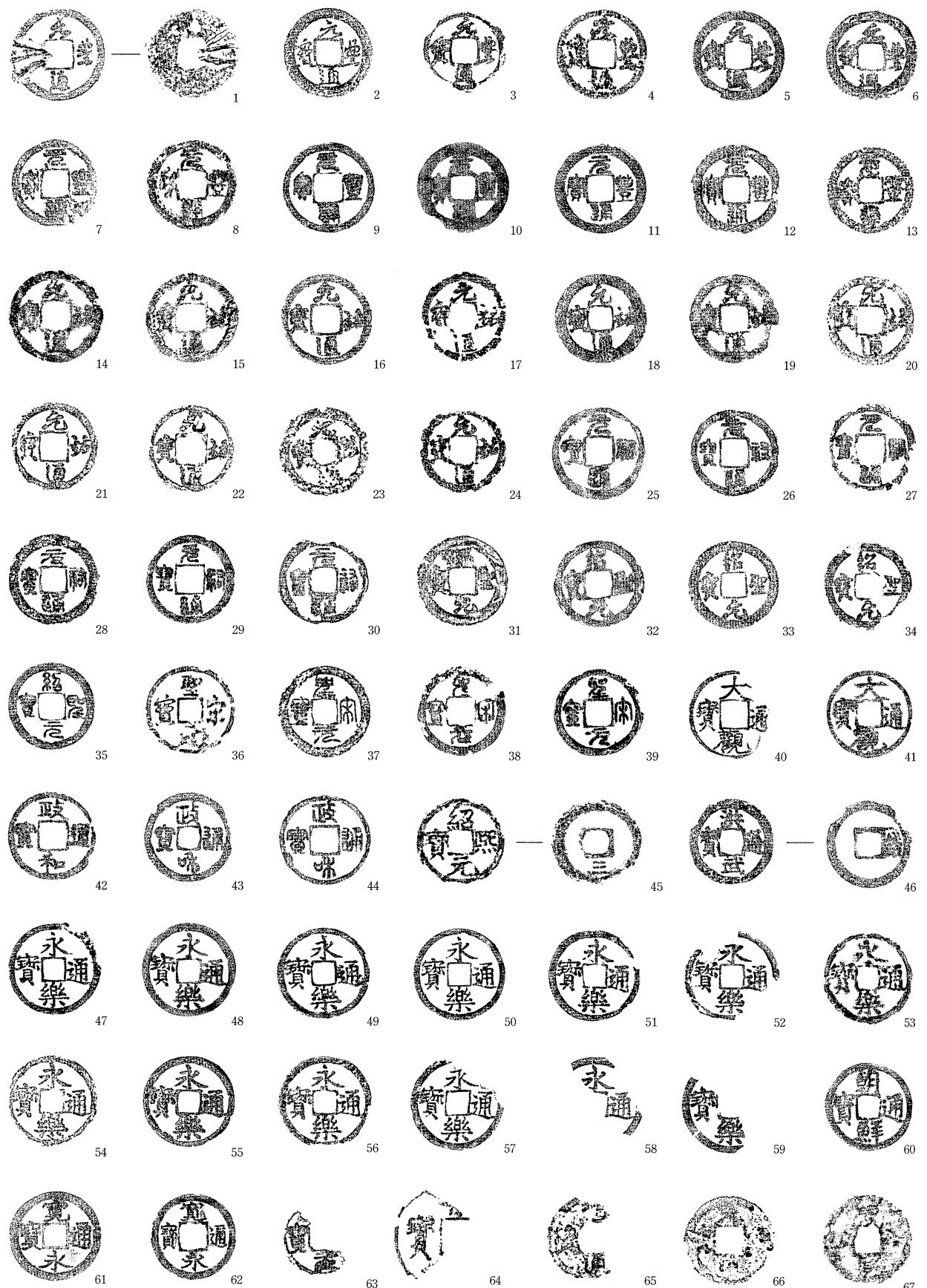


図125 中近世墓群出土錢貨（2）

表1 錢貨出土表

錢貨名	初鑄年	国名	枚数
開元通寶	621	唐	9
唐國通寶	959	南唐	1
至道元寶	995	北宋	3
咸平元寶	998	北宋	4
景德元寶	1004	北宋	3
祥符元寶	1009	北宋	3
祥符通寶	1009	北宋	1
天禧通寶	1017	北宋	2
天聖元寶	1023	北宋	10
明道元寶	1032	北宋	1
皇宋通寶	1038	北宋	16
嘉祐通寶	1056	北宋	3
治平元寶	1064	北宋	3
治平通寶	1064	北宋	1
熙寧元寶	1068	北宋	9
元豐通寶	1078	北宋	14
元祐通寶	1086	北宋	17
紹聖元寶	1094	北宋	5
聖宋元寶	1101	北宋	4
崇寧通寶？	1103	北宋	1
大觀通寶	1107	北宋	2
政和通寶	1111	北宋	3
紹熙元寶	1190	南宋	1
洪武通寶	1368	明	1
永樂通寶	1408	明	13
朝鮮通寶	1423	朝鮮	1
古寛永通寶	1636	日本	1
新寛永通寶	1697	日本	1
鉄錢(寛永通寶?)	1739	日本	1
錢文不明			16
総	計		150

状況は不明である。

土葬墓A類では、546号墓から聖宋元寶・永樂通寶の2枚が重なっている状況で出土している。また、581号墓からは元祐通寶・洪武通寶の2枚、開元通寶・元□通寶の2枚、計4枚が出土している。これらは、床面より浮いており原位置を止めていない。

土葬墓B類では、555号墓から咸平元寶・景德元寶・天聖元寶・元豊通寶2枚・大觀通寶が6枚重なっている状況で出土している。600号墓から嘉祐通寶・治平元寶・熙寧元寶・元豊通寶2枚・元祐通寶が藁状の植物纖維で6枚を重ね合わせたさし銭の状況で出土している。両者とも、錢貨は床面西側より浮いた状況で出土しており、木棺または遺体の上に置かれていたものと思われる。

墓壙上面からは、土葬墓A類である532号墓から6枚重なった状況で出土している。錢種は、咸平元寶・祥符元寶・元豊通寶・元祐通寶2枚・□□通寶である。

火葬場および炭盛土から出土したものは69枚である。錢貨のほとんどは、変形・変色しており被熱しているものと思われる。よって、茶毎時に遺体と共に供えられたものと思われる。また、初鑄年が一番新しいのは1423年の朝鮮通寶である。またここからも、幾つか付着した状況で出土しているものがある。その組み合わせは、「開元通寶・治平元寶・熙寧元寶・紹聖元寶」の4枚、「元祐通寶・聖宋元寶」、「至道元寶・皇宋通寶」、「皇宋通寶・熙寧元寶」である。

第1～2層から出土したものは35枚である。図125-27は、元祐通寶で縁の一部が鋸歯状に加刀されている。図125-67は、鉄錢で鑄びており全く錢文は不明であるが、初鑄年が1739年の寛永通寶の鉄錢の可能性がある。また、古墳の石室内からも3枚出土している。

5. 漆製品（図156, カラー図版45～48）

漆製品としては、鳥帽子2点、赤色顔料塗布漆膜が出土している。

鳥帽子は、567号墓および572号墓の墓壙内のほぼ床面直上で各々短刀と共に出土している。この鳥帽子については、第7章第9節で観察・検討を行っているため、ここでは概略を述べる。567号墓（図156-1, カラー図版48）のものは復元高16.0cm、同幅24.0cmの峯が尖った立鳥帽子で、漆を厚く塗った平織りの絹布で作られている。572号墓（図156-2, カラー図版49）のものは復元高16.0cm、同幅24.6cmの折鳥帽子で、折り曲げる以前の高さは26.0cmをはかると思われる。素材は、同じように平織りの絹布であるが上にこれも平織りの麻を重ねており、各々別個に漆を厚く塗ったものである。

赤色顔料塗布漆膜（カラー図版50.51）は、83号墓の墓壙内の石囲いから破片で出土している。絹ではない何らかの植物纖維で平織りされたものに、漆を塗ったあとに一面のみに赤色顔料を塗布している。また、赤色顔料が塗布されていない面には金泥が一筋見られる破片もあるが、何が描かれていたのかは不明である。石囲いの石際に破片の状況で出土していたことから、何らかの箱状もしくは袋状の製品であったと思われる。

6. 五輪塔・石仏

五輪塔・石仏は墓域全域から出土しており、周りの斜面や谷から出土したものは上部から転落したと考えられる資料である。また、五輪塔の地輪と石仏は設置された状態で出土したものもあり、その他の多くは、倒壊後散乱したり、墓壙内から出土したり、墓の石組の部材として使用されたものがある。

五輪塔は破片を含め、総数116点で、空風輪29点、空風火輪1点、火輪34点、水輪17点、地輪20点、一石五輪塔16点を数える。石仏は破片を含め、総数142点を数える。

第7章4節において記述したように'67年の調査では五輪塔24点、石仏97点の出土が確認されている。なお、調査前年度に26点の石仏が北西に位置する馬場の現共同墓地に移転されており、その分に関しては、位置等を確認しているため、今回の調査分に含めている。さらに、持ちかえられたり、現在の墓に据えられていたりすることから、当中世墓群の本来の石造物数量は不明である。

(1) 五輪塔

五輪塔は組み合せ式と一石五輪塔がある。組み合せ式は空風輪・火輪・水輪・地輪の部位にわかれしており、特殊なものとして、空風火輪が1点出土している。石材は粗粒花崗閃緑岩、細粒花崗閃緑岩、斑状花崗閃緑岩がある。出土状況は地輪のみが元位置を保った状態で出土したものがあり、他の部品は散乱した状態であった。

1). 空風輪 (図127)

24点の出土と破片の4点を数える。空輪・風輪は一体化させ、風輪下面には火輪と組み合うほどを作り出す。空輪の高さは7.9~16.2cm、幅11.7~17.7cm、風輪の高さは6.0~10.4cm、幅12.1~19.1cmを測る。形態では、空輪と風輪を明瞭に作り分け、風輪の上端面が水平に近い状態を呈するもの(図127-15.20.24)、風輪の上端面が傾斜し、作り分けがやや欠けるもの(図127-1~14.16~19.22.23)、空輪・風輪の分別部分が溝状になっているもの(図127-21)がある。

また、空輪の上端突起は空輪の球形から屈曲して伸びるもの(図127-21)がある。

風輪下部の平坦面は、やや内繰りにした状態からほどを作り上げているもの(図127-1.10.14.17.24)がある。

図127-12のみ、空輪に「梵」風輪に「火」の梵字が刻まれている。

2). 火輪 (図128)

32点の出土と破片の2点を数える。高さ・幅の比率より図128-4.9.18.19.25のように扁平なものがある。底面は平らで四隅のみが反り上がるものが大半であるが、底面が平らで四隅の反り上がりがないもの(図128-21.30)、底面全体が中心に向かって盛り上がり、四隅が反り上がるもの(図128-11.16)がある。

さらに、四隅の反り上がりの上面ラインが、四隅に近づいたところで反り上がるもの(図128-1.10)や全体に緩やかなカーブを描くもの(図128-20.28.31)がある。

空風輪と接合する上面にはほど穴があり、水輪と接合する下面にほど穴のあるものが20点、ないものが13点を数える。上部ほど穴は直径4.3~6.9cm、深さ0.9~2.9cm、下部ほど穴は直径4.6~6.8cm、深さ0.8~1.4cmを測る。

3). 水輪 (図129)

球形を呈し、その天地に平坦面を有する形態をとる。いずれも最大径の位置は天地中央部からやや上位にある。下半部のラインが円を描かずやや直線的なもの(図129-6.7.14)がある。

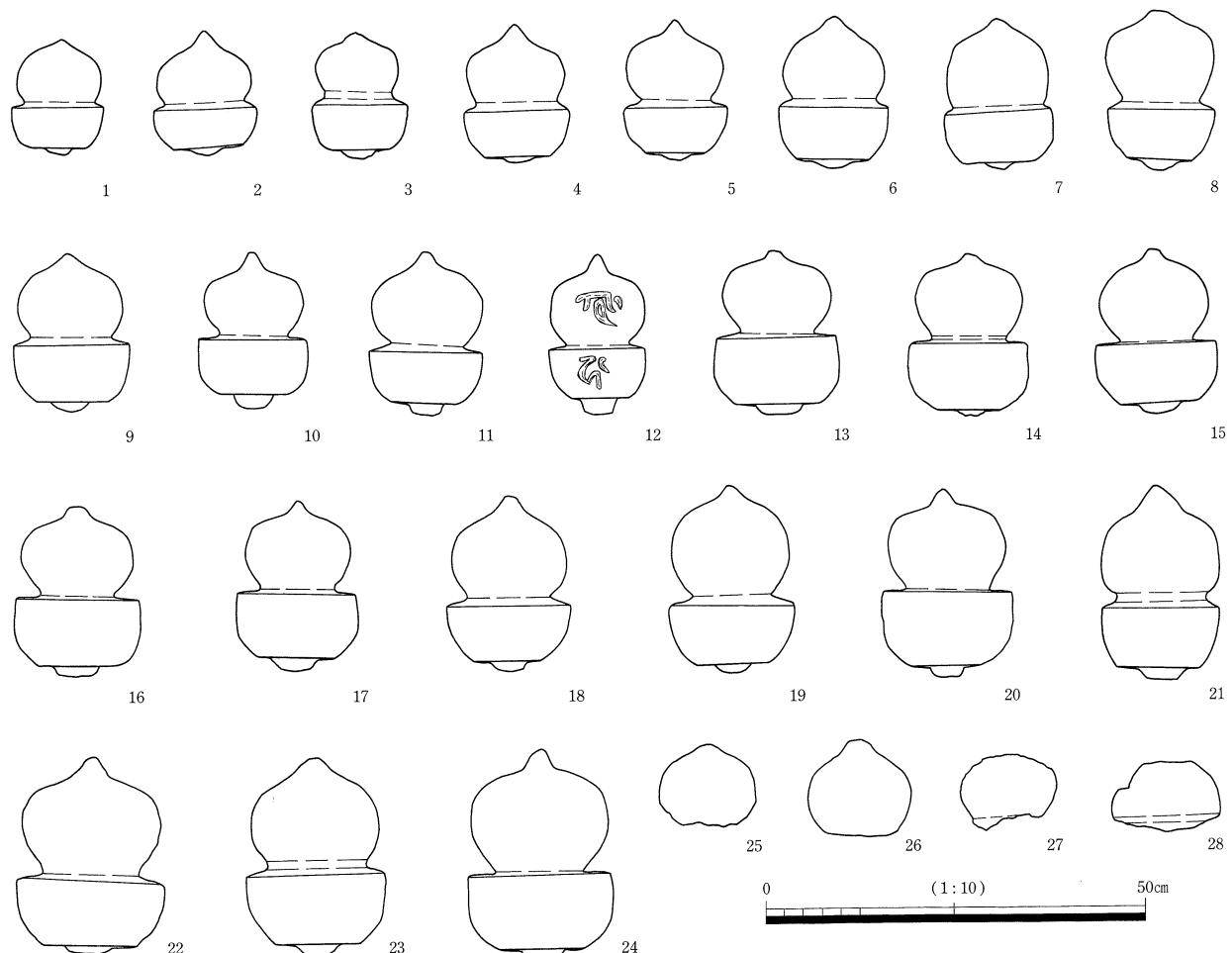


図126 五輪塔空風輪

上面・下面には火輪・地輪と接合するためのほぞを掘り出しているが、上面側にほぞを有さないもの(図12-13~17)もある。ほぞの掘り出し面は凹面状にくりこんでいるもの(図129-5.7.8.14.15)もあり、火輪・地輪とのかみあわせから必要なものと考えられる。図129-1の上面ほぞは、上端面の中で収められており、側面からみたほぞの突出がみられない。ほぞの突出は0.4~1.5cm、直径2.6~6.5cmを測る。

4). 地輪 (図130)

地輪の底面と側面の途中からは加工されておらず、台座を伴わない五輪塔であることがわかる。地中或いは五輪塔の周りに組まれた石組内に埋置されることを前提とした形態となっている。

横幅一辺は21~40cm、高さは隅が成形されているところまでで5~20cmを測り、露出部分の基本形は扁平な立方体である。

上面には水輪と組合うほぞ穴を伴う。深さ0.8~3.2cm、直径4.6~9.1cmを測る。

図130-20の上面の一部は未加工部分をそのまま使用している。

地輪のうち、図130-1.6~11.13.15.18~20は設置された状態で出土したものである。

(2) 一石五輪塔

空風火水地輪を一石で作り上げたものである。角柱状を呈しており、地輪部分の下部は地中に埋められることを考え、下半部は整形をおこなっていない。

いずれの部品の形態も形骸化しており、メリハリがない。風輪は椀状になっておらず、空輪・風輪と

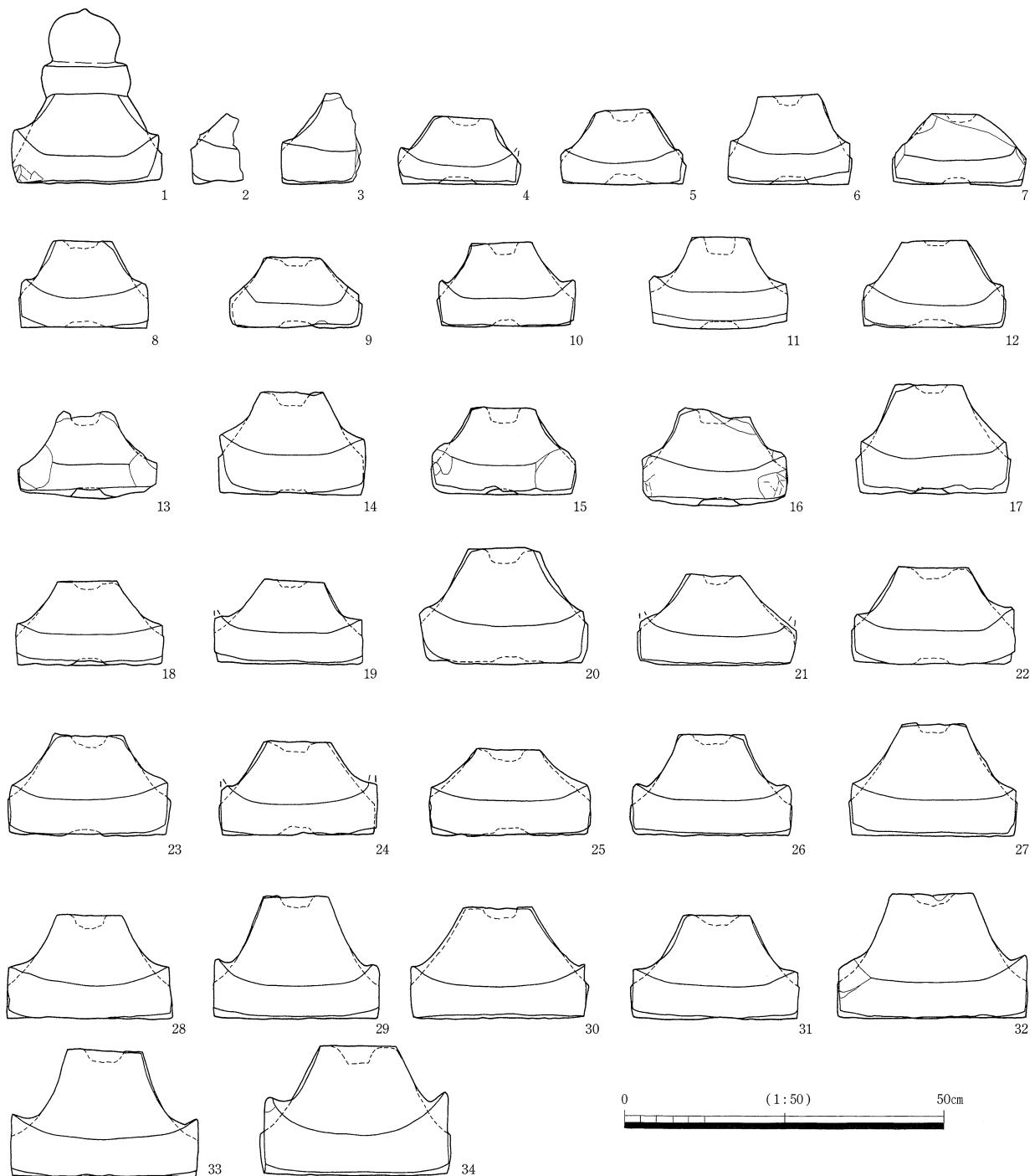


図127 五輪塔火輪

もに隅丸方形を呈している。火輪四隅の反りは組み合わせ式五輪塔のような大きな反りはみられない。水輪の球形は天地が圧縮した形となり、球形が崩れている。地輪部分は角柱状を呈しており、地中に埋置されることから底面は未加工である。

(3) 石仏

中世墓を形成する石組の中心部分に設置された状態で出土したものの他に散乱して大きく移動していると思われる石仏や石組みの部材として使用されていたものもあった。

石仏は石材の一面に像容を掘ったもので、光背と仏像を一石で作る「光背形石仏」が78基、石材を板碑塔身に加工後に仏を掘り出す「板碑形石仏」が38基出土している。

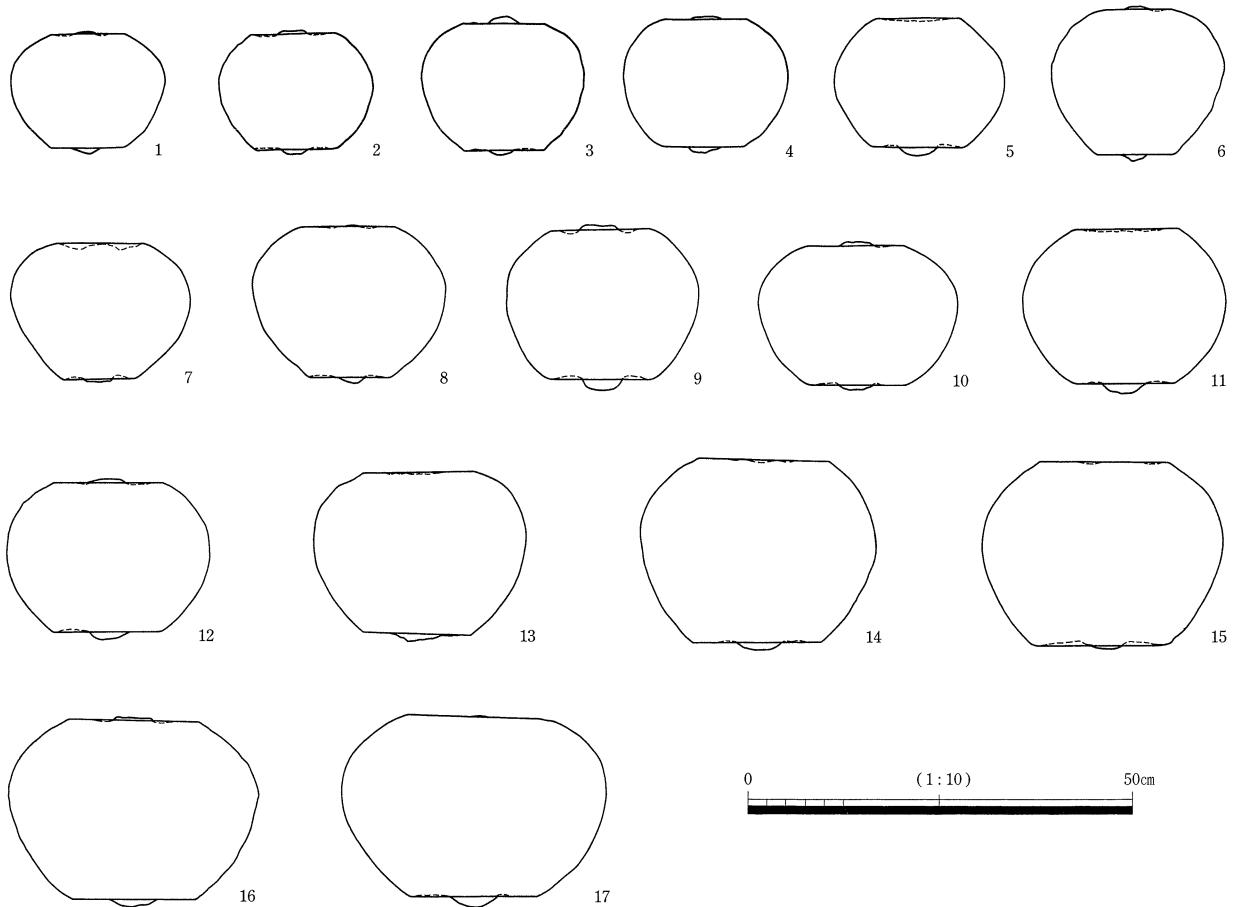


図128 五輪塔水輪

像容は阿弥陀如来座像であり、他に2体の阿弥陀如来座像が彫り込まれたものが4点、2体の地蔵菩薩立像が彫り込まれたものが1点出土している。

石材は粗粒花崗閃綠岩、斑状花崗閃綠岩である。

1). 光背形石仏

楕円形の河原石をベースとした自然石のものと打つ搔いて成形したものがあり、正面形態を尖頭形にする。平坦状の1面を正面としたものと石材の湾曲を利用して石仏の彫りを大きくみせているものがある。像は半肉彫りされており、その突出は0.4~3.4cmを測り、写真186-7, 187-8, 188-3, 190-7, 191-6.8のように突出度の高いものがある一方、線彫に近いもの（写真187-4, 188-7）がある。

頭髪部は隆起した肉髻のあるものとないものがあるが、いずれも螺髪の表現はない。

腕の印相は定印を結んでいると思われ、右手・左手の区別はなく、ひとつになっている。手首より先の表現はなされていないものが大半であるが、中には腕よりも脹らみを持たせて掘り出し、手首から先を表現しているもの（写真188-4.5）、定印の親指・人差し指の輪を表現したもの（写真184-2）も存在する。また、いずれの石仏も左肘部外側の輪郭線が途切れ、膝方向に伸びており、これは袈裟の垂れを表現したものと考えられる。写真188-3の胸元には袈裟の衣のラインが表現されている。

下半身の脚部は表現の無いもの、あぐらのひざ部分がみられるもの、あぐらの下線部分までみられるものがある。あぐらは左右の脚の区別がなく、一体化した表現がされている。

蓮台はあるものと無いものがある。この台座の上面ラインは一直線になるものとあぐらのラインにあわせて両端部が膝に回り込んだ状態のものがみられ、蓮弁の表現はされていない。唯一、写真184-2の

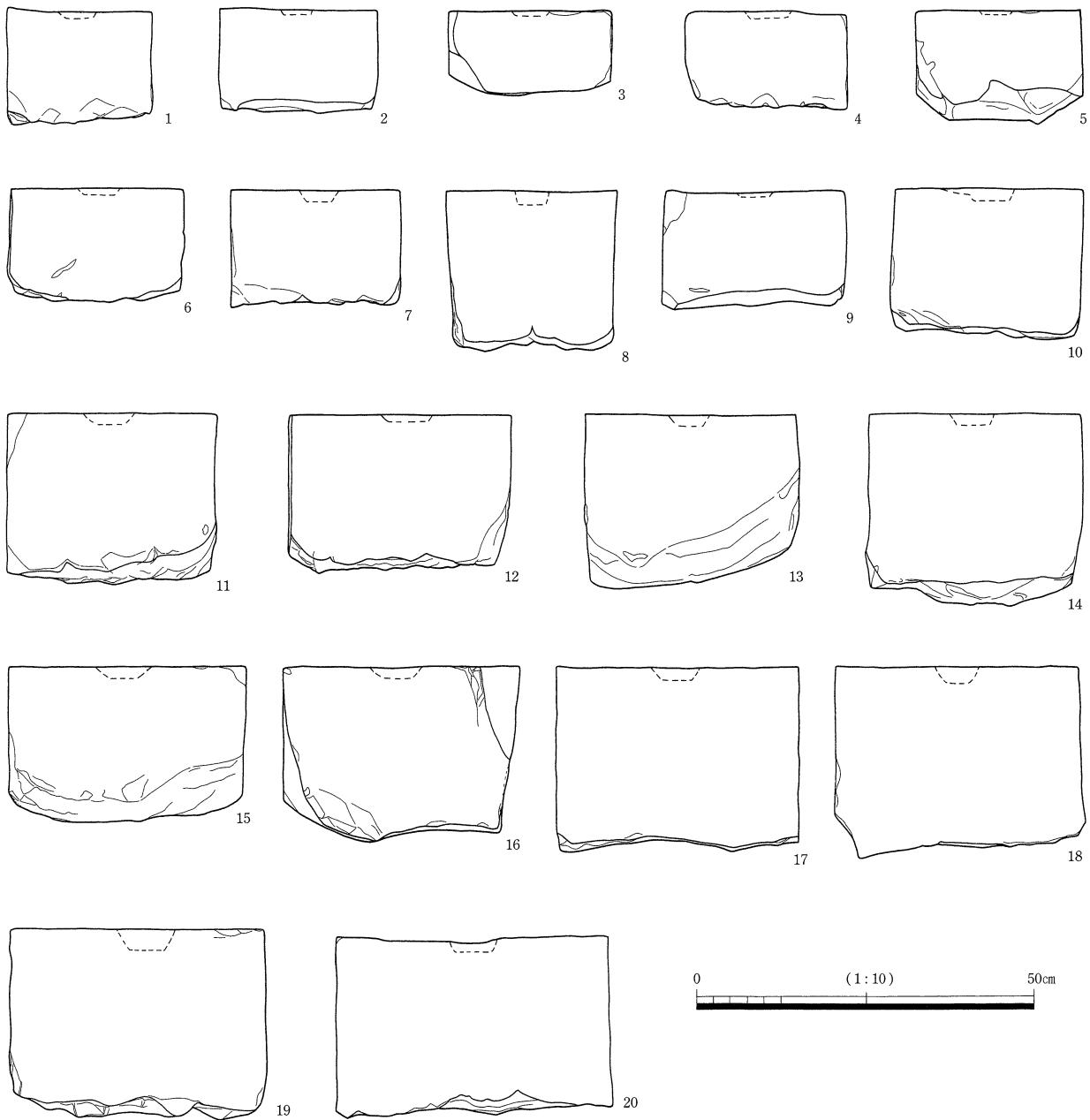


図129 五輪塔地輪

み線刻で5弁の蓮弁が表現されている。

光背の形態は自然石の外形ラインをできる限りそのまま使用し、基本的には半円状である。必要最低限のみを打ち擲いでいる。他に上端部を尖頭形、半円形にしたもの、外縁部を彫り残した龕状の彫り込み（写真188-5, 192-4）を加えたものがある。写真191-8は光背先端が前面にせり出している。

石材裏面はいずれも加工をしているが、全面を加工するのではなく、側面の上端が石仏掘り出し面に向かって弯曲したラインをつくりあげる上で、必要な部分のみを打ち擲いでいる。

石材の下半部は厚みがあり、埋置することを前提としているため、未加工或いは粗仕上げである。

2). 板碑形石仏

石材を板碑塔身に加工し、上部を屋根状にする。この屋根状圭頭部の断面形態には額部に凸部を有するもの、額部は無く前面が平坦なものがある。額部を有するものには3段の額部が表現されるもの、先端部全面に向かって反り上がるもの、屋根部が平坦なものがある。写真198-3の地蔵菩薩立像の圭頭部

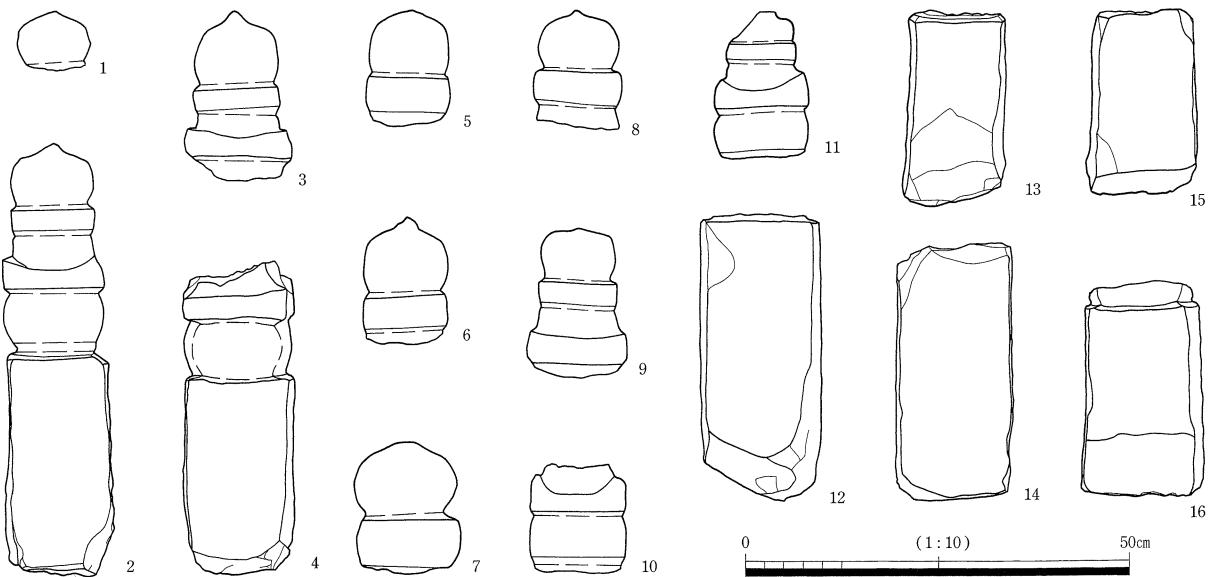


図130 一石五輪塔

は額部が凸状に突出し、その上部は平坦である。像は額部下面の彫りくぼめられた平坦面をベース面とし、半肉に刻まれたものと更に龕状の彫り込みの中に刻まれたものがある。

像容は腕まで表現、膝まで表現、台座まで表現したものがある。平坦面に刻まれ、台座まで表現したものには台座下面に直線を刻むものがある。

頭髪部に螺髪の表現はなく、また、隆起した肉髻のあるものは写真196-5, 197-4のみである。

両腕は右手・左手の区別がなく一体となっており、印相が定印を表現していると考えられる。光背形石仏のように手首から先に脹らみをもたせたり、親指・人指し指の輪を表現したものはない。写真193-2.3, 194-2, 195-6, 196-1の手首の表現方法は光背形石仏とは明らかに異なり、合掌印であると考えられる。

光背形石仏に表現されていた左肘部分の袈裟の表現は膝下面、或いは、台座まで表現した板碑形石仏にみられる。胸元の袈裟を表現したものはない。

下半身の脚部は表現のないもの、あぐらの膝部分までみられるもの、あぐらの下線部分までみられるものがある。あぐらの表現は一体化しており、左右の脚が区別された表現はない。

台座の表現は、あぐらのラインにあわせて、両端部が膝後ろに回り込む状態のもの（写真196-4～6, 197-1～4）と上面ラインが一直線になるもの（写真196-2.3）がある。蓮弁表現はされていない。

板碑の側面感は光背形石仏と同様に上端が石仏前面に向かって湾曲したラインをつくりあげている。

石材裏面はいずれも加工をしているが、全面を加工するのではなく、必要な部分のみを打ち擲いでいる。また、石材の下半部は埋置することを前提としているため、未加工或いは粗仕上げである。

(4) 小結

これらの出土石造物のうち五輪塔の地輪と石仏には設置された状況で出土したものが存在する。石組や地下構造（墓壙）を伴い、土器が出土しており、年代を想定できるものもある。しかしながら、石組や地下構造の構築直後に石造物を設置していない場合も考えられ、すべての石造物と出土土器の年代が直結するものではなく、検討を要するところである。

石材は粗粒花崗閃緑岩よりも斑状花崗閃緑岩の石材のほうが細部の表現ができる。いずれにしても土中に埋もれていたため、風化はほとんどみられない。

第6章 墳墓以外の遺構と遺物

第1節 遺構

墳墓以外の遺構を説明する前に、ここでは、まず、本遺跡を概観してみたい。

まず、調査の関係から当調査区を1Aトレンチから6Aトレンチまでの6ヵ所に区分し、調査を行つたが、墳墓群が出土した3Aトレンチ南半部および4Aトレンチに関しては、別項を設けている。

1Aトレンチは、当調査地の北端部に当たり、墳墓群から連なる尾根とその西側の谷からなり、その谷は2Aトレンチへ繋がっている。5・6Aトレンチは、その反対側の尾根の斜面に位置している。

2Aトレンチの斜面および谷部や、4～6Aトレンチの斜面下から、石造物が出土している。これらの石造物は、本来、中世墓にあったものが転落したものと考えられ、中には、現代の里道際に立てかけられていたものもあった。

なお、3Aトレンチの尾根の高まりに石仏が倒れた状態で3体出土しており、これらは村境に立てられたものと考えられる（図131）。

1・2Aトレンチの谷部は、深い所で2m以上堆積しており、その堆積状況は1Aトレンチ南側の東西断面で観察できる（図131）。谷は、雨水の浸食とそれらがもたらした土砂の堆積からなり、尾根から流れ落ちる花崗岩のバイラン土が何層にも堆積しており、数状の土壤化層を挟んでいる。図131土層断面図の5層とした土壤化層の上下で、遺物の様相が異なっており、上層には古代～近世のもの、下層は古代のものも含まれるが、13～14世紀を中心としている。その土壤化層上面にわずかな遺構が検出されている。最終段階で、谷の東側に小規模な流路があったことがわかる。

1. 焼土坑

墳墓群以外で遺構が検出されたのは、1・2Aトレンチの谷部で焼土坑が4基のみであった。その配置状況は、図132に示す通りである。焼土坑は、いずれも、谷が埋設していく途上で検出しておらず、検出面の下層から中世の遺物が出土していることから、その時期に該当するものと思われる。いずれも平面形が方形で、その規模は、幅が0.7m～1.0m、長さが1.0m～1.6mで、深さは浅いもので20cm、深いもので60cmを測る。

焼土坑8 谷が東側に屈曲した部分にあたり、1Aトレンチの北端で検出した。

平面形がやや歪んだ方形をしており、一辺0.66m×1.0m、深さ30cmを測り、上部は削平を受けている。長軸が東に約60°振っている。周囲の壁に被熱痕跡が明瞭に残存し、床面には被熱痕跡が無かつた。埋土は2層で、いずれも、わずかに炭が混入していた。遺物は出土していない。

焼土坑9 1Aトレンチの北西部で検出した。平面形が方形で、一辺0.8m×1.0m、深さ20cmを測り、上部は削平を受ける。長軸が東へ約20°振っている。これも、周囲の壁に被熱痕跡が明瞭に残存しており、床面は焼けていない。埋土は3層で、上部2層にはわずかに炭が混ざっているものの、下部の3層に炭が多量に混入していた。遺物は出土していない。

焼土坑10 は、焼土坑9の北東7mに位置し、平面形が方形で一辺が1.0m×1.6m、深さ25cmを測り、上部が削平を受けている。長軸が東へ約18°振っている。周囲の壁および床面の中央部に被熱痕跡が明瞭に残存していた。埋土は2層で、上層には炭がわずかに混じるのみで、下層に炭が大量に混入し

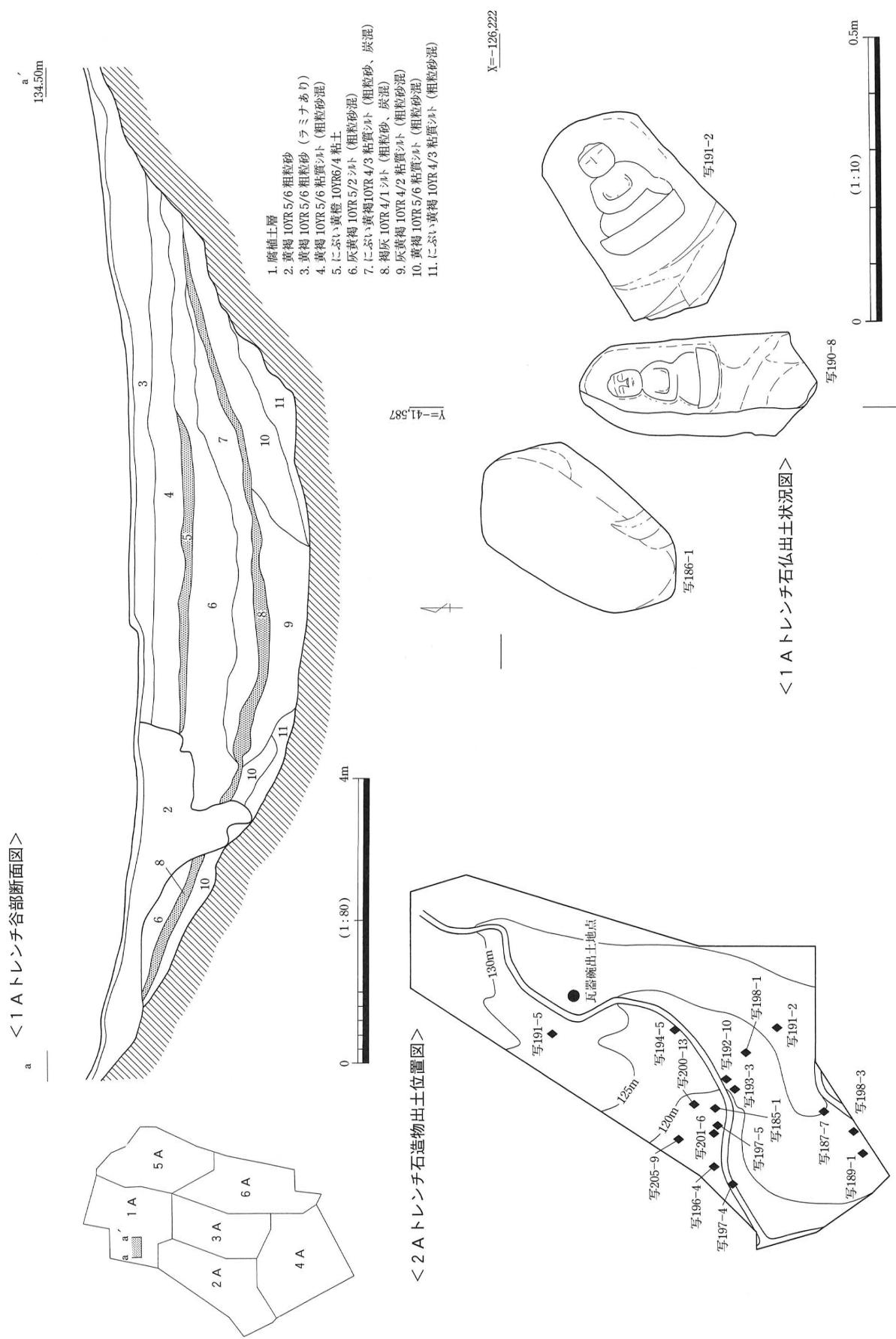


図131 1 A レンチ谷部断面図、1 A・2 A レンチ石造物出土位置図

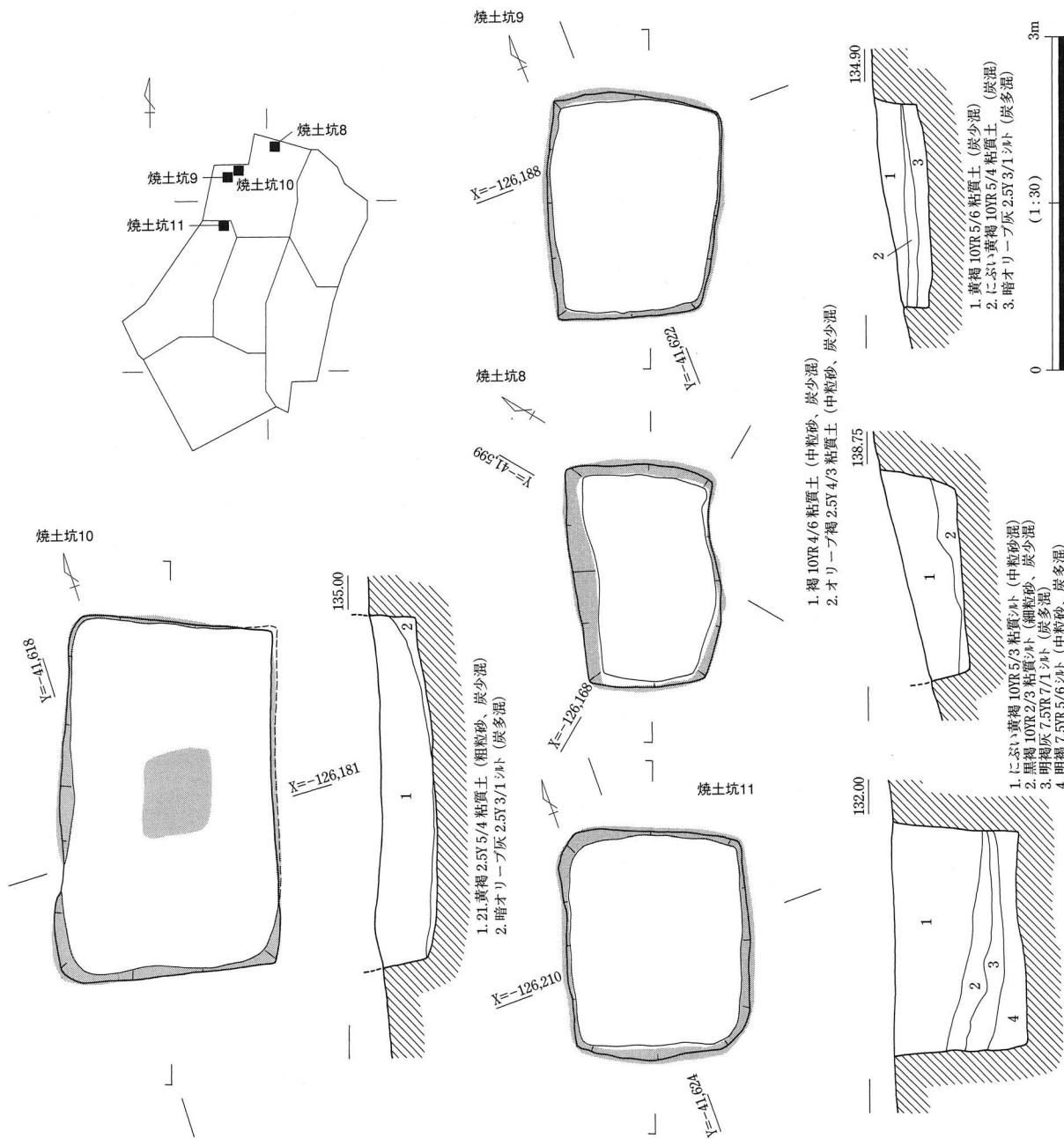


図132 1・2 Aトレント、焼土坑8～11平面・断面図

ていた。遺物は、出土していない。

焼土坑11 2 Aトレントの北端で検出した。平面形が方形で、一辺0.85m×1.0m、深さ60cmを測る。周囲の壁は、明瞭な被熱痕跡が有り、床面は焼けていない。埋土は、4層で、下部2層に炭が多量に混入していた。遺物は、出土していない。

いずれも、埋土に炭が混入しているものの、焼骨等も検出しておらず、上部構造は削平されており不明である。当初は、炭窯と考えていたが、焚口が無く、壁の被熱痕跡も何度も焼かれた様子が感じられない。下層の包含層からは、瓦器の破片が出土していることから、それよりは新しいと考えられる。

なお、火葬墓とも考えられたが中世墓群とは50m以上離れていることと、該当する時期の火葬墓と特徴を異にすることから、積極的に火葬墓とするには、根拠が少ないものである。

可能性として考えられるものは、一回限りの半地下式の簡易炭窯ではないかと思われる。立地条件や構造から、その類例を待ちたい。

第2節 遺物

墳墓群以外の地域から出土した遺物は、わずかであり、土器や石器以外に鉄器がある。鉄器は別項で述べることとして、ここでは、土器および石器について述べることとする。

まず、土器には、縄文土器・弥生～古墳時代の土器・中世の土器が出土している。

縄文土器には、深鉢の底部が出土しており（図133-8）、底部が円板張り付け技法で作られ、わずかに上げ底になる。底側部外面にLRの縄文を施している。縄文中期末～後期初頭の北白川C式のものと考えられる。

これは、1Aトレンチの2層から出土しているため、原位置を保っていない。

弥生～古墳時代の土器として（図133-6.7）がある。いずれも、甕の体部および底部破片で、外面に平行敲き目を残している。底部の作りからすると、弥生時代後期後半のものと考えられるが、本遺跡周辺では、弥生時代の遺物が出土していないことからすると、古墳時代前期のものとするのが妥当だと思われる。いずれも、3Aトレンチの中世墓北側の尾根から出土している。

中世の土器には、土師器や瓦器などがわずかに出土しているが、図示できたのは瓦器椀のみである。

（図133-1～5）は、2Aトレンチの谷部の中央でかたまって出土している。いずれも完形で、口径11cm、器高3.5cm前後で、高台が退化したものである。外面に指押さえを残存し、内面見込みに粗い螺旋状暗紋を施している。尾上編年のIV-2に相当する。

石器には、磨製石器と打製石器があり、打製石器については、後述する。

磨製石器には、擦り石と砥石がある。（図133-10）は、擦り石で断面橢円形の円柱状で、両端に擦痕が窺われる。石材は砂岩と思われる。腐植土層からの出土で原位置を保っていない。

（図133-9）は、砥石で一端を欠く。砂岩製で極めが細かいことから仕上げ砥である。前面に煤が付着している。

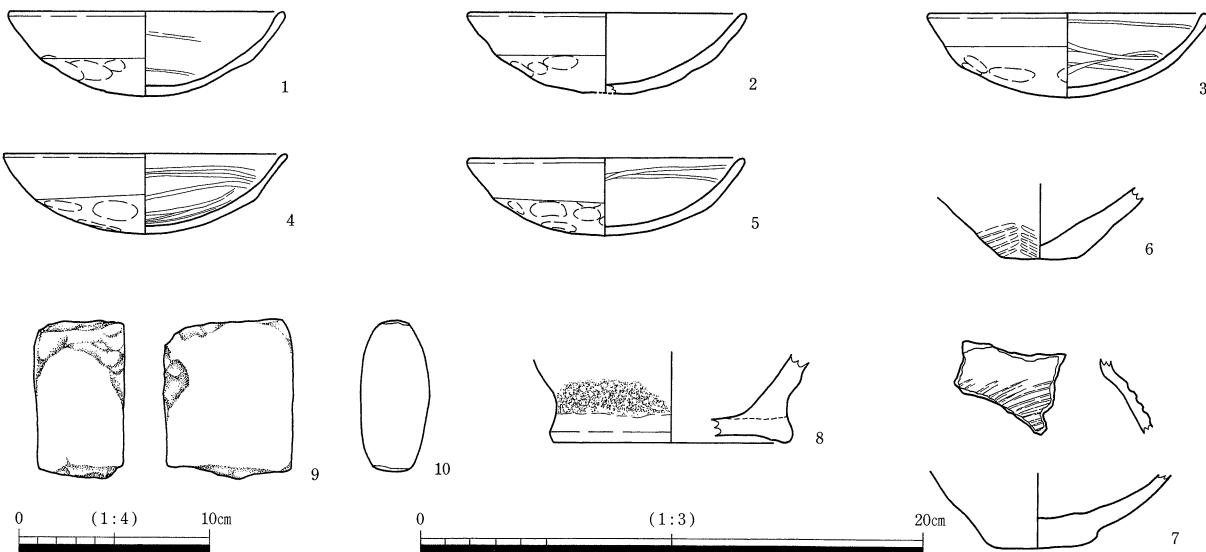


図133 墳墓群以外の第1・2層出土土器